THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第三十年第十號　第三百廿二號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

嬉しい中にも嬉しい事は しらが赤毛染ナイスで染めた美はしい黑髪の艶。

登録商標



白毛赤毛染

ナイス

五大特長

- ■タツタ二十分で迅速く染る
- ■染色艶美自然の黑髪に均し
- ■サラ〱として襟、枕に汚染せず
- ■一度染で洗ふも剝ず永保し
- ■用法至極簡易便利なり



價
大瓶 六十錢
小瓶 三十五錢
男子用 二十五錢

●藥店化粧品店に販賣す

發賣元 大阪 東京 丹平商會藥房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

曹洞宗大學教授
カルカツタ大學名譽教授
山上天川先生著

最新刊

今日の印度

地圖一枚
寫眞版八頁

四六判上製・全一冊
正價金八十五錢
郵税十錢

上下悠々五千歳、世界最古の國として、古今東西有ゆる人文發達の起源を究尋すべき印度、人類の有ゆる智識と有ゆる經驗とを一幅の活書として眺め得らるゝ印度、人類の原始的なる生活と最新文明のそれとを學び得らるゝ印度、是れ我等萬人の知らんと欲して未だ之が舟筏を得ざりしもの也。著者山上先生曹洞宗大學の留學生とし兼ねて又カルカツタ大學教授として滯印七年、其間の見聞討尋の結果を今夏東京朝日紙上に連載して、識者多年の渇望を醫し、世の思索家、教育家、宗教家、乃至社會政策家等の熱烈なる歡迎を受く、弊社先生に乞ひ之に多大の增補又訂正を加へられ一冊として上梓せしもの即ち本書也、敢て江湖にすゝむ。

十版

印度 タゴール著
三浦關造譯

森林哲學 生の實現

全一冊
四六判上製
正價八十錢
郵税八錢

東京市本郷區西片町十番地
玄黄社
電話下谷一三九番
振替東京七九九五番
全國書店賣捌

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

歐洲戰時の眞況見る可し

杉村楚人冠先生著

▲裝幀岡本畫伯

最新刊

戰に使して

●四六判特製頗美裝
紙數四百數十頁全

定價金壹圓五拾錢

郵送料金拾錢●

口繪及挿畫

▼コロタイプ版
▼ジンク版
▼原色版
▼石版
▼寫眞版
數十葉

「戰に使して」は楚人冠先生が英獨開戰と同時に朝日新聞社より倫敦に特派せられ、滯英約半年の間、具さに戰時の英佛を視察せられたる時の記事なり、先づ筆を昨夏暑を下總の一湖畔に避けて老母と平淸なる自炊を樂める所に起し、突如として社の召還電報となり、渡米となり、渡歐となり、倫敦滯在となり、佛國旅行となり、クリスマスより正月にかけての英國田園の視察となり、其の末遂に白耳義訪問となつて、同國皇帝及び皇后兩陛下の謁見を賜はりし次第に及ぶ、收むる所約七十餘篇、公報にも表はれず戰報にも出でざる歐洲戰時の光景を叙して、人をして身其の地に在るの感あらしむ。

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申越の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 三宅雪嶺先生著

想痕

◉時事新報曰く想痕の一卷は實に現代無二の大文字大正文壇の生める大寶典也

紙數壹千四百頁全
菊判特製天金箱入

世評一斑

定價金參圓八拾錢

◉萬朝報曰く、歳時・修養・思潮・教育・政治・人物・雑の七篇より成る千四百頁に近き大冊なり文中一字の無駄莫く博士獨得の筆致着想寶石の輝きを有し一書確かに現下の思想言論界に炬火を投ずるもの……

◉大阪朝日曰く、博士は之を文集と云ふを好まず自己の思想の痕跡に過ぎずと云へるが此偉大なる痕跡を止めたる博士の思想の廣さと深さに於て量るべからざるものあり卷頭歳時篇は寒月梅花を照すとか雪中松とかいふ題目によつて世事を談じ風流を談じ政治を談じ社會を談じたる博士獨得の小品集にて日本人の卷頭にて每號讀者の心境を恍惚たらしめし文字なれば其文と想とに於て雪嶺を見るもの三誦して已む能はざるべし修養篇は博士一流の常識哲學に基く人生觀思潮篇は博士の思想の社會人事との聯鎖を觀るによろしく教育篇は論旨多端の間に博士の人格的教育觀の一貫せるあり政治篇人物篇は博士の最も得意とする所我が政治現象を逆に觀て順に說き今古の人物を掌上に飜弄する博士一流の筆法何時見ても何時まで經つても評論界の珍とすべし

◉時事新報曰く、有らゆる社會の諸現象を包括して餘す所なく而も氣宇博大にして眼古今を空うし眼中權貴なく卓然として一世を睥睨す立言又堂堂竣辣骨を刺すものあり加ふるに博引旁證轉た其博覽强記に人の膽を奪ふ……

◉やまと新聞曰く、其分量より云ふも慥かに本年度出版界の偉觀たり……

◉東京朝日新聞曰く本書の上梓は世の望に副ふもの也

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎本文庫は著者各自の特色を發揮せる

四六判 特製美裝

大正名

紙數各冊 四百頁内外

第壹編

法學博士 和田垣謙三先生著

兎糞錄

◎文部省に於て通俗教育圖書讀物として審査認定せらる◎好評續出天下無比

◎東京朝日曰く、折に觸れ時に應じ興來り情湧く毎にポツリポツリポロリポロリ飛び出したる者即ち是れとこれ兎糞錄の名ある所以也◎實業之世界曰く、評者は腮を解き腹を抱へ又泣かされたり實に滑稽の奥に涙を藏し諧謔の底に人生の眞理を寓す世を啓發し人を誘導し無限の活教訓を含む古今獨步

第貳編

大町桂月先生著

人の運

◎文部省にて通俗教育圖書讀物として審査認定せらる

▼萬人處世の活教訓▲

◎時事新報曰く、著者一流の觀察と文辭とに依りて不動の眞理を作れるもの言々句々皆味ふべく讀者にして反覆玩味せば其の人處世上に裨益を受くる極めて甚大…………

▼處世活動の指針▲

第參編

杉村楚人冠先生著

へちまのかは

◎大日本若濱會に於て大正三年五月全國學生及び青年讀物として現代斬新文學の模範として審査選定せらる

◎萬朝報曰く、リアンの學生、講師、官吏、新聞記者、渡歐等約二十年間に亘る著者の實生活を描出したるもの著想奇警加ふるに新らしき圓熟せる筆致を以てす洵に趣味深き楚人冠獨得の好著といふべく以て妙筆として「みみずのたはこと」「兎糞錄」等に對せしむべし

第四編

浪六先生著

罵倒錄

◎先生曰く、餘り大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど實際是が我輩近來の快文字なりと

◎實業之世界曰く、本書は氏一流の筆鋒を鋭くして片端から小氣味よく罵倒した社會觀浮世觀である其世道人心を縱論横議せる所キビキビとして痛快を極めて居る精勵刻苦の蟻が午睡を貪つて居る人間を罵倒する等讀み去り讀み來り無量の興味が油然として湧出するものは流石に著者の老熟

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

名文傑作として讀書界の視線を集む◉

著文庫

定價各冊 金壹圓貳拾錢

郵送料各冊 金八錢

第五編

法學博士 和田垣謙三先生著

吐雲録

文部省にて通俗教育圖書讀物として審査認定せらる

◉實業之世界曰く、才氣横溢して光彩の陸離たる將に襲來せんとするの概あり而も其間博士一家の抱持貫徹して諧謔戯談の裡に時代の弊風を剔抉して完膚なし前に兎糞録を著はして好評嘖々年ならずして二十八版を重ね爲に洛陽の紙價を高からしめしが本書は其續篇と見るべし◉日本曰く、明治より大正へかけての隨筆物として後代に必ず興味を持たせる

第六編第七編

浪六先生著

元祿四十七士

上下全二册

文部省にて通俗教育圖書讀物として認定せらる

◉そもく勅使下向より筆を起して殿中の刄傷内匠頭の最後赤穗の開城一黨の苦心慘憺吉良家討入に至るまでの顚末を盡して其間に最も精確なる四十七士の列傳を加へ全編これ史實と趣味との結晶體に成れるもの他に類を許さゞる著者一流獨得の痛快なる筆法は千古の忠肝義膽を描出して餘蘊なし義士傳中の白眉◉時事曰く武士道の精華を後代に傳ふるは本書

第八編

文學博士 幸田露伴先生著

洗心録

文部省にて通俗教育圖書讀物として認定せらる

◉東京朝日曰く、露伴趣味を發揮せる隨筆的短篇長篇凡六十種を躰む風物に關するもの修養に關するもの史上の人物を評するもの文を論ずるもの悉く別天地の消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の俗腸を洗ふ淸涼劑洗心錄の名得たりと◉萬朝報曰く、深玄幽妙なる人格の響を有する其想字錬句奈無縫の天衣を思はしむる其文隨筆家として眞に當代に傑出す

第九編

竹越三叉先生著

三叉文存

◉軍國の志士は必讀せよ平和を愛する者亦之を繙かざる可んや

◉時事新報曰く、警拔の識見を淸新俊逸なる筆致に載せて社會萬般の方面に指導激勵を怠らざる著者の如きは蓋し寡かるべし本書は著者が折に觸れ時に隨ひて物せる感想文を蒐む篇々皆得易からざるの大文字字々珠玉の如く觸るゝ所鏘然として聲あり花に濺ぐの涙は直に時を憂ふる志士の思ひを和し政壇と時勢を喚示する時代の好指針……文章の好模範

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂

電話本局長三六六六番
振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

◉公明なる新聞各雜誌は擧つて

四六判 特製美裝

大正名

紙數各冊 四百頁内外

第十編

文學博士 前田慧雲先生著

活修養

◉文部省にて通俗教育圖書讀物として認定せらる

●中央新聞曰く、佛教界の傑士前田博士の生涯は既に好箇の立志傳にして生ける修養訓也此人の口に依て現代青年の爲に活ける修養を說けるもの即ち本書なり徒らに昔の金言格言を羅列し之が註釋に留りたる如き乾燥無味なるものに非ず開卷第一「短氣の治療」以下五十餘項一々趣味ある先哲の逸事等を掲げ能く機微を穿てり實に現代の新論語……………

第十一編

加藤咄堂先生著

人の心

◉文部省にて通俗教育圖書讀物として認定せらる

●報知新聞曰く、心の謎、心の亂、心の敵、心の主、人情、心と心、心の怪、靈魂、世の心、天地の心、心と自然、達觀、生活と心の各篇に分ち著者一流の流暢なる筆を以て精神修養談をものす◉太陽曰く、著者一流の見識を以て縱横に人心の體と用とを觀察描說したもので正に懷疑し盲動し墮落しつゝある現代の人心に對する一大警策である……………

第十二編

大內青巒先生著

破木杓

◉報知新聞曰く、平淡なる文字の裡、著者の鍛錬せる人格と高遠なる思想の一端を窺ふべし修養書中の上乘

「破木杓」とは何ぞや一柄の木杓なり形は北斗の如く用は科斗に似たり上は梵宮の甘露を掬して三世の諸佛に供養し下は夜塘の惡水を汲みて十方の衆生に施與し來ること幾千萬年近く青巒先生の手により大正の社會に向つて靈液を注射す宇宙の眞理を徹し人生の機微を穿ち迷へる者を導き悶ふる者を救はんとす。

第十三編

長谷川如是閑先生著

搦手から

●時事新報曰く、「ひとりもの」以下「病める革命家の日記」に至る八篇の小說と「如是閑語」と題するアフオリズムとを收む著者の小說は今日文壇の評價に上りつゝある創作類とは全く其撰を異にしマアクトウエンの如きユモアとマクスオレエルの如き皮肉とを以て自家獨特の境地を作り叙するに多少俳味を帶びし簡[illegible]の文章を以てせる新文壇に例を見ず

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

大正名著文庫

菊地幽芳先生著

第拾八編

幽芳集

▲装幀川村畫伯

最新刊

●四六判特製頗美装 紙數四百餘頁全一冊

定價金壹圓貳拾錢

郵送料金八錢●

文壇の權威たる幽芳先生が佛國留學中に於ける見聞小品より最近の作品に至る近業を網羅せるもの短篇小説あり飜譯文あり小品あり紀行あり觀察あり一たび幽芳先生の筆に上る時皆一種のチャームを有し讀者を魅し去らずんば止まず蓋し今秋に於ける絶好の讀物なり幽芳先生先に渡歐の途に上るや**梨本宮妃殿下**と御同船の榮を得殿下の知遇を辱うして「**賀茂丸より**」の一篇成る日本皇室の御女性中最も美くして機智縱横に度らせらる丶妃殿下を中心とせるその樂しく華やかなる**航海日記**また收めて卷尾にあり幸ひに愛讀を給へ

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 **至誠堂** 電話本局三六六番 振替東京一七四四番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、二二八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番)

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第卅年九月號（秋期大附録號）目次

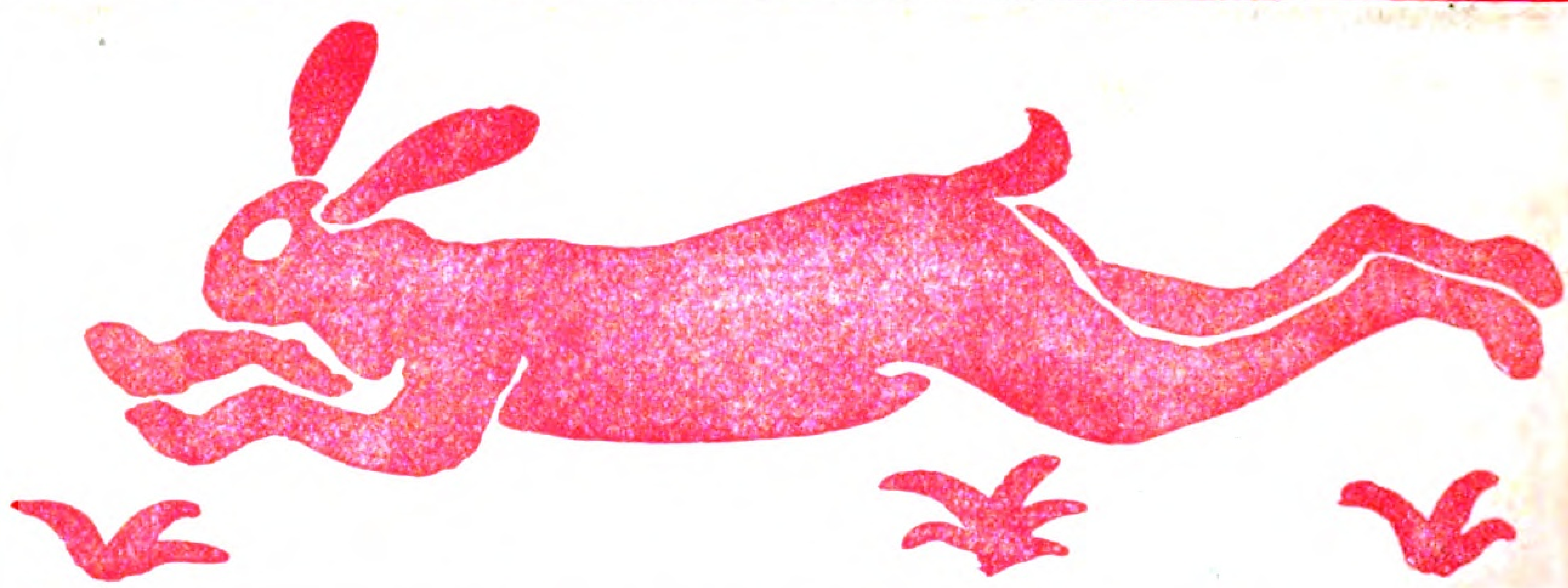
▲公論

偉大を缺ける政界
大隈伯責任を知らず……社論……一
露獨の單獨媾和如何
江戸文化史論……笹川臨風……一七
袁世凱皇帝論……稲葉君山……四二
感激なき時代……茅原華山……五〇
現下の財政狀態と海軍充實問題……松山忠二郎……六三
天下多難の秋……福本日南……六九
親鸞聖人……文學博士 醫學博士 富士川游……八五
時論數則……竹越與三郎……一〇九

御思召に依つて留任と決したる大隈伯の進退を議す

◎留任は政治道德上不可……松山忠二郎……一一九
◎非立憲にあらず……伯爵 大木遠吉……一二一
◎憲法の精神解釋から觀て……法學博士 花井卓藏……一二五
◎留任不可ならし……司法參政官 田川大吉郎……一二六
◎最早や論議の要なし……男爵 目賀田種太郎……一二八
◎國家風敎の賊……古島一雄……一三〇
◎大隈伯の留任に對する三批難……法學博士 戸水寛人……一三一

▲說苑



新聞講話……石川半山……一

幽靈探訪……大窪逸人……二六

明治大正瀆職及不正事件史……田中貢太郎……三四

改造内閣の新大官……鐵拳禪……四八

秋草……黒頭巾……五八

島村先生と舞臺監督……松井須磨子……六九

歐洲講和會議の際に帝國の代表者とすべき人物

◎時の現任外相と本野男……某外交官……七五

◎諸種の候補者月旦……石川半山……七六

◎唯一の適任者加藤高明男……茅原華山……七八

◎山本伯を推さん……爛柯人……八一

◎何人か果して適任……吉野臥城……八二

◎正使は後藤男、副使は仲小路氏……伯爵 大木遠吉……八五

◎要求事項の決定と國民の態度……司法參政官 田川大吉郎……八五

◎講和會議に行く人……鵜崎鷺城……八七

◎大使權兵衛、副使巳代治……早川鐵治……八九

（秋期大附錄）

お才と巳之介（小說）……谷崎潤一郎……一

刺戟のまゝに（小說）……正宗白鳥……一一八

料理人（脚本）……坪内士行……一五一

惡夢（脚本）……武者小路實篤……一八六

守護神（小說）……上司小劍……二三八

戰話（小說）……德田秋聲……二六一

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論



第三十年第十號
秋季大附錄號
第三百二十二號

偉大を缺ける政界

（上）

歐洲戰爭の突發せし前年、英獨關係に付き最も奇拔なる見解を以て滿てる講演を試み、大に英人に警告する處あり、而かも其戰爭に先ちて世を去りし倫敦女皇立大學教授クラム氏は、該講演中に故獨逸大使ビーベルスタイン伯の死を悼み語て曰く

昨年（一九一二年）の九月の末に余は某所に休養中、一夕獨逸大使ビーベルスタイン伯の死せるを聞けり、變通自在の伯が溢るゝ計の元氣を以て我英國に乘込み來りしは唯た昨日と計り思はるゝに今其訃に接せんとは誠に意外の感ありき、伯の我邦に來るや乍ち我英國の政界に於ける萬事を偉大化せり、

何となれば第二流の政治家さへ見當らざりし當時の我國に於ては第一流の人物、少なくとも第一流を暗示する人物の現出は時の政治界に一種の尊嚴、意義を與へたればなり、然るに今や晴天の霹靂に打たれしかの如く此大人物は取除かれたり、偉大の感念は乍ち消失せて、多忙なる凡俗のみ殘れり、即ち事務に勉强するものと法螺吹きの山師とのみ依然として欝陶敷空氣の中に往來しつゝあるを感ぜざるを得ざりきと、

又曰く大人物の死は其政見、同情の如何に關はらず人類共通の損失なり、何となれば眞實なる友人を外にしては、偉大にして寛仁なる敵は實に人生の大なる寶なればなりと、

クラム教授は英國政界に人物なきを浩歎しバーフォル、アスクイス、グレー、ロイドヂョーヂ、チャーチル等を以て二流以下の人物とほか認めずして獨り故ソールベリ侯を以て偉人なりと推崇する人なり、若しも斯人をして我邦の政界を品評せしめば如何、桂公死し西園寺侯退きし我大正の政界は何れの方面を見渡すも偉大の人物なく偉大の政策なし、御大典を目的に内閣の爭奪を事とするが如きは實に見下げたる心事にして、未だ一人の大計長策を提げて此千載一遇の氣運に乘ぜんとするものあるを見ざるは如何にも小人國の觀あらずや、然れども我邦とて、何時も今日の如く平凡劣俗の空氣に壓せられたるには非ず、伊藤陸奥の國政を執りし時には百年の長計も講ぜられ赫々たる功業も建てられたり、大久保木戸、西郷の廟堂に立ちし折には滿朝肅然として天下を威壓するものありしと聞けり、更に數百年を溯れば人奴より身を起して天下を取りし太閤秀吉の頭腦より後世を驚動すべき大計畫の發表せられしこと

もあり、由來島國人は氣宇狹隘にして大陸人の規模遠大なるに如かずと思惟せらる、然れども豐公の大陸遠征の計畫を見ば何人も其破天荒の大經綸なるに驚かざることを得ざるべし、蓋し文祿の役に付其眞相を理解せんには第一に其目的が征韓に非ずして征明に在りしことを記憶するを要す、文祿元年五月十八日附を以て秀次に示せし覺書に因れば公は初めより禁闕鳳駕を北京に移し奉りて日本大帝國の首府を亞細亞大陸の中央に定めんと欲せしこと明なり、是れ只た公の空想に非ず當時の後陽成天皇の御裁可を經て、天子も來々年大唐に遷らせらるべき思召にて在せしこと鹿苑日記六月六日の條に明なり、此日記の記者また主上の北京遷都に際し供奉の內旨を受けたりとて驚喜し『天乎命乎』と記せり。而して太閤の計畫に因れば日本の政治は之を秀次に讓り、北京の政局亦た之を他の腹心に司どらしめ、公自身は寧波府に居を定めて是より琉球、臺灣、菲律賓は素より南洋、印度、波斯に皇威を輝かさんと欲したりしなり、只た此計畫の成功に取り一の必要條件とも云ふべきは豐公自ら渡海して戰略を指揮し又た媾和の談判にも當るべかりしも、公の左右を初め母堂たる大政所、さては後陽成天皇までも公の故國を去るを惜まれ、殊に大政所は此事を苦にして發病不歸の客となりし程にて公の英氣も爲めに稍々挫けたるに際し、我水軍大敗し遂に制海權を占むること能はず、且つ偶々明使の媾和に詐かれて休戰中平壤を襲はれて我陸軍亦た敗し碧蹄館の一戰大に我武威を揚げしも、遂に中途にして媾和談判に入るの止むを得ざる事情となれり、幾多の曲折の後明使が九州名古屋の大本營に來り決定せる條件と云ふべきは、明國皇帝の女を納れて我皇妃となすこと、明國が我に朝貢し豐太閤を明王に封ずること、京城と以北四道を朝鮮

國王に與へて我附庸となし、他の四道を我領土となす等を主眼とせしも、最後取極の一段に至り明使が伏見桃山に於て豐公に謁して呈せし明帝の書に秀吉を封じて日本王と爲すの一節ありしかば、乍ち公の激怒に觸れ和議終に破裂し再征の師を起すに至れり、蓋し豐公が日本の執權者にてありながら明王たるの封冊を受けんとせしことは頗る不可解なるが如しと雖も、一種の虚名に過ぎざるも明王に封ぜられて大陸經略の素志を青史に留めんと欲せしは不思議に非ず、宛も英國王が其の獨立君主なりしに關はらず千七百十四年より千八百三十七年に至るの間(ナポレオン爭亂の一時を除く)ハンナワー選擧侯としては獨逸皇帝の節度に服せしが如く、豐公の明王封冊は主義に於て毫も我國の獨立を損害せず却て我主權を間接に大陸一般に及ぼす譯合なり、第二の遠征は理に於て止むを得ざりしも此時豐公の餘命幾許もなく、明軍若し京城より五六日程の地に來らば直に自ら出征すべしと遠征の將士に告知せしも、意氣徒に壯にして體力之に伴はず僅々一年餘の後に在鮮十餘萬の我軍は公の薨去と共に召還せられ、空前の壯圖も亦た公と共に消失せり。

想ふに豐公征明の企圖の遂に邦人間に能く理解せられずして今日に至れるは徳川氏が鎖國政策を採りて豐公と正反對に出で公の覇圖雄略も亦た强て忘却せらるべく努めたるの結果たらずんばあらず、抑も徳川氏の内治政策是なりしか豐公の對外發展策是なりしかは見樣に由り如何樣にも斷定し得べく、宛も明治年間に入りて起りし征韓論の如く之を主張したる西郷、江藤板垣是なりしか將た内治主義に由り之に反對せし岩倉、大久保、木戸是なりしかと云ふが如し、之を結果に付て論ずれば徳川氏三百年の鎖國

策に因り我大和民族固有の文明は初めて形成し、國家的團結また玆に其萌芽を發し遂に明治年間大發展の基礎を爲したりと云ふを得べく、宛も後の大久保、木戸の内治策が他日帝國擴大の根蔕を作れりと謂ふ可きが如し、然れども豊太閤の氣宇の廣大其材力の偉雄自ら德川家康と典型を異にするものあり、太閤の如きは同じく英雄と稱するも寧ろアレキサンドル大王と並稱すべきものにして、其鴻業偉蹟の及ばざるものあるが如き是れ境遇の結果に外ならずして、氣宇雄略頗る相似たるものあり、アレキサンドルの將に亞細亞遠征の途に上らんとするの前夜、其師アリストテレス王に見へて告げて曰く是より遠征を企つる王は必ずや種々の國に到り種々の民族に出遭ひ給ふべく、其中には武勇に長し文明に進めるものあるべく又た名もなき野蠻人もあるべし、余は告別に臨み敢て一の忠告を王に呈せんと欲す、即ち王は武運芽出度くして何れの地方に行かるゝも希臘人たることを忘れ給ふ勿れ、必ず希臘人と異族民との區別を嚴重に立てられよと、是に對し齡僅かに二十二歳の青年の王は答へて曰く、否とよ余は師の教に異なれる方針を採らんと欲す、余は凡ての人を化して希臘人たらしめんと欲す、是れ則ち我が戰勝の目的たるべしと、斯くて王は紀元前三三四年に出征の途に上りしが、是より二年の後には王は已に小亞細、シリヤを經略して埃及に侵入しアレキサンドリヤ府を創立せり、其翌年には兵を波斯に進めてアルベラの戰にデライオス大王の百萬の軍を殲滅し、此より三年間東方波斯の征伐に從事してバクテリヤ（支那人の大夏國）を版圖に加へ、其翌年には印度河を越へて西方印度のパンヂャブを侵略し其より師をバビロンに旋へし、將にアラビヤを攻めんとして其準備中、齡三十三歳を以て病沒せり（三二四年）、王は其恩

師アリストテレスに告げし語に違はず到る處に其地の人材を採用して腹心となし、終にバビロン府を以て其大帝國の首府となし、自らは波斯王室の後繼者なりと標榜し希臘の兵式に由り波斯人を訓練して親兵に宛て、曾て希臘老兵の暴動を企てし際の如きは波斯兵を以て之を鎭撫せしこともありき、即ち異民族を化して希臘人たらしめんとするの主旨を實行するに外ならずして、希臘の學問美術は遠くバクテリヤ、西部印度に入り、一變してサシサツアン又はガンダラ美術と化して、漢代に佛教と共に支那に傳はり大に支那美術を啓發せり、而して埃及歷山府が世界學問の中樞として盛名を馳せしも亦アレキサンドル大王の創見に基けり、我豐公の如き天若し之に假すに年と體力を以てせば歷山大王の事業必ずしも得て期す可らざるに非ず、我皇威を八閎に輝かせ明韓を我節度に服せしめたらんこと想像するに堪へたり豐公の企圖に從ひ當時の國力を八方に散布離分することの得失は自ら別問題とするも、我大和民族中より豐公の如き氣宇世界を呑むの大豪傑を出せし一事は永久に我民族自强の因たらずんはあらず、思ふて茲に至れば小人國の觀ある今日の日本も前途必ずしも多望ならずと云ふ可らず。

（下）

吾人は更に眼を想像の帝國より現實の帝國に轉ぜざる可らず、想像の世界に偉人と偉業を思ふは時に精神の保養の爲めに必要なりと雖も如何に面白くなきも吾人の切なる興味は我國家の現狀如何及び其將來如何と云ふに在ればなり、而して有體に白狀すれば大隈内閣の下にある帝國は今や頗る危險の狀態に在りて、殊に我邦に取り死活の問題たる日支關係は最も不穩の狀態に在りと云はざる可らず、詭辯巧辭

の名人たる大隈首相は這般の日支交渉によりて日露戰爭以來の懸案を解決し得たるを以て之を一種の成功と見做すべしと云へども、一方支那及列國よりの不信猜疑を招き殆んと孤立に陷るに至れると相殺せば損得の計算果して如何、日貨排斥は近來稍々下火となれるかの感あれども支那人は上下擧りて日本を見限り日本を恐怖するに至れるものの如く、蓋し日清戰爭以來我邦人の支那人に嫌忌さるゝ恐らく今日の如きはなし、例の大問題と爲れる第五項は懸案として殘存するに似たれども日支の關係の現狀より觀れば、兵器統一、警察改善、日支提携等の實行は到底近き將來に得て期すべからず、兵器警察問題の如き寧ろ却て他國人により解決せらるべきに非ずやと思ふべき理由なきに非ず、況んや歐洲戰局の現狀よりして觀れば山東省内に於て我占めんとする利權の如き終に獨逸の承諾を得べきや否や、其承諾を聊か疑問とせざるを得ざるに於てをや、獨り支那に對して耳ならず歐米列强に對しても同一に不信猜疑の標的となれり、露國は平素信義問題を小六ヶ敷言はぬ國柄なるが故にや比較的に意思疏通し居るが如くなれども、英、佛の如きは最も我不信を憤られるものの如く、米國は我對支野心を猜疑して同じく釋然たらざるものあり、殊に英、米は在支兩國人擧つて反日黨なるが故に本國政府の方針も往々之に左右せられざるを得ず、虛心にして考ふれば日本が何日か一たびは列國猜疑の標的となり孤立の狀態に陷るべきは殆んど免れざるに似たれども、政治の局に當るものは須らく百方力を盡して此運命の壓迫を豫防し又は寬和すべき筈なり、然るに隈伯、加藤男は却て其不謹愼なる政策により惡運命の襲來を助長せしものの如し、然れば今後の急務は我邦の對外關係を改善して信用、尊敬を恢復し、伊藤、陸奧、桂、小村、

西園寺時代の安全なる狀態に挽回せざる可らず、獨逸は其偉大なる國力を背後に有しながら外交不信の爲め今日の難局を惹起せり、戰局の現狀は寧ろ彼に利あるが如くなるも、列國に惡まるる彼が如くなるに於て、假令互角の利を以て局を結ぶべしとするも決して此事局を惹起せしを得意とするものに非ざるや明けし、況んや持久戰の結果として最後の勝利の聯合軍側に在らんこと必ずしも空想とのみ言ふ可らざるに於てをや、然るに我邦は其國力獨逸に及ばざること遠く、殊に財政の基礎薄弱にして殆んど歐米の市場より獨立し難き狀態に在るより察すれば孤立不信に陷るの危險は一層甚だしきものなきを得ざるべし、戰時已に斯の如し一朝歐洲の戰塵收まるの日には、列國の經濟的政治的の壓力は盛んに支那に向ひ加へらるべく、此間に孤立せんとする日本は果して能く今日の地步を保ち更に進んで帝國の使命を貫徹するを得べきや否や、吾人は思ひ一たび戰後局面の問題に及ぶ毎に現內閣諸員の如く平々然として前途を樂觀すること能はず。

且夫れ內治の形勢たるや近年黨派感情徒に高まり各派互に怨仇を含みて反噬し人情益々危險なるものあり、若し現政府與黨と反對黨との間に就きて是非曲直を公平に分配せんとせば果して孰れか是孰れか非、其責を歸するに於て大に迷はざるを得ず、局面紛糾の起原は大正元年の冬桂公が突如として內府を出て內閣を組織したるに在り、公の行動を陰險なりとして大に銜む處ありし政友會國民黨各派は憲政擁護運動を捲き起し桂閣に立ちつゝ同志會なる新政黨を組織せんと企てたる桂公を仆ふし復た起つべからざるに至らしめたり、茲に於て政友會を基礎とする山本內閣成りしが同志會一派は大に銜む處あり翌年

海軍收賄問題の起るや之を奇貨とし極力攻擊に努めて遂に山本內閣を仆せり、茲に於て大隈內閣組織せられて今日に及べるが、過般の大浦內相瀆職問題に際して反對黨の復仇的仕打亦與かりて少なからざるは爭ふ可らず、吾人は今に於て各派の責任を計較し甲乙するを詮なきことと思ふ、要するに責は齊しく各派にあり、吾人の唯冀ふ所は各派の先輩が能く時弊の甚だしきに心付き心を廣くし思を大にして區々たる紛爭を一掃し今の陰險執拗の空氣に換ゆるに公明淸爽の空氣を以てせんことに在り。

更に一步を進めて前途を眺むれば平和克復後の列國の間には軍事、工業、貿易に關して猛烈の競爭行はるべきことと想像に餘あり、而して問題は種々に分割すれども歸する處は學術の應用、器械の發明と云ふに在らんこと亦た見易きの理なり。例せば獨逸が最近十數年工業貿易を以て頻りに列國を凌ぎ、又は過去一年間の戰爭に於て偉大の成蹟を擧げ、列國をして啞然たらしつゝある所以のものは何ぞや、一に獨逸が學問應用上英佛露等に對し一日の長あるが故に非ずや、我邦は後進國として頗る恕すべき事情なきに非ずとするも學問應用の問題に至れば多く先進國に模倣するを常とするが如く、殊に國民として又た學者間に於ても滿幅の精神を研究と應用に傾注するに至らず、吾人が近時見て以て甚だ不愉快に感ずる傳染病研究所移問題の如き此間の消息を最も明かに示すものに非ずや、北里博士一派が多少の非難なきに非ずとするも兎に角黴菌學及其應用に關しては我邦に於て先鞭を着けたるの功あれば、彼等をして研究所に據り其事業を繼續せしむる亦可らずや、而して青山博士一派にして大に之と競爭して類以の研究を成遂げんと欲せば何故に別途に之に必要なる設備を工夫せざるや、或は又何故に其研究の方面を他

に轉して人物經濟の法を講せざるや、吾人は青山博士とも云はるゝ人の行爲として餘りに狹量にして研究其物に忠ならざるを歎せざるを得ず、血清の賣買の如き北里博士一派に放任し、更に其以上に研究、發明の功を立つるの方法を講すべきものに非ざるなきか、思ふに其他の各專問の研究に關しても互に功を嫉み協同努力を缺くもの必ず多々あるべし、是等の弊は學者間に各々大人の氣魄を發揮して大に矯正せられたきことと思ふ、戰爭に際し海陸軍互に意旨を疎隔して戰略を破ることある如く、又は陸軍部内に同一の弊に陷りて作戰の目的を害することある如く、學者の協力を欠くが發めに發明の功を全ふし能はざることあるべきは見易きの道理にして、國家に不忠なる所以は是れ毫も彼に讓らざるなり、更に又我邦の教育は徒らに知識を注入するに重きを置き、智能を啓發して發明研究の傾向を助長するの用意に乏しきは何人も認むる處なり、今日の教育の狀態を以て兵器、工業の競爭に列國と馳騁して敗を取らざらんと欲するは宛も我狹軌鐵道を以て運轉の遲速を列國の廣軌線と爭はんとするに異ならず。

今や歐洲の戰局は容易に收まるべく見へざれども一年の後にも至らば平和克復を見るべく、戰後の外交、工業、貿易に關し帝國の地步を益々進捗せんと欲せば今より大計長策を建てゝ之が實行を謀らざる可らず、黨派の消長より外には國家なく、政權爭奪以外には政策經綸なく、形式の理屈以上には天下の活機を看取する能はざるものは共に戰後の事を談ずるに足らず、天若し日本に幸せば必ずや偉人の蹶起するあらん、必ずや長計大策の唱へらるゝあらん、吾人は是より漸く天下の形勢の偉大化し來らんことを希望して止まず。

大隈首相責任を知らず

内閣改造幷に居据に對する理由に關しては大隈首相は初めに陛下の思召と元老の勸誘を主なる理由として辯明を試みしが、約二週間の後國際新聞記者を招待したる席上『自分は顧みて未だ國民多數の信用を失ひたるものと信ずる能はず』とて新たなる一の理由を附加せり、乃ち大隈首相が大浦内相の瀆職事件に對し監督不行屆の譯を以て闕下に伏して提出したる辭表を後に徹回して居据改造に決定せし理由は三箇條に歸することになる、陛下の思召と云ふこと、元老の勸誘ありしと云ふこと、及び大隈伯が自ら顧みて未だ國民の信用を失し居らずと認定せることと是れなり、是等の三理由なるものは果して今回の場合に於ける伯の出處進退に對し其無責任、其不臣の罪を解除するを得べきや否や、

抑も七月三十日、宛も先年の御三週忌に當り大隈伯が匇卒として自己の辭表と閣員の辭表とを取纒め闕下に伏して之を奉呈せしは果して如何な場合なりしぞ、其前日大浦内相は已に辭表を提出し其形式に病氣を理由とするに關はらず林田前翰長の所謂罪狀に密接の關係あることは公然の秘密として天下に知られ、而して首相が監督不行屆を理由とするは大浦内相の攝生法や健康に對し不注意なりしと云ふに非ざるや言を待たず、即ち大浦子將に刑事被告ともならんとする不謹愼なる行爲ありしに對し監督不行屆の責を引けるものと解せざる可らず、然かも内相の罪跡と云ふものは增師案に對し之に反對する政友會の一角を崩壞せんと試みしものにして、其計畫の成功と不成功は直に議會を解散するや否やの問題にも

聯關する高等政策の一部に屬せり、當時大隈首相は内相を兼攝し、大浦子は農商務大臣として事實上内相の事務に關與せり、故に大浦子が林田翰長等と謀りて政友會一角を崩壞するの策を實行するに關して首相兼内相たる大隈伯が之を與かり聞かざる筈なく、假令買收其物に付て協議に與らざりしとするも、已に政友會を破壞せんと企つる以上不正行爲の之に伴ふべきを解せざる程に大隈伯は事情に迂ならず、即ち大隈首相兼内相は一種の深き注意を以て破壞政策の成行を凝視し其遂に期待せられし程の效果なく政友會より十數名の脱退は未だ以て議會に於ける均勢を打破するに足らざるを知るに及んで遂に議會の解散を斷行したりき、然れば大隈伯は其辭表に監督不行屆を理由とすと雖も實際は大浦子の辭職理由に對し連帶の責を負へるものと解するを至當とせん、是れ加藤、八代、若槻三相の極力居据反對を唱へ首相と共に留まるを肯せざりし所以なる可し、若しも形式一遍を以て論據とするに於ては隈伯の監督不行屆と云ふことと已に病氣を理由として辭職せし大浦内相に對しては意味を爲さず、又た首相の辭職に連帶して辭表を提出せし加藤等三相が首相留職に決したる後尙ほ辭表を撤回せざるは論理上甚だ不明なり、然れども區々の形式を離れ實質、事實に由て事件を觀れば事理自ら明白なり、即ち大浦子は其農相たる時に行なはれし議員買收事件に聯關して責を引けるなり、大隈伯は首相兼内相たるに際し大浦子に由り内閣維持の爲め不正行爲の策せられしに對し道德上聯帶責任の避く可らざるを思ふて辭職せるなり、而して加藤、八代、若槻三氏に至りては伯よりも一層明白に連帶責任の避くべからざるを感じたるが故に首相と共に居据ることを肯ぜざりしなり、事件の眞相は斯の如し、陛下の思召、元老の勸誘、國民の信

用、未だ失はずとの自信、是の三者は果して大隈伯の大浦子辭職事件に對する責を解除するに足るか、政治道德の上より之を見れば大隈伯の居据正しきか、加藤外三氏の辭職遂行正しきか、國民は果して之を如何に判斷せんとするか。

吾人をして忌憚なく所思を言はしめんか、吾人は大隈伯の腦髓は甚だしく透明を缺くと思ふ、若しも伯の辭職の理由をして陛下の御信任を失へる疑あるか、元老の反對行爲に堪へざるの事情あるか、又は國民の反對囂々たる場合なりとせんか、伯の提出せる三個の理由は留任の理由として何人も異議ある可らず、然れども伯過般の辭職は全然普通の場合と事情を異にし、内閣組織の當初に於て政界の刷新、黨弊の打破を以て高く天下に標榜せし大隈伯が其高等政策の遂行上其重立ちたる閣員中より瀆職者を出さんとする場合に臨み其責に任せんとせしものにして、苟も政治道德の第一義を解する者は正に斯くの如くならざる可らず、而して其責任は事件の性質上陛下の思召如何により消滅すべきもの非ず、況んや元老の留任勸誘又は國民の信任を自覺すと稱するが如きの理由を以てするをや、袞龍の御袖に隱れ又は其他の區々たる申譯に由り留任する程ならば當初の辭職は形式一遍の進退伺に外ならず『道德觀念に基き留任せり』と傲語せる隈伯は殆んど政治道德の何物たるを解せざる人と謂はざる可らず、吾人は大隈内閣の幾日まで繼續すべきを知らず、然れども加藤大浦兩氏を失へる隈伯は内閣の禍因を除くと共に其二柱石を失へるなり、箕浦、高田、石井諸氏孰れも好人物と稱すべきも内閣の重心たるに堪へず、柱石なき内閣は大風に吹倒さるゝか、地震に搖り崩さるゝか、猛火に燒拂はるゝか、其瓦解崩壞消滅の日に當

り限伯第一の失態と算へらるべきは蓋し居据に際し責任撤回の不臣の罪に在るべし。

露獨の單獨媾和如何

獨軍がガリシヤより露軍を掃蕩し、又た東普魯西、波羅的諸州方面より露國に侵入し、更に正面ワルシヤウを襲ふィ之を拔くや、將に一擧にして露軍の第二防禦線に迫らんとするの慨あり、此時に際し獨逸皇帝は丁抹國を介して露帝に單獨媾和を提議せりとの報あり、其提案の詳細は之を知る可らざるも獨逸はワルシヤウを中心とする波蘭土を露國より割取し之を他の獨墺領波蘭土と合併して波蘭土王國を與復し墺國の一皇族を迎へ之に王たらしむべく、露は其代償としてガリシヤの一部を獲べく、更に土耳古に説きてダルダネール・ボスホロス海峽を露國の支配に移し其代償として埃及を英國より奪ふて之を土耳古に與へんとするに在りと云ふ、一應之を觀察すれば頗る巧妙なる按配と云ふべきに似たり、抑も波蘭土は十八世紀の後半に於ける三回の分割に由りて露墺普の三國間に分領し蒞したる歷史あり、爾來露普は宗教の相違（波は舊教にて、露は正教、普は新教なり）より最も統治に窮せり、而して墺が同宗の故に由り比較的に成功せるを以て墺の皇族に新波蘭土の王位を與ふれば統治の困難を免るべく、露國は同宗のガリシヤを獲得して波蘭土に於て失へるものを償ふに足るべく、且ダルダネール・ボスホロスの支配權を得れば地中海に出でんとする其歷史的希望を滿足するを得べし、是れ露國に取りては其大敗軍の

後なるを思へば頗る香餌なりと謂はざるべからず、然るに一歩立入りて獨逸の提案を觀れば露國に取りて是ほど不利益なるはあらず、假令東部ガリシャを得るも是れ山奥半開の地にして歐洲中原に突出して人文の進歩せる波蘭士とは比較に堪へず、且波蘭士を再興して王國を建つべしと云ふも其實權は伯林に在るべく、今後西方よりする獨逸の壓迫に對しては露國遂に堪ゆ可らざらんとするは睹易きの理なり、殊にコンスタンチノープル方面を露に與ふべしと云ふも其實行頗る困難にして、現に其主人公として土耳古の在るあり、恐らく露國は此方面を得んとせば獨逸と共に英を埃及に攻め先づ埃及を奪回して土耳其に與へ而して後にダルダネール・ボスポロスと交換せざるを得ざるべし、然るにても土耳其が果して其歷史的首府を唯々として立退くべきや否やは疑問なり、然れども更に是より甚だしきものあり、元來今次の戰役を露國が開始せしはセルビヤ對墺國の葛藤に聯關し、スラブ民族の主長を以て任ずる露は巴爾幹諸國を墺獨の壓迫より救はんと欲したればなり、然るに一時の敗戰の故に因り獨墺と單獨媾和を爲すこともあらんか、是れ塞比を初め巴爾幹の同民族を見棄てて顧みざるに同じく、之を絶縁して驅つて獨墺の配下に奔らしむるに異ならず、即ち是れ巴爾幹に對する露の歷史的地位を放棄するものにして大國の聲望自ら地に墜ち容易に回復す可らざるものあらん、更に一歩を進めて考ふれば露國は是より獨逸の手先となりて永久英國と波斯、印度方面に爭はざる可らざるに至るべきなり、要するに獨帝の對露提議なるものの表面頗る露に利なるが如くにして實に永年の禍因を蔵するものなり、吾人は露帝が一考の餘地なしとして拒絶したりと云ふを聞き、如何にも左こそあるべしと思ふ。

然らば則ち戰局の前途は如何、獨逸は如何にも勇强なり、然れども露國に對し今後幾許の深入りをなし得べきやは頗る疑問たらざるを得ず、佛英方面に於て獨逸海軍は依然として英國に壓せられて潛伏し、陸戰に於て白英佛の陣地は益々防備堅固なるものの如く、持久戰の作戰計畫愈動かす可らざるものあるに似たり、蓋し愁いに大決戰を試みて敗端を開かんより持久戰を以て敵を困弊せしむるも亦た良策たるを失はず、今後尙一年も繼續せば獨墺遂に漸く窮處に入らん、今後のこと只だ持久堅忍に在り、而して是れ實に露國人の長所なるを思へば吾人は我同盟諸邦の爲め自ら意を强ふするものなくんばあらず、獨逸が丁抹王を經て平和の提議を爲せりと云ふもの已に其困弊の大なるを感ずるに至れる故ならずや、吾人は英、佛、露、伊の聯合の最後まで持續して破れざらんことを信ずるものなり。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

去る七月上旬石黒博士の令息が御嶽山中に於て自刃せし際愛誦措く能はず遂に鮮血を以てその頁を彩りしもの實に本篇なりとす。

●長田幹彦著

自殺者の手記

（定價六拾錢 郵税六錢）

本篇は著者が自殺せる一青年より送られたる手記を基礎とし想を構へしものにて、最近文壇評壇に於てその細緻辛辣なる筆路と恐怖悲哀に充てる人生觀を以てかばかり多大の注意と同情とを惹起せるものなしと云ふも敢て過言ならず。死に就かんとする者の悲壯なる心境救はれざる靈魂の絶叫歔欷字句の間に躍動し自殺せんと欲するものは之れに依りて慰藉を求め人生の歸趣に對する暗示を享くべく、又思想家、經世家、敎育家は之れに依りて青年の心理の趣く處を洞察闡明し速に解決救濟の道を講ず可く、本篇の價値は諸種の立脚點より最も高く評價せらる可きものなりとす、巻末に『自殺せる青年』と『蕩兒』の二篇を添ふ。

發賣元 東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇番） 新橋堂

□高濱虚子著□中村不折畫

小説 柿二つ

（定價壹圓拾錢 郵税十二錢）

三千の俳句を閲し柿二つ　子規

新刊

此序以て本書の内容如何を知る可し

著者の自序に曰く：：此『柿二つ』は正しく子規居士を書かうと思つて書いたもので、少しも虚構を加へず、事實其儘を寫生したものである。が、其かと言うて此一篇に子規居士を傳したと云ふ事は出來ぬ。居士の言行は如何なる些細な事でも事實に相違せぬやうにつとめたのであるけれども、而も心理上のことは悉く私の想像になつたものである。其點からいふと矢張小説であつて傳記といふ事は出來ぬ。：：云々

第十七版

◎蘆花 德富健次郎著

小説 黒い眼と茶色の目

（定價壹圓廿錢 郵税拾貳錢）

十九の夏から二十の冬まで著者青春の生活を如實に現出す。夢の如く起り而して著者の半年に大打撃を與へた、初戀の挿話が大部分を占む。懺悔の一片また「新思出の記」の一部。從來さまざまの形を以て著者を愛しくれた、四國四周の生命に對しこれ迄の水臭い態度をよして更に露骨に而して深刻に愛を酬いたい心から著者は新しい企畫の手始めに先づ此れを書いた『著者白』

○大賣捌所 東京神田表神保町（振替東京二七〇番） 東京堂

（中付一の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付一の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■類書中の白眉と世評を見よ■

●タゴールの來朝と本書の提供？

早稻田大學教授文學士 内ケ崎作三郎序
早稻田大學講師 吉田絃二郎著

タゴールの哲學と文藝

正價金壹圓貳拾八錢
郵稅金八錢

四六版上製美本全 紙數約六百頁

忽五版

東京朝日新聞曰くタゴールを紹介せしもの世既に多し然れども其の哲學と詩と人格との全面に涉りて斯の如く明快流暢にタゴールを語れるものは未だ之れなし。生硬の譯文半解の解說を秡んじて能くタゴールを本邦に知らしめ得たるもの本書を以て其の首めなるべし。新潮曰くタゴールに」關する著譯は隨分澤山出たが本書は其の中の最も尤なるものであらう。能くタゴールを消化した人でなければ斯く明快な叙說は出來ない其の哲學の部には『生の實現』の解說をなし其の文學の部には詩集」『園丁』『新月』の各數十篇を譯出し更に其戯曲『チトラ』『暗室の王』『郵便局』などの梗概を掲げてゐる、本書は往々他に見るやうな際物臭を少しも含んでゐない點に於て最も尊重するに足りる小說作家として名ある著者の筆一種の詩味あり。時事新報曰く叙述の明快にして併も細に入り微を穿ち醇々乎として說き行く所近來出版されたる多くのタゴール書中一頭地を抽ける良書なり。

東京第一高等學校教授 三並良譯

オイケン氏 人生の意義と價値

好評第三版出來

本書を讀まずして新思潮を語る勿れ——近時出版界の寵兒

菊判上製美本 金壹圓五拾錢 郵稅金八錢

（中付一の五）

東京市神田區表神保町七 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絕す

正則英語學校々主 齋藤秀三郎先生著

高評最新刊

熟語本位 英和中辭典

中判約千六百頁 総クロース洋綴全壹冊函入表紙意匠優美背金文字入装幀堅牢 定價金貳圓五拾錢 送費内地拾貳錢 支朝臺樺四拾錢

内容見本 申込次第進呈

(中付 一の六)

英和辭書に一新紀元を劃せる本書の世評一斑を示せば

▼國民新聞批評＝英學界の泰斗たる著者が所謂組織英語學の完成せる述作の一とも見るべきものにして特色と見るべきは先各單語の原義轉義譬喩的意義等各項を別ち順序よく配列して剴切的確なる邦語を以て其意義を表出せるは勿論語義變化の根本的因數たる聯想と類型との作用を歷然たらしめたる事他語との結合によりて生ずる特殊の意義は一々親切なる和譯附きの用例を示して適當の譯語を與へたる事動詞形容詞前置詞等は獨得の方法を以て其活用を一目瞭然たらしめし事發音は平易なる組織の下に片假名を以て之を示したる事等數々の點があるが就中熟語本位といふ事が特色中の最大出色の點で例へばGOといふ語の所を開けて見るに實に七頁の多きに亘つて各種の用法用例が示してあるに見ても其の一斑は察せられる英和辭典中未曾有の異色として英語の眞髓を究むる爲めの鍵として英語學生に推奨して甚だ可なるものである。

▼時事新報批評＝學生が習學上最も困難を感ずるは動詞の使用法也然るに動詞は單獨に動く者に非ず必ずや補足語的構成法を有す此構成法こそ吾人の所謂熟語なり國語中如何に重大の地位を占むるかは火を睹るよりも明白なる事實にて英學生が之を習ふに汲々たる亦宜也本書は我國英學界の重鎭たる著者が多年の實際的經驗を元に凡ての冗漫なる不要を省き要語は收めて漏らすなく之に一見直ちに要を得る譯語を施せる者發音は片假名に特異の符號を註し細微なるアクセント迄も指示し熟語の動には他動、自動の別を明かにし特に或る特殊の物に限りて使用せらるゝ言葉には一々之を括弧に入れて記入せるなど用意周到を極めたり夫れ著者が前置詞の用法に至りて世界の語學界に定評あり蓋し學生修學上の一大寶典に均し。

發兌 東京神田 正則英語學校出版部 日英社 振替東京二六三三一 電話本局一二五二

江戸文化史論

笹川臨風

一、江戸文化の特色

推古朝以後奈良朝の間に將來した支那の文化が、國民的自覺に依りて、平安朝の文化を作つたとすれば、鎌倉室町時代に傳來した支那の文化は國民的自覺に依りて江戸時代の文化を作つたと云ひ得るであらう。云ふまでもなく、推古朝以後奈良朝の間に將來した支那の文化は隋唐の絢爛なる文化であつて、鎌倉室町時代に傳來した支那の文化は宋元の理氣を主とした文化である。

隋唐の文化は多く學問僧若くは留學生に依りて將來された。しかも佛教は其大なる媒介者であつた。顯教前に入り、密教後に來り、朝廷の歸依を得、人心の秘鍵を握り、一時は政教混同して、國家の變を生ずるに至つたが、神佛混同本地垂跡の方便が行はれたがために、佛教は平安朝に入つて日本化することゝなつた。要するに推古朝以後奈良朝及平安朝の文化は佛教中心の文化であつて、佛教を離れて文化はなかつたと云つてよろしい。日本上代の文化の大恩人なる聖徳太子は佛教の保護者で、太子即佛教と云ふ有樣で、太子が萬機を攝せられた推古天皇の二年二月には三寶興隆の大詔があり、其十二年に諸臣に頒ち給はつた憲法十七條の第二條には、「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、

則ち四生の終歸、萬國の極宗なり、何の世何の人か、是の法を貴ぶに非ざらん、人尤も惡きは鮮し、能く敎ゆれば之に從ふ、其れ三寶に歸せざれば、何を以てか枉れるを直せん」と敎へられたのである。政敎混同の端緒は既に開かれて居る。其混同の極端なるは聖武天皇であつて、自ら三寶の奴と稱し、弟子勝滿と仰せられた。天平十五年十月の造盧舍那佛の詔にも、「率士の濱は已に仁恕に霑ふと雖も、しかも普天の下未だ法恩洽からず、誠に三寶の威靈に賴り、乾坤相泰かに、萬代の福業を修め、動植咸く榮えんと欲す」と宣うて居る。此の佛敎萬能の弊害は稱德天皇の朝に現れて、「帝の出家しています世には、出家してある大臣もあるべし」とて、弓削道鏡は大臣禪師となり、「遂に太政大臣禪師より法王となり、其末、皇位を覬覦するに至つたのである。しかし之は佛敎崇敬の極起つた弊害で、其後に至りては、もう斯やうな弊害は無論起らず、佛敎は依然として盛であつて、佛敎中心の世として過ぎつゝあつたのである。されば佛敎の信仰を度外して當時の文化を論ずることは出來ぬ。

けれども時代の過ぎ去るとともに、政治に、經濟に其他百般事物の上に變化が到來し、人間の思想の動搖を來した。後の宗敎は唯に形骸のみになつて其精神を失ひ、又人間に慰安を與へるだけの權威を有たない。そこで鎌倉時代に入ると、新佛敎が勃然として起つた。其新佛敎の流派は少からずあつたが、當時の權力者であつた武士階級に信仰せられた禪宗が直接に最も當代以後の文化に關聯して居る。

鎌倉以後の學權は、全然禪僧の握る所であつた。南宋にて杭州の徑山・靈隱・明州の天童・杭州の淨慈・明州の育王を以て五山となした例に準じて、鎌倉に建長・圓覺・壽福・淨智・淨妙の五山あり、京都に天龍・相國・建仁・東福・萬壽の五山ありて、南禪寺が其上に位した。此等五山の僧徒はいづれも學德があつて、搢紳武家の渴仰する所であつた。夢窓國師の足利尊氏に於ける、義堂・絶海の足利義滿に於ける、政治の諮詢に應じて機務に參與して居る。特に五山文學は學燈の將に滅せん

とする世に於て、暗夜を照らして居たのである。絶海の蕉堅稿・義堂の空華集・祖應の旱霖集・圓月の東海一漚集・雪村の岷峨集・天岸の東歸集・虎關の濟北集・一休の狂雲集・天隱の默雲稿・桂稿の島陰漁唱集・景徐の翰林葫蘆集・周興の半陶稿・萬里の梅花無盡藏・月舟の幻雲稿等はいづれも五山文學の生粹であつて、我が文學の未だ地に墜ちざるを證明して居る。金澤文庫も五山緇徒の手に依りて管理せられ、足利學校も禪僧が世々其都講であつた。

當時支那へ使節となり、若くは留學生として赴いたものは此等の禪僧であつて、宋元の文化は其手を經て將來されたのである。宋元の文化と禪とは共通の點がある。直指頓悟の禪宗は形式よりは精神、情趣よりは氣を尙べる宗元の文化と似た所がある。禪僧の手に依りて將來せられ傳播せられた宋元の文化は我が室町時代の文化となつた。是に至つて室町以後の文化は宋元の文化が唐の文化と異るが如く、著しく前代の文化と相違したのである。

去かし此宋元の文化、禪宗は茶道に依りて一層普遍的に平民的にされた。茶道は宋元の文化禪などを、極めて平易にして、之を一般階級に通じ行つたものである。茶道の盛に行はれたるは東山時代を始めとすべく、老談一言記にも「茶の湯の事、東山殿の數寄屋好み給ひしより起る事なり、其比將軍家諸大名に常に心安く打解け給ふべき樣もなければ、五山の僧を常に御前に召されけるに、或人の云、今下々に茶湯といふ事を興し侍りぬ、其道を得し人は、珠光と申僧侍ると申上しかば、さらば其者召せとて、これより出頭して數寄屋の法制など定りし事なり」とありて、茶道と禪僧とは淺からぬ關係がある。一體茶は支那から禪僧に依つて舶載されたもので、平安朝の世に傳敎大師が將來したと云ふことであるが、之は確說でなく、鎌倉時代に僧榮西が傳へてから、廣く行はれたのである。榮西は喫茶養生記を著して、盛に茶の功德を唱へて居る。茶道が普及されて、茶の趣味が國民の間に行き渡つて來たから、日本の文化國民の趣味は此に新面目を開くに至

つた。
　室町から、安土桃山になると、茶道は層一層に盛になり、あらゆる階級を通じて之を弄ばざるものなしと云ふ有樣になつた。天正十五年十月朔、絕代の英雄關白秀吉が催せる、北野の大茶會の規定中には、
一、茶湯熱心に於ては、また者、若黨・町人・百姓以下によらず、釜一、つるべ一、呑物一、茶なきものは、こがしにても不苦候間、提來可仕候事。
一、座鋪之儀は、松原にて候間、疊二疊、但侘者は、とぢ付にても、いなはきにても苦かる間敷事。
一、日本之儀は不及申、數寄心懸有之ものは、唐國の者までも可罷出候事。
の條項があつて、其大茶會は茶道の本旨に適當した至極平民的な、コスモポリタンのものであつた。
　茶道趣味の上に立つた日本の新文化は、室町に始まり、安土桃山を經て、江戶に至り、國民的自覺に依つて、十分に生育し、大成したのである。茶道趣味の文化と云ふは、宋元の文化と禪及儒附け加へれば武士道の混一したもので、此等の諸原素を平民的にした文化である。江戶文化の特色は此に存する。

二、上方の文化

　太宰府の商權が衰へると、泉州堺が商業の中心地となるやうになつた。之は室町の季世頃のことで、大內義弘が此地を領したるより始まつたことゝ思はれる。大內氏は關西の雄鎭で外交のことを掌り、明國より勘合符を得て、貿易の利權を獨占して居たのである。義弘は周防・長門・石見・豐前・和泉・紀伊六州の守護となつて、富强、幕府を傾けんとする程であつた。此義弘の力に依つて堺の商業は繁榮して、室町季世より、終に江戶の初世に及だ。其間の變遷に就ては綠亂記之を詳にして居る。「又應永の頃、大內左京の大夫多々羅の義弘領し來て、再び津を開き、吳・越・三韓・南蠻と好みを結び、遊びに商船を通じて、家增し、民富んで、一都會をなす、今蕃船至らずと雖ども、尙餘温ありけるは、此故とや、大永年中には足利左馬頭義維今此所におはしければ、人皆堺の御曹司と申せしなり、其後は、

阿州の三好此れを領して、舍弟十河一存、代官として近國を支配す、大永元年三月勅して、政所の號を三好長基に賜ふ、此時よりして享保の今に至るまで、奉行所を政所殿と稱し奉るとかや、織田の内大臣平の信長公、天が下しろしめしける頃は、丹羽五郎左衛門長秀、松井友閑など奉行をいたされぬ、大坂の大臣豐臣秀吉公の天下には、石田隱岐守成政、小西攝津守行長は奉行せり、天正十四年より同十六年までは石田治部少輔三成ぞつとめける、天正十七年は大谷刑部少輔吉繼、天正十八年より文祿二年までは富田庄左衛門政證、其祿六百石、文祿二年より慶長四年までは石田木工之助、慶長四年より同十七年に至りては成瀨隼人正正成支配にて、攝津靖左衛門と云ふ人は代官となり來りぬ、同き十八年は朝倉藤十郎定重、其祿六百石、同十九年には芝山小兵衛、祿八百石、元和元年より同五年まで長谷川左兵衛尉守尙、此時堺、元和の兵火に燒れ悉く灰燼となりしに、かたじけなくも御當家の御利運ひらけ、天下を掌握なされしかば、始めの地を其主へ返し給はる」(紛亂記)。魚屋助右衛門などの外國貿易商が此地に出たのも偶然でない。江戸の二代將軍秀忠の時代までは京、長崎とゝもに堺は糸座であつて、生糸の專賣權を有して居た。

難波津の高津宮、平相國清盛の兵庫港時代は餘りに事古りて居るが、天正年間、豐臣秀吉が大阪に築城してから大阪は次第に繁榮に赴いた。けれども當時の町數はまだ六十六ヶ所に過ぎなかつたと云ふことである。慶長元和の戰役があつて一時此地は荒廢したが、元和偃武以後、城郭を重修し、松平下總守忠匡此を領して、伏見の市民二百餘町を移した。大阪商業慣習錄に依るに「此時新主松平下總守は、總年寄の先祖安井道頓なるものに命じ、東は東横堀より、西は西横堀、南は三津等の近邊迄、方四百五十間餘の地へ家屋を建設せしめ、勉めて離散の人民を引戻し、而して東横堀より木津川口迄の荒地を安井道頓に與ふ、因て道頓は、南横堀の細流を廣濶ならしめ、其兩側へ幾多の家屋を建築し、今の勘四郎町の劇場を移し、以て土地の繁昌

を計る、さて道頓は南横堀を疏通せしかば、其功を永く後世に傳ふべしと、新主の命により、之を道頓堀と名付たり、此頃市人には金銀尤も少く、町々家造の模樣も表通りは皆藁葺にして、往々畑地明地を挾み、裏地は全く菜圃田園のみなりしが、斯く市政に力を用ひしにより、漸を追て復舊するに至れり、後五年二月五日、下總守は封を大和の郡山に移され、大阪は全く德川氏の直領する所となり、重ねて外郭を修理し、爰に城代及東西の町奉行等を置き、滋々市政に力を盡し、寛永十一年閏七月、地子銀（此時免除せし大阪市中地子銀高一萬一千百八十三石四斗餘にして、爾後諸役割等は、猶此高割を以て比例とせり）を除き、又二十分一帳切銀を免じ、一町限り之を下賜し、大に商業を奬勵せり、此に於てか遠近の商賈移住するもの多く就中尤も多きは、近江の西南部、京都・伏見・尼ヶ崎・奈良・松坂及び堺等とす、殊に堺は古へ外國の互市場にして、頗る繁盛の地なりしも、互市の事は日に衰へ、剰へ大坂の商運次第に進歩するを見て、其過半は皆大阪に來り、市民彌々、增加して、遂に四垂の地と雖も、尺寸を爭ふに至れり、かくて明暦元年には、水帳を改正し、市畫の區域を改め、其市制の萬般を定めたりしも、市民滋々增加し、元祿元年に至りては、更に寺島安治川を開發し、上下難波村、堂島、御池通等をも、この時市中に交入し、同十一年には堀江、幸町、古川、富島等を開發し、寶永五年には曾根崎三町を開發し、延享五年には、高津新地九町、南瓦屋町等を開發し、其後又難波新地をも開發する等の如く、屢々郊外の地を以て市區に編入し、更に土地繁昌の爲、或は劇場を差許し、或は遊里茶屋等を取建て、「大阪は商業の中心地となつた。即ち地子銀赦免が本で、大阪は次第に繁榮の基を作つたのである。」地子銀御赦免被二成下一候を以て、往古表藁屋葺、裏明地作物等致し、金銀町人には拂底の處、次第に繁花の地に成、地面寸尺法を爭ひて、及二建家一候、尤往古はおだれと申は無レ之、上見せを突上庇に致し候、其後庇延つぎ御免に成、板屋根の義火用心の爲本家おだれとて、隨分瓦葺に致候樣能成候由、是

全地に御赦免、町人身上の基立と相成、及二繁榮一候、」(堂島舊記)。しかし大阪は西の方、山陽、山陰、九州、四國と云ふ殷富なる後援を有して、其咽喉を扼して居るから、從つて商繁昌し、富の度は年とゝもに加はつて來たのである。其商業の世につれて、繁昌して行ける有樣は、本朝町人鑑に「何につけても金銀なくては、世にすめる甲斐なき事は今更云ふまでもなし、諸町人其合天はして居ながら、身の一大事を忘れ、いつも月夜に釜を拔かれ、借錢乞と無理の口論、大節季の闇とは元日よりはやしれけるぞかし、今の世に商ひ事なき人毎にいへり、是は大きに算用違ひ、むかしとは各別諸商賣多し、其ためしには大阪の堺筋に、椀折敷重箱よろづぬり物屋ありしが、親の代寛永年中の古帳出して見るに、一年の賣物七貫に足らず、此利あいにて上に六人口を過して、それ〳〵の正月きる物餅も世間並につきて、萬の諸拂ひも極月二十五日より二十八日までにしまひ、晦日には年わすれとて隙なる年寄友達をよびあつめ、小鴨の汁に鰤の燒物にて振舞ひ、酒のうへの大笑ひ、すこしも心にかゝる事もなく內證しまはれけるに、今我代になりて親仁の時よりは商ひ大分にしまして、每 四十貫目餘賣帳、人も其時とはまして十八人口になれば、以前より世に商ひ事のないとはいはれざりしに、年々手づまり兩替屋より日借の小判二日切の手形銀二割の利銀をかまはず、先請込て當座拂に埒をあけ、門は禮者の通るまで天秤をならし、やうやう仕舞て嬉しやと革袋枕に殘る物とて惡銀ばかり十八匁戶棚掛硯には錠もおろさず錢さしの塵もはかず、掛乞ひの呑捨たるたばこ盆しだらくに、ともし火かはらけの中に燃入る、我身も覺えず鼾をかき、夜の明がたまで目のあくものはなかり」とあるが如く、一般に活氣を帶んで來たのである。大阪に富が吸收されると共に、大阪商人は、次第に贅澤な生活を營んで來た。固より町人であるから、此地方には、平民の勢力が盛んになつて來た。從つて大阪の富によりて作られたる上方の文化は、平民的文化であつた。硬文學よりは軟文學、貴族的藝術よりは、平民的藝術が起りたるは、

固より偶然でない。

菱垣船を以て、關西の物産を江戸に送り、又諸國へ、需用の物品を廻送したる大阪、寛永二年には、三郷(北組、南組、天滿組)の人口二十七萬九千六百十人であつたのが、寛文九年には、四十萬七千三百〇四人と增加したる大阪は、平民的娛樂の機關として歌舞妓芝居、操つり芝居、機關芝居を有し、新町九軒の揚屋、傾城屋を有する大阪となつた。斯くの如き平民の勢力ありたる大阪には、これが需用に應ぜんが爲めに、幾多の平民的藝術家が集中した。大阪の勢力の最も盛んであつた元祿、上方の文化の絕頂であつた元祿頃には、竹本義太夫、井原西鶴、近松門左衛門等を出すに至つたのである。

京都は、歷代の帝都であつて、武家が鎌倉に覇府を開いたるがために、一時其實權を失ひ、名のみの所在地であつたけれども、足利氏は、吉野朝廷に備へんが爲め、幕府を京の室町に開いたのである。應仁以後の亂離に、洛中洛外の古刹殿舍も概ね兵燹にかゝりて其燒くところとなり、文化一時地に落ちたるも、猶流石に遺香餘芳の存したるものも無いではなかつた。織田信長の安土も、豐臣秀吉の伏見桃山も、何れも時代は短くあつて、戰國の餘習も未だ亡びざる時代ではあつたが、京都に接近したる所であるから、其文化は、京都の文化を受け繼いだものであつた。然るに、德川家康になると、幕府を關東の江戸に開いたのである。京都とは、其間相去ること一百里、地理的より見れば、風馬牛相及ばざるものがある。

關東は、古來文化とは緣遠いところである。室町時代には、金澤文庫あり、足利學校あり、上州白井の學校あり、太田道灌の好學はありたりといつても、文學の衰微したる當時であつたから、これを珍とすべきではあるが、天下の文運からいひ、日本の文化からいへば、ほとんど滄海の一粟に過ぎ無い。

德川家康は、馬上を以て、天下を治むべからずを知り、當時の學者藤原惺窩・林道春・南禪寺の三長老・東福寺の哲長老・清原秀賢・水無瀨親留・三要・兌長老・天

海等を好遇して學を講じ群書治要・大藏一覽・北條本東鑑・貞觀政要・孔子家語・武經七書等の書を刊行し、諸家に秘藏する舊事記・古事記・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄・國史・類聚國史・律令・三代格式・類聚三代格・百練抄・江家次第・新儀式・北山鈔・西宮鈔・令義解・政事要略等を始め、種々の古書を謄寫せしめて、江戶文化の移植を計つた。然し、創業の際であるから一般から云ふと武に偏することはまぬかれない。依然として、京都に文化は存在して、江戶には未だ其發達を見なかつたのである。然し、江戶は、年と共に盛んになると、京都は、年と共に衰へ、江戶の實權が範圍となるに從つて、京都は、次第に名のみの所有地となるは當然である。しかし大阪の文化が平民的なるに反して、京都に存在したる文化は貴族的であつた。浮世草紙淨瑠璃は大阪の產物で、儒學國學は京都の所有地である。江戶は上方の文化を移植するに於て、此兩者を合せ傳來したのである。幕府の歷代將軍が鋭意移植したるものは京都の文化であつたが、江戶の盛んなるにつれて、江戶の平民級も活氣を生じ、從つて大阪の文化を輸入するに至つたのである。

戰國時代に當りて、門閥制度は打破せられ、階級の區劃は、取り除かれることになつた。室町時代には、下剋上の風が盛んで、將軍の權力は管領に移り、管領の權力は執事に移り、執事の權力は配下の役員に移るといふやうな狀態であつて、其極、亂世になると共に、赤手にして、風雲を起す者あり、裸一貫で一國一城の主となる者もあり、伊勢新九郎は、一介の武人を以て、遂に關東に虎視耽々たる基を作り、斯波氏の被管織田信長は、天下布武の業を開き、氏もなく素生も無き豐臣秀吉は、位人臣を極むるに至つた。かういふ機運は、必ずしも武士階級ばかりでは無い。平民級にも傳播して、到るところに、新しい成金を生じたのである。士農工商の階級は存在し、武家と平民との間には、儼然たる間隔が存在してゐたけれども、富の力を有する平民は、諸侯及武士に取つては、少からざる後援者であつたがために、平民の勢力は、なかなかに侮り難いも

のがあつた。

江戸時代を通じて見ると、平民級の勢力を得たる時代であるし、茶道の趣味が普及せられて、國民趣味が、淸新の氣を帶びた時代であるから、其文化も、一般に平民的文化であつた。鎌倉時代にも、鎌倉幕府は、能く民政に注意し、執權北條泰時も時賴も、心を民事に盡したが、武家政治の江戸時代も、民は國の基たる事を最も能く了解してゐたから、平民は、王朝時代のそれと異つて、頭を擡上げたのである。されば、大阪に發達したる平民的文化は、江戸に傳來して、江戸に於ける平民的文化を作り上げ得たのである。

京都の文化は、貴族的文化ではあつたが、次第に名のみの所在地となると共に、其文化にたづさはれる人人も、多くは、實權を離れて、名の所有者となつた。これを儒者にして見ても、帷を下して諸生を敎へはするが、政治の實際に參與することを敢てしなかつた。王侯に事へずして、其事を高尙にするといふを以てこれを理想とし、又これを實現したのである。一體儒學は經世濟民を理想とし、修身齊家治國平天下を主義としてゐて、唯に理想を說くばかりでなく、これを實行するを以て、本旨としてゐる。これを儒家の開祖たる孔子に見るも、孟子に見るも、皆其主義理想を實行せんとしつゝあつたのである。然し、これと同時に、易姓革命の支那は、邦、道あれば則ち進み、邦、道無くんば則ち退くといふ事を奬勵して、處士氣質即ち浪人氣氛を稱揚してゐる。故に漢學を研究した者は、政治の實際にあづからずんば其處士氣質を飽く迄も發揮して維持したものである。京都の儒者は概ね此處士氣質を發揮して、松永尺五は塾を開いて諸生を敎授し、山崎闇齋も、其晩年には會津侯に事へたけれども、曾ては京都に於て處士として育英に從事してゐた。伊藤仁齋に至りては、一代の儒家であつて、復古學を唱道し、學徒を敎ふる事四十餘年間の長きに至つた。其子の東涯も堀河塾を受繼いで天下の學に志す者をして、其向ふところを定めしめた。仁齋と好敵手にして、豪傑を以て自ら任じてゐた物徂徠の門人なる太宰春臺す

らも、學の師傳によらざること、仕へざる事、子に束涯ある事を以て、我が徂徠先生の仁齋に及ばざる點と稱してゐた。處士文學、浪人文學は、即ち臺閣文學では無い。江戸の學者が、實際政治に參與し、幕政の爲めに辨ずるとは違つて即ち自由である。自由には階級無く門閥が無い。京都の學者の研究し、講說するところは、即ち野人の聲であつた。

文化の潮流は、僅かの罅隙を求めて、注ぎ込むものである。況んや上に歷代の將軍がこれを移植するに努むるに於ては、上方の文化は一瀉千里の勢を以て、江戸に殺到せざるを得ない。江戸の文化は、即ち上方文化の受繼である。然しながら、上方と關東とは異る。其地勢に於て、其氣質に於て、其風俗人情に於て異る。上方の文化は、其儘に江戸の文化とならず、江戸の地勢、氣質、人情風俗は、これを江戸化して、江戸の文化は、即ち大成したのである。

三、文化の東下

德川家康は、人の一生を以て重荷を負うて遠きに行くが如きものであると稱へた人である。幼少より艱難辛苦の間に人となり、あらゆる人生の悲慘を嘗め盡し、これに打ち勝つて大成功をしただけあつて、執着心も深く、忍耐に忍耐を重ね、勤儉を重じて克己心に强くあつた。蒲生氏鄉は曾て家康を評し、天性鄙吝にして天下の器にあらずと言つた。又曾て家康は三河にて御家人に云ひ渡すには、妻を迎ふるには、能く木綿を織り得べき女を求めよとの事であつた。又或年の冬に、織田信長から桃を一籠贈つて來た。近臣共、これは珍らしとて、とりどりもて囃したるに、家康は、唯見たのみであつて一言もの云はず、諸人、いぶかしと思ひたるに、軈て家康の云ふやう、わが如きものは、珍らしきものを好むとなれば、害あつて益がない、果實も異なるものを好まば、國中の良田は、無益のものを植ゑて、其結果民力を疲らしむることになる。珍禽奇獸を好まば、山林河海に無用の金銀を費すことになる。奇巧の器財を好まば、軍國の用度を耗して、士卒を養育する事が不足になる。織田殿の如き大身はともあれ、

われには、他に急事があるとて、笑つて其桃を人々に分け與へたと云ふ事である。家康は、萬事此樣な筆法で、桃山の豪奢を見ても、取つて訓戒とこそは、したが、自らは決してこれに倣はなかつた。東山の翫物喪志も、家康にとりては、大なる訓戒の材料であつた。若し家康をして、太閤の贅澤生活を見倣つたならば、恐くは天壽を完うすることを得ず、遂に天下を取り得ることが出來なかつたかも知れない。家康の父祖の壽命から推すと、決してかゝる長命を得る人ではなかつた。其長壽を得たる所以は、畢竟するに家康が簡易生活をして、心身を鍛練したるによる。であるから、家康と後世の江戸兒氣質とを比較すると、非常なる逕庭がある。又、三河武士を見渡すと、これ又家康と艱難を共にした連中であるから、何れも勤儉にして質素を重んじた　である。江戸兒肌とは大分違ふ。若し家康及び三河武士と共通の點を見出さんとすれば、先づ共任俠の點ででもあらうか。然し必ずしも任俠の風は、三河より江戸に輸入されたものでは無い。又家康及び三河武士は、必ずしも任俠の風があつたとも云へない。けれども、艱難辛苦の間に人と爲り、齊楚の間に介在したる小國民の事とて、樣々の憂い目辛い目に逢ひたれば、弱きを助け強きを挫くと云ふ精神は、自から養成されてゐる。後年大阪に對する處置は殘酷を極めて、世間の非難を受け、如上の精神とはいたく相反してゐるが、然しこれは家康が寄る年波と共に、短氣ともなり、且つは行先の永からぬ其間に、片をつけやうといふために、あせりにあせつて、かゝる殘忍を極めた事であらう。けれども、小牧の役も一種の義俠心とも見るべく、武田の遺臣に對し、將た亡び行く名族の遺孽に對しても、慈悲寬大の處置を取つてゐるのは、これ又任俠心の發露とも見れば見得るのである。然しこれも強ゐて江戸兒氣質と權現樣及び三河武士との間に共通の點を見出さんとしての辯であつて、實際は、家康三河武士と江戸兒との間には、何等共通の點を見出さぬと云ふが至當であらう。

然らば江戸兒氣質は、何處から由來したかと云ふに、

關東の地が自から作り出し、歴史が之を大成したものである。上州の長脇差氣質、野州の氣の荒い郷土性は、何れも江戸兒の原始性である。江戸兒は、これら關東の郷土性をレファインしたものに外ならない。此に上州人の代表者として、新田義貞と、野州人の代表者として、足利尊氏とを取つて見れば、此兩代表者が有する特性は、江戸兒もこれを有してゐる。義貞は、情に脆くして任俠の風があり、親分氣質を充分に具有してゐる。氣前が好く、宵越の錢を持たずに頗る心持の綺麗なところは、足利尊氏確かに江戸兒の親分たるに足りる。義貞は、命を惜まず、短氣にして、遠謀深慮に乏しい。此點は江戸兒の有するところではないか。夢窓國師が尊氏の三德を賞めて「第一に御心强にして、合戰の間身命を捨て給ふべきに臨む御事度々に及ぶといへども、咲を含んで、怖畏の色なし。第二に、慈悲天性にして、人を惡み給ふ事をしり給はず、多く怨敵を寛宥有事一子の如し。第三に、御心廣大にして、物惜の氣なし、金銀土石をも平均に思し召して、武具御馬以下の物を人々に下し給ひしに、財と人とを御覽じ合はする事なく、御手に任て取給ひしなり。八月朔日などに、諸人の進物其數を知らずありしかども、皆人に下し給ひしほどに、夕に何有るとも覺へずとぞ承はりし」とあるは、これ又江戸兒に共有する性質と類似して居るではないか。して見ると、江戸兒氣質の根本は、關東人の氣質より起つてゐる。

武藏野に天下の實權が移つてから、諸國の人々子來し、幕府の下にあつて、武士的感化を受けた。けれども、文化の點になると、どうしても、上方よりこれを仰がねばならぬ。將軍も移植に盡力したがために、又世々の將軍が其配偶を京都の堂上家より求めたるよりして、上方の文化は、潮の如く江戸に向つて傳來した。然し、庖刀の冽えた味は、田舍人の口には適せぬ。三好家の洗練した料理は、織田信長の口に合はなかつたのである。柔弱なる雅やかな上方の文化は、豪健にして殺風景なる江戸當初の士民には、其儘に受取られなかつた。上方の文化は、先づ江戸風の洗禮を受けて、

江戸化される必要があつた。かるが故に、薩摩淨雲が東下すると、其門人の櫻井丹波少椽は、金平節を始めて、武勇なる江戸の人氣に投じた。淨瑠璃姫十二段の艶事(つやごと)は、到底江戸人士の喝采を博することは不可能であつた。上方には、女形の名人が輩出したが、江戸には荒事の名優を出した。江戸人士は、水木辰之助の女形よりは、丹前役者の隨市川の團十郎を喜んだのである。萬屋助六の心中劇は、江戸に下れば廓の達引を主題としたる花川戸の助六と變じた。特に武俠を向びたる氣象は、不良武士團を作りて、所謂旗本奴となり、平民の勢力は、これに對して町奴を作り出し、男伊達の風を養成して、一般に任俠を歡迎したのである。

「東の方平地の分は、こゝもかしこも汐入の葦原(あし)にて町家武士屋敷を、十町と割りつくべきやうもなし、扨又西の方は漠々と、萱原武藏野へつゞき、何處をしまうといふべき樣な」(岩淵夜話別集)き江戸も、家康の入國より三河遠江等の御家人次等に邸宅の地を賜はり、町家も、次第に建設せられ、其後駿河の御家人等も此地に移り、山を崩し、海を埋め、町を建て、延寶七年の春、江戸を改めた時は町の數八百八町であつたが、其後延享四年四月江戸町を改めし時には、千六百七十八町と見えてゐる。茫漠たる武藏野も、時代の降下と共に次第に榮え行きて、遂には實に於ける日本一の都となつた。

上方の文化は、江戸に東下したけれども、元祿頃迄は、なほ上方文化の旺盛なる時代であつた。初代二代の將軍時代は、猶創業の際であつて、江戸の形勢は、混沌たる狀態を維持してゐた。三代將軍は、生れながらの將軍で、幕府の權威を擴張せん事を努めたのは、猶恰も室町の三代將軍が、幕威宣揚に努めたのと稍類似してゐる。然し江戸の三代將軍薨去の際も、四代將軍御他界の時も、浮說百出して人心の動搖を免れなかつた。四代將軍の時には、由井丸橋の騷動あり、引き續いて增上寺事件のあつたを見ても、幕府の基礎は、動かすべからざるものではあつたが、執政有司の苦慮焦思を要すべきものが多々あつたのである。江戸は未

だ充分に太平の餘澤に霑うて文化の光に浴するには至らなかつた。まだ上方の全盛時代で、江戸は幼稚なる狀態であつたのである。

元和偃武を去る事六十年は、即ち元祿年間である。上に將軍綱吉あり、代を經る事方に五代。其初政に當りては、鋭意治を圖り、其好學なるは、盛んに文化の移植を圖つたから、上方文化は、層一層の勢を以て、江戸に傳來した。殊に此前後は、上方文化の最も絢爛を極めた時代であつて、慶長元和の戰亂に依つて、一時に打擊を受けた上方も、全く其力を恢復し、財界も順調となり、富の程度も加はつたから、文化も從つて向上したのである。即ち上方は盛んになり、江戸も亦盛んになつた。上方の文化は、先づ此時代を區劃として、江戸化せられて、此以後は、江戸の文化始めて觀るべきものがある。如何に江戸が此時代に於て盛んになつたかは、胸算用に、江戸の歳暮を叙した記事に依つて說明される。

さる程に十二月十五日より、通町の繁昌、世に寶の市とは爰の事なるべし、常に賣物店は捨置いて、正月の景色、京羽子板、玉ぶりぶり、細工に金銀を鏤め、破魔弓一挺を、小判二兩などにも買ふ人ありけるは、諸大名の子息に限らず、町人までも萬に大氣なる故ぞかし、町筋に中店を出して、商に暇なく、錢は水の如く流れ、白銀は雪の如し、富士の山影豊かに、日本橋の人足、百千萬の車の轟くに聞きなしたり。船町の魚市、毎朝の寶帳、四方の海ながら、浦口に鱗の種もある事よと沙汰し侍る。神田須田町の八百屋物、毎日の大根、里馬に附け繼ぎて數萬駄見えけるは、兎角畠の歩くが如し。盤切に移並べたる蕃椒は、秋深き龍田山を、武藏野に見るに似たり。瀨戸物町、麹町の雁鳧、さながら雲の黒きを地に生へたるが如し。本町の呉服物、五色の京染、屋敷模様の散し形、四季一度に眺め姿の花の色香ぞかし、傳馬町の積綿、三吉野の雪の曙の山々、夕には提灯連り、道明かに、大晦日の夜に入りて、一夜千金家々の大商ひ、殊に足袋、雪踏は、諸職人萬事買物の

納めにして、夜の明方に調えに來たり、一年江戸中の店に、雪踏が一足、足袋が片足ない事あり、幾萬人履けばとて、かゝる事は日本第一、人の集り所なればなり。宵の程は一足七八分の雪踏、夜半過には一匁二三分となり、夜明方には一足二匁五分になれども、買人ばかりにして賣る者なし。一年懸小鯛二枚十八匁づつせし事もあり、橙一つ金子二歩せしに、高うて買はぬといふ事なし。京大阪にては、相場違ひの物は、設へ祝儀の物にしてから、中々調ぶべき人心にはあらず、爰を以て大名氣とはいへり。

四、元祿と文化文政

東山時代の文化は宋元文化と禪との影響を受けて、貴族的に、濟如として、佗しく寂びた趣があつた。桃山時代の文化は太閤の豪華、時代の勇壯に影響せられて雄渾の風を帶びて居た。けれども流石に茶道趣味の普及された世とて、自ら其うちに雅致の有するものがあつた。江戸の初期は猶桃山時代の系統を引きついで居る。殺伐の世を去ること久しからざる事とて、猶豪壯の面影を有して居た。元祿の文化が華やかであつたが、雄大なる趣の有する之が爲めである。

しかし桃山と元祿とは異る。周文雪舟に依つて其文化の特色を代表すべき東山は、桃山に至りて、桃山百雙屛風に見るが如き文化となり變つたのである。狩野永德の刷毛は金碧燦爛たる裡に淋漓たる潑墨を見せて居る。しかし桃山百雙屛風の文化は、德川の初期に至ると、狩野派に土佐風を混じて、妍麗の裡に雅趣ある光悅となり、逸宕にして、沈厚なる宗達となつた。時代は確に國民的自覺を現して居る。狩野元信は宋元の畫風と土佐流の畫風とを近づけたる、初頭の人で、國民的自覺の稍々生ぜんとするのを現して居るが、其畫風は猶支那に近くして、國民趣味には遠かつて居た。光悅宗達に至ると、まさしく國民の新趣味の上に立脚して、國民的自覺を十分に發揮したのである。江戸の寛永頃の文化は實に斯くの如くあつた。

元祿は光琳に依りて代表すべきである。光悅宗達より出でゝ、更に文化の向上して居るを示す。光悅宗達

は自然に近い所があつたが、光琳になると、既に人工の妙所に到る。濃艶華麗を極めて、しかも豪放の所がある。不調和の裡に調和を求め、不自然の裡に自然を得る。寫生より出て、寫生を離れ、寫意を標榜せずして寫意の深奥に達して居る。純正美術の境よりは寧ろ工藝美術の區域に入らんとして居る。時代は光琳に反映し、光琳は又時代に反映して居る。元祿の文化なるものは斯う云ふものであつた。

元祿の文化は未だ洗煉されて居らぬ。どこかに鄙俗の所がある、不調和の處がある。けれども大まかである、こせこせして居ない。野性の所がある、露骨の所がある。華やかではあるが其の華やかさは纖麗でなくて、豪壯であつた。肉體快樂を赤裸々に告白し、希望し之を實現した時代であつた。清新の氣に富で活氣を帶て居た時代であつた。獨り政治のみが緊張したのでなく、富の著しく增加した時代であつた。富が加はりて、成金が多くなりて、一般に贅澤を喜ぶ時代であつた。「世につれて、次第に奢がつきて、人の見知るほどの大臣は、肌著に隱し緋むく、上には卵色の縮緬に、忍び入の數紋、帶は薄鼠のまがい織、羽織はごろふくれん、くろきに、鳥天鵞絨の裏をつけ、町人ごしらへ、七所の大脇差、すこし反して、あい鮫を懸け、鐵の古鍔ちいさく、柄長く、金の四目貫うつて、鼠屋が藤色の糸、平印籠に、色革の巾着、瑪瑙のふたつ玉、唐木細工の根付、扇も十二本、祐善が浮世繪、こぎくの鼻紙、運齋織の袋足踏、巾ぬきの細緒をはき、大草履取に、笠杖持たせて、名ある太鼓のつくこそくらがりにても御女郞買としるぞかし」（好色一代男）と、無暗に贅澤がつた時代であつた。奈良朝平安朝時代の佛敎信仰を中心としたる文化ではなくて、茶道趣味の上に樹てられたる文化であるが爲めに、人生及び世間に對しては、極めて單純なる淡白なる觀察を下したる時代であつた。

桃山時代の濶達なる影響を受け、上方の富の勢力に養成せられたる上方の文藝は、俳壇に於ても談林調に、奇拔にして豪華なるものを出した。俳諧は、一度松永

貞徳によりて再興せられたけれども、寧ろ甚だ平凡のものであつた。それで新しい機運に乘じて起りたる西山宗因は、新詩形新思想を創めて、時代の要求に應じたのである。一時天下の俳壇は、談林調の吹き靡くところとなつて、「さればこゝに談林の木あり梅の花」と、宗因が詠みたるは、軈て「梅の風俳諧國に盛んなり」と、信章が誇りたるが如き景氣となつた。けれども、談林調の弊は滑稽諧謔に流れ、輕口に陷り、時人の厭忌するところとなつた。茶道趣味によりて養はれた國民性は、豪華の半面に於て、又閑寂い趣を會得し、其間に悠々自適せんことを希望した。蕉風の起つたのも、畢竟此人心の機微に投じたので、これがために、俳諧の機運は一變せられたのである。俳諧なるものゝ本來の性質から云ふと、滑稽諧謔を旨とすべきものであるが、これを幽玄にし、これを上品にしたのは、芭蕉の力である。談林は、上方に起り、蕉風は江戸に起つたが、これは必ずしも、蕉風が江戸の氣風に適合した譯では無い、新しい流行を創むるには、今將に新文化を起さんとするに鋭意である江戸が最も適應して居たからである。

獨り俳諧のみでは無い、元祿は、一方に豪華であつて、他方には恬淡なる風を有してゐた。云ふまでもなく、これは茶道趣味の影響と思はれる。此反對したる兩現象は、軈て相結合して、後年文化文政の文化を作つたのだ。豪華妖艶なる光琳に對して、恬淡飄逸なる乾山があつた。此兄弟は、元祿の兩面を代表する。蒔繪をした竹の皮を、大堰川に投げ込みて平然たりしは光琳である。東叡山の法親王から頂戴した黑の小袖を着ながら陶器の土いぢりをしたるは乾山である。一度は、已むを得ずして、江戸に下つたが、光琳は、京都の人であつた、其技術を京都に於て現はしたが、乾山の半生は江戸にあつた。

蕉風も江戸に長じては、江戸化せねばならぬ。江戸が天下の中心であつたるが爲めに、江戸に長じたる俳諧は、一時俳諧國を獨占した。蕉風の門には伊勢風あり、美濃風ありたるも、其角の起したる江戸座のために

は壓倒せられた。奇趣横生して、何人を驚かさずんば、休まざる其角の句は、純然たる江戸兒氣質の句である。芭蕉は、山林及び自然を咏じたが、其角は、市井及び人事を歌つた。然し、江戸座の弊は、遂に洒落風となり、談林が陷りたると同じ弊を襲うて、其結果は俗了した。

元祿の文化は、上方文化であつたが、此文化が東下し、江戸は次第次第に名實に於ける文化の中心地となつた。江戸風に化せられ、次第に洗煉せられ、江戸の金力權力に因つて、江戸の文化を作り上げた。其絶頂期は、即ち化政時代である、光琳の繪畫も、時代に化せられ、江戸風に化せられると、抱一となる。光琳の餘流を汲みたるものではあるが、抱一には、光琳の豪宕粗放が無くして、纖巧幽麗なるところがある。元祿と化政との相違は、即ち爰に發見せられる。

同じく肉的快樂に耽けると云つても、元祿は野生にして露骨であつた。化政はこれに衣を纒ふだけに進歩してゐる。同じく色彩にして見ても、元祿は、濃厚にしてけば〳〵しくあつた。化政は、人の目を引き立てぬ程に澁がつた。西鶴の浮世草紙と京傳の洒落本とは、元祿と化政との相違を現はし、同時に、上方と江戸との差別を示す。八文字屋本と、馬琴の讀本とは、其類を異にする。「今の京には、何が流行ると云へば、始末して銀を溜めることぞ」とは、元祿の上方風であつた。目に青葉山ほとゝぎす初松魚は、女房を質に置いても食ふと云ふは、化政時代の江戸であつた。

化政は、江戸文化の絶頂期であつたから、平民的文化の極盛時代であつた。床屋もすなる川柳狂歌の文學。時代美人の時勢粧を寫せる浮世繪、役者の似顔繪は、東錦繪として、平民藝術の誇りであつた。音樂に、劇に、講談落語に、其他あらゆる娛樂に於て、平民萬能を現はしてゐる。

「當世顔は少し丸く、色は薄花櫻、」(好色一代女)とは、元祿の好尙であつて、楚々たる柳腰は、化政好みであつた。「下には茶色に萠黄の紅縞つけ、中には瑠璃紺に同じ紅縞の裏つけ、上に薄玉子色に同じ紅縞の裏つけ、

肩より一尺ほど青々と御簾の模様、唐織の縁、紅の房を下げ、さりとはさりとは臻りたる物好、裾は亂れ萩、眞の男鹿もこれには焦れ鳴くべき、帶は黒き天鵝絨に大紋の石甃、後に廻して御所結びの端に、銀にて鶴菱の四紋、返棲、衽先を少し揚げて、帶の下に挾み、抱帶なしに細き忍帶を締め、素き合湯具の裾に鉛の鎮を掛け、惣淺黄金剛を踏きて擦足に歩み、しめつけ島田髮、前も後も長み同じことにして、中ほどに平髻を懸け、挿櫛白檀の木地に珊瑚樹の切入、梅の古木に氣を盡し、前髮に鯨の鰭の曲りたる物を入れ、髮の狂はぬやうに仕懸け、わづか俯向き、首筋ありありと見せて、突肱に左の手先にて袖口を揚げ、右の肩より袖亘しとやかに流し」(俗つれづれ)たるは、元祿の美人であつて、「紫縮のひとへもの、ふた葉あふひのあづまもやうの振袖、もん所は五三のきりのすがぬひ、下にひの板じめのかさねせんさいち、寺やどんすの帶、髮はふくらびんゆかた天神べつかうのつくり物を挿」(仕掛文庫)したるは、化政の娘姿であつた。材木屋風、辰松風、撥鬢刷毛長たてかけ、絲鬢なまじめは、元祿前後の風俗であつて、刷毛先細く、出ず入らずの本多髻から、銀杏髻となつたるは、化政前後の髮容であつた。

元祿は進歩的であつたが、化政は既に保守的となつた。元祿は向上すべき活氣を有してゐたが、化政は爛熟の極、頽廢すべき運命を有してゐた。泰極つて否に之く。化政は江戸文化の絶頂で又下り坂にならんとする時代であつた。元祿は、猶、未だ調和せざるの時代であつたが、化政は、餘りに調和せられて、又進歩の餘地が無かつた。

江戸の文化は、爛熟し極まつたけれども、上方の文化は、猶在野の文化として、存在してあつた。狩野の御用繪師が、一意、様によりて葫蘆を畫く間に、圓山派は生じ、四條派は起り、蕪村大雅堂の南畫は流行した。江戸座は衰へたが、天明調は勃興の運に向つた。殊に京にあつて、諸生を教授したる在野の儒者が、其々の裡に皷吹したる尊王賤覇の思想は、遂に江戸幕府を打破して、王政復古の機運を開く基となつた。江戸

は京都に打ち勝つたが、又京都に破れたのである。名の京都は、實の江戸を打破し得たのである。

五、江戸の滅亡

家康の政治的手腕は非凡であつた。古來、封建制度を、かほど迄に巧妙に、鞏固に建設したものは他に無いと云つてよろしい。外様と譜代との配置、朝廷の抑制、譜代は其祿を薄うして、政權に參與せしむるなど、極めて愼密に周到に用意至らざる無き手段を講じたのである。されば、江戸幕府は、充分に永く其運命を維持すべき筈であつた、必ずしも三百年限りでは無い。若し黑船來航と云ふ思ひ掛けなき急變が出來しなかつたならば、如何に尊王論が唱道されても、幕府は顚覆されるのでは無かつた。尊王論は、名であつて、攘夷論は、實であつた。尊王論と攘夷論とが結合して、幕府は倒されたのである。如何に明晰なる周密なる頭腦を有しても、家康は、黑船來航迄は思ひ到らなかつた。家康は、寧ろ開港論者で、海外と交易を圖る事を奬勵してゐた。其後繼者が、鎖國政策を取らうなどゝは、夢更に思はなかつたのである。畢竟するに、江戸幕府を倒したるは、海外の潮流であつて、家康に取つては、是非も無き次第であつた。

海外文化の潮流が、江戸幕府を倒すに至らうとは、二百餘年前の家康が、これを知らなかつたばかりでは無い、現に其時代にありたる當局者さへも、思ひ浮べなかつた。當局者のみでは無く、天下の多數の人が、慮り得なかつたのである。唯、少數の蘭學者、海外事情に通じたる識者のみがこれを明らかに知つてゐた。如何に林子平が海國兵談を著はしても、渡邊華山が鴃舌小記を著はしても、高野長英が夢物語を著はしても、幕府は、これを不謹愼として、罰する事は知つてゐたが、これによつて、啓發され、悟るところは無かつた。蝦夷松前に黑船が出沒しても、長崎に薪水を乞ふの外船があつても、幕府は、これを對岸の火災視して、備ふるところは無かなつた。蝦夷松前とし云へば、殆んど化外の地の如く考へ、長崎とし云へば、非常に遠距離の如く考へてゐたから、これらの地方に、外船の出

沒する事には痛痒を感ずることは薄かつた。然し、交通の開けた海外思潮が、遠慮なく來る當時にあつては、蝦夷松前長崎と江戸との距離は、言ふに足らぬものであつた。御膝元に近き浦賀に來航するに及んで、警鐘は亂打せられて、幕府は、周章狼狽を極めた。

江戸は盛んにして、京都は衰へる。朝廷は式微となつて、幕府は繁榮し、山陵は荒廢して、晃廟は金碧燦爛を極める。承久の役も、元弘の亂も、皆かゝる現象に憤激して、尊王の大義が唱道せられたのである。江戸時代に於ても、尊王論の唱道せられたのは、固より當然で、尊王論の發源地は、關東にあらずして、關西に、江戸で無くして、京都であらねばならぬ。然るに、事實は案外に關東而も江戸に於て起つた。御三家の一なる水戸が、尊王論鼓吹に於ては、最も力があつたのである。

宋元の文化が傳來したが爲めに、程朱の學は、學界に於いて最も有力で最も廣く行はれた。家康は盛んにこれを獎勵したのである。家康の好學、歷代將軍の學問獎勵は、諸藩の藩學を盛んにし、性理を重んずる程朱の學は至る處に講ぜられた。水戸の如きは、其尤なるものであつた。水戸の義公は、史記の伯夷列傳を讀んで、これに感憤し、脩史の志を起したといふことである。伯夷叔齊が、互に國を讓り合ひて、遂に世を遯れたといふ事は、兄に先立つて、位に就いたる義公が、最も恥ぢたるところである。義公は、先づこれに動かされたに違ひない。伯夷叔齊の事蹟は、支那國民性の權化とも云ふべきもので、漢學の精神である。されば、司馬遷は、筆を極めてこれに同情し、韓退之の如きは、千萬人中唯一人と絕賞してゐる。日本に漢學が始めて渡來した時に、菟道稚郎子は、先づ此漢學の精神にお觸れなされた。義公も、此精神を會得し、伯夷の人と爲りを偲ぶと共に、脩史の業の等閑にすべからざる事を知られた。是に於いて水戸史館の舉があつた。然るに、此史館に招かれた者は、多くは京都の儒者であつた。江戸の學者に對して平ならず、自ら在野の學者として誇りたる、然も江戸に慊らず、京都の衰微を浩歎

する連中が上下二千餘年の史實を考究し、史上の疑問を正さんとするのであるから、議論を上下して、大義名分を明らかにせんとするに至るは自然の數である。大義公も、大義名分を明らかにせん事を標榜されたから、覇府は卑しく、朝廷は貴くなる結果に立ち至つた。尊王の大義は、冥々の裡に水戸の史館に於いて養はれた。

江戸の文化は、學問を普及せしめた。學問が明るくなると共に、人の心も明るくなつた。其結果は、朝廷の尊むべき事を知らしむるに於て、與りて力があつた。京都に竹內式部が出で、甲州に山縣大貳が出で、其後關東の野に高山蒲生の徒が出でて、尊王の大義を傳道するに至つたのも、皆此結果に外ならぬ。然し何れも野人の聲であつて、唯に議論に過ぎなかつた。水戸は實際の力を有したとは云へ、幕府の大なる姻戚である以上は、宗家に向つて弓を彎く事は到底出來難いのである。朝廷自らが後鳥羽天皇の如く、後醍醐天皇の如く、御手を下し給はざる以上、尊王論は、實行の域には至らない。

然るに、黑船渡來問題が、突如として出來し、幕府の處置其宜しきを得ざるとの非難が起つて、攘夷論が沸騰した。尊王論の沸騰ならば、幕府は斷乎としてこれを抑へることを敢てする。攘夷論に至つては、幕府自らさへ方角に迷つてゐる際であるから、これを如何ともする事を得ない。朝廷を抑へる事は、幕府の祖法である。同時に、外船打拂ひの攘夷政策も、幕府の祖法である。諸侯が、朝廷の御爲めに計らんとするものあらば、幕府は、武家法度によつて、これを處分する事が出來る。然し、諸侯が攘夷論を主張しても、幕府はこれを如何ともする事が出來ぬ。否寧ろ、諸侯が幕府祖法を楯に取りて、幕府に肉薄するならば、幕府は、これに對して辯解の地位に立たねばならぬ、慰撫の手段に出でねばならぬ、幕府は、自繩自縛の苦しい破目に陷つたのである。

是に於て、まだ實行の位置には至らなかつた尊王論は、此攘夷論と結び付いたのである。尊王論は、未だ實行せられざるも實行せらるべき問題であつた。攘夷

論は、實行すべからざるを實行せらるゝやの如き問題であつた。尊王論は、攘夷論を借りて、其目的を達し得たのである。攘夷論は、其名を尊王論に貸して、幕府を倒したのである。尊王論は、名であつたが、實となり、攘夷論は、實の如くにして名に過ぎなかつた。幕府を倒し得たるも、日本は開國となつた。これは當然の結果である。

江戸の文化は、旗本八萬騎をして、柔弱なる生くら武士とならしめた。細身の大小を帯べる半可通の武士が、何で戰ひが出來よう。三百年の泰平に養はれた江戸趣味は、信念の無いものである。鎌倉武士が、最後まで強難的態度を取つた如き信念は、さつぱりしたる江戸兒には乏しかつた。川路左衛門尉が絶食して憤死したるを外にして江戸に於いて殉死したものは殆んど無かつた。彰義隊の如きは、餘りに迂濶であつた。會津長岡の如き邊土にありては、江戸幕府史の最後を飾つてゐたが、江戸の文化によりて作られたる江戸趣味は、甚だ淡白なる思ひ切りのよい明け渡しをなした。

江戸趣味は、執着心に乏しい人間を作る。尊王論の發源地たる水戸の出身ではあるが、十五代將軍が、譯も無く大政を奉還して、臣子の本分を誤らなかつたのは、一に此執着心の乏しい江戸趣味の賜物である。

江戸は天下の諸侯、諸國の人々の集るところであつた。故に、江戸兒は人みしりをしない。江戸趣味には、コスモポリタンの要素がある。諸國の藩にては、極めて排他心の多いところが少からずある。上方は、一現の客を斷るを例とする。然るに江戸には、排他の風なく、江戸兒は黨派心に乏しい。故に江戸幕府が倒れて、朝廷がこゝに奠都ありても、江戸人士はこれを歡迎こそすれ、これに對して反抗的態度を取るやうな事は敢てせぬ。

潔癖は江戸趣味に養はれた江戸兒の特色である。これが爲めに名利を擲つことを意に介せぬ。されば、江戸兒に大なる財産家も無ければ、政治上に成功したものも乏しい。若し有りとすれば恐らくは田舍者が江戸に轉籍して自ら江戸兒と稱するのであらう。此の潔癖

袁世凱皇帝論

稻葉君山

あるが爲めに、江戸兒は兎角に孤立になりたがるのである。

江戸趣味は、室町時代に起りたる茶道趣味が、關東の風氣に依りて養はれ、三百年の泰平によりて洗煉せられたものである。江戸文化は即ち此趣味の上に建設せられたもので、此趣味が、又此文化を作つたのである。江戸趣味も、王朝趣味も、同じ國民性の上に、立脚してゐるから、共通の點が無いではないが、奈良朝に到來した唐の文化と、鎌倉室町に傳來した宋元の文化が異なり、茶道の普及によりて、國民趣味が多大の相違を來し、關東と關西との風氣が著しく相違せるが爲めに、江戸趣味と王朝趣味とは、尠からざる差別があり、江戸文化と平安朝文化とは、實質に於いて非常なる懸隔がある。

此二文化は、孰れも國民的自覺の上に成つたものである。一は貴族が自覺し、一は平民が自覺したのである。

江戸の文化は、維新の大業と共に打破された。維新の大業は、全くこれを打破するに至らずとも、海外文化の渡來は、全然これを打破し終つたのである。三百年間に洗煉せられた江戸趣味は、地方人が實權を執りたる結果として、全く地を拂ふに至つた。平安朝文化平安朝趣味は、京都に據つて微弱ながらも其命脈を維持してゐたが、其根據地を打破せられた江戸文化、江戸趣味は、當然滅亡したのである。其文化其趣味は、今や書物器財の上に殘れる文化及び趣味である。

袁世凱君の地位は、歐洲戰亂の突發とゝもに、著しく安固を加へたのである。如何に無頓着な支那人でも、世界未曾有の烽火の揭がつた今日の場合、幾分なりと自家を警戒するといふことは、寧ろ當然であらねばならぬのである、袁世凱君の明敏なる、直ちにそれらの機會を捉へて、民衆の結束を企てた。民國三年即ち昨年末の中央度支は、頗る危殆に頻しつゝあると報ぜられて、内外ともに警戒を加へたが、袁世凱君の政府は、巧みにその難關を切り拔けたので、一段の手腕を認められ、今日では甚しく支那政府の財政上から來る危殆を言はなくなつたのである。勿論これらは、種々行政機關の縮少といふことゝや、中央と地方との關係の程度に因るでもあらうが、最近に於ては、著しく袁世凱君の地位を昂め、迫はよくば、君が帝位に登らんとすと傳ふるに到つたのである。

日支交渉は帝政の福音

吾人をしていはしむれば、歐洲戰亂で甘い汁を吸めた袁世凱君は、日支交渉によつて再びその庖厨を豐かならしめたといつてよい。日支交渉が、結局我國の失策であつた、そして、畢竟から騒ぎに終つたといふ不面目については、今こゝに論評することを避くるであらう。若し多少でも我國の利益であるといつたら、滿蒙の利權であるが、これすら、我國よりいへば紙上の空權たるに過ぎぬので、彼れよりいへば、面目の毀損といふ位にしか受け取れぬ話である。袁世凱君の代表陸徴祥君等が百五十餘日の久しき、樽俎の間に折衝して、遂に我れの要求の大部分を反古にしたといふことは、彼れとしては一大成功といつてよいので、それらの手腕は、明瞭に彼國民衆に知られ、かた〳〵中央政府の信望も加はゝつたわけではあるが、日本政府は、五月七日に最後通牒を發して、談判の幕を打ち切つた。而もその内容を檢すれば、第二回の讓歩に比して、さらに寛大なる讓歩であつたといふに至りては、彼等すら、その所謂最後通牒の無意味なるに駭ろいたといふことである。さもありなん、袁世凱君及び君の政府は、得たり賢しとして、日本の暴戻即民國の恥辱である、

我等は臥薪嘗膽して、報復せざるべからずとする民論を煽り立てた。政府者の煽動の効果は、民衆の意向を種々に激發したので、差當り猛烈に實現したものは、目下尚ほ續行するところの日貨排斥といつてよい。日貨排斥そのものゝ、窮竟彼等支那人の利益でないことは、知れ切つた話であるが、日支兩國の何れかゞ先づ苦痛を感ずるかといへば、それは、疑もなく日本であるので、剛腹の評ある加藤高明君すらも、流石に手を焼いたらしく、遂には、如何な無理算段を敢てしても、袁世凱君に愁訴してボイコット終熄の妙薬を下して欲しいといふことになつたらしい。無理算段の個條については、多少聞き込むだこととの無いでは無いが、それはさて置き、怪しからぬ流言もあればあるものである、それは、日本政府は、袁世凱君の帝業を保障せんとするを提言したといふことである。

帝政說偶然ならず

袁世凱君の帝位說が、我國の新聞紙上を賑はした六月中のことであつた、袁君は、その機關紙「大共和日報」をして「帝制妄言の由來」なる題下に、日本新聞が、斯種の謠言を作して、我國の元首を誣蔑するは、至つて不都合であるといふことをいはしめたことがあつたが、尋ひで、去月中の「亞細亞日報」は、下の一節話を掲揚したのである。

數日前、江蘇將軍馮國璋氏著京後、袁總統に面謁して、談適國體問題に及び、四時の久しきに渉れるが、袁總統より、先づ外間の謠言を問ふて謂はく、外間の我を誤傳して、帝制復活の希望ありと爲せしは、此れ蓋く原因なきにあらず、我は嘗て共和制の支那に適合するや否やに就き疑義を抱きし事あり、佛米兩共和國は各歴史ありて、支那に比すべきにあらずとの談、適々外間に誤聞せられて、遂に予が帝制復活を希望すと爲せしなるべし、現に我の欲する如く、總統制の實行を見し以來、權力の足らざる所なく、又帝制と何等異なるなし、若し子孫の爲めに計るとせば我の愚、之より甚しき者無けん、見よ長子克定は不治の病あり、次男克文の志名士たるを願ふ、三男は世務に堪へ難し、其餘は皆な幼年なり、假令一長に任ずとするも、亦安心して之を委ね難し、豈に能く天下の重任を托せんや、且つ古より君主の傳へて數世ならざるに毎に不測の禍ひに遭ふ、我れ何を苦しんで此等の危險を殊更に吾子孫に加ふるの愚を學ばんや、と馮將軍恭しく答へて謂はく、

南方一帶に政體の改革を開かは不贊成には非す、唯時期の研究に過ぎざるのみ、他日天之を與へ人心歸服せは恐らくは大總統の之を避けんと欲するも不可能なるべしと、袁總統之を聞き色を正して謂へらく、之れ我が平日の主意を破壞するなり、我は既に四五兩男に命じて、英國に僅少の田園を購求し置きたり、若し皇帝を以て相迫らば、我は只遠く英國に赴きて、之を避けんのみ、又我の五等封爵を實施せんと欲するは、此れ實に約法に根據せり、妄に揣測を逞ふすべからず、一時外間の誤解を恐れて擱置し居るが、早晩必ず之を實行するの時あるべし。

勿論此記事の、袁世凱君の指金で登載したことは想像するを得るのであるが、吾人をしていはしむれば、袁君の帝政反對論は、甚だ不徹底である、何とならば、君は、今日の大總統としては、その意志慾望を充たすに於て、何等權力の不十分なるものを認め無い、之を事實からいへば、帝制と異るものは無いのである。若し子孫の計を成さんとならば、何を苦みて、彼の古來の君主が、數傳にして每に不測の禍に遭ふが如きを學ばんや、といふのであるが、若しも、假りに袁君の子孫が幸福を保ち得るといふの方法さへ見出されたならば袁君は何時でも帝政を可なりとするに相違あるまい、況んや袁君には、その根本の觀念として、我は嘗て共和制の支那に適合するや否やに疑義を抱いて居ることがあつた、佛や米の歷史は、我支那に比すべきで無いと斷言するに於てをや、袁世凱君の帝政說は、必しも瓢箪から駒が出る例とは、同一視すべからざるものであらう。

清朝復辟とは何か

支那の民衆が、共和政に倦みて、再び帝政を慕ふに至つたのは、已むを得ぬことであると主張する支那新聞紙の論調ほど近頃怪しからぬものはあるまい。有體にいへば、第一革命についで第二革命の內亂といふ工合で、干戈を懼るゝ虎の如き支那の民衆に、政體論などを論議する餘裕の起りつゝあるや否やが、第一に怪視せざるを得ない、否な寧ろそこに袁世凱君の巧智を忖度せざるを得ない仕打があるといつてよいのである。何とならば、支那の政界で、帝政論の起つたのは、

昨年八月以降であるが、袁君の皇帝說先づ起り、次いで、清朝復辟論が現はれたからである。清朝復辟とは何ぞや、今の廢主宣統帝をして、再び中國に君臨せしめんとするといふ主張であるが、此主張は、必しも、民間に根帶がないとはいはれぬのである。支那のことであるから、民間といつても、漠然たるやうではあるが、父老の信仰や里謠の傳播やは、案外に可燃性を示し、殊とには、袁世凱君の平生願念するところといつてよい、立ち入つて評すれば、袁世凱君は、帝制說を創建せんが爲めに、先づ當面の前朝復辟論を驅り出して、之を根本から剪滅せんと企圖したものらしい。吾人は、此觀測の下に、昨年十一月初に政府の官報たるチャイナ・ガセット(京報)が、若し君主制を採用する場合あらば、漢人より皇帝を出さゞるべからずといひ、又參政院參政施愚等が、別嫌明微案即ち清室あればこそ斯かる清朝復辟の謬論は出づるなれ、此際清室と民國の關係を明確に規定すべしといひ、尋ひで、肅政使から清室皇帝廢號意見書の提出されたといふことは、疑もなく、袁世凱君の意圖を露骨に語つたものといつてよい。昨年末より今春に亘りては、更らに注意すべき數個の事件がある。

驚くべき復舊政治

袁世凱君の大總統に就任せる以來、復舊政治といふことの盛行せらるゝといふ次第も、爭はれざる事實であるが、この措置が寧ろ一般の人心に投ずるといふのであるから、致し方が無い。一例を示せば、昨年十二月二十九日に公布せられたところの大總統選舉修正であるが、それによるに、大總統は、自分の候補者として三名を自選し、豫め之を嘉禾金簡といふ用紙に親書して金匱に密藏すとあるが、何處の共和國に、現任大總領が、その任期中に自己の候補者を豫選し得るの權能を附與せらたるものありとするか。畢竟これらは、前清時代の帝室で、現皇帝が嗣皇帝を指名する方法として、秘密にその名を親書し、之を正大公明殿の扁額上に藏くして置いたといふ所謂密建制度に範を採つたものといつてよい。五等爵位の復興說といふものもあ

つて、これは、有勳者に、公侯伯子男の爵位を與へんとするのであるが、實際は、それに止まらぬので、王號をも復興せんといふ内議もあるのであるから驚ろくの外は無い。

祭天禮の施行

さらに駭ろくべきことがあつた、それは、袁世凱君が、親しく北京なる祭天壇で、郊天大禮といふ冬至祭天儀を擧行したのである。禮は簡單で騷ぐほどのことは無いが、祭天は、帝者王者の行ふべきものとしてある支那人にとりては、寧ろ怪訝と驚異の眼を以て袁君を見たことの疑ふべからざるものがあつた。

冬至祭天禮の執行につき、梁啓超は、一は以て外國學者に我國政治の大本あるを知らしめ、一は以て當局者をして、常に典禮の貴ふべきのみならず、而かも此種の典禮の從りて出つるところの精神の、尤も貴ふべきを知らしむるの要ありといひ、「郊天典禮と政治思想の關係」なる題下に於て洋々數千言を費し、之を京報(チャイナ・ガゼット)に公にした、その冒頭に下の意見がある。

孔子曰く、郊社の禮、禘嘗の義に明かなれば、國を治むる、其れ之を掌に示すが如からんか、吾儕驟かに此文を讀み殆んど其解を得ず、以て區々一祀典何ぞ關係此の如く其れ重きに至ると爲せり、一たび深く支那哲學、宗教の大本を探り、然る後其關係の實に此の如きものあるを知れり、蓋し我國數千年來共に信ずる所の教義にして其政治範圍に用ゆべきを以てなり、要點は左の如し。

(一) 人の性命は之を天に受け、之を天に託す。

(二) 天は人を愛するの故を以て、常に其賢者一人を擇び、之が元首と爲し、天に代つて以て政治を行はしむ。

(三) 元首行ふ所の職務は、即ち天の職務なり、故に天に對して完全の責任を負ふべし。

(四) 此責任を盡さゞるものは、即ち天の棄つる所となり、其元首の資格は立ろに消滅す。

(五) 天意は全く之を多數の人民に寄す、故に元首が人民に對し責任を負ふは、即ち天に對し責任を負ふに異なるなし。

(六) 元首の祭天は、即ち委任を受くるものが、委任者に對し虔みて其命令を承け、及其責任を省み、祇た其裁判を待つのみ。

以上梁啓超の意見が、袁世凱君の意圖を奉承したといふことは、一見して疑はれない、郊天典禮即祭天禮が、如何なる影響を一般民衆に與ふるやといふに、祭天は、

古より帝王ならでは、行はれざるべき國家の大典であるから、既に此儀を擧げた袁君には、早くも帝王の位が備はつたものであるといふことに了解するのである。かくの如くんば、袁世凱君の大總統と帝位とは、今や、紙一枚の隔てあるに過ぎぬといつてよい。吾人は尙ほ進みて、袁君の勢力分布を檢察するの要がある。

袁君の勢力分布何似

第二革命後、幾多の政變、幾多の任免更迭によりて、中央地方の政界は、殆ど政敵を驅逐し盡して、袁氏臥榻の傍らに、又た他人の鼾睡を許さゞるの槪があるとは、消息通の確言するところであるが、就中吾人の注意すべきことは、最近に袁君が陸軍閥の頭領段祺瑞を去つたことである。段その人は、本來からいへば、袁君の肉身ともいつてよいが、彼れの前淸時代から養成した乾分が頗る多數で、將來が恐ろしくなつたらしい。又た一面からいふと、袁君の秘密の際どいところを握つて居るのは、君の手で暗殺されたとまで噂せられた趙秉鈞と段とであるであらうから、今日の失墜は寧ろ必然であるともいへる。ともあれ、袁君は、此一擊によつて、軍閥を破壞したが、同時に多年中央地方の財閥に蟠倔しつゝある廣東派に一擊を加へ、梁士詒・葉恭綽・張弧・趙慶華・權量・袁齡陳・施肇曾・周自齊といふ樣な面々が、何れも停職となつた。民國の進步からいへば、此等の新智識を隱退せしむるといふことは、決して得策では無いが、袁君としては、自家の地位の發展を企圖する上に於て、已むを得ないことであるであらう。斯くの如く、中央には、今やさしたる政敵も認められないが、地方即ち二十二行省の諸將軍等を見るに、これ又た袁君に抗敵すべき何物をも認めぬといつてよい。もし譜第郎黨で無いといふところから物色するとすれば、浙江の朱瑞、屆映光、山西の閻錫山、黑龍江の朱慶瀾、湖南の湯薌銘、廣東の張鳴岐等でもあらうが、それ果た何程の勢力あるべしや、槪していへば、袁君の勢力は、在職四年の短日月に於て、殆ど滿遍なく四百餘州に行き渡つたものと觀測してよいのである。

袁世凱君の心事

四國の情況と從來の經過とにより袁君の將來を推測すれば、君には、共和制を廢して、斷然帝位に卽かんとするの準備に在るやに思はれるが、吾人をして評せしむれば、君には、何等共和制の尊重すべきことを自覺したものといふことは出來ない、又た所謂約法の重すべきことも、御存知がない、支那の人間には、大總統といふ語は、皇帝といふの新熟語であるとの俗解もあるが、袁君の頭腦とても、右の俗解と大差あることを認められまい、若しも露骨に評すれば、袁君の昨今は、飯は食ひたしといふ心持にあるものと觀測してよいが、偖て惜しいことには、袁君は、遂々食はずに終るものらしく思はれる。何となれば、袁君には、古來支那の帝王が簒奪なり創業なりに、必要とするところの勇氣に於て著るしく缺くるところがあるからである。

共和制の將來危殆

然らば、支那共和制が、永遠に存續さるべきかといふに、これ果た疑問ならずとは保し難いのである。袁君その人の、共和制の保護者であるか、どうかといふことは、既に問題外であるが、袁君に代りて立つところの何人かゞ、果して共和制を採用せんや否やは、これ又た疑はしいのである。此等の問題については、第一革命當時に英京タイムスの唱說したところの「支那に於ける共和政治と儒敎」との一節を引證して見たい。曰く

凡そ革命の多くは、何れも此の如きものにして、閃電暴雨、實に慘として歷史上の一大悲劇をなすと雖も、實は一種の劇的發作たるのみ、一時の狂熱的言動に過ぎず、人々が酩酊したるまでの事なり、夕立なり、過ぐれば空はもとの如く、人は再び正氣に立ち歸るなり。換言すれば、再び平然として、自ら所謂古風の生活に入るなり。社會的革命は決して政治的革命の如く急激に起るものに非ず、數十年數百年を要するものなり。彼の支那の革命の如きも、焉ぞ此例に漏れん、支那が革命の結果、史上に一新時代を造り、又た社會に一大變化を來さんと想像するは

大なる誤りなり。支那の建國は、數百年の事に非ずして、數千年の昔に在り。僅々數個月にして五色の旗を翻すことを得たりとも、此數千年來の四百餘州の風物は、一朝一夕には破壞さるべからざるなり。其社會的組織に於ける各組織は、歐米諸國中に比を見ざる程、强堅にして、其纖維は個人の性格を作り、家庭の關係を定め、遂には、治國平天下の極に達し、今尙永久的に現實社會の基礎を成すものなり、之に反して歐洲の社會組織は常に理想主義の爲めに、其根柢に於て動搖を感じ、各人は社會的現實の支那人に比し、著しく不安定の地位に立つものなり。(下略)

吾人は、此所論に對して、全部贊同せざるを得ない。支那研究のオーソリチーたり、先進者たる英人の見解には、實に如此きものがあつた、我國は、過般列國に卒先して共和制を承認したといふが、次いで來るべき帝政に對しても、亦卒先して頌辭を呈せんとはするであらうか、彼も一時、此も一時とはいへ、政府者の歷代の不見識は、歎息に餘りあるものである。(八月十五日)

附記　此論文起草後、北京電報は、楊度、嚴復、曾彝進などいふ面々が、籌安會(?)といふものを組織し、國體變更の主張を發表したとある、楊・嚴・曾三人は、ともに去月中新に任命されたところの憲法起草委員十名中のそれである、若しこれに祭天禮の首倡たりし繆を加へなば、委員の將來の立案も、略ぼ想像されるので、多分は、立憲君主といふことに歸納するであらう、袁君には果して、彼等の立案を採用するであらうか、予は、君にはそれらの思ひ切つた勇氣のありや、否やを第一に判じかねるのである。若しも袁君の現位地が、不測の變によりて失はるゝことでもあつたならば、或は大勢は、逆行して、再び急激に君主制を現出するかも計り難いのである。突發事件に伴ふ用意は、隣邦たる我國に於て、何時も不十分であることを、吾人は遺憾とするのである。

感激なき時代

□如何に青年の自殺を觀るべき乎□

茅原華山

自殺季節

朝起きて枕元の新聞をとり上げ、ざつと一通り讀んで居る中には、毎朝必ず二つや三つの「心中種」か「自殺記事」が目に留まる、東京の新聞に依つて報道せられる「心中」「自殺」が實數の何割位であるかは知らないが、日本全國に於て毎日行はれてゐる「心中」や「自殺」は、活字に組まれて世間に紹介せられる數よりも遙かに多いに相違ない。

統計の語るところに據れば自殺者は晩春から夏にかけて――特に夏季――最も多いといふことである、尤も近年は生活難の度が高まつて來たので、節季師走。年の瀬が越すに越されずして墓穴に逃げ込む者が増加して、爲めに十二月が自殺者の統計上に於ける地位は大に向上したさうであるが、それにも拘らず夏は依然として自殺の季節たるを失はない。昨今特に自殺者が多いのは外に色々の原因があるには相違ないが一つは氣候の勢もあらうと思ふ。

なぜ夏が自殺のシーズンになつたかといふことは季候が人の心理に及ぼすデリケートな作用を說かねばならないが、それは本論の目的とする處ではないから略す、自殺と氣候の關係に就いての心理學上の解說は之を心理學者に任せるとして、兎に角、夏のいら〳〵した光線には、ともすれば人間の感情ヶ挑發して心の安定を亂り、生活の希望を見失つたものや生そのものに

對して疑ひを懷くものを驅つて死の激湍に赴かしめる强烈なる誘惑があることは爭はれない。

次に、或人の自殺が問題となつて新聞紙などで色々と論ぜられ、「自殺」といふことが世人の注意圈内に入つて來ると、生活に疲れた人や、只じつとして生きてゐただけでは到底社會にその存在を認められさうな望みもなく其癖何とかして自分といふものゝ存在を深く社會に印象せしめたいとあせつてゐるはかない虛榮心を持つてゐる人々が、意識的に或は無意識的に自殺を模倣するに至る、死人の誘惑とでもいふべき作用も昨今の自殺增加の一因であらう。

チエーホフの短篇に、クウルダロフといふ男が非常な喜びに興奮して手に一枚の新聞を摑んで父母の部屋にかけ込んで「阿母さん！御覽なさい、今ロシヤ中の人が私を知つてます！ロシヤ中の人が！十四等官テミトリイ・クウルダロフが此の世に生きてゐるといふ、そのことを今迄はたつたあなた方しか御存じなかつたのに、今ぢやロシヤ中の人がそれを知つてゐます、あゝほんとうにどうしませう」と叫びながら……十四等官テミトリイ・クウルダロフなるものマーラヤ・ブロンナなるコジヒン家の麥酒小賣店より出で來れり、酩酊狀態にありし彼は過つて道を滑り、生憎其所に居合はしたる×郡×村の農夫×なる者の辻馬車の下に倒れたり云々！……と、自分が酩酊て辻馬車に轢かれたことが書いてある新聞を得意になつて讀みきかせるといふ筋のものがあつたが、多くの自殺者の心境には多少ともこの愚なるクウルダロフの歡喜が顯在し、潛在してはゐないであらうか。

かく觀察すれば昨今頻發する「自殺」「心中」等の現象も別に聲を大にして騷ぎ立てる必要もなくなるわけで、若し單に自殺のシーズンなるが故に自殺者が多く、自殺者が多いところへ持つて來て、これにつり込まれて模倣自殺をするものが出來、愈々益々自殺事項を增加して來たといふだけなら、問題の一切の解決を只時の進行に任せて雲烟過眼視してゐればいゝ理合であるが、私は近頃の自殺的傾向を通じて現代日本人の生活

に或重大なる缺陷を發見するから、此問題をさう單簡に放げやるとは可能ない。

自殺是非觀

自殺が罪惡であるとか罪惡でないとかいふことは昔から隨分議論のあつたことで、回々敎では自殺は神の命令に逆ひ他人を殺すよりも一層重き罪惡として禁ぜられてゐる、キリスト教に於ても其十誡の中「殺すべからず」といふは他人をも亦、自分をも「殺すべからず」の意と解せられてゐるに反し、佛教にあつては或事情の下には自殺が許されてゐる——但し一般的には自殺者は死後慘苦を嘗め、前世に於ける最も罪深きものとせられてゐる——し、波羅門では死靈が敵に祟るといふ信仰から、復讎の爲めに自殺するは勇敢なる行動なりとせられてゐる。

又カントは自殺を以て人の中に存在する人道を輕蔑する行爲であると非難し、フイヒテは生命を保護し生きんと欲するは吾人の義務なりと說き、ヘーゲルの如きは人が自己の生命を左右する權利を有すといふは一の矛盾であると極言して自殺の罪惡なる所以を說いてゐる、而し又一方トーマス、ムーアのやうな人は、不治の病に苦める者は牧師或は長官の同意だに得れば自殺して可い、此場合牧師或は長官は自殺志願者の願意と病狀とを參照して成るべく自殺志願者の希望に添ふやうに取計らはねばならぬと主張し、現に亞米利加の或る州では此「ユートピア」の著者の言にきいて、不治の難病者の自殺を公許して居るところもあるさうである、プラトーンの如きも苦しき運命や堪へ難き恥辱の爲めに自殺するのは批難すべきことでないといふてゐる、エピキュラスは、死の來るを待つと自殺すると何れがよいかは考へなければならないといつたが誠に含蓄の多い言葉である。

斯樣に自殺に關する道德觀は國々人々に依つて違つてゐるが、概していへば西洋では自殺を罪惡としてゐるやうである、蓋し自殺者は彼自ら殺人罪の被害者なると同時に加害者なるが故である、英國などでも以前は自殺者は普通の墓に葬ることを許されなかつたもの

である。之れに反し東洋では一般に名譽を維持する爲めに自殺することを勇敢なる行爲とし、殊に日本に於いては切腹といふことが武士道に缺く可らざる一つの要素とまでなつた、實際日本人の道徳觀からいへば自我の人格を完全にする爲めの自殺は極めて貴ぶべき行爲とせられてゐる、——斯ういふ自殺は啻に日本人の道徳觀に於いて承認せられるのみでなく又一般の文明國人の間に於いても承認せられねばならない。總て更により大なる自我を發揮する爲めに必要なりと認めたる場合此の小なる肉體を自ら殺すことは價値ある自殺といふべきである、例へばキリストや、ソクラテス等の自殺——これを自殺といへば不服の人があるかも知れないが、自殺論で有名なデュルカイムは『死者自身のなせる積極的、消極的の行爲に由りて直接、間接起れるの死を名けて自殺といふ』と定義してゐる、これに依ればキリストや、ソクラテス等の刑死も彼自身の人格を完全にせんが爲めになしたる消極的、間接的手段による自殺と見ることが可能る——の如きは何人と雖も價値のない罪惡だとはいはないであらう。丁汝昌が自刃して支那海軍の爲めに壯烈なる哀史を書いたことに價値がないとどうしていへよう。

只近來多く行はれる自殺は、時代の頽廢的空氣が產んだかびであつて別段價値のある自殺とも見えないのは遺憾である。

最近、世界各國の統計に現はれたる自殺者の數は、年々一定の率を以て增加してゐる、故に或る統計學者は自殺は年々規則正しき社會現象であると論じた程で文明の發達と共に自殺者が增加して行くのは止むを得ないこととせられてゐるやうだ。然しながら文明が進むと共に自殺者が增へるやうな文明にはどこかに缺點があるに相違ない、世界の文明國を通じて年々自殺者の數が增加して來たといふことは或意味に於ては十九世紀の物質文明が年々に行き詰つて來た證據だともいへる。何れにしても文明が頽廢して來ると自殺者が殖へることは爭ふことが可能ない。

餘談に亘るやうであるがこゝで一寸野蠻人が、自殺

といふ神秘的行爲に對して、どんな考へを持つてゐるかといふことを述べて置こう、未開人の中には自殺といふことがどうしても了解し得られないものがある、ヤーガン人やアンダマン島の土人には自殺といふことがどうしても呑み込めない、で彼等の部落で白人が間々自殺することがあつても、きつと誰れかに殺されたと思ひ込んで下手人の捜索に大騒ぎをするそうである又中部オーストリアの土人に自殺のはなしをすれば『御戯談でせう』といつて取り合はないそうである、これに反してカムチヤツカ人やホス人は無暗に自殺したがる傾向があつて、姑が自分のこしらつた料理を喰はなかつたといつて自殺した嫁がある、どうもからだが怠るくつて仕方がないといつて自殺した爺があるといふ醜梅、小娘が一寸顔を赤くして恥かしきを感じた様な場合は小娘が恥かしさを忘れるまでは監視を要するといふ厄介な人種である、これにひけを取らない自殺狂はカレン人で、晩酌の際夫婦が二言三言いひ爭つたかと思ふと、明朝はきつと夫婦の中のどちらかゞ裏の木の枝へぶらんこしてゐるそうだ、で此處では『首を縊らん』といふ言葉が盛んに流行するそうだ。然しこれ等は未だ單獨自殺だから難が少いが、玆に最も物騒なのはゴールド、コーストの或る土人で、こいつは、自殺する時に某といふ奴が憎らしい、腹が立つて仕方ないから自殺すると言ひ置いて死ぬ、そうすると其土地の法律として自殺者に指名せられた奴は自殺者と同じ運命を見ねばならない、こういふ自殺は他人の頭上で自殺するので頗る手數がかゝる。

西亞弗利加の或黑奴は其土地を離れて奴隷に賣られると其賣られて行つた先きで故郷が戀しくなると直ぐに自殺する、一種の輪廻思想で、死ねば故郷に生れ還ることが出來ると信じてゐるからだ。

自殺で最も振つてゐるのは印度の某蠻族で宗教上の迷信から、からだ一ぱいに牝牛の糞をぬりつけて火に燒けて死ぬ、又壯麗なる儀式を營んでインダス河の鰐に喰はれて死ぬもある。チオスに於ては老衰するよりは自殺を撰ぶ習慣があるそうだ、日本の老人にも老衰

するよりは自殺する此チオスの習慣に從つて頂き度いやうなのが隨分澤山居る樣だが、是れは自ら別個の問題である。

ところで談は又本筋に戻つて、文明の頽廢が自殺者を出すのは何故といふに、今日のやうに斯ふ物質文明が行き詰つて來るとその文明から放散する頽廢的の氣分といふものが人々の眼を覆つて、生活に對する欣びや、前途の光明を全く隱してしまふから生活といふものが、から、つまらないものになつて『まゝよ死んぢまへ』といふやうな氣を起させるからだ。即ち氣候が自殺を挑發するやうに、その時代一般の風潮も亦自殺をそゝのかす作用を爲すものである。

自殺時代

露西亞の文藝を好愛してゐた某飛行中尉が神樂坂の藝者と心中したとか、某貴族院議員の三男が御嶽山で自殺したとか、麻布で病身な兄妹が世をはかなんで服毒したとかいふやうな個々の事件について自殺者の心的經過を探窮し描寫することは勿論價値ある仕事に相違ないが、これ等は寧ろ心理學者――小說家――乃至は自殺者と特殊な關係ある人々の領分に屬するもので私としては是等の自殺者をひつくるめて人間が最も大切にしなければならない筈の生命を自ら斷ち、何者にも侵されまじく擁護しなければならない筈の生活權を自ら抛棄し去るやうな、人生の最大悲劇を產むに至つた社會そのものを研究しなければならぬ。何となればかゝる社會にはどこかに缺陷があるに相違ないからである。

メーヨスミス氏は『自殺は社會の悲觀的傾向の兆候と見るべきものだ』といつたが實にその通りで、社會が物質的にも精神的にも行き詰つて來ると、人間の生活を熾んならしむる醱酵素が干からびて、生きるといふことに何等の感激を覺へないやうになる。斯樣に社會が、人心を感激せしめ惹き付けるに足るべき何物もない狀態になると、人は僅かな衝動に動かされて、此臘を嚙む如な生活から脫離する爲めに自らを殺す、而してそういふ場合靑年は特に衝動に對する感受性が銳

敏であるから、靑年の厭世自殺といふことが殊更注意の焦點となつて來る。

餘程の無鐵砲な樂天家でない限り、日本の現狀を見て希望の輝いてゐる社會だとはいはないであらう、明治維新から日淸、日露の戰ひに到るまでは日本人の間にも兎に角一種の共通の感激があつたが、日露戰爭と共に此の國民共通の感激は雲散霧消して、思想界は專ら頽廢したる唯物主義の跳梁跋扈にまかせ、上下を擧げて其日——其時——其瞬間の樂しみに耽る樣になつた然しながらこういふ生活は到底行き詰らざるを得ない仕方がないからデカタン生活はしてゐるやうなものゝ國民の魂は斷へず何かしら新らしい感激を求めて動搖し出した。オイケンやベルグソンの新唯心論の哲學が歡迎せられたり、タゴールの超物質生活の讃美歌が流行したりするのは、日本の唯物的思想界が行き詰つた反映ではあるまいか、しかも是等の新思想が忽ちにして流行し、未だ全く我がものとならない中に又忽ちにしてすたれ行くのは、彼等の思想が未だ日本人の生活に共通の感激を起させる或る要素に欠けてゐるからではあるまいか。

凡そ或る國民に共通の感激を起させるといふやうな要素は必ずしも深遠なる哲理とのみは限らない、場合に依つては極めて卑近な生活上の慾望を滿たし得べき希望を抱かしむることに依つて一齊に躍り上るものである。國民の雄心を綜合して國民 活のモットーとなるやうな思想はその國民に依つて創造せられたものでなければならない、輸入思想は所詮國民の信條となることは可能ない。

私は日本現在の行き詰つた狀態を見る毎に千八百五十年代の露西亞の社會を懷ふ。此時代の露西亞は專制政治の毒に中てられて、露西亞人の生活には何等の希望も光輝もなく人々は只

日は出てゝ、沈む
牢屋は暗し、
明け暮れ牢守は——あゝあはれ——我窓監視る——
監視らば、監視れ

此身は逃げじ、
自由は願へども——あゝあはれ——鎖は解けず！

（ゴルキーの『どん底』より）

といふやうな重苦しい空氣の中に押しつけられてゐた露西亞の青年間に自殺が一大流行となつたのは此頃のことである、そこで私が思ふに、思想が行き詰つて人々の心から生活の欣びが消へ去つた時は即ち自殺の時代ではあるまいか、勿論いくら自殺の時代だからといつても國民の全體が自殺してしまふわけではない、本當に自殺するものは國民の一小部分に過ぎないが、斯ういふ時代に生活する人は、よし自ら生命を斷つ行動に出でないまでも彼等は自殺者の直ぐ隣りに坐つてゐるのだ、自殺者と彼等との相違は多くの場合自殺者は我れは何の爲めに此生甲斐のない娑婆に居て不愉快な生活を續けねばならないかを、彼自身の知識の程度に於いて極めて眞面目に考へ、結局生きてゐることは無意義であると判斷し處決するのだが、自殺しないものは生の意義もへちまも考へずにぶら〳〵と醉生夢死するの徒が、つまらない〳〵と知りつゝも未だ生に對する執着を斷ち切る程の衝動に出會はない人々であつて、彼等には自殺者を嘲笑する資格はない。

私は自殺者の人生に對する眞摯な態度には十分同情するものである、然しながら自殺者は到底意志の弱い生活慾の淡白な、可憐な人である、若し彼等がもつと意志の强固な、生活慾の深刻な、健全な人であつたならば、彼等は自殺といふ手段をとらないで現の悲しみを通して、末に輝く喜びを見、今の不滿足なる社會の狀態を改革して滿足なる社會を實現しやうとする改革者になつたであらう。本當の非常展開は自殺時代の頽廢した思想に反抗して起つ人々に依つて成し遂げられる、私は昨今の自殺傾向を通して日本の自殺時代を想ひ、その自殺時代を通して更に新日本の曙光を視る。

・殺風景な社會

私は過去二十餘年の記者生活に於いて今日位不愉快な、今日位殺風景な而して今日位沈滯した社會を經驗したことがない。どちらを向いても行き詰つて動きの

とれない有様で、どこへ行つても人間のうめき聲ばかりだ、氣の弱い人がこういふ社會に教唆されて自殺するのは誠に止むを得ない。

私は近頃の自殺者がどういふ理由で自殺するに至つたかに就いて個々の原因は知らないが、大抵は學校を卒業しても飯を喰ふ當てがないとか、相愛した二人ではあるが到底添ひ遂げる見込みがないとか、借金で首が廻らなくなつたとかいふ類ひの物質的失望が自殺者の心を喰ひ破つてゐるやうだ。勿論稀れには生活上何等の不安も感じないものでも、生の問題に懊惱するとか、失戀とかいふ原因で自殺することがないでもないが、近頃の自殺者はたとへ表面生の問題に關する哲學的煩悶とか失戀とかいふ浪漫的な書き置きを殘して死んで行くものにても、全然物質の生活に慴れ震るへてゐないものはない樣に見受けられる。

もういゝ加減に死んで呉れてもよさそうなものだと其老人の黒枠寫眞が新聞に出るのを待ち構へてゐる老人は却々死なないで兎角いらざる所へしやく／＼ばり出して困るが、是等の老人から見れば前途尙春秋に富む青年が自ら其生命を斷つといふやうなことは誠に不可解な珍事であらふ『人はどうして自分で死なうとする程馬鹿になるんだらう』といふアルベルトには到底若きウエルテルの惱みは分らない。老人連が青年の厭世的自殺を見て一概に薄志弱行とけなし付けるのは御勝手だが、若し青年が强志頑行なら老人の方が社會的に自殺しなければならなくなるかも知れない。老人が社會の上層に頑張つて居て青年の青雲の志を展ぶる能はざらしめてゐるから青年の中、志の弱いものが自殺するやうになるのだ、青年の厭世自殺の半面には老人跋扈があるのではあるまいか。

青年が哲學的煩悶や、失戀で自殺するといふことは決して歡迎すべきことではないが、其自殺にはどこかに韻文的なところがある。彼れは死に依つて社會に一つの詩を提供したともいへる、然し生活難の爲めの自殺はどうしても散文的である、そういふ自殺は徒らに人の氣を焦ら立たせるのみである、散文的自殺の流行

する社會は殺風景な社會ではないか。

端的、今の固定し、腐敗し、墮落した社會を根本的に改造して、全國民の血潮が一齊に燃燒するやうな時代を見るまでは、自殺問題は徹底的に解決することは可能ない。然し國民の腹がペコ〱では、全國民の血潮が一齊に燃燒するやうな華想が起りつこはないから結局『此の生活難を如何にすべきか』といふ問題を解決しなければならないことになる。

生活問題の消極的解決

日本に於て生活難問題を單に物質問題として解決せんとならば、勢、消極的解決法を採るより外に仕方はない、生活問題の消極的解決といへば、米が高ければ麥を喰へ、牛肉が高ければ豚肉、豚肉が喰へなくなれば馬肉、鮮肉が高ければ煑魚、煑魚も喰へなくなれば干魚といふ風にだん〱惡食をするのである。惡食でも間に合はなくなれば今度は減食をするのである、國民の體格が降下するのは當り前だ。結婚をしては喰はれないといふので結婚を回避するのである、結婚をしても子供をこしらへては大變だといふので避姙をするのである、人口増殖率が減じて來るのは當り前ではないか、今や避姙の風は全國に遍ねからんとしつゝある、學者が態々避姙を是認し奬勵しないでも、日本の國狀にして現在の如くんば避姙の風は益々擴がつて行くばかりである。

先に掲げたデュルカイムの自殺の定義――死者自身のなせる積極的、消極的の行爲に由りて直接、間接に起れる死を名けて自殺といふ――を演繹して考へれば惡食し減食して體格を破壞することも一種の自殺ではないか、避婚し、避姙することも一種の自殺ではないか。私が先きに精神的生活に感激なきが故に『日本人は自殺者の隣りに座してゐる』といつた言葉は、又、物質的生活の方面からいつても適當な言葉となつたのである。

日本の所謂識者が近頃になつてやうやく國民の人口及び體質に關する憂ふべき現象として國民の體質降下生殖率の減少、死亡率の増加といふやうな問題に着目

し出したのは餘りに間拔けたはなしではないか、苟くも先見のある經國家（ステーツマン）は生活難の叫びが天の一角より地の一角に響き渡つた際、近い中に國民の體質及び人口問題の上に憂ふべき統計が現はて來るであらうといふことに氣が付かなければならない筈であつたが、日本にはそんな經國家（ステーツマン）は一人もなかつた。然し遲蒔きながらも氣が付いたことは氣が付かないよりは優である、只恨むらくは此國民の運命の追分路に立つてゐる一大事の際に、彼等が依然として小刀細工のつぎはぎで胡麻化そうとしてゐることである。

國民の體質を向上せしめねばならぬといふ着眼點は大によし、只其手段方法の如何が大問題である、若し小中學に於ける體操を盛んにして國民の體質を向上せしめんといふならばそれは實に末の末の問題で。かゝる一層の努力では到底目的を達することは可能ない。國民の生活を向上せしめ飽食暖衣し得るやうにすれば而して國民の心に押へ難き雄心の勃々たるものがあれば別に體操なんかしなくても體格はめき／＼上達するに相違ない。

人口の減少なんかも、若し人々が結婚を厭やがつて結婚率が減少した結果生じたのならそれこそ大變だが日本中には結婚したくてたまらない青春の男女がうぢ／＼してゐるんだ、若し茲に結婚難の唯一の障害たる結婚後の生活の不安が除かれさへすれば、更に進んで産兒の養育に關する不安が除かれさへすれば出産率は期せずして増加するのは分り切つたはなしだ。近年頻りに問題になつてゐる幼兒死亡率の增加といふ現象も母體の營養不良といふことが大きい原因ではあるまいか。

兎に角、日本國民には理想がなく、組織せられた國民的要求がなく、從つて國民的使命の自覺がないから生活問題も消極的に個人的、唯物的に解釋するより外はないとするならば、惡食――減食――避婚――避姙――體格衰弱――人口減少――國家の自殺となるのは自然の道行きである。然しながら我々は日本が國家的生活權を拋棄しなければならないやうな狀態に墮落し

て行くのを默つて見てゐることは可能ない。茲に於てが私は『世界的帝國か然らざれば滅亡』といふ力强いモットーを掲げてまつしぐらに生活問題の積極的解決法を說かねばならぬ。

生活問題の積極的解決

生活問題の積極的解決とは何ぞ、個人的でなく國民的に、物質的でなく精神的に解決しやうとするのである、即ち今日のやうな日本人に都合の惡い世界の現狀を打破して、新たに日本の世界的大帝國を立つるの計を講ずるのである。

私は平和論を取らない、個人的生活に於ても、國際的生活に於いても。平和なるものは現代に於ては決して麗はしいものではない、米國大統領ウィルソン氏は『若し平和にして戰爭の如くに麗はしきものならしめば始めて戰爭の止熄すべき希望がある』(When peace is made as handsome as war, there will be hope of war's passing) といつたが何んと意味深長な言葉ではないか、原始の平和、田園文明の平和は或意味に於いて頗る麗はしいものに相違ないが、現代の平和は戰爭よりも醜い、戰爭は優强なるものを發展せしめるが、現今の平和は優强なるものゝ發展を阻止せんとする陷穽である、平和の戰爭は、戰爭の戰爭よりも更に醜いものである。

天の攝理は平和といふ名の下に國家を墮落せしむることではあるまい、今の優强なる國家は次の更に一層優强なる國民を出さんが爲めに存在するのである、平和は此の次の優强なる國民の出現を妨げる、英米の如きは現狀を維持することが利である、佛國にも最早帝國的雄心の消磨した國である。日本の如き新興の貧乏國がこの現狀維持を利とする國から發せられたる平和の聲に雷同して、只管平和に眷々たるは自己の立場を知らないものである、世界現代の國際關係に於ては戰爭を除いては國民を新陳代謝せしむる途がない、歐洲戰爭がなかつたならば歐洲文明の眞價は暴露しなかつたであらう、而して英佛の頹廢文明、享樂文明は依然として跋扈したであらう、一國の內閣には人物の新陳

代謝が自然に行はれる、日本に於て人物の新陳代謝が思ふやうに行はれないと藻掻くものが戰爭を回避すといふは自己矛盾である、戰爭がなければ强國民、優國民、超國民がその國家我を主張する機會がない、英國や佛國のやうな國に豫後備役を申附ける機關がない。

日本からいふ世界の現狀打破は又先づ日本の現狀打破に始まらねばならない。大隈內閣の留任居据りで世間は先づ兎も角も時局が收拾せられたといふかも知れないが、此の收拾せられた時局はといへば、惡食、減食、結婚回避、避姙の時局である、日本の平和も亦甚だ醜いではないか。東方の君子國を化して賄賂國、收賄國、公盜國、未決囚を收容したる未決監となす、唯物主義の平和も亦頗る醜いではないか。

私は敢て言ふ、日本國民が自ら救ふの途は今日此際南方經略の大志を定めて、赤道を中心にしてその南北に新日本を鑄造するより外はないと、若し日本國民にして積極的に其生活問題を解決するに一決すれば國民は先づ自ら有機的に精神的に統一されねばならない、而して一意に此目的に躍進せねばならない、此目的にして達せらるれば一面に國民の道德觀、人生觀が向上し、一面に國民の生活問題は始めて積極的に解決せられ、惡食は美食となり減食は增食となり、國民の體格は優秀となる亦何ぞ結婚を回避し子孫の增殖を恐怖するものがあらう、而して國民が希望と歡喜と勇氣とに滿ちて居れば直ちに物質上の滿足は得られなくても、心理的に救はれたやうな氣持ちがするものだ、これが經國の妙用といふもので、此妙用あつて天下始めて治まるのである。

腹がペコ〳〵の所へ、オイケン、ベルグソン、タゴールでは物質的生活に何等の激感も誘起することは可能ないが南へ行け南へ行け、南には沃野が汝の空腹を待つてゐるといへる樣になれば國民の胃の腑は知らず知らずの間に滿ちて來る。

そうなつた曉、國民は始めて自殺狀態を脫がれて快活に躍り、青年の厭世思想も煙の如くに消へ去るであらう。敵國外患なければ亡ぶ、日本は先づ何國と同盟

じやうかと考へずに先づよい敵を見出さねばならないではないか。

現下の財政狀態と海軍充實問題

松山忠二郎

來年度の豫算編成は、改造後の大隈内閣にとつてなか〳〵の大事業と思ふ。元來我國の財政は、明治初年以來歳入の方は自然に幾分かづゝ増加したのである。新らしく税法を改正して新税を課せないでも、國運の進歩と共に、歳入は自然に増加したのである。而かも歳出も國運の進歩と共に、自然に膨脹したが爲めに、國庫は何時でも餘裕綽々といふ譯けに行かないで、都合のよい時で丁度一パイである。下手をまごつくと、歳入の自然増加に拘らず財政困難を訴へたのである。然るに此大勢は昨年の歐洲大戰以來一變した。或は歐洲戰爭なくても、少し變る譯けであつたのかも知れないが、歐洲の開戰のために頓に著しい變化を來した。歳入は自然に増加せざるのみか、却て大いに減收することになつた。昨年は前年度の豫算に比して、一千八百萬圓も減じた。本年は又一千三百萬圓も減ずる見込みである。現に關税收入の如きは、一昨年迄で毎月六百萬圓以上づゝの收入があつたのである。それが昨年からは急に減じて半額となり、此頃では一ヶ月に二百何十萬圓といふことになつた。歐洲戰亂の結果、輸入貿易が一番の打撃を受けたが爲め、關税收入も從つて最も多大の減收をしたのである。關税丈けでも一昨年に較ぶれば、本年は三千萬圓からの減收になる。斯樣に今まで歳入が自然に増加しつゝあつた時にすら、動々もすれば財政困難を訴へたのであるが、それが全然

倒まに歳入が增加せざるのみならず減じて來た。財政困難は無論の話である。況や大隈內閣は、財政が斯かゝる狀態の下にあるに拘らず、昨年は陸軍擴張を遣り、今年は又海軍擴張を遣らうといふのである。多分何とか歪みなりにも豫算編成の目的を達するであらうが、大隈內閣にとつて餘程の大事業である。

陸軍はもう已に決定したとであるが、海軍は來年度豫算編成に就いて一番の難問題である。之が爲に海軍當局者は何程の費用を要求する積りかまだ公にはされないが、或は一億三千萬圓といひ或は一億八千萬圓と稱する。そして此金を大正十一年度迄六ヶ年間に支出するといふ話である。さうすれば一年の平均額は二千萬圓乃至三千萬圓に達するのである。尤も擴張に着手した年は其年割額が比較的少くて、後で段々殖える計畫たらうと思ふ。そして新らしい計畫の年割額が殖える時分には、既定の繼續費年度割が段々に減ずる筈であるが故に、今度の海軍擴張計畫が實行される爲に我國の支出が直ちに二千萬圓乃至三千萬圓增加するといふとはないが少からぬ增加を見るに相違ない。そこで斯樣な臨時に歳入の減つた場合に、其支出に應ずる爲に從來の內閣なれば隨分公債を募集して之を補塡することが出來ないでもない。然し大隈內閣としては――即ち非募債主義を標榜した大隈內閣としては、之は何うしても出來ない。假令增稅しても公債を募集するとは出來ない。此海軍擴張の目的を達するが爲に、大隈內閣は大なる困難に遭遇し、來年度の豫算編成に當つては大英斷を實行する必要がある。そこで大隈內閣は例の財政整理を實行するらしい。已に各省に向つて支出の何割かを天引に節約する樣に努力してる模樣である。若し各省の經常費から無用の費用を省いて、此海軍擴張を實行するに足る丈の金額を捻出し得るものとすれば頗る結構であるが、之は到底六ヶしい。天引で節減する位の金額は極めて少額であつて到底も前記の如き海軍大擴張をする丈けの金は捻り出し得ない。そこで大隈內閣は止むを得ず、事業繰延を實行しなくてはならぬ。現に繼續事業になつて居る事業に大繰延を實行

して、そして海軍擴張の財源を作るしか仕方がない。現に本年度の豫算に於て繼續費に屬するものが七千何百萬圓に達すると思ふから、若し之に對して二割の事業繰延べが出來るものとすれば、海軍擴張は優に出來るかも知れない。然し斯樣にして海軍擴張を實行することになれば、其結果は恰度山本內閣と同じ財政方針になるのである。山本內閣の時には總ての事業に向つて緊縮方針を取り、總ての繼續事業を繰延べて、而して一億六千萬圓の海軍擴張を實行しようとしたのである。そこで今の同志會中正會其他は之を以て偏武的財政計畫と非難したのである。大隈伯も確か同樣の非難を加へたのである。然るに今度大隈內閣の下に編成されんとする財政計畫は、恰度其の山本內閣の財政計畫と同じことになるのである。否其程度から言へば、大隈內閣の方が甚だしいのである。山本內閣の實行しやうとした海軍擴張案は、一億六千萬圓の製艦費を支出する計畫であつた。然るに大隈內閣は其後已に海軍擴張の爲めに一億二千萬圓程支出して居る。其上今度一億三千萬圓乃至一億八千萬圓の海軍大擴張計畫を更に實行しようとするのである。又其上に大隈內閣は、山本內閣の實行しなかつた增師案を實行したのである。そして鐵道其他の生利的事業に向つては、思ひ切たる節約緊縮をなすといふことは山本內閣同樣である。從つて大隈內閣の偏武的財政は山本內閣のそれよりも一層著しいのである。從つて山本內閣の財政計畫を不可とした者は、今度の大隈內閣のそれをも同じ理由に依つて、一層不可としなければならない。貴族院は元來陸海軍非擴張論者が多いのである。山本內閣に對しても必ずしも海軍擴張が惡いとは言はなかつたが、海軍のみに偏して陸軍を實行しないからいけないといふのであつた。ところが大隈內閣は陸軍も擴張し、海軍の擴張も實行するのである。貴族院の多數は之を贊成するかも知れない。國民の多數は何う思ふか、之は疑問である。就中減稅論者は大いに反對するに相違ない。何となれば減稅の財源となるべきものを陸海軍擴張の爲めに奪はれたからである。尤も大隈內閣が減稅を標榜したから

して、何でも彼でも減税を先にしろ、國防の上に多少の缺陷が生じても減税しろといふことは、之は理屈が立たない。假令大隈内閣が減税を以て其政綱の一箇條としたに拘らず、若し國防上に缺陷が生じたとか、或は國家の獨立を維持し名譽を維持する爲めに國防の充實が必要であるとするなれば、此政綱は破つて構はない。場合によれば增税しても差支へない。國の存立には代へられない。只出來もしない減税を政綱として掲げたことが、大隈内閣の不明であるといふ事は勿論である。大隈内閣は之に對して責を負ふのは當然であるが、國家の存立に必要なる國防計畫を等閑にして置いても、尙且つ減税を先に遣らなければならぬといふ理屈は通らぬのである。但し陸海軍擴張がそれ程の必要であるや否や、それ程の急務であるや否やは別問題である。問題は此點にあるのである。

嘗て僕は二個師團增設の時に其不急論を唱へたのである。歐洲戰爭の經過を觀て其結果により尙必要であるなれば陸軍を擴張しても構はぬが、此世界の大騷動を目の前に置いて、陸軍の均勢を維持する爲めに二個師團を增設するは早計であると言つたが、之は僕一人でなく、世間にも澤山同様の意見があつた。此議論は今日では大いに當つて居るのである。歐洲の戰爭の爲めに戰術上若しくは陸軍の編來上如何なる敎訓を得たかは今言ふに及ばない。之は專門家の議論に任かしてよいが、過日來ガリシア及び波蘭に於ける露獨兩國の戰爭の結果に徵して觀れば、明かに二個師團增設の必要はないのである。露國が彼の如く大敗しても尙且つ二個師團增設の必要がありとすれば、其大敗以前に於ては、非常に其必要があつたのであつて、兩三年前まで之をうつちやつて置いた當局者は寧ろ無責任と言はざるを得ない。此理屈は海軍も同じである。歐洲の戰爭の爲めに、海軍が如何なる變化を蒙るかゞ解らぬ中、急いで其擴張に著手するに當らないのである、尤も歐洲の戰爭の結果、聯合軍が戰敗に歸すれば、我國は再び獨逸と戰爭をせねばならぬやうな事が出來しないとも限らぬ。或は歐洲で勝つた獨逸の海軍が、東洋に來

て膠洲灣を奪ひ返さんとするかも知れない。斯ういふことは事實上萬々ないことゝ信ずるが、海軍擴張論者は之も其擴張理由の一ヶ條に數へて居ることは疑ひない事實である。又今年は桑港博覧會其他の關係に依つて、米國との間も圓滿に行つたが、此次の大正六年度にカルフォルニアの州會が開かるゝ場合には、日米の關係が餘程險惡を示すといふことがないとも言へない。就中昨年の戰爭以來英獨露佛は勿論のこと、米國の如き中立國と雖も、頻りに海軍を擴張して居る。故に我國も此等と均勢を保つ上に於て、或程度まで海軍擴張の必要がある。

以上は海軍擴張論者の主張する點であるが、第二第三は暫らく措き、若し第一の歐洲戰亂の結果を悲觀する爲めに海軍擴張をしようとするなれば、之は大いなる誤りである。若し此必要の爲に我國が豫め準備する必要がありとすれば、それは一億八千萬圓を出して新しい海軍擴張に着手するよりも、今現に工事中の軍艦の速成を急ぐ方がよい。新計畫に投ずべき費用を以て既定計畫の事業を速成する方が最も肝要である。歐洲の戰亂は何時まで續くかは何人にも解らぬが、今後三年も五年も繼續するものとは思へない。遲くとも一兩年に形附くに相違ない。場合に依れば間もなく形附くかも知れない。然るに今度着手せんとする海軍擴張計畫は來年度より向七年間に完成する計畫である。そんなものが到底今豫想したやうな場合に間に合ふものではない。否、僕は現に工事中の戰艦すらも此肝心の時に間に合ふか否かを懸念に思ふものである。今現に建造中の超弩級の戰艦二隻(伊勢、日向、山城)が、竣工するのは大正七年度であるから滿三年の後である。歐洲の戰爭が聯合軍が敗けになるとすれば、それより早く結著するのであるまいか。獨逸が英佛の艦隊を擊破して東洋に來つて膠洲灣の回復を計るといふことが若しありとすれば、それは遲くも今後一兩年の後であると思ふ。そして工事中の戰艦が其時の間に合ふまいと思ふ。況んや來年度から七年間の豫定で以て新造する軍艦の間に合ふ譯けはない。從つて今日の急務は新規の

擴張に着手するよりも、先づ既定の事業の速成を期するのが必要である。遲くも來年度中頃に完成することが必要である。斯うする方が製艦の方針として得策と思ふ。今日の製艦術は日々著しき進歩をして居るのである。兩三年も經てば、新造艦も已に舊式になるのである。然るに日本のやうに設計してから五年乃至七年の後に非れば竣工しないやうでは、出來上つた軍艦は悉く舊式のものばかしである。新式のものは一隻もなくなるのである。それよりも一隻づゝでも、二隻づゝでも、一旦設計して着手すれば成るべく早く製造する、古くならない中に間に合はす。先づ二年間位に完成するといふ方針を取るのは最も必要ではあるまいか。殊に今度の歐洲戰爭に觀るのに、潜航艇とか飛行器といふものが盛んに利用される。從つて從來の大艦巨砲主義も今後は一變する必要がないとも限らない。此際に當つて今後七年間に亙る大繼續事業を計畫し之に着手するが如きは、少し早計ではあるまいか。工事未だ央ばならずして、總て舊式となるやうなことはあるまいか。此點から考へても、今新規擴張を計畫するといふのは間違ひである。國防上一日も緩うすることの出來ない必要があるなれば、先づ製造中の軍艦の速成を企てるのが肝要である。

又財政計畫の方から言つても其方が必要である。先に述べた通り財政上近來非常の變調を來たして居るのである。今後の歳入が何程になるか、何年の後初めて戰爭前の狀態に回復するのであるか、頓と見込がつかないのである。此時に當つて將來七八年間に亙る財政計畫を立てるといふことは頗る不便とするところである。故に此點からしても既定計畫の速成を急いで、新規の計畫は財政狀態が常態に復した上で着手する方が好都合である。勿論、國防上必要とあれば何を差し措いても遣らなくてはならぬ。前に言つた通り增税も尙且つ辭せないのである。然しながら成るべく財政との調和を保つて財政上最も便利とする方法に依つて其目的を逐する必要があるのである。政府が防務會議を新設した理由も之に外ならないのである。故に此點から言

つても、規定計畫の速成を先にして新規の計畫は財政の常態に復した時にする方がよいと思ふ。

天下多難の秋

福本日南

分らぬ事をいへば、一概に唐人の寢言とけなせど、唐人も中々侮に置けぬ所がある。宋の邵康節が天津橋上に杜鵑の聲を聽いて、『地氣將に移らんとす』と豫言したなどもそれである。此地氣の移動を察するは、吾等には些と六ケしい話であるが、天・地・人中の人事に至つては、愛憎に遠かれば、存外吾々にも未來が見える。差向き此頃丸ノ内に大隈内閣が居据わるのを視れば、『人氣の將に移らんとす』るのが、歷々として眼底に映ずるのからが、既に笑止に感ぜられる。

昨年は三月、山本内閣が無前の醜態を現出して政友會と供に政權を投出した際には、智巧老猾な淸浦子などが飛出しても、如何ともすることが出來なかつたのである。是時に當り、設ひ義理一遍のお世辭ぐらゐは受取られたらうが、其實内に確乎なる元老の後援を得られる當も無く、又外には少數な同志會ぐらゐが身方するばかりで、議會に多數を有するでも無いのに拘はらず、物の見事に内閣を組織し、今年今月今日までに押通して來たのは、流石に大隈伯と謂はねばならぬ。爾後伯は四回の議會に政友・國民の聯合多數黨に當り、一たび議會を解散するや、多年朝野の間に蟠踞して、其專橫を極め、元老の重望・官僚黨の勢力を以てしても、昔の叡山法師・鴨川の水と一般、如何ともする能はずと嘆ぜしめた政友會を骨破微塵に打碎いて、一朝に之を無力なる少數黨にまで墜落させた手際に至つて、殆

んど一世を驚倒させた。何といつても、伯は當代第一である。

尤も之に對して、政友會一派の連中は選擧干渉の結果だといひ、同志會一派の連中は我黨努力の致す所だなどいひて、或は伯に罪を負はせ或は已に功を歸する。成程精しく詮じつめたらば、干渉絶無ともいへねば、同志會奮鬪の効も多少はあつたらう。併ながら大勢は決して左樣な些々なるものでは動かぬ。近き總選擧の推行ぶりは是迄の諸内閣の下に行はれたものに比すれば最も公平に最も嚴正であり、其の違犯者の取締に於ても敵と身方の容赦を置かなかつたのは、社會公衆が慥に認める。それなら同志會が多數を得たのも、一般はそれに同意を有するといふよりも、伯に同情を表したからである。現に其の當時地方を巡つてみたが、同志會は大嫌ひだが、大隈伯に同意だからそれを助けるのだといふ聲を、到る處で耳にした。伯の聲望も亦スバラしいと謂ふ可しだ。

が、伯は何に由つて此渇仰を惹き、又此成功を收めた歟と顧みれば國民の多數が既成政黨積年の横暴を憤つたのと、伯が二十年一日の如く、憲法政治を鼓吹し來た上に、其の一たび内閣に起つや、益々聲を大にし氣を盛んにして、憲政の實現、政弊の釐革を呼號し來つた結果である。加之、彼は其執政以來、亦觀る可き政績をも擧げて來た。彼は兎も角も三十年來蟠欝し來つた海軍の刷新を斷行し、一方には醜類を糺治すると倶に一方には大慾巨惡をして屏息せしむるに至らしめた。天下は彼に謳歌せざるを得なかつたのである。次いで發したのが對獨開戰であつた。彼は其の初め加藤男に聽いたり、元老連に容喙されたりして、一時、好機を逸らうとしたとはいへ、それは固より閣中の秘事、樂屋の内輪話に過ぎぬ。乃て堂々獨逸に戰を宣し、帝國を導いて玆に始めて、列强と聯なり世界の治亂に參預するに至らしめたのである。彼に反對の政友派などは是からが外交の失政など誹謗すれど、世界の一强として立つものが、世界の治亂に參預し得ぬやうでは、異日相繼いで頻發せんとする東方問題に對して、發言

の權利をすら失墜するであらう。況んや日英同盟の條章は之に參加の義務を命ずるに於てをや。彼の斷じて帝國を戰鬪に導いたのは、當然の擧とはいへ、斯かる場合に一大政黨として自ら居りながら、非戰論などを唱へる者のある前に視れば、亦一大英斷と謂ふ可きである。

次に發した支那外交に就いても、排大隈黨の排加藤黨は躍鬼となつて其失敗を呼號すれど、公等が當局時代の對支外交は如何であつた。漢語でいへば路跙・逡巡當然收む可き諸權利を一も取り得ずして來たのである。實はといへば、靑天・白日の下に、面を抗して、彼等には對支外交の失敗など口にす可き權利は無いのである。之に反して伯の外交精しくいへば、加藤男の外交は、理想の上から謂へば、多少の遺憾もあれど、十餘年來、其間の數內閣が手を著け得なかつた諸問題を皆提出し、實はといへば些し出し過ぎたと思惟せられるまで提出し、之に對獨戰爭から帶起した諸案件までを加へ、樽俎・折衝、半年足らずに諸要求中七分の目的を達し得たのは、亦此內閣の功績と謂ふ可しだ。或は其交涉の緩稽を指斥して、加藤の無手腕を嘲る連中もあれど、外交は獨角力で無く、對手と取組むことであるから、何人が遣つても、さう〱注文通りには參りかねる。現に之を露國に見る可しだ。彼が外蒙古へ施張の內諾を我國に得たのは、千九百十年の六月、日露協約再締の時に在つたのである。爾後之に就いて、彼は對支交涉に五箇年餘を費し、今年に至つて、漸く其諸要求を實にしたではないか。彼は五箇年、我は半箇年、何れか長きや、何れか短かきだ。此邊から買つてみたら加藤男の方が寧ろイズヴォルスキーよりもサゾノフよりも優つてゐる歟も圖られぬ。論より證據、國民は外交の知識に最も短かけれど大凡に就いては默認がある。反對の連中が聲を嗄らし筆を禿して、攻擊の鋒を伯が內閣に集中してみたれど、國民の多數は左様言ひたてるほどの失敗とも感せず、日比谷ヶ原の大集會をも霞ヶ關の燒討をも起さないので知ることが出來る。伯の內閣が人心の歸向を制して、臨時總選擧にも大勝を

制し得たのは、抑々亦偶然ではなかつた。

が、伯と伯內閣の聲望は此邊までが朔、望高潮の最高度ではなかつたらう歟。謠曲の句調を假りて之を謂へば、月諸共に入潮の潮にひかれて……何とやらといふ感が、其後に續いて動いて來た。其一は參政官の設置である。尤も是は政黨者連多年の希望で、伯內閣の創意でも何でも無い。が、伯は內閣組織の當初から早く此希望を察し、夙に政綱中の一項として、

「憲政の運用尚未だ完からず、政務及恒久官職の區分未だ明確ならず、爲に國家の常務をして動もすれば公正を失はしむ。政府は國務の精確機緻を保障し、且憲政の運用を圓滑ならしむる爲め、適當なる官制の更改を施し、且つ適才の途を講ぜんことを期す」

と宣言してかゝり、之に關しては、隨分樞密院などでは手强い反對論者のあつたにも拘はらず、之を押切つて、官制を成立せしむるに至つたのであるから、政黨の觀ひは譬へんに物なしだ。是だけは如何に反大隈派（アンチ・オホクマアー）の政友會連でも、衷心には難有し忝けなしと感謝しつゝあるであらう。是れ此官制は大隈政綱の宣言の如く純理論からいへば如何にも論理的であるから、彼れ是れ言ふ可き處は無い。さりながら英米人等が得ていふやうに「理論的には然り（セオリチカリー・イエース）、實行的には否らず（プラクチカリー・ノー）」といふ可き事は、世上實に在りうちである。全體制度なる者は如何に善美であつても、それは固より死物に過ぎぬ。之を運用するは人に在るから、其人を待つて、善果も惡果も生ずるのである。論より證據は立憲制度で分る。之をアングロサクソン民族に授けて施行させれば彼が如き煥乎たる國政を現出すれど、波斯民族や漢民族に授けてみれば、却つて紛擾の種子を蒔くのが落ちぐらゐなものであるのに視ても、容易に首肯されるであらう。今此參政官制度も亦同一である。伯は之を運用して如何なる效果を收めつゝある歟である。伯は

第一に之を實現して政黨者流多年の希望を充たし黨人の觀望を內閣に牽引するの利益を獲た。即ち多年官海に游泳し、奏任から勅任の官階を躐登つた者

か、否らざれば高等文官の試驗といふ龍門を跳ね越さねば高等官にはなれなかつたものを、無官太夫敦盛から納言・參議にも拔擢される一路の針線が通じたから、己れ龍髯に縋り龍尾に附して、宿昔靑雲の志を遂せんと、胸を躍らす黨人原を惹著け得た利益は慥に其一つである。

次には同志會なり中正會なり後援會なり無所屬組なりの中から或は領袖或は不平連などを取り、是等の諸黨を兎も角も御身方仕らせる利益を獲たのは、其の二である。

が、生憎國民の是等の黨派に屬する者は九牛の一毛である。大多數の國民が今日まで伯及伯内閣に同情を寄來つたのは多年の黨弊に疲困し憤怒した結果、伯内閣が昨年五月に發表した政綱を正直に受取り、是に由つて此に革新の政績を見ることを得るであらう、と期待したからである。然るに其政綱の一なる

參政官は全く俗惡なる政略の具に供せられ外交文書の種類と名目さへも御存じ無さそうな連中を外務の參政にしたり萬國郵電會議にでも引出したら、半句の口も利けそうも無い者を遞信のそれに擧げたり酷評家に言はせたら優倡侏儒をして戯れ進ましめると謂ひそうな拔擢の實を示されたので、國民の多數はあれが「適才の任用」かと玆に厭や氣を生じて來た。

之を伯に聞かせたら、周圍の歡聲に掩はれて何ッさる事があらうかと打消されるであらうが、早稻田、永田町の門外一歩を出で、與黨以外に聽いて御覽なさい、直ちに其不評判を會得せられるであらう。

次に參政官連中となれば、兎も角も一省の政務次官となつたのであるから、省務に通曉せんと欲するは固より其處ではあれど、諸僚の執務する者を拉らへて、何でも聽きたがる、それから由來の次官連なら大概省務を飮込んでゐるから、一を聽いて十とまでは行かずとも、三や四・五までは知つてゐるから、下僚が何を持出しても、大槩は即斷・即決がつく。處が新參政官は一を聽いて其一が分らぬ者、十の八・

九にゐる事故、下僚が一事を稟議する毎に、それは抑々如何なる理由かと文書第一項の叙言（プレフェース）からが質問とくる。爲に昨今諸省の事務の澁滯は實に甚しい。嘘そと思召さば、各局課長以下の下僚に内々尋ねて御覧なさい。それは何れもコボシ切つてゐる。幸に國家は淵默にして、口を利かぬものであるから、マアそれでも遂行されやうが、若し國家が物言ふことなら『己にはまるで不必用なものを振りだして、政府人民に迷惑させる』といふであらう。

或はそれは一時の現象、土臺が何れも英物であるから、事務に通ずれば、それらの批難は歳月を出でずして消散すると謂はう歟。左樣參らぬは現在日本の政事組織、政事の中心が成立してゐないから、内閣交迭は年々に起る。甚しければ、一年の内に數回の交迭すら續發する。其都度毎に春雁秋燕のデモ參政が入變り立易つて、參政學校の一年級に就學し來る可きは事の必然たるでは無い歟。諸省は恐らく遣りきれまい。

加之、始めて俑を作る其れ後なからん乎である。今後大隈内閣仆れ、假に政友内閣代つて其後位に坐するとせん乎、待つてゐましたと言はぬばかり、自稱支那通の猪鼻藏は外務參政、受賣經濟論のデコ助は大藏參政と、凡そ其黨派中の有像無像が代つて驀進し來る可きも、亦明らかである。殷は夏の例に由り、周は殷の例に由る。其れ或は周に繼がん者は、百世と雖も知んぬ可しぢや。國家は是が爲に永久に損害を受け、代つて現るゝ新内閣も新内閣も、是が爲に成立當初から國民多數の輕侮と厭惡とを招致す可きは、鏡に懸けて見るが如し。國家の威嚴を缺損するは、是より益甚しからんとする。

但しそれは未來の事、さし向き伯の現内閣は、是に由つて、一分か二分かの利便を得て、國民多數の同情を冷却せしむる上に於て、八分の損失を免かれぬ。自分が目して『人氣は將に移らんとす』といふ誘因の一つは此に在る。

次は伯の與黨隨一なる同志會の寂しい量見である。全體由來の黨弊が地方の自治制までに及んでゐるのは

久しい事で、地方住民が之に苦しめられてゐる事も、亦實に甚しい。然るに現內閣は此黨弊を醱酵釀醞した政友會を敵として立つたから、地方住民は最近の臨時總選擧に爭ひ起つて、內閣謳歌の議員候補者を選擧し、終に今日の如く反政友派の多數を議會の屋場に見るには至つたのである。それで地方住民の多數は自分等の選擧した議員にして多數を制するに至つたら、此に一大政黨は組織され、中央は勿論、地方にも互つて、政友派の横暴を控制され、其間に在つて、始て吾等は蘇息し得るであらうと期待したのである。是れ此民心の歸向を充たして遣るのが政事家の本領では無い歟。然るに同志會の領袖輩は僅に百五十の黨代議士を得たのに得意となり、之に聯合派を合算すれば、議會を制するは掌中に在りと爲し、自ら進んで大政黨の組織に入込まんともせぬから、爾餘の中正・後援・無所屬の諸派も亦手を拱し、今日に至つては、最早一寸手も著けられぬ狀況とはなつた。何故同志會の諸領袖が此理想的好事業を然く閑却したかと顧みれば、同志會で繼續すればこそ、總理・總務・幹事長で幅を利かせる事も出來れ、諸派を合同して一新大黨となつた曉には、左樣澄ましてゐる譯にゆかぬ。今日既に諸政黨の比較的最大多數黨たれば、何を苦んで、自家の地位・權力までも犧牲にして、大合同を策する必要があらうといふのである。是が爲に、國民の多數は尠からず亦其期待を失墜した。是れ亦人氣の移動を促進する一因である。今日立憲帝國の立憲國民と銘こそ打て、國民の政事思想は幼稚も幼稚、空中に繫つた吹流し同樣である。風の吹次第で何れの方向へでも向ふ。二百有餘の代議士を議會に有すると得意がつた政友會のそれを、九十以下に落ちさせたのも此國民である以上、更に今一度政論上に二百十日のタイフォンでも加へて御覽、百五十の同志會が百以下に墜落するなどは、朝飯前の事である。楊柳垂下に何時も土鰌は居るものとは極つてをらぬ。木下藤吉郎ではないが、大將危い哉、危い哉。

次は最近に起つた內相瀆職問題である。實はといへば、薩派政友の聯合內閣などが干犯し來つた幾多の大

瀆職の前に視れば、此度の瀆職は伊・呂・波の伊の字、是が爲に內閣の總辭職は、情に於ては氣の毒にも感ぜられる。さりながら大隈伯は積弊の刷新を聲明して、內閣に立ち來つた者である。其押立てた牙營の大纛たる政綱の上には何と宣明した。

「近時政治上種々の弊害を生じ、普く中央幷に地方の行政・敎育・實業等、國家幷に社會の諸般の施爲に浸潤せんとするの虞あり。政府は輿論の趨向に從ひ諸般の弊害を芟除し、憲政の本義を發揮せんことを期す」

といふものは、其一つである。

「官吏服務のこと其制備はらざるに非ずと雖も、近時漸く弛緩に就かんとするの虞れあり。官吏は宜しく服務の規律を恪守し、廉恥を重じ、勤勉・懇切を旨とすべく、責に統督の任に在る者、宜しく官紀を振肅し、賞罰を嚴明にし、以て庶僚をして戒愼する所を知らしむべし」

といふものは、其二つである。此前に照し看て、今回の瀆職事件は如何である。若し其事件が內相一個の私腹を肥さんが爲に發したならば、大宥恕の心を推して內相一個を免黜して、尙ほ其內閣の繼續を寬假することをも得べし。然も今回は何人が之を視ても、事は政策の遂行上に關連する上は、好し其事情を知られなかつたとするも、內閣の責任は決して解除せられるを得ぬのである。彼政綱の手前に對しても、內閣總辭職に出でざるを得ないぢやない歟。然るに伯は或已むを得ざる事情の爲に、又其閣員の大分も亦伯に從つて辭意を飜へした。伯の境遇と苦衷とは如何にも御察し申す。併ながら其行動は如何に贔負目に之を視ても、立憲的と謂ふことを得ぬ。是に至つて、伯は尤めて尤めに倣ひ宜して其言を食んだ譏りを免かれることを得ぬ。近く政友會國民黨が爭ひ起つて、之を非責するは、固より其の處である。輿衆は當てにならぬ樣でも、存外公正な判斷を有する。此頃政友會が內閣攻擊の演說會に成功したといふのも、天津橋上の杜鵑の聲かも知らぬ。兎にも角にも居据わつた大隈內閣の頭は慥に傾斜を加へ

た事に御氣づきあつて然る可しだ。

さはさりながら正行よ、暫しの難をのがれんと。弓張月の影闇くなるのも亦時代に覩れば、已むを得ぬ處もある。內閣の動搖する每に、元老の諸君等世話は燒けど、さりとて自ら難局に當る勇氣は無し。內の息子は器量好しと、老爺サン方は思はれようが、淸浦・平田・小松原・扨は新平・磐六君、何れを看ても山家育ち、難局の匡救が出來そうにも感ぜられず。又政友會の意氣地なさは己れ取つて代らんとの、自信も抱負も持合せず、大隈の居据わりは攻擊するも、元老の引留めは沈默に附し、其御氣嫌を伺つて、聯立內閣の過去を夢想すなど、哀れといふも愚かである。而うして國家の前途を見渡せば、御即位の大典は眼前に逼る。世界大戰の收局も亦遠きに非ざらんとする。是時に當つて雲の上より下界の政治的人物を覽そなはさば、他に比較して、大隈老人は鐵中の錚々、マア彼れ歟と思召すであらう。雲の下から望んでも、矢張其邊に歸著しよう。伯が已むを得ざるの事情に對し、多年築き上げた名聲を犧牲に供せんと決心したのも、亦是にこれ由るものある歟。嗟乎海內人なく、獨り至尊をして社稷を憂ひしむ。草澤の布衣も亦淚なき能はずだ、

顧ふに改造內閣に、世話燒の元老が比較的に干涉せず。伯を放つて、自家の育てた子弟を收めて、閣僚を補充し殆んど全然大隈一味の內閣を組織せしめたるもの、善意に解すれば、伯をして十分其抱負と政策とを實現せしめんとするものとも謂へれど、深酷に評すれば既に頭の傾きかけた內閣に干涉し、其責任を分擔させられては堪まらぬ。大隈！ 貴樣勝手にしろと投渡してみたものと謂ふことも出來る。それで諸新聞の批評に看れば、改造內閣の危險は元老との關係斷絕した處に在るといふ。其れ或は然る可し。併ながら、丈夫豈人の牆下に立たんやだ。伯の爲には其投渡された處がつけめでは無い歟。今や伯は家の子・郞黨を聚めて、自ら王たれば、其の爲す可きは、此秋に在る。奚ぞ惆悵として獨り悲まんや。已往の諫めざるを悟り、來者の追ふ可きに知るぢや。先生既に內閣に居据わつた以上

は、斃れて已むの覺悟を以て、邁往突進するの一あるのみである。旗は少々破れたれど、當初宣言の政綱旗を再たび飜へし、遣れるだけ遣つてみられるさ。其政績にして今後に見る可く、移りかけた人氣とて强がち挽回の出來ぬ限りでもあるまい。但し子分の多き閣僚の内閣は出來たが、新たに入つた、加藤中將などは、條件附の注文を提出して、昨年のに春は、淸浦子が折角手にしたボルト・フイユを打壞した例もある。彼の後ろには傀儡子が控へる。其加藤氏が今度入閣したのであるから。無條件ではござらぬ筈である。之を充たすだけにでも、次期の議會の困難は察せられる。

且つ其れ天下の事は孔明のいつた通りである。「先帝の楚に敗るゝや、曹操手を拊つて、天下の事旣に大いに定まると謂へ。而る後ち先帝東のかた吳に連り西のかた巴・蜀を取り、兵を擧げて北上すれば、夏侯首を授く。漢事將に成らんとする也。而る後ち吳更に盟に違ひ、關羽は毀敗し、秭歸は蹉跌し、而して曹丕帝と稱す。凡そ事斯くの如し。逆め睹る可きは難し」といつた。春來、露軍は常勝の威に乘じて、墺のガリシヤを席捲しレムベルヒを取りて墺・匈國を震駭させ、次いで伊國が南方より起つて、聯合軍に參加するに當つては天下の事將に大に定まらんとするの觀があつた。然るに獨逸は英・佛聯合軍の力足らずして、守勢を維持するのみと見て取るや、大軍を東方に移し、其兵器の精銳と交通機關の整備とに資藉し、墺軍と相合して、露軍に聚まり、旣にガリシヤを奪回せるのみならず、進んで露領ワルソーに入り、今や露國北部の强禦たるコウノの要塞をすら陷落するに至つた。是だけに視れば、獨逸の得意方に思ふ可しである。さりながら英國の海軍北海及ドウアー海峽を壓するが爲に、此方面から獨逸に輸入された新大陸からの小麥の粉及其他の軍需品を漸く杜絕し、更に伊國が中立から出た爲に、此國及此國の海口を經て導入された糧食や物資も、亦同じく絕望となつた。爲に生活上の困難は歲月に加はり、戰に克つて、飢に泣く悲境に在る。彼がワルソーを席捲しながら、それを露國に還附するは勿論、ガリシヤまで

墺國に割かせて、露と講和の意を依稀めかすものは、彼の弱點を遺憾なく自ら呈露する

而うして西方の問題は恐らく白耳義に集中するであらう。元來『獨逸の將來は海上に在り』といふものは十餘年來此國の國是國策として熱衷する所である。然るに此國の地位はバルチック海の奥に偏在し、新・舊兩大陸の角逐海たる大西洋とは餘りに遠隔し、印度・太平兩洋とは尙更懸絶せるが故に、海軍を以てしても、貿易を以てしても、覇を世界に稱するに足らぬ。是故に彼國との地續きにして、而もアンヴェルス等の良海口を有する白耳義を收めて、獨逸聯邦の一に入れんと欲するもの、彼が今回戰鬪の主たる目的の一つである。昨年の八月、國際の平和斷絶すると倶に、彼が第一に主力を注いで此小王國を征服し、爾來今日に至るまで死力を出して、此に占據するものは、畢竟講和の曉に或は之を一世代前の如く、和蘭と聯合させて、獨逸勢力の下に措く歟、若くは直ちに聯邦中に編入して、世界に切つて出る大玄關とする歟、二者其一に置かんと欲するが爲である。之に對する佛・英は如何。獨逸一たび之に據れば、比律悉・巴里の間は平坦々たる熟路であるから、朝に大兵を比律悉より擧げれば、夕べに佛境に入ることが出來る。佛國の平和は年百年中、ファイエーブルーに脅かされる事となる。佛國たるもの國命を賭して、之を爭はざるを得ぬのである。が、英國の戒心は更に一層の緊接を加へる。其首府倫敦は一葦の海峽を隔て、アンヴェルスの前に展開する。獨逸の海軍をして此に據らせたが最後、世界に有する英國の貿易は彼が砲火の爆擊に委することゝなり、大英立國の基礎から顚覆される。彼勘定高い英國をして昨年來珍らしいほど躍鬼となつて、獨逸の前に抗立せしむるものは、之が爲たるに外ならぬ。唯だ其れ熊と河童(カッパ)の鬪ひ、海に於ては河童の優勝を認むれど、陸に於ては河童は熊の敵に非ず。陸に上つて英軍が守勢に出づるの外なき所以である。併ながら彼英國は畏る可き彼の富力に資藉し、自ら助くると倶に、與國をも援け、持久策を以て獨に當り、其れをして戰には克つても、資力に

屈し、終に和を請ふの已むを得ざるに至らしめんことを必期しつゝあれば、究竟する所は、白耳義の處分問題に講和の主點は集まるであらう。

それで何れにしても、此大戰の終結は當初一般の豫想に反し、聯合軍が獨逸の死命を制し、其れをして軍國主義を拋棄させ、干戈の氣を銷して、世界に新らしき昇平の氣象を迎へることも出來ねば、獨逸獨り志を得て、世界の大覇王たることも出來ぬ。すれば講和の翌日からは、更により大規模の軍備擴張が新たに列强を衝動する、帝國爭で此國際的影響を逃れるを得んや。加之、吾人は此大戰‥世界の列强といふ列强を悉く渦中に捲込んだ此大戰の開始以來、獨り超然として戰爭以來に高踏し、戰費らしき戰費としては一錢一釐をも費さぬ無疵の北米合衆國あることを忘れてはならぬ。列强は何れも開闢以來未曾有の鐵火的に經濟的に疲れ切つたれど、米國のみは無病息災にして、髀肉の嘆を爲しつゝある。戰後の列强が軍備擴張に五億を投じ得ば彼は十億圓を提供す可く、他が十億圓を投ずるならば、彼は二十億圓をかけ得べき地位に在る。而うして近時のヤンキー意氣、之を代表するルーズヴェルト氏が桑港大博覽會の場内に聽衆五萬の血を湧かさせた演說に聽け、徹頭・徹尾我帝國を目的として太平洋面に海軍の大擴張を爲さねばならぬといふに在る。其演說中の一節を擧げよう歟、

「諸君は諸君の前に無用の者が立てば、諸君の爲に邪魔になる。諸君は之を追ひのくべく、自己の權利を主張するは、當然の事である。太平洋の問題も亦同一である。此方面に當り、我米國の前に或邪魔物の横はるありとせば、我米國は當然力の必要を認めねばならぬぢやない歟」

と公言してゐる。當日場内には彼の演說ぶりを撮影しようとて、幾多の寫眞班が聽衆とルーズヴェルトとの間に立つて、一般の展望を妨げたので、一時殆ど總起ちとなつて怒り出した。それで彼は寫眞班を制して、それを退場させた後、直ちに之を假りて言つたから、邪魔物の語を用ゐたのであるが、それにしても彼が我國

を邪魔物視するは、斯くの通である。而うして彼はブライアン氏の平和主義を、口を極めて罵倒してをる。が、是れ誰だルーズヴエルト氏彼自身の一家言として輕視す可きで無い。乃ては戰後列强の施設と一致して、實現す可き危險性を有するものたるを思はねばならぬ。現內閣は是等に對し、如何なる成算を具へたる歟。

且つ之より幾層切實にして、而も必至の趨勢を豫見せしむるは、戰後の極東問題である。上にも述べた通り、交戰列强は未曾有の大戰の爲に國力・國財を傾倒して來たのであるから、平和一たび克復された曉には敵も身方も何は置いても、國の全身に完膚なきまで負ひ來つた經濟的の金創を治療しなければならぬ。之に就ては列强何れも腕に撚りかけて、自國の工業を一層奬勵し、之を四外に放出して、利益を收めんと努力す可きは、固より言ふまでも無いことである。が、列强の商・工政策は一時に何れも一途に出來る事であるから、列强相互の貿易は寧ろ難境に在るものと謂はねばならぬ。從つて其工業商品の出口を歐洲以來に求め、畏る可き激烈な競爭は是より開始されるは必然である。其の主たる競爭場裏は何處であらう。言ふにや及ぶ、其一は四億の人口を載せた漢民族の洪大帝國である。是れ此民族は歐洲のそれとは異なつた素質ではあれど、四千年來の文明を有し、其富力は歐米の前に視ればこそ低級なれ、阿弗利加民族や南洋土人の比では無い。根が勤勉の人民だけに、相應の購買力を備へてゐる。お負に此大民族も近年頗るハイカラとなり、斷髮洋裝としやれ出して來たから、彼等の必用と嗜好にさへ投ずれば、一人に壹圓の品物を賣りつけても、四億圓の商賣は出來る。お負に政府も陸・海の軍備を始め、凡百の制度を歐米に倣はんとすれば、此方の需用に應ずるのも、亦一角の利益であらう。それから天然の鑛物といつたら世界の寶庫とも稱す可く、それが到る處の山野に伏在して、時運の開發を待つてゐる。リヒトホーヘンなどの說に聽けば、山西の一省が含有する石炭だけでも、六千三百億噸に達し、現時世界の一年の消費總額約六億噸だけづゝ掘出すとしても、優に向ふ一千年

を支へるに足るといふ。其他鐵の如きも亦無盡藏だと聞える。其他の諸鑛物も亦大概無い物はないとの事であれば、鐵道網にして全土を掩へば、新らしい無限の洪利は此舊帝國の地下から甌窶滿篝・汗邪滿車であらう。從つて列强の鐵道・鑛山等の獲得競爭から、自國製品の賣込競爭は想ひ見るだも餘りある。其間に介在して、我國の利・權を伸張するすら、既に容易の事業に非ず。併しそれだけなればまだしもであるが、之に關連して、列强の勢力競爭は更に一段の猛烈を加へんとする。即ち英國は長江一帶を根據とし、露國は北部滿蒙を土臺とし、我帝國も小分ながら、既得の南滿及新たに約した東蒙・山東の一部から、其他に手を伸ばす可き便宜を有するに引きかへて、米國は支那經營に熱心な割合には、其獲得物は未だ多しと謂ふ可からざる方である。而うして獨逸は此老大國に近十餘年來苦心慘澹して築き上げた雄飛の諸準備を、一朝にして我國の爲に名殘りなく破壞せられた怨恨は、彼の骨髓に徹せるものがあらう。之に加へるに、支那政府も亦春來の我諸要求に不滿を抱くの色容を掩はず。且つ此政府は近年最も兩國と接近すれば、一旦平和的國際競爭が更に再たび開始せられたる曉には、我に不滿を抱ける支那と、我を邪魔物と目せる米國と、我に復讐を欲する獨逸とは、肝膽相照して、我を窮地に擠さんとせざるの限りでない。況んやカイゼルの權謀・術數は爲さゞる所なきに於てをや。今日こそ米國と獨逸とは多少睚眦の間に在れ、由來兩國は親近の間柄なれば、戰雲一たび消散せば、亦舊態に立返るは、さまでの困難事とは思はれず、復好の手は獨逸から先づ突出され、米國の之を緊握す可きも、恐らく近き將來に在らう。是に至つて彼カイゼルが其力を極東に利用せざる可しと思ふ國あらば、其國は非常の窮地に陷るであらう。『商業は平和を愛す。併ながら戰爭を伴ふ』との格言は、今や適切に我國を警戒しつゝある。我國朝野の政治社會は之に對して如何の見地を有する歟。就中、大隈伯の內閣は如何の準備と決心とを以て、之に當らんと欲する歟である。

尙ほ一つ言遺したのは、今後應に開かる可き列强の平和會議である。抑々今回の大亂迸發に至るまでの近三十餘年に亙つた世界の形勢は、大摑みに謂へば、千八百七十八年に於ける伯林會議の結果である。當時此大會議に出席した列强の全權委員を回顧す可しだ。獨逸からは大宰相ビスマルク公・外相ビユーロー伯及ホーヘンローエ公、露國も亦大宰相ゴルチヤコフ公・シユワロフ伯及ウーブリール男、英國からも亦大宰相デスレーリー即ち後のビーコンスフイールド伯及オドラッセル、墺匈國からは外相アンドラッシイ伯・カロリイ伯及ハイメルレー男、佛國からは外相ワッダントン・サンヴアリエー伯及デプレー、伊國からは外相コルチー伯・ローネイ伯、土國からは工相カラテオドリー、軍相メヘメツドアリー及サヅラ等を出した。是等は皆其國一等の人物である。就中、獨逸のビスマルク、露のゴルチヤコフ、英のヂスレイリー及サリスバリー、墺のアンドラッシイ等の如きは、何れも近世史上に光耀せる一世の俊傑であつた。されば如今將に來らんとする列强大會議は伯林會議に比較すれば幾倍より重大なる會議であれば、英のグレー氏も來る可く佛のデルカッセー氏も來る可く、露のサゾノフ氏も來る可く、獨のベーマトン氏(?)も來る可し、論戰の壯烈は今より想見するに餘りあり。是時に際し、我國よりは何人を簡派して、帝國參戰の權利を維持せんとする歟。惟ふに伯林會議の當時、露のゴルチヤコフ公の如き露國の赫々たる戰勝の餘威に資藉して、之に臨んだものである。然るにも拘はらず、英のヂスレイリー、墺のアンドラッシーが公然の强壓とビスマルク議長が陰然の之が尻押との爲に戰果の大半を無効にせられ、一億六千萬の露國民と倶に、終天の憾みを呑まざるを得ざるに至つたのである。將に來らんとする會議に於ける我國の地位は果して如何。聯合國にして獨、墺の死命を制し、而る後ちの講和ならば、何人が之に使するも、さまで憂慮は無かる可きも、敵と身方との形勢が五分〳〵の講和でありとすれば、山東南洋諸般の問題に亙り獨逸の主張は必らず我國の主張に對し大衝突を免かれざる

は、火を踏るよりも明かである。さりとて我帝國たるもの固より之に凹む可きでない。知らず霞ヶ關の新外相如何んの手腕を有する歟。今から設想の至りに堪へぬ。一層の事、大隈伯老後の思出に、世界の舞臺に飛出して見る歟。加藤高明男以下宗徒の面々を從へて：……。

以上觀來れば、今日は實に内外多難の秋である。而うして皇上御一代の御大典は、最早旬月の間に接近した。之に就いて、徐ろに憶ひ起す事がある。明治元年に先帝御即位の大禮を擧げさせられた際、故福羽美靜子等は御大禮取調の御用係となつて其事に鞅掌した。何をいふにも、數百年式微の朝廷で、御代々久しく御略禮を用ゐさせられた後であるから、子等は鋭意して皇室御盛時の儀禮を取調べ、且つ其儀禮が中古以來餘りに唐制に摸倣し過ぎられ、大日本天皇の御即位式としては如何はしい節も尠くなかつたので、皇祖御建國の本源に溯り、神武天皇橿原の宮に御即位まし〱た御式を基礎として、乃て成典は備はつた。が、其際福羽子は考へた。此度の御即位は七百年來既墜の大權を復させられ、萬國に對して、是より皇威を御光耀あらせられんとする機頭の御大典であるから、何か一つ雄大壯偉なる御式を新たに加へさせられたいものであると、日々御寶庫に出入しつゝ、御物を調査する中に、前水戸權中納言齊昭卿から孝明天皇に獻上せられた大地球儀を見出した。是こそ屈强、神武天皇の『六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて、宇と爲す』との詔に基かせられ此地球儀に御足をかけさせられる事に遊ばしては如何であらうと、之を大西郷に相談すると大西郷は手を拊つて贊成し、直ちに入つて此旨を奏上した。すると當年御十七歳の明治大帝は莞爾として御嘉納あらせられ、乃て御大禮御擧行の日、紫宸殿の庭上に下立たせられ、庭の中央に据附けられた右の大地球儀の上に、三たび玉趾を加へさせられたといふ事である。是は福羽子在世の日親しく子の直話に聽いた。嗟乎大帝に此御氣宇あらせられ、左右の輔弼亦其聖旨を能く奉體し、獻替贊襄に努めたればこそ、大帝の御一代に日の出づる處の

帝國をして世界の上に卓出するには至らしめられたのである。天旋・地轉して、今や亦新帝陛下の御大典に遭逢した。元老・大臣・左右の重臣は、何を用いて今上を輔弼し奉り、先帝中興の洪業を益々推擴せんとする歟。

親鸞聖人

文學博士
醫學博士　富士川游

一

保元平治の亂が平定してから十六年、平清盛が太政太臣として榮華を窮めた最中、高倉天皇の安元元年に當年四十三歲の元氣盛りの僧、法然は、二十年來、苦心に苦心を重ねて、自得したる出離生死の道を述べ、聖道自力の修行を捨てゝ、淨土他力の法門を擧げ、往生の業は唯、念佛を以て本とすることを說いた。法然はもと、美作の國久米の南條稻岡の莊の押領使の子である。九歲のときに父を失ひ、十五歲の時に比叡山に登つた。文殊と歎稱せられたほどに聰敏であつた。久安六年、出離生死の道を求むるの念が急であつたために山を下りて、黑谷の慈眼房叡空の門に投じた。叡空隨喜して『汝少年にして出離の心を起せり、まことにこれ法然道理の聖人なり』といひて、法然を房號とした。時に法然は十八歲の少年であつた。それから、報恩藏に入りて、幾たびとなく一切經を讀むで見たけれども胸裡の煩悶を慰することが出來ず、保元元年、花の都が修羅の街となつた頃に、叡空の許を辭し、嵯峨の淸凉寺に七日の參籠をしたけれども、何等の驗もなかつた。それから奈良へ赴き、興福寺の藏俊に就て唯識を

學び、又京に歸て、醍醐寺の寛雅から三論の敎を受けた。すべてこれ假名の學問、空虛の形式であつて、出離生死の道を求むる爲には何の益にもたゝなかつた。それで、法然は數年の修行も、少しも得るところがなく、茫然として黑谷の叡空の許に歸つて來た。いかにもして、凡夫の出離を許すの道を求めむと、寢食を忘れて、聖敎に向ひ、我が凡夫に相應する法門ありやと焦慮せるが、はからずも、源信僧都の往生要集を讀み『往生極樂の敎行は濁世末代の目足なり』とあるを見て忽ちこゝに希望の曙光を認めた。それから、善導大師の散善義を讀みて『一心專念二彌陀名號一行住座臥、不レ問二時節久近一念念不レ捨者、是名二正定之業一順二彼佛願一故』といふことを知り、胸中の苦悶忽ちに去り、『出離生死の要道は唯念佛の一行にあり』といふことを悟つた。法然が說敎する所を聽くと、佛の道に入るには種々の門があるが、大別してこれを聖道と淨土との二、門とする。聖道門といふのは娑婆世界にありながら煩惱を斷ち、悟りを開くの道で、これに大乘と小乘との別がある。しかしながら、聖道門は聞き難く、入り難く、末世の凡夫の行には相應せぬ。淨土門といふのは娑婆世界を厭ひ捨てゝ淨土に生まるゝことを期するもので、淨土に生まるゝといふことは阿彌陀佛の本願である。故に人の善惡を撰ばず、阿彌陀佛の本願を賴めばよろしい。故に、いかなる凡夫でもこの道に入ることは容易である。しからば、この淨土門に入りて、淨土に生まれんことを望まば、如何にすればよろしいかといふに、安心と起行とが必要である。安心とは至誠心、深心、廻向發願心の三心を具ふることをいふのである。至誠心とは眞實の心である。深心とは我身が煩惱を具足せる凡夫であるといふことを深く信ずる、又阿彌陀佛が四十八通の誓願を立てゝ衆生を攝取したまふといふことを深く信ずるのである。廻向發願心とは我が身の過去並に現在に於ける功德を淨土に廻向して往生を願ふのである。起行とは往生の行に讀誦、禮拜稱名、讚歎、供養など多數ある內、一心に專ら彌陀の名號を唱へて、行住座臥に忘るゝことなく、念々に捨

てざるを正定の業と名づけて、これを極樂往生の正行とするのである。それで、淨土に往生せんと思はば、この念佛の行を起して阿彌陀佛の本願の力を賴めといふのである。

法然が說くところの奧義は、此の如くに、實に明瞭である。阿彌陀佛の本願は衆生を攝取するにある。我等凡夫は阿彌陀佛の慈悲に對して至誠心、深心、廻向心を具ふればよろしい、至誠心、深心、廻向心、の三心、これを約めて言へば信の一字である。信心卽ち往生である。我等は煩惱具足の凡夫である、自力の行を以ては往生の出來にくいものである。只管に阿彌陀佛の慈悲に賴り、その本願の力を借るより外はない、一切の疑念を去つてただこれを信ずる外には何もないのである。阿彌陀佛の智慧と慈悲とを信じて佛の御名を呼ぶ外に往生の行といふべきものは無い。これが、法然の念佛の要義である。

これを要するに、法然が專修念佛の敎は、阿彌陀佛の慈悲を說くのである。もとより八萬四千の聖敎の中には種々のことが說いてあるが、その主願とする所は阿彌陀佛の慈悲である、この慈悲を認めて、その力に賴るのが專修念佛の本旨であるといふのが法然の主張である。

二

法然が黑谷を出て、吉水に移り、專修念佛の法を說いたのは承安四年である。桓武天皇の時に、最澄、空海の二僧が出て、最澄は比叡山に延曆寺を開きて天台宗を傳へ、空海は高野山に金剛峰寺を立てゝ眞言宗を傳へ、その時までの敎旨に一段の進步を示してから四百年になる。奈良朝以來我邦に傳はつた、佛敎には三論、法相、倶舍、成實、律、華嚴等の各派があつたが法然が專修念佛を唱へたる當時は、天台と眞言とが最も盛に行はれて居つた。天台宗は法華經に據り、眞言宗は釋迦の外に大日を立て、卽身成佛の新義を唱へて其他の宗旨とは面目を異にして居つたが、しかし、此等諸宗の僧徒が、寺院で講釋する所は深玄高妙を窮めたる佛敎哲學で、その日常行つた所は形式的なる修行

であつた。それで、佛法そのものも、僧徒と名づくる一種の階級のものの外には殆ど無關係といふべき狀態であつた。又その出離生死の道は、六度萬行の功德によつて成佛が出來るといふのであるから、從て諸佛に祈請し、或は病氣の平癒を祈るなどといふやうなことが始まり、僧徒の多數はこれを日常の業務として居つた。しかるに、法然の專修念佛往生の教は、此の如き思想を根柢から覆へし、煩瑣なる哲學を排するために僧徒の生命なる經論が無益となり、又如何なる惡人も專修念佛によりて往生することを主張するがために當時の宗教が重きを置いた戒律がその權威を失なふことになつた。此の如き、宗教界の一大革命に對し、始めは『法然果して何事をか成さむ』と嘲笑せる南都北嶺の學僧等も、これまで久しく無益の經釋に厭き一切を捨てゝ出離生死の道を求むるものが歡喜して法然の教に歸依すること、草の風に靡くが如くなるを見て、大に忿怒し、比叡山の僧徒先づ噪き立ち、次で奈良の僧侶も法然を攻撃し始めた。その中には明慧上人、解脫上人等の名僧も居つたのである。その言ふ所に據ると、法然が菩提心を以て極樂往生の行とせざるは誤である、菩提心とは無上正覺の心であるのに、この佛法妙華の菩提心を捨てゝ往生の果實を結ばむと望むは無理である。佛果の功德が名號の功德に及ばぬといふも誤であると論ずるのである。もとよりこれは新舊思想の衝突で、法然の方から言へば、這般の駁論はすべて見當違のもので、すこしも駁論としての價値はない。しかし、反抗の火の手は益々熾になつた。比叡山の僧徒は法然が差出したる起請文によりて一旦その怒を鎭めたが、南都興福寺は、邪宗を立つる罪、釋尊を輕侮するの失、萬善を廢するの事、國家を亂壞するの賊等九箇條の罪目を擧けて、念佛停止の儀を朝廷に訴へた。此の如くにして、法然の教は、教權の方からと、教理の方からと、教化の方からと、三方面から壓迫せられた所へ、宮中の女官などに念佛の信者が出來て、それが物議の種となり、一時は旭日の昇るが如き勢のあつた吉水も、到頭包圍攻撃に堪ゆることが出來ず、承元

元年二月、法然は、僧儀を廢せられ、藤井元彦の俗稱で土佐の國へ流さるゝことになつた。この時、門人の内で死刑に處せられたものが四人、流罪に處せられたものが七人、その一人、善信房といふが越後國に流された。善信房、罪名藤井善信、いふまでもなく、これが、すなはち親鸞聖人である。

三

親鸞聖人、俗姓は藤原氏、父は皇太后宮大進有範、母は吉光女、源氏の出である。早く父母を失ひ、伯父範綱に養はれしが、心何となく悲しく、明けても暮れても、心を痛め居りしが、養和元年、遂に靑蓮院慈圓僧正の室に投じて得度し、法名を範宴少納言と稱した。時にその年九歳であつた。養和元年は安德天皇の元年でこの年二月には平相國入道が熱を病みて薨じ、翌年は壽永元年で木曾義仲が京師に入り、平宗盛は天皇を奉じて讃岐に走つた、歷史上興味の多い年である。それから範宴少納言は叡山に登り、入壇して圓頓菩薩戒を受け、南都にも往來して、天臺、華嚴の奥旨を窮め、廿五歳の時には既に聖光院の門跡となつた。親鸞聖人は叡山にありて俱舍論も讀むだ、唯識論も讀むだ、天臺の三大部も讀むだ、又奈良に赴きて法相、三論をも修めた、律をも修めた、華嚴をも學むだ、一切經をも讀み破つた。大小の敎相、顯密の深義を研究すること二十年の久しきに及むだ。しかも出離の道を求めむと焦慮せる胸裡の煩悶は却つて日に益々其度を强くし、寢むれば覺め、覺むれば思ふといふ有樣にて殆ど身の置所なきまでに苦しむだ。到底人力の施しがたきことを認めて、六角の御堂に參り、上宮太子の靈告を祈つた、その歸り途に安居院聖覺法師に遇ひ、吉水に法然が淨土他力の敎を說くことを聞て。大に喜び、直ちに法然の許に走つた。出離生死の要道は唯々念佛して阿彌陀佛に助けられる外は無いといふことを法然から說き聞かされ、ここに忽ち聖道自力の道を捨てて、凡夫直入の眞心を決定し、法然の門人となつた。法然も斯く速かに聖道の法を捨て、淨土の敎に入りたる者はその類が稀なりと感歎し、西河禪師の餘風ありとて、その名

を綽空と授けた。この時、親鸞聖人は齡二十九歳であつた。齡二十九歳の春から三十五歳の春、その師と共に流罪に處せられたときまで丁度、六年の間、法然に親炙したのである。入門の順序からいふと、他に多くの先輩があつて、元久元年の冬、法然が比叡の忿怒に遭て起請文を送つた時、親鸞聖人は綽空の名前で百八十五人の門人中、第七十九番目に自署して居る位であるが、しかし、親鸞聖人が法然の信用を得て居つたといふことは、法然が自選の選擇本願念佛集を第一番に親鸞聖人に附屬したといふ一事でもわかる。選擇本願念佛集といふのは法然が元久元年に月輪禪定兼實公の命によりて選集したもので、念佛の奥義を說いたもので法然は秘して誰にも見せなかつたのを、その翌年に親鸞聖人に寫すことを許したと傳へられて居る。正信偈に『本師源空明佛敎、憐愍善惡凡夫人、眞宗敎證興片州、選擇本願弘惡世』と言つて、親鸞聖人は明かに法然を以て日本念佛の祖師と仰ぎ、始めて淨土宗を立て又選擇集を作りて善惡の凡夫のものをあわれみ、その敎を惡世に弘めたる德を頌して居る。その他にも、親鸞聖人は屢々その師、法然を推稱して居る。

四

一代の高僧法然が全力を擧げて企圖したる宗敎界の大革命は、その門人たる親鸞聖人に至りて遂に成功した。親鸞聖人は、その師法然が『往生之業、念佛爲ㇾ本』と說いて、稱名往生說を唱へたる眞意義を攫み、更に一歩深く進みて、『稱名則是、最勝眞妙正業、正業則是念佛、念佛則是、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛則是正念』なりと言ひて、信心往生說を唱へたるは、眞に念佛の意義を徹底せしめたもので、親鸞聖人はまことに法然の門人たるに耻ぢぬ人と言ふべきである、然るに親鸞聖人が法然の門下にありながら、此の如く、師說を廢し、自から信心往生の說を立てたのを、異解であるとして、法然門下の他の人々が親鸞を排斥して居るのは、畢竟、門人等が凡庸でその師匠の眞意を受くることが出來ぬためである。法然の選擇集には『若し善導に依らば廢立を以て正しとす』とありて、廢立とは雖

行往生を廢して念佛往生ばかりを立つるといふ意味で善導大師の説に據れば雜行を許さぬ方が正しいと言つて居る。故に法然が謂ふ所の念佛は如來選擇の願心より廻向したまはりたる念佛で、强ち自力の雜行を要するものでは無い。しかるを、法然の門人等、『雜行も念佛も往生するとして、二類各生を立て雜行雜修も至心廻向すれば往生する』といふ説を立て『念佛の中にはらみてある萬善萬行なれば雜行も念佛胎内の功德なるゆへ、別に捨てることなし』として雜行を許した。それ故、親鸞は『淨土宗の中に眞あり、假あり、眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善なり、選擇本願は淨土眞宗なり、定散二善は方便假門なり、淨土眞宗は大乘の中の至極なり』と唱道し、法然門下の一派に對抗して、淨土眞宗の名稱を選び、自から新しい一派を成した。しかも、親鸞聖人は、これが法然の眞意であると繰返し、高僧和讃の法然の條下にも『本師源空あらはれて、淨土眞宗を開きつゝ、選擇本願のべ玉ふ、善導源信進むとも、本師源空弘めずば、片州濁世のともがらは、いかでか眞宗をさとらまじ』と、法然の源空を讃仰して居る。

五

親鸞聖人の敎義と信仰とは、敎行信證文類六卷淨土三經往生文類一卷、尊號眞像銘文一卷、一念多念證文一卷、愚禿鈔二卷、淨土文類聚鈔一卷、正信念佛偈一卷等の著書によりてこれを明にすることが出來るが何の理屈も無い、何人と雖も、出離生死の道を求むるには、たゞ『信ずる』の一事で足りるのである。しかしながら、これを宗敎として、世の人に勸めるには、釋尊以來、歷代の高僧の所說を依據とせねばならぬ。それで親鸞聖人は漢土に於ける龍樹菩薩、天親菩薩、曇鸞和尙、道綽禪師、善導大師の五僧、我邦に於ける源信大師、源空聖人の二僧を選びて、淨土眞宗の七祖を立て、大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三經を擧げて、これを淨土眞宗の依據とした。すなはち、これ等高僧の所說、經典の記述は、自家の信仰を、證明するための用に供したのである。試みに親鸞聖人が自か

ら說く所を考ふるに。

『往生は何事も〳〵凡夫のはからひならず、如來の御力に任せまゐらせたればこそ、他力にて候へ、樣々にはからひあふて候らん、おかしく候、如來の誓願を信ずる心の定まると申すは攝取不捨の利益にあづかる故に、不退の位に定まると御心得候べし』

『他力と申すことは彌陀如來の御誓の中に、選擇攝取し玉へる第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力と申すなり、如來の御誓なれば他力には義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき、義といふことははからふことゝことはなり、行者のはからひは自力なれば義といふなり、他力は本願を信樂して往生必定なる故に、さらに義なしとなり、しかれば我身のわるければいかでか如來迎へ玉はんと思ふべからず、凡夫は固より煩惱具足したる故にわるきものと思ふべし、又我心のよければは往生すべしと思ふべからず、自力の御はからひにては眞實の報土へ生すべからざるなり』

『釋迦如來、彌陀佛、我等が慈悲の父母にて、さま〳〵の方便にて、我等が無上の信心を起させ給ふと候へは、まことの信心の定まることは釋迦彌陀の御はからひと見えて候、往生の心疑なくなり候ふは攝取せられまゐらせたる故と見えて候、攝取の上には兎も角も、行者のはからひあるべからず候』

親鸞聖人の說く所は誠に明白である。『阿彌陀如來は念佛の衆生を攝取して捨てぬといふ誓願を建てて居り玉ふから衆生は一向にこの阿彌陀如來の本願を信じたてまつるべし、阿彌陀如來の本願は不思議の力があるから、我身には煩惱を斷ぜぬでも、阿彌陀如來の方より遂に往生を遂げさせられるものである』。これを約めて言へば、阿彌陀佛を信ずるのである。信心を本として出離生死の道を求むるのである。自力の行を捨てて全く他力の慈悲に賴るのである。

六

親鸞聖人は、此の如く、聲を大にして、『無量壽如來に歸命せよ』と勸める。無量壽如來とは壽命に限のない如來で、すなはち阿彌陀佛である、歸命とは命に從ふといふ意味である。しからば、その阿彌陀佛といふは果して何物であるかといふことを考へねばならぬ。

唯信鈔文意に

『涅槃と申すに、その名無量なり、悉しく申すに能はす、おろ〳〵其名をあらはすべし、涅槃をば滅度といふ、無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ、佛性すなはち如來なり、この如來、微塵世界に

みち〳〵てまします、即ち一切群生海の心にみち玉へるなり、草木國土悉くみな成佛すと說けり、この一切有情の心に方便法身の誓願を信樂するが故に、この信心即ち佛性なり、この佛性即ち法性なり、法性即ち法身なり、しかれば佛について二種の法身まします、一には法性法身と申す、二には方便法身と申す、法性法身と申すは色もなし、形もましまさずしかれば心も及ばず、ことばもたえたり、この一如より形をあらはして方便法身と申す、その御すかたに法藏比丘となり玉ひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはし玉ふなり、この誓願の中に、光明無量の本願壽命無量の弘誓を本としてあらはれ玉へる御形を世親菩薩は盡十方無碍光如來となづけ奉り玉へり、この如來、すなはち誓願の業因にむくひ玉ひて、報身如來と申すなり、すなはち阿彌陀如來と申すなり、この報身より應化等の無量無數の身をあらはし〻微塵世界に無碍の知惠光を放たしめ玉ふ故に、盡十方無碍光佛と申す光の御形にて色もましまさず、形もましまさず、即ち法性法身に同しくして、無明の闇を拂ひ、惡業にさへられず、この故に、無碍光と申すなり、無碍は有情の惡業煩惱にさへられずとなり、しかれば阿彌陀佛は光明なり、光明は知惠の形なりと知るべし』

又、一念多念證文に

『一實眞如と申すは、無上大涅槃なり、涅槃即ち法性なり、法性即ち如來なり、寶海と申すは萬の衆生をきらはす、さはりなくへたてす、導き玉ふを大海のへたてなきにたとへ玉へるなり、この一如寶海より形をあらはして法藏菩薩となのり玉ひて、無碍の誓を起し玉ふを種として、阿彌陀佛となり玉ふが故に、報身如來と申すなり、これを盡十方無碍光佛と名づけ奉れるなり、この如來を南無不可思議光佛とも申すなり、この如來を方便法身とは申すなり、方便と申すは形をあらはし、御名を示して、衆生に知らしめ玉を申すなり、すなはち阿彌陀佛なり、この如來は光明なり、光明は知惠なり、知惠は光の形なり、知惠亦形なければ、不可思議光佛と申すなり、この如來、十方微塵世界にみち〳〵玉へるが故に、無邊光佛と申す、しかれば世親菩薩は盡十方無碍光如來と名づけたてまつり玉へり』

と說いてある。しかれば、阿彌陀如來は、光明無量、壽命無量の覺體である。專門の學者の解釋に據れば、佛身論には種種の解釋があるけれども、冷靜に親鸞聖人が說く所を聽けば、聖人は一實眞如若しくは一如と名づけらるるもの、即ち宇宙の本態（ウエーセン）を認めて直ちにこれを阿彌陀如來とし、これには色も形もないから、眞如から形を現はして方便法身如來となるのであると說く、全體、救濟及び歡喜の本源たる『自己よりも偉大なるもの』に交はるといふことは、宗教的意識が醇正なる事實を言ひ現はすもので、又宗教的經驗の對象が

眞實なることも、この經驗の中に存在するものであるが、親鸞聖人が阿彌陀佛を眞如に求め、これを光明無量、壽命無量、即ち智惠と慈悲との最大のものとしたのは實に、親鸞聖人が、宗教的意識が醇正であるといふことを示すものである。而して、親鸞聖人の佛陀觀が、吾人が今日、一元論（monismus）として信奉する所の自然科學的宇宙觀に符合する所あるといふことに就て、余はここに少しく論述して見たいと思ふ。

七

近時、自然科學が非常の發展をしたために、精神科學が著明の影響を受けたことは已に廣く知られたる事實である。今日の學者の多數が說く所を聽くと、精神科學と自然科學とを區劃して、互に相同しからざる法則の下に研究すべしと言ふのであるが、しかし批評的に深く考へて見ると、精神科學と名づけらるゝ學科もその實は自然界の現象を研究するもので、その系統は自然科學の一種に屬するものである。たとへば廣い意味で言ふ所の歷史、世界史、國家史、地球史並に自然史などは、すべて發生學の一分科に外ならぬのである。言語學、比較言語研究及び心理學は生理學の一部分と看做すべきものである。人類の精神から作り出す所のもの、即ち文學でも、同じく自然の現象に外ならぬものである。故に、狹い意味の自然科學、たとへば理學化學、動物學、解剖學、鑛物學、地質學などの類から所謂精神科學を區劃して、これを違つた法則の下に研究せらるべきものであるとするのは正當の考でないと言はねばならぬ。只自然科學の對象と、所謂精神科學の對象とは、大に同じからず、複雜なると、單簡なると、形而上なると、形而下なるとの差異があるから、互に相同しからざる性質のものゝやうに見えるのである。自然科學が發展すれば、それに從て、所謂精神科學が著明の影響を受くるといふのは全くこの理に基づくものである。然しながら、吾人の認識の一定の限界あることは明かで、自然の實驗的研究には不十分の點が多く、到底自然科學が到達することの出來ぬ部分が多いといふことは明かである。故に、假定說によりて

これを補はねばならぬ、假定說を立つることは固より戒心せねばならぬことで、これは必ず自然的の合理的認識に矛盾せざる範圍で、せねばならぬ。百般科學の王と誇る所の哲學も、各個科學の結果をば、宇宙觀の一燒點に集中するものとしては、必ず自然科學の智識と背馳せぬやうでなければならぬ。余の考では、所謂精神科學が自然科學の影響を受るといふよりも、寧ろ所謂精神科學も自然科學と同一の法則に遵ひ、その成果に就て說を立つべきものである。

　自然科學は自然の物質及び現象を認識することに主として努力するものであるが、その認識の進步は今や理學及び化學の方面に於て、殊に著明であつて、これによつて勢力(エネルギー)恒存の法則と、物質不滅の法則とが發見せられた。吾人はこの法則により、宇宙の勢力は常に一定にして、その分量は變化せず、若し或勢力が消失し又は新に起るが如く見ゆることあらば、それは唯、或勢力が他の勢力に變化したるに過ぎざることを知る。又宇宙の物質は常に一定にして、その量を增減することが無く、若し或物質が燃えて消失し、若しくは結晶して形を現はす場合あるも、それは單に形式又は結合の變化に過ぎざるものであるといふことを知る。此の如く理學上から立てたる勢力恒存の法則と、化學上から立てられたる物質不滅の法則との二大法則を據として、吾人は哲學の上にも實體恒存の原則を立つるのである。斯の如くにして成立せる自然哲學の見解によれば、宇宙は物質と勢力(エネルギー)とより成るもので、物質はこれを分析すれば極微の原子(アトーム)又は電子(エレクトロン)となる。而してその原子又は電子の交互の間には「エーテル」と名づくる極めて輕き薄き物が充滿して居る。この「エーテル」はこれまでは量るべからざるものとせられ、全く無いに均しいものとして居られたが、近時、理學の進步によりて、光、電氣等の現象がこれに本づくことを認め又遂にその密度を測ることが出來るやうになつた。それから又、輓近の實驗に據れば原子又は電子は引力を有し、「エーテル」は反對に斥力を有し、宇宙の機械的作用は全くこの引力と斥力とに歸することを得べしと

せらるまでになつたのである。故に、吾人の今日の智識から言へば、物質と勢力とは宇宙の統一的實體であつて、吾人の周圍に於ける有機體及び無機體、すべての不可思議なる現象も、畢竟、同一の勢力、同一の物質の、形狀と結合とが變化したるに過ぎないといふに歸著する。輓近自然科學者が唱道する所の一元論（monismus）は即ちこの意義に外ならぬのである。

八

一元論（monismus）は、自然的統一的宇宙觀で、この宇宙觀は輓近の發育學、人類學、比較解剖學、生理學、組織學、動物學、植物學、理學、化學等の諸學科によりて認識したる所を綜合して結論したものである吾人はこれを宇宙の統一的概念とするのであるが、保守的の頭腦の人々、殊に傳說的の活力論（ヴイタリスムス）を奉じ、有機體の特殊現象は生活力のためで、これは理學の原則に從はぬといふやうに論ずる二元論者からは、今日でも一元論は非難せられて居る。しかしながら、勢力と物質とを全く相離れたる實體なりとする所の二元論は、哲學の系統としては甚だ古きもので、その考から進むで、人格神が作られ、これを創造主として、世界の保持者とし、人類はこの神より下れるものにして、世界にありて特別の地位を占め、自然界の他のものとは懸隔せるものとする。又人類は宇宙の中心で、他のものはたゞ人類の用をなすために造られたものであるといふことを信じられて居つた。しかるに、近時、古生物學、比較解剖學、個體發生學等の努力によりて簡單なる複細胞動物から、發達して、人類に至るまでの徑路が詳にせられ、又ラマルクの適應論、ダルウインの陶汰論のために、地球上の有機物は進化の方法によりて漸次に發達したものであるといふことが明にせられ、これによりて人類中心の說は破壞せられたのである。今日、吾人は、現に地球上に在在せる動物と植物とはその始め一個の同一物體から發生し、進化の法則によりて分岐し、人類は脊椎動物中の最も高等のものになつたのであると解釋するのである。又人類を宇宙の中心とするの說に併びて地球を宇宙の中心とするの說が

あつたが、これも一千五百四十三年コペルニクスのために打破せられて仕舞つた。

此の如くにして、古き生活力論は輓近の發生學のために葬られたので、新活力論（ネオヴイタリスムス）が新に起つてこれに代つた、しかるに、これは人類の意識を神秘的に見て、動物の意識と區別しやうとするので、一元論の說く所に背いて居る。輓近の自然科學は人類を始め、他の有機物及び無機物の進化と同樣に、精神の進化をも認めて居る。吾人の身體が吾人の祖先たる有脊椎動物から漸次に進化し來りたると同樣に、吾人の精神も、腦髓の一種の機能として、下等動物から漸次に發達し來つたものであると認められる。

無機界及び有機界の發達が、此の如き次第であるために、吾人は今日、植物界と動物界とを絕對的に區別することが出來ぬ。これと同樣に、下等動物と人類とをも絕對的に區別することが出來ぬ。又更に進みて、有機界と無機界との間にも劃然たる分界をなすことが出來ぬ。故に、吾人は人類の認識の全體は一個の統一體であると信ぜねばならぬ、從し、この範圍にありて物質界と精神界とを區別することは出來ぬ譯である。すなはち、吾人の認識に入る所の全宇宙は一個の統一體で、一個の共通なる法則によりて構成せられ、又發展したるものである。

九

一面から見れば、一元論は機械的哲學的說であるが又一方から言へば汎神論的哲學的說である。『萬物には一貫の精神がある、精神は宇宙のものに存在する。吾人の身體は單に大宇宙物質の一小部分に過ぎざると同樣に、吾人の精神も亦、たゞ大宇宙精神の一小部分に過ぎぬ』と說く。近世の大自然科學者、即ち醫家から出でゝ動物學を研究し發生學の泰斗として名高きヘッケルも、物理化學の祖にして、「エネルゲチック」學說を立て、勢力（エネルギー）の形式を以て宇宙を說明せむとするオストワルドも、共に皆、こゝに擧げたる一元論を唱道するのである。別に唯物論（materialismus）といふものがあるが、これは勢力（エネルギー）と物質、精神と身體とを別個のも

のと解釋するもので、一元論（monismus）とは反對の說を立つるものである。ヘッケルも亦、屢々この事を論じ、「唯物論は嚴格なる生物學的見解即ち勢力と物質との關係の一元論的解釋に反對するもので、又その意味は甚だ漠然である、その正反對たる唯心論の名を以てこれに代ゆることも出來る、實に唯物論の名は全く分別せらるべき理論上と實際上の意味を混同するの嫌がある」と痛言して居る。しかるに、世に物知り顏の人で、往々、一元論と唯物論とを混同するものがあるやうであるから、こゝに唯物論と一元論とは全く別說であるといふことを一言して置く。

ゲーテが「物質は決して靈魂より離れて存在し又は働くこと能はず、靈魂も亦同樣に物質と離るゝこと能はず」と言つたのは、全く今日の一元論の說である。今日の一元論は、物質と勢力とを分離すべからざるものとし、又これを不滅のものと信ずるのであるから、從て靈魂の不滅といふこともこれを承認する。物質不滅の法則がある、勢力恒存の法則がある、即ち宇宙は全體として不滅である、吾人が死亡するときは神經の實體を成せる個人的の形態と、これによりて行はれたる働作を表はしたる個人的の精神とは共に消滅するがその神經の實體を成す所の物質は少しも消滅はせぬ、その化學的結合は分解せられて更に他の結合を作り、再び一定の作用を呈するものと信ぜられる、又一方から言へば、吾人の身體の組織が死亡するのは一時でなく、甲の細胞が死して乙の細胞がこれに代り、甲乙丙丁互に相代謝しつゝあるのであるから、第一の「我」と第二の「我」との間には離るべからざる連鎖がある。この意味で、吾人の靈魂は不滅といふことが出來る。しかしながら、固より個人的靈魂が不滅であるといふのでは無い。今日の宗敎家の多數のものが言ふやうな二元論的の靈魂不滅は一元論の認容する所では無い。宗敎でも個人的靈魂の消滅を說くものがある、現に佛敎では五蘊（色、受、想、行、識）の集合が『生』で、五蘊の解散が『死』であるとなし、個人の靈魂を成す所の蘊は、死と共に解散すると說いて居るから、その說

は固より科學的研究に本づいたのでは無いが、しかも今日吾人が信ずる所の一元論の説と同じである。

一〇

一元論は哲學でなく、たゞ哲學的の説に外ならぬのである。オストワルドが明白に論じて居る通りに、今日の一元論は、吾人が今日までに得たる所の科學上の認識を綜合したものである、一個の體系(システーム)ではなく、一個の方法(メトーデ)である、しかも學術的のものである。而して近頃、この一元論から見て、佛教の所説が合理である、實際に於て今日の一元論と佛教とが同一であると論じたる人がある。すなはち、ラクシユミー、ナラスといふ人は、マドラスで、『佛教の本態』と題する一書を公にし、その書の中に、輓近の佛教と一元論とが實際的に同一であることを論じ、これをオストワルドに送て批評を乞ふた。オストワルドはこの書を讀むで、『尠なくとも、この書中に書いてある所では、佛教と一元論とが互に一致して居るといふことは斷言せられる、即ち佛教にありて、身體と精神とを分離したものとせぬことが一元論に符合する』と、説いて居るのである。それから、又オストワルドは、自然以上の神の存在を認めぬといふことが、佛教と一元論との一致した點であると言つて居る。全體、神の信仰は、今日行はるゝ所の宗教のすべてに通有のものであるが、基督教の如きは、二元論に本づいて、人格的神を立て、この神が世界を造り、人類及び萬物を造り、これを支配して居ると言つて居る。又一方から論ずれば、眞、善、美の人格化したものを神とするに過ぎぬとも言はれる。しかしながら、此の如き人格神は、吾人が現代の自然の認識と調和するものでない。ヘッケルが言ふ如く、『自然力の無限の總和即ちすべての原子力及びすべての「エーテル」の振動の總和』を指して神と名づくるのが一元論より見たる神の概念で、この神を認むることはヘッケル、オストワルド、その他、今日の一元論者の一致する所である。たゞそればかりではない、ヘッケルは、今から二十三年ほど前、一千八百九十二年九月アルテンブルヒに開かれたる第七十五回獨逸醫士及び

自然科學者大會の席で『宗教と科學との連鎖としての一元論』と題する演説をなし、一元論に就て、委しく述べた後に、『知識としての自然の一元論的研究、善の教としての一元論的倫理學、美の詮索としての一元論的審美學、この三つのものは吾人の一元論の三大部門である。この三部門の圓滿なる調和によりて、今日多數の人が求めんとして未だ求め得ざる所の宗教と科學との統一が出來る、これ等の圓滿なる調和の在る所にすなはち純粹なる神の概念が生ずる』と論じて居る。ヘッケルより前に、シユレージングルも科學的信仰論と題する著述を公にし、ヘッケルと殆ど同樣の説を立て、無限の空間に充滿せる宇宙的「エーテル」と名づけて神とすることは差支ないとして居る。その他、ストラウスの舊信仰と新信仰、ドレーパーの宗教と科學との衝突の歴史、レッツエルの自然科學的宇宙觀、コッホの進化論に於ける自然及び人類の精神、サヴエージの「ダルウイン説に本づきたる宗教」等數種の著述があつて、皆一元論的に宗教を改革せむとつとめて居るが、その神に關する概念は、こゝに言ふ所と同樣である。

この意味で言ふ所の神は抽象的のもので、宗教的意識の象徴(シムボル)に過ぎないと言つてもよろしい。故に、基督教のやうな宗教の神の見方からいへば、一元論の所説は無神論である。しかし、この場合にありて、無神論の宗教が成立することが出來る、即ち科學的の宗教が存在することが出來るといふことは已にクラインゾルゲン、ステルン等の諸家が熱心に唱道する所であるがヘッケルも『輓近の自然科學の發達は、單純の理性をして、まづ單に理論的の宇宙觀を立つるに止まつて居るが、早晩實際の人生問題に這入て來て、社會的、倫理的、政治的、教育的の諸方面に行はれて、遂に一元論的宗教(Die monistische Religion)を成立するに至るべしと言つて居る。ヘッケル等が始めてこの言をなしてから二十年、今日では、ヘッケル、オストワルド等自から張本人となつて、一元論者團體を造つて、盛に運動して居るが、余の考ではこれは已に宗教である、

科學的宗教を實現したものである。

しかるに、此の如き、抽象的の神では、宗教的意識の満足を得ることが六ヶ敷いといふ論者もある。殊に超自然的のものでなければ、宗教の中心とならないなどと論ずる人もあるが、實際決してそうでない。たとへば、ここに故人の遺著若しくは遺墨があるとする、若し故人の人格を知つて居るものがこの遺著若しくは遺墨を見ると、故人の人格が髣髴として眼の前に現はれ來りて、崇拜の念が、ここに起るのである。若しその故人に就て何等の知る所が無い場合であれば、その遺著若しくは遺墨に對するも、少しも崇拜の念が起るものでない。全體、宗教は、その究極に於て、個人的事項で、その人の知識、經驗によりて左右せらるるものである、從て、各人各個、自己が最も有効なりと認むる方法で宗教的事項を處置するものであるから、佛陀を見る場合にも人によりて相異がある。親鸞聖人は阿彌陀如來を以て知恵の塊、慈悲の塊と見た。宇宙勢力は實際に知恵の最大なるもの、慈悲の最大なるものとしても差支ないものである。しかし親鸞聖人の阿彌陀佛は、どこまでも、超自然的のものでない。

二

親鸞聖人の佛身論は、既に前にも言つた通り、『法性を指して阿彌陀如來とする』のである。法性は實相ともいひ、常樂ともいひ、眞如ともいひ、一如ともいひ、無爲法身ともいひ、無上涅槃ともいひ、實に宇宙の本態(ウエーゼン)と見らるるものである。佛身を指して直ちに法性、眞如、一如等とせしは、その意義實に明白で、今日の一元論が、宇宙の勢力の總和を指してこれを神とするのと相違がない。固より親鸞聖人の説は冥想に出で、今日の意味で言ふ所の自然科學の知識に本づいたのもではない。しかしながら、『如來は一切群生海の心にみち玉へり』とか『草木國土悉く成佛す』とかいふやうな、汎神論の考から、推論すれば、此の如く、宇宙の本態を阿彌陀如來とするといふことは、必ず歸著すべき標點である。

宇宙の本態を、今日の一元論の説によつて、宇宙勢

力の總和とすれば、この宇宙の勢力は、微塵世界にみち滿ち、草木國土、即ち宇宙のすべてのものはこの勢力の下に存在する、言を換ていへば佛性を有するものとするは、今日の一元論が説く所に符合するのである。

親鸞聖人は又、説明して、『法性に二つある、一は法性法身で、一は方便法身である、法性法身といふは色もなく、形もなく、從て心も及ばず、言も及ばず、これ即ち眞如である、この眞如より形をあらはしたのを方便法身といふのである』といひ、唯信鈔文意に『法性のみやこより、衆生利益のために娑婆界に來たり玉ふ故に來をきたるといふなり、經に從如來生とのたへり、從如といふは眞如よりと申す、來生といふは來り生ずといふなり』と説いて居る。これによつて、親鸞聖人の考が、今日の一元論の所説と同じく、宇宙勢力の總和を認めて、これを眞如とし、法性とし、この法性から阿彌陀如來をこの世に來たり生ぜしめて、宗敎上の象徴(シムボル)としたといふことが推定せられる。故に、この如來を尊崇するにも『歸命無量壽如來』又は『南無阿彌陀佛』の名號を用ひて居る。無量壽如來に歸命し阿彌陀佛に南無するといふ意味は、全く如來又は佛の命に從ふといふことである。これが全く抽象的の象徴(シムボル)であることは、蓮如上人御一代聞書に、『他流には名號よりは繪像、繪像よりは木像といふなり、當流には木像よりは繪像、繪像よりは名號といふなり』と言つて居るのでもよくわかる。この蓮如の言は、よく親鸞聖人の意思を明白に示したものであるといつてよろしい。

世には動もすれば宗敎的意識の發現を嘲笑する人があつて、宗敎の上に神佛を造ることを無意味とするが、しかし、宗敎的情操は、個人乃至社會の思想と、知識或は道德的氣質によつて附加せられたる信仰で、その人の人格的中心を變じ、利己的の物質的境涯から、利他的の精神的境涯に遷すもので、單に解明し難きが故にと言つてこれを無價値のものと評することは出來ない。殊に目に見るべからざる世界も、現實の世界に對して絶えず影響を及ぼして居るものであるから、抽象的に宇宙勢力を阿彌陀如來とし、これを宗敎的經驗の

對象とすることは誠に至當の事であると云はねばならぬ。

一二

天台は諸法實相とて、靈妙自在の理が活動して宇宙の萬有を生じたりと倣し、華嚴は自性清淨の一理で以て宇宙の發展を說いて居る。何れも主觀の上に、宇宙の本態（ウェッセン）を發見せんとするものであるが、淨土門の敎では、これに反して、如來の上に、宇宙を發見せんとする。すなはち如來卽ち法性、宇宙卽ち如來とするのである。親鸞聖人が眞如より來たり生したる阿彌陀如來を、宗敎上の本尊とし『大乘の聖人、小乘の聖人、善人、惡人、一切の凡夫、皆共に自力の知惠をもつては大涅槃に到ることなければ、無碍光佛の御形は知惠の光にて、ましますゆゑに、この如來の智願海にすゝめ入れ玉ふなり、一切諸佛の智惠を集め玉へる御形なり』と說いて居るのは、宇宙勢力の偉大なることを示し、吾人人類は他の有情のものと共にその感作の下に生命を保つべしとするのである。今日の一元論から言つても、宇宙勢力は實に偉大のものであつて、吾人は僅かにその一小部分に過ぎぬのであるから、すべてのものはその感作の下に在るべきこと勿論である。この事實に宗敎的色彩を附けて、『阿彌陀如來は、如何なるものも攝取して捨てぬといふ本願を起し玉ひたれば、深くこれを信じ、その慈悲を賴め』とは、實に巧妙なる說明といはねばならぬ。『如來より賜はる慈悲なれば、他力である、毛頭自分のはからひでない』とて、絕對的他力を唱道するのは、前にも既に言つた通り、固より法然の意思を紹述したものとせねばならぬが、しかも法然の門人の多數のものが師匠の眞意を了解すること能はずして、他力といふものに、自力の雜行を交ゆることをせしに、親鸞聖人が獨り起ちて、此の如き絕對的他力を主張せることは、實に鑽仰すべきとである。親鸞聖人は更に往相回向と、還相回向といふことを擧げて、宗敎的に絕對的他力を說明し居るが、往相とは往生淨土の相、還相とは還來穢國の相といふ義にて、回向は自分の心を回して佛に向けるのである。卽ち往

相回向といふのは吾人が如來の敎を信じて、淨土に生まるることが全く如來の他力に由るをいふので、還相回向といふのは、吾人が淨土に生まれて後、如來と同體同證を覺りて、一切世界に往來して衆生を救ふことも亦、如來の他力で、凡夫としては更にこれを起すものでないとするのである。簡單に言へば、吾人の宗敎的生活の全部が如來より賜はりたるものであるといふのである。實に他力の信心が徹底して居る。

一三

クラインゾルゲンは宗敎の神髓は、美しくして且つ貴とき、未來の福音であると言つて居るが、親鸞聖人の敎では、『吾人は如來の本願によりて本來は必ず安養淨土に往生すべし』と說くのである。唯信鈔文意に『極樂と申すはかの安樂淨土なり萬の樂を常にして苦しみまじはらざるなり、彼國をば安養といへり、曇鸞和尙はほめたてまつりて安養と申すなりとのたまへり、論には蓮華藏世界ともいへり、無爲ともいへり、涅槃界といふは無明の迷をひるかへして無上覺をさとるなり』と、說いてある。故に、この敎に從へば、『眞實の信心を得たる人は攝取の光におさめ取られまゐらせたりとたしかにあらはせり、しかれば、無明煩惱を具して、安養淨土に往生すれば、即ち無上佛果にいたる』『大經往生といふは如來選擇の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり、これ即ち念佛往生の願因によりて必至滅度の願果を得るなり、現生に正定聚の位に住して、必ず眞實報土に至る、これは阿彌陀如來の往相回向の眞因なるが故に無上涅槃のさとりを開く、これを大經の宗敎とす』『本願力に乘ずれば本願の實報土に生まるること疑なければゆきやすし』『眞實信を得たる人は大願業力の故に、自然に淨土の業因たがはずして、かの業力にひかるる故にゆき易く、無上大涅槃にのぼるにきはまりなし』といふことになる。その安養の淨土、安樂の淨土、極樂淨土、等といふものは、全く如來の國である、如來即ち法性、法性即ち宇宙勢力であるから、吾人の身體に結合せる五蘊は、命の終りて、解散せる五蘊は故の法性即ち宇宙勢力に歸るとい

ふのである。往生は即ち成佛で、成佛は佛となる、即ち如來となるのである、即ち宇宙勢力に復歸するのである。これ即ち滅度、一に涅槃といふもので、煩惱もなく、苦痛もなく、誠に極樂の世界である。

此の如く、吾人が平生に於て往生せんと望むで居るのは極樂淨土、無爲涅槃界であるが、この一生を終らざる前も、已に如來の本願を知り得たるときは、即ちこれ涅槃の境界に入りたるものにして、これを平生業成とも、即得往生ともいふのである。即ち、臨終の時來れば、直ちに無爲涅槃界に到りて、如來と同一の體となることが出來る資格を得るといふ次第である。

安養淨土は何處にあるか、これは詮索を要する所でない。主觀的の意識生活が滅びて、こゝに死といふ事實が起ても、吾人の靈魂、詳しく言へば勢力(エネルギー)は決して滅亡するものではない。故に、人類の後生を說いて、安養淨土に往生すといふのは、宇宙勢力の一部が、結合して吾人の身體を成して居つたのが、その結合を解いて、又故の宇宙勢力に歸つたとするのは今日の一元論から見て、合理のものである、これに宗教上の色彩を附けて、淨土の名目を立つることは、宗教的生活の上に、有用である。

一四

元來、宗教といふものは卓越した箇人の人格に現はれたる宇宙觀と人生觀とに基いて生れ出づるものであるが、法然は實にこの點から見て偉大の人格である、法然が專修念佛の唱道は當時の有樣では實に大膽不敵の振舞であつた。しかも法然は嘲罵の中にありて少しも爭ふことなく、たゞ孜々として、その思ふ所を實行した。法然は一切を南無阿彌陀佛の六字に包むで、只管に念佛稱名を勸めた。淨土門は易行道を行くものであると言つて、經論の詮索を無用とした。阿彌陀佛の御誓は有智無智を問はずと言つて、僧俗の墻壁を破つた。法然は又、寺院を建てるなと言つた。その新宗教を實際生活に副はしむるために、山より都に下した、又その門人親鸞聖人をして妻帶せしめた。法然の門下には數多の英才も居つたが、此の如き法然の眞意を了

解したものはなかつた。親鸞聖人は自著の教行信證の末に

「竊に以みれは、聖道諸教は行證久しく廢たれ、淨土眞宗は證道今に盛なり、然るに諸寺の釋門、教に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷て邪正の道路を辨ふることなし、斯を以て、興福寺學說奏達す、太上天皇（號後鳥羽院諱尊成）今上（號土御門院諱爲仁）聖曆承元丁卯歲仲春上旬の候主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ふ、玆に因て眞宗興隆の太祖源空法印並門徒數輩、罪科を考へず、猥に死罪に坐し、或は僧儀を改めて姓名を賜ひ、遠流に處せらる、予も其一なり、爾者已に僧に非す、俗に非す、是の故に禿の字を以て姓とたす、空師並に弟子等、諸方の邊州に坐して五年の居緖を經たり、皇帝（佐渡院諱守成）聖代、建曆辛未歲子月中旬第七日に勅免を蒙むり洛に入る、已後空しく洛陽東山の西麓鳥部野の北邊大谷に居る、同二年壬寅の月下旬第五日午時入滅し玉ふ、奇瑞稱計すへからず、別傳に見えたり、然れとも愚禿釋親鸞、建仁辛酉の曆、雜行を棄てて本願に歸す、元久乙丑の歲、恩恕を蒙むり、選擇を書く、同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の內題の字並に南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と釋綽空の字とを空の眞筆を以て、之を書かしめたりき、同日空の眞影を申預かりて圖畫し奉る、同二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆を以て南無阿彌陀佛と若我成佛十方衆生稱我名號云云、必得往來之眞文とを書かしめ玉ふ、又夢告により綽空の字を改めて同日御筆を以て名の字を書かしめ畢ぬ、本師聖人今年は七旬三の御歲なり、選擇本願念佛集は禪定博陸（月輪殿兼實法名圓照）の教命によりて撰集せしめ玉ふ所なり、眞宗の簡要、念佛の奧義、斯に攝在せり、見るもの諭し易し、誠に是れ希有替勝の華文、無上甚深の寶典なり、年を涉り日を涉りて其教誨を蒙むるの人、千萬と雖も、親といひ、疎といひ、この見寫を獲るの徒は甚た以て難し、爾るに既に製作を書寫し、眞影を圖畫す、是れ專念正業の德なり、是れ決定往生の徵なり、仍て悲喜の淚を抑へて由來の緣を註す、云云」

と書いて居る。これによつて、如何に親鸞聖人がその師法然に心服したかといふことが想像せられる。法然も亦、私かにその門下に此の如き立派の紹述者を出したことを喜んだことゝ思はれる。親鸞聖人は越後より關東に出で、諸所に往來して、熱心に信心往生の說を唱へ、六十歲を過ぎてから京都に歸つたが、京都には法然の門下が亡師の遺業を承けて念佛往生の教を布きその勢力が盛んであつたので、親鸞聖人も殆んど手を下すの餘地がなく、其後の四十年間の長日月を著述で送つたのである。

一五

親鸞聖人は、在來僧侶の俗を破ぶり、斷然在家の行

儀を以て、妻を持ち、子を持ち、無戒の一比丘として本願の念佛を證明した。これ實に非常のことである。尋常一樣の凡人の爲し得べき事でない。淨土宗の徒の書いた正邪强會辨に『親鸞は何ものぞや、頭を禿にして妻子を蓄へ、肉味に耽著する一個の禿居士にあらずや』と罵倒してあるが、この種の俗論は、今日でも、親鸞聖人を批難するの材料となつて居る。親鸞聖人は師匠法然が瀕死のときまで口にしたる『寺院を建つるな』の戒告を守り、仰山な建物を造らず、普通の民家より少し手廣い所で、布教をした。又その說敎の時の姿はといへば、墨の衣に墨の袈裟であつたと傳へられて居る。當時の僧侶は一體に華美な彩色の法衣を著けたもので、墨の衣、墨の袈裟はまづ俗人に近い姿であつた。此の如くにして、法然のために、山から下されたる宗敎は、親鸞聖人のために、全く町の眞中にまで移されて仕舞つたのである。出離生死の道を求むるためには家を捨てねばならぬ、妻子を捨てねばならぬ、山へ登らねばならぬ、世間から離れねばならぬといふことでは、その宗敎は吾人の實際生活からは隔離したものである。法然が早くこの點に著目し、親鸞聖人がその意思を承けて、淨土眞宗を在家の宗敎としたのは實に卓見と稱せねばならぬ。而して、親鸞聖人が法然門下の他のものに異なりて、法然の眞意を握み、淨土眞宗の眞意義を發揮したために、却て法然の門下より排斥せられ、淨土宗では何時の間にやら、その記錄を訂正して、親鸞聖人を法然の門下の列から削除した。これ實に不可思議のことである。

親鸞聖人の人格、及びその布敎に就きては叙述すべきことが隨分澤山にある。殊に淨土眞宗の俗諦門に就きては、擧げて言ふべきことが尠なくないが、斯くては餘りに冗長に涉るの恐があるから、こゝには之を省略する。

一六

近時、西洋にありては進化論の進歩に連れて、基督敎及び基督敎に關係のある事物は殆ど棄てゝ顧みられぬといふやうになつたといはれる。しかもよくこれを

探索して見ると、基督教が信ぜられたくなつたのは進化論の現はれたためではなく、人々が最早、基督教を信ずることを欲せざるやうになつたためである。教義と生活、信仰と行爲との妥協に飽いたのである。若し眞正の宗教であつたならば如何に深遠なる研究と雖も辭する所で無いのみならず、却てその研究を利用することを得るのである。此の如き研究を懼るゝものは獨斷的假裝で、生活に對する價値及び眞理の内容は決して何物をも拒むことはない。若し他の干渉を受けてその價値を減ずるやうな宗教は取るに足らぬものである。我邦でも近時、國民をして無宗教的ならしむるの傾向があり、殘存せる宗教的要素を見て、これを輕侮嘲笑するに過ぎぬといふ有樣である。

しかしながら、數千年來、深く人類の精神に印象を與へたる宗教の痕跡は、容易に文化の表面から消失することは出來ぬ、若しこれなければ、人類の精神生活は寂寞で、殆ど堪ゆることが出來ないやうになる、しかも社會組織の要素中、宗教に代るべき資格のものは無い。故に、精神内部の要求から、國民の間に、宗教の眞味を探らむと、つとめて居る傾向は明かに見える全體、精神活動の狀態に比較して考ふるに、科學は覺官に相當するもので、その研究の對象は現存せる事物と、その生成の徑路とである。その性質的の研究をするのは哲學の範圍に屬する。即ち哲學は自由の思惟作用で、精神内部に於て如何の感じが生ずるかを研究する、これで道德の基礎を作り、又これを教ゆることも出來るが、その道德に生命を與ふるに至りては宗教の力に頼らねばならぬ。即ち宗教は社會組織の意思に相當するもので、すべての最高藝術及び偉大なる行爲はこれから生ずるものである。

此の如く、宗教は科學でもなく、哲學でもなく、藝術でもない、人生に生氣を與へ、且つ國民を感化すべきもので、若し宗教が無いならば、眞に偉大なる行爲は起らぬであらう。少なくとも宗教は凡人に取りて必要缺くべからざるものである。而して、宗教が眞理なることを明示せんがためには、宗教が先づ自然界に關

する吾人の認識に矛盾せざるものでなければならない。親鸞聖人が新に立てたる淨土眞宗の教義は、大體に於て、今日の一元論に一致して居る。神の無い宗教、即ち科學的宗教は、超自然的の人格神を有せぬといふまでなれば、淨土眞宗も超自然的の佛を有せぬといふ點と、今日の一元論の唱道する所に一致するといふ點とで、これを科學的宗教、更に明白に言へば一元論的宗教であるといふことが出來る。

七百年の前にありて、此の如く、一元論的宗教とも名づくべき新宗教を起したる親鸞聖人は實に偉大なる人物である。又その淨土眞宗は自然科學上の認識に矛盾して居らぬ。我國民が無宗教に傾かむとするの狀況を示せる今日、余は大に感ずる所があつて親鸞聖人及びその宗教の一斑を世に紹介することにつとめて居る。この小篇の如き固より博雅君子の劉覽に供ふべきものでは無いが、なほこれを有志の人に示すの要ありと信じて敢て之を公にするのである。

時論數則

竹越與三郎

▼空しく知言の名を得たり

我參謀本部、內閣を初め、二個師團增加に全力、否な全力以上を盡して、瀆職事件まで產み出した連中は今日露國の敗北を見て何の顏かある、カルパシアンを越えたは僅か三箇月の夢であつて、今日はペトログラードの安危如何を憂ふるととなつて來た、二個師團增設の目的は露國に備ふるにあつたことは當局が陰に陽

に說いた所で、眞面目なる、併ながら識見の足らざる人々が贊成した理由は、露國に備へると云ふ一事の爲に眼の中に砂を投げられた結果である、僕は當時獨逸の露西亞國境に對する鐵道集中の狀態、墺地利の露國に備へる鐵道集中の狀態より、斷じて露國は東方に向ふの遑なしと明言した者である、萬一露國が勝を得たとするも、獨墺の二國を後ろに扣えて東に向ふと云ふことは、其後ろを追はれると云ふことであつて、斷じて露國の爲し得ざる所である、若し又露國が敗北したりとすれば、國家再造の機あるべきや否やを疑ふ程である、之に對して日本は枕を高うして居るこそ政治家の爲すべき所であるに拘らず、何を苦んで二個師團を造つて國力を徒費せむとするかと云ふのが僕の主張であつた、併ながら四百萬の大兵、西伯利亞鐵道の複線、猛鷲南に下ると云ふ如き、怖るべき形容詞の爲に頭を制せられたる軍人及盲目政治家等が唯々乎として二個師團を造つた、其結果は內政に腐敗を來した、斯の如くして造り得た二個師團は何の爲に造つたのであるか、今日露國の敗北の狀態は昭々として夫れ明かである、斯の如き勢ひを以てせば、縱令露國の敗北今日に止まるも、尙國力を恢復するに三十年を要するのである、若し此三十年に日本が二個師團に費すだけの力を養つて置いたならば、他日千載の好機會にどの位の効能があつたか數ふべからざるものである、後の政治家宜しく此失敗に鑑みるべしである。

露國の今日の敗北は、第一は紙上に四百萬の大兵あつて實際には百六十萬の兵しか戰場に出し得ぬと云ふことが原因である、何故であるかと云ふに、銃器彈藥の不足なることが第一の原因である、鐵道の不足が第二の原因である、第三の原因は財政の意の如くならざる事である、第四の原因は行政腐敗の結果である、過日オーストリックの要塞を守つて居るスコッペルフ將軍、此スコッペルフは有名なる老將軍の親戚であらうと思ふ、一日偶然佛蘭西服を著たる外國軍人がスコッペルフを訪ねて、寒溫の挨拶をすると同時に、將軍若し此城を撤退すれば五十萬弗の謝禮をすべし、而して

老將軍の餘生を安く送らむが爲に、獨逸の領內に於て一大家屋を與ふべしと云ふことゝ提供した、スコッベルフ將軍は「よし」と答へて直ちに電鈴を押して兵卒を呼んで、此探偵を射殺せよと云ふ命令を下して擊殺して仕舞つた、堂々たる要塞の主將に對して突然軍事探偵が賄賂を提供すると云ふことは驚くべきことであるが、併しながら露西亞の軍人が獨逸より賄賂を取つて機密を漏らすと云ふ滔々たる流風の下に於て斯の如き事あるは怪しむに足らざる狀態であると云ふ程の行政組織である、是等有形無形の原因は、僕をして露西亞に對しては、戒心すべきものであるが怖るべきものでないと云ふ意見を有たしめた、而して此意見が朝野を動かす能はずして、空しく二個師團を造り、空しく國力を費したと云ふことは遺憾千萬である、今日に於ては何人も吾々に知言の名を與へない者はなからうが、吾々が知言の名を得ることは國家の爲に頗る不幸と言はねばならぬ。

▼ガリポリの戰より來るべき外交の新局面

新聞紙はワルソーの陷落を報じ、ペトログラードの危きを報じ、白耳義國境の空中戰を報ずるが、戰局の中心は此處に在らずしてガリポリ半島にあることを忘れてはならぬ、ダーダネルスを破り得れば英佛は直ちに其武器と援兵を黑海に入れて露國を助けることが出來る、而して露西亞の、山の如く積んで捌け口なき物資を歐羅巴に提供することが出來る、同時に是等の地方より多くの物資が獨墺の二國に行くことを妨げることが出來る、而して獨墺側の最も防禦の薄い所はガリポリ半島である、故に英佛は彼等の最も弱き戰線を破らむが爲にガリポリ半島に上陸して居るのである、一旦此關門にしして破れむか、獨墺は其勢力の三分の一を殺がれたものと見なければならぬ、是れ即ち英佛の此處に全力を費す所以である、併しながら土國は多年の間フォン、デン、ゴルッ將軍の訓練の下に要塞を改築

して軍器を整へて居るが爲に、英佛が全力を盡すも此戰ひは容易に濟むまいと思ふ、白耳義國境に於ては一進一退容易に發展しない、露西亞に於ては、ペトログラードを取つた所が露西亞は滅びないのであつて、聽て十月將軍、十一月將軍、十二月將軍が雪の白き裝ひを以てやつて來るであらう、然れば獨逸はナポレオンの莫斯古討入の二の舞をせざるまでも、容易に露西亞を席卷することは出來なくなるであらう、結局冬の中にも戰ひ得べきはガリポリ半島なるが故に、是よりは列國の力を此處に集注せらるゝであらうと思ふ、英佛は手に唾してダーダネルスを取り得ると思つてかゝつた、豈圖らんや全身に汗しても取り得ぬのである、此に於て新らしき外交政策が起るであらうと思ふ、曾て歐洲出兵論なるものがあつたが、六百哩の戰線に對して日本が十萬十五萬の兵を出した所が何等の助けにならぬ、故に歐洲出兵論は此意味に於て問題とならなかつたが、ダーダネルスを取るに於て若し日本が十萬の兵を出し得るならば、ダーダネルスは容易に陷落するであらうと思ふ、是れ即ち今日外交家の著眼して居る所である、或は英佛之を試みて成らずんば日本を誘ふと云ふ議論が出て來るであらうと思ふ、否な既に出かけて居るのである、此に於てか新しき意味に於て歐洲出兵論が再燃するであらうと思ふ、是れ宜しく日本の政治家の今より考量すべきことゝであると思ふ、賽の目は輕々しく拋つべからず、日本は此ダーダネルスを奪取せよとの提供に對しては宜しく愼思熟慮すべし、賽の目を投げる前には深く考へなければならぬ、予は之を投げよとは言はぬ、予は之を投ぐること勿れとは言はぬ、宜しく深く考量して當否を決すべしと言ふのである、而して其當否は何に依て決すべきや、曰く、日本は是より新なる題目を考へよと云ふのである。

▼六百哩の戰線

カレーよりボージユに至る戰線五百七十餘哩、此中佛蘭西の守る所五百二十哩、此戰線に於て獨佛一進一退、容易に發展せぬ、此に於てか傍觀者は口々に英佛

を罵つて彼等の兵甚だ軟弱である、或は斯の如き軟弱の兵を以て徒に退嬰を事として居る間に露西亞が負けて、而して獨逸が、露西亞に使ふ兵を以て一轉して西に向はゞ英佛は大敗すべしと、談何ぞ容易ならんやである、第一獨逸が殆ど巴里を奪はんとするまでに至つた時は、東露西亞に備へる兵は僅に其一部を置いたのみにして、全力を盡して巴里に向つたのである、而して、佛蘭西の兵力を増すに當つて、悉く追かへされて今日の塹壕戰となつて來たのである、然らばマッケンゼン、ヒンテルブルグの兩將がワルソーを取る爲に拂つたる四五十萬の犠牲を地に委して、其疲れたる力を以て更に巴里に向つた所が同じことを繰返すのみである、此點に於ては傍觀者は意を安んじて可なりと思ふ、凡そ戰ひに於ては戰ふの力があつて而して戰はぬと云ふことは非常の勇氣を要することである、而して此勇氣の中には必ず智慧が伴ふものである、獨逸は今日英吉利に對して、海上に於ては國力遙に懸隔して居ると云ふことを知つて居るが故に、彼は戰はずして敵を疲らせむとして居る、即ち潜航艇を以て商船、軍艦を攻撃し、旦に一船を沈め夕に一船を撃ち、所謂掩き取り政略を以て英吉利の力を弱めて、彼の十に對して我八位の力となつたならば、此に於て初めて正々堂々の戰ひをしやうと云ふ策を取つて居るのである、是れ世間の齊しく認むる所である、併ながら佛蘭西のジョッフルは、獨逸の海軍政策を逆さに獨逸の陸軍に向つて用ゐて居ると云ふことを忘れてはならぬ、即ち彼は獨逸に軍器充實し、兵力充滿して居ることを知つて居るが故に、彼は塹壕戰に依て旦にボージュを攻め、夕にアルゴンヌに戰ふと云ふ方法で、所謂ニッブリングの兵法を執つて居る、即ち旦に千人を殺し、夕に一城を攻め、日を曠ふする間に其兵力を増し、其軍器を整へ、而して英佛共に相策應して大運動を爲し得る日を待たむとするのが、ジョッフルの兵法である、事實に於て最初の出發點の時は、軍器、彈藥、兵數、獨逸が遙に勝を制して居つたのであるが、英佛は今日遲れ馳せながら兵を整へ、軍器も略ぼ出來

たらしい、唯今日英佛共に大砲の小道具、即ち照尺に應じて大砲を擊つ、之を視察する望遠鏡と云ふやうなものに於て獨逸に敵はなかつた、是等が今英佛の苦心して居る點であつて、軍器彈藥も略ぼ出來たらしい、故に露西亞に於てペトログラード危しと云ふても決してジョッフルの心を動かすに足らない、矢張り十一月將軍、十二月將軍が援兵となつて露西亞を助け、彼等が一里退き二里退き、五里追はれ十里追はれて還る頃、英佛の力が充實する、此に於て初めて決戰の時が來るであらうと思ふ、元來露西亞は戰つて勝つたことのない國民である、英佛とセバストポールで戰つても負けた、日本と戰つても負けた、支那と戰つても負けて居る、土耳其と戰つても僅か一回の勝利しかない、併ながら國力の大と、兵數の多さと、北より南に下るの勢ひとに依て、敗を轉じて勝ちとすると云ふのが其國の歷史である、故に獨逸と戰つて負けたと云ふても尙存亡の大危が迫つたとは言へない、必ずや冬と云ふ力に依て恢復する時が來るであらう。

此頃一米國人が英吉利を經、佛蘭西を經、獨逸を經、露西亞を經て日本に來た、而して其見聞した事を親しく我友人に語つた所に依れば、獨逸の食糧は案外に豊富である、戰爭を見込んで買占めた鹽漬の肉は其儘に貯藏してあつてまだ手を附けない位である、而して又有鐵道の左右の空地には悉く麥を植えて、汽車は殆ど麥畑の間を走つて居ると云ふ有樣である、所謂寸土尺地と雖も空しく放棄しないと云ふやり方をして居る、此點は實に敬服である、併ながら獨逸が如何に善く戰ふと雖も、佛蘭西の國境に於ては大砲一萬發を放つて僅に佛蘭西兵十人を殺すと云ふ位のもので、最早大砲の戰爭にあらず、武器の戰爭にあらず、是れ以上は國力の戰爭である、國力の戰爭となれば海上の權力を握つて居る英佛、財政上に信用のある英佛、是等が勝つと云ふことは自明の理である、故に結局、戰場に於ては獨逸が勝ち、而して戰爭に於ては獨逸が破れると云ふことになるであらうと思ふ、是亦我國に在つて戰場の勝敗に依て心を動かす所の外交論者の頗る注意を要

する點であらうと思ふ。

▼誰か我敵、誰か味方

近頃日英同盟に付て紛々の議論がある、或は日露同盟を主張する者がある、或は大膽に日獨露を連ねて新なる團體を造るべしと唱へる者さへある、是等の論、或は可也、或は不可也である、我國は今日日英同盟を有して居るが、此同盟は既に相當の効果を收めた、或は我當局の無能より奏すべき効果を奏し得ずして過ぎたこともあるが、併ながら事實に於て我國を益したこと少なくない、同時に又與國を助けて彼を益したことも更に多い、此點に於て我國は日英同盟を破棄すべき新なる理由を見出さぬのである、若し新なる同盟を造るべしと云はゞ、我國か是より更に大なる利益を得ると云ふ目的を以てゞなければならぬが、所謂日露同盟なるものは如何なる利益を我國に與へむとするのであるか、假りに露西亞と同盟する、其同盟は攻守同盟でなければならぬが、我國は之に依て如何なる利益を得むとするのであるか頗る疑ふべしである、唯我國自らの存在の爲めであるならば同盟を要さぬのである、今日の我陸軍、今日の我海軍を以て、如何なる國と競爭するも決して祖國の存亡を虞るべき理由はないのである、故に今日新同盟を造るべしと云はゞ、玆に何等かの理由がなければならぬ、予は玆に卒直に大膽に言ふ方が宜いと思ふ、我國が若し新なる同盟を造ると云ふあらば我國の發展の爲めでなければならぬ、何の爲に發展するかと云はゞ吾々は今日瓜哇とスマトラを要するのである。如何なる國と雖も我をして瓜哇とスマトラに據らしめて、スンダ灣の海峽を我要塞の下に制すると云ふことを、助けてなさむとする國があれば我國の味方である、此目的を妨げむする者があれば我國の敵である、我國には東洋の平和を維持する權利と義務がある、權利は我國の安全を保つ爲めである、義務は隣國の危急を救ふ爲めである、而して我國が今日瓜哇、スマトラに據つて、スンダ灣の海峽を我制令の下に置かねば東洋の平和を維持することが出來ぬが故に、

東洋の平和を維持する點より我は瓜哇、スマトラを要するのである、此目的を助ける國があるならば我は握手して宜しいのである、此目的を妨げむとする國があれば我は是と相離れて宜しいのである。

今日潜航艇は六千浬の海を走り、三萬噸の大艦は、如何なる物をも打壞すと云ふ時代に於て、我は最早我が我國防を臺灣海峽若くは對島海峽に置くことは出來ぬのである、國防の一線は碧水の上に立てねばならぬ、即ち我國が瓜哇スマトラに制令して、スンダ海峽に要塞を築き、此處に潜航艇を集め、此處に大艦隊を集めるならば、歐洲の如何なる艦隊と雖も印度洋を下つて東に來ることは出來ぬのである、此目的を遂げることが出來れば我國は今日の艦隊の勢力を以て國防を全ふすることが出來るのである、若し此地に據つて、碧水を以て國防の第一線とすることが出來なければ、歐洲の艦隊の增加に伴つて我國も艦隊を增加せねばならぬことになつて際限する所はない、故に我國は國防の點より瓜哇スマトラを要するのである、隣國に向背の定まらざる中立國のあると云ふことは頗る不安の本である、今日歐洲に於て和蘭の向背が不定の爲に、而して敵國に多くの機會を與へるが爲に幾許苦んで居るかと云ふことは日々吾々の見聞する所である、若し和蘭が敵であり若くば味方であつたならば、問題は極めて簡單に解決するのである、敵ならば蹂躙して宜しいのである、味方なれば則ち兵を揚げることが出來るのである、斯の如き和蘭の今日有つて居る瓜哇、スマトラは、日露戰爭の時に幾多の危險を我に與へたのである、而して近頃獨逸艦隊が南洋を出沒して、此搜索の爲に我國は非常に力を費した、此我の力を費した一半は瓜哇、スマトラの島々が働いたのである、斯の如く危險なる、而して中立を全ふすることの出來ない中立國が附近に在るのは、吾々の存亡に關するものであるから、一は東洋の平和の爲に、一は我國の安全を圖るが爲に、瓜哇、スマトラは我の制令の下に置かねばあらぬのである、英佛は知らず此島を我の下に置くの決心ありや否や、是れ即ち今後の外交問題を決すべき要點

である、我は左手に瓜哇、スマトラを押へ、右手に外交の賽の目を持たねばならぬ、賽の目を投ずべきや否や、投ずべからざるや否や、宜しく此問題と相共に解決せねばならぬ。

▼蝙蝠の如き外交

大隈内閣の支那に對する談判は、談判の名の下に支那に制令せむとするものであつて、而して其結果は天下の見る如きものとなつた、外交談判にあらずして制令である、制令をして我の爲さむとする所を爲したのである、宜しく我國民は滿足すべき筈である、然るに天下、領土擴張の志を懷く者も、商利伸張を主とする者も、齊しく此條約に向つて不滿であると云ふことは何故であるか、凡そ一國の外交政策は一定の方針がなければならぬ、我國若し、支那に對し領土擴張の主義があるならば、宜しく今日に於て之を行ふべし、今日を於て機會はないのである。若し此志あるならば宜しく此機會に乘じて、一層大膽に、一層露骨にやるべしである、此機會を捨て決して機會は來ないのである、領土擴張亦一の主張である、此志あるならば宜しく公々然と行ふべしである、或は又領土擴張を主とするものにあらず、宜しく平和の間に商利を伸張すべしと云ふのであるならば是亦一の主張である、少しも耻る所はない、多くの犧牲を拂つても商利伸張の策を立つべしである、天下名と利とは併せ得べからず、名を欲する者は宜しく名を成すべし、利を欲する者は宜しく利を受くべし、然るに今日の大隈内閣の外交政策なるものは、領土擴張派の政策なりやと云はゞ一向左樣なる主義もないやうである、然らば商利伸張の政策なりやと云はゞ、徒に支那人の權利を傷けて彼の猜疑心を挑發するが如き條項ばかりである、我國は數師團の兵を動かして最後の通牒を送つて、其最後の通牒は何が爭點であるかと云はゞ蒙古の居住權と云ふが如きことである、驚くべき外交と言はねばならぬ、昔蝙蝠は、鳥の族よりは獸であると云つて排斥せられ、獸よりは鳥の族であると云つて排斥せられ、遂に何れにも附くこ

とが出來ながつたと云ふが、我大隈内閣の政策なるものは、領土擴張主義者よりは其政策無しと云つて嘲けられ、商利伸張論者よりは空權に拘泥すと罵られ、何れの派よりも好まれざるものである、是れ即ち國民、平和論者、主戰論者、何れの人よりも攻擊せられる所以である、我には一定の主義あるべし、領土擴張ならば露骨に大膽に之を行ふべし、高利貸が債務者をいぢめるが如き手段は堂々たる大國民の爲すべきものでないのである、若又商利伸張主義であるならば宜しく名分の爭ひを捨て實際上利益を得ると云ふ方法を講じなければならぬ、予は單り内閣と言はず、我政治界の多くは蝙蝠論者であることを嗤ふものである、内閣の政策を攻擊する政黨、獨立の論者、多くは唯之を攻擊するのみであつて、平和主義を心に懷きながら公然之を論ずるの勇氣がない、領土擴張主義を抱きながら公然之を論ずるの勇氣がない、唯其言を壯んにし、其理を曖昧にして、己れの議論行動が如何なる結果を生ずるかを顧みず、内閣は其權力の爲に進退し、政治家は其

名聞の爲に議論するが如きことあるを卑しとする者である。



御思召に依て留任と決したる大隈伯の進退を議す

▽留任は政治道徳上不可

松山忠二郎

大隈伯が大浦内相の不始末事件に就いて、監督の責任免るべからずとして一旦辭表を呈しながら。更に陛下の思召に藉口して留職したる件は憲法の成分から言へば少しも差支へはないのである。憲法第十條には、『天皇ハ文武官ヲ任免ス』とする。總理大臣の辭職を御聞き屆けになるも又ならないも、之は陛下の大權である。從つて大隈伯が留任せよとの聖旨に畏まつて辭職を思ひ止まつたといふ事は、憲法の成文に違反した事でも何でもない。此點からは非難する譯けには行かぬと思ふ。又嘗て伊藤公が海軍擴張案を提出して議會に否決された時に、天皇陛下の詔勅を仰いで之を成立さしたのとも違ふ。又先年衆議院が不信任決議を將に可決せんとする時に桂公が、陛下の勅諚を仰いで之を抑へようとしたのともいふ。此二つの場合に於ては、國民の意志を代表する議會が或は否決し或は可決せんとしたるにも拘らず、聖旨を仰いで之を抑壓しようとしたのである。今度のは之に反して國民の意志は未だ發表されて居ないのである。いろ〳〵私の機關で、新聞とか雜誌とかいふものは殆んど全部反對したからして、之が國民の意思と言つても差支へないかも知れないが、正式に國民の意志を發表するのは議會でなくてはならぬ。議會はまだ大隈伯の留任を希望するともしないとも解らぬのである。故に桂や伊藤の場合とは少し違ふと思ふ。然しながら大隈伯が一旦良心に相濟まぬと考へて辭表を提出した以上は、之を決行するのは當然である。陛下はお許しになつたかも知れないが、國民は許さないかも知れない。そこで本當を言へば、議會を解散して（議會開會中でなくとも解散は出來ると思ふ）國民の信任を問いて進退を決定するのは當然であると思ふ。然るに斯ういふ手段も取らないで相濟まないと思ひながら留任するといふことは不都合な話である。大隈伯が相濟まぬと言ふのは、陛下に對して相濟まぬといふ許りでなくて、國民に對しても相濟まぬといふのである。然るに相濟まぬと思ひながら、留任するといふことは憲法の明文には違反して居なくとも、政治道徳の上から不都合だと思ふ。

元來立憲政治家は聖旨を餘り度々輕々しく口にすべき者でない。之は從來の藩閥政治家は度々遣つた事であるが、大隈伯は之を以て不都合だ

と言つたのである。果を皇室に及ぼすと言うて非難したのである。然るに自ら位置が代つたが爲めに、聖旨に口を藉りるといふのは、大隈伯としては一層不都合である。立憲政治家は總て自分の責任を以て進退を決しなくてはならぬ。元來日本では何でもない事まで、やれ思召に叶はぬとか、やれ違勅だとかいふことを輕々しく口にする弊がある。三年前の西園寺侯の進退についても世間では一時違勅の説が頗る矢釜しかつた。斯ういふことを以て西園寺侯を不忠の臣だとするのは大きな間違ひである。之と同時に聖旨であるから何でも彼でも從はなくてはならぬといふのも、決して君國に忠なる者の言分ではない。殊に立憲政治家はさういふ事をいふべきものでない。一例を言へば、英國で昨年の一月に其例がある。英國ではアイルランド自治問題について、統一黨と政府黨と大いに意見を異にし、就中アイルランドのウルスターの人民は自治案の施行に對して猛烈に反對した。そして將に內亂が起らんとするまでに立到つた。其時に英國の皇帝陛下は之を憂ひさせ給ふて、各派の領袖をお呼びになつた。そして自ら仲裁の勞をとられた。此時召に應じて參代したるものは政府方ではアスキス首相、ロイドジョージ藏相。統一黨ではランスダウン卿、バーナーロー。ナショナリストではレツドモンド、ジロン。ウルスター統一黨ではカーゾン其他全部合せて十四五名か二十名程であつたと思ふ。そして陛下直き〱に仲裁をされたに拘らず、各々君國の爲めに利益だと思ふ主張を枉げなかつたのである。そして約り不調に歸したのである。日本流で言へば之は違勅かも知れない。或は不忠と見る人があるかも知れない。然し之が本當に君國の爲めに忠な所以である君國の爲めに利益と思ふことを取つて捨てなかつたのである。立憲政治家は自分の仕事については、これ位責任を持たなくてはならぬのである。然るに大隈伯の如く上皇室に對し下國民に向つて相濟まぬと信じながら、陛下の優諚を承つたと言つて其相濟まないことをするといふことは、寧ろ無責任である。國務大臣の責任を心得ないものである。況んや斯ういふ事を非立憲的と唱へた大隈伯に取つては尙更のことである。又況んや大浦事件は獨り大浦內相の責任のみならず、國務大臣の連帶責任となるべき譯けのものである。之が大浦一個の利害に關することであるなれば、大浦個人の責任としてもいゝかも知れないが、內務大臣が政治的問題としてした仕事については連帶責任を負ふべきものと思ふ。憲法の明文から見れば差支ないが、政治德義の上から言うて不都合だと思ふ。

そこで之に對して反對するものが、憲政擁護の運動を爲すといふのは之も當然のことゝ思ふ。憲政の爲めに結構だと思ふ。然し玆に一言して置きたいのは、憲政擁護運動が權勢擁護の運動とならざらんことを希望するのである。從來我國の政治家が或は當局者が、假令憲法に違反しないでも、立憲的政治家として非難すべきことを遣つた例はいくらもある。最近の例を言へば政府が最後通牒を支那に向つて發するに臨んで元老に相談した。又日獨開戰に就いても元老に相談した。此等は憲法上の責任を心得ない者のすることである。憲法には『國務大臣ハ天皇ヲ輔弼シテ其責ニ任ズ』とある。國政上一切の責任は國務大臣に歸さなくてはならぬ

のである。然るに之を元老に相談して元老の調印を求めて、其責任の一半を元老に歸するといふことは、國務大臣の責任を解しないものである。聞くところに依れば支那に對する最近通牒の如きは、內閣大臣は最初强硬なる意見であつたのに、元老が容喙して、遂に彼の如く讓歩せしめたといふことである。其時の前後の事情を考へて見れば、それは事實であつたらうと思はれる。斯くの如きは憲政擁護を唱へる人の默過すべきところでないと思ふ。元老たるものは憲法上何等の責任ないものである。之をして容喙せしむる國務大臣も不都合であるが、容喙する元老も不都合である。然るに此時は憲政擁護會は何とも云はなかつたのである。更に著しい例は責任支出の問題である。政府が勝手に國庫金を支出して、之は憲法に禁じてなかつたから支出したと强辯する。實に言語道斷である。憲法に禁じてない金を國務大臣が自由に支用し得るならば、憲法は畢竟空文となるのである。豫算は全然無意味となるのである。德義問題でない、違憲問題である。然るに此時に憲政擁護會は何とも言はなかつたのである。之は僕の考へるところでは二つの理由があると思ふ。元老の容喙を攻擊するのは其時の事情に於て、大隈內閣に便利であつたのである。大隈內閣に取つて有利であつたのである。從つて國民黨なり政友會なりの連中は、此時に憲政擁護を唱へなかつたのである。又責任支出は大隈內閣も遣つたが、從來政友會內閣も遣つて來たのである。此點に於ては同罪であるのである。さういふ弱味があつたが爲めに、彼等は憲政擁護を唱へなかつたのである。單に德義問題でなく、明かに憲法違反であるに拘らず之を默過したのである。さうすれば彼等の憲政擁護といふものは、自己の權勢を擁護する爲めに、便利なときにのみ唱へる憲法擁護である。黨爭の爲めの憲政擁護である。約り權勢擁護となるのである。斯ういふ勝手な憲政擁護は、僕の感心しないところである。始終同じ意見を以て憲政擁護を主張されんことを希望するのである。其議論が大隈內閣に利益であらうが不利益であらうが之を問はない。又政友會や國民黨に不利益な場合でも、之を唱ふることにしたいものである。僕は此意味に於て憲政擁護會の起らんことを希望する。

要するに今の政治家は政府黨にしろ、在野黨にしろ今少し眞面目にならなければならぬと思ふ。然らざれば政黨の信用は地を拂ふて空しく去る。そして憲政の發達上大いに妨げとなる。此點は實に憲政擁護の爲めに最も憂ふべきところである。

▽非立憲にあらず

伯爵　大木遠吉

此度の大隈內閣の留任に就いて、道途動々もすれば其行動の甚だ立憲的にあらざるを難ずるの論者がある。が、吾輩は留任其事を以て非立憲也とは認めない。反對論者は、苟も一旦責任を自覺して辭表を闕下に捧呈したる上は宜しく其意を貫徹し、縱令如何の事ありとも、再び留任す

るが如きは斷じて不可しくない。是れ憲政治下に於ける臺臣の節にあらずといふにある。然しながら大浦内相事件の爲めに起りし一時の動搖の如きは、之を政策經綸の上に於て民意を失墜し、爲めに骸骨を乞うて、以て國政を他に讓り渡すとは甚だ其趣を異にするものがある。所謂大浦事件なるものゝ内容は未だ判明しないが、世傳ふる處に依れば、選擧干渉事件にあらずして、增師案遂行の事より累を内相に及ぼしたといふ話である。若し是れが議會解散後の選擧法違反、辛辣なる政府の干渉といふことで、大浦子が司法權の發動に依り禍を蒙つたものとすれば、是れは如何にも内閣全體の責任に歸すべきものであらう。然しながら熟々事の成行を觀るに、大隈内閣が當初出發の當時より少數黨を提けて立つた以上、劈頭第一に政府の信任を國民に問ふべく解散を斷行するといふことは、吾輩は決して不都合なる行爲であるとは思はない。寧ろ立憲的行動であると信ずる。夫の臨時議會に於ては、政府に於ても危急缺くべからざる問題が多かつたが爲めに、成るべく議會との衝突を避けんとした形跡があるやうであるが、已に大隈伯出廬の當時より、一度議會を解散して以て政府の信任を國民に問はんとするは、是れ既定の事實であり、一方政界の廓淸といふことは、新政府が綱領中の骨子をなすものであつた。新政府出現の意義既に玆にあつたとすれば、次の通常議會に於て其增師案を遂行せんが爲めに、彼等は何を苦しんでか所謂官僚内閣の常套手段たる議會操縱議會買收等の、斯かる陋策を試みる必要があらうや。當時大隈首相の採りし態度は甚だしく挑戰的態度であり、故らに平地に波瀾を起さんとするが如き所謂喧嘩腰であるとの非難さへあつたではないか。即ち解散斷行といふ事が、大隈首相の本旨であつたが故に、其鋭鋒が動々もすれば現はれたのに過ぎない。

事態斯くの如くにして何故に大浦子は議員操縱の策に出でたのであらうか。吾輩惟ふに恐らくは是れ大浦子が二十年來の歷史に於て、大浦子の性格に於て、又大浦氏の最も長所なりと自信する點に於て、敢て解散を斷行して選擧を爭ふが如きは、謂はゞ智慧の足りない遣り口であつてさういふ手荒な方法を取らずとも、自ら他に爲すべきの道がある。只此道は最も秘密を尊ぶけれど、若し自分が一度手を施せば、增師案の如きはわけもなく遂行することが出來ると、斯う考へたものであらう。此場合に當つて其秘密を尊ぶ計畫を打明けて他の閣僚に圖るといふやうなことは、大浦子の性格から推してあり得べきことではない。所謂計は密を以て成るといふことは、先生の金科玉條である。特に大隈伯の如き動々もすれば事を公開し過ぎる癖のある人に相談をする筈はなし、又若し相談をしたとすれば、決して同意はされなかつたであらう。そこで是れは大浦子が一人の責任として閣僚にも圖らず、功罪を自己一身に止むる覺悟を以て事に從つたものであることは信じて疑ふ餘地がない。そこが即ち大浦子の値打のあるところで、一面から言へば宛ら古武士の面影の存する點である。斯かる状態の下に成されたる失策が現はれた以上は、假令司法權の發動により大浦子が自ら進んで辭表を捧呈することなしとしても、此場合政府は大浦を咎るべき成行となつて居つたのである。然る

に大浦が自ら顧みて其失策を思ひ、延いては内閣全體に其累の及ばんことを憂ひ、決然身を擲んで〻野に下り、永く政界と絶ち社會と伍せざるの覺悟を以て隱退したことは、一つには憲政を汚毒し至尊に對して申譯けのない爲めと、二つには政府同僚の間に向つては獨斷專行遂に失態を招いしたことを謝し、自ら引決したものであらうと思ふ。吾輩の信ずるが如く、内閣の大臣皆其謀議に與らずとしたならば、何の爲めに辭表を捧呈したか、大隈首相を始めとして内閣の總辭職を爲したのは、是れ皆大浦事件に連座せる責任を重んじた爲めであらうと言ふ者もあらうが、吾輩をして之を觀れば、此辭表捧呈は必ずしも連座の責任を重んじたものではないのである。只我が國風、我が國俗は其閣班の一人より失態を釀した場合に當つて、我々は其謀議に與らざりしの故を以て上至尊に對して何等の申譯けのないことはないとして、恬として顧みざるを得るものではないのである。即ち董督不行屆といふ責任は上御一人に對して誠に恐懼に堪へない次第である。是れが若し政策經綸の失態ならば、上御一人に對して相濟まざるのみならず、下國民全體に對しても責任を負はねばならぬ。故に此場合に於ては至尊いかに優渥な御思召を賜ふたとしても、立憲大臣の節義としては、假令聖慮に逆ふの惶れありとも、斷乎として野に下らなければならぬのが立憲大臣の取るべき本務である。至尊に於かせられても亦斯かる場合に國民の意見を參酌し給ふことなく、漫りに留任をお命じになるといふやうなことは事實あるべきやうもない。若し國論沸騰して爲政者の失態を責め　國民の代表機關たる立法府の權威を以て

其の失政を責むることあらんか、是れをしも御參酌にならんといふやうなことはあり得べからざることである。然しながら今回の出來事は　之れと大に其趣を異にするものがある。此場合に當つては上至尊が内閣を共謀者であると御思召すか、將た又然らずと御思召すかに依つて定まることであつて、敢てこれ以上を揣摩忖度する必要はないのである。然らば反對論者は言ふであらう。さういふ譯ならば總辭職の辭表を呈出するは不都合である。事連帶責任にあらずとするならば、何の故を以て辭表を捧呈したかと、然しながら國政といふ事に就いては如何なる場合も連帶責任である。政策の行惱み又は政策の失敗といふ事に就いては如何に言葉を巧みにしても其連帶責任を免れる事は出來ない。但だ事閣僚一人の失策に止まり、内閣全體の謀議に加はらざる事にも連帶責任を負はねばならぬといふ理屈はないと思ふ。それにも拘らず辭表を捧呈したといふのは外國に於て見るべからざる、特に日本の國風國俗の然らしむる所であつて、如何に自己が連帶の責任を負ふの要なしとしても、閣僚より内閣の政綱に反する行爲者を出した以上は、何としても取締不行屆といふ廉を以て至尊に對して御沙汰を待つといふ事は、いかに憲政治下に在りとも其手續は怠る事は出來ないのである。玆に於て至尊は留任をお命じになつたと言はうよりも寧ろ辭職をお聞屆にならなかつたといふのが穩當であり、且事實であるやうに思はれる。若し反對論者の言ふが如くんば、いかなる場合に於ても一旦政府が辭職を申出でた場合には之を御聽許にならねばならぬといふ譯になるが、決してそんな事はない。御聽許にな

らうがなるまいが、此場合偏へに聖斷に依るの外はないのである。如何となれば、何等國政上に就いて失策を爲したといふ事を當局が思はざる以上、又國民の代表機關たる議會の彈劾、反對等の無き際に當りては至尊が畏れながら御獨斷を以て謂れなく内閣の變動を生ぜしめ給ふといふ事は、是れは不可能な事で、是れなきが即ち立憲政治の賜物である。何故なれば大隈内閣成立以來、世界の事甚だ多端を極め、從て日英同盟の條約より生ずる我國の責任、義務亦甚だ重大なる意義を有つに至つたのである。かゝる重大なる責任を負へる内閣が未だ自己の政策の過てるを思はず、國民の代表者の多數が其組織的機關に於て未だ反對の氣勢を擧げざるに先ち、大臣の進退を猥りになすべからざるものであるといふお考の生ずるのは寧ろ憲政の賜物として之を欣ぶこそ當然ではあるまいか。若し反對論者の説の如く、苟くも大臣が一度辭表を捧呈したる以上は、願意を必ず徹底せしめねばならぬものとせば、吾人が望むところの責任内閣といふものは到底期待することは出來ない結果になるのである。故に之を逆に觀察して、民望未だ去らず、閣僚其國政上に就て過失あるを認めざる時に猥りに内閣を更迭せざるべからざる現象を生じたならば如何であるか。眞に憲政の爲めに憂慮せねばならぬ次第ではないか。故に反對論者の骨子とする所は、其大事件に連座するや否やに在るので、辭表を出した以上は連座を自覺したのである。監督不行屆といふが如きは只一時を糊塗するの言辭に過ぎない。然るを猥りに口を聖旨に藉りて留任する事は非立憲也と非難するのであるが、吾輩の見解に由れば、閣僚の一人より失態を生じたる事に就いては、閣臣我國風國俗を重んじ恐惶して一度闕下に骸骨を乞つたのであるが、其御聞屆無きに及んでは是非なく自己の本分に歸り、飽くまで國家の大政の上に於ける責任を全うすべく努力するといふのが臣子本然の責務であるまいか。と、斯う考へて彼等が再び陣容を整へ以て國家社稷に對する大責任を負かんとした事は立憲の本義に適うたものといふべくして、決して非立憲呼はりをなすべき筋のものではないと思ふ。況や反對論者に於ては、此出來事を以て政權爭奪の道具に供せんとするが如き傾向あるに於て、吾輩は却つて反對論者其者の陋策を卑しとするものである。若し在野反對黨に於て現閣の國政の方針に就て異議ありとするならば、宜しく其非を責め其過を明かにし以て之を民論に訴へ、堂々として論戰を開くべきである。是れ即ち憲政の本義にして、苟且にも詐欺政略を採るが如きは憲政の最も厭ふところ、吾輩の最も採らざるところである。敢て吾輩は現閣の行爲を曲說して論議を爲さんと欲するものではない。但だ立憲大臣の責任なるものは區々たる末節及形式に拘泥する事よりも、より大なる責任が有ると信ずるからである。立憲大臣なるものは武斷專制時代と異りて、進んで内閣を組織する場合に當りても其政策經綸を國論に訴へ、決して二三權力者に迎合することなく、正々堂々として内閣組織に從ふべく、それと同時に其退くや亦同じである。何等國政上の過なきにも拘らず、二三權力者の意に依りて、或は我意を以て退く事は出來ない。是れ憲政の難有いところである。之を概言すれば進んで内閣を組織するに方つても其根據となるも

のは政策であり、其退いて野に下るに方つても其理由となるところのものは政策と國論との關係に在て、其他の小事故小節目に就て進退を輕卒にすべきものでないことを言ふのである。故に、事餘談に互るが、加藤、八代、若槻三人の行動に對しては吾輩は慊焉たらざるものである。いかにとなれば、彼等も亦大浦と共謀せる者とは稱することは出來ない。故に彼等の辭表捧呈の理由は内閣のそれと同じく、彼等も亦首相と其進退を共にする爲めに骸骨を乞うたものとすれば、首相にして其辭職の願意聞届けられなかつたとすれば、當然の歸結として、彼等も踏止まらねばならぬ順序ではないか。それとも此三人が大浦と共謀をなし、所謂議員操縱策に參加したものとすれば、縱ひ司法權の問題外に在りとしても、單に辭職を以て相濟むべき次第のものではない。然るに一身を潔くし、世俗の俗論に阿附して以て自ら高しとするが如きは吾輩の甚だ取らざるところである。或は嘗て大隈首相と其政策經綸に於て一致するものがあつたのが、今後は意見を異にし、共に閣班に列するを得ずといふのならば、須らく其意見變化の理由を明かにし、其率ゐるところの政黨は與黨を去って別に一旗色を立てねばならぬ。然るに聞くが如くんば、其與黨たる事は依然として昔日の如く、何等面目を革めずとせば、此三人の辭職は甚だ意義なきものと言はざるを得ないのである。

再聲の現閣留任に就ての憲政上の意見は右のやうである。江湖識者の若し吾聲に過ちあらば忌憚なき敎を切望する次第である。

▽憲法の精神解釋から觀て

法學博士　花井卓藏

私は大浦内相問題に就いて、總理大臣始め各大臣が相共に辭表を捧呈したる此生きたる事實は、政治上道德上其當時にありては、連帶責任なる觀念の下に於て爲されたることと思ふ。而して私も亦斯くの如き場合に於て、事に當りて何事をも知らざる閣僚に對しては、如何にも氣の毒には感ずるが、政治上の道念としては已むを得ざることゝ思ふ。憲法の精神解釋としては、道德、正義、並びに責任の三者を離れることは出來ないからである。

右の次第で、閣僚が相共に辭表を棒呈したところ、難有き思召もあり又元老の勸誘默止し難きものありて、留まりたりといふ説の眞僞は別論として、留まる可か、去る可か。私の意見としては前に述ぶる通り連帶責任論であるから、敢て是より以上を語るの必要はない。然しながら留まりたる者あり。其説あるべし。去りたる者あり、亦其説あるべし。此點に於て閣中二派ありしは爭なき事實なり。識者の注意すべき點なりと思ふ。

大浦内相の問題は其農商務大臣たりし時に起りたるものゝやうである。議員買收の事の如きは、農商務大臣の主管事務にあらざるのみならず、寧ろ反法行爲である。從て法文論より言へば、他の閣僚は何等の責任なきものゝ如く感ぜらるゝけれども、そこが、憲法の精神解釋に訴へ

ればならぬ大切な點である。曰く道德、曰く正義、曰く責任の點より觀て、其實を分つといふことは、政治家の履むべき常道ではあるまいか、この故に大隈内閣は閣僚相携へて辭表を出したのであらう。只或事情の爲めに終始する事の出來なかつたのは、いかにも遺憾に感ずる。然し出來たものなら仕方がないから、成るべく善政を行つて貰ひたいといふ位の感を、今取敢へず有つて居るくらゐの吾輩の立場である。

政治問題は別として、此度の大浦内相事件の禍因をなしたる所謂瀆職事件は、いかにも日本の憲政史上の汚痕である。嘗て日糖事件ありて議員會社爲めに買收せられ、今亦同じやうなる歴史を繰返すに至つては、實に歎息の外はない。議員の買收事實は豫審決定前の事であるから、私は何等の意見をも述べぬが、道塗傳ふる說の如くんば、國民の大自覺を要する秋ではあるまいか。立法部の人々が司法權の爲めに、其政治的罪惡を刑法問題として云爲せらるゝといふことは、誰れでも國民は默して息むべきでないと思ふ。選擧に國民の自覺なき自信なき態度は、此禍源を爲すのである。買ひたるなり、賣りたるなりでは、誠に困つた次第である。

▽留任不可なし

司法省參政官　田川大吉郎

大隈伯若くは、大隈内閣の進退に、評論がましいことは、僕として遠慮すべき譯も有るまいが、少し氣の置かるゝやうな感じのするのは、多分慣習からでせう、折角のお尋ね故、略ぼ思ふ所を申述べる。

內閣としては、國民の信用若くは所謂衆議院の多數が、生存の大要件であることは申す迄も無い。それに陛下の御信任も申す迄も無く、その一大要素である。大隈伯としては先般の總選擧に成功し、近時議會にその結果を確實に收束し得たから、今回大浦子の事件に際しても、左して驚かず國民の信用は我に在る、議會が開會中なら改めて信任投票を試みても見るけれども、閉會中ゆゑそれもならず、それは自然に次の議會に讓るの外無しとして、一方陛下の厚き御思召に感激するの餘、恐懼して先づ改造の方向に努力されたものであらう。

隨つて冬の議會には、大隈内閣は所謂信任投票を問ふて見る氣であらう、英國では、かゝる場合は、例の勅語奉答案で討論する慣例のやうであるが、それは我國の倣ふべきことでは有るまい、我國の勅語の樣式も議事の慣例もさう爲り來つては居ない、總理大臣の施政方針の演說には從來討論無く、質問のみ行はるゝことになつて居るが、然もその質問は多く討論風であつた、故に此場合を利用したらいゝかと思ふ、內閣側が

果して此方針を採るや、否やは固より知らない、反對派に此計畫ありや否やも又固より之を知らないが、どちらも、その計畫を起し、決戰を試みることは遠慮なく出來る、双方の合意で、探し合せてやれば、至極結構だが片方の決意だけでも無論出來る、但、此の如きは從來無つた例かも知れぬ、して見れば之を今回に始せる譯と爲るのだから、その機會は十分に注意して決定すべきであらう、

英國の憲政は言ふ迄も無く慣例の積み重ねてあるが、內閣改造の場合には之を新組織の場合と同樣、その抱持する政見政策の說明を先づ第一番に議會に向つて爲すべきことゝしてある、而して此くするは陰謀の由つて生ずる隙を防ぐために必要だと稱して居る、尤も此の如きは近來の慣例で、決して古くから端然行はれ來つたのでは無い、此くした時もあり、此くしなかつた時もあつたが近年に於ては、それを當然の約束とする慣例に爲つて居る、これは日本でも行ひ得ること、行ふて害なき事柄である、否、否、日本では毎期の議會に、お定まりの施政方針演說がある、これは寧ろ多きに過ぎる位、施政の方針は、一內閣を通じての方針である、年々改めて說明するの必要は無い、たゞ大隈內閣今回の如く、或は總辭職を經、或は改造を經ざる彼の新議會に際しては、內閣たるもの、その方針を演說し、その事情を辯明することは必要であらう、此點から考へて冬の議會の首相の施政方針演說は、新內閣組織の場合と同樣、注意せらるべき特別の關係と理由がある、隨つて反對黨から若し內閣不信任の戰を起さんためには、その場合が好き機會と爲り好き舞臺と爲り、而して最も好き論爭の題目であらうと思ふ、

今回の留任改造を、所謂立憲政治の目的精神に照らし適當とするや否やの論は僕は不可なしと認めて居る、僕は、第一にその總辭職といふことに疑ひがある、形式に於て總辭職には相違なかつたらうが、大浦子先づ辭して、大隈伯監督不行屆の責を負ひたる辭表につれ、他の閣員も一齊に辭した、他の閣員の一齊に辭したのは、大浦子の進退に連帶したので無くて、大隈伯の辭退に殉じたのである、故に、他の閣員は、大浦子の事件に連帶して辭すべき責任を感じて居たもので無い、形式は總辭職であつたにしても、その意義は別に考へてやらねばならぬ、固より世間の批評は世間の批評で、その解釋に、自由に一任するが、內閣員の辭表を呈した行がゝりと心事は、明かに諒して置かねばならぬ、第二に內閣員の懷抱した、而してその手續に現した思慮は別として、此の如きは、世間の一概に言ふ如く、閣員全部の連帶責任を負ふべき筋合のものであらうかといふ點に僕は疑ひがある、手短に僕の感想を言ふと僕は辭職すべき筋合の事では無つたと信じて居る、內閣の連帶責任は、內閣の協定した政策に伴ふべきもので、內閣の一員がその主務を獨斷專行した場合には、その連帶の責任を持ち來すもので無い、同樣に、內閣の一員が、その主管にあらざる事柄に對し、好んで恣まゝに手を出した場合の責任は、尙更その一人に係るべきもので、全帶に波及すべきもので無い、固より他の閣員が自から進んでその責任を負ふのは、咎むべき限りでは無いが、道理上、性質上、必らず此くあるべしと考ふべきでは無い、僕は

大隈伯の場合は若し外國なら辭職を捧呈せず、直に改造を企てたであらうと判斷する、これが日本だから、日本に憲政上の慣例思想が未だ成熟せず、且、特種の國柄として皇室に對する内閣の趣を異にする所から殊に慎慮して、彼の如き態度に出でられた次第であつたらうかと觀測して居る。但、之に就て大隈伯に問ふて見たことは未だ一回も無い、外國ならば、彼の場合辭表を捧呈するに至らなかつたらうと僕の判斷して居る譯は、昨年三月、愛蘭自治案の紛糾の結果、陸軍大臣シーレイが、軍隊の一部に出動を命じ、それで陸軍將校の辭職を惹き起し、軍紀の解體と爲り内閣の危機迫れりとまで絶叫され、議會の熱烈なる爭ひ此一事に集注した際に、首相アスキスはそは陸軍大臣一人の仕業なり、内閣の關知した所に非ずとて辯解頗る力め、遂に陸相を罷め、自ら陸相を兼攝して局面を展開し物情を鎭靜し、而して依然自由黨内閣を維持して、その政策の遂行に力を致した、彼の近時の實例が最も適切であると思ふて居る、要するに連帶責任の場合あり、單獨責任の場合あり、連帶責任は最も貴ふべき思想、要求、先例でもあるが、去り乍ら何もかもそこに惹き着くべきでは無い、一時的利害得喪の念を外にし、若くば感情的黨派的觀念を外にし、如何なるを單獨の責任とし、如何なるを連帶の責任とすべきかは篤と注意すべきであると思ふ、憲政幼稚の今日この注意を格別に大切なりと思ふ、僕は大隈伯の先の辭表には疑ひがある、後の留任には疑ひは無い、而してその辭任を留任の際に伯の遭遇された境遇心事には深く同情を表し、若干の理由をも認めて居る。

▽最早論議の要なし

男爵　目賀田種太郎

今回の政局に對しては、先づ其内由より言へば、第一に大浦前内務大臣の行爲是なり。其刑事々件に關係ありとの世評ありて、該事件の性質たる總選擧の關係なることは、公論已に定まるところなり。總選擧に對し大浦子の關係が大浦子のみならず、内閣全體の責任に及ぶや否やは、其選擧に關係事實全體の性質如何を定むるにあり。大浦子の責任問題は刑事關係の有無のみにあらず、又内閣の問題は即ち此爲めにあらず、抑々過ぐる選擧に對し閣臣の行動は、外形内容より觀れば陸海軍大臣を除くの外皆連帶して關係したる責任ありと思考す。即ち第一議員の選擧に關し連名の書面を送り、若しくは第二に軍國の急に拘らず、各自公用の傍ら若しくは私費を以て各地に遊説せることは、總理大臣大隈伯が議會に於て答辯せしところなり。予は玆に大に疑惑を存するが、閣臣が私費を以て遊説するは私事旅行なり、政府官吏か私事の爲め旅行するには理由あり故に如何なる理由の下になるやを質問せりと雖之に對して答を與えざれば又其理由を審にするを得ざるなり。言ふまでもなく輔弼一人の人として帝都を離るるには、決して私用を以て離るゝ能はず、所聞く現内閣は米國流を模倣して遊説を試むと言へり。抑々斯の如きは前代未曾有にして何故に共和國の風習を採るや明かならず又米國共和國に於ても公私の

別は瞭然たり。又は第三に涜職の前科ありし人を推薦するに是れ亦違名の依頼狀を發し、其不都合の如きは大隈伯自ら貴族院に於て陳謝の意を表せり。此等より言へば、選擧事務なるものは内閣全部の行動にして而も階級的、團體的の行爲なり大浦子一人に其責任を荷すべきものにあらず。宜なる哉。事實は知らず留職に於て大隈伯が公言するところによれば、大浦子は大に選擧に盡くしたりとして、又を辯護せり、問はさるに語るに落つる凡人の行爲たり。然く辯護する程ならば、何故に大浦子は公生涯を去つて古めかしき民法規定の世外者となりしや。辯護せらるべき程ならば何故に退身せしや。予は大浦子の進退が正當なりとすれば、他の關係者も亦之に倣ふべきものなりと考ふるなり。即ち當然なる責任を負はざるべからず。殊に況んや政務機關と私黨機關と混淆するに於てをや。

去冬の通常議會に於て増師問題は懸案既定にして、容易に通過す可き事件たり。然かるに首相を始め此重大事件の說明すら爲す能はず何を苦んでか政府自ら排戰的態度を取り和衷共同せずして、妄りに總選擧を行ひ而かも軍國非常の場合に區々たる地方的奔走に從事し、大臣の威嚴を保たず實に千古無比の行動を敢てし、公權の平穩なる行使を妨害し又之に干涉したりしや。抑大臣は國家大政を奉行するの重責に在りて輔弼の大事は憲法に明定せらる、只夫れ憲法の責任に止まらず、實に最大至甚なる道義的責任にして、奨順贊襄夙夕誤り莫きを期す、帝國臣子としての本分實に爰に有し、之を行ふに明かに之を行ふて始めて具瞻の重寄に任ず、議會も亦其進退を問議せず、而かも之を爲すを許さす、國體の淵源究に爰に存す。然かるに現内閣は既に具瞻の失墜あり、責を引くは臣子の分なり、憲法の規定なり、既に道義を缺く。何んぞ道義を說きて留任を許さんや。此故を以て

聖旨の有無に就いて之を言ふは畏し。予は之を憚る。只此場に於て大隈伯が自己の適當なる誠意ある方法としては辭表を公にするにあり。これは定めて適當なる手續の存することとなるべし。之を履んで自己の出處進退を明にするは、即ち輔弼する人の適當なる憲法上の處置なりと考ふ。之を公表せらるれば昨の留任の正當なる理由判明し、萬民擧つて其忠誠に服し、初めて伯の所謂、和衷協同擧國一致の實を擧ぐるに至るべし。從來に於て閣臣が進退を明かならしめ、辭表を公にしたるの例は少からず、其出來ざる理由はなかるべし。是れは宮中の事にあらず、斷じて政治上の事なり。憲法上の事なり。毫も憚るところなかるべし。

此事なくして身躬ら殆ど大隈伯に反對する人の唱ふるところの如きものを取つて、現在並に將來を數へらるゝは、何人も怪訝に堪へざるところなるべし。是れは何ぞや。今日は軍國の最中、内外の形勢容易ならずとするが如きは、世間が大隈伯に反對して昨年今頃唱へたるところなり。日露戰後の財政の不整理を訂すといふが如きは、現内閣にして之を言ふ義理はなかるべし。現内閣は更に之を紛亂せしむるものなり。輔弼柱石の人にして縱に地方に遊說し、よくも官規の振肅を唱へらるゝもの哉。傳染病研究所事務の如きは現に國民醫療の問題にして重大なる人道問題なり。水產所は元來製造事務所なり、學校にあらず。日本の如き水產國に

於ては其移管の如きは行政根本の顛倒なり。大隈伯の言ふことは、他人の言ふべきことなり。自己の言ふ可き地位を有せざるなり。世人は恐らく予と同じく解する能はざるべし。

次に大隈伯は元老共者に對し大なる誤解を有せらる。從つて自己の言動をせらるゝが如きことあるが、是は今日の國情に於て大に戒愼せらるべきことなりと思考す。大正三年六月二十四日に於て、大隈伯は斯の如きことを申されたり。『西園寺侯の内閣の時、勅を報じて元老といふものが澤山出來た。これは功臣御優待の爲めで、御尤なことゝ存じます。それが何等政治上に關係すべきものでない。御承知の通り憲法上輔弼の臣、國務大臣以外に何等政治上に權力のあるものはない。』と言はれて居る。之は如何なる意味にや。全體元老共者に就いては、何程大隈伯に聞いても到底要領を得ず。故に其意味は解し能はず。只此事は官報に出でゝ、國民一般に記憶して居ることなり。御踐祚の時先朝の功臣數人を召し、『卿多年先帝に奉事し親しく聖旨を受く朕今先帝の遺業を繼ぎ卿の匡補に須つもの多し朕が意を體し輔くる所あれ』との御趣旨なる詔勅を拜せしめられたり。

御踐祚の場合に於ける御處置として之は適當なることなり。主權の統治の適當なる行爲なり。至尊なる統治をなすに當り先朝の遺臣に優詔を賜ふは適當なることなり。此下に於て内閣に座する者は均しく之を承じて國政を執るは當然のことなり。大隈伯にして之を解せず、若しくは此下に國政を執る能はざれば、其時より就職せざるべきなり。臣子の分として批評を加ふべきにあらず。不足を言ふべきにあらず。其他伯爵の憲法上に對する粗笨なる意見に就いては疑惑を抱くべき事少なからずと雖も予は老伯を敬するの餘り敢て言はざるべし。一の内閣にして民心の嚮ふところ如何を察せず只猥りに自己を勝手に辯護しても、民望之に協はざる時は宜しく進退すべきなり。皮相なる言論を以て留職するの非なるは、論議の餘地なし。茲に更に又非常なる憂惑に堪へざる事あり。即ち從來の方針を替へずといふにあり。之は大に現内閣の從來方針が、いかに正當ならざるやは隨分議論の存ずるところなり。殊に財政方針の如き鐵道經營の如き、之を以て捨て置かるべきや非常に疑惑の存ずるところなり。臨時支出といひ責任支出といひ過去に於ける悖戻の處置に加ふるに尙未だ憲政を履踐せずと言はば最早や論議の要はなしと思ふ。況んや利世安民の政治を爲さずと言ふに於てをや。

▽國家風教の賊

古島一雄

憲法政治を完全に確立することは、即ち皇室の尊嚴を維持する所以である。一度憲法政治を立てた以上は、何處までも憲法の條章に隨つて云爲しなければならぬことは今更言ふまでもない。大隈伯が思召によつて留任のことに決したと言ふが其の事實は別問題として、かかる場合に聖旨

に口を藉りて、所謂袞龍の袖に隱れると言ふが如きは苟くも立憲政治家の爲すべきことではない。これが官僚政治家の、過つて爲すところならば兎も角、多年政黨政治の親分として崇められ、何拾年來早稻田の野に在つて立憲政治の爲めに氣を吐くこと虹の如く、日本の伊藤大隈と並び稱せられた憲政の本尊であるだけ、我が國の政黨政治が爲めに賊せらるるところ其の幾何なるやを知らない。啻に政黨政治に害あるのみではない。斯く如き大政治家の言責を重ぜざること斯くの如くなるを見ては我が國將來の政治道德の標準を何處に求めることが出來やうや。實に今回の大隈伯の進退は啻に我が政治界を毒するのみならず我が國家風致に及ぼす所の惡影響は決して少なしとしない。吾人は國家の爲め將た大隈伯の爲めに切に此事有るを惜む者である。

▽大隈伯留任に對する三批難

法學博士　戸水寛人

私は大隈伯が留任して現職をつゞけて居るのは、第一は先づ道義に反して居ると思ふ。第二には聖旨を口に出すのは不忠だと思ふ。第三には擧國一致に害があると思ふ。

第一道義に反すると云ふのは、元來大隈伯が辭表を出したのは大浦子爵の辭職に牽聯して居る。そして大浦子爵の辭職が選擧干渉に牽聯して居ることは殆んど公知の事實である。初め大隈伯が内閣を組織した時は之を後援する議員の數は衆議院に於て少かつた。それでどうしても政友會を切り崩さなくてはならぬ。大浦子は昔から警察及び内務の事を知つて居るが爲めに其衝に當るには最も適當の人物であつた。それで力を極めて選擧に干渉した。其干渉の仕方は。一方から云へば非常に巧妙で一方から云へば非常に猛烈であつた。前に明治廿五年に品川子爵が選擧干渉をやつた。當時私は歐羅巴に居つたが爲めに詳しい事は知らぬか概略は之を聽くとを得た。あの時は主として力―暴力を用ひて干渉した。政府が暴力を以てすれば民間も暴力を以て對抗する。猛烈は猛烈であつたが然し陰險と云ふ事はなかつた。それが爲めには害毒が比較的少ない。今回大浦子のやつたのは露骨なる暴力ではなくして、警察の力―警察の威嚇的な力であつて、之と同時に黄白を撒き散らしたのである。私は今回の警察の力の用ひ方を威嚇的だといつたのは、反對黨の運動員に探偵を尾行せしめる。それで運動屋は多くは働き得ない。運動屋中の最も有力なるものは斯道に於ては隨分前科者も少くない。斯くの如きものは警察を怖るゝこと最も甚しい。斯くの如くして政府反對の議員の爲めに働くものを痲痺せしめた。之をして働くことを得ざらしめたのである。そして自分の味方の議員の運動者は自由に放任してある。甚しきに至つては、味方の運動者が黄白を撒き散らすのに、場合によつては警察に手傳はした事もあると云ふ事である。加之選擧は三月廿五日であつたが、其前の廿三日廿四日に於ては政府黨の候補者は澤山の金を得て居る。あれは證

が出して誰が狙つたか委しい事は知らぬが、大浦子爵が之に關係のあるべき事は論を俟たない。のみならず、あの位の大金を大浦子獨りで纏めたものと見ることが出來ぬから、他の閣員も關係のあることは想像せらるゝのである。而して初め大浦子爵が斯くの如き大干渉を行ふに當つては總理大臣の大隈伯に相談したのは論を俟たぬ。總理大臣が知らぬのに大干渉を行ふ能はざるは火を睹るよりも明かである。加之選擧前に於ては國事多端なるにも拘らず內閣總出で以て諸所に應援演說をして、そして同志會の議員を澤山出すことが出來た次第である。此干渉の弊害は實に甚しいものであつて、人心を大いに腐敗せしめて居る。選擧に關して人心の腐敗した事は今日に初まつた事ではないが、先回の選擧によつて腐敗の度を更に一層高からしめて居るのである。而して其選擧に關聯して所謂一萬圓事件も發生し、又所謂瀆職事件も發生したのである。大浦子爵は選擧に關して大干渉をなしたが自分自らは常に廉潔な人物で、自分自ら一錢も私した事を聞かぬ。然るにも拘らず災難が其身にあらはれて來て居る。之を避けんが爲めに職を辭し、公けの生涯から遠ざかる。剰さへ隱居までもした。斯くの如くして災難を避くるのは果して當を得て居るや否やは疑問である。併しながら大浦子が斯くの如き悲慘な目に逢ふと云ふのは一方から見れば氣の毒な事である。而して大隈伯が右述へた大干渉に自ら關係して居るのみならず、干渉を行ふに當つて執つた種々の手段にまでにも多少關係のある事は推測に難くないと思ふ。然るに選擧に關係した一萬圓事件、瀆職事件に何等責任を負はぬと云ふ事は道義の上から云つて誅すべきである。大浦子爵が悲慘な目に逢へるに拘らず大隈伯が恬然として其職に留まつて居ると云ふ事は世の中の風教に害があると思ふ。總理大臣の要職に居る所の人物は自分の行を以て世の中の模範となすの覺悟がなければならぬと思ふ。然るに大浦子のみを犧牲に供して已れ等は其まゝ榮職に留まつて居るのは人の模範となすに足らぬ。

第二に、大隈伯が其職に留まるについて如何なる事を理由となしたのであるか。世上傳ふる所によれば大隈伯が口を聖旨に藉りて居ると云ふ事である。即ち一旦辭表を提出したけれども、尙其職に留まる方がよろしいと云ふ聖旨があつた故に遂に留任に決したのであると、こう云ふ事を云つて居る。自分の關係した所の政治について自分が責任を負ひ、去るべき場合に去るがよし、又去るに及ばずと考へた時には留まるがよい。然るに口を聖旨に藉るのは畏れ多くも　天皇陛下に累を及ぼすの虞がある。且つ私の想像では、大隈伯の所謂聖旨が、果して大隈伯が言ひ觸らす如き優渥なる御諚であつたかどうか疑はしい。何故と云へば　陛下は政治を綜攬せらるゝ當初に於て憲法に遵據せらるべきことを宣まはれたのである。夫れ故に大隈伯が云ふが如く特に留任に就て優渥なる聖旨のあつたものとは思はれない。且つ又聖旨が大隈伯の留任を必要とせらるゝならば加藤、若槻、八代等の各大臣は何故に其職を去らなければならなかつたか。此等の三大臣の職を辭したのに見ても、所謂聖旨には疑なき能はずである。然るに名を聖旨に藉りて其職に留まるは　陛下に對し

て畏れ多い事である。斯くの如くして陛下に累を及ぼすは不忠の至りと思ふ。今後日本に於て大臣の職に居る人々は袞龍の袖に隠れて留任等を決するの態度に出でざらんことを希望するのである。

第三には目下欧羅巴に於て大争乱がある。此時に於ては我々日本人は此千載一遇の好機を利用して東洋に於ける日本の地位を高めるの基礎を作らなければなるまいと思ふ。先回日本が青島を攻撃したる余波として支那人よりは大いにボイコットを喰はされたのである。之は一つは外交の失敗から来て居るし、一つは支那人の不埒から来て居る。外交の失敗は別に論題に掲げて論ずる方がよいと思ふが、日本人は多く外交失敗を尤めて支那人の不埒を尤むること少い。けれども此支那人の不都合なることは支那の国民性に基いて居るのである。日本人は今より臍を堅めて支那人に対して如何なる事をしてよいかをよく考へなくてはならぬ。支那人に対して処置宜しきを得れば東洋大いに安固になり、従つて東洋に於ける日本の地位も益々向上する。若しも其処置宜しきを得ざれば日本の威望或は地を払ふに至るかも知れぬ。欧洲に事無き時に於ても支那人に対しては多少執るべきの道のある事は明かであるも、欧洲有事の時に於ては、日本人は断乎たる処置を以て支那問題を解決しなくてはなるまいと思ふ。之をなすについては場合によつては所謂挙国一致を必要とするのである。夫れ故に今日の政治家たるものは余り下らない政争に従事すると云ふ事はして貰ひたくない。此時に際して大隈伯が選挙に大干渉を行ひ、剰さへ不自然なる方法を以て其職に留まると云ふ事をすれば、**反対党は益々躍起になつて大隈内閣を攻撃するやうになる。斯くの如き**事は大いに挙国一致に害があるのである。夫れ故に私は大隈伯が速かに其職を去つて適当な人物に其職を引渡すやうにしなければなるまいと思ふ。

之を要するに大隈伯が辞表を捧呈しながら之を撤回して留任に決したる事は、一には道義に反し、第二には不忠の所為であり、第三には挙国一致に害があると思ふ。夫れ故に大隈内閣と云ふものは此失態及び他算の難関等よりして恐らく此冬の議会を通過することは出来まいと思つて居る。従つて倒れるの止むを得ない事になるだらうと思ふ。此事柄は大隈伯と雖も亦知つてゐなければなるまいと思ふ。

斯くの如く論じ来つたならば大隈伯が何の為めに其職に留まつたか殆んど無意味であると思ふ。世上或は御大礼に関係するが為めに留まつたと云ふ人がある。果して然りとすれば其行動の陋劣なる真に唾棄すべきである。

本社員と稱する詐僞漢につき再告

鹽崎某又は淸水某と名乘る者、數月前より京阪地方を徘徊して、本社特派員又は本誌記者と稱し、巧みに本誌廣告料金並びに本誌購讀料金を詐取せし事實に就ては、不取敢七月十五日の臨時號誌上に急告して、讀者諸彥の御注意を乞ひ置き候ひしが、玆に再び本社に於ては編輯以外の事務に關し、特派員又は勸誘員と稱する種類の者を派遣する事決して無之きを明言致置候へば何卒左樣御承知下され度く、尙本社に於ても讀者諸君の御迷惑を思ひ、相當の手續致し置き候へども、今後尙此種の惡漢と認むべき者有之候節は乍御手數其筋へ御突き出し下され度御願申上候右重ねて公告候也

九月一日

中央公論社販賣部

作者獨得の女性描寫・性慾描寫の極致也

渾熟亦渾熟、正に天衣無縫の至境に達せる秋聲氏の眞藝術

小說 あらくれ

徳田秋聲氏作

▼總洋布 ▼定價八拾錢

▼最美本 ▼送料八錢

『あらくれ』一篇、これ秋聲氏が『爛』以後始めての自信ある作物、曩に新聞紙上に掲げらるゝや、文壇具眼の士をして聲を潜めて唯驚嘆の眼をみはらしめたる神品である。得意の女性描寫、得意の性慾描寫を以て貫かれたる百幾十章、**生理的缺陷から起る夫妻の關係**を中心として、心肉映盛なる一婦人の、求めて得ず欲して遂げざる性慾生活の慘憺を披瀝せるもの、これ實に秋聲氏でなければ描き得ざる人生最奥の秘密境である。讀者は餘りに露はにされ過ぎたる此の**性的生活の暗面**に慄然として心をのゝくであらう。將た人間性の底の底なる幽闇の境に斯く迄に明かなる燈火を點じたる作者の藝術に驚嘆せずには居られなからう。創作界の寂寥を打破する近時稀有の傑作として一讀を求める。

縮刷 傑作 文庫 第三編

田山花袋氏作

小說 妻

總洋布最上製

定價五拾五錢

(送料八錢)

『妻』は『緣』『生』と共に花袋氏一代の雄篇三部作を成すものたり。一文學者の壯年時代を描き、主として兩性關係の祕義をあばく。一面より見れば、作者その人の興味深き自叙傳なる可く、作者が人生觀と社會觀とのすべてを實生活そのものゝ描寫の中に完全に具象す。明治文學中屈指の大作たるは、萬人許す所也。

▼本縮刷は原本の約三分の一の最廉價也!

(中付二の一)

東京市牛込區
矢來町中の丸

新潮社

電話番町二二三三番
振替東京一七四二二番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

虛舟簡野道明先生講述（第五版）

和漢名詩類選評釋

和漢古今の著名なる漢詩壹千餘首を精選して二十二門に分類し、毎首正確なる讀方と詳細なる解釋とを施して、丁寧に坊本の誤謬を指摘し、更に著者獨特の博大精深なる評釋を加へたれば、何人も其詩の精義を了解するを得て、藻思を養ひ修養の資なるは勿論、士氣を振作するの功鮮少ならざるべし。

紙數壹千六十餘頁
洋布製天金全一冊
定價 壹圓七拾五錢
小包料八錢

文學士 内海弘藏先生著（新刊）

▲平家物語評釋

洋布製全一冊 定價金貳圓 送料拾貳錢

文學士 内海弘藏先生著（十四版）

▲徒然草評釋

洋布製全一冊 定價七拾錢 送料八錢

金子元臣先生著

▲古今和歌集評釋

定價金貳圓八拾錢 送料拾六錢 洋布製全一冊

文學士 鹽井正男先生著

▲新古今集評解

定價金參圓八拾錢 送料拾六錢 洋布製全一冊

島地大等先生虔修（第四版）

漢和對照 妙法蓮華經

▲クロス製天金 定價壹圓五拾錢 總皮製三方金 壹圓九拾錢

本文を上下の二欄に分ち、上欄に法華經全部の漢譯を掲げて音讀の振假名を施し下欄は之が和譯文を載せ、附録として（法華大意）（法華略解）（法華字解）を添ふ

（中付二の三）

東京神田錦町一丁目十番地 **明治書院** 電話本局二四三八番 振替東京四九九一番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



新聞講話

石川半山

緒言

新聞が盛になつて來て、新聞記者を養成する學校が出來た、米國には目下新聞學校が二十六校有ると云ふことだ、英國にも在る、日本にも早稲田大學で田中穂積君が主任となつて新聞科を設けて居た時代に、我輩も一度講演に依頼されたことが有る、明治大學にも新聞科は有ると云ふことだ、慶應大學も一昨年から新聞科を設け、本年第二期の卒業生を出した、我輩も昨年四五回講演を試みた、それから松本君平君が曾て政治學校に於て、新聞に關する講演をなし、之を新聞學と稱して一冊の書物に作て出版したことが有る。

英國には「新聞記者は實地に練習すべき者で、新聞學校などは何の役にも立つまい」と云ふ論者が有る、デーリイ、テレグラフの持主の子息で、ハイリイ、ローソンなどは此の論者の一人だが、然かし新聞記者を養成するには、特殊の研究が必要なる事は、多くの人の認むる所で有る、ウエストミニスタル、ガゼット記者スペンドル氏の如きは、「大學を卒業したばかりの青年が、直ちに來て記者たらんことを求めるけれど、書

かして見れば物になつて居る者は出來ない、矢張り新聞記者になるには記者となるだけの素養と練習とが入る者で、辯護士や醫者や敎師や建築家が、それ〴〵其の職業に要する學科を硏究する必要の有ると同じ事だ」と言つた、英國に於て半ペニィ紙の創立者たるギルレアン、レイド氏も亦「多くの記者は必要なる敎育と組織的練習の缺乏の爲めに失敗したり」と言つた、

然らば新聞記者となるには、如何なる學科が必要で有るか、と云へば、之に關しても種々の說は有るが、米國ミゾリイ大學新聞科の學長ウォルター、ウヰリヤム氏は、其大學に於て敎へたる所の學科に付て語て曰く、歷史、英文、社會學、經濟學、政治學、それから第一新聞行政、第二雜報練習、第三論文練習、第四校正、第五雜誌の經營、第六新聞に關する法律、第七新聞の挿畫を敎へ、而して一小夕刊新聞は全部學生の手に依て發刊させて居ると、兎に角新聞と云ふ一勢力が、社會に發生し新聞記者と云ふ一階級が現はれたる以上は、之に從事する記者の養成が必要な事は、歐米に於て廣く認められて居る事で、多少の反對論は有ても、それは大勢に於ては顧みられないことだ。

凡そ世の中の事物には、何でも反對と贊成は有る者で、記者養成に反對が有るばかりではない、新聞其者の發刊にさへも、隨分色々の反對は有る、一方に言論の自由を唱へる聲が有ると同時に、他方に新聞を厄介な者と考へて居る者も決して少數ではない、ビスマルクは有名なる新聞記者排斥家で有つたが、其の餘風は今も尙獨逸に殘つて居て、獨逸では一般に新聞記者を尊重しない、昨年戰爭前に獨逸の新聞記者が聯合して「獨逸新聞全國同盟」と云ふ團體を作り、會員の個人的向上を圖ると同時に、各自の經濟的利益を安固にすることを企てたと云ふ報が有つたが、アレは獨逸の記者が一般社會の排記者熱に激昂したる結果で有る、ボルグが新聞記者を評して、「貴族、僧侶、平民の三大種族の勢力を合するよりも、更に偉大なる勢力を有する第四の種族」と云つた英國の記者でも、決して今の上流社會から好まれて居ない樣で有る、昨年の五月新聞記

者救濟團の年次晩餐會に於て、英國の首相アスクヰスは最も皮肉なる演說をして一般の大喝采を博した。

自分は玆に記者諸君の前に、三個の問題を提出して見たいと思ふ。

第一　今日民主的の國に於て、議會と新聞紙と孰れを廢止する方、容易なりや

第二　半月か一個月の間、世界中の新聞紙が全部發行を禁止された時、世界は困まるべきや又は喜ぶ可きや

第三　大體に於て世界の新聞紙なる者は、果して善事をなしつゝ有りや、又は惡事をなしつゝ有りや

此の三個の問題を國民のレフエレンダム(一般投票)に依て定める事としたら、自分は其の結果が決して記者諸君の爲めに良からぬ事になるとは思はないが、然かし此の投票は必ず無記名投票ならんことを望まざるを得ない。

アスクヰス宰相の演說を見ると、明かに彼れが新聞紙に對して好感を有せざることを知ることが出來る、早稻田大學の浮田和民君の如きは、新聞紙を嫌忌するを以て有名な人だ、加藤弘之先生なども曾て東京每日新聞の園遊會に於て「自分は新聞紙は嫌いだが、島田三郎君の新聞だけは良いと思ふ」と演說された、特に朝鮮の寺內總督と來ては、其の管內に御用新聞の外は、發行を禁止することにして居る、此の如く排新聞熱が盛大だけれども、ドウしても新聞紙は今では無くてならぬ者となつた、既に之れが必要なる機關としたなら、之に從事する所の記者の養成も必要なる事業に相違ない。

然るに日本には未だ此の新聞に關する科學的硏究が足らない樣だ、外國にも良い書物は乏しいが、然かし英國にも米國にも、新聞を科學的に硏究した書物は、隨分少からず發刊されて居る、我輩が目を透したばかりでも、十數種は有る、然るに外國の書物は、唯我輩共の參考になるばかりで、活字も違へば國情も違ふので、彼の著述に現はれた通りに出來ない場合が多い、

ソコで日本の新聞記者に對する研究は、是非共我輩共日本の新聞記者がやらなくてはならぬ。

今茲に發表する所の講話は、曾て慶應大學新聞科に於て、講話したる所を增補改訂した者で、至て粗末な者で有るが、之れでも若し一部の記者志願の青年の參考になつたなら幸ひで有る。

抑も新聞記者の種類は、之を細別すれば頗る多くなるが、第一、編輯記者、第二論説記者、第三外勤記者、第四飜譯記者、第五特派通信員の五種は、其の重もなる者だ、之れに校正員を加へれば、編輯局の組織は先づ出來ると云ふ者だ。

我輩は付て信州松本に於て信濃日報主幹となり、東京に於ては東京毎日新聞の主幹となり、新聞紙を經營する事に付て、多少の經驗を持て居り、八九年前早稲田大學の新聞科に於て講演した時には、其の事業經營の事にも及んだが、慶應大學に於ては專ら記者の事に付て講じたので、此所には事業上の事は語らない積りだ。

第一、編輯記著

編輯記者とは多くの材料を取捨按排して、新聞紙を作るの記者で有る、如何に多くの良い材料が集まつても、若し編輯の任に當る記者にして、其の人を得なかつたならば、其の新聞は決して良い新聞となることは出來ない、新聞の良いと惡るいとの責任の大半は、編輯記者の双肩に在ることだ。

各種の材料其の机に集まる

編輯記者の机上には、各種の材料が集まつて來る、

第一　論説記者の起草したる論説を初め、社中の各部から送り來る諸種の材料

第二　特約通信社から來る通信

第三　一般の投書

此の澤山の材料に目を透して、最も迅速に其の良否を鑑別しなくてはならぬ、限り有る紙面へ澤山の材料が來るのだから、兎ても載せ切れない、ソコで良い物を取て惡るい物を捨てる鑑別力が大切だ、誤て惡るい材

料を掲載したり、良い物を落すことが有つたら、忽ち新聞の聲價が落ちる。

材料の修正

大きな新聞社には政治部、經濟部、社會部、外報部、通信部等の各部が有て、各部の責任者がソレ〳〵に其部に屬する記者の提供する材料を取捨選擇し且つ之を修正して出すから、編輯者は大にラクであるが、それでも矢張り其の材料を一讀して不適當の所は修正を加へなくてはならぬ、小さい社になると編輯記者が多くの記者の提供する材料に修正を加へなくてはならぬので、頗る忙がしい、而して此の記事の修正が、如何にも骨の折れる者で、文章の上手な人が一二句を挿入すると全文が生きて來る者だ、曾て森田思軒が報知新聞の編輯をして居た當時、思軒が筆を執て一二句を挿入すると、文が生きたと云ふことだ、下手な編輯記者は生きて居る文の修正をして、之を殺して仕舞ふから、編輯記者の此の修正の任は、頗る重い者で有る。

見出しの附け方

記事が出來ると、見出しの附け方に注意しなくてはならぬ、此の見出しで讀者を引き附けるのだから、重要な記事には、餘程考へて見出しを附けなくてはならぬ、例せば「大隈首相の演說」と云ふ見出しを附けるなら、平凡で有るが、若しも彼れの演說が非常に力の有つた場合には「首相の大演說」と書くも良からふ、或る新聞には「舌端火を噴く」など〻云ふセンセイショナルな見出しも有る、「大熱辯！大雄辯！」など〻マーク、オフ、エクラメーシヨシを打ち込んだのも有る、尤も何でもない平凡な人物の平凡な演說へ、ソンなセンセイシヨナルな見出しを附けると、讀者が之を見て「何だ、馬鹿にして居る」と厭ふ氣を起すから、總べて其の場合に適當した見出しを附けなくてはならぬ、ソコが六ケしい所だ、德富蘇峯、竹越三叉諸君の文は、流石に一流の記者だけ有て、其の見出しの附け方の巧妙なるには感服せざるを得ない。

活字の大小と行數

活字は初號から七號迄有る、其の中には各社獨創の

者も有て、萬朝式とか都式とか、其の社に於てのみ用ふるのも有る、其の大小幾種の活字を其の材料に從て、適當な活字を指定するのが編輯記者の任務だ、第一に見出しの活字を初號にすべきや二號にすべきや、又は普通の五號にすべきや、第二に其の材料全體の活字を五號にすべきや六號にすべきやを決定しなくてはならぬ、六號活字で組んで居る中に、最も緊要なる部分だけを五號にしたり、五號活字で組んで居る中の最も緊要なる部分だけを二號にしたり、尤も重大なる事件は全部二號にしたり、甚しいのは全部初號で組むことも有る、何れも事件の關係如何を考量して決定するのだが、それが編輯記者の氣轉で、愚かな人に編輯させると、詰らない記事に大きな活字を用ひ、重要なる記事に小さい活字を用ふる事が有る、なか〳〵局外の人の氣の附かぬ苦心の存する者だ。

それから其記事行數が定まると、一々それを書いて置て或る一定の時間に、大組みに取りかゝる時、其の行數を計算して、記事の排列を作る、各新聞共に出來上がつて居る所を見ると、何でもない樣だが、此の行數の計算と記事の排列には、編輯部者が少なからぬ苦心を費やす者で有る。

大組に對する注意

一ページの大組に對して、編輯記者は記事の排列を良くする爲めに、マルで繪畫を描く樣な心を以て之に臨まなくてはならぬ、我輩が報知や毎日や其他の編輯をした時は、先づ順序を書いてやつて置て、それから親しく工場へ往き、其の排列を見て居た、一ページの全體を通じて、一幅の繪畫を作る積りで、何處に五號、何處に二號、何處に六號を置き、何處に如何なる記事を排列すれば、其の出來た新聞が、讀者に快感を與へるかを專念に注意して、種々の苦心をした者だ。

編輯の上手な記者

各社共に編輯の任に當る記者は、良い人物を選擇して有るが、東京朝日新聞の佐藤眞一君は、永い間編輯上の技倆の優秀なるを以て知られて居た、それから松井柏軒君は頗る巧妙で有る、彼れが中央新聞時代に於

て編輯上の技倆を發揮した事は、我輩の親しく目擊した所で有る、それに野田正太郎と云ふ人が有つた、彼れは時事新報記者として其の名を知られたが、彼れが其の後二六新報の三面を編輯した時には、新聞社會を驚かすべき技倆を發揮した、我輩は今日と雖も、アノ野田の如き編輯の巧妙なる記者を見ない。

賞罰直ちに來る

新聞の編輯記者は其の努力の効果が直ちに現はれる、信賞必罰と云ふても此の位に早く來る者はない、本日努力した所は、明朝の新聞に現はれるのだ、若し少しでも怠慢が有れば、外の新聞に出て居る記事が、自分の新聞に無いので、直ぐに聲價が落ちる、發奮努力して良い新聞を作れば紙數は增加し、少しく怠れば紙面が惡るくなつて、發行部數が減少するから、編輯記者の勤怠は直ちに現はれる、其の點から言ふと最も男らしい仕事で、苟くも我れに手腕ありと云ふ自信の有る人は、須らく進んで之を引受けるべき任務で有る。

第二、論說記者

新聞の論說は時事を評論して、社會を指導する者で有る、新聞紙の品位は勿論全紙面の記事にも依るが、其の論說欄の言論が、最も此の點に於て重きを成す者だ、故に各社共に論說記者には識見の雄大なる人物を選んで之を聘して居る。

各新聞社の組織に依て、各々異なッて居るが、第一に社主が社長兼主筆として自ら論說を擔當して居る者も有り、第二に社主は自ら筆を執らず、主筆を聘して之れに論說のみならず雜報をも管理するの權を與へ、全紙面に對する責任を執らしむる者も有り、第三には論說記者を置き、雜報には關係せず、單に論說だけの纏めをなさしめて居るのも有る、其の組織は各社各々異なつて居るが、要するに論說は各新聞の重要なる部分で有て、之を擔任する記者は、記者としては最高の名譽を有する者で有る。

英國では男兒生れて内閣總理大臣たる能はずんば、

須らくタイヤスの主筆となる可しと云ふ諺が有る位で、論說記者の勢力は、一國の內閣の首相と匹敵す可き者だ、此の論說欄の記事は時事問題に對する其の新聞紙の主義を宣明する者で有るから、其の權威は大なる者だ。

昔は多く論說新聞

何れの國の新聞でも昔は大概論說新聞で有ッた、政府に在て政權を左右した者が、一朝失脚したる場合に、民間に下て批評家として政府の欠點を攻擊する爲めに其の機關として新聞を發刊した者だ、或る民間の不平黨が政府に對する不平を漏らす爲めに新聞を起した者だ。

日本でも明治十七八年頃の五大新聞と云へば、皆代表的の大家を有する大新聞で、即ち左の如き者だ。

時事新報　福澤諭吉　東京日々新聞　福地源一郎
報知新聞　矢野文雄　每日新聞　沼間守一
朝野新聞　末廣重恭

既に論說新聞で有るから、評判の良い論說記者が居れば、其の新聞は盛になり、之を欠けば忽ち衰へる、中江兆民先生の如きも偉大なる記者の一人で、明治十四年頃東洋自由新聞の主筆となり、西園寺侯や松田正久君と共に激烈なる意見を發表した者だ、其の後明治二十二年頃には大坂の東雲新聞主筆と東京の「政論」主筆を兼ねて、論壇の大勢力で有ッた、憲法發布後になッても、東京日々新聞の朝比奈知泉、國民新聞の德富蘇峯、日本の陸實の三君は、三大論說記者で鼎立して居た者だ。

論說の衰へたる理由

論說が昔の如く勢力が無くなッた理由は、時勢が進步した爲めで有る、昔は讀者が新聞の論說に動かされたが、近來の讀者は雜報を讀んで、自分で意見を作るやうになッた、新聞の論說などは顧みない者が多くなッて來た、若し讀むとしても昔の讀者の如く全部之に感服せず、寧ろ批評的になり、新聞に盲從しなくなッた、之れは敎育の進步で有る、學生でも昔の學生は先生を神の如く崇拜し、恩師の一言一行を模範として者

だが、今の學生はトント敎師に感服せず、寧ろ批評的に其の言行に注意する樣になつた、新聞も同じ傾向になり、論說の權威が衰へて來た、而して此の時勢の變化に副ふ爲めに各新聞共に雜報に重きを置く樣になッた。

ニウヨウク、ヘラルド

此の趨勢は米國の新聞歷史に有ッたので、今日世界有數の大新聞たるニウヨルク、ヘラルドの成功の如きも其の一例だ、之れは千八百三十五年、資本金僅かに五百弗を以て創刊された者だが、社主ゼームス、ゴルドン、ベネットは、論說に重きを置かず、專ら雜報に注意し、力を機敏なる報道に入れたので、大成功を得た、アノ時代迄は米國も矢張り論說新聞が多かッたのだ。

論爭は好まれず

昔は新聞紙が互ひに論說で戰ふて、讀者は之を喜び、營業部からも「何か良い論題で爭ふて下さるまいか」と論說記者に依賴した者だが、近頃はそれがトント無くなり、ドコかの記者がソンな事でも始めると、忽ち營業部から異議が持ち上る、「自分の新聞へ他の新聞の事を攻擊する論說を揭げるのは、他の新聞の廣告をする樣な者で、大に損だから止めて呉れ」と云ふのだ、それ故に時々發行部數の少ない新聞から大新聞の論說に對して、喧嘩を吹きかけて見ても、大新聞の論說記者は營業部からの異議を恐れて取り合はない、所謂萬事默殺主義で通して仕舞ふから、近頃は論說上の爭ひは殆んと無くなッた、之れは新聞が營業本位になつて來たのだ。

又日本に於て新聞紙の論說が衰へたる一原因は、時勢が議論に耳を傾けなくなッた爲めも有る、帝國議會なども議論でなくて、萬事妥協で往く、理窟はドウでも良い、黃金か腕力で決する、政府を倒すには理窟よりも暴動が一番近道で有る、政府が政黨を操縱するには、理窟よりも買收が一番輕便で有る、近來は又司法權で戰はんと欲する者が現はれて來た、ソンな風になると、最早や立憲的の言論戰は、無用にならざるを得

ない、是れも亦論說の衰へたる理由の一かも知れない。

論說の勢力

然かしながら新聞紙の論說は、依然として勢力を持て居る、之を國内にしては内閣を打ち倒すの力が有る、有力なる新聞紙が筆を揃へて、内閣を攻擊すればドンな内閣でも、大概は倒れざるを得ない、それから外國に對しては日本の勢力が、海外に進展するに比例して、非常なる影響を來して居る、往年福澤、福地、末廣、中江等諸先輩の論文は、海内を風靡したけれど、外國に對しては餘まり勢力は無かつた、之れは日本が世界に於ける地位が今日の如く高くなかつた爲めで、其の點から言ふと今日我等後進の草する論文でも、三十年前の大家の文よりも海外に對しては勢力が有るワケだ、今日我等の起草する論文は、外字新聞に飜譯せられ、東京に在る各國大公使館に飜譯せられ、日本の輿論と云ふ冠を被ぶつて、世界の四隅に反響して居るのだ、其の勢力の大なることは國民一般の想像の及ばない程で有る。

論說記者の心得

論說記者として世に立つ者の心得とも謂ふべき事で我輩の思ひ附いた所を列擧して見るなら、

第一　意氣　筆を執て紙に臨む時は、唯我獨尊でなくてはならぬ、孔子が春秋を著はした時の如き意氣を以て、天下の賞罰をする積りで書かなくてはならぬ、蘇東坡が韓退之の碑に書いた文中、匹夫而爲百世師、一言而爲天下法と云ふ句が有るが、論說記者の期する所は此の點に無くてはならぬ、少くも一代を指導する超凡の意氣が無くては、其の任務を全うすることは出來ない。

第二　文體　各人特得の文體が有るから、それを改めることは出來ないかも知れぬが、新聞には又各々特種の文體が有る、自分が新聞を左右する場合には、新聞の文體を改めても良いが、他人の新聞社へ入社した場合には、矢張り其の社の文體に倣れて書かねばならぬ、竹越三叉君の如きも一代の文豪で、自分で「世界之日本」を發行した時などは其の特得の文體で書いたが、

他人の社へ入ては必ずしも其の文體を固執しなかつた、彼れは「世界之日本」を出す前に時事新報の論說を書いたことが有るが、其の當時には巧みに「ならんかなれども」調で、時事一流の論說を書いて居た。

第三　文の長短　論說も新聞の一部分で有るから、文の長短に注意しなくてはならぬ、編輯記者から其の長短に付て注文が有る時は、其の注文に從て書かなくてはならぬ、甚しきは其の行數を限ることが有る、今日は八十五行に願ひたいとか、カッキリ一段に願ひたいなどと云ふ注文の有ることが有る、之に應じて自在に書かなくてはならぬ、近頃は餘まり長い論文が流行しなくなつた、昔は隨分長く連續して書いた者も有つた、毎日新聞へ島田三郎君が「對外思想の變化」と題して連載した者の如きは、一個月以上も續き、後に警醒社から「日本と露西亞」と題する一書となつて出版された、德富蘇峯君の國民新聞に於ける論文で、隨分長く連載した者も有つた、近頃も同君の世界の大勢に關する長い論文が出でたが、アレは例外で、近來の各新聞は何れも短かい其日限りの論文を尊重して居る樣だ。

第四　速筆を尊む　新聞記者の筆は一般に巧遲ならんよりは拙速を尊むのだ、時間で仕事をするのだから、如何に名文でも之を作るに二日も三日もかゝる樣では間に合はない、編輯局へ顏を出すと「待て居た、直ぐに論說を賴む、今から四十五分間に七十行で、此の問題を論じて呉れ玉へ」などと云ふ注文に會することが有る、それが注文通りに出來て、新聞に載せられて立派に間に合ふ樣でなくては論說記者にはなれない、文章の早やかつたのは福地櫻痴先生で有つた、一行でも二行でも書けば直ぐに印刷に附して、それが立派な文章になつて居た、朝比奈知泉君なども早やかつたさうだ、それから松井柏軒君が速筆だ、「君、論說が無くて困まつて居た、直ぐに書いて呉れ」と突然に言はれて直ぐに筆を下して書き出し、速かに之を間に合はせる技倆に至ては、我輩の友人中柏軒に及ぶ者はない。

第五　內容の豐富　內閣を攻撃するとか、政黨と戰

ふとか云ふ場合は、專ら其の論理に重きを置かれるが、通常の問題を論ずる場合には、其內容が豐富でなくてはならぬ、之を讀む所の人が、之に依て何等かの智識を得る者でなくてはならぬ、演說でも昔は聲が良くて面白い事でも言ふと受けた者だが、時勢が進步して來て近頃では其の內容の貧弱な者は、聽衆が喜ばなくなつた、新聞の論說に於ても、此の時勢の要求は同じことで、讀む人にレツソンを與へる者でなくては受けない、從て論說記者は常に時事の問題に付て、詳密なる調査をなし、常に一代を指導するに足るだけの力ある論文を草し、其の文の內容は必ず豐富なる者でなくてはならぬ。

第六　文章　新聞の文章はドレでも生きて居なくてはならぬが、特に論文は生きた文章が必要だ、米も普通の人が見ると、同じ米だが、黒人が見ると同じ一粒の米にも生きた米と死んだ米が有る如く、文章にも活文と死文が有る、死んだ文章では人が動かされない、苟くも文豪と言はれるほどの人の文は、其の文體の如何に拘らず、文が活きて居るから、之を讀む人が感動するのだ、德富、黒岩、竹越諸文豪の文は、何でもない短文でも、文が活きて居る。

英國の大新聞デーリイ、メールの創立者なるノースクリフ卿が、曾て人に語て「是れ迄多くの新聞記者を育てゝ見たが、最初は有望なる靑年記者も一新聞の主筆になる迄の人物は、至て少かつた」と言つた、我輩が二十餘年の記者生活の間にも、良い論說記者には餘まり多く逢はなかつた、今日でも餘まり多く之を見ない。

第三、外勤記者

外勤記者とは英語でレポータルと云ふ、探訪記者とも云へば、又外交記者とも稱して居る。

讀者は新聞を見て「如何にしてアンな事が分ツたか」と驚く場合が多い、時として隣家の人さへ未だ知らない事件が、詳細に新聞に掲載されて居ることが有る、常人から考へると新聞記者の探訪の技倆は、殆ん

どミステリイの如くに思はれるで有らふが、實はミステリイでも何でもない、エフヰセント、オーガニゼイションのグツド、エクザンプルだ、其の材料の蒐集方法に至ては、チヤント組織の立つた者だ。

材料蒐集の方法

外勤記者が材料を蒐集する方法は、凡そ左の五種で有る様に思ふ。

第一　新聞社から割り當てられたる部分を受持ち、毎日其の場所へ往て材料を得て來ること、例せば陸軍省や海軍省や外務省へ往て、各々其の發表される公報を寫して來て報告するの類だ。

第二　豫定されたる出來事に付て、出かけて材料を蒐集する事、例せば大隈伯が青年會館で演説をすると云へば、其の日時に青年會館へ往て、其の演説會の光景を書くの類だ。

第三　突發の事件に付て、臨時に材料を蒐集する事、例せば明治天皇の御大葬は、豫定されたる出來事で、其の日に各新聞社から其の記事を作る爲めに、それぞれ分擔をして多くの記者を派遣したが、乃木大將の自殺と云ふことは、突發の事實だから、各社共に大狼狽で徹夜奔走した者だ。

第四　英語のインタルヴユー、即ち名士を訪問して其の意見を聞くことだ。

第五　以上の四種は多くは編輯記者又は外勤部の部長の命に依て出かけるのだが、第五は偶然材料に遭逢することが有る、犬も歩るけば棒に當ると云ふことが有る、常人が見ては何でもない事でも、記者眼を以て見ると材料になる者が有る、坑夫が鑛石を取て其の良否を見分くる如く、偶然に出逢ふ材料を直ちに取て、之を新聞に提供する場合が多い。

外勤記者の心得

試みに外勤記者の心得とも云ふべき者を擧げて見ると、隨分其の數が多きに上る。

第一　根氣の強い事、西洋の或る記者は新聞記者の資格を數へて曰く、第一健康、(good health) 第二教育 (good education) 第三忍耐 (Considerable Patience and

determination）と、如何にも健康と教育と忍耐とは、記者に必要な資格で、何よりも根氣が强く、忍耐力に富み、勇猛不屈でなくては外勤記者にはなれない、德富蘇峯君は新聞記者の泰斗で有るが、毎朝出社前に乾度大官を歴訪したと云ふことだ、池邊三山君なども能く訪問を怠らなかつた人だ、我輩などは此の訪問の一點になると、全く記者の資格はない、全體訪問と云ふ事は、隨分不愉快なことだ、第一に折角訪問して不在に會することが有る、第二に實際は在宅だが新聞記者に面會することを好まないで、故意に不在と稱するのが有る、第三に在宅では有るが來客とか用事とかで、面會を謝絶するのが有る、第四には面會をしてもヒドい冷遇を受けることが有る、應接室へ一時間も待たせたる後、折角出て來た主人が、不平な顏色で、何を問ふてもケンもホロロの挨拶をすることが有る、此等の不愉快を忍びながら、其の任務を果して往くには、忍耐力がなくてはならぬ、剛毅不屈の精神に富んだ者でなくてはならぬ、或る外勤記者は人の玄關に立てベルを押す時は、彼れが快よく面會して呉れるや否やを心配して、一種無限の不快を感ずると言つたが、全く之れは經驗のない者には話も出來ないほどの苦しい者だ。

第二　問題と人に注意する事、此の問題に付ては誰れを訪問すれば早く分かる、何處へ往けば早く且つ確かに分かると云ふ事に注意しなければならぬ、鐵道院副總裁古川阪次郎君は暴風が有ると、直ぐに鐵道の被害が、ドノ位有ると云ふことを、風力に依て判斷すると云ふことだが、新聞記者も何か一問題が起ると、直ぐに之を如何にして新聞の材料とするかを考へ、何處へ往て誰れを訪問したら良いと云ふことに氣附かなくてはならぬ、西洋で之を新聞感（News sense）とか、新聞鼻（Nose for News）とか言つて居る、新聞の材料を早く嗅ぎ附ける力の事だ、一事を聞て直ぐに之を材料にする道を想ひ附く力で、之れが發達しなくては良い外勤記者にはなれない。

第三　機敏なる事、今日の新聞は昔と違ひ、刻々に

報道をしなくてはならぬ、新聞紙は一日の中に一版二版三版から多いのは五版八版から十版以上も、版を取り替へて、最も新らしい材料を提供することを爭ふて居る、昔の如くノンキな考へを以て新聞を作て居ては、讀者が決して滿足しない、昔の新聞は「其日の新聞」(up to date) で良かつたが、今日の新聞になるとソンな事では仕方がない、最早や「分秒の新聞」(up to Minute)となつたのだ、されば記者の重要なる資格は機敏に在るのだ、ドンな良い材料でも遲くては腐敗して仕舞ふから、何でも機敏に取て機敏に報道しなくてはならぬ。

第四　頓智頓才ある事、各社の人と材料を爭ふのだから、苟くも拔け驅けの功名をしようと云ふには、機に臨み變に應じて、頓智頓才がなくてはならぬ、明治二十二年の十月、外務大臣大隈伯が霞ヶ關で來島恒喜の爲めに爆烈彈で打たれた、之を聞くと直ぐに外務省へ飛び込んだのは、毎日新聞記者波多野傳三郎君で有ッた、彼れは後に代議士ともなり福井縣知事ともなッたが、當時の新聞記者中の最も機敏なる者で有ッた、彼れが飛び込んで後間もなく外務省の門前は巡査が警戒して、一切の人を入れなくなッた、各社の記者は爭ふて門前へ押しかけたが、人力車で來た男は一人も入ることが出來なかッた、當時の時事新報社記者岡本貞烋君は之を見ると直ぐに三田へ驅せ附け、福澤諭吉先生の馬車を借用して、馬車で以て外務省へ出かけた、其の時代には馬車に乘る人は、高貴の人に限ッて居たから、馬丁がエイ〳〵と聲をかけると、警戒の巡査も門を開て外務省へ入れた、何れ他省大臣の訪問とでも想ふた者だらう、ソコで岡本君は悠然として官邸に赴き、謹んで見舞の辭を述べ、且つ巨細に其の負傷の情況を聞て歸つたから、アノ時に大隈伯遭難の記事は、各新聞中毎日新聞と時事新報が最も詳細で異彩を放て居た、波多野君のは機敏の例で、岡本君のは頓才の例として、適當な者で有らう。

第五　人の談話を引き出す力、既に面會してから巧みに問ひ巧みに語て、人の談話を引き出す力がなくて

はならぬ、或る朝我輩は伊藤公爵を靈南坂の官邸に訪問したら、公爵は「今日は多忙だから一寸五分ばかり面會する」と言て、應接室へ通された、ソコで段々話をして居ると、用談は直ぐに終て、時勢の事に及び、偶然大隈伯の批評になッて、公爵は滔々と辯じ去り辯じ來り、殆んど底止する所を知らない、歸らうと思ふても坐を立つ機會がない、快談凡そ三時間にもなッた頃、公は不圖氣が附いて「今日は忙がしいから五分と言て置いたのに、君の樣に長坐をされては迷惑だ」と言て笑はれたことが有る、之れは記者としては我輩の成功した例だが、失敗した場合も多い、何でも應接は輕快にして、返事を巧妙にやらぬとイケない、恰かも義太夫の合ひの手の如く、相手をして語り易い樣に返事をしなくてはならぬ。

第六　手帳を出す可らず、記者の中には人が話をする時に、手帳を出す人が有るが、アレはイケない、アンなことをすると人が話さなくなり。記憶力が十分に在て人の談話を記憶して歸る人でなくては、立派な記者にはなれない。

第七　人の話の要點を飮み込む可し、人の談話を聞て來て、それを間違へて新聞に出す樣な男は、全く記者としての資格がない、人の談話を書く時には其文を以て其人の口吻を寫し、之を讀む者が親しく其の人に接して其の談話を聞くの感が有る樣に書かなくてはならぬ、其の書かれた人が、之を讀んで滿足して、感謝する樣に書かなくてはならぬ。

以上は社外に出てゝ材料を蒐集する時の心得で、それから新聞社へ歸て材料を書く時の心得に付て二三を語るなら、

第八　信用を重んずる事、人から信用されて「此の事は書く可らず」と言はれた時は、十分に秘密を保ち、決して不德義なことをしてはならぬ、折角得た材料を提供することが出來ないのは、誠に殘念な事だが、然かし人が我れを信用して、秘密に話して呉れた事を、それを暴露するは不信の至りで、ソンなことをすると唯一度の功名で、其の後はバッタリ信用を失墜するか

ら、結局自分の爲めにも其の新聞社の爲めにもならぬ、之れはドウしても十分に信用を保持する道に出で、秘密にす可しと言はれたことは嚴密に秘密にして置かねばならぬ。

第九　報告を書く時に忘れてならぬ要點は、人と時と場所を落してはならぬ、Whatを書く時には必ずWhoとWhenとWhereを忘れてはならぬ、三面の外交員などは此上に人の年齢から住所を注意しなくてはならぬ、折角良い材料でも、人名と其の場所と年月日や年齢などの落ちて居る爲めに、編輯者が再びそれを調べる手數を取らねばならぬ場合が多い。

第十　記事の簡略と詳密に注意す、馴れない記者は下らない材料を詳細に書いたり、緊要な材料を簡略に書いたり、其の書き方の宜しきを得ざる者か多い、之れは最も思慮を要する所だ。

ソコデ先づ外勤記者の大體の心得は說いた積りで有るが、或る西洋の記者は新聞記者に緊要なる資格を說いて左の三種とした。

第一　趣味の廣いこと
第二　新聞を好むこと
第三　事實の眞相を探り出す機智

ブレヤー氏は外勤記者の資格を第一機敏、第二忍耐、第三精細、第四智巧、第五禮讓と言ッた。

材料を取る時は、掏摸の如き機敏が入る、他の凌辱を忍ぶには、宣教師の如くならざる可らず、坑夫が鑛石の良否を鑑別する如き材料の鑑別力も入る事だ、要するに常識が發達して、頭腦の傑出した男にして初めて良い外勤記者となることが出來るのだ。

第四、飜譯記者

編輯局ではドンな社にも、飜譯記者と云ふ者が有る、多く英語の出來る記者を雇ひ入れ、英米の新聞雜誌を飜譯させて居るが、中には佛獨露の新聞雜誌の飜譯をさせて居る所も有る。

新聞では倫敦タイムスと桑港クロニクルとそれから支那のノース、チャイナ、デイリイ、ニウスが一番多

く飜譯記者の前に來る様だ、倫敦タイムスは兎に角、世界を動かす所の新聞だから、各社大概之を取て居る、然かし何分にも日本に到着する迄には、大分日數が係るので、開いて見ると多くは舊聞で役に立たない、一個月も前の出來事をタイムスに依て詳細に飜譯して見た所が、讀者は餘り喜ばない、論說記者の參考にする位の者だ、最も時事新報などの如き紙幅の有る新聞には、時々歐洲新聞の飜譯の掲けられる事も有るが、多くの新聞はソンなことをしない、之に比すれば桑港のクロニクルは三週間位で來るので、報道が早やい、電報で來た事件の詳報は、多くクロニクルあたりを飜譯する、何しろメールの到着する時に、一度に一週間分も十日分も來るので、見たばかりでウンザリする、成るべく一番近い新聞から目を透して、譯すべき者を逸早く取るのだが、時として折角譯した者が、一日前に他の新聞に現はれて居て、何もならぬ事が有るから、良い材料と見たら、早く譯さなくてはならぬ。

多くの飜譯記者は原文に拘泥するが、原文を一々其の通りに譯すると、勢ひ長文になることを免れない、新聞の文は簡潔を尊むから、其の意味の誤謬なきを期して簡潔に譯するが宜しい。

誤譯の指摘

世の中には隨分意地の惡るい男が有て、人の誤譯を指摘することが有る、堺枯川君が坪内逍遙君の誤譯を指摘したるが如きは、有名な者だ、アレは書物で有ッたが、新聞の誤譯も時々指摘される事が有る、十八九年前に國會新聞と云ふ大新聞が有ッた、東京朝日新聞の分身で、論說記者に志賀重昂君、小說家に幸田露伴君と云ふ顏揃ひで、堂々とやッて居たが、或る時志賀君が各新聞の電報飜譯文の多く誤れるを論じ、其の原文を掲げ、之れに各新聞の譯を對照して、一々其の笑ふべき誤譯を指摘したことが有る、當時中央新聞の飜譯は幸德秋水が之に任じて居たが、其の誤譯を指摘された爲めに、彼れは面目を潰されたのを憤慨し「志賀が物知り顏に餘計なことをして、僕の面目を潰したから、乾度一度は復讐をしてやる」と言ッたことが有る。

外國電報の誤譯

外國電報は電報料を節約する爲めに、多く名詞と動詞で打て來る、接續詞もなければ前置詞もない、コムマもなければピリオドもない、而して三四の事件を一所に打て來るから、或る一語が上の事件に附くのか、下の事件に屬するのか、分らない場合が多い、此の無裝飾の電報をスッかり理解するのは、全く練習の功で、餘程馴れた人でも失敗することが有る。

我輩なども二三個月外國電報の飜譯に任じたことが有ッたが、理解し難い者の多いに苦しんだ、勿論度々誤譯もやッた覺々が有る。

報知新聞の編輯を主宰して居た頃、或る英學者を此の飜譯主任に依賴した、彼れは米國にも永く游學した人で、英文に長じ、英語は日本語より巧みに、英文は米國人にもアレだけ書ける人は少ないと云ふ位の人で有ッた、然るに此の英學者が、就任後間もなく受取ッたロイテル電報の飜譯に「侍從ジョセフはバルミンガムに於て關税政策に付て演說せり」と有ッた、我輩は此の電報の譯文を受取て、之を其儘紙上へ掲げることを躊躇した、日本に於ても宮內省の侍從が政談演說をすると云ふ事はないのだから、之れは何等かの誤譯なる可しと考へて、彼れの原文を取り寄せて見ると、果してチャムバレーンの事で有つた、此のチャムバレーンと云ふ姓を譯して「侍從」としたので有ッた、彼れは此の誤譯を辯解し、「電報の文は何れも簡單にして、セコンド、ネームなどは打て來らない例だから、ジョセフと云ふ字に重きを置て、侍從と譯した」と言ッたが、之れは一應尤もな辯解で有ッた、然かしロイテルは決して誤ッては居なかッた、當時彼れのネオースチン、チャムバレーンも既に有力なる政治家で有ッたから、其父子を區別する爲めに、ジョセフと云ふ名は必要で有ッたのだ、我輩は此の飜譯主任の失策を見て「外電飜譯者は單に英學が出來るばかりでも仕方がない、十分に歐米の事情に通じて居なくてはならぬ」と思ふた。

數年前匈牙利の大政治家リユカクスが、內閣首相となッた時、其の電報の發信がウキーンで有つた爲めに、

日本の新聞の多くは、彼れが墺國の首相となつたと記した、墺國と匈牙利とは別に内閣が有ることも知らず、ツエカクスが匈牙利人たることも知らぬ記者が多かつたからだ。

最も有名なる記者の一人で、英語英文に精通して居る人が、或る時「ツンリイヤーメン氏曰く」と誤譯したと云ふ有名な話が有る、之れは支那の總理衙門を支那音でツンリイヤーメンと讀むので、それを打て來たが、之を受取つた彼れはそれが總理衙門とは知らないから、之に氏を附けて人間にして仕舞ふたのだ、侍從ジヨセフと一對の笑ふべき失策談で有る。

或る時「アフリカンダア、ボンドが增加した」と云ふ電報が來た、之れは此の政黨が選擧で其の人員を增加したと云ふ意味で有つたが、此のボンドと云ふ文字が、公債と讀むので、日本の新聞の多くは、「亞非利加公債は騰貴せり」と譯して出した。

英國で大競馬が有つた時、グレート、スポーツと云ふ名の馬が勝つたが、日本の新聞では之を馬名と譯した者はなく、何れも此の英語を其の儘に「大遊技」などと譯して居た。

南阿にはフオーチーン、スチーマルスと云ふ河が有る、此の事に付て電報の來た時に、日本の新聞の大多數は、之を「十四隻の汽船」と譯し、河川として出した者は稀れで有つた。

昨年の冬、フレンチ將軍が勝つたと云ふ電報が來たのを、東京の或る大新聞で誤譯をして「佛國軍は大に勝てり」と掲げて居た、フレンチを英國の將軍の名と思はず、佛國と譯したからだ。

中には餘まり事情に精通し過ぎて、想像を廻らし過ぎて、却て失敗をする者も有る、或る日本の外字新聞はルーズヴニルトがセント、ポールに於て演說したと云ふ電報を見て、太西洋の汽船中にセント、ポール號と云ふのが有ると云ふ智識から、「ルーズヴエルトは汽船セント、ポール號に於て演說せり」と書いて失敗したことが有る。

要するに飜譯記者は外國語の學力が十分なるが上

に、海外の事情に精通し、特に理解力の强大なる人でなくては務まらぬ任務だ。

第五、特派通信員

特派通信員に二種類有る、第一は或る事件に出して之を調査通信せしむる爲めに、特派する者て、第二は一定の場所へ特派して置て、其の地に起る事件を調査せしむる者だ。

櫻島に噴火が有ッた、東北が凶作である、墨國に暴動が起つた、桑港に博覧會が開かれた、此等の地方へ記者を特派して、其の事件に付て通信せしむるのは第一種で、戰爭の時の從軍記者なども之に屬する者だ、我輩の如きも内地の事件で、各地へ出張した事は殆んど枚擧に遑あらずだが、海外へ出かけたばかりでも、第一に明治三十年、布哇に於て日本移民拒絶事件が起り、時の外務大臣大隈伯が軍艦浪速を特派したので、我輩は中央新聞を代表し、此の軍艦に便乘して往つた、第二に義和團の時に、毎日新聞を代表して北支那へ出張し、第三に日露戰爭中報知新聞を代表して、海軍の滿洲丸に搭乘して朝鮮から黄海に出かけ、第四にポーツマスの講和條約に際し、報知新聞を代表して米國へ往つたことが有る。

第二種の特派員は大新聞から緊要なる他國の首都へ有力なる記者を特派して居る者で、有名なるブローヴヰッはロンドン、タイムスの特派員として、巴里に滯在中、タイムスの大使として歐洲の外交界に重きを置かれた、デーリイ、テレグラフの露都通信員ヂロンの如きも、有力なる特派員で有ッた、我輩も曾てブローヴヰッの傳を讀み、且つポーツマスでヂロンに面會してから、他日特派通信員になつて見たいと考へて居たから、明治四十一年に東京毎日新聞と關係の絶へた時に、報知新聞の北京特派員となッて、五年間北京に居た。

材料蒐集の方法

特派通信員の材料を蒐集する方法は、第一に官吏を買收することだ、北京のモリソンが滿洲朝廷の官吏を

買收して、特殊の材料を早く取ッたことは有名な者だ、ブローヴヰッの如きは一歩を進め、伯林會議の時に人に知れない様に其の會議の或る方面へ自分の手の書記を入れて置て、毎日午餐の際に一定の所で出逢ふ様になし、然かし談話を交換すれば忽ち陰謀露顯に及ぶので、双方無言で帽子を交換し、彼の書記は其の帽子の中へ材料を入れて置くことにして居たと言ふことだ、我輩の如きも北京滯在中は、滿洲朝廷の官吏の間へ手を着けて居たが、之れをやらなくては其の任は務まらなかつたのだ、第二には材料を交換する事だ、北京などの例を言ふなら、先づ支那政府の官吏と材料を交換するものだ、それから英米獨露佛を初め、各國の公使や書記官と材料を交換するのだ、日本公使館の人は秘密主義で、容易に口を開かないから、良い材料は取れない、偶ま材料を吳れることが有ても、其の多くは外務省へ打電した糟粕で、之を高價な電報料を拂ふて、日本へ打つた所が仕方がない、それよりも各國の公使から聞て來た新らしい材料を持て日本の公使を訪問し「今朝英國公使ジョルダンはコンな事を言つたが、日本では之に對してドンな意向を有するや」などと問ふと、公使も初めて其の胸臆を披らくと云ふワケだ、それから又各國の特派通信員と材料を交換する事も必要だ、モリソンの所へは多くの通信員が訪問して、材料を交換して居た、我輩は餘まり往かなかッたが、北京ではモリソンの所が一番多くの通信員を引き附けて居た、モリソンに對抗したる有力なるニウヨルク、ヘラルドのオールとは我輩も材料を交換した一人で有る、我輩が初めて彼れと會したのは、明治四十年朝鮮の京城に於ける伊藤統監の招待宴席上で有ッた、伊藤公は外國通信員を招待して、一夕の宴を張ッたので、當時京城に滯留して居た我輩をも、其の席に加へたが、其の時にオールやマコルミック等に會した、それ故にオールは東京へ來ると、屹度我輩の所へ尋ねて來た、我輩が北京へ往て間もなくオールも亦ニユーヨルク、ヘラルドを代表して北京へ滯在する事となッたので、彼れは我輩を訪ねて來た、マコルミックも亦アリシエーテッド、

プレスを代表して北京に來たので、彼等とは能く材料を交換した、それに獨逸人のクリユーゲルと云ふ記者も居り、露國人のプラントと云ふ記者も居た、外務大臣の宴會其他で度々一所になッて、時々は材料を交換したことも有る。

何しろ新らしい材料を早く取て、公使館が外務省へ電報する以前に報告しなくてはならぬだから、特派通信員も骨の折れる仕事だ、それに他社の通信員とも競爭しなくてはならぬから、決してウカ／＼しては居られない。

電報を打つ注意

材料を取ッたら、早く之を電報に打つことに付て、十分周到なる注意を要する、有名なる戰時通信員が或る時、良い材料を取ッたが、それを書いて居る間に、外の人に打電されてはならぬと考へ、直ちに電信局へ駈け付け、ポケツトから聖書を取り出し、「僕が原稿を書く間、之を打て居て呉れ」と言て、先づ電信局を自分の手に占領し、それから原稿を書いて、其の聖書の文の續きに自分の電報を打ッた、外の通信員が來て見ると、電信局では彼れの電報を打ちつゝ有る所で、終に彼れに負けたと云ふ話が有る。

我輩が哈爾賓へ往ッた時、伊藤公を停車場へ迎へる前、露國の電報局に就て十分の準備をして居た、第一に露國の電報は一語十字で有る、支那の電報は一語十五字だから、同じ積りで書いて出したら、受け附けられないのだ、第二に支那の電報局はドンなに消して居ても良いが、露國の電報局は文字を奇麗に書いて、一字も書き損じを許さない、第三に其の發信人の姓名だけは必ず露語で書かなくてはならぬ、若しも我輩が是等の事に付て豫じめ聞いて居なかッたならば、伊藤公暗殺の事件を第一に報道する事は出來なかッたで有らふが、我輩は其の前夜に於て露國電報に付て詳細に聞き、之に對する緊要なる注意を拂ふて置いた、伊藤公暗殺の如き大事件は、勿論豫期する所でなかッたけれど、公の哈爾賓着からココウツオフの會見等に付ては、電報を打たなくてはならぬと思ふたからだ、ソコヘアノ

大事件が突發し、川上總領事は負傷して領事館は大混雜を來し、公の一行も大狼狽の時で有ッたから、我社が報知新聞へ打ッた電報は、一番早やかッたのだ。

北京から日本へ電報を打つに、至急電報と普通電報と特約電報の三種が有る、特約電報と云ふのは、新聞社で其の電報料を拂ふので、普通RTPと稱して居る、之れで打つと一語五十六錢で良い、通信員は書いて出せば金を拂はなくても良いから、金を拂ふ手數も省略され、一番便利で有る、普通電報は一語料金九十六錢で至急電報は其の三倍二圓八十八錢で有る、料金の高い上に一々現金を拂ふの手數が入るから厄介で有る、然るに此の特約電報は一番遲い、電信局で取扱ふ順序は、官用電報を第一にしそれから至急、普通と順次に取扱ふて、特約は一番遲くするから、早く通信しようと思ふ大事件は、必ず至急電報でなくてはならぬ、然かし外の人が誰れも知らぬ樣な自分特得の材料なら、特約で打ても差支ない、それから時間を考へなくてはならぬ、午後の四時頃迄に北京から打つと遲くも七時か八時迄には東京へ着いて、其夜の編輯の間に合ひ、翌朝の新聞に掲載されるが、それより以後には至急報で打たなくてはならぬ、特約で打て夜の二時や三時に着いても役に立たぬ、號外でも出すほどの材料ならば、何時でも宜しいが、平凡な材料なら、遲くては受取ッた方で其の日の役に立たない、又大事件になると至急報で打ても、公報が輻湊して居るので、永い時間がかゝる、それから短かい電報と長かい電報とで遲速が有る、電信技手は長いのを喜ばない、短かいのなら手輕に打て仕舞ふ、頭も手も疲勞して居る所へ、長電の依賴が來ると、之を後廻はしにして、短かい方を先きへ打つ、北京で受け附けた電報が、上海へ打ち、長崎を經て東京へ來るのだ、多分長崎と東京の中間にも之を取り次ぐ局が有るだらうから、其の中繼局の技手が勞れて居て長電を後廻はしにすると、途方もなく遲くれることが有る、ソコで通信員は同じ材料を短文と長文とに分けて打つ、例せば「內閣交迭し袁世凱總理となる」と云ふ電報は短文で、至急報で打て置て、其

の閣員の顔觸れは特約で詳細に打つと云ふが如き者だ、長文の至急報をドシ〳〵打ッた日には、報告は迅速で良いかも知れぬが、料金が大變に嵩んで仕方がない、成るべく經濟的にして有効なる電報を打たねばならぬから、通信員の苦心は一ト通りではない、事件の多い時には一個月四五千圓の電報を打つのは、時事、朝日、大阪毎日、報知等では珍らしくない所で、本月は一萬圓打ッたなどと云ふことも有ッた、讀者の方では北京電報にソンなに金がかゝッて居るとは思はないで有らうが、此等の諸新聞の通信費は大した者である。

大使公使の意氣

我輩が報知新聞を代表して、米國へ赴く時、報知社の樓上で開いた送別會の席上、大隈伯は一場の送別演説を賜はッたが、其の演説中に曰く、

小村男は政府を代表して大使として米國へ赴く者で有るが、石川君は國民を代表して、米國へ赴く者で有て、即ち國民の大使で有る。

大隈伯の此の演説中の一句は、我輩に取て此上もない激勵の語で有ッた、而して我輩は自ら國民の大使を以て自任して往ッた者だ、それから北京へ報知の特派員となッて往く前に、偶ま來朝中の盛宣懷氏の所へ、大隈伯が訪問するに付て我輩にも盛氏の所へ往けと言はれたので、築地のメトロポール、ホテルへ往ッた、高田早苗、松平康國の兩氏も一所に往ッたが、伯は此時も盛氏に向て、我輩を紹介して「伊集院は日本政府が派遣した公使で有るが、此の石川は國民を代表せる公使で有るから、宜しく賴む」と言はれた、我輩は各社の特派員となッて、海外に赴く者は、必ず此の意氣が無くてはならぬと考へる、內地に於て新聞紙を主宰する者は、內閣總理大臣と同樣の意氣を有し、海外に往く記者は、須らく大使、公使と同樣の意氣でなくてはならぬ。

彼れは一身の利害並びに一新聞の利害から超越して、常に國家の利害を考へて居なくてはならぬ、而して日本帝國の國力發展の上から緊要なる注意を大局の上に拂ひ、大使、公使の力の及ばざる範圍に於て働か

なくてはならぬ、公使館から材料を貰らうて、書記官輩から馬鹿にされて居る様な者は、特派通信員たるの資格はないのだが、日本の記者で北京に居る者の間には、随分氣骨の有る者が有ッた、先づ時事新報の龜井陸良、朝日の上野岩太郎、大阪毎日の豐島捨松の三君の如きは、何れも立派な通信員で有ッた、守屋此助君が支那視察から歸て來て、「北京へ往て初めて日本の新聞記者の勢力を發見した」と言ッたが、近頃の事はドウだか知らないが、一時は兎に角北京の記者の意氣は旺盛な者で有ッた。

幽靈探訪（一）

（華魁の幽靈とA大尉）

大窪逸人

Hといふ東洋の一國に、Cといふ人口九千餘りの町がある。東西に一里半ばかりも街が延びてゐるのに、南北は五六町に過ぎない細長い町である。炭、蒟蒻、栗、蕨、蕈などが其の町の特産物に成つてゐる。殊に町の名と同じ名稱のC炭といふのが最も有名である。また同じ名のCといふ義民が其の町から出て、民の窮狀と領主の亡狀とを昔のH國の官憲に直訴し、慘刑に處せられた跡が、今も町の郊外に殘つてゐる。町の北には大きな沼が有り、また西南の隅には城趾がある。城趾に今は歩兵聯隊の兵營が有る。

この話は其の兵營に關係があり、其の聯隊長であつたM歩兵大佐が副主人公に成つてゐる。

C町から二時間足らずの鐵道行程に、H國の首府M市が有る。M市には當然にH國の陸軍の官衙、學校、

部隊などが、幾つも有る。其のうちの一つの步兵聯隊にRといふ一步兵少尉が居た。彼は其の聯隊の兵營內に居住してゐた。

ある夜、R少尉の居室に、Aといふ少尉が訪ねてきた。RとAとは幼年學校以來の同窓生ではあり、AはC町の步兵聯隊に勤務してゐた。そして一週間の休暇を得たAはM市に遊びに來たついでに、Rを訪ねたのだつた。

二人は大變に仲が善かつた。どんな話でも二人の間では只だ愉快であつた。Rは一ヶ月三十三圓五十錢の月俸が許す限りの御馳走を、Aの前に提供しながら、Aとの對話に耽りつゞけた。

いろ〳〵の話のうちに、Aは斯ういふことをRに告げた。それはC町の聯隊長——Aの勤務してゐる聯隊の首長たるM大佐の家に幽靈が現はれる。其の幽靈は若い華魁の姿であると言ふのだつた。Aの口調を藉りるならば、「そりやあ貴樣、ひどい評判ぢや。聯隊長も弱つとるらしいんぢや。默つちや居るがな、もう聯隊の將校は誰でも大概知つとるよ」と、言ふのだつた。

それは非常に豐饒な內容を具へてゐるらしい話であつたから、Rは亢奮しながら、M大佐と其の幽靈の前身たるべき華魁との關係を、直ぐにAに訊ねてみた。Aは然し兩手を交る〳〵横に振つてしまつた。そうして「貴樣それはいかんよ。いかん、いかん、いかん。いくら貴樣でも、これはいかん、己は誓つたのぢやからな、皆で」と、其の話を全く中斷して笑つてゐた。Rも强いて訊ねかへさなかつた。其の夜は其の話を、それだけにして置いた。

Rは探訪といふ所作其のものに對して、よほど以前から興味を有つてゐた。「聯隊長と華魁の幽靈」を連繫させて考へることだけでも、Rの探訪性を十分に爛熟させた。

Aは夜遲くなつて、Rと別れて、Aの伯母の家に行つた、Rは寢臺に就いても、殆ど睡ることが能きなかつた。そうして次の日曜にC町に行つてみることに決

心した。

次の日曜になつた。Rは兵營の近所の旅館に行つて、そこの主婦に着物を借りた。

和服姿の自分を鏡臺に映してみたRは非常に悦んだ。その姿は何處かの商店の新參な番頭のやうに映つてゐた。Rも主婦も聲を合はせて笑つた。

M市からT市に、更にT市からC町に通じる鐡道が、Rを運んで行つた。

其の日の最終列車で、RはM市に歸つてきた。Rの手帳には先づ十分の收穫が有つた。

C町の端から九町ばかり離れて遊廓が有る。其の他に藝妓町ともいふやうなものは別に無い。C町の聯隊の兵卒は休日に兵營を出ると、大概其の遊廓に遊びに行く。猶、將校達も休日以外の夜には、よく其の遊廓に往復するといふ。これは都の風儀の好い聯隊に勤務してゐるRには餘程意外であつた。都の將校も下士も兵卒も遊廓などには事實殆ど沒交渉である。

C町では聯隊長以下、殆ど大多數の將校が華魁騷ぎをするのらしかつた。そうして最も多く酒を飮み、最もよく遊廓に通ふのは、確かに聯隊長のM大佐であつた。M大佐は小型な體格に黑い皮膚を有つてゐた。H國の西邊の僻陬の産れで、隨分一徹な性格の人であつた。小さな盃で徹宵痛飮することが、M大佐の宿癖であつた。

C町の東北四里ばかりに、H町といつて其處に隨分有名な寺がある。一年間に三十五萬人ばかりの參詣人が毎年往復するほど有名な十四間四方の本堂が其の寺の中心に成つてゐる。其の寺と町と同じHといふ名をとつて、C町の遊廓にもH樓といふ家が有る。そうしてH樓にBといふ美しい華魁がゐた。十九歲になる餘程美しい華魁らしかつた。都のM市から來ると汽車を乘りかへなければならぬT市の近郊に、櫻の名所であり馬の產地であるYといふ田舍の水吞百姓の娘が其のBの前身であつた。

M大佐は此のBを大變に可愛がつた。彼の鳥打帽と

浴衣と、黒い圓顏と、捻りあげた髯とが、H樓の裏口に毎夜忍んで行つた。

毎夜――六十餘回を連續してM大佐はBを可愛がりにH樓に登つた。そして、大佐級の俸給と家計には堪え得ないほどの費用を當然使つてしまつた。然しM大佐はH樓にBを見る爲には、凡百の手段を盡した。Bを可愛がることが、確かに彼の殆ど全部に成つてゐた。

そうして、其の放肆と頽蕩とは、C町に遍く喧傳せられ、聯隊の將校も下士も兵卒も、其の聯隊長の所業を傳聞してゐた。けれども、M大佐はC町の衞戍司令官を兼ねてゐた。田舍の警察も憲兵も、M大佐の遊蕩に就いて、別に何の干渉をも仕組まなかつた。全く眞摯にBを可愛がり得るM大佐の一面には、常から聯隊の部下にも憲兵にも町役場や町民にも、善好な印象を與へて餘りあるほどの好懷な性格をM大佐は備へてゐた。皆は聯隊長の破調性を帶びた遊蕩を、たゞ面白い驚異の心で眺めてゐるのに過ぎなかつた。

C町の西の方に、近く、Rといふ小さな町がある。そこに又砲兵聯隊が有る。C町の歩兵聯隊とR町の砲兵聯隊との兵卒は、互に仲が惡かつた。何といふ原因はなしに、單純な兵卒氣質は、歩兵と砲兵との兵種の差異から、單純に低級な杆格を試みて、彼等は血氣に奔つて交互に負けてゐなかつた。

其の兩方からの爭は、日曜ごとにC町の遊廓で現はれるのが、彼等の常習になつてゐた。いろ〳〵の粗暴な葛藤が、廓内の女の周圍に纏れてゐた。

ある日曜の午後であつた。H樓の向ひのC樓の階上に登つてゐた八人の砲兵卒が、街上の歩兵卒の帽子に、肴の食ひあまりを投げつけた。其の日はR町の砲兵聯隊の外出時間が隨分早かつた爲に、C町の遊廓は砲兵卒が機先を制してしまつて、殆ど砲兵の勢力範圍に成つてゐたのだつた。

肴の食ひあまりを帽子に當てられた街上の歩兵卒は、C樓の二階に直ぐ脚もとの石を投げかけんとした。

そうして歩兵卒と砲兵卒はＣ樓の上下から激しい口論を始めた。その附近の街上に散在してゐた歩兵卒は直ぐＣ樓の下に集まつてきた。

彼等は互に『登つて來い』『降りて來い』の抗辯に諍つた。Ｃ樓は早く戸を堅く閉ぢてしまつた。

階上の砲兵卒は、向ひのＨ樓を指ざして、Ｍ大佐と華魁Ｂとの關係を辛辣に罵倒し始めた。歩兵卒は各自の聯隊長の名と共に明かに侮辱された。そうして彼等は必然に痛憤した。熾烈な敵愾心が其の爲に激成した。二十餘人の歩兵卒は遂に拔劍して、Ｃ樓の戸に殺倒した。樓上の砲兵卒も續いて拔劍した。

Ｃ樓の若者は裏口から自轉車に乘つて畑の路に出た。彼は九町ばかりの路をＣ町に疾走し、憲兵屯所に急を報じた。

憲兵分隊の屯所には、宿直の新參な上等兵ばかりが殘つてゐた。その憲兵上等兵は直ぐ屯所の馬に乘つた。そうして遊廓に疾驅した。

Ｃ樓の戸は歩兵卒の爲に破られた。其の短い銃劍は大きな階段の下に襲迫した。階段の昇り口には砲兵卒の長い劍が待つてゐる。そこに憲兵上等兵が現はれた。憲兵の紅い帽子は、兵卒達に對して常に畏怖すべき一の權威であつた。拔劍しての爭鬪が重刑に處せられることも、彼等は常に熟知してゐた。

『氣を着け――』と、憲兵上等兵は馬上から歩兵卒の後で號令を掛けた。そうして、破壞された戸口を馬の體で塞いでしまつた。猶、逃亡する者は憲兵の條規に從つて、拳銃射擊に依らなければならぬことを、憲兵上等兵は嚴達した。

歩兵卒の二十餘人と砲兵卒の八人とが、Ｃ樓のまへに整列しなければならなかつた。憲兵上等兵は其等を首尾よく憲兵屯所に引致して行つた。

Ｃ町の歩兵聯隊長のＭ大佐は其夜直ぐ、Ｒ町の砲兵聯隊長のＥ大佐の家を訪ねて行つた。二人の大佐は快く妥協して、各自の部下の爭鬪に就いて善後策を講じ

た。

M大佐は夜半にC町に歸つてきた。又直ぐに憲兵屯所長のS憲兵大尉の私宅を訪ねた。歩砲兩聯隊の引致中の下士卒を、陸軍刑法の明文に照らさずに、懲罰令によつて聯隊內で處罰したいと、M歩兵大佐はS憲兵大尉に只管懇願した。

S憲兵大尉は然しそれを獨斷して、M大佐の懇願を其のまゝ受納することは能きなかつた。憲兵大尉の彼にとつて兵卒が群集しての拔劍爭鬪は確かに重大な事件であつた。彼はM大佐と妥協する爲には首都の憲兵司令官のH中將の內意を聞かなければならなかつた。

S憲兵大尉は翌日の月曜日の初發列車で、首都のM市に行つた。C町の憲兵屯所には三十餘人の引致下士卒を收禁する餘室が無かつたといふ理由にして、その下士卒は夫々聯隊に日曜の深夜に一先づ歸された。砲兵は下士ばかりであつた。歩兵には兵卒の方が多かつた。それ等を憲兵上等兵が各々護送して、月曜の正午ちかく兩聯隊に護送して歸した。これだけがM大佐の盡力によつて、憲兵屯所の好意を購ひ得たのであつた。

M大佐の身上が不安な氣配に圍まれ始めた。

其の月曜日の午後になつても、S憲兵大尉はC町に歸つて來なかつた。M大佐も首都のM市に午後の列車で行つた。

午後四時ごろ、H樓に中年の束髮の婦人が乳母車を押して行つた。乳母車のなかに三歲になる男の兒が入れてあつた。その婦人はM大佐の婦人でK子といふのであつた。

K子は男の兒を抱いて、H樓の中に入つて行つた。K子は確かに華魁Bと會見した。K子は軈てH樓を出て、復た乳母車を押して歸宅した。

夕暮に成つてS憲兵大尉は憲兵屯所に歸つて來た。夜に成つてM大佐も別に歸つて來た。

その深夜に華魁Bは剪刀で頸動脈を切斷して死んだ。

翌日の火曜日に兩聯隊の下士卒は懲罰令によつて、罪に比べては輕い罰のもとに營倉に檻禁された。そうして其の日の夜に、M大佐は馬丁の和服を借りて、H樓の裏口に潜行した。それはBの死顏を見たい爲と香華を手向けたい爲であつた。彼は自身がBを殺したことを知つてゐたのに相違なかつた。彼はR少尉が最初彼と會つたときに、『これは私が殺したも同然でごわした』と、明かに言つた。

Bの死骸はC町の中學校の北の火葬場で燒かれた。骨はCといふ義民の記念碑の傍の墓場に埋められた。その總てがH樓の手とM大佐の出資によつて濟まされた。

さうして、M大佐は毎夜其の墓場を訪ねて、Bの骨の上の土饅頭を眺めに行つた。彼は腰に大きな瓢を釣つて行つた。

C町に探訪しに行つたR少尉は以上の事を知つた。異性に對して全く初心の彼は然し遊廓の中に入つてみるだけの氣が起らなかつた。H樓かC樓かに登つてみたならば、殊にBを中心にして猶詳細な事が分つたのに相違なかつた。彼は遊廓の入口の新店といふ煙草屋と其他の數ヶ所で大方の事を聞くことが能きた。そうして午後の八時ごろにBの土饅頭を見に行つた。Rはそこで M大佐と會つて、直接にM大佐自身の感懷を尋ねてみたかつた。

墓場は隨分寂しかつた。その景趣は普通の墓場に比べて何の特徴もなかつた。

九時半ごろに一人の男が墓場のまへの細い小徑を通つてきた。小さな體格に軍人の型象が着いてゐるばかりで、それがM大佐であることが直ぐ分つた。Rが數へてみると、其の日はBが自殺してから四十三日目であつた。

RはM大佐の前に進むで行つた。そうして自分の官氏名を刷つてある名刺を恭しく差出した。M大佐は卒直な愕きを催したやうに、踵を揃ひて佇立した。Rの

名刺を斜めに眼の近くに透かして眺めた。そうしてRの姿が少尉にしては著しく矛盾してゐるのを直ぐ怪しむやうに瞶めた。

Rは全く上官に對する軍人の口調を發して、自分が此處に來てゐる由來と、自分の探訪癖とを、其のとほりにM大佐に話した。A少尉の話が端緒に成つてゐることだけを除外した。

M大佐は默然と聞いてゐた。其の强い息に酒の香が飽和してゐた。Rが話してしまうと、

『そいは怪しからん』とだけ言つた。Bは上官と下級者との區別を脫り、年長者と年少者といふばかりの純粹な關係をとつて、M大佐のBの死に對する感想を聞きたいと、更に切望した。

M大佐は然し猶暫く默つて立つてゐた。

『Bといふ女は殺されたのと同じやうに思はれます』と、Rが言ふと、

『これは私が殺したも同然でごわした』と、M大佐が始めて答へた。そうして左手で腰の大きな瓢を脫して、唇に著けた。その聲と所作とが、如何にも素樸そのものを現はしてゐた。Rは其の刹那にM大佐の性格を、すつかり會得し盡したやうに思つた。そうして此の上何も尋ねまいと思ひきつた瞬間に、然しA少尉の話の・幽靈のことが未だ殘されてゐるのを思つて、自分の氣分を勵ました。暫く躊躇して、

『Bの幽靈を御覧になるさうでありますか』と少し鋭く尋ねてみた。

『ふん』と、M大佐は大きく首肯いた。瓢を左手に提げながら、

『妄念をもつて死んだんぢや無い。私は幽靈なんど見ん。けど夜になると此處に來たく成る。不思議といへば自分ながら私も不思議、實につまらん事ぢやけど、つい此處に來る。彼の女に未練なんど無い。けど來たくなる』と、言ひ續けた。それは然しM大佐自身が識らずに欺いてゐるのであり、未練なしと言ひながら第二意識の深い愛着が、此の墓場までM大佐の體軀を運

んで來るのではなからうか、といふ意味をRは更に鄭重に尋ねてみた。

『そいな事が萬々無い。私は愛着なんど無い。夕食が濟むと直ぐ來たうなる。』と、M大佐は少し寛いで、Rと對向して立つてゐた。此の墓に來るのが、然しM大佐にとつて決して嫌ではなかるべき意味を、Rも姿勢を柔げながら訊ねた。

『いゝや、嫌なんぢや。人も見るぢやし、ほんに嫌ぢや。私は參詣に來るんぢやない。仕方がないから酒を持つて來るぢやないか。つまらん話ぢや。はゝゝ』と、M大佐は大きく笑つた。

Rは只だM大佐が悉く好きに成つた。そうして其のうへ立ち入つて話しこむことを、自身で否定した。

M大佐に失禮を深く謝して、RはC町に出てきた。最終列車のなかで、Rは何か大變溫柔な雰圍氣のなかに漬つて來たやうに思つた。Bといふ女の心を自由に聯想してみることが、また餘程面白かつた。

C町の遊廓の兵卒の爭闘は、公にならずに濟まされた。從つてM大佐の身上にも影響しなかつた。M大佐は其の後少將に昇進して、無事に豫備役に編入された。憲兵上等兵は首都の憲兵司令部から賞狀を渡された。

明治大正 瀆職及不正事件史

田中貢太郎

林田翰長が高松に護送せられると共に、司直の手は、今にも大浦內相に及ぶやうにも思はれたが、大隈內閣

の居据りが極ると、何時の間にか雲行が可笑しくなつて、あれ程世間を騷がして居た一萬圓事件は、何うやら煙になりかけて來た。

一體、一萬圓事件でも、瀆職事件でも、惡いと言へば惡いに違ひ無いが、明治維新以後、數限りなく起つた醜怪な事件に比べると、實に些々たることで、その上、大隈が居据つた以上は、もう問題にも何にもならないであらう。

之が明治時代であつたら、この瀆職事件も、一萬圓事件も恐らく問題にもならなかつたらうとも思ふが、こゝにも時代思潮道德觀念の變化があらはれて、如何なる高位大官でも、若し罪跡の掩ふべからざるものがあれば、到底法網を免るゝ能はざるに到つた。蓋し民人覺醒の一證左として慶すべき事柄であると思ふ。

明治維新以來、有名な瀆職事件を數へて見る。

▲山城屋和助事件

明治四年十一月、岩倉具視が全權大使、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尙芳の四人が副使となつて、歐米に向つて出發すると、留守政府では、大久保派を代表した大隈重信と黑田淸隆、木戸派を代表した井上馨と山縣有朋などが氣脈を通じて、西鄕隆盛、板垣退助、江藤新平、副島種臣などいふ西鄕派に對峙して、勢力爭ひをして居た。

その時、山城屋和助といふ兵部省の御用商人があつた。もと長州の奇兵隊に屬した野村三千三といふ勤王家で、時の陸軍大輔山縣とは相識の間柄ではあるし、又、木戸には可愛がられて居るといふ所から、山縣の手から官金を引出して、手廣く御用商をやつて居た。ところが、商用でパリに行つて居るうちに、同地の豪商の令嬢と結婚の約が出來たので、そのために巨額の金を費した。その事が駐佛公使の耳に這入つたので、公使から政府へ注意して來た。不人情な山縣は、煩累の己に及ぶのを恐れて、俄に和助に貸附金の返納を迫つた。和助には、その金が出來なかつたので、その前夜、陸軍の武官に貸付けてあつた貸金の證書を燒いてしまつて、翌日、陸軍省に行つて、一室の中で自殺し

た。時は十一月二十九日で、和助は三十七歳であつた。

薩州出身の武官連は、盛に山縣はじめ長州武官の不正を攻撃し始めた。當時西郷は、聖駕に扈從して、鹿兒島に居たが、この事を聞くと、急いで歸京して、兩派の間を調停した。

▲尾去澤銅山强奪事件

岩倉一行が歐米に派遣せられた留守で、大藏卿大久保利通に代つて、大藏省の全權を握つて居たのは、大藏大輔井上馨であつた。彼は、その地位を利用して、山口縣令中野梧一及び御用商藤田傳三郎等と共謀して、政府の貢米に依つて投機をなし、朝野の攻撃を受ける傍、政府に出ては三等出仕の澁澤榮一を相手にして、政費節減を唱へて、政府内でも憎まれ者となつて居た。司法行政分立案費を拒絶して、「國家の經濟が許されない」と言つたので、江藤新平から、「君などに經濟といふ事が分るもんか。それは勘定だ」と罵倒せられた。そして、江藤と二人で聖斷を仰いだところが、江藤の議が御裁可になつた。そこへ、猿のやうな大隈が横合から出て來て、會計豫算書を作つて、支出の餘地あることを示したので、流石の井上も居堪まれず、明治六年五月、澁澤と共に大藏省を去つたが、次で尾去澤銅山の事件が起つたので、益不人氣になつてしまつた。

尾去澤銅山は、村井茂兵衞といふ南部藩士の所有であつたが、南部藩が外國人から金を借り入れる時に、この村井が保證人になつて居た。それが、廢藩置縣になつて、大藏省で各藩の外債を引繼ぐことゝなつた。この時井上は、尾去澤銅山に眼をつけて、これを奪取しようとして、先づ村井に南部藩の債額を償へと命じたが、村井にその義務がないので、これに應じないで居ると、井上は忽ちその銅山を沒收して、これを子分の岡田といふ者に拂ひ下げるといふ名義にしてしまつた。ところが、大藏省を止すことになつたので、時こそ來れと、澁澤を從へて南部に行き、「從四位井上馨所有」と書いた標木を尾去澤銅山の入口に立てた。

村井は大に怒つて、井上及び大藏省の官吏を相手取

つて告訴した。司法卿江藤新平は、司法大丞島本仲道に命じて、事實の取調に着手さした所が、井上の罪狀の掩ふべからざるものがあるので、今にも井上を捕縛しようとして居たが、突然辭職することになり、又、江藤の意を受けて、井上の處分に熱中して居た河野敏謙も、元老院に轉ずる事となつたので、捕縛處刑とまでは行かなかつたが、それでも尾去澤事件は、東京上等裁判所の裁判となつて、引張り〳〵して、明治八年十二月二十六日、極めて曖昧な判決の下に、紙幣大属河村選を主犯、井上を從犯として、罰金三十圓といふ事になつて解決した。他にも大藏省の官吏で二三人連累して居た者もあつたが、皆無罪となつた。

▲藤田組贋札事件

この事件も下劣な井上馨の人格から起つた問題だ。政府のお情で、尾去澤銅山の强奪罪を許して貰つた井上は、會計事務取調の用を以つて、英國に出張を命ぜられたが、明治十年になつて歸朝すると、工部卿に任ぜられ、十三年九月には、又、外務卿を兼ねるやうになつたが、その月の十五日になつて、藤田事件の火の手が上つた。

警視廳の權大警部佐藤志郎は、警部巡査三十餘人を率ゐて、東京から大阪に下り、十五日の早朝、高麗橋の豪商藤田傳三郎の邸に踏み込んで、主人傳三郎、その弟鹿太郎、甥辰之助、雇人新山陽治、佐伯清一郎、河野淸助等を拘引し、又藤田組の事務を擔當して居た中野梧一も同時に拘引して、一時堺の南京寺に留置し、十月になつて、東京に護送した。

それは、大藏省發行の二圓紙幣の贋造の嫌疑であつた。その贋造紙幣といふのは、五百倍の顯微鏡で見ると、僅に印畫の蜻蛉の足が一本缺けて居るのが分る程の精巧なものであつた。でこれは日本人の手に成つたもので無い、井上馨が歐洲滯在中、獨逸で贋造して、それを藤田組に行使さしたといふのであつた。當時警視廳には、大警視川路利良はじめ中警視安藤則命以下、皆薩州出身の者が居たが、その時川路大警視は、歐洲を漫遊して歸つて來たばかりの所で、この贋札を

發見したので、これが檢擧に着手しようとして居ると、俄に病死した。そこで、安藤中警視に遺命を傳へて、この疑獄を起さしたものだ。

裁判所では、數回の審問を遣つたが、何時も證據が擧らない。もと藤田の店員で、警視廳に密告した者があつたので、それも呼出して對審さしたが、それとて、事實が擧らないので、十二月二十日になつて、傳三郎以下は無罪となり、安藤中警視、佐藤權大警部が免職となつて、その事件は落著した。これは薩人が長州の勢力を殺がんための陰謀とも言ひ、又犯人は神奈川縣人で、西南戰役中に贋造して、行使したといふ者もあるが、何しろこの事件は、川路大警視の死因と共に奇怪な事件として、今にその眞相は分らない。然しこれが爲に、紙幣の信用を墮し、延いて財政攻擊の聲は國會開設の大運動に氣勢を添へて、日本國中はさながら鼎の沸くが如き紛擾を呈した。

▲開拓使官有物拂下問題

明治四年に北海道開拓使を置いて、翌五年から十四年まで十ヶ年を期限として、一千萬圓の開拓費を投じた。黑田淸隆がその長官であつた。期限が滿ちると、政府は開拓使を廢しようとした。開拓使書記官の安田、折田、鈴木などいふ者が、薩摩の豪商五代友厚及び中野梧一と結托して、關西貿易商會を起すといふ名目で、開拓使官有物一切を僅に三十萬圓で拂下げることにして、政府に出願した。而かも無利息三十ヶ年の年賦といふ隨分馬鹿にした出願であるが、長官の黑田淸隆が五代友厚と氣脈を通じてゐるので、諸參議の反對があるにも拘らず、今にも許可にならうとした。時は明治十六年七月、政府部內に在つては、不平滿々たる大隈重信が國會開設を叫んで居る民衆に右の材料を給して、內外呼應して政府を攻擊した。世論は紛糾した。政府は驚いて、十月十一日、天皇の東北巡幸から還幸の夜、御前會議を開いて、開拓使官有物の拂下を止め、又、勅を下して、明治二十三年を期して國會を開設するといふことを約した。同時に大隈は政府を追はれて野に下つたが、日ならずして、自由黨と開進黨が組織され

た。

▲法官弄花事件

選擧干渉で有名な松方內閣の瓦解の頃、即ち明治二十五年六月十六日、大審院長兒島惟謙と、檢事總長松岡康毅とが黨を立てゝ軋轢した爲に、法官弄花事件が持ち上つた。それは兒島の與黨の法官が或る酒樓で花を引いたと言つて、松岡が告發したのであつたが、審理の結果、證據不十分で罪にはならなかつた。それが爲めに兩黨は、大審院の事務を打棄てゝ爭つたが、司法大臣田中不二麿はこれを制することが出來なかつたので辭職した。これも松方內閣の壽命を縮めた一因である。

▲星亨の議員除名問題

第五議會の劈頭に於て、衆議院議長星亨の不信任問題が起つた。

星は親方肌の政治家で、人を包容する俠氣と度量のある上に、泰西の學問にも通曉して居り、素行の點に於ても當時の政治家中には得易すからざる風格を備へて居たが、剛愎で、執拗で、目的の爲には手段を顧みなかつたといふ所から、彼の背後には常に暗い影が付き纏つて居た。その點に於て、彼と大浦兼武と似たところがある。

當時の伊藤內閣は、陸奧宗光の劃策を用ひて、自由黨を味方とし、改進黨、同盟倶樂部、國民協會より成る民黨に對抗することゝなつたが、民黨の方では、星が暮夜、御用商人等と密會して、取引所問題の謀議に與り、盛に收賄をしたといふ風說を捉へて來て、星を院外に逐はふとした。

明治二十六年十一月二十九日、衆議院では、開院式の翌日、全院委員長及び常任委員等の選任をなすことになつて居るが、その日はそれに先つて、安部井磐根が緊急動議を出して、日程の變更を求め、星を議長席から退かして、副議長楠本正隆を以つてこれに換へ、不信任案を朗讀した。「星は議長の顯職に居ながら、暮夜屢政商と密會せるは、これ實に衆議院の體面を汚せるものなり。本員は正に官紀振肅問題を以つて、政府

の責任を問はんとするもの、先づ星の如き悖徳の議長を排斥して、自ら淸くせざるべからず。」

自由黨の方では、之を反駁したが、百六十六票に對する百十九票の小數で決議は議場を通過した。議事が終ると、星は冷然として議長席に着いて、『如何なる決議を受くるも本議長は衷心何等疚しきところがないから、これに服從することは出來ない』と言つて、即ち日程に入るを宣した。議場はこれが爲に沸騰した。和田彦次郎の動議を可決して、星に熟考の時間を與ふる爲と言つて、議事を中止して散會したが、翌日になると、星は依然として出席した。民黨の方では上奏案に依つて、その目的を達さうとした。「臣等爰に議院法第三條に依り、星亨を奏薦し勅任を辱ふす。是れ臣等不明の致すところ、誤つて天聽を冒瀆す。恐懼の至りに堪えず」といふ案文は大多數にて通過した。直にこれを議奏すると、翌日陛下には、宮內大臣をして、楠本副議長に御下問せしめた。「上奏の主意は、朕に議長を更任せよと請願するに在るか、議員自ら不明なりしとの過失を朕に謝するに止まるか」と。議院は恐懼して、「臣等不明の過失を謝し奉るにあり」と奉答した。

星は又出席して、昂然として議長席に着いた。『今回諸君の行動は甚だ立憲的でない。諸君は我憲法史上に惡例を遺すものである』と言つて、議院の行動に非難を加へた。議院は鳩山和夫の動議を容れて、星を懲罰委員に附し、一週間の出席を停止したが、停止期が滿ちると、星は洒然として出席して、議長席に着いた。議院は星が三日に渉つて、依然その職務を行つたのは、院議を輕侮し、體面を汚すものとして、再び懲罰委員に附しようとした。星は、「議長が本日出席したのは、果して懲罰事犯であるか。これを先決問題として討議せねばならぬ」と言つて、頑として顧みなかつた。で、先決問題となすの可否を議場に諮つたところが、誰も可と言ふ者がない。剛愎な星も止むを得ずして議場を去つた。翌十五日には、民黨の意のまゝに星を除名して、院外の人としたのであつた。

▲金時計事件

星を院外に放逐した民黨は、勢に乘じて農商務大臣後藤象次郎及び次官齋藤修一郎に肉迫した。

元來後藤は理想も見識もある政治家ではなかつたが、茫漠たる中に機智を藏し、一種豪傑肌の人を惹き付けるところのある男であつた。彼は伊藤内閣で現地位を得ると、その地位を利用して、全國各地に取引所を亂波して、それから收賄したので、星亨と共に世論の攻撃の的となつた。これには後藤も驚いて、一生懸命になつて、辯解して居る傍で、相棒の齋藤は、一日、議會の壇上に立つて、「世間では莫大な賄賂を取つて居るやうに言ふが、そんな事は無い。賄賂と言へばこれ位のものだ」と言つて、金時計を高く捧げて見せた。齋藤はこの淡泊な辯明で、身の潔白を證することが出來ると思つたが、それは却て嫌疑を深める種となつた。のみならず、齋藤の言葉に依つて、金時計一個でも賄賂を貰つたといふことは動かすべからざる事實となつた。攻撃の火の手は高まるばかりである。民黨では十二月四日、上奏案を呈出した。總理伊藤は驚いて、その翌日己も亦上奏する傍ら、宮中に運動して、留任諭告の詔勅を賜はつた上で、議會に臨んで、「予も上奏して聖斷を仰いだが、陛下は内閣の辭職を許し給はなかつた」と言つて辯解し、平然として處決をしない。議會は停會に次ぐに停會を以てしたので、遂に樞密院の奏疏となり、「朕はその主務大臣が特に僚屬の飭勵に努力せんことを欲す」との勅語の降下となつたので、後藤と齋藤とは辭職するの止むなきに至つた。

▲星亨の暗殺

北清事變の一段落が着いて、山縣内閣が倒れると、憲政黨の牛耳を取つて居た星亨の劃策を容れて、政友會を組織してゐた伊藤博文は、第四次伊藤内閣を組織した。星も入閣して、遞信大臣となつた。

それより先山縣内閣は、星の力で第十三議會の難關を切り抜けたので、星に對して好意を寄せて居たが、政黨員を蛇蝎視して居る山縣は、彼等から政權の分配を要求せらるゝのを恐れ、文官任用令を設けて、黨人の獵官運動を防止した。これを見て取つた星は、實力

の件はない政權の分配に預るよりは、利益の獲得によつて、自由黨の强大を謀らうと決心した。そこで、三十二年六月、東京市會の議員改選期に麴町區から一級議員として打つて出で、それに當選すると共に、關東派の自由黨員を率ゐ、一部の商人と結托して、横濱港の埋立、東京市街鐵道、小樽築港等に關係して、私利を營むに汲々としたが、山縣內閣は政權の分配を拒める代償として、これを默認して居たので、東京市會に於ける星の勢力は隆々たるものとなつた。市參事會員から書記に至るまで、多くは自由黨員を以つて埋めた。それが爲に市政機關は腐敗の極に達した。詐僞取財、公金費消、贓金收受、收賄、瀆職などの疑獄が續々として起つた。三十三年十月には、星黨の市參事會員が日本鉛管會社から三千圓の收賄をしたといふことが新聞に傳はつた。江戸橋工事に關する醜聞も傳はつた。十一月になると、參事會員の二三人は拘引せられた。貴族院議員百餘名は連署して伊藤總理に迫つて、星を內閣より放逐しようとした。貴族院の政府反抗の聲は益〻大きくなつて行つた。續いて、星も告發せられたので、辭職してしまつた。

翌年五月二日になつて、伊藤內閣が倒れた。六月二日には桂內閣が組織された。曩に拘引せられて居た星黨の市參事會員は保釋になつて居た。その六月の二十一日、星は市參事會に出席して居た。後藤の議事が了つて、晝食後、石山事件の秘密會が在つたところで、星の傍に給仕が來て、『今、伊庭といふ方が面會に來ました』と言つた。星は、『今は秘密會だから、面會が出來ない』と言つて、給仕を去らせた。三時頃になつて、秘密會が終つて、普通會になり、ペスト豫防鼠購入追加豫算の件に移つた時、議場の入口の戸が開いて、五十一二の老紳士が這入つて來た。紳士は靜に星の後へ行つて、『私は四谷敎育會の會長で、伊庭といふ者ですが』と落着いて言ふ間もなく、傍に居た議員の眼には短刀の閃きが見えた。それと一所に、『國賊覺悟せよ』と老紳士の叫ぶ聲がした。同時に星は右脇下を刺されたが、剛氣な男であるから、その短刀の手をグット掴

んで引寄せた。老紳士は又二三刀續けて突いた。議員は總立になつて、伊庭を取り押へやうとした。中には泰然として腰を拔かして、眼ばかり動かして居た者もあつた。星は自席より四五尺離れた所に倒れて了つた。口からも、脇下の傷口からも、生々しい血が流れて居た。紳士は「我が本望を達したから、決して逃げも隱れもしない」と言つて、從容として縛に着いた。紳士の名は伊庭想太郎、家代々の劍客であつた。懐には斬奸狀を持つて居た。星の近來の擧動を以つて、風敎を破る者として、これを倒すといふ意味のことを書いてあつた。

▲敎科書事件

明治三十五年になつて、敎育界の一大不詳事が持ち上つた。敎科書收賄事件である。從來小學校で使用して居た敎科用圖書は、民間書肆の編纂に成つたものを一度文部省で檢定し、更に地方小學校圖書審査委員會で、これを審査した上で、採用する規定になつて居た。利に敏い書肆は自家編纂の敎科書を採用して貰ふ積りで、我先にと競爭をして、知事、書記官、視學官、中學校長、師範學校長、縣視學、縣參事會員、小學校長にまで莫大の金品を賄賂して居たところが、その年になつて、或る書肆の運動員の不平から、これを密告したので、罪惡は悉く暴露した。

十二月十七日、書肆金港堂、集英堂、普及舍に於ける敎科書檢定に關する收賄の被告として、先づ休職視學官村上幹當、群馬縣郡視學太田鶴雄の二人が拘引せられた。十八日には金港堂主原亮三郎、理事堀田梅太郎、香川縣書記官阿南尙、仙臺第一中學校長西谷虎二等が拘引せられた。拘引は三府三十四縣に亘つて行はれた。收賄幇助、僞證、證據湮滅の罪に問はれて、輕罪公判に附せられた者が百四十餘人あつて、事件の終結を告げたのは三十七年の七月であつた。

その時拘引せられた者の中で、栃木縣知事溝部惟幾、宮城縣知事宗像政、前富山縣知事金尾稜嚴などが世間の眼を峙てしめた。男爵船越衛も檢事局に數回の召喚を受けた。溝部栃木縣知事が檢擧せられたに就い

ては、皮肉な話がある。檢事局の火の手が盛になつた時、溝部知事は、罪惡の暴露を恐れて、同類の前栃木縣選出代議士横尾輝吉の旅館に手紙を送つて「例の件はお互に緘默を守つて、地位の安全を謀らう。そのお禮には都賀鐵道問題で滿足を與へん」と言つた。その日は十二月三十日で、横尾の拘引せられた日であつた。横尾は知事から來た手紙を開封して見て居ると、横尾を拘引に來た警官が突然入つて來た。横尾はその手紙を燒きたいと思つたが、燒く暇もないので、いきなり懷に入れた。溝部知事の罪惡はその手紙から暴露して、翌日拘引せられた。判決の結果、溝部は重禁錮三ヶ月、罰金七圓、追徴金千圓位であつた。

▲日糖事件

明治四十二年四月、日糖事件が起つて、政界の腐敗を暴露した。

はじめ明治三十八年政友會内閣の時、内地糖を保護の目的で、阪谷藏相が計畫して、砂糖戻稅案が第二十三議會に上る事となつた。之を見た大日本製糖株式會社では、是非ともその議案を通過さゝんものと、同會社の實權を握つてゐた專務取締役磯村音介、常務取締役秋山一裕の二人は、政友會、進歩黨、大同倶樂部にかけて議員の買收をやつた。その結果、保護年限が原案より短縮したが、それでも成功したので、二人は又糖業を官營にして、最も有利な條件で、同社を政府に賣附ける積りで、社長鈴木藤三郎を廢して、博士酒勾常明を以て之に代へ、財界王澁澤榮一を顧問にして、盛に鉅額の金を撒いて、三派の代議士はじめ、政府にまで手を延ばして運動したあげく、第二十四二十五の兩議會に砂糖官營案を出してもらつたが、遂に成立しなかつた。

こんな事で、大缺損を背負つてゐた日糖會社は、益々財政が紊亂した爲に、株主の或る者が、終に重役を相手取つて、文書僞造行使、委託金費消、瀆職法違反の數件で訴訟を提起した。日糖事件の疑獄が世人を驚かした。

四月十一日になつて、磯村秋山の二人が先づ拘引せ

られた。十五日になつて三派の代議士が召喚拘留せられた。政友會では十一名、進歩黨では七名、大同倶樂部では二名であつた。

會社側でも前記二名及び、酒勾社長はじめ、それぞれ豫審に附せられたが、七月十一日には、重役に關する豫審終結決定書が發表せられた。

その十一日の午後七時頃、麻布霞町八番地に住んで居た社長酒勾常明は自邸内で自裁した。その朝、五時半頃に床を出た常明は、ネル縦縞の單衣に白縮緬の兵兒帶をして、庭に下り、二三種の新聞を持つて、應接室に接近した供待所に這入つた行つた。それから一時間ばかりもして、家人は小さな銃聲を聞いた。それでも別に氣にも掛けなかつたが、幾ら待つても座敷に上つて來ないので、女中が行つて見ると、供待所の土間の上に血に染んで倒れて居た。傍に六連發の短銃が落ちてゐた。年は四十九であつた。その前夜、常明は八つになる常彦といふ男の子と、十六になる榮子といふ女の子に向つて、「惡い友だちと交際して、惡い者にされたり、惡い者と思はれぬやう、お前たちも氣を付けねばなりませんぞ」と言つた。これが我が子への遺言であつた。長文の遺書は二階の寢室にあつた。日糖事件の犧牲になつたこの博士は、哀れな人であつた。

日糖事件は明治四十五年七月四日、磯村秋山に係る裁判が、名古屋控訴院であつて、兩人に懲役三ヶ年の判決を言ひ渡されたのを終審として終結した。代議士では、前記の中僅かに三名が無罪となつたばかりで、他は少いのは重禁錮四ヶ月、多いのは十ヶ月の處刑を受けた。

▲海軍腐敗事件

海軍腐敗問題は、山本内閣を倒した上に、首相山本權兵衛を社會的に葬り、合せて政友會を破壞した大怪物である。

シーメンス事件の發覺は、もとシーメンス・シュッケルト電氣機械製造會社東京支社にタイピストをやつてゐたカール・リヒテルと云ふ青年から起つたものだ。リヒテルは同社に在職中、日本海軍省よりの買入又は

註文に關して、同社より海軍高級官吏に贈賄してゐる秘密書類を手に入れたので、同社を辭職してから、副支店長ウヰルヘルムに脅迫狀を送つて、二萬五千圓を支拂へば、秘密書類を會社に返してやるが、でないと世間に發表すると云つた。ウヰルヘルムは之を拒絶した。リヒテルはその秘密書類を寫眞に撮つて、十一月四日、横濱にゐるロイテル通信員プーレーに七百五十圓に賣つて、己れは獨逸に歸つて行つた。プーレーは之を上海のロイテル社に送つて、公表しやうとした。ヘルマンとウヰルヘルムは驚いて、プーレーに五萬圓を與へてその書類を買戻して、横濱にある獨逸總領事館の一室で燒いた。シーメンス會社の方では大に安心してゐると、リヒテルが又本國で惡事を企てた爲に愈々事件が暴露して了つた。

大正三年一月二十三日、東京の二三の新聞に、伯林電報とした奇怪な記事が載つた。シーメンス・シユッケルト電氣機械製造會社東京支社のタイピストであつたカール・リヒテルは、日本海軍省よりの買入註文に關し、同社及び日本海軍高級官吏間に存する秘密の關係を記載した書類を竊み出して、之を利用して同社に對し恐喝取財を企てた爲に、重禁錮二箇年に處せられたといふのであつた。時恰も議會開會中であつたので、忽ち問題になつた。同志會の島田三郎は、當日、山本首相及び齋藤海相に向けて、猛烈な質問演說を遣つて世間の視聽を驚かした。それが爲に第三十一議會は、紛擾に紛擾を重ねて、三月二十四日、山本内閣は遂に瓦解して了つた。

はじめ山本首相及び齋藤海相は、この收賄問題の質問に對して、絶對に否認してゐたが、査問委員會を設けて、檢事局と相待つて調査の步を進むるに從ひ、醜穢の事實の掩ふべからざるものが續々として露はれて來た。先づシーメンス會社に關するものを云ふと、同社が千葉縣船橋町に建設する海軍無線電信の請負を爲すに方つて、その契約に關係した海軍艦政本部第一部員海軍大佐澤崎寛猛に對し、同社代理者吉田收吉の手を通して、一萬一千五百圓の贈賄をしたこと。電氣機

械の註文に關して當時海軍艦政本部第一部長豫備海軍少將岩崎達人に六百圓の贈賄をせんとしたが、岩崎がそれを受けなかつたといふこと、又海軍艦政本部員海軍造兵中監鈴木周二の妻に對して三千四百五十圓の金を送つたことなどであつたが、この事件の取調中に、吉田收吉は、獄中で縊死したので、世間では怪しい噂が傳つた。

シーメンス事件の進行中、軍艦「金剛」に對する收賄事件が發覺した。明治四十三年英國の造船會社ヴヰッカース商會及びアームストロング會社に命じて、軍艦建造の請負入札を爲さした時に、ヴヰッカース商會の日本總代理店なる三井物產會社取締役飯田義一、岩原謙三、山本条太郎、及び技術顧問兼機關部長の松尾鶴太郎と共謀して、松尾に親交のある當時の艦政本部長海軍中將松本和に贈賄して、同艦の註文を受け、百十五萬八千七百餘圓の口錢を得たといふのであつた。

このヴヰッカース事件には、未だ一人關係したものがをつた。それは機關少將の藤井光五郎であつた。藤井は前記ヴヰッカース商會とアームストロング會社の競爭の際、造艦監督官として英國に出張中であつたので、二十九萬餘圓の謝禮を受ける約束で、海軍省に對して、ヴヰッカース商會の技術の優れてゐることを推擧した。その藤井は「比叡」に裝置すべきダービンの製造をヴヰッカースに註文した時にも九千九百餘圓、驅逐艦を英國ヤーロー造船所に製造さした時にも三萬四千餘圓、その他アロール會社、ウエーヤー會社などからも巨額の贈賄を受けてゐた。

シーメンス及びヴヰッカース事件の火の手は擴大した。德山煉炭所を襲つては、機關中將武田秀雄、主計大監窪田重弌、主計中監畑中泰次郎などに待命又は豫備編入などの處分を受けしめ、室蘭製鋼所を襲つては、中將山內萬壽治の身邊を疑雲で包んだ。

海軍收賄事件の斷獄は、五月から九月にかけてあつた。澤崎寬猛は懲役一年、追徵金一萬一千五百圓、松本和は懲役三年追徵金四萬九千八百圓、藤井光五郎は懲役四年六ヶ月追徵金三十六萬八千三百六圓五錢、ブ

ーレー懲役二年罰金二百圓、ヘルマン懲役一年、プランデル懲役十ヶ月、その他三井物産の飯田岩原山本松尾等も懲役一二年の刑に處せられた。

この稿には未だ陸軍分捕事件と、今回の一萬圓事件及び代議士瀆職事件がはいる筈であるが、前事件は手許に材料が無い爲に、後事件は讀者の耳に新らしい爲に、皆之を除く事にした。

改造内閣の新大官

鐵拳禪

一

政友會並に秋山一派の策士は、現内閣を御大典以前に屠らざるべからずと揚言し、世人は御大典後に死解すべきを豫期せり。然るに政友會の村野常右衛門が點火し、小山溫が煽り立てたる瀆職事件の火の手豫想外に熾烈を極め、粹翰長林田の收監となり、内相大浦の身邊危きに至りしかば、流石の高言伯も對岸の火災視すること能はず、東奔西走せしも既に手遅れとなりて又如何ともすべからず。事茲に至りては最早如何に横著の子大浦と雖も頑張ること能はず、七月二十九日慌しく冠を挂けて謹愼し、翌三十日首相大隈又董督不行屆の責を引きて辭表を提出し、遂に内閣の總辭職を見るに至りて、事は策士の揚言通りに運び、政界の形勢急轉直下し、一抹の黑雲驟雨を齎せるの觀あり。

驟雨一過の後は必ず、涼味爽然として湧くの例なるに、本年の驟雨何程か陰霖の氣を帶びて、其の蒸暑さ拭へ難きが如く、政界の空氣も亦混濁して、爽涼の快味を感ぜざりき。折角内閣を破壞せる政友會は、自ら進んで建設せんとは爲さず、擧國一致内閣とか、人材内閣とか、非政黨的口吻を洩し、果は元老を擔ぎ出す

も厭ふ所に非ざるが如き色氣を表示せり。殊に秋山一派は、伯寺内を首相に擬するが故に、政友會の妥協以上の非立憲内閣たるや言を俟たず。彼等が何故に憲政の進歩と逆行して、斯かる不徹底的の態度を持するやと云ふに、彼等の憂ふる所は邦家の前途に非ず、彼等の望む所は憲政有終の美に非ず、一に唯政權を得んとするにあり。其の口にする所は、常に憂國の至情なり、憲政の進歩なりと雖も、其の行ふ所は其の云ふ所の美と相反す。破壊の爲めの破壊、政爭の爲めの政爭には、吾人既に之に厭きたり。少くとも今後の政爭は、今日の如く不徹底的なる、盲目的なる、無意味なるものなる可からず。一たび他の内閣を破壊したる以上、必ず自黨を以て内閣を組織し、自個の政策を實行するの確信なかるべからず。徒らに政爭の爲めに破壊し、跡は野となれ山となれと云ふが如き自棄の心は、無責任なる黨人の言動にして、苟も自覺せる政治家の取るべき行動に非ず。既に無責任の破壊を以て狂喜し、建設の責任を重んぜざるに於ては、幾度内閣を破壊し、幾回閣員を更迭するも、畢竟政爭の戯劇のみ、馳ごつこのみ。責任内閣の建設も、政治道德の確立も、憲政有終の美擧も、到底必期すること能はず。大正政界の革新は、單に大隈内閣の破壊のみに非ず、破壊運動を試みる人々の政治的自覺如何にあり。

鹿を逐ふ獵夫山を見ず、唯政權にのみ焦躁して、政權を把握するの大策を講ぜざるが故に、自ら窮地に陷りて折角の獲物を逸せり。機を見るに敏なる元老は、横合より出で來りて政界を掻き廻し、獵夫の連中の無能なるを見るや、伯大隈に留任を慫慂せり。伯大隈は素より老猾にして、最も能く香の利用法を解するの人物なり。引責辭表は提出せるも、御大典を了せざるに内閣を投げ出さんこと、却々に老後の未練なり。内心如何にもして獅嚙み付かんと欲せしも、最高の理想の手前もあり、子大浦への義理もあり、表面連帶責任の形式に出でざる可からず。所謂謹愼不行屆の珍文句は、此の内外の睽擠に依り製出されたるなり。併し一時は彼れも諦め、斷然引退に決したるも、周圍の事情に動されて、野心の火再び燃え來ると共に、居据りの腳を固めたり。彼れは性來臨機應變の人にして、主義政見の操守者に非ず。されば多くの場合、自説に囚はれず、言實に縛られず、時宜に依りては變説改論も亦辭する所に非ず。其の變通自在の術に至りては、元老の何人と雖も企及し得べからずと雖も、亦彼れに向う見ずの一癖あり。一たび斯うと斷を固むれば、成敗利鈍に

拘らず、行詰まる所まで押し行かんとす。而して其の押し行くや、何人が何と言うても耳を傾くるものに非ず。今次の居据りの如き、即ち此の一辯の發露せるなれば、同僚の二三者の理を盡して説くあるも、決して其の理の當然に聽從せざる也。彼れは世人の連帶引責論を以て、抽象的の憲法論に過ぎずと嘲るも、是れ自個の非を遂げんとするの曲解なり。苟も國務大臣が董督不行屆の廉を以て辭表を提出しながら、其の事由の消失せざるに、卒然意を飜して留任するが如きは、政治道德を解する者の敢てせざる所なり。然るに伯大隈は、恬として之を耻ぢざるのみならず、居据りの理由を飾るに、聖旨に感激せるを云々し、剰へ絶對多數黨を打破せる功績を擧げ、子大浦の不祥なる行爲を辯護するの口吻を洩し、更に進んで「現内閣は未だ信を天下に失ひたるに非ず、若し信任を國民に失はんか、爭で辭意を飜し、再び天下に見ゆることを爲さんや」と豪語せり。彼れは何を以て信任を國民に失はずとなせるや、總選擧の形勢より推す時は或は然らんも、そは不祥事の發生前のことなり。發生後の今日、現内閣を糺彈せんとするもの、獨り反對黨のみに非ざるなり。彼れにして一片の至誠あらば、更に議會を解散して、其の信任を國民に問ふを要す。無責任の放言と、自負の豪語とは、政治家の德を傷くること、甚大なるものあり。外相加藤、海相八代、藏相若槻等は、流石に責任を重んずる傾向あり、一たび内閣の連帶責任を以て辭職を決意せる以上、事情の如何に拘らず留任すべきに非ずとなし、斷然冠を挂けて去れり。彼等の去れる、必ずしも連帶責任のみに非ず、難局に當るを避けんが爲めなりと云ふも、内情は兎も角表面は正に斯の如くならざる可からず。殊に男加藤の如きは、今日まで内閣を投げ出さんとせること一再のみならず、夫の外交問題に對して元老の容喙し來るや、辭意を決せりと傳へられたり。其の今日まで事なきを得たるは、伯大隈の逡巡せるが爲めなりと聞けり。彼れ伯大隈は、居据りの理由を飾るに如何の美辭を以てするも、憲政の常道を踏まず、徒らに官僚政治家のなす所を學びて、居据らんが爲めに居据れりとの誹を免るゝ能はず。

二

現下の政局より觀る時は、大隈内閣の居据り、必ずしも不可なりと云ふべからざるものあり。反對の各派は何等内閣建設の自信なく、漫然擧國一致内閣、若くは人材内閣を叫び、縦令元老の超然内閣を組織するも、之を後援するを辭せずと聲明せり。果して彼等の聲明するが如く超然内閣を助成し、元老の蹶起を促すに於ては、政界は如何の狀態を呈すべきや。彼等の十年一日の如く唱導し來れる政黨内閣も、幾多の犠牲を拂ひつゝ絶叫し來れる憲政擁護も、空しく水泡に歸せん。大隈内閣は一種の官僚内閣の觀あるも、同志會外二派を基礎とせる政黨内閣なり。今次同志會總裁加藤の挂

冠し去りて、愈よ變體内閣となりたるも、元老を首班とし、若くは伯寺内を擔げる、藩閥内閣とは同日の談に非ず。憲政の逆轉は、憲政の正路に復するの一段階に過ぎずと云ふと雖も、今日以上に逆轉するを要せず。伯大隈の憲政逆轉内閣も、より以上の憲政逆轉内閣を阻止するには、幾分の効果あり。彼れ大隈の擧げたる理由よりも、此の意味に於て現内閣存立の價値はあるなり。併し最も無難なるは、居据りに非ず、改造　非ずして、後繼内閣の組織者として、政友會總裁原敬を奏薦するにありたるは爭ふ可からず。然れども、居据れる以上は、今日俄かに之を成す能はず。其の瓦解の日も、必ず遠き將來に非ざるべければ、其の最後の日に於て、伯大隈の善心に立ち歸りて、立憲的行動を執らんことこそ望ましけれ。其の際は、原敬たるもの、又從來の妥協癖を捨て、政黨内閣の建設に眞劍ならざる可からず。彼れの徒黨は、現下荐りに大隈内閣に咆哮し、極力之を破壞せんとするも、天下の同情は破壞の爲めの破壞者に集中せざるを記憶せよ。國民は最早舊式の策士が挑發する政爭に厭きたり。破壞せんとする者、先づ建設の準備あるを要す。無理想、無方針、無政策、無定見の黨の盲動は、良民を蠹毒するの外、何等の利益あるものに非ず。現内閣の失政素より糺彈すべく、伯大隈の行動又非難すべきも、之を敢てする者は宜しく憲政の正路を踏み、堂々の論陣を張りて抗爭せざる可からず。若し然らずして、黨略の爲めに凡てを犠牲にするが如きは、同じく憲政の賊たるを免れず。政友會たるもの、茲に意を致さば、破壞の爲めの破壞に從事するの前、先づ新内閣組織の胸算を樹て、立派なる建設の準備をなすを要せずや。極言すれば、伯大隈を居据らしめたるもの、元老の奔走に非ずして、其の罪寧ろ在野の多數黨たる政友會の無準備、無定見にあり。

總辭職後、多少の風雲を捲きたるも、外相加藤、海相八代、藏相若槻の外、全部留任する事となり、八月十日を以て内閣の改造を了せり。最初外相加藤の辭職は、改造内閣の一大難關を以て目され、彼れ留任せざ

るに於ては所詮瓦解の外なしと觀測されたるも、事は案外に順潮に運び、彼れは同志會を率ゐて後援を持續するに決し、外相は又彼れの推薦せる男石井菊次郎の佛國より歸りて就任するの段取となれり。海相の後任も亦、海軍充實案の暗礁横れるあれば、容易に其の人物を得る能はざるべしと思惟されたるに、八代の推薦せる中將加藤友三郎の條件付にて就任を諾せるに由り、其の改造案外速かに進行せり。其他は、別して難かしき事なく、文相一木喜德郎は元老及び上院の緩和劑として內務に轉じ、其の後任には早稻田の才人高田早苗を擧げ、遞信の武富時敏は年來望める藏相に轉じ、其の後釜には政界の古老箕浦勝人の据るありて、新舊人物の顏觸玆に整然たり。子大浦、男加藤、若槻等の引退を見て、官僚の色彩漸く薄らげるを云ふも、一木の內相に頑張る以上は、官僚系の勢力衰へたりと斷ずべからず。黨人の頭數如何に多きも、其の中心勢力たる能はずんば、何の役にも立たざるなり。農相河野、遞相箕浦の如きは、內閣の肝煎役にて、朋黨軋轢の際の調和劑の觀あり。同志會の爲めに、大に氣を吐く者とは見るを得ず。首相大隈の大風呂敷を緊握するは無論法博一木なるべく、而して其の片脚たるは法博高田なるべし。今次の改造內閣を、前內閣に比すれば、伯大隈の自慢するに足る早稻田內閣なり。眞個の大隈內閣なり。夫れだけ包容貧弱なるを免れず。とは云へ、斯くの如く手ッ取早く改造し、破壞者をして乘ずるの機會なからしめしは、流石に伯大隈の手腕なりと思はざるを得ず。

三

隈板內閣の時、箕浦は遞信次官、高田は學務局長、肥塚龍は鑛山局長、尾崎は文相、武富は商工局長たり。爾後十數年大隈內閣成るや、尾崎は中正會を踏臺として法相となり、武富は不滿ながらも遞相に納りたるに、今次の改造あり、遂に宿望を達して大藏の椅子を占めたり。肥塚は惚け加減なれば、明日の人に非ずと思へるに、年の功にて同志會の總務に据れり。本人大に鼻息荒く、大臣志願の由なれど、疎雜の頭腦と、人格の

疑問は、東京府知事にて既に行詰れるの觀あり。箕浦及び高田の拔擢は、前官の關係よりするも順當なるべく、殊に箕浦は松隈内閣の時商務局長に任用されたれば、伯大隈とは淺からぬ因緣ありと見えたり。蓋し、口の人大隈の、無口の人箕浦を重用するは、其の性格の相反せるに由るか。高田は帝大の出、口の人、頭の人たると共に、手の人なり。其の學殖あり、才氣縱橫なる點に於て、凡倉と見ゆる箕浦と、全く其の趣を異にす。

箕浦は慶應義塾を出づるや、直ちに報知新聞に入り、編輯に從事せり。彼れに才筆の見るべきなしと雖も、一家の見を持して、屈せず動ぜざる所あり。有能なるか、無能なるかの輙く透見し得ざる所に、彼れの他を吸引し、他をして傾倒せしむるの德あり。生彩煥發せずと雖も、鈍重の裡、寡默の間に、計畫を遂行し、事務を裁斷するの力あり。年少早く斯の傾向ありて、今日もなほ斯の傾向に進みつゝあるに似たり。依つて思ふに、彼れの一生涯は、默々主義の連續にして、默々として活動圏内を徐行するなり。『報知』退社後、仙臺に赴きて師範學校長となりたるも、年餘にして再び『報知』に舞戻りて國會開設を呼號し、明治十三年の交神戸及び岡山の商業講習所長となりたるも、是れ又大なる功績を擧ぐるに至らず、退いて大阪新報に據り、十五年に至りて三たび『報知』に入り、爾來拮据經營して其の基礎を築き、今日の隆盛を見るに至れり。然れども、新聞經營は彼れの副業のみ、其の志は常に政界にあり。立憲改進黨組織以來政界に馳驅し、顏を初期議會に出してより、代議士に當選すること十二回、未だ一回も落選せず。三十七年推されて副議長となり、平々凡々の裡に其の任期を終れり。箕浦の特色は、此の平凡と、默々とにありて、島田の如き熱辯と感情とにに非ず、河野の如き美髯と不得要領とに非ず、武富の如き莊重と頭腦とに非ず、尾崎の如き多辯と才氣とに非ざるなり。彼れの面貌は宛然仁王の如く、『力』を象徵す。感情火の如く燃えざるも、冷靜水の如き沈着はあり。總身に智慧の廻らざる失なきに非ざるも、熱せず

狂せず、默々として事を運ぶの長所あり。斯の長所を渾身の『力』に發揮し、政務を處理するに於ては、或は治蹟を擧げ得ずとも限らず。唯議會の答辯の如きは、未だ大臣學の修養を積まざるを以て、農相河野の『ニートエー』と同じく、滿場の笑殺を買ふなきを保せず。彼れ箕浦の試金石は、今や報知新聞に非ずして、遞相の椅子にあり。

法博高田は、前文相一木に比すれば官僚臭なく、政客の風骨あり。赤門の出身にして、私學の經營者なるが故に、官私共に公平に歡迎して可なり。然れども、帝大には眼光豆大の偏見者流あり、早稻田大學長たり、純學者たらざるを以て、排斥せざる迄も喜ばざるの風なきに非ず。彼れは往年改進黨の名士を以て鳴り、政界に雄飛せしが、一たび星幕下の壯士に狙擊され、背部に刀痕を負ひしより、意氣頓に消沈せり。遂に代議士たるを斷念し、早稻田の奥に退いて、専心育英の業に從事せり。然るに大隈内閣の成立は、彼れを上院に送りて、政治的氣分に復活せしめ、而して今次の改造と共に文相の重椅に據らしめたり。彼れ政界を退くの日、爭で今日あるを想はんや。眞に不測の幸運なり。然りと雖も、既に尾崎は文相となり、犬養も三日文相となりたる事なれば、今日私立大學長たるの地位よりすれば、必ずしも有り難きものに非ず。破格の拔擢に非ずして、寧ろ當然の順序なりと云はんも、黨人ならず、官僚ならざる彼れとしては、伯大隈の首相たるが故にのみ當然たるなり。其の人物より觀れば、素より黨人長谷場純孝、大岡育造等の、何等學界と交渉なき者と同日の談に非ず。彼れは趣味の人なり。書畫骨董を蒐集するが故に、しか謂ふに非ず。美術に對して一隻眼を有すればなり。曾て學務局長たりし時、文部に美術課を新設し、大に美術の奬勵保護を講じたることあり。爾後十數年漸く文藝美術の進歩を見るに至り、美術展覽會、文藝調査會等を創設されたるも、後者は幾許もなくして廢止され、前者も亦創立當初の趣旨に戻りて情弊百出せり。彼れ小松原は官僚の謀士、趣味に徹底せる人に非ず。時勢の要求に餘儀なくされて、

形式的に設置せるのみ。固より高田の如く、美術を熱愛するの極、美術課を新設せるとは異なれり。形骸を玩弄して、精神を吹き込まざるもの、如何ぞ藝術の振興を期するを得んや。高田は此の方面に努力するに、最も適材なり。曾て美術課を新設せるの意氣を以て、現下の藝術界に處するの策あるを要す。彼れは又學制改革案に就て、年限短縮の意見を有する筈なり。前文相一木の政策を踏襲せば彼れの主張を棄てざるべからず、自己の主張を貫徹せんと欲すれば東大總長山川以下官學派の反抗を覺悟せざるべからず、就任第一の難關は此處にあり。然るに彼れは「過般教育調査會に於て所謂菊池案大多數を以て通過せる際なれば、予は此の方針に基き、最善の措置を施したるものと思惟せり」と言明せるに徵すれば、多少の變說改論は免れざるに似たりと雖も、彼れは立憲思想に富み、主義あり主張あり、理解あるの人なり。徒らに右顧左眄して解決を遲疑し、若くは尾崎の如く一時を糊塗し、自己の地位を死守するの徒に非ざるべきを信ず。

中將加藤は、清浦內閣の海相に擬され、自己の要求容れらずして、御免を蒙りたる悧巧者なり。斯の人、海軍が實案の横れる短命內閣に飛び込めるを見れば、其の要求の大部の容れられたるや明かなり。何れの內閣も軍閥の跳梁に制せられて、廢減稅の主張を反古とし、國費の調節がとれざる事なれば、內閣の一大英斷を以て文官制に改正しては如何と思ふが、さて大言伯にも力及ばずと見えたり。そは兎も角、當年の洒豪友三郎は、入りて海相となれり。彼れは八代の古武士的風格なきも、頭腦明斷にして、奇智あり機略あり、官以游泳の術又拙からず。明治十六年始めて少尉に任じ、爾來累進して、海軍大學教官、軍務局第二課長、艦隊參謀長、海軍次官等を歷、四十一年中將に陞り、吳鎮守府司令官となり、次で第一艦隊司令長官となりて、日獨の風雲に會せり。八代は、就任の當時吾人の評せしが如く、海軍廓淸の適材なりしも、軍政の手腕家に非ず、海軍充實案の暗礁を殘して去れり。加藤は艦隊司令長官よりも軍政の適任なりとは世人の認むる所、軍人の免黜以外、縱横の辣手を揮ふべく期待せらる。前任者の推薦に由る以上、大體の方針に變更あるべしとは思はれざるも、殺活は其の人の運用如何にあり。八代の蹈ける難關も、無謀の固執を敢てせざるに於ては、順調に解決するの望なきに非ず。中將加藤は、果して國防と國費の調節を圖り、國民をして意を安んぜしむるを得るや。

四

內閣改造の結果、警視總監、參政官、知事等にまで波動を及ほせり。

辯ずる者は、地方官の更迭は、神奈川縣知事石原健三が宮內次官となり、北海道長官西久保弘道が警視總監に轉じたるが故の、小異動にして、何等一木的色彩を施さずと云ふと雖も、『が故』以外に新內相の方針なり、色彩なりの加味せるは爭ふ可からず。更に內面觀察を逞しうすれば、內相一木の方針よりも、寧ろ公山縣の壓力加はり來りて、轉任拔擢の均衡を破れり。俵孫一(宮城)の西久保の後を襲ひ、有吉忠一(宮崎)の石原の後釜に据れる、湯淺倉平(靜岡)の警保局長に陞任せる、黑金泰義(大分)の山口に榮轉せる、孰れか官僚直系の擡首にあらざる。

湯淺は第三次桂內閣の當時、內務勅參より地方局長に拔擢され、山本內閣の成るや岡山に逐はれ、大隈內閣の下に靜岡に轉じ、今次再び本省に舞戻りて要樞に座せり。府縣會議員選擧の目睫に迫れる際とて、彼れの行動は政界指目の焦點なれど、彼れは比較的公明正大にして、官僚的偏頗を有せざるが故に、子大浦の下に安河內の試みたる陰險を繰返すべしとは信ずる能はず。萬一彼れは平生持する所の剛直を逆用し、周到の才を驅使するに於ては、折角贏ち得たる名聲を失墜して、生きながら葬らるべきや必せり。彼れの人格的手腕を發揮し、明日の進展を期すると否とは、今日以後の遣り口如何にあり。有吉の朝鮮總務長官たるや、官界の麒麟兒を以て目され、將來の造詣測るべからずと稱されしが、宮崎の僻陬に轉じてより甚だ振はず。其の健康と意氣とを併せ銷せるが如く思はしめしが、手腕なほ冴えたる所ありと見え、神奈川に拔擢されたり。何事かを成すべく期待されて、何事をも成さずして去るの例少からざれば、彼れ有吉の果して評判程の技倆を有せるや疑なき能はず。俵も亦朝鮮にて色揚せる、麒麟兒にて、行政的手腕凡ならずと官僚眼を驚かしたる人なり。三重にても、宮城にても、是れぞと云ふ治績を擧げ得ざりしも、北海道は准殖民地たるだけ、色揚の手腕を揮ふに都合好からんと評する者あり。黑金は曾て山口縣の警部長となり、政友會を粉碎せんとして猛烈なる選擧干涉を試み、非常に惡感を抱かしめたり。今次再び知事として同縣に蒞む、往年の暴行を敢てせざるも、古き記憶は更に新しき惡感を誘起し、政爭の激甚を致すや言を俟たず。當局者の選任、其人を誤れり。寧ろ赤星を長野に移さず、黑金と更ふる勝れるに若かざりしなり。西久保の警視總監たる、伊澤の如く切れ味鮮かならずと雖も、一種茫漠の趣あるを採るべしとなす。伊澤は鋭眼隼に似たるも、常に高處大局に着眼せず、餘りに低處小局を凝視するの嫌ありき。徒らに反對派の操觚者を壓迫し、緊縛して、以て取締の得たるものと僞せるが如き。動もすれば大盜强賊を逸して、賣笑婦を狩るに意を用ゐたるが如きは、其の一例なり。西久保の茫漠、稍安樂策道に近きものあり。寧ろ其の宜しきを得て、却て好結果を奏するやも知るべからず。吾人、豈啻彼れの擊劍の達人にして、技を一巡查と鬪はすの無邪氣さあるを以て、總監の適任なりと贊する者ならんや。其の細君の色町の出なると否とは、敢て問ふ所に非ざるなり。

參政官の更迭せる、總て大臣關係に因れり。遞參[illegible]澤の內務に轉じたる、鐐士を以て名を賣りたる木下謙次郎の遞參に新任せる、納涼會の牛耳

を執りて低き鼻を嘴の如く鳴せる不平兒加藤政之助の議席に納りたる、下岡、濱口等官僚系の引退と一種の對照をなせり。木下は東京法學院の出、暫く農桑に從事せしが、學びたる法律に野心を唆られ、騷亂の間に沒頭すること能はず、再び上京して實業界に出頭せり。然れども、是れ彼れの志に非ず、明治卅五年選ばれて代議士となるや、專ら政界に奔走し、新進の鬪士を以て鳴り、且嫌はれたり。加藤は安政元年の生れ、十六歳にして村長となり、後埼玉縣學務課出仕となりて、清浦奎吾、横田國臣と共に學事に鞅掌せり。明治八年以降は官吏生活を打切りて新聞記者となり、大阪新報、報知新聞等に執筆し、兎角する間に埼玉縣會議員となり、議長に推され、二十三年歐米に遊びて其の制度文物を調査し、二十五年後は專ら代議士を業とし、豫算通の聲を贏ち得て今日に至れり其の容貌こそ藏相武富とは月鼈の差あれ、其閲歴、頭腦、識見等に於て大なる軒輊ある者に非ず。彼れに豫算編成の手腕あれば、是れに財政計畫の頭腦あり。唯官歴の學務課出仕に止まれるが故に、武富の內閣翰長まで陞れるに比して、一日の短ありとせらるゝのみ。然るに加藤が己れの地位を顧みず、獵官熱に浮かされ、武富の下に藏參たるは、決して彼れの名譽と云ふを得ず。麒麟も老いては駑馬に若かず、況んや麒麟ならざる者に於てをや。吾人は、加藤褒天の末路に對し、憐憫禁ずる能はず。(完)

外相石井新任の曉には、其の下に配置さるべき正副參政官の決定を見んも、目下缺員の儘なり。次官松井慶四郎辭職し、駐蘭公使幣原喜重郎其の後任たるべしとの說あり。幣原は三菱の女婿にして、男加藤とは義兄弟の誼あり。男石井は溫厚の灰殼にして、高明のお氣に入りなり。外交事務に長ずれども、自主的外交を試み得るの力量を有せず。男加藤に操縱され、元老に頤使され、首相大隈の大風呂敷に捲かれて、何程の手腕を揮ひ得べきや、原敬の口吻を借り來りて評すれば『國家の前途、寒心に堪へ』ざるもの無くんば非ず。刻下の外交は何人の當るとしても至難なるには相違なきも、も少し情實を離れて人物を拔擢し、外交の大方針を確立して之が遂行に任ぜば、成功必ずしも期し難きに非ざるなり。然るに現內閣は、內に財政難あり、國防難あり、外に外交難あり、到底短命なるべきを豫想するが故に、御大典を無事に了するを以て、足れりとなすに似たり。其の改造の一時の間に合せなり、參政官の人選も亦不平組鎭壓の黨略に出でたる、地方官の更迭の府縣會議員選擧に備へたるの形跡ある、多少餘興に類する者あるは蔽ふべからず。斯の如きも尙、よ

以上の憲政逆轉内閣を阻止するの功能ありと謂はざる可からざるに至りては、秋風に散る晶玉の涙に睫毛の重たさを感ずる次第なり。

秋草

黒頭巾

其一

●吾輩、七月より八月に渉り、西游して馬關に至る。月の漸く圓かならんとする時、東京を出て、故郷に、明月を賞し、月の缺けて、霄暗の頃、東に向つて還り來る。夏艸の飽くまで繁かりし時に、西國の山川を跋渉し、秋艸の漸く花を含まんとする時、西風に乘じて再び吾が書齋に、筆を載せて歸り來る。

●馬關より東、小郡に至るの間、鐵道沿線、夾竹桃の全盛を見る。此の花、多く關東に見ず。見るといへども少し。大阪及び神戸には、處々、盛開して、或は、人家に沿ふて林を爲すを見ることあり。然れども西長州の海岸に於けるが如く、高幹にして多く花を著るものを見ず。

●夾竹桃は、沙地に適するにやあらん。此の樹、尤も挿木に宜しく、枝を折つて刺せば、悉く、容易に根を生ず。二三十年前、西長州の一帶、未だ多く此の花を見ざりし。近年、頓に、其の全盛を致すを見るは、挿木の法に依るべし。紅、白の二種あり、紅花特に多く、白花は稍少し。

●小郡より西、諸驛、プラットホームに沿ひて栽ゆるもの、草花稀に、殆んど艸花を見ず、概ね夾竹桃のみなり。八月炎天、花少き時、此の花、豐滿、燦爛として驛路に煥發しつゝあり。

●西長州の諸驛の夾竹桃、小野田驛に在るものを最大とすべし。唯だ一本の大樹、其の花の多く、花彩の絢

爛たる、實に、想像の外に在り。端無く、プラットホームに立ちて、過ぎ行く汽車を目送す。車窓の硝子窓に、花彩映發し、紅輝長く搖曳す。車中に人面滿てり。而して、紅花を滿載するの車に非るやを疑はしむ。顧みれば、夾竹桃の天半に、一抔に紅花を放ちつゝあるなり。

●夾竹桃の豐滿なるものは、花を著るの盛なる、如何に全盛の櫻花と雖、遠く及ばざるを思はしむ。花數必ずしも懸隔無きやも知れず、花彩の濃艶なるに依るべし。

●此の花、白花を、稍、高尚なりとす。然れども特色は紅花に在り。此の花、此の葉、此の木、凝視しつゝあれば、何と無く、艸花の雄たるを想像せしむるもの無くんばあらず。必ずしも艸花に似たりといはず。然れども艸花の氣分あり。

●夏花、漸く盛を過ぎて、秋草尙ほ未だ絢爛の域に入らず。此の時、花の天地を占領して、秋草花の機運を啓くものは、夾竹桃ならずんばあらず。

其二

●吾輩、東京に歸るの翌日、郊外に往く。東京には草花少し。郊外には少からず。就中、百合花、長花烟草の白花など、搖曳して、夕靄に浮べるは、楚々として、人の詩情を動かす。

●百合花は、變種に富み、一種每に、花形、花彩を異にし、隨つて、自から別種の書趣を有するは、他の艸木に得易からず。「姬もあり、また鬼もあり、百合の花」の句は平凡のみ。然れども此の花、花種と書趣との變化に富める事を詠出せるものといふべし。

●百合の花、吾が國の古文學に入らず、漢詩人、また多く之を歌はず。近世の俗文學には則ち盛に詠出せらる。由來、此の花に道學的の臭味無きなり。

●吾輩、先年、箱根山中の百合の大なる白花を推稱せし事あり。百合の白花、殊に其の大なるを可とす。萩の、未だ花を著けず、青々と繁れる蔭下の、濕つたき葉花に、ポカリと大なる白百合の浮び出でたるは、限無き詩趣あり。

●吾が邦に、百合花の名所といふべきは、琉球なり。亞熱帶には四時の變化甚だしからず。然れども百合花の滿開する時を以て、暫らく秋來を報ぜしむべし。

●百合の中にても、姬百合といふもの、軟々、嫋々としつゝ、尤も白拍子の書趣を帶ぶ。炎天、白日、姬百

合に精彩無し。朝霧に、夕霧に、揺曳して浮べる時、ひとり風情を逞しくす。

◉蓋し姫百合は風情を以て勝れる花なり。遊君の美といふは、必ずしも其の容貌に非ず、風情に存するが如く、此の花、花彩、殊に美なりといふに非ず、芳香、殊に衆芳を壓するといふほどにも非ず。唯だ其の風情、姿態、群花の企及し易からざるもの無くんばあらず。

◉百合花には、すべて芳香あり。其の秀なるものに至つては、遠く群芳の上に抽く。これを庭上に放置するも、室中を馨らしむべし。百合花の、野に咲き滿てる時、天も亦た自から其の淸香に醉はされずんばあらざるべし。

◉バイブルには、多く葡萄と百合花とを描く。此の二者は、ともに秋の野を飾りつゝあり。葡萄は酒を以て、百合は香を以て、詩神を醉はしめずんば已まず。此の二者の幹莖の中に、天人を魅すべきの精華を藏するなり。

其三

◉花は背景に依つて情を生ず。「やはり野に置けれんげ草」といはずや。「道端の木槿は馬に喰はれけり」の吟ありといへども、木槿花は道端に開ける時に詩趣あり、其の一枝を折つて花瓶に挿むときは、索然として情味を失ふ。

◉吾輩始めて長花烟草を見るの時、背景、極めて情致あり。此の日、朝來、天、蒸すが如く、午後、暗雲、空に懸りて、雨ふらず。雲脚、漸く急にして、暮色を催ふし、暗雲莽蒼として往來し、覇氣を含める涼風、忙はしく吹いて、草木、皆ザワ〳〵として鳴る。此の時、芝草を環らせる花壇に近くして、靑莖の白花、自から其の節を淸くして、ひとり閑かに夕靄に浮びつゝあり。

◉長花烟草は烟草の花よりも姿態美なり。其の葉は、畫趣及ばず。若し、烟草をして官營に屬せざらしめば、秋烟草は、元來、詩材たるべし。長花烟草は、其の葉の小さくして用ふ可らざるを以て、花に、精英を集む。

◉烟草の花は、畫趣多き花なるべし。始めて烟草を發見したる者は、先づ其の葉を見る前に、恐らくは其の花を賞嘆せしならずんばあらず。

◉烟草に、種類頗る多しといへども、其の潤葉の偉大なるものは、實に、野草の壯觀を爲す。今日の官營烟草の畑に於けるが如く、整然として、烟草を植ゆるこ

と兵卒を列べしむる如くする時、其の花、其の葉、詩情少し。若し、烟草花をして、自然に放在して、山野に咲かしめば、幾多の畫趣を涵養するに足らずんばあらず。

●烟草が官營とならざりし以前、此の花、畦畔に咲き、時に、一草、二草、種子を風に送られて、思はぬところに開きし時、思はぬ畫趣を示せしなるべし。

●薩摩は烟草の國なり。串木野に冠岳ありて、山中の洞穴に、古來、自然生の烟草あり。其の播種、定めて數百年前の昔にあるべし。今、其の起源を詳にせず。其の花葉、尤も畫趣に富めりと聞く。

●秋草、人生の實用を以て目せらるゝものゝ中に、其の一草花を採りて、盆栽となして、畫趣の磅礴すべきは、秋烟草と茄子花となるべし。

其四

●花、葉、莖の色彩の、尤も鮮明にして强烈なるは茄子に若くもの無し。假令、茄子を食はざる者といへども、其の色彩美に打たれざる能はず。

●茄子の色彩美は、日本の花卉には能く比敵す可きもののあること無し。其の花は小なるも尙ほ風情あり。其の實の色彩、花、葉、莖に讓らず。花の美なるもの、必ずしも幹莖に色彩美無し。花、葉、莖悉く色彩美を煥發しつゝあるものは、唯だ茄子あるのみ。

●茄子も、秋烟草も、稻も、罌粟、秋草たるを失はず。茄子は其の色彩を以て、秋烟草は、其の濶葉及び花の畫趣を以て、而して稻は、其の熟する時、黃雲穣々として夕陽に映じ、併せて秋草の三奇觀を爲す。

●此の三者を以て、之を秋草として論ずるは、今に於て、人耳に遠きが如し。然れども吾輩は、當初、始めて此の三者を雜草の中より發見したる古人の努力を多とせざる能はず。

●神農氏は百草を嘗めて藥卉を識ると傳ふ。此の三者の發見は、恐らくは、神農氏より以後なるべし。秋來、稻田の漠々として天際に連るを望む時、人間が、幾千百の雜草を刈盡して。此の一種の草を繁茂、流行せしむるに至れる年代の悠遠なるを思ひ、又た併せて秋草に對する人間努力の興趣を味はずんばあらず。

其五

●野に於て、則ち自然に於て秋草たるものも、人間に接近すれば、夏草たるを致すもの少からず。事實に於

て、秋草は概ね夏草たらずんばあらず。

◉萩も、桔梗も、女郎花も、人の手に依つて、人の庭に栽ゑらるゝもの、夏、花咲かざるは無し。吾輩、西游して、未だ野に秋草を見ざりし時、東京には既に秋草の盛時を見たり。

◉人力の尤も發達せるは大都會なり。故に、日本の秋草、尤も早く東京に咲く。俳諧歳時記は、これを太陽曆に改むとも、なほ野外と東京と、其の歳時記を一致せしむるを得じ。

◉東京の附近は、曆時に於て、東京より一箇月を後るゝを常例とす。恰も、郊外の花が東京の花に後るゝが如し。人間も、年中行事も、すべて郊外は東京に後る。實は、自然の後るゝが故に、人事、行事の、隨つて後るゝならずんばあらず。

◉東京に節句ありて、後ちに田舍に節句あり。東京に秋草花咲きて後に、郊外に秋草花咲く。都人は秋草花を早く見て、秋來れりといふ。郊外には、炎風、尚ほ夏草を吹く。

◉七月、八月、東京に秋草花咲き滿つ。即ち八月の晩、九月の初、東京に夏草無く、秋草無し。此の時、東京の緣日、夜店に、草花の尤も寂寞たるを致す時なり。

其六

◉都會に秋草早しといふは植木屋の力なり。必ずしも植木屋の手を煩はさずとも、庭園に栽ゑたるものは、逸早く花咲く。人間栽培の力ならずんばあらず。

◉人間栽培の力、必ずしも植木屋の伎巧を勞せずして、早く秋草花咲くを致すは、究竟、肥料の力なるべし。自然に放任せらるゝの肥料は遲く、人間の手は、斷えず庭草に培ひつゝあるなり。

◉東京には、行樹の蔭、僅に半坪の地に秋草を栽ゆ。人聲、車聲、旁午、錯雜するの中に、草花咲く。秋草に若し耳覺あらしめば、自動車、電車の雜響に、詩思を攪亂されつゝあるなるべし。即ち早く花咲くとはいへども、其の花の瘠せたること、自から町の人に似たるべし。

◉都會は、人間を早熟せしめ、併せて秋草を早熟せしむ。其の天賦を完くせしむるや否やを問はず、兎も角も、其の精華を早發せしむ。

◉都會の花は早く、草は必ずしも早からず。草未だ十分に伸びざるに、花既に咲く。早く草花を見んとすれば都會に若く無し。蓬々として一杯に伸びたる秋草は、

都會に見られず。

●秋草の美は、其の花に在るは論莫し。然れども春花の秋草花に若かざるは其の葉に在り。則ち秋草の、特に、妍美を闘はすは、草葉に存するを知る。秋草美は則ち都會に存せずして野に存せずんばあらざるなり。

●春樹は、僅に、一木を栽ゆるも、萬瓦鱗次の中、春風頽蕩たるあり。秋草は、一莖、能く秋を報す。唯だ秋草の詩趣、畫趣、野に在り。自然の郊野に在り。

●秋草は、譬へば華氈を織成する毛糸の如し。一本の毛糸、妍美ならざるに非ず。然れども其の美なる所以は組成美に在り。秋草、秋花、絢爛として郊野を染め成す時、秋草美を語るべし。秋草美は則ち郊野美ならずんばあらず。

●秋草美が郊野美なるを知るの時、則ち秋草が野趣なる所以を見る。人間文明の、益、進むに隨ひ、秋草花は年々、早く都會に咲くべし。然れども其の野趣たる所以は、萬古遂に渝らざるべし。

其七

●秋草は、雜種、雜然として郊野に燎亂するをつねとす。其の單種を以て、秋郊の畫趣を爲すものは、稻、烟草、或は薄、及び秋草あるのみ。

●此の四者の中、人生に實用無きものは、唯だ薄のみ。其の餘の三者は、人間、これを培養して、秋草美を發揮せしむ。而して三者の領土は、次第に擴張せられ、薄の王國は、漸次、人力に浸蝕せられつゝあり。

●吾が日本の人文、未だ大に發達せざりし時、王朝の庭園、専ら郊外の趣味を愛して、秋草美を涵養したりしを見る。鎌倉時代に至り、禪僧の築庭法、行はれて、郊外に換ゆるに深山幽谷の趣味を以てし、多く木石を點綴して庭園を爲す。甚だしく人間に遠き、自然の興趣を愛するが如くにして、實は、作爲の間、頗る自然に遠ざかるを致す。

●吾が邦の文明の進める間、郊外の野趣は、庭園に遠ざかり、都會の人は、ます／＼自然に遠ざかりたり。今日、泰西式の公園、流行するに及びて、公園は郊外の趣味を湛へて、秋草美、再び日本人の庭園に入らんとしつゝあり。

●文明の極致は、自然の趣味と契合せざる可らず。庭園に於ける唯だ一の秋草美の變遷と雖、又た以て、日本人の文明の變遷を卜するに足らずんばあらず。

其八

●秋草といふ時は、世人、直ちに七草をいふ。吾輩は七草の一語を以て、日本の秋草美の爲に耻づべきものと爲す。秋草、秋郊若し靈あらば、七草の名を、人間に還附するなるべし。

●其の秀拔なるものを撰擇するは、固より人間の權利なり。故に、秋草に七草あるを妨げず。然れども世人、七草の名に拘泥するを致すこと既に久し。野趣を愛する者は、七草の名を捨てゝ、須らく單に、秋草と呼ぶを可とすべし。

●七草は、秋草花の可憐なるものなり。然れども秋郊の美は、必ずしも七草を問はず、秋草の色彩、雜然、郊野を染め成す時、七草は自から其の中に隱るべし。

●古來、七草と云ひ囃やしたるを見れば、日本の秋草は甚だしく貧弱なるを免れず。日本の秋郊は、眞に貧弱なりしなるべし。草花の美、人間に愛せらるゝもの、今に於て、舶來稀と認む可きもの多きには非ずや。

●吾輩、屢、郊野に遊ぶに、都會に遠ければ、遠きほど、草花の甚だ寥落たるを見る。名も知られぬ珍らしき花の咲けるも無きには非ず。然れども、草花は少く、花種も亦た少し。

●菊花も撫子も、自然生のものは、花彩、甚だ寂びし。寂びしきのみに非ず、其の領域も廣からず。若し野菊と大和撫子とを以て、秋郊を點綴するのみならしめば、日本の秋郊は絢爛たるを見ず。

●日本の秋草花は貧弱なるを妨げず。草花、貧弱なりとするも、秋風、郊野を吹き染めて、草木、悉く、色彩の爛熟するを致す時、秋郊美、炳焉として浮び出づ。秋草美は則ち秋風美なり。

●秋は、西南に宜しからず、東北に宜し。南國に往くに隨ひ、草木、黄葉して紅葉せず。楓葉の眞紅なるもの、關東に見る可く、西南に見ず。柿葉は虫ばみたらんように黄落す。紅葉は櫨葉の外、殆んど見られず。

●東北の郊野には、秋、早く來つて、秋色爛熟す。西南には秋の來ること晩く、去ること早く、郊色の爛熟するを見るを得ず。昔、備後に詩人、菅茶山、黄葉夕陽村舍を以て自から標榜し、近ごろ東京に紅葉山人あり。人事の偶然なりとするも、また以て、東西秋色の美を表現するに足らずんばあらず。

其九

◉秋郊美を以てすれば、東北は紅にして、西南は黄なり。東北に紅葉するものは、木葉のみに非ず、草葉悉く紅染す。其の尤も爛美なるは、豆蔦にして、紅の極、火光の如くに紅に輝くべし。

◉西南の野には、爛熟の紅彩無し。則ち秋草の美なる所以のもの、東北に偏せざるを得ず。西南の人、秋草を語る時、乃ち草花を標章す可く、東北の人は乃ち專ら秋草を說かずんばある可らず。

◉富士の裾野は秋草美を以て推稱すべし。富士山の花、石楠木と破魔梨とあり。麓には櫻花の薫ずるあり。然れども天女の衣を長く曳きたらんようの富士の裾野の模樣を染めなすものは、秋草美なり。

◉富士山の上には、高く、ヴェールを纏ひたらん如く、白雲つねに搖曳す。此の山、殆んど草木無く、白衣にして、色彩は唯だ裾模樣あるのみ。裾模樣といふは、秋草なり。秋草美の爛熟するに非ずんば、富士山に、藝術的の裝飾無し。

◉西南の山といふとも、山上には到處、秋草美あり。山の高きは、地の北なると同じ。西南の山上には、東北の秋郊あるなり。唯だ山腹の偉大、平扁にして、秋郊美を開展するを得ること、富士の裾野の如きを得難しとす。

◉西北の秋風は、秋草美を將來するといふは、東北の秋風、霜を隕とし、西南の秋風は霜を隕さゞればなり。霜無ければ、爛熟の秋郊美無し。草木は繁霜を得て紅化す。則ち秋風美といふは、秋霜美ならずんばあらず。

其十

◉吾輩、西遊より歸り、一日、端無く、日比谷公園を經過す。滿地の萩、伸びたき儘に伸びて、未だ花を著けず。萩の中に、アカシヤ高く風に戰よぎつゝ、近づきて見れば、アカシヤは萩の高く聳ゆるにてあらんと思ふ。少しく遠くして望めば、アカシヤの綠は濃くして、萩は薄し。

◉繁れる林の中を過ぐ。木の根には、萩亂れ伸びたり。人の來れるを知れるや、蟬聲、忽ち水の如く、吾が頭上に向つて濺ぐ。

◉此の時、吾輩は、忽然として蟬聲と秋草とを憶ふ。蓋し蟬聲は春花に於ける春雨の如し。春雨、春花を催ふす。一雨、一雨に春花開きて、春雨已むの時、花、開き盡くして漸く新綠を致す。蟬聲は、つねに秋草を招きつゝあり。一聲、々々、秋草を呼び出して、蟬聲

の盡くる時、則ち秋草爛熟して、秋霜、地に遍ねし。

◉春雨、細々、看て無きが如く、春草、其の間に長ず。春天に、遠く望む草色は、春雨に近く見る草色の如く、これを撫すれば、青々として絵具を塗れるにも似たり。離れて草あるを見ず。

◉春雨は水氣なり、蟬聲は水聲ならずんばあらず。春雨は、屋を潤うすを見ざるも、自から水分に打たる。蟬聲は水の濺ぐが如く、水を見ずして自から凉氣到る。若し森を隔てゝ、瀑布を聞く時、則ち頭上の蟬聲を想到し得べし。

◉蟬聲の盛なる時、木葉青く、秋草、漸々伸ぶ。蟬聲盡きて、木葉盡き、秋草、地上に蔓々として、秋聲、秋草に在り。秋草、盡くる時、枯色、地上を蔽いて、天に月あり、地に霜あり。

◉秋草を招くものは蟬聲にして、秋草を盗るものは霜色なり。招くものは之を長ぜしめ、熟せしむるものは之を盗るものなり。秋草美の前半は蟬聲に、後半は霜色に在り。

◉春花の情を爲すものは月、春の夜の月は霞みて朧ろに、其の光の徹底せざるところに情味あり。月光の徹底するものは秋月、而して秋月、秋草の景を爲す。月色は寒からざれば徹底せず。月色、徹底する時、秋草の野を照らして畫を爲す。春月には詩あれども、畫少し。秋月には詩あり、畫あり。

◉秋の月光を徹底せしむるものは霜威なり。月色、霜に依つて寒し。霜、隕つるの後、月と草と、徹底したる畫趣を爲す。秋の畫は、則ち霜の畫ならずんばあらず。

◉朦朧たるものを彩るものは春の花なり。徹底したるものを彩るものは秋の草なり。朦朧と徹底とは、ひとり月に依つて象徴せらる。秋草の爛熟して、枯落して、徹底せる荒凉の天地を描き出すは、秋草の天分ならずんばあらざるべし。

其十一

◉秋を寂寞たりといふ、吾輩は信ぜず。秋は寂寞たらず。春は絢爛たり。秋は絢爛といふよりも爛熟の時ならずんばあらず。

◉爛熟の秋は色彩美に表現せらる。秋の色彩は草木、殊に秋草に在り。春は、絢爛といふも花ばかりに在り。秋は、花も、葉も、すべて絢爛の境に入る。渾身、絢爛たるは、則ち爛熟を示すなり。

◉春の味は、譬へば新鮮の魚肉の如きものあり。秋の味は、チーズの妙境の如く、納豆の佳境の如し。爛熟は流れて腐爛となる。其の境、薄紙一枚を入るゝを許さず。爛熟極まつて腐爛の氣を帶びざるの刹那に、爛熟美あり。爛熟の秋の、極めて美なる刹那は、また極めて際どきものならずんばあらず。

◉紅楓の佳境、日々に熟して、絕妙、言ふ可らざるの刹那に危機あり。一夜、嵐して、翌朝、寒雨の過ぐるを認むるのみ。紅葉、悉く地に貼して、枝上に紅葉無く、寒林、遠空を透見せしむ。

◉秋草の爛熟美は、紅楓の如くに際どからず。然れども色彩の錯綜、照射、煥發するの刹那は、又た長しとはせず。危機も亦た自から之に伴ふ。秋風、秋霜一過して、葉々、枯落して、莖を露はし、毛の剝脫せる華氈に似たるを致す。

◉秋初は爛熟足らず。爛熟足らざる間は、未熟の果實の如く、酸味多くして情味無し。中秋は、漸く爛熟に入らんとす。果實、始めて食ふ可きの刹那にして、食指動く、未だ吾が頤を奪ふに足らず。秋晩、秋草の爛熟する時、譬へば熟柹の極めて美なる一刹那の如し。

◉色彩の秋の爛熟美は、則ち一年、風氣の爛熟せるを示す。一年は人の一生の如く、自から絢爛、爛熟の詩境あり。絢爛の期も、必ずしも長からず。爛熟の期は尤も短し。絢爛は過ぐるも、尙ほ爛熟に到るの中程に在り。爛熟を過ぐれば則ち一生を畢る。

◉絢爛を以て一生の精華となすは未だ足らず。絢爛といふは、實は、爛熟に到るの豫備期たらずんばあらず。故に、人生の精華は中年に在り。一年の精華は、爛熟の秋に在り。

◉酒を飲んで微醉に到る。微醉の佳境甚だ言ひ易からず。然れども未だ醉境に入らず。少しく慊らざるの味、筆舌の外に在り。此の時、譬へば春の味なるべし。漸く醉境に入る。未だ大醉に至らず、玉山頹れず、管を卷くには程遠し。而して酒氣、四肢に徹底し、渾身、醉境に入つて、興趣、滿開の花の如く、彩華、煥發して、一糸亂れず。此の時、爛熟の秋の至境なる可し。

◉春は、年華、花に發するのみ。醉心の、顏面に發するばかりの時の如し。醉心、四肢に透徹して、陶然たり。而して頹蕩に向ひつゝ、未だ頹蕩に入らざるの時、則ち爛熟の秋なり。爛熟の秋は秋草に依つて表現せらる。

其十二

●爛熟の秋草を代表するものは葉鷄頭ならずんばあらず。鷄頭花は葉鷄頭の威興饒きに若かず。

●秋の妙境、花よりも葉に在り。葉の爛熟は、秋の爛熟なり。而して葉鷄頭は、秋の氣分を、其の一身に、象徴するを天職として、此の世に出づ。日本の秋を象徴すべき一草を求めば則ち此の草なり。

●葉鷄頭は、其の葉に花彩あり。花彩を花に現はさず、葉に現はすは、爛熟の秋草を表現する所以。天意、葉鷄頭を以て、秋の日本を飾るものに非ずや。

●七部集の連句に、『赤鷄頭を庭の正面』甚だ人口に膾炙す。此の句、佳ならざるに非ず、而して句意、未だ鷄頭の天分を輕視するもののあるを免れず。古人、或は、草花に同情するの、未だ足らざるなり。

●俳人、此の句を解していふ。下戸の月見客、顔の眞紅に醉へるに對して、諸君、猿の尻に鷄頭なり。酒は吾等飲んで見すべし、諸君、隨意に、安い下物を參れよと、庭の鷄頭花を指して、肴荒しの下戸客を笑ふの意なりといふ。

●此の句意、果して、此の說の如くなるやも知れず。然れども鷄頭花は葉鷄頭に若かざるも、肴荒しの下戸客に對照す可きに非ず。秋の醉境、尤も醉の佳境に入れるものは、鷄頭なり。鷄頭は下戸客に非ず。面、紅を呈して、醉、爛熟の妙境に在り、精彩まさに煥發しつゝあるの上戸醉人ならずんばあらず。

其十三

●春花と秋草とを、女に譬へて見る。此の頃の新聞に、女の髮結は、秋に島田多しといへり。秋の寂寞たらず、絢爛、爛熟の境に在るを見るべし。

●或は謂ふ、常磐樹は女房の如く、春花、娘の如く、而して秋草は則ち歌妓の如し。また以て一面の觀察たるを失はず。

●若し女の生涯を以て對照せば、春花は妙齡にして、秋草は則ち年增の氣分なるべし。女の精華は年增に在り。年增を出ること一步なれば、爛熟より枯淡に入る。爛熟を以て全盛の最高頂に在りとすれば、爛熟の彼岸は絕壁千仭、一轉して、急に、老境に落つ。

●妙齡は、爛熟の阪を登るが如し。一步々々ごとに、絢爛は加はりて爛熟に近づく。始めて絢爛を示す時、絢爛は甚だ鮮やかなり。絢熟濃くなるの時、或は、絢

爛去るかと疑はる。實は、絢爛の爛熟となりつゝあるなり。

◉春花の絢爛たるは、含羞の氣分あり。殊に、半開の花、處女の嬌態を帶ぶ。秋草の爛熟せるは、含羞の氣無く、嬌艶の氣、發露し、柔媚の痴態、横溢す。

◉娘の春花は、女らしからんとする時なるべし。年增の秋草は、色彩、姿態、そのもの悉く女の極致を表現す。女の美は、爛熳として隱くるゝところあるを見ず。

◉草、悉く秋に逢はざるは無し。殊に、秋草の美なるあり。春草も秋に生くれば、秋風に吹かれざるはあらず。秋風に吹かるゝの草、悉く黃葉、紅葉す。楓樹は紅葉するものなるも、時に、紅葉せざるものあり。楓樹の紅葉せざるは、人情を解せざるの女の如くなるべし。

◉春花には鳴禽あり。鳴禽は花上に來り、花間に來れども、花中に鳴禽を藏せず。禽自から歌ひ、花、靜かに笑ふのみ。少女の多く語らずして、人をして代つて言はしむるに似たるなるべし。

◉秋草には啼蟲を藏す。松蟲、鈴蟲、其の餘の啼蟲、悉く草間に在り。蟲の啼く時、草の語るが如く、其の聲、澄みて、忸怩たらず、嬌羞を含んで躊躇するが如くならず。秋草は、美しき年增女の、臆面無く、嬌語するが如くならずんばあらず。

吾猳、西遊して都門に歸り來る。往來、約三旬に近し。門に入れば、去月、なほ半坪に滿たざりし南瓜の蔓の、蓬々として牆にひろがり、巨葉、巨花を擁して、秋天に跋扈しつゝあり。南瓜、一幹、直ちに、都門の書齋をして野趣に滿たしむ。此の草、秋初の草の王とはいはず。會長たらずんばあらざるべし。八月十八日夜、黑頭巾再記、

島村先生と舞臺監督

松井すま子

今の私が島村先生を批評しようとすると、何から言つたらいゝか分らない程其材料が胸に浮びます、そし

てすぐにも出來さうに思ひますけれどよく／＼考へると大變な難問題だと思ひます、何故なれば斯うして一緒に仕事をして居ますと其方面からの人情も出て來ますし、いろんな感情から我まゝもつい出やすくて、とても冷靜な見方はむづかしいと思ひます、また出來たとしても夫を公平に聞いてくれる人は少ないと思ひます、何うにかしたはづみで境遇に變事が有つて、先生は甲の道を行き私は乙の道を行くと言つた樣、まるつきりかけはなれた生活をする樣になつて少くとも五六年以上もたつたのちでなければ、公平な批評も、また公平な批評として聞いて貰ふ事も出來まいと思ひます、ですから今はたゞほんの一ッ二ッを、先生の舞臺監督ぶりでも書いて見ようと思ひます。

舞臺監督の行き方と言ふものは大體二つに別れるのでせう。一方は飽くまでも監督者自身を主とし自分の考へで細かい所まで形を決めて行くのと、一方は成たけ監督される俳優の方を主として監督者はたゞ、夫を守り育てる役、脱線防止者といふ位の態度でゐるのとです、つまり一方はすつかり監督者のスタイルになり、一方は成たけ役者自身のスタイルを保存しようとするのです、けれど幾ら監督者が自分のスタイルにすると言つても、もとが他人の藝術をなほすのですから、何所かに其他人の個性が痕を殘し、また幾ら俳優の個性を保存すると言つても、夫をなほす以上は監督者のスタイルのまじるのは仕方が有りません、其はつきりした境めは到底分らないものでせうけれど、たゞ大體の氣分が今申した樣に二ッに分れると思ひます、そしてどちらも一得一失だらうと思ひます。

夫から今一つ、舞臺監督は藝術家であるかないかと言ふ議論をよく聞きます、之は俳優が藝術家であるかないかと言ふのと或點で似た議論だと思ひます、俳優は他人の創作した脚本をたゞ舞臺の上で復習するだけだからほんとうの藝術家ではないと言ふ說が有りますが、夫は間違ひだらうと思ひます、私たちが實際舞臺に立つ心持から言つても、脚本はたゞ私たちが舞臺の上でする事の材料にしかなりません、夫は順序として

は脚本を與へられて夫を暗誦するとからはじめますけれど、夫はちやうど創作家が實際の世間の出來事や話から筋のヒントを得るのと似たもので、たゞ一層多く細かに筋が豫定せられてあると言ふに過ぎません、ですから一度脚本が其作者の手から離れると、一段々々夫が俳優自身のものになつて、脚本の事なんか忘れて了ひます、知識や思想の上のヒントこそ原作をもとにしますけれど、夫を包んで、夫をこまかにとぢ合はす感情はとても〳〵一々原作の脚本から敎へられて其通りをくり返へすなんて譯に行くものでは有りません、つまり俳優自身の身から燃え出る熱で夫を自由自在に創作しなければだめなのです、こゝが俳優の藝術に創作性のある處だと思ひます。

舞臺監督も、はじめ之から演出しようとする脚本を讀んで其各場々々の光景を想像の中にゑがくとき、夫がいき〳〵した光景になればなる程其人の情熱力即ち創作性が加はつたので、其人自身の藝術です、脚本はたゞ夫にヒントを與へるに過ぎません。

もつとも此點だけでは舞臺監督はたゞの藝術鑑賞家とちがひがございません、ほんとうの鑑賞家と作家とはどちらも藝術の創作者だと言ふ說がほんとうでございます、此意味から舞臺監督はまづほんとうの脚本鑑賞家として、普通の讀者以上に想像の中で創作をする藝術家でなくてはなりません、けれども舞臺監督は此上に更に今一重藝術家になつて創作をする機會を持ちます、夫は脚本の場合と同じ樣に、俳優が舞臺の上で其脚本を具體させ、俳優自身のものにして演出する場合に夫を傍から見て行きながら、やつぱり普通の見物以上に其舞臺面をいき〳〵と自分の想像の中に創作して、夫で其俳優のして居るのを批評して行かなくてはなりません。

こんな風で舞臺監督には脚本作者を基にして自分の藝術を作る時と、俳優を基にして自分の藝術を作るときと二ツの場合がございます、けれど斯言つても、其ために脚本家や、俳優の威嚴を損するわけはないと思ひます、ちやうど詩人が自然の景色や世間の出來事か

らヒントを得て詩を作つたとしても、其詩が藝術であるとともに、夫だけのヒントを與へる自然の景色や出來事の藝術的な力の威厳はます／＼發揮されるばかりで少しも減じないのと同じ事でせうと思ひます。

　そこで舞臺監督にこの二重の創作性が有る場合に、前の方を主として稽古舞臺に臨む人と、後の方を主として稽古舞臺に臨む人と、二通りございます、前の方を主として臨む人は、初めからびし／＼と俳優の藝をなほして行きますし、後の方を主として臨む人はまづじつと俳優のするまゝを一くぎりなり、一場なり見てゐて、俳優から受ける全體の印象をまとめた上で、ゆつくりと其足らない處を補つて行きます、さつき申した自分を主とする監督と俳優を主とする監督といふのも、つまり此區別でございます、で俳優と舞臺監督とが藝術に對する了解力が非常に違つてゐる場合には前の方がよいし、夫が接近して來ると、後の方がどうしても監督者の批評力が復雜になつて來るだけ、間違ひがなからうと思ひます。

大變何んですか理窟を申した樣でございますが、之はずつと以前に何所かで聞いたお講義を其まゝ實地に應用して見たのでございます、そして島村先生の監督は此後の方に近いと申されませう。

　先生がはじめて舞臺監督をなすつたのは、文藝協會の「人形の家」の試演でした、其頃の先生と今の先生とは大分監督ぶりが違つて來られた樣です、其頃は役の精神や脚本の意味を吹き込むといふ事ばかりに重きを置かれて、動きの方などは決して御自分では手をつけられませんでしたから、先生に見て頂く稽古は十二時から一時頃までゞ、先生が歸られると土肥、東儀の兩先生は、おひるやすみをなさる、其間に私とリンデン役の廣田はま子さんと二人の場をくり返し／＼して少しづゝ自分で工夫をする、そして翌日先生の見えるのを待ちかねて眞先にそこを見て頂いて、善いとか惡いとか批評を伺つた上で本稽古にかゝる、はま子さんとの場のみでなく他の男優の方々との場も同じで、殊に森英次郎さんのランクとの掛合などは森さんの方でも

必死に工夫するし、私の方でも工風してやりましたが、たゞ土肥東儀さんとの掛合の場は、先方が先生樣でしただけに、私は初めの內は、お二人の動きにつれて動くやうに敎へられ其通りを守つて居ました、けれどだん／＼そうして居る內に役柄が役柄だけに、夫では自分に滿足が出來なくなつて、心の中でいろ／＼工風して見る、そして其工夫にシッカリした目あてがついて來るとつい本稽古の時何うか言ふはづみでか夫をやつて了つてあとになつて『君の其名工風もい〻だらうが』なんて皮肉られてまつかになつたりする事が度々有る、けれど島村先生はそんなのを平氣に聞ながしてどし／＼い〻方の動きに決めてしまゐなさると言つた風でした。

之が坪內先生ですと一から十まですつかり動きをつけて下すつて、私たちは只夫に支配されて其敎へられた通りにうごく練習をやります、夫に全力をあげてやります、そして敎へられた動きに五分の差が有つても許されず何十回となくくり返される、初心の者には是非斯言ふ坪內先生の法式でなくてはなるまいと思ひます、斯う言ふ樣に育てられて、一通り動きと言ふ事に會得が行つた上で夫から島村先生の樣に先役の精神だけを吹き込んで置いて立稽古の方は當人たち自由に工風させ動きをつけさせてあらけづりながら全體を完成させて、夫から個所々々をなほすなりヒントを與へると言つた樣な監督法によるものが最も理想的だと思ひます、其點に於ては私たちは最も幸福に育てられたものと思ひます。

夫から私は松居先生にもお世話になりましたが、松居先生の監督はまた違ひます、松居先生は生徒の內見試演でも有るとみんな生徒は舞臺に經驗がないのですから夫は／＼苦心なさいます、そしてやはりはじからこまかく動きをつけて、そして其通り動けないものにはデルサルト式の表情法などを諄々と說き聞かせて夫は熱心に指導なさる、そして動には特別苦心なすつて每日工風をしなほし／＼して入らつしやる、ですから何うかすると何時まで立つても動きが決まらない、甚しくなると舞臺稽古になつてからもまだ形が變る樣な事が有つてよく生徒がまご／＼して居る事が有ります、つまり動きに非常に苦心をなさるのです、夫からまた舞臺監督をなさる時の樣子がまるで違ひます、松居先生は西洋式に稽古をして居る舞臺フートライトの中央に椅子を置かれて臺本を片手に見ながら世話をな

さる、島村先生は見物席の中央へ椅子と小テーブルとを持ち出して其上に臺帳と鉛筆手帳とををき、チット舞臺を見つめて居られては氣に入らぬ個所々々を手早く手帳へかきつける、坪内先生は、はじめは見物席の中央にブラリ／＼して入らして、もうほゞ完成しかゝつてるものでも見て居られないと言ふ様に舞臺へかけ上つて入らつしやる。そして舞臺と見物席との間を何回となくゆききなさる、また中村先生は片手に臺本片手の指に卷煙草をはさんだまゝ、舞臺を見る様な見ない様な態度で、夫でよく急所々々を見て入られます。

斯う言ふ様に權威ある監督法にも二様あつて、坪内どちらを選ぶかとしたら兩方とも一得一失で島村先生の様ななさり方だと個性を發揮させる點は充分ですけれど、其監督を受ける人によつては何うかすると引しまらない嫌ひが有ると思ひます、また坪内先生の様な法式ですと引しまる事は申分なしでせうけれど俳優の個性を發揮させる機會が少なくなるかも知れません、私なども自分の性格なら、新入の女優などの藝を監督する場合に、どちらと言へば、片はしからどし／＼直して行かなければ氣のすまない方で、あんまり夫をやりすぎては島村先生に叱られる事もございますが、夫もつまり藝のためだと自分では信じて居ります、其代り一度私が稽古舞臺に立てば、皆が引しまつて、咳一つしない位の嚴肅な氣持で稽古してくれます、夫を島村先生なり中村先生なりが全體の上から寛嚴よろしきを得ると言ふ工合に統一して下さるので藝術座の稽古舞臺だけはだらけた不眞面目なものでなくなつてどなたに見て頂ても恥かしくないと思つて居ます。

近頃の島村先生は段々新入のいろはから習ふ學生が多くなつたため、前と違つて、自身でも動きをつけ、隨分活潑にやられる場合も多い様ですがつまりはさつき申した様なのが島村先生の監督ぶりでございます。

また島村先生はあゝいふ口數の少ない方ですから、其作の上にも夫が出て來ます、一體多くの脚本は其作者の風で口數の多いおしやべりなのと、無口なのと二種ある様です、一方は口で多く言ひ一方は腹で多く考へる、夫が脚本の上にもまた時としては監督の演出法の上にも見えて來ます。

之は批評ではございませんたゞ見たまゝを書いたのでございます。

歐洲講和會議の際帝國の代表者とすべき人物

▽時の現任外相と本野男

某外交官

何時かは開かるべき這回戰爭の講和會議に、我が國から何人を列席せしめるかといふことは、非常に重大な問題である。學問も識見も共に備つた人でなければならないのは言ふまでもないが、人物といふこと許りでもいけない。いかに人物が好くツても、外國語が出來ないやうではお話しにならないし、假令外國語が話せても、なまじつかな力では思ふことを十分に言ひ表はすことが出來ない。殊に外交談判となると種々面倒な事情があつて、驅引や辭令といふやうなものも必要で、友人同志が話し合つてるやうな譯けにはゆかないから、頭の中で日本語を更らに外國語に飜譯してるといふやうな程度の智識では到底も覺束ない。それに日本人同志でも初めて演說をするといふやうな場合には、何が何だか解らないのが普通で、役者が舞臺に立つても見物席の顏が見別けられるやうになるまでには相當の場數を踏まなければならぬと同じやうに、外交談判などには殊にこの場馴れるといふことが必要である。平常は能く喋舌る人でもまさかの場合には口の利けない人もあるし、何うしても經驗のある

場馴れた人でなくてはならない。

扨てそれならば如何なる人物が一番適當であるかと言ふと、私は當然其時に現任の外務大臣が第一全權委員として行くのが最も當を得たものと思ふ。維納會議でも巴里會議でも又伯林會議でも大國の第一全權委員は皆外務大臣自身である。講和會議が何の國で開かれるかは無論まだ解らないが、假令何處で開かれるにしてもその用ゐられる言葉は從來の例に依れば必ず佛蘭西語であらうと思ふから、英語が能く出來ても、佛蘭西語の出來ない人は困るといふことになる。そこで第二全權委員としては、佛蘭西語の上手な、經驗もある本野駐露大使が最も適任者であらうと思ふ。

▽候補者月旦

石川半山

歐洲の講和會議へ帝國の代表者として出すべき人物は誰れで有らうかと云ふ質問は、之に答ふるの前、今の情態を以て、果して歐洲の講和會議へ日本から代表者を出し得るや否やが疑問だと言ひたい、我輩が曩に同志と共に歐洲出兵論を唱道した理由の一には、歐洲の講和會議に日本の發言權を得る事も有つたのだ、歐洲の戰爭に參加せざる日本が、歐洲の講和會議へ代表者を出す様になるや否やは疑問で有る、得手勝手なる白人共が、日本を優待しない事が、是迄の通例になつて居る、若し本年中に歐洲で講和會議が開かれる様になつたなら、日本は多分代表者を出さない方になりはしまいかと想はれる、先方で加へない者を、日本が要求して出かけると云ふのも、餘り器量の良い話ではない、然かし加へられない場合には、政府としては極力參加の運動もせずには居られまい、最初から歐洲列擧の相談を受けるのと、運動して漸く參加することの出來る場合とは、同じ全權大使でも其の持て方が違ふが、ソコはドンな事になる者だらうか、其の場合に依て自ら人選も違ふことだから、一概には言へないが、先づ歐洲の講和會議が近い内に開かれ、日本も其の仲間に參加するとして、さて誰れを大使にして良い者か、人間は六千萬人も居るが、人物は至て少ない日本の事だ、萬目の見る所で適任者と云ふのは誰れで有らうか、實を言へば我輩にも能く分らない。

大隈伯は第一候補

若し今日大使を選任する事になれば、大隈伯は責任者として免かれない所だ。

大隈伯は洋行したことが無いから、此の講和會議へ出席する爲めに、大使としての洋行も面白からう、伯をして一世一代の大活動を試みしむるのも良いかも知れぬ、李鴻章が露都へ出かけた以上に持てるに違ひない、又伯ならば伯林會議に於けるビーコンスフキルド以上の意氣を發揮するに違ひない。

加藤男は第二候補

全權大使は大槪二名だから、大隈伯が出かけるとしたら、必ず加藤高明男が一所に往かなければならぬ、先づ大隈、加藤で押し出せば、日本が現に有する最良の大使だらうと我輩は考へる、然かし大隈伯が出かけぬとなれば、加藤男を正使とするが宜しい。

外交にかけては何と言ても、今の所は彼れに及ぶ者は一人もない、其の世界の大勢に通じ、識見の雄大にして頭腦の明透なること、當代に其の比を見ない。

彼れが餘りに英國に傾くことを非難する者が有るが、日英同盟の存する間、之れは止むを得ないことだ、其の外彼れの外交に對して、種々の非難も有るが、日本の國力を考へずして、無茶な要求をするのは無理だ、外交は國力以上に飛び上がり得る者ではない、外交官は手品師ではないからソンなに國民の空想の如く甘まい事をなし得る者ではない、先づ加藤男の如きは帝國の外交を任かして置て、危な氣のない一人で有る。

林男と伊集院氏

其外に大使として選任すべき人物は、林權助男と伊集院彦吉氏で有らう、共に腹が有て良い人物だ、國家の大事に任すべき資格の有る人だ。

山座圓次郎君が生きて居たら、必ず候補者の一人に數へらるべき人だが、之れは言ふても仕方がない。

西園寺侯と原氏

若しも大隈、加藤兩氏が選任されない事情が有つたなら、西園寺侯を正使として原敬氏を副使にしても良からう、此の兩氏は共に外交上の經驗を有し、世界の大勢にも通じ、日本の代表者として立派な者だ、加藤男の英語は、日本人には珍らしいほど達者で有るが、西園寺侯の佛語は之に比して遜色はない。

特に西園寺侯の胸中に一點の曇りのない所は、日本の寶で有る、侯の心は尊皇愛國の外、一點の私心がないから、侯を大使にしたら其のベストを盡して、國家の爲めに偉大なる貢献がある事と思ふ、而して原氏の機略を以て侯の補佐としたら、是れ亦我等が此の大事を托するに足ると想はれる。

突飛なる考按

然かし此の如き大事件の時には、少しく突飛なる考按を出すのも良いかも知れぬ、二一天作の五と算盤の通りの常識で往くよりも、少し飛び離れた二一天作の七とか八とかで考へる方が良いかも知れぬ。

ソコで其の見地から言へば、大石正巳氏を正使として早川鐵治氏を副使とするなども面白い。

此の大石、早川兩氏を大使にして、歐洲へ出したなら恐らくは列國の大使を驚歎せしむる程、吹いて吹いて吹き捲くる事で有らう、現に歐洲

あたりに駐剳して居る専門の外交官を大使にして、會議に日本の代表者が來て居たかドウか分らない様な結果になるよりも、講和會議の大使として日本から「大法螺吹き」が來たと云ふ印象を殘すだけでも宜しい。

それから他の一案は三浦梧樓子あたりを引出すのも良からう、日本の全權大使が何か獨逸に障る事が有て、拳固を揮て英國大使の横ズッ頬をなぐッたなどの珍事が出來するかも知れぬが、それでも兎に角講和會議の記録には殘ることだ。

犬養毅、頭山滿の兩氏を大使にして、眼附きの凄い所を陳列して、列國大使を恐怖せしむる事も亦確かに一案である。

山縣公を大使にしては如何との説も有るが、之れは斷じて反對せざるを得ない、又公は決して之を承諾されないで有らう、曾て露都へ往て、日露協商をやられたことも有るから、公は必ずしもサアベル一方の人ではないが、然かし公ではドウしても派手なことに往かない、外交官は少しく花やかな所の有る人が欲しい。

寺内伯は如何

先づ政府の役人が協議して、平凡な人選をする事になれば、都筑馨六、本野一郎、珍田捨巳、井上勝之助と云ふ面々の所で、之を選任する事になるで有らうが、それよりも寧ろ陸海軍人の中から、外交の分かる人を選任するも良いかも知れぬ、止むを得ずんば寺内正毅伯などはドンな者だらう、或は却て大に良いかも知れぬと思ふ。

然かし巴里會議に於けるカヴールだけの働らきをなし得る人を得ることは、到底期待することは出來ない、それは日本がサルヂニアの如く、兵力を以て歐洲の戰爭を助けて居ないから、ドンなエラい人が出かけた所が、發言の威力が無いからだ、例せば我輩にした所がコンな役割は御免蒙る、伊藤公が日露講和會議の大使を辭退して、受けざりし如く、目先きの見える男はコンな割の惡るい役は引き受けまい、ドウセ國民に喝采される様な成功の土産を持て歸へる事が出來ない役割なら、俐巧な男は先づ引受けることは有るまい。

▽唯一の適任者加藤高明男

茅原華山

『何人を將さに來らんとする平和會議に簡派せん乎』といふ問題の提出されたのに對して、私は日本國民當面の問題は何人を平和會議に簡派するのではなく、何人をして乾坤を再整頓するが爲めに旋乾轉坤の手腕を揮はしめん乎、何人をしての意味に於て日本の時局を收拾して、明治の總勘定を爲さしめ、大正の新世帶を開き、併せて平和會議に於ける第十九世紀の總勘定に順應せしめ、以て日本國民の世界に於ける新なる位地を確定すべき乎といふのである。

私は決して東方朔を氣取るのでもなければ「自我狂(イゴーメニヤ)」に罹ったのでもな

いが、深山大澤、二顧するに足るべき隱れた人物あらば、いざ知らず、見渡す限りこの私の外にはないと思ふ、少くとも私がこの任に堪ゆる一人であると信ずる。

平和會議に簡派すべき人物といつてもさうである、歐洲戰爭に對して博大透徹せる識見を立て得なかつたものは、決して平和會議に於ける全權大臣たるべき資格はない、そして果して何人が豫じめ『歐洲戰爭に對して大局が如何に推移すべきかに對して博大透徹せる識見を立て得』たであらう乎、蓋し之あらん、私は未だ之を知ることが可能ない、去れば平和會議に簡派すべき資格ある人物としても、やはりこの私より外はあるまいと思ふ。

平和會議が開かるゝとすれば、其場處は恐らく平和宮殿のある和蘭の海牙であらう、然しながら我々は先づ平和會議は果して如何なる形式で開かるゝであらう乎、伯林會議のやうな意味で開かるゝ乎何ら乎といふことは一應考へて見ねばならない。

伯林會議のやうな意味といふは、縱ひ前以て列國の間に打合せあり諒解ありとはいへ、列國間の重大問題が此會議に依り一決定されるといふことである、私の懼るゝ所は縱し平和會議が開かるゝとしても、それは或は形式的の會議でありはしまいかといふことである。

表面上、聯合諸國は單獨講和セパレート、ピースは遣らないことに取極められてゐる、單獨講和を遣らなければ、此に堂々たる平和會議、第二の伯林會議が開かるゝ譯であるが、私の觀察を以てすれば、或は堂々たる平和會議の開かるゝは、唯聯合軍が勝つた場合であつて、獨逸が勝つた場合には單獨講和に終りはしないかといふことに爲るが、果して如何。

歐洲の國際史を繰返すまでもなく、歐洲の戰爭が聯合に始つて單獨講和に終つた例は珍らしくはない、現在は獨露が單獨講和をするか否やといふことが問題に爲つてゐるが、假りに此問題を獨英の問題として考へる、若し獨逸が全力を露西亞に擧げて用ひたるに反して、之を英國に用ひたりとせよ、英國をダンカルクからカレーからブーロンヌから驅逐した、大陸から驅逐して、そして其飛行機と其潜航艇と其巨砲と其高海艦隊との力を藉りて英國に侵入したりとせよ、英國は歐洲戰爭に於て最も八釜しく條約のことをいふが、英國は『背信のアルバイヨン』と言はれた位で、餘りに條約を固執する國柄ではない、英國が獨逸に攻められて斯かる窮地に陷つたとして、果して條約を固執して、倫敦が敵に占領されたならば、都を蘇格蘭に移しても、獨逸と講和を爲さぬであらう乎、私は英國は此際卒先して條約を『一片の紙屑』(スクラップ、オヴ、ペーパー)と爲すものであることを信ずる、英國に在つては、佛露は賴むに足らずと言つてゐる、佛國に在つては英露は賴むに足らすと言つてゐる、露國に在つては佛英は賴むに足らずと言つてゐる、露軍は固よりブレストリトウスクの第二線を守れない、そして若し此れが事實と爲つて現はれ、私が中央公論の新年號に於て明言した如く、露軍にして退いてスモーレンスクの一線を守らねばならぬことに爲れば、彼得其羅土の帝都は此線外に暴露されるから、或

は曾て佛國、都を巴里からボルドウに移した如く、ツアル蒙塵、都を莫斯科に移さねばならなくなるかも知れない、露國の窮狀は蓋し我々の推測以上に在る、日露戰爭に於て露國の大を以てして一年八箇月にしてルーズヴエルトの平和の召集に應ぜねばならなくなつた、露國にして若し戰を繼續したならば無論露國に敗を轉じて勝と爲し、日本を滿洲より掃蕩することが可能たであらうが、龍の疲れたる時は虎も亦苦しむ時、日本も既に全力を擧げ盡したが、露國も亦戰を戢めねばならぬ刹那に逼つてゐた、日露戰爭以後、ツアルの言葉を藉らば、七年有半の辛抱で、露國は消極的には軍事上財政上其創痍から恢復したであらうが、積極的に攻勢を取つて進むの用意のなかつたのは既に明かである、而も這回の大敗は其數に於ても其質に於ても固より日露戰爭とは比較に爲らぬ程の大敗である、最近の報導に依れば露兵の戰死者は百二十萬だといふ、私が米國の或友人から得た報導に依れば露兵の損害は四百萬を超過してゐるといふ、戰死者が百二十萬とすれば、其總損害が四百萬を超過するといふは、決して誇張ではない。

私は露國が容易に條約を『一片の紙屑』にするものではないことを信ずるものであるが、若し露國にして『條約を守らん乎、死なざるを得ない、生きんとすれば、條約を破らざるを得ない』といふ羽目に陷たならば、露國は總ての他の國家の如くに其生活權を主張して、獨逸と單獨講和の擧に出ないとも限るまい、國家は條約より重しといふことは、唯此際に於て公言し得るのである、日露戰爭に幾倍する大敗を爲して、而も露國は果して幾年を支へ得るであらう乎。

況して近ごろ英人の親しく英佛兩軍の塹濠を見舞うたものゝ言ふ所を聞くも、英人さへ英軍に絕望してゐるやうである、個人として英兵の精神は毫も獨兵に劣らないとするも、兵數が足らない、訓練が足らない、武器が劣等であるが上に供給が十分ではない、佛軍は既に力が盡きてゐる、既に全力を擧げたから、此上力の出しやうがない、英人パース氏は『徵兵制度』でなければ到底局面を一轉することは可能ないと明言して居る、所が英國では今尙徵兵制度の可否を論じてゐる、ルビコンを渡つてから徵兵制度の可否でもあるまい、其上徵兵制度は大英帝國存亡の秋に於ても容易に採用されさうでないとすれば、露西亞は何の賴む所あつてか戰爭の繼續すべき。

私は露獨の單獨講話は決して有得べからざることであると斷言するの勇氣がないのみならず、ヴエリー、ライクリーと言はざるを得ない。

墺國は今一度塞耳比亞を攻めて、既に國を擧げて一大病院となり一大墳墓と爲つた塞耳比亞をして和を請はしめんとすといふが、若し墺塞が相和すれば歐洲戰爭を惹起した表面の原因が取除かるゝ譯なれば、歐洲の人心が徐々平和に傾くは言ふまでもないが、巴爾幹の事は小問題錯綜して今一々論ずるの暇はないから、之を略すとして、聯合軍は容易にコンスタンチノープルを陷落するの見込かないとすれば、平和は先づ戰爭東方の舞臺即ちヴイスチユラ河上より明け初めはせぬかと言ふも不可はあるまい。

縱し平和がヴイスチユラ河から明け初めないとするも、獨逸が讐國に對する態度を攻勢より守勢に轉じ、二百萬の兵を佛國及びフランダーの方面に送り、英國を大陸から驅逐すれば、前記の如くに、英國が先づ和を獨逸に求めぬとも限らない。

願ふに獨逸にして勝てば、私の見る所では、單獨講和は獨逸が其利益とする所であるから、無論個々に平和條件を取極めるであらう。

事此に至らば縱ひ平和會議の開かるゝあるも、そは到底表面の平和會議に過ぎないから、此場合の最適役は高遠の理想の權化伯大隈重信を簡派するのが、最も妙であらう、日本が世界に孤立しながらも、歐洲に於て大衆觀說を吹立させるも、面白いではないか。

然しながら單獨講和となれば、日本は既に獨逸と講和したる國、例へば聯國に於て、兩國の使臣が會商談判することゝ爲らうと思ふ、英國が獨逸から取つた海外の領土を獨逸に返へすといふやうな場合、日本の使臣は南洋の諸島、膠州灣及び一億の戰費を何うする積りであらう乎。

若し私のこの意見が中らないで、勝敗孰れに在るにも拘らず、平和會議が開かれ、其處で兎も角樽俎折衝することゝなり、日本は固より此平和會議に於て唯一局面の問題にのみ容喙するの權限を與へらるゝに過ぎないとするも、全權使臣を簡派せねばならぬことになれば、恐らくは何人も進んで此任に膺るものはあるまいと思ふ。

何人も進んで此任に膺るものがないとすれば、私は此任に膺らねばならぬ責任あるものは、そして何の口實も辭退するを許さぬ位地に在るのは、前外務大臣加藤高明男であると言はざるを得ない、獨逸は直ちに敗亡墮頽せざるを得ないと觀測したのは、時の外務大臣加藤高明男、いきなり最後通牒を獨逸外務省に衝き付けて、外務次官チムメルマン氏をして呆然たらしめたのも時の外務大臣加藤高明男、大急ぎて開戰せねば、日本は此戰爭に於て何の得る所なしと言つて、開戰をしたのも加藤高明男、英國に自由に操縱されて、而も日本をして何の得る所なからしめたのも時の外務大臣加藤高明男。

私は是に於て乎、前外務大臣加藤高明男以外には來るべき平和會議に出席すべき適任なる全權使臣はないと結論する。

▽山本伯を推さん

欄柯人

歐洲戰爭の終局には列國大會議の開催せらるべきは疑なきとである、宛もナポレオン戰爭の終局にヴイエナ大會議の開催せられしが如くであらう、其時に臨み何人をして我邦を代表せしむべきかは國家の隆替に大關係あることであるから無論今より研究し置く必要がある、但し昨今の戰局狀態より推して考ふれば右の大會議は恐らく今より少なくとも一年以後であらうと思はる。從つて其迄には今の大隈内閣は必ず他の今少し有力なる内閣と交迭することであらうと思はる。その有力なる内閣とは

如何なるものなるやは素より何人も豫言す能はざれども、或は山縣公松方侯等の元老を首班とする人材内閣であつて、擧國一致内閣とも云ふべきものであらうか、若しもそうなれば特使の人任も自ら自由であつて、大隈首相と石井外相の下で御免蒙るべき人物も擧國一致内閣の下には喜んで任に當ることであらう、然るに玆に一つ考へねばならぬことは其大會に於ける日本の位置は如何のものであらうか、或は歐洲各國に關する問題には我邦は一切口出し出來ぬと云ふことにでもならば我特使は甚だ不名譽の位置に立たねばならぬから人次第では御免を蒙ると云はぬにも限らぬ、加藤男は戰爭開始の前後に於て最後の平和會議に我邦の參加すべきことに付き英國と一種の話合ひをなしたる筈なるが果して如何の取極をなせしや、頗る心元なき感をなせど、先づ試みに我邦は全般の問題に對し他の列強と同等の權利を以て參加すると假定しやう。

擧國一致内閣の下に特派せらる特使は山本權兵衛伯が宜からうと思ふ、其は同伯の人格識見より見て云ふことだが、更に其閲歷より見て最も適任である、ソレは此會議には是非共、英は駐在の我大使をば參加せしむる必要あれど、其孰れを正使と副使とするに困却する譯である、若し山本伯を正使とせば露英佛の我大使等は甘んじて其股肱として働くであらうから最も好都合である、然りながら大隈伯が其家の子郎黨内閣で鐵面皮に平和終局まで居据るようでは何事もダメある、石井外相の下に、加藤男ならば行懸上、特使を引受くるやも知れざれど例の第五項一件より非常の不人氣となれる同男ではとても勤まりそうにない、吾人が一日も早く基礎薄弱にして實力も微弱、大隈一家の内閣とも云ふべき現内閣の崩壊して擧國一致内閣の出現を望むは、戰後終局の事を心配するからである。

▽何人が果して適任

吉野臥城

戰後外交の成否如何は、直ちに邦家の興廢に關するが故に、何人にも重大視されつゝあり。政友會が對支外交の失敗を以て大隈内閣攻擊の標的とせるも、元老一派が外相加藤高明排斥の理由とせるも、皆戰後外交を重大視するが故に外ならず。其の間素より政爭を加味し、感情の疎隔せるに由ること勿論なるも、歸する所は『現内閣は戰後外交を托するに足らず』と謂ふにあり。戰後外交を議するの、今日尚早なるも、政友會及び元老等は、斯の理由を以て頻りに突貫を試みたり。然れども、二者の突貫には自ら異なるものあり。一は大隈内閣の破壞を期するにあるも一は外相加藤のみを排斥し去るにあり。彼れは傲岸にして元老の意に聽從せざるのみならず、外交の秘密は一切之を打明けざるを以て、老婆心切の元老の反感を買ひ、且彼等をして不安の念を懷かしめたるなり。愛國心を自己の專賣なるが如く思へる元老としては別に不思議ならざるも我が主張を貫かんとする男加藤には迷惑此上なかりしなり。感情漸く疎

隔するに至りて、元老は加藤を馘首せんとし、政友會は又政權を把握せんの一徹に逸り、遮二無二大隈内閣を屠らんとせるなり。元老は男加藤を葬りて一先づ安心せるも、政友會は改造内閣攻擊の手を緩めず、盛んに憂國の至情を廣告しつゝあり。然らば彼等は如何なる物を擧げ、如何なる方針を樹て、如何なる提案を以て、戰後外交の衝に當らんとするか。歐洲戰爭の勝敗未だ決せず、講和の時期未だ定まらざる今日、必ずや其の明言し易からざるを思はずんば非ず。

愛國心の元老の專賣ならざるが如く、憂國の至情も亦政友會の特有にあらず。今日之を矜るべくんば、國民の何人か之を矜るに於て、元老又は政友會の人後に落つるものならんや。戰後外交は洵に重大なり。重大なりと雖も、一加藤を葬り、一内閣を屠りたればとて、其の成功を必期すべからず。媾和の時期到らんまで、幾内閣の起仆するや測るべからず。内閣更迭すれば外相從つて異なり、外相異なれば其の方針自ら變ぜざるを得ず。政友會の改造内閣を攻擊するも、政友會は理想の外相を得べしと斷じ難し。現下外交界を見渡すに、何れも曠世の偉材に非ず。酷評すれば凡材庸器の臚列なり。男加藤ほどの手腕家を物色するも、なほ得るに難しとするの有樣なり。元老如何に愛國心を發揮すと雖も、政友會如何に憂國の至情を厥揮すと雖も、凡材庸器を化して、高才逸足となし得るものに非ず。

然れども、外交の衝に當るもの、必ずしも曠世の偉材たるを要せず。其の問題、其の案件によりて、之を解決するに足るの適材を選任すれば可なり。萬國講和會議に列席せしむべきもの、其の會議に於て邦家の威信を失墜せざるの適材なるを要す。適材は其の場合に於て、適材の適材たる所以を發揮する者なれば、何人を以て適材となすやの判別は容易に非ず。吾人の茲に擧げんとするは、比較的適材なりと思惟する人物なり。

日淸の媾和には、外相陸奥宗光、首相伊藤博文と共に其の衝に當り。日露の夫れには、外相小村壽太郎折衝の任に當り、駐米公使高平小五郎も亦之に參加せり。如上の例を以てすれば、今次の講和會議に列席するもの、必ず時の内閣の外相及び、駐露・英・佛・米大使の外に出でざるべし。實際の所、講和談判に外交上の智識なく、經驗なく、手腕なき人物を擧ぐるの不可なれば、勢ひ現在の外交官中より選任せざるを得ず。如何に名望赫々の名將も、雄辯堂々の國士も、適所に非ざれば其の才能を發揮し能はざればなり。乃ち大隈内閣長命ならば外相は男石井菊次郎なり、若し政友會内閣ならば外相は男牧野伸顯か、子内田康哉か、有能にても無能にても其の任に當らざるを得ず。男牧野は山本内閣の外相となりたるも、無方針、不得要領、加ふるに決斷力に乏しかりければ、如何に機略縱横の權兵衛が後押をなすと雖も、外交界に權威を揮ふこと能はず。常に秘密、讓歩、平和を好個の盾として、國民の攻擊を避くるに汲々たりき。對米外交の失敗は、彼れが在官中に於ける拭ふ可からざる汚辱にして、例の不得要領、不決斷に由るの禍なり。斯の人を起して、戰後外交の功果を收めんとするは、恰も樹により魚を求むるの類なり。子内田は多小の覇氣と、肥後人の險辣とを有す。世人は其の外貌の相似

を以て護謨人形となすも、此の人形容易に他に玩弄され、操縦されて、平然たる者に非ず。時によりては、抓まれても泣かざる事ある護謨人形なり。帝大を出て、伯陸奥に知られ、富豪の女を容れ、金力と才力との併行を得て、官界に擡首せる幸運兒なり。日露戰時駐淸公使として活動し、漸く其の手腕を認められ、累進して駐米大使となり、西園寺内閣の外相となり、大に成すあるか如く期待されしも、其の期待に反して去れり。日米改定條約を以て、彼れの大功を記念するに足ると云ふも、日米間に横れる紛議の根本を解決せざるが故に、禍根を將來に貽せり。曾て男牧野の手古摺り、男加藤の持久策を執り、男珍田の苦しみつゝあるは是れが爲めなり。然らば彼れは、無能なるかと云ふに、必ずしも然らず。男石井、男珍田の徒に比し、或は外交事務に精通せざるの失なきに非ざるも、大處に着眼して事を運ぶの手腕はあり。男加藤以外に、其の人物を求むれば、彼れの如きも倘外交界の奇才なり。

　痔瘻侯井上の屢内閣に肉迫し、遂に男加藤を排斥し去れるを見れば、養嗣勝之助をして講和に參加せしめんの魂膽ならずやと推せらるれど、夫れ程の底ありとは信ずる能はず。唯侯井上は、外交失敗の譽に誘はれ反加藤的不快の勃發せるなり。勝之助は交際上手なるも、男高平ほどに耳の遠近法を解せず、對者を殺活擒縱するの手腕を有せず。男珍田の周到を以て事に當るに比すれば、主張を貫徹するの氣魄足らざるものあり。如何に岳父の聲援あり、夫人の背押ありとも、難局を收拾するに成功すべしと思はれず。侯小村の痩身短軀を以て日露の講和を結べるに徴すれば、矮軀稍似たる男林權助の如きも亦、其の任に足るべしと雖も、小男のみにては問題とならず。然れども、彼れは一家の見識を有し、抗爭して他に下らず、加ふるに根氣精力の矜るに足るものあり。夫の事務的外交官の蒟蒻外交に比し、嶄然一頭地を拔くものありと雖も、近時適所を得ずして、手腕稍鈍れり。男石井の後を襲ひて、駐佛たるに至らば、或は講和の席に列るを得るや知るべからず。

　斯く評隲し來れば、元老の排斥あり、對支外交の失敗なきに非ざるも、講和の大任を果すべく思惟さるゝは男加藤なり。次に子内田なり。更に下つては男林なるも、より以上に男本野一郎の適材なるを感ぜずんば非ず。彼れは素より經綸的外交家にあらず、機智　湧の人物にあらず、溫厚平和の外交官に過ぎざるも、何となく魅力あり、包容力又なきに非ず。加ふるに國際法に通じ、各國に駐劄せる閲歷あり、日佛條約の締結者として、日露和親の中樞者として、聯合國に受の善きものあれば、談判に際して何かの便宜あらんと思はざるを得ず。我意一徹の圭角漢よりは、溫厚圓達の調和的人物の却て功を收むるの例は多々あり。使命を耻かしめずと云ふは、要するに帝國の利權を占め、國威を中外に發揚するに在り。讓步必ずしも威信を失墜すとは限らざるも、當然得べき利權を主張せず、君子人の態をなすは屈辱なり。此の呼吸を解して、巧みに難局を收拾するは、外交界の達人なり。男本野は未だ達人とは稱すべからざるも、人物拂底の外交界にありては、多少毛色の異なれるを見る。何人が其の局に當るも、當人乃至國民の非難は免るべからず。一死以て事に當

るに非ざれば、講和の使命を全うすること能はざるなり。

▽正使は後藤男、副使は仲小路氏

伯爵　大木遠吉

今度の歐洲戰爭のやうな事は、世界未曾有の出來事なのだから、其未曾有の講和會議には我國からも未曾有の人間を派遣するがよい。外交官といふやうな者は、由來末節に拘泥して、到底も大なる仕事をすることは出來ない。辭令が何うの、禮儀が斯うのと言つてた日には、こんな大局に當つて何の仕事をも出來るものではない。寧ろこれには後藤新平のやうな無鐵砲な人間を遣すがよからう。ところが此男は、獨り歩きの出來ない人間で、拋つて置かうものなら、舟が河に着くか、山に着くか解らないといふのだから、厄介な事は厄介だが、それには女房役として思慮の周密な、近頃頗りと一所に働いてゐる仲小路廉を副使にして遣つたらいゝではないか。

▽要求事項の決定と國民の態度が第一

司法參政官　田川大吉郎

列國會議に誰を選んで派遣するかとのお問は、列國會議に何を主張するかといふ、日本自身の立場が先づ決定されてからの問題だと思ふ、敢て問ふ、日本は其の列國會議に何を主張すべきであらうか、而して何を主張せんと期圖して居るのだらうか、その問題、その範圍、その計畫は既に、略ゝ見込の着いて居る譯であらうか。

僕の此問は、必らずしも政府の當局に問ふので無い、國民に問ふのである、國民の先覺者にして自ら任じ、外政問題に關し、絶えず紛々の意見を立てらる、其の種の志士に問ふのである、人選の問題は、固より其の後であらう、言ひ換へれば、その條項次第であらう。

誰を選ぶにしても、國民は全力を擧げてその後援と爲らねばならぬ。擧げられた其の人は馬鹿でも、悧巧でも、正しく日本國民の代表者である、故に國民は一致してその人を助け、その人をして後顧の患へなく、その目的に勇往せしめなければならぬ、而してその還れる時には、そこへ、多少の不滿足は有つても、尙ほその全力を盡した功勞を認めて、之を勞はり、之を慰むるの同情が無くてはならぬ、或意味に於ては謝恩の心が無くてはならぬ、成敗は時の運、苟も至誠全力を盡して報効したか

らは、たとへ失敗しても、謝すべきは之を謝せねばならぬ、敢て問ふ我が國民にはこれだけの思ひ遣り、これだけ榮辱を其の人と分つ(その代表者の)の心がけが有るだらうか、ポーツマウスの其の時の事を思へばおかしい、つい最近の對支外交の經過を思へばおかしい、對支外交に關し失敗ありとせば、我が國民自ら、我が外相を罵り、辱しめ、之を見殺しにし、之を嬲りものにした結果では無いだらうか。

若し代表者其人は、我が國民國家の代表者である、故に我が國民は、その人の成功失敗共に、潔ぎよく之を國民の肩に荷ふの決心あり、一致してその主張要求を助け、幸に成功すれば共に榮へを受くるも、若し失敗すれば、日本國家の失敗なりとして、我が力の未だ盛んならず、時運の未だ合せざるを恨むるのみ、必らずしもその代表者を恨みず、代表者の情を酌み、共に代表者の勞を犒ひ、代表者の苦しみを荷ひ、代表者の憂ひを分つ心がけが有るならば、必らず立派な代表者が出來るであらう、若し然らず、ポーツマウス當時の心持を改めず、對支外交當時の心持を滌へなければ、立派な代表者ば、とても得られまい、前の心持でかゝるなら、卓越した代表者を得ずとも、立派な働きが出來やうけれど、後の心掛でかゝるなら、假に卓越した代表者を得たとしても、何立派な働きは得られまい。

隨つて何を主張し、要求するかを確定することが先決問題である、而してその代表者に對する態度を考慮することが、その第二の問題である、代表者其人に就て考へることは、更にその次に係る。

日本の今日は、人物は多いとは謂へない、既に顯れた人の腕前は大抵知れ切つた、未だ顯れない人の腕前は之を知る由も無い、列國會議の如き舞臺には、どうしても既に顯れた人を選んで送るの外は無い、して見れば、公、侯、伯、子、男、誰を選んだとしても、その力量は大抵似たり寄つたりであらう、して見れば、誰を送るかといふ人選の問題は、存外無意味に係りはせぬか、いといふことに係りはせぬか、僕は略ぼ左樣な觀を爲して居る者である、但、だから大事が話されないと謂ふのでは無い、人間は太した優劣の無いものと言ふだけである、同時に、之を信用し、之を激勵し、之に任せ切つて働かすれば、誰でも皆大事が出來ると言ふ心持である、要するに信用が大事である、而して過分の望みをかけぬことが大切である、我が國民は、從來あまり人に信用を置かないで、而して信用を置かない其の人に、過分の望みをかけはしなかつたか、既往の失望、煩悶、罵詈、憤恨は、概して此不相當の糅合から來つて居たやうに思ふ、これを此次には戒めたいのである。

以上は、列國會議に、我が國からも代表者を出す前提からの豫告である、併し乍ら問題はまだある、問題は其の先に上る、我が國は果して列國會議に代表者を出すだらうか、出すべきであらうか、出すが利益であらうか、名聞ばかりを騒いではならぬ、先づ此問題からを靜に慮るべきである、戰ひは東洋の一隅に限られた、日本の効勞は、自ら割引するには決して及はないけれど、必らずしも國運を賭した必死の戰爭を經たと

は言はれまじき今日までの程度である、而して其の將來の關係もどうか一歩を歐洲の中原に踏み出して、それと直接の交渉を保つことは、愉快さうらしき前途の光明もあるが、それにはそれに伴ふ半面の心配も多々ある、その機會を強ゐて拒否すべしとは謂はないが、進んでその舞臺を求めることは、頗る重要な考へ物であらう、僕は、此事をも大方の君子に慎慮を煩はしたいと思ふて居る。

▽列國會議に行く人

鵜崎鷺城

歐洲戰亂は最近露國方面の戰局が意想外に發展して、獨逸の大軍ヒタ押しに露軍を壓迫して居るが、英佛聯合軍の方はいつまで經つてもイープル、アルゴンヌ以外に發展しない。何日になつたら戰爭が終局するか、今日何人も豫測するを難ずるが、併し早晩見が附けば、善後處分を議する爲め列國會議が開かれるに相違ない。さて其時日本より如何なる人物を全權大使として列席せしむべきかといふ問題であるが、それよりも玆に一つ先決問題がある。それは果して列國が日本を其會議に列席させるか何うかといふ事である。

蓋し日本は歐洲戰爭に參加したと言へばしたことになるが、實際は東洋の一小局面で大演習に少し毛の生えた位の戰爭をした丈けで、英佛獨露伊土の諸國と全く趣きを異にして居る。聯合軍側は日本の列席を承認するにしても、少くも獨逸は一應苦情を言ふかも知れぬ。結局參列するにした處で、日本の利害に關係ある問題のみに就て發言するを許し、歐羅巴の問題に就ては發言權を與へないだらうと思ふ。それは兎に角いよ〳〵其場合に及んで人物の問題になれば、其選擇は餘程難かしい。兎に角未曾有の大戰亂の後始末をするのであるし、特に世界に於ける帝國の地位が定まる定らぬといふ眞劍の場合であるから、他のお祭的國際會議と違つて、誰でも有り合せの人間で間に合せる譯に行かぬ。列國共に第一流の人物を出すに相違ないが、日本としては國家及び國民を代表するに足る丈けの貫祿、閲歷、地位ある人物を出さねばならぬ。而して其人物は是等の外に帝國の位置を解して折衝するの力量識見を具へねばならぬ。固より完全を望む譯に行かぬが、少くも列國使節の間に伍して馬鹿にされぬ丈けの人でありたい。

斯ういふように條件をむつかしく定める日には殆んど合格するものが居ない。尤も何の國でも偉い人物がゴロ〳〵散在して居る譯でないが、兎に角英なり佛なり獨なり露なりには世界的人物が居る。が、日本には俗にいふウオールド・フヰギュアは鐘太鼓で探しても居ない。いつでも外交上大切な場合になると、今更ながら外交界人なきを嘆ぜざるを得ぬ。本來をいへば斯ういふ重大なる國際會議には、時の外務大臣が全權委員として出席すべきである。伯林會議の時、英國よりジスレリーとソールスベレーとが列席した。ジスレリーは首相でソールスベレーは外務大臣

であつたと思ふ。其時英國は議會開會中で最も忙しい時に首相と外相が旅行したといふは殆んど未曾有のことである。日露戰爭の時と今度の歐洲戰亂と場合が違ふが、小村外相自ら全權委員となつてポーツマウスに使ひした。兎に角外相自ら其役目を勤めるのは一番都合が好い。そこで大隈內閣が丁度列國會議に際會するか何うか疑問であるが、若し際會するとせば。外相石井菊次郎が出向くべきである。併し石井は外交家として何等傑出した處がない。碁でいへば定石を打つ人である。其定石も何うかすると打てないかも知れぬ。實をいへばコツ／＼と官卓に靠れて仕事をする事務家で、事務家としては誤りがない。尤も外務省の飯を喰つて居るから、典例や交際辭令を心得て居るかも知らぬが、外交上の抱負經綸は少しもない。通商局長としては故萩原守一、阪田重次郎に及ばない。故山座圓次郎とは殆んど比べ物にならぬ。次官としては松井慶四郎に及ばない。如何に贔負目に見ても精々次官の材である。既に外相として價打のない代物を列國會議のアンバセダーにするのは危險千萬である。

近頃民間の一部に三浦將軍か若くは伊東巳代次子を遣つたら好からうといふ說があるさうだ。三浦なら人物の貫目もあるし、膽略もあるし、それに案外內外の形勢に就て一隻眼を有して居るから、面白かも知らぬ。又た伊東は從來外交方面に關係しないが、日清戰爭の時、伊藤首相陸奧外相に從ふて下ノ關談判の席に陪し、更に講和條約批准交換の爲め、全權辦理大使として芝罘に行き、案外際どい藝をして歸つた經驗がある。それに樞密顧問官中一番の智惠者で、未だなか／＼野心もある。此兩人は外交部面には緣遠いが、實際やらせたら役目の勤まらぬ方でない。前年大使として海牙の萬國平和會議に行つた都筑馨六が居るが、是れは近年肺病で弱つて居るから、特に病人を引出すにも當るまい。

我輩は前外相加藤高明に此役目を仰せつけるのが好からうと思ふ。加藤も進んで此任に當るが宜い。何故といふに日英同盟の明文を重んじて――といふよりも英國の尻馬に乘つて――獨逸に最後通牒を送り、終に日獨戰爭を開始した張本人は加藤である。又た膠州灣還附を支那に約束したのも加藤である。初めから獨逸が聯合國に負けるものと豫想して、總ての外交を行ふたのであるが、昨今の形勢では聯合軍よりも獨逸の方が遙かに勝味がある。萬一加藤等の豫想が外れて獨逸が有利の地位に立つか、若くは五分々々の引分け相撲になるとすれば、大隈や加藤の畫いた算段は自ら違つて來る。孰れにしても加藤は歐洲戰亂後の對策について知らぬ顏の半兵衞で濟まされぬ。自分が外相として種を播いたのだから、自分で刈るべき義務がある。それ故にたとひ在官者でなくても、連續的に責任を負せる意味に於て、自分のやつた外交を自分の外交で緊括りをさせるのが當然である。然し理屈は何うでも加藤では國民が承知すまい。內閣を罷めたのは表面大浦事件に對する聯帶責任の意味になつて居るが、實際はヘマ外交が其原因になつて居るから、再び此外交上の重任に當らしむるのを不安に感ずる道理である。

內地で然るべき人物を得ることが難いとすれば、駐外大使中より適當な人を選擇するの外ない。得べくんば一等國の對面上特に本國より人を

出すべきであるが、駐外大使を任命したからとて別に差支へない。歐羅巴にも獨らいふ例は多くある。現に伯林會議の時でも、二三箇國を除くの外は獨らであつた。所で來るべき列國會議の地は伯林か巴里か倫敦かウインナかペトログラードか羅馬か、それとも中立國の米國若くは瑞西か豫測するを得ぬが、兎に角列國會議所在地の大使を充てるが順當であるが、それが若し不適任であれば、他の大使を以てするも決して差支へない。

現在の駐外大使は英國に井上勝之助あり、米國に珍田捨己あり、伊太利に林權助あり、露國に本野一郎あり、佛國は石井の後に誰がなるか未定である。井上は善良なるゼントルマンであるけれども、此大役は瘠馬に重荷の心配がある。珍田は外交官として相當の閲歷があるけれども、石井と似たり寄つたりの型の人で、謂はゞ一個の循吏に過ぎぬ。林は人間に少し妙な癖があるけれども、多少外交上の頭と腕があるから、外務大臣にすれば石井などより遙かに仕事が出來る。が、列國會議の帝國代表者としては少し輕い。

そこで最後の本野であるが、此人は今の大使中の先輩で、年少の時より佛蘭西で仕込み、日本人の形貌を有する佛國紳士といつて好い。國際法の造詣に依て法學博士となり、大使中の學者である。露佛の間に知己が多く内外人に評判が好い。自分で新聞を經營しようといふ位だから、外交家としては何事をか爲さうといふ執着心があつて、日露協約の如きも彼が折衝大に務めた結果である。今まで數次外相の呼聲を立てられ、現に今度でも何故彼を閑却したかといふ議論もある位である。多年歐羅巴邏りのみしたから、或は東洋の事情に通ぜぬかも知らぬが、大臣としての貫祿は充分に具はつて居る。それ故に大使中より使節を任命する日には彼を第一に推す外なく、内地よりナマナカなものを列席させるよりも、本野の力が遙に好からうと思ふ。

▽大使權兵衛、副使巳代治

早川鐵治

一體今度の歐洲戰爭は何ういふ結果になるか。是が甚だ疑問である。早稻田の老人や、加藤さんの考へて居られるやうに、さう簡單に行くか何うか。

今日已に我國が獨逸と火蓋を切つた以上、吾輩と雖も獨逸の勝利を冀ふ者ではない。然しながら開戰當時から今日まで戰局の發展が、不幸にして吾輩の卑見が適中するやうに思はれる。

去年の我國との開戰の時も、東洋に於て何も獨逸は開戰する必要はなし、巧妙な外交手腕で獨逸が印度以東に於ては戰鬪行爲をなさぬやうにし、東洋に來て居る獨逸軍艦は武裝解除をなさしめ、青島は支那に返して遣れといふのでなく、何とかするやうにしたら、よかつたらうと思ふ。さうすれば英國だつてエムデンの跋扈であんなに苛められはしなかつた

だらうし、危機一髪といふべき時に滿洲に兵を送る必要もなかつたらう。そして日本は日英同盟の交誼を十分に盡し得て而も立派に中立を全うし得たであらう。それのみでなく、日本は四方八方から拜み倒されて、日本の一擧一動は總て世界の全局面をも支配することが出來ただらうに。日英同盟オイそれと兵を出したりなどしたのは返す／＼も賛成が出來ない。一體獨逸といふ國は老伯や新聞記者などの考へて居る程弱い國ではない。佛蘭西は憲政病の爲めに屢々政府が替り、立法院に兵部の事まで干渉させるから武備に多大の缺陷を來して居るし、英吉利といふ國は由來歐洲大陸では商人國として取扱はれて居つて、到底も大兵を出すことは出來ない。キチナー將軍は百萬二百萬の兵は立所に集るやうに言つたが、百萬は愚か、漸く二十何師團といふから、四五十萬も集つただらうか。それも戰線に立たぬといふ約束で募集に應ずるやうな國だからお話にならぬ。意外なのは露西亞だが、之も軍需品の缺乏で已むを得ないのだらう。さうすると獨逸を輕々しく征服するといふやうな事は今の處思ひも及ばない。獨逸は實に自國の軍需品供給所であつたのみならず、世界各國の軍需品請負所であつた。進歩した科學的學理を應用して、一度兵を出すや、其準備一整に成るといふ有樣で、英國や米國あたりの新聞記者の考へて居るやうに獨逸を兵糧攻めにするなどといふことは子供騙しみたいな話で、誰だつて之に信を置く者はない。之を信ずるは恐らく日本の新聞記者くらゐのものだらう。

最近に至つては殊に吾輩の所信を確實にして居る。已に獨逸は東方に向つて軍隊を派遣し、ワルソーを陷れ、リガー、ツルグレードに向ひ、ペトログラードも遠からずして獨軍の陷入る處となるかも知れない。百年前奈破倫の失敗した歷史を以て、交通の便利なる今日樂觀することは出來ない。尤も私は軍事上の觀察に於ては素人であることは申すまでもない。が此間も同鄕の人で、或外交官が佛蘭西から歸つて、「獨逸ももうあれッきりです」と言つて話して居られたのは已に一ケ月以前の事であつた。獨逸が露の國境に推寄せて、深入して居るならば、英佛の眞個の價値を發はすのは此時である。東方に多大の軍隊を派遣して居るならば、手薄になつて居る西の虛を衝いて、一擧にしてライン河邊までも推寄せるだらうと。ところが、それどころか不甲斐ない今日の有樣は何うか。さらばと言つて、獨逸が連戰連勝して、聯合軍の死命を制するに至るか、是れも甚だ疑はしい。然らば有耶無耶のところで、講和條件が提出されて、いゝくらゐのところで講和會議が開かれるやうな事になりはすまいか。

扨其場合に此東洋の日本が列國會議に顏出しをすることが出來るか何うかが先づ疑問である。青島に兵を出すに當つて、其邊の約束は出來て居るやうであるが、然し英國を通して日本が出るといふのでは心細い。英國といふ國程自我の觀念の强い國はない。此英國が自我を犧牲にしてまでも、我日本の爲めを圖るやうな武士道的な義俠心があらうとは思はれない。聯合軍が勝つて英國が獨逸にディクテートするならば知らぬ事、でない限りは、東洋南洋の事は獨逸と英國と日本とで定めることとして

歐洲の列國會議は歐洲の戰亂の後始末をするのであるから、東洋の日本を入れるの謂はれはない。殊に白色人種中、獨り有色の日本人を交へるといふことは感情の上からも許さない。そこでかういふ抗議の出た時に英國が、日本は日英同盟の義理を重んじて、早速青島に兵を出したのであるから、と言ふので此場合英國が武士的態度を取るであらうか。利害關係に明かな、今度の支那排貨運動などでも獨逸人よりは其實英國人の尻押が多いといふことであるから、義理を重んずるやうな人種ではあるまい。

であるから列國會議に我國から人を出すかといふ問題は十中の七八までは何うかと思ふ。我國から誰も出ないとすれば誰を派遣するかなどと無駄なお話をする必要もない譯ではあるが、それならば我國に列國會議に出るだけの資格の有る人は無いか。六千萬同胞中それくらゐの使命を全うする人は無いとは斷言せぬ。

扨今の霞ケ關あたりの外交家中に其資格を有する人有りや。之はどうも物足らぬ。霞ケ關といへば、先づ珍田捨己、本野一郎などは選に入る方だが、後輩の石井菊次郎君が今度外務大臣になられた相だが、歐洲に於ても、珍田本野は先輩で苦勞も積んでゐるから、資格は無いことはない。但だ御承知の通り、霞ケ關は藝術本位であつて、人物本位ではない。人物は二の次に廻されて、外國語や國際公法を知つてゐるとか、外交官試驗に及第した者から採るといふ風で、交際上の儀式や、西洋料理の喰ひ方や、舞踏の遣り方は知つてゐやうが、一身を以て一國の責任を兩肩に荷ふといふやうな覺悟を有つた者は無い。本野君や珍田君も外交官に養成された人で、藝にかけては申分はない。珍田は英語も佛蘭西語も十分に出來るやうだが、講和會議と言へば昔から佛蘭西語に定つて居たものだが、獨逸が勝ちでもしやうものなら獨逸語で遣れと言はぬにも限らぬが、獨逸語は本野も出來さうでは無し、珍田も不得手の方だらうが此兩人ならば共に所謂藝術に就いては及第の人である。只電光石火、機敏な鋭い點は此二人に無い。珍田は孜々として冷靜に事務を整理することは巧いもので、本野も事務の點にかけては遜色が無い。只氣の小さい人で、いざ國交に關する重大問題が起つたといふやうな時には、本野などは傍から勇氣を附けて遣らねばならぬし。珍田には機敏な事は出來ない。

私は其等の人々より、も少し世間の想像して居ない人間で、伊東巳代治、山本權兵衞を擧げようと思ふ。山本の外交的手腕は知らぬ。海外には屢々行つたことはあり、獨逸にも、英國にも少しは居つたやうだが、外交家としては無論素人で、伎倆の程も解らぬ。が只機敏な奴で、中々膽の据つた、利益關係などにかけては一歩も讓らぬといふ強いところがある。恐らく使命を全うして恥しめぬであらう。鋭く機敏な點にかけては伊東も山本に負けぬ。伊東は三十幾つかにして、已に外交官として成功した經歷を有つてゐる。日淸條約の批准を交換しに芝罘へ行つたのが此伊東で、其時は已に例の三國干渉で、支那の全權大使などは最早批准を拒んだ。三國干渉の船は盛に石炭を焚いて威嚇して居る内を、巳代治

は其時三十七八歳だつたらう。一生一代の藝當で巧く其間を切拔けて批准をさせて來た。彼は先天的外交に器用な男で、別に教育は受けぬが、法律論も一通りはいけるし、外國語も使へる。今でも歳は五十七八だらうから使へぬことはない。再聘は最も適任者だと思ふ。然し此場合巳代治一人で出したくはない。之に膽玉の大きい權兵衞を附けて遣るのだ。即ち全權大使に權兵衞を、副使として巳代治を、さうなれば再聘なども參贊官ぐらゐでも構はぬ、國家の爲めに働いて見るが先づ特派大使あたりに例の霞ケ關の藝術家連を遣つたらよからう。一通り出來る男で多少經驗の有る人と言へば都築馨六、內田康哉といふ邊だらうが都築は英佛獨三ケ國語に通じ、外交に秀で、機敏にして度胸もあるから山本、伊東の連合軍に馳せ加はるがよからうと思ふ。內田け再聘當て政務局の椅子を讓つてから、近來何う發展してゐるか知らぬが、彼は霞ケ關の人としては所謂藝の人でないから、行くとなれば通辯が要るであらう。只無暗に可愛がられる人で、日本も昔のやうな二等國で、お情で取扱つて貰つてゐたやうな時代には可愛い大使、可愛い公使として、彼も珍重されたものだが、今日のやうな一等國として對等に大人として附合ふには、日本は藝者の國、人形の國で、其人形の國の人形大使ではいけない。

其他、動もすると國交上に頭を擡げる人に、末松謙澄、金子堅太郎がある。末松は米國に居つた關係から、金子は伊太利の謂はゞ院外公使みたいで仕事をした關係から、今でも何とか言はれてゐるが、全權大使としては貫目が足らぬ。末松は文才の有る人で、仙氣を帶びた文學者で、中々喰へぬ人ではあるが、巳代治程機敏でない。金子は英語は達者だが膽の人ではなく、藝の人である。霞ケ岡は書記官、參事官揃ひだから、院外から連れて來るやうな人はゐない。どうせ七十八の翁さんが出なければ、內閣の引承け手が無いといふやうな關柄だから豪い人物の無いのも無理はないが。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



（中付三の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は謝絶す

石坂養平氏著

藝術と哲學との間

□四六判函入頗美裝
□總洋布三百五十頁 定價金壹圓 送料八錢

最新刊

著者石坂氏は近時の文藝界に於て最も眞摯なる態度と深奥なる洞察とを以て現代藝術並に生活上の諸問題を解説し批判しつゝある評論家なり。今や氏、遠大の雄志を抱いて田園に於ける高潔なる生活を營み、一面藝術學(クンストウヰツセンシヤフト)と哲學との研鑽に努力して經濟的政治的智識を涵養し、其學識、深邃高邁の度を加へむとす。本書收むる所の、新理想主義の藝術、藝術活動論、鑑賞と製作との關係、ドストイエフスキイ論、自己の周圍との戰ひ、本能と經濟的壓迫等の二十有餘篇、悉く其現實的思想は愈々最近の文藝及思潮氏の生活の反映にして現文壇思想界の最大權威たるべきものなり。

伊東六郎氏譯
好評再版出來

バットボーイ日記

四六判函入美裝
四百餘頁口繪入
定價金八十五錢
郵送料金八錢

發兌元 東京西大久保百三十一 振替東京三〇五九七番 高踏書房

武者小路實篤著

最新刊 向日葵

布製箱入
紙數六百頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

作者はこの書によつて自己の眞價を正當に社會に認めさせようと思つてゐる。既に日本にかくの如き書があると云ふことを認めさせやうと思つてゐる。日本の文壇を輕蔑するもの、日本の作者を嘲笑するもの、日本の文壇のゆきつまつてゐると思ふ人々に、既にかくの如きものが書かれたことを認めさせやうと思つてゐる。この書は日本の文壇の未來が如何に希望に輝いてゐるかを示すであらう。この書におさめられたる七つの脚本は眞の藝術にある力を感ぜしめるであらう。文藝座に公演されて賞讃と嘲笑の間にをかれたる「わしも知らない」は全頁の二十分の一を占めてゐる許りである。他に「清盛と佛御前」(三幕十三場)「二十八歳の耶蘇」(一幕一場)「母親の心配」(五幕七場)「或る日の事」(一幕三場)「その妹」(五幕五場)「未能力者の仲間」(一幕一場)がのせられてゐる。附錄として小説「小さき世界」がつけられてゐる。

世間知らず

裝幀美裝箱入
定價八拾錢
送料八錢

生長

美裝箱入
定價壹圓三十錢
送料八錢

心と心

美裝箱入
定價壹圓
送料八錢

彼が三十の時

布製箱入
定價壹圓五十錢
送料八錢

發行所 東京市麴町區平河町五丁目 振替東京二〇九一四番 洛陽堂 電話番町四二五八

興味ある文字を滿載せる九月號

早稻田文學

□小說 日射病…上司小劍

□小說 弱者の日記…田中介二

□小說 再會…富士澤けい

□小說 尼僧…荒木滋子

■アップレーションの價値…田中王堂

■オイケンの個人主義…稻毛詛風

■獄中のワイルド…本間久雄

■凡人淨土…相馬御風

問題文藝

『問題文藝』の價値及び形式

内藤濯、山田檳郎、三井甲之
正宗白鳥、小川未明、阿部次郎
西村渚山、石坂養平、岩野泡鳴
中村吉藏、秋田雨雀、柴田勝衛

最近文壇の一角に『問題文藝』の聲の起りつゝあるは厭ふべき混沌沈滯の狀態を突破しやうとする何物かの兆候ではあるまい？それともいふに足らない一時的の現象であろうか本誌が諸名家の意見を乞うて揭ぐるはこの疑問を解決したいが爲めである。…

最近思潮欄

■青年の自殺問題

■逝けるアレキサンダー

■結婚生活の問題

■サラベルナ右足切斷す

■議會勢力の增進

■ダンヌンチオの叫び

■八月の小說と評論

■イギリス教育界時事

■近代劇協會の『櫻の園』

■將來の舞踊…秦豐吉

□詩 二篇…水野葉舟

■自己の中の戰…平方達雄

□憂鬱の首…兒玉花外

■太陽の國…增野三良

詩歌

岡本かの、渡邊吉治、村山至大、坂本潮郎、萩原貞雄、田邊若雄、

定價二十五錢 半ケ年分倍號共一圓九十六錢 ■神田表神保町

郵稅一錢五厘 一ケ年分倍號共三圓七十六錢 ■振替二七〇番

合資會社 東京堂

（中付三の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

中央公論秋期大附録

お才と巳之介（小說）……谷崎潤一郎

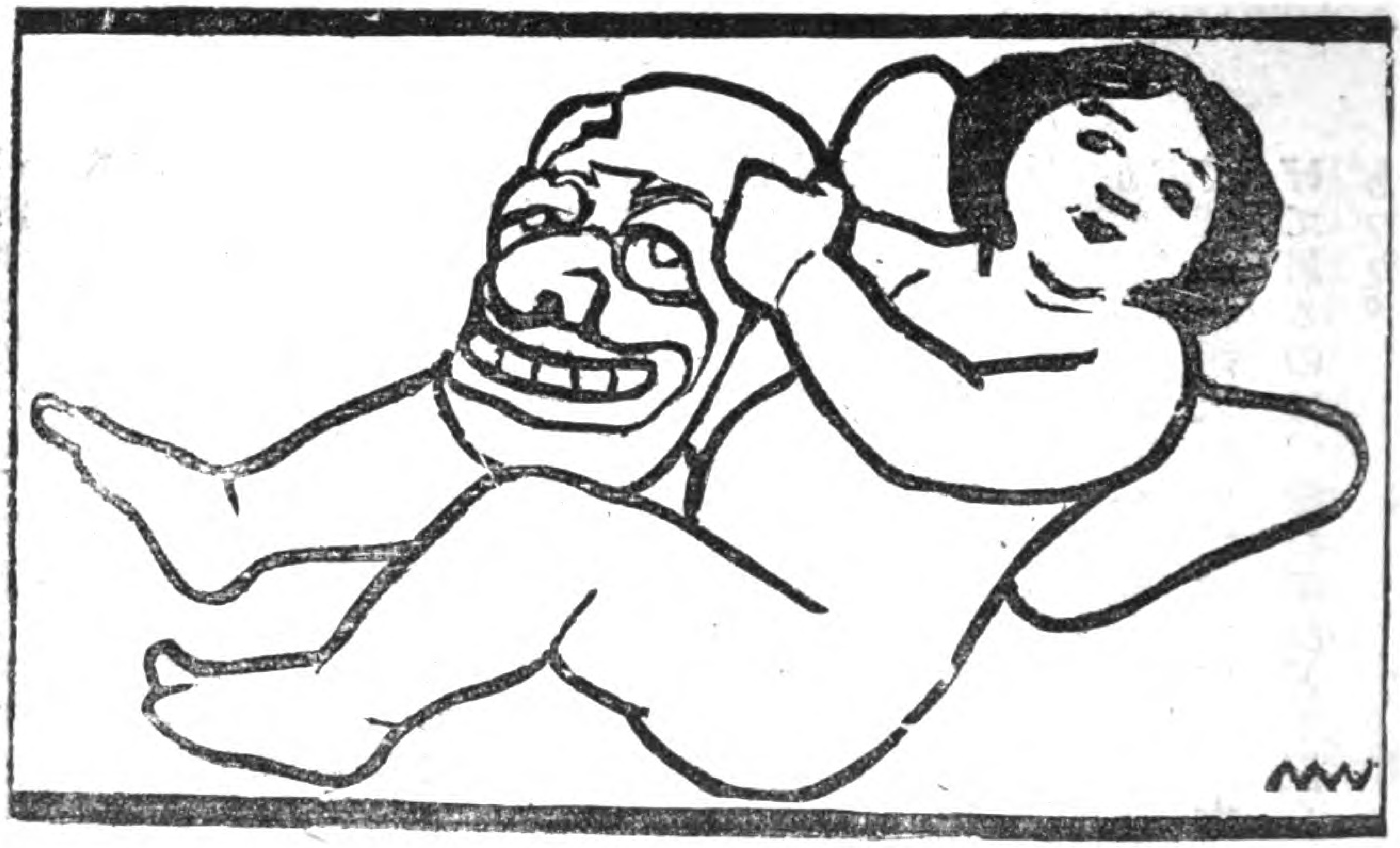
刺戟のまゝに（小說）……正宗白鳥

料理人（脚本）……坪内士行

惡夢（脚本）……武者小路實篤

守護神（小說）……上司小劍

戰話（小說）……德田秋聲



お才と巳之介

谷崎潤一郎

一

大門口まで送つて來た新造禿に別れを告げて、二人が急ぎ足で五十間の通りへ出たのは、まだうす暗い初夏の朝まだきの事である。

「道理でねむいと思つたが、ちいッと時刻が早や過ぎやした。一つ氣晴らしに内まで歩いて參りやせう。」

卯三郎は寢の足りない、膨れぼつたい顏を撫で廻して、それでも元氣よく、勵ますやうに巳之介に云つた。

「うん、共いつもよからう。」

と云つたきり、若旦那の巳之介は懷ろ手をして、重さうな足取りで彼の後から歩いて居た。ゆふべは氣が付かなかつた土手の柳

が新芽を吹いて、朝靄の中に青く濛々と煙つて居る。空が不愉快にどんより曇つて、田圃には風が少しもない。たゞ雨を呼ぶ蛙の聲が一面に聞えるばかりである。

「若旦那、大さう濟まして居らッしやるぢやあございませんか。さては昨夜は持てましたかね。」

かう云つて、卯三郎は巳之介の方を覗き込んで、くすくすと低く笑つて見せたが、相手は却つて顏を赧らめながら、

「なあに、あんまり持てもしなかつた。」

と、きまりの惡るさうな風つきをする。卯三郎とても、巳之介が「あんまり持てもしなかつた。」のは内々承知して居る。彼にぞつこん惚れ込んで居る玉屋の華魁の喜瀨川と云ふのが、

「お前はんと巳之はんとを比べて見ると、男振りが雪と墨ほど違つて居る。お前はんの方が御主人で、巳之はんの方が家來のやうだ。」と云つたのは、滿更喜瀨川一人の慾眼ではないらしい。淺草中で五本の指に數へられる物持ちの家の伜だから、金は山程あるにしても、實際巳之介は女に好かれさうもない人柄である。小柄で貧相で恐ろしい縮れつ毛で、而も出齒の下品さ加減、取りえと云へば眼元にいさゝか愛嬌のある事と、顏色のいやに生白い事ぐらゐであるが、當人だけは相應に得々としてにやけた男の積りで居る。たとへ容貌が醜くても、大家の若旦那らしい鷹揚な態度を見せればよいのに、お喋舌りで無卒で徒らに通人振つて、ますます女に馬鹿にされる一方である。その巳之介が今朝に限つて妙に沈んで姿げて居るのは、餘程手ひどく振られた結果に違ひないと、卯三郎は腹の中で氣の毒でもあり、滑稽でもあつた。

「ねえ若旦那、たまに一度は振られたからつて、何もそんなに騒ぐもんぢやあございませんよ。ちつと私(わつし)の惚けでもお聞かせ申しませうか。」

「お前の惚けも聞き厭いた。どうせ聞かせるくらゐなら、もうちッと新しいのを仕入れて來ねえ」

巳之介はいよ〳〵不機嫌さうに苦り切つて答へたが、相手は一向頓着せず、いゝ氣になつて語り續ける。

「まあさ、さう仰しやらないで聞いて下すつても惡かあござんすまい。何しろあなた、あの高慢な喜瀨川が、お前はんの顏を三日見ないと、御飯が喉へ通らないから、きつと明日も來てくんなましつて、歸りしなに掌を合はせて涙ぐんで居やしたぜ。昨夜なんざあ、夜つぴて私(わつし)を寢かせないんで、今朝になつたら眠くつて眠くつて仕樣がありませんや。」

「おいおい卯三どん、お前も隨分甘いもんだな。何處の華魁だつて其のくらゐの事あお世辭にも云ふぜ。」

「へん、若旦那。憚りながらお世辭だかお世辭でないか、大概樣子を御覧になつたらお解りになるでせう。」

卯三郎はわざと體をぞくぞくさせて、面あてがましく悦に入つた。

巳之介にしても心の底では、喜瀨川の言葉をお世辭とは思つて居ない。全く卯三郎と喜瀨川との關係は、端(はた)の華魁が羨むほどの眞實深い仲である。色の淺黑い、背恰好のすつきりとした、何となく垢拔けのした卯三郎のいなせな姿は、同伴者の巳之介と好箇の對照をなして、玉屋中での評判になり、喜瀨川

さんばかりが華魁でもあるまいにと、寧ろ卯三郎の方が物好きのやうにさへ云ひ囃されて居る。それだけに又彼の惚けは、餘計巳之介の自信を傷ける力があつた。茶屋の女中や新造などは、此の頃すつかり其の邊の呼吸を飲み込み、巳之介の前で卯三郎の器量を褒めることとは、成る可く避けるやうにして居た。たゞ肝腎の卯三郎自身は、飽く迄巳之介を馬鹿にし切つて、遠慮なく惚け散らして見せるのである。

「そんなにおいらんが惚れて居るなら、たんと可愛がつて貰ふがいゝさ。私あ少し考へがあるから、此れぎり廓へは行くまいかと思ふんだよ。」

暫く立つてから、ふと巳之介はこんな事を云ひ出した。遊蕩費の關係上、自分が吉原へ行かないと云つたら、定めて卯三郎は狼狽するだらうと、意地の惡い事を考へたのである。

「へーえ、此れぎり廓へは入らつしやらない?」

「うんさうさ。」と、相手が自分の推察通り眼を圓くして驚いたので、漸う機嫌を取り直して、「何もそんなにびつくりするには及ばないさ。廓へ行かなくなつたからつて、女遊びをまる切り止めると云ふんぢやあないんだよ。私は私で何處かへ巣を變へる積りだから、お前はやつぱり喜瀨川のところへ行くがいゝやね。」

「ですが若旦那、其處に御如才もござんすまいが、今迄通りお互ひに遊びの事あ内々に願ひますぜ。こいつが大旦那に知れた日にやあ、私は首になりますからね。」

「あはゝゝゝ。その心配には及ばない。私にしたつて兄貴へ知れたら、叱言を喰ふにきまつて居るから、云はゞお前と同穴の貉だね。大した事も出來ないが、困つた時にあ今迄通り、ちつたあお前にも融通し

てやるさ。」

「成る程成る程、そいつは豪儀に有り難うございます。正直のところ若旦那と別々になつたつて、金の蔓にさへ離れなけりや、それで私は安心ですよ。」

卯三郎は狡猾な事を無邪氣な笑ひに紛らして云つた。自分の容貌ぐらゐ美しくつて愛嬌があれば、どんな我儘な理屈を捏ねても、相手に憎まれる筈がないと、堅く己惚れて居るのらしい。實際又、彼の己惚れは今迄立派に成功して來たのである。

「いゝともいゝとも、お金の事は私がちやんと引き請けた。」

巳之介はたつた今しがた思ひ付いた意地の惡い企みを直ぐに忘れて、ぐつと反り身になつて云つたが、しかしつく〴〵考へて見れば、甚だ馬鹿々々しいやうにも感ぜられる。

抑も二人が人目を忍んで、惡所通ひをし始めたのは去年の十二月頃の事で、巳之介が十八、卯三郎が二十の歳の冬である。主從とは云へ、二人は幼少の時分から非常な仲好しで、何も知らぬお坊ちやんの巳之介が、いろ〳〵と怪しからぬ知識を覺えたのは、大概卯三郎の指しがねであつた。店の番頭の文さんは向う横町の湯屋の娘を張つて居るとか、手代の傳どんは毎晩夜鷹を買ひに行くとか、下司な奉公人の内幕を洗ひ浚ひ報告して、頻りに卯三郎は巳之介の情慾を煽り立てた。「そんなら一番、己たちも吉原へ行つて見ようぢやないか。」――たうとう巳之介が切り出した時、

「まあ若旦那、入らッしやるのも宜うございますが、後で私が恨まれちやつまらないからお止しになつたがいゝでせう。」

と、卯三郎は一應反對の意見を述べたが、反對されゝばされる程、猶更巳之介は矢も楯も溜らなくなつて、遮二無二彼を引張り出した。二人が始めて行つたのは江戸町二丁目の何とか云ふ半籬で、繪草紙で見る華魁とは譯の違つた二朱女郎に、初會から一兩なにがしの馴染金を拂はせられて、それでも滿足して歸つた。年上の卯三郎は一ぱし斯道の先輩顏をして、萬事自分が心得て居るやうに屢々高言して置きながら、實際遊びに行つて見るとやつぱり巳之介と同樣に、口先ばかり生意氣な初心者であつた。「卯三郎の奴め、今迄己を欺して居やがつた。遊びにかけては貴樣も己も變りはないんだ。」と、巳之介は其の時から俄かに卯三郎を馬鹿にし出して、彼奴に負けてなるものかと云ふ、敵愾心さへ持つやうになつた。けれども遊びの數がだんだん繁くなるにつれて、何と云つても卯三郎は遂に巳之介の先輩たるべき資格を備へて居る事を、追ひ追ひ證據立てゝ來た。二人は同じ出發點から發足しながら、その進境には格段の相違があつた。二朱女郎が見世女郎となり、やがては一夜に一兩と云ふ呼び出しの華魁を買ふやうになつて、仲の町の茶屋の二階で飲めや歌への贅澤をする程修業を積んでも、一方は相變らずお坊ちやんであるのに、一方はめきめきと技倆を研き、新造禿を相手にしての應對振りから、幇間藝者を席へ侍らせて後れを取らぬ旦那振りまで、すつかり呑み込んで了つたのである。そればかりではない、巳之介には何時まで立つても傾城遊女の客をあやつる情愛の表裏と云ふものがわからない。何處まで行つてもおいらんの胸の奥には、客に解らぬ一種の秘密が潛んで居るやうに感ぜられる。然るに卯三郎は、凡そ遊里に生活する女と云ふ女の、手練手管の蔭日向を究め盡して、相手の女郎の腹の底まで見徹せるやうな批評を試みる。「女の心が解らないと云ふのは、惚れられた事がないからだ。私にかゝれば大概の女

は嘘をつかない。」と豪語して居る。就中最も巳之助が心外に思ふのは、自分の惚けを語る折には非道く自信のある句調で、勝手な熱を吹く癖に、巳之助の方の惚け話には少しも耳を傾けない。「卯三どん、此れは全くの話なんだよ。」から云つて念を押しても、「若旦那冗談ぢやありませんぜ。一體あなたは正氣なんですか。」などゝ酷いことを平氣で云ふ。「よしんば華魁が何と云つたつて、そりやあ皆手管ですよ。一々眞に受けて嬉しがつて居た日にや、際限がありませんや。」こんな事を云つて、悉く一笑に附して了ふ。「あの女はたしかに私に惚れて居る。」と巳之介が剛情を張れば、「いゝえたしかに惚れて居ません。」と卯三郎はきつぱり否定する。さうして、「憚りながら若旦那よりも私の方が眼が利いて居る。」と自慢の鼻を高くする。いまいましいとは思つても、後になつて考へ合はせると、不思議に卯三郎の批評は的中する場合が多かつた。「己と一緒に道樂を初めながら、彼奴はいつの間に此れ程の經驗を積んだのだらう。どう云ふ譯で彼奴ばかりが華魁に惚れられるのだらう。」と、巳之介はいよ／＼心外に感ぜざるを得なかつた。卯三郎の言葉を信用すれば、彼は吉原へ通ひ出してから、いつも相方の女に戀ひ慕はれる一方で、まだ欺されたと云ふ例がない。欺されるのは殆んど巳之介の役割と極まつて了つたやうである。

細かい事を洗ひ立てれば、彼の卯三郎に對する不平はその外にも澤山ある。たとへ上州屋の若旦那でも、當時部屋住みの巳之介は、それ程金廻りのよい筈はないのであるが、人並外れた子煩惱の母親をせがんで、随分今迄に多額の小遣ひを搾り取つた。その小遣ひの大部分、殆んど全部は彼と卯三郎とが等分に費消して居るのである。元來彼は調子に乗るといくらでも財布の紐を弛める方で、煽てられゝばいゝ氣になつて金を撒き散らす癖があるだけ、少しぐらゐの無駄遣ひは勿體ないとも思つて居ない。けれ

ども卯三郎との初めの約束が、遊興費は各々自分持ちと云ふ規定であつた。「若旦那を誘ひ出すばかりか、此方の入費までも持つて頂いちやあ何だか私が氣が濟まない。」と、卯三郎は自分の方から進んで云ひ出したに拘らず、其の約束が正直に實行されたのは最初の二三回に過ぎなかつた。而も座敷へ並んだ際に、奢るお客と奢られるお客との區別がついて居るならいゝが、まさかさうする譯にも行かない。其れでもさすがに卯三郎は、「若旦那、若旦那」と云つて奉つて居たけれど、「つまらぬ遠慮は止して貰ひたい。」と巳之介の方から捌けて出たので、だんだん增長して了ひ、動ともすれば「やい、巳之公！」などゝ、酒の勢で放言するやうになつた。「物の解つた粹な主人」と思はれたさに寬大な態度を取つたのが、却つて輕侮を招く原因とならうとは、全く巳之介の豫期しなかつた結果である。邪推かは知らぬが、どうしても卯三郎の無遠慮は、内々主人を馬鹿にして居る證據であつて、單純な無邪氣な動作とは考へられない。坐敷に侍る幇間藝者の數が多ければ多い程、彼の無遠慮はますます激しくなる癖に、遊んだ後の歸り途など、二人きりになると今度は恐ろしく鄭寧な言葉を用ゐ出す。あまりと云へば現金な男である。

卯三郎が一緒では、何處へ行つて遊んでも彼には面白い道理がない。馬鹿々々しいと知りながら今日まで卯三郎と行動を共にして居たのは、たつた獨りで惡所通ひをするだけの勇氣がなかつた爲めである。もう此れからは先輩の指導を待たないでも、女を拵へるのに不自由はしない。惡魔拂ひをする積りで、時々いくらか卯三郎に惠んでやつて、自分は自分で遊んだ方が、どのくらゐ愉快だか知れはしない。

「お金の方さへ若旦那が引き請けて下さりやあ、何も不足は申しませんよ。却つて願つたり協つたりです。」

から云つて、卯三郎は二三度ピヨコピヨコと頭を下げた。彼は此の頃喜瀨川からあべこべに捲き上げる程なので、巳之介の助力を仰がないでも、其の實困りはしないのである。

「ですが若旦那、餘計な心配かも知れませんが、此れからあなたは巣を換へて、一體何處でお遊びになららうと云ふんです。後學の爲めに承はつて置きたうございますね。」

「何處と云つてまだ極まつては居ないのさ……」

「たゞ吉原がいやになつたと仰つしやるんですね。」

「さう云ふ譯でもないんだが。……どうも私には華魁と云ふ奴が性に合はない。」

「全體女と云ふ奴が、若旦那にやあ性に合ひませんよ。」

又卯三郎が毒口を吐いたので、巳之助はいよ〳〵眞赤になつた。

「……華魁がお厭なら、何と云つてもまあ深川の藝者でせう。ところが此奴が、華魁よりも一倍我が儘で、なか〳〵生優しい代物ぢやあござんせんや。かう申しちや失禮ですが、若旦那なんざあ一層素人の娘でも追つかけた方が宜うござんすね。お金はあるし、身分はよし、嫁にしてやると云つて欺かしたら、素人の娘はきつと惚れますぜ。」

「さうさ、素人の娘も惡くはないさ。」

「おや〳〵、さては何かお心あたりでもおあんなさると見えますね。」

冷やかす積りで云つたのに、巳之介の方は案外眞に受けて、何故か頻りににやにやと笑つて居る。アテの外れた卯三郎は、暫く不審さうな面持ちをして、穴の明く程相手の顏を視詰めて居たが、忽ちふゝ

んと頷いて、

「はゝあ、わかつた。若旦那、わかりましたぜ。」

と、大きな聲で飛び上るやうに云つた。

「華魁がいやになつたの、吉原が氣に入らないのつて、成る程若旦那は他に目星を附けた女があるんでせう。成る程成る程、素人の娘も滿更惡かあござんすまいよ。」

「一體それは誰の事だい。獨りで呑み込んで居るぢやあないか。」

巳之介はかう云つて空惚けたが、其の眼つきには嬉しさうな色が漲つて了つて、とても隱しては居られなかつた。

「お惚けになつちやあいけませんよ。あなたが狙つて居らつしやる素人の娘と云ふのは、あのお才のことでせう。……どうです若旦那。」

「お才」と云ふ名を云はれた時、巳之介は體中の神經がぴりつと顫へるやうな氣がして、いよ〳〵嬉しさうな眼の色が顯著になつて、最後に相恰を崩して笑ひ出した。

「まあその邊のところだらう。實はとうからあの女には少うしばかり氣があるのさ。」

「やつぱり此の卯三郎の眼力は曇りませんね。どうも私は此の間から、若旦那の樣子が變だと睨んで居たのでございます。」

「ふゝんさうかい。まだそれほどに進んだ譯でもないんだが、……」

「そりやあ無論の話でさあ。素人だつてあの女はなか〳〵悧巧らしいから、用心しないと手を燒きます

ぜ。」

卯三郎は嘲けるやうな句調で云つた。

お才と云ふのは十日程前から、上州屋へ奉公に來た小間使ひのことである。親許は兩國邊の鳶の者で、今年十七になると云つては居るが、その實十八九か、事に依つたら二十ぐらゐの年喰ひであることまで、巳之介は内々手を廻して調べて居た。初めて内へ目見えに來た時、あまり器量が好過ぎるから、間違ひがあつては面白くないと、母親は大分不贊成を稱へて居たのに、二三日使つて見ると思ひの外に氣が利いて、大人しく働くところから、すつかり母親の心が變つて「當分辛抱するがいゝ」と云ふ事になつた。其れを聞いて私かに喜んだのは、恐らく若旦那の巳之介ばかりではなささうであつた。店の若い者は一人殘らず新參の小間使ひを歡迎して、暇さへあれば格子の隙間から奧の臺所を窺き込みつゝ、妙な色目を送つたり、つまらぬ冗談を云ひかけたり、朝から晩までお才の顏を見る事を樂しみにし始めた。それ程までに騷がれて居る事を知つてか知らずか、本人のお才は別段嬉しがる樣子もなければ赧むやうな風情もなく、誰に對しても同じやうに愛憎よく振る舞つて見せる。内心は兎に角として、表面だけは至極穩順な、つゝましやかな娘の如く受け取れた。

「當人がいくらしつかりして居ても、周圍の者が知慧をつけては爲めにならない。」

と、母親は氣に入りだけにひどくお才の身の上を思つて、四五日前から成る可く男の出入りする勝手口へは出さないやうにして了つた。それで彼の女は押し込めも同樣に、主人の居間の次ぎの部屋へ据わらせられて、大概終日針仕事を勤めて居る。店の者たちは母親の處置を餘計なお世話だと罵つて、抑へ

きれない不平と寂寞とを感じ出したが、得をしたのは巳之介である。卯三郎と云ふ强敵を始めとして、彼に取つては寧ろ邪魔者の店員共が除外された上、自分だけは勝手自由に奥の間へ出入する事が出來るのである。お才をどうにかしてやらうと云ふ企みが、彼の胸中に萠して來たのは、此の絶好の機會を自覺してからである。

卯三郎に誘はれて、華魁の許へ通ひながらも、巳之介の頭の中には久しい前からお才の姿がちらちらと浮び出すやうになつて居た。以前は一日家に居るのが退屈で無趣味で堪へられず、早く夜が更ければいゝと祈つて居たのに、お才が來てからは何となく自分の内が懷しいものになつた。殊更遊びの歸りなぞは、一刻も急いで家へ戻つて、お才の顏を見たく思ふ。相方に振られても、卯三郎に茶かされても、お才の事を考へれば悲觀する事はなくなつて、どうやら一道の光明が輝いて居るやうな心地もする。

「下らぬ女を相手にして、下らぬ事に金を遣つて、これ程馬鹿らしい話はない。そんな眞似をするよりか、お才と云ふ者が居るではないか。」

人の好い巳之介は、いつでもお才が自分の自由になるやうに考へ込んで、女郎買ひに憂身を窶す今の自分の行動を、彼の女に對して濟まないやうにさへ思つて居る。其の癖彼はまだ一遍も、先方の意志を尋ねた事はないのである。たゞ密かに彼の女の身元を洗つたり、親許の狀態を搜つたりして、僅かに滿足するばかりであつた。

彼の探索した結果に依れば、大分お才の境遇に付いては如何はしい點がないでもない。彼の女の親父の鳶職と云ふのは、大酒飮みで、喧嘩好きで、非常な慾張り者だと云ふ。あの慾張りがどう云ふ譯で、

器量の好い一人娘を、藝者に賣らずに堅氣な處へ奉公させたかと、近所では訝つて居るくらゐである。それも本人のお才が藝者になるのは嫌だと云ふなら知らぬこと、なか／＼そんな心掛けの娘ではない。十六七の時分から、仲間の鳶の好い男と浮名を立てられて、隨分評判の撥ねつ返りである。事に依つたら上州屋の財産を目あてにして、道樂者の若旦那でも蕩すつもりではあるまいかと、立ち入つた邪推を試みる者さへある。——こんな噂を巳之介は兩國邊で聞いて來て、却つて頼もしいくらゐに感じた。成る可くならば噂の通り、「若旦那を蕩す積り」であつて欲しい。此方はすでに「蕩される積り」で待ち構へて居るのである。

有體に云へば、今迄一遍も女にちやほやされた事のない巳之介は、その噂を耳にしてから、お才にならば振られる恐れはなからうと云ふ、一種の安心を持ち始めた。自分の方から何とか一と言口説きさへすれば、直ぐにも「うん」と云ふであらうと、其れを樂しみにしながら今日までもじもじと躊躇して居るのである。「承知はするに極まつて居る。」と信じつゝ、どう云ふ風に切り出したものかと、毎日考へ暮らしては相手の素振りを窺つて居る。

けれども肝腎のお才の方は、巳之介に對して一向そんな態度を見せない。撥ねつ返りと云ふ評判は、兩國邊の人々が本人の口眞似までして頻りに取り沙汰するけれど、到底本當とは思はれぬほどにしとやかである。猫を冠つて居るのだらう。そのうちには化けの皮が剝げるだらうと、巳之介は内々期待して居るのに、いつ迄立つても容易にそんな氣はひは見えない。色を賣るのを商賣にする遊女に對してさへ、何だか秘密がありさうで打ち解け難く思はれる巳之介には、猶更素人の女の腹を了解しかねて、うつか

り言ひ寄る術もなかつた。「若旦那はあのお才に思召しがあるのでせう。」と、先(さつき)卯三郎に道破された時、さては餘所目にも判つて居たか、卯三郎に氣が付くくらゐなら、定めし本人のお才にも念が屆いて居るだらうと、甚だ心細い事を便りにして、彼は嬉しさのあまり笑ひ崩れたのである。さうして、今日までぼんやりと脳中に潜んで居た戀慕の情が、俄に激しく燃え上つて、もはや一日も制し切れない程に切迫して來たことを感じた。

「ねえ卯三どん、實は彼奴を口說いて見ようと思つてるんだが、どうも素人と云ふ奴はまだ一遍も手がけた事がないもんだから、何だか勝手が違ふやうでちよつと閉口して居るのさ。成る程悧巧な女かも知れないけれど、表面(うはべ)は馬鹿に大人しいから、迂濶に冗談も云へやしないぜ。」

巳之介は「素人を口說く法」に就いて、密かに敎を乞ひたいのであるが、下手(したて)に出るのもいまいましいと考へたのか、こんな負け惜しみを云つた。

「あはゝゝゝ」と卯三郎は空を仰いで笑ひながら、「だからあなたは甘いもんだと云ひたくなるんです。女を口說くのにそんな遠慮をして居た日にやあ、幾年立つても埓の明きつこはありませんや。得て素人の娘と云ふ奴は、年頃になるとみんなあゝ云ふ鹽梅式に、乙う澄まして居るもんですが、あたつて見るとあれで案外雜作なく承知するから妙ですよ。私に云はせると、お才なんざあ誰かゞ口說きにやつて來るのを、待つて居るやうな女でさあ。構はないから一番ぶつかつて御覽なさい。二つ返辭でおいそれと云ふにきまつてますぜ。ほんとに私が請け合ひます。」

「ひどくたしかな事を云ふが、お前は素人を口說いた覺えがあるのかい。」

「なくつてどうするものですか。その御念にやあ及びませんよ。」

卯三郎は得々として肩を聳やかした。嘘か本當か解らないけれど、人情本に出て來る素人の娘なぞも、金のある若旦那に口説かれゝば大概承知するやうに書いてある。思ひ切つて本人に打ち明けたら、よもやお才が嫌だとは云ふまい。——から云ふ安心が、家へ歸り着く頃までには巳之介の頭の中へ立派に築かれて了つた。

上州屋と云ふのは吾妻橋に近い馬路の大通りにあつた。「吳服太物處、上州屋善兵衞」と筆太に染め出した紺の日よけが、晝間になれば間口の廣い店先へ景氣よく曝されるのだが、二人の戾つて來た時はまだ家の中は寢靜まつて、表口の戶が嚴重に鎖されて居た。乳待山の鐘が漸う六つを打つたばかりで、廓がへりの駕籠の外には、往來の人通りも稀である。二人はいつものやうに路次へ廻つて、勝手口の井戶側を踏み臺にしてこけら葺の物置きの屋根へ上つた。其處から四つ這ひに這ひながら奉公人の寢泊りして居る店の二階の物干しへ乘り移つて、窓の雨戶を輕く叩けば、中から子僧の千太郎がそつと開いてくれるのである。卯三郎は其の場で直ぐに蒲團へもぐつて寢たふりをしてしまふ。巳之介の方は更にひとりで奧の居間まで、こつそり忍んで歸らねばならない。一旦店の二階を降りて、臺所の竈の前を通り過ぎて、善兵衞夫婦の寢て居る坐敷と壁一と重の廊下を越えれば、もう大丈夫である。あとは中庭に添うた長い緣側を窃み足で渡つて、再び奧の間の梯子段を上ると、其處に八疊と六疊の二た間がある。六疊の方には今年十六になる妹のお露が臥せつて居る。巳之介が寢るのは八疊の座間の方であつた。

兄妹の居間の境には、四枚の襖が立てゝあるばかりで、お露は夜な〱巳之介の拔け出す事を滿更知

らない道理はない。巳之介の方でも、お露がうす〳〵感付いて居るだらうと推量して居る。丁度二人の寢室の眞下にあたる階下の坐敷には、母親のお鶴が居るのだけれど、此れとても巳之介の行動をあらかた承知して、大眼に見逃して居るらしい。たゞ疑問なのは主人の善兵衞夫婦である。家中で巳之介の非行を知らない者は一人もないのに、善兵衞夫婦ばかりは全く心付かずに居るのか、心付いても知らぬ顏を裝つて居るのか、端から見てはさつぱり判らない。知つて居るなら意見をするのが當り前、知らずに居るならあんまり迂濶過ぎて居る。と、巳之介自身ですら考へる事がある。

斷つて置くが、善兵衞と云ふのは巳之介の父ではない。父は七八年前に亡つて、彼は惣領の兄として上州屋の家督を讓り受けたのである。彼と巳之介との間にまだ二人の兄弟があつたけれど、それも今迄に死んで了つて、巳之介とお露と、二人の弟妹が殘つて居るばかり、久しく夫婦に子供が出來ないので、將來は巳之介に後を繼がせる算段をして居る。善兵衞が今の上さんのお澤と云ふのを嫁に貰つてから、どう云ふものか母のお鶴との折合があまり面白くない。何かと云ふと、お鶴は善兵衞夫婦を眼の敵にして、巳之介とお露を面あてがましく可愛がつて居る。「お父さんが居ないので、ほんとにあの子たちは可哀さうだ。」と二た言目には嫌味をならべる。それ故善兵衞も二人の弟妹に對しては、萬事控へ目に振舞つて、成る可く意見などはしないやうに努めて居る。今日此の頃の巳之介は、心私かに善兵衞夫婦を煙つたく思ひながら、叱言を云はれる恐れがないのをいゝ事にして、ます〳〵附け上つて了つたのである。

肝腎のお才が寢て居る所は、やはり奥の間の階下の四疊半で、お鶴の部屋の次ぎの間であつた。そこ

に彼の女は、朋輩のお蔦と云ふ小間使ひと枕を列べて眠つて居る。丁度その部屋の外の縁側に厠があるので、巳之介は一晩に一遍づゝ必ず小用を足しに行きながら、そつと室内の寝息を窺ふのが癖になつて居た。耳を澄まして聽いて居ると、二人の小間使ひの靜かな呼吸が、いつもすうすうと微かに障子の外へ洩れる。巳之介は戀ひしさ懷かしさが、自分の胸へ惻々と迫つて來るやうに覺えて、思はず小聲で「お才……」と、呼んで見たくなることが度び度びあつた。

二

いよ／＼お才を我が物にしようと決心してから、巳之介はばつたりと惡所通ひを止めにして、辛抱強く家にばかり籠つて居た。其の癖始終そはそはと立つたり居たりして、少しも一つ所に落ち着いて居ない。晝の間は店に据わつて、帳場の仕事を助ける筈になつて居るのが、暇さへあれば臺所へ出張して女中達と無駄話を始めたり、奥の間へ舞ひ戻つて母親やお露の機嫌を伺つたり、まるで吉原の茶屋坐敷にでも居るやうに誰彼の差別なく輕口を叩き冗談を吹きかけて、ひとりで浮かれ廻つて居た。何が其れ程嬉しいのやら自分でもよく解らないが、他の女たちと一緒になつて笑ひ轉げるお才の顏を窃み視るのを樂しみに、毎日毎日時間を空費するのである。「ほんとに若旦那は氣さくな方だ。瓢輕(ひやうきん)な方だ。」と家中一統の者に、――殊にお才に思ひ込ませてしまひたいのが、巳之介の望みなのである。かうしたならば、お才の方でもきつと打ち解けて來るであらうと、巳之介はそればかりを頼みにして居た。

しかしお才は憎い程濟まし込んで居る。巳之介の氣障(きざ)たつぷりな駄洒落まじりの冗談を傍で聞きなが

ら、たゞにこにこと微笑むだけで、用事がなければ別段直接に言葉を掛けようともしなかつた。

「おいお露ちやん、此れ申しお露さまっ」

と、或る日巳之介は例の狂ひじみた身振りをして、嫌味たらしい、でれでれした體つきで、お才と一緒に針仕事をして居る妹の前へやつて來た。

「……私が斯うして呼んで居るのに、御返辭がないとは情けなうがす。兄きの口から云ふのもおかしいが、お前は此の頃ちいつと色氣が附いたと見えて、乙う氣取つて居なさるやうだ。そいつあ惡い了見だから、お止めになつたらいかゞでげすね。」

かう云つて面と向つて畏まつたまゝ、生え際の美しいお露の富士額をまじまじと視詰めながら、よく幇間などがするやうに、鼻をしかめて蛸のやうな顔をした。

「おほゝゝゝ」と、お露は直ぐに兩頰を眞紅に染めて、緋鹿子ちりめんの布のかゝつた可愛らしい唐割子の頭を、薩摩がすりの單衣の袂の上に突伏してしまふ。

「あたしよりも巳之ちやんの方が餘程どうかしてるぢやないか。毎日々々惡ふざけばかりして居てさ。」

「はて失禮なことを云ひなさる。妹の分際で、此の巳之介を捕へて、餘程どうかして居るたあお前もなか〳〵口が惡いぜ。お前の眼からは何と見えるか知れねえが、此れでも巳之ちやんは色男さ。上州屋の若旦那の爲めならば、是非とも苦勞がして見たいと云ふ、レツキとしたのが二三人も着いて居ようてんだから、憚りながら結構な御身分さね。たとへ兄妹でもお前のやうなお多福とは大いに譯が違ひやすよ。えへん。」

と云つて、巳之介は眼を圓々とむき出して、妙なしなを作りながら、三度に一度はお才の方を媚びるやうにちらりと振りかへる。

お多福と罵られたお露の顔立ちも、兄に比べれば遙かに上出來で、十人並の器量である。別段取り立てゝ褒める程の特長はないけれど、小柄で色白で、ふつくらとした下膨れの輪廓に何處となくあどけない風情を含み、些細の事にも轉げて笑ふ眼元口元に、こぼれるやうな愛嬌が湛へられる。若しも其の隣にお才が並んで居なかつたならば、此の女も相應な別嬪に見られるだらうと、巳之介は腹の中で考へた。髻をはらりと解けば瀧津瀬のやうに波を打つて流れ出すかと思はれる多量の髮の毛の、大型の島田髷を心持ち俯向き加減に、丹頂の項のやうなすつきりした頸筋を棒縞の單衣の襟元から柔かに屈ませて、母親の着物らしい眞岡木綿の小紋の浴衣を縫つて居るお才の姿は、成る程小間使ひなどにして置くのは勿體ないほど美しく水際立つて居る。子供の時分兄の善兵衛に伴れられて、江の島を見物に行つた折、巳之介は高い高い稚兒が淵の斷涯に立つて遙かな脚下の絶壁に碎ける怒濤の白泡を望みつゝ、眼が暈むやうな氣が遠くなるやうな不思議な戰慄を感じた事がある。丁度それと同じやうに體中が總毛立つて、鳩尾の邊がひいやりとする程の強い動悸が、お才の美貌を見る度毎に起つて來る。稚兒が淵の斷涯よりも深さうな、碧瑠璃の波の色よりも鮮かなお才の瞳に行きあたると、彼は何だか自分の持つて居る魂だの精力だのと云ふものが、凡べてその中へ一と呑みに吸ひ込まれてしまひさうに誘惑される。妹のお露を相手にして、さも無邪氣らしく無駄口を叩いて居る最中ですら、胸の中にはお才の幻が一杯に塞がつて居て、その婀娜つぽいなめらかな手足を憧れ慕ふ醜穢な情慾が、ぐらぐらと頭痛のする程昂進して居る。

そんなに戀ひしく思ひながらも、一遍に心置きなく眺め盡すことが出來ないので、ちらちらと遠慮深い横眼を使つては、顏の各部分を少しづゝこつそりと浚つて來るやうに窃み視る。巳之介が最も屢々横眼を使つて、見惚れることを禁じ得ないのは彼の女の鼻つきと唇の肉の色である。圓顏のお露とは反對に、ぱつちり開いた兩の眼瞼の下から膨らがる豐かな頰が、鯛の腹部の皮のやうに長くたつぷりと張り切つて、やゝ險しいくらゐに先の尖つた頤の端まで、美しい卵形に行きわたつて居る。そのたるみのない、艶々と伸びた頰の筋肉の附け根のあたりを、一寸ばかりちよきんと鋏で切つたやうに紅い可愛らしい唇が開いて居る。小ひさいわりには分の厚い下唇が、いつも濕氣を帶んで底光りがして居るのを、巳之介は溜らなくなまめかしい物に思つて居る。さうして彼が何よりも見事に、何よりも近き難く覺えるのは、あまり立派に整ひ過ぎて冷酷らしい感じを與へる彼の女の鼻の形であつた。幾度となく見れば見る程お才の鼻筋は高く嚴かに引き締まつて居て、うつかりつまらぬ冗談を云へば、忽ちふゝんと彈かれてしまひさうな心地がする。吉原へ通ふやうになつてから、隨分澤山の華魁に會つて、美人と云はれる女の數々を知つては居るが、一人としてお才のやうな圖拔けた器量の者はなかつた。あの女郎たちをお才に比べると、まるで神樣と獸ほどの相違があつた。その相違の重な原因は、どうしても此の完全な鼻の形に存するのであるらしい。妙に肉ばかり肥えて居て低過ぎたり、いやにとげとげと高く聳えて段がついて居たり、缺點のない形と云ふのは珍しいものだのに、お才の鼻は肉附きと云ひ、高さと云ひ、顏全體との釣合ひと云ひ、わざ〳〵注文して拵へさせても、これ程申分のない品物は得られさうにも思はれぬ。

巳之介の心を惹きつけるのは啻にお才の容貌ばかりではない。手でも足でも肩でも腰でも、體中のあ

らゆる部分に何とも云はれぬ色氣があつて、ぴつたりと身に着けて居る着物にまで、包むに餘る婉麗な匂がこぼれて居る。二本の股を行儀よく揃へて畏まつて居る時、柱に凭れつゝ脛を組み合はせて彳んで居る時、後ろへ開いた兩脚の踵の間へ臀を落して、ぺたんこに据わつて居る時、いろ〳〵の位置に四肢を飜動させるに從ひ、單衣の背すぢや袂に簡單な皺の寄る鹽梅までも、巳之介には恐ろしく媚びを含んで居るやうに感ぜられて、一つ一つの姿態の甘味を、逃さず見覺えて了つて居る。お才の身邊から絕えず放たれる無限の魅力に彼の神經が驚けば驚く程、彼はいよ〳〵臆病になり空々しくなつて、卯三郎の忠告を斷行しようとする勇氣などは、何處か遠くの方へ消し飛んでしまふ。

「ねえお露ちやん、お前も色氣が附いた以上は、此れから大いに氣を付けないといけませんよ。惡い事は申しません。此の巳之介がいゝ手本でげす。」

かう云つて、彼は片手で頤をさすりながら、片手で扇子をぱちりと彈いた。「全くの話でげす。私のやうな堅造でも、色氣が附くとからつきしだらしも何もなくなつて、妹にまでも馬鹿にされやす。お前がいくらお多福だつて、世間には隨分好きな野郎が居るから、そろそろ油斷が出來なくなりやす。ほんたうに少しだつて眼が離されやしませんぜ。」

「餘計なお世話でございますよ。巳之ちやんのやうな色男と違つて、あたしはお多福なんですから。」

「へん、お多福だからお多福だと申し上げたのに、そんなにお怨みなさるものぢやございません。若しも噓だと思し召すなら、お才に聞いて御覽じろ。……ねえお才。」

巳之介は首を長くして、二三度眼瞼をまぶしさうにはためかせた。たつた此れだけ喋舌つただけで、

もう胸板がどきどきと鳴つた。

「若旦那はお口が惡くつて入らつしやいますこと、お露樣がお多福だつたら、私なんぞは耳が痛うございます。」

例の卵形の頬の兩側がむつくり持ち上つて、お才の唇はにやにやと笑つた。孔雀が翼を擴げたやうな華やかな輝きが、端正な目鼻立ちの全體を一度にぱつと搖がせたかと思ふ間もなく、忽ちもとの冷酷な表情に復つて了ふと、巳之介は二の矢を番へる機會がなくなつて、再びお露の方へ附き纏はる。同じ笑ひ顔でも、お才とお露とでは格段に趣が違ふ。初めの二三度はお露の顔にも初ひ初ひしい愛嬌が見えて、可憐な所もあるやうだが、あまり度び度び笑はれると、締まりのない輪廓が、いやが上にも歪み壞れて、遂には毒々しい感じを與へる。散々ふざけ拔いた末に、「何と云ふ醜い面つきの女だらう。生れづきとは云ひながら、せめては笑ひ方だけでも、お才の眞似をするがいゝや。」と、やけ半分の巳之介は心の底で勝手に妹の惡體をついて、又ふらふらと店の方へ戻つて行く。

入梅前の、四五日續いてからからに晴れ渡つた新鮮な日光が、馬路の往來を夏らしい色に照らして、軒先の暖簾がびいどろの鏝のやうに明るく光つて居る。上り框に腰かけて居る四十恰好の上さんを相手に、中形の浴衣地を三四尺の高さに積んで、眞鍮の煙管をすぱすぱやつて居た卯三郎は、やがてお客が歸つて了ふと「毎度有り難うござい。おわい」と怒鳴つて帳場の方を振り返つたが、幸ひ主人の善兵衛が其處に見えないと氣附くや否や、

「若旦那ちよいと」と云つて、顋をしやくつた。

「どうです今のお上さんは、少々年は姥櫻だがいゝ女ぢやございませんか。ありやあ並木の袋物屋の後家なんで、私に内々惚れて居るから妙ですぜ。店へ買ひ物に來るたんびに、きつと私のところへ來るから、今度見て居て御覽なさい。——ところで若旦那、あなたの方はいかゞなんで。」
「もう大丈夫、鐵の脇差さ。お露の奴を玉に使つて、お才をまるめ込んだ奴さ。」
「首尾よくうんと云ひましたかね。云つたら何かお奢んなさいよ。」
「まだ其處までは行かないんだが、あの工合ぢや案じる事はありあしない。」
「まるめ込んだと仰つしやるからは、ちッたあ手答へがあつたんでせう。どんな調子で持ち込んだのか私に話しても宜うがせうが。」
「だつてお前、まさか妹の居る前で短兵急に突込む譯にも行くめえがな。たゞそれとなく冗談を云つてちよいと瀨蹈みをして見たのよ。」
「ヘッ、日が長えや。」卯三郎は吐き出すやうに云ひ放つた。「痴人が鯔釣りに行きやあしめえし、餌を食ふまで待つて居たんぢや、痺れを切らしてしまひますぜ。毎日犬の遠吠え見たいにふざけ散らして居るばかりぢやあ、根つから榮えない話さね。」
巳之介の顏は氣の毒な程眞赤になつて、煮え切らない苦笑を浮べたが、眼は悲しさうに濕んで居た。
夕方の六ッ時分から小半時ばかり、巳之介は兩國の廣小路を行つたり來たりうろついて居た。急に親

許に用事が出來たから、半日お暇を頂きたいと、ゆふべお才が母親に頼んで居たのを小耳に挾んで、彼は早速彼の女の歸りを待ち伏せする氣になつたのである。

「日暮れまでには戻つて參ります。」と云ひ殘して、今朝がたお才が出て行つてから、間もなく巳之介は晝飯もそこそこに飄然と店を飛び出した。それから直ぐに兩國までやつて來たものゝ、あまり時刻が早過ぎるので、お才の家の前通りを二三度ぐるぐると徘徊したが、容易に出て來るけはひは見えない。しよう事なしに橋を渡つて、垢離場のおでゞこ芝居を覗いて、與兵衛の鮓を二人前喰べて、再び廣小路へやつて來た。其の日は今年になつてから、一番暑さが激しくて、空の光も大地の色も、すつかり眞夏の裝ひを凝らし、往來の人は大概白地の浴衣を纏つて居た。家を出る時巳之介はおらんだ織りの肌襦袢に餘所行きの結城紬をそつと着込んで二本獨鈷の角帶を締め、極く內證で薄化粧さへ施して來たが、今日こそお才を口說き落すのかと思へば、何だが頻りと自分の男振りが案ぜられる。

待ちに待つた涼しい黃昏が、漸く街をうす暗くして、賑やかな大通りの店先に灯の影が二つ三つ點ぜられる頃、寄席の行燈の懸つて居る米澤町の曲り角から、水の滴るやうなお才の姿が、夕闇にほんのりと浮かび出た。實家で着物を着換へたものか、今朝とは服裝がまるで違つて、湯上りのお白粉の濃い襟足へ、市松格子の粋な浴衣の拔き衣紋も鮮やかに、眞白な素足の指が半四郎下駄の鼻緒を嚙んで少し急ぎ足に步いて行くあでやかさ。見るから凄艶な、ぞつとするやうな後ろつきを心で伏し拜むばかりにして巳之介は淺草橋の橋詰まで追つかけて來たが、そこでとうとう聲を掛けた。

「あら若旦那でございますか。今頃どちらへお出でになります。」

「どちらへお出でになるもんか。お前の歸りを實は疾うから待つて居たのさ。」

かう云つた巳之介の台辭は、可なり上出來の方であつたが、やはり何處かに極まりの惡るさうな調子が見えた。

「ゆふべお前が寢る時に、そつと袂へ入れてやつた私の手紙を、大方讀んでくれたゞらうなう。」

「はい讀むことは讀みましたが、あれはほんたうでございますか。」

女の方は意外に眞面目で、きつと相手を視詰めたまゝ詰るやうに反問する。

不斷はいくらお喋舌でも、いざと云ふ場合に滿足な口の利けない巳之介は、かう云ふ事もあらうかと豫測して、ゆふべ内證で附け文をして置いた。「お前が内へ奉公に來たその日から、私はぞつこん惚れ込んで了つた。」とか、「此の頃の私の樣子は大概お前にも判るだらう。」とか、「承知をしてくれさへすれば、先へ寄つたら必ず嫁に貰つてやる。」とか、巳之介は有りつたけの智慧を絞つて、殺し文句を長々と手紙の中へ認めたのである。

「わたしのやうな人間を、それ程思つて下さるのは眞實うれしうござんすが、何だか私あ欺されて居るやうな氣がするのでございますよ。ゆふべのお手紙を讀んだ時も、大方此れは夢ぢやあないかと、疑ぐつたくらゐでございますのさ。」

「えへゝゝゝ、お前も大さう口がうめえの。大方夢かも知れないが、夢だとすりやあちツとも早く覺めて欲しいと云ふ謎かね。」

もう七八分は大丈夫だと安心の出來た巳之介は、足元が顫へるやうな喜ばしさを我慢して、唇に浮か

び出る笑ひの痕を無理やりに包みながら、能ふ限り餘裕のありさうな風を示した。
「あら若旦那、そんな譯ぢやあございませんよ。夢にしたつて勿體なうござんすけれど、私のやうな野暮な人間に、何處がよくつてあんな手紙を下すつたのか、それが不思議でなりませんから、念を押すのでございますよ。」
「其奴あ御念が入り過ぎやした。何處がいゝの惡いのつて、お前の器量に惚れなかつたら、惚れる女はありやあしねえぜ。自分の顔を鏡で見たら、お前も大概わかりさうなものぢやあないか。」
「まあ若旦那はお口のうまい。なんぼ私が正直だつて、お嬲りになつては嫌でございます。あの別品のお露樣でさへ、若旦那はお多福だと仰つしやつたぢやあございませんか。」
「お前とお露たあ、月とすつぽん程ちがつて居らあ。」
巳之介は子供のやうな聲を出して、ひどく好い氣持ちになつて云つた。さうして帶の間から扇子を引き拔いて、照れ隱しに自分の首筋をぽんぽんと叩いた。二人が丁度藏前へさしかゝた時分に、戸外はどつぷりと暮れ果てたが、空にはまだ薄明りが殘つて居て、厩河岸の上の方から、まんまるな夕月が淡い光をしろじろと投げた。
「ねえ若旦那」と、お才は梅花の油のむつとばかりに鼻を刺す横鬢を、男の肩先へ擦れ擦れにして、甘へるやうな口吻で訴へ始める。
「たとへ口ではどんな上手を仰つしやつても、若旦那のお腹の中はちやんと解つて居りますのさ。私に惚れたと仰つしやるのは、ほんの一時の氣紛れでござんせう。浮氣の蟲が起つたばかりに、私を欺して

厭きやうと云ふ了見でございませう。どうせ半月か一と月で飽かれて了ふくらゐなら、私も口惜しうございますから、一層心を鬼にして、お言葉に從ふまいかと存じて居るのでございます。先々の事を考へたらさうした方が結句お互ひの爲めですから……」

「はてさてくどい女だなう。何を證據にそんな邪推をしなさるのだ。欺す積りの氣紛れのつて、さうした心は微塵も持つちや居ないんだから、ずんと安心したがいゝわさ。」

巳之介はぞくぞくと寒氣がする程の愉悅の情を、胸一杯に漲らせて、肩から上をいやに氣取つて搖振らせた。長い間女郎買ひをした經驗はありながら、假りにも女と名のつく者に、こんな優しい濃艶な會話を交換した事は、實際今宵が初めてゞある。彼は今迄に此れ程情の籠つた言葉を、女から言ひ掛けられた覺えもなく、此れ程己惚れの强い文句で、女をなだめた例もない。何だか自分が、急に芝居の二枚目役者に髣髴とした色男になつたかと感ぜられて、恐ろしく溜飮が下るやうな心地がする。こんな所を一番卯三郎に見せてやりたいと、彼は私かに得意になつた。

「でも若旦那は、何處ぞにちやんといゝ人がおあんなさるのぢやございませんか。」

「おかしな事をお云ひだね。當人には一向覺えのない話だが、全體お前はそんな話を、何處から聞いて來なすつた。」

「いくら恍けて居らしつても、知つて居るから駄目でございます。ねえ若旦那、毎晩のやうにお店の卯三どんと一緒になつてこつそり忍んでお出掛けになるのは、あれは誰方でございます。」

「あはゝゝゝ。こいつあ私が惡かつた。」と、巳之介はさもさも道樂者らしく仰山に頭を掻いて、「そい

つを知つて居られちやあ、面目次第もない話だが、實は私は此れまでに兄きとお母の眼を掠めて、隨分遊び廻つたものさ。だがから云ふとお前の前でお世辭のやうにも聞えるだらうが、仲の町の華魁なんて云ふものは、子供だましの金魚のやうに毒々しいばつかりで、からッきし面白味のない代物さ。だから私も此の頃ぢやあ、つく〴〵愛憎を盡かして了つて、とんと足踏みをしやあしねえ。」

「若旦那の方ぢや愛憎が盡きたと仰つしやつても、先があなたに惚れて居るから、默つて居る筈はござんすまい。そこはやつぱり私のやうな野臭な素人の娘とはてんで畑が違ひますから、馴染になればなるだけ可愛くおなんなさるでございませう。」

「野暮だ野暮だと云ひなさるが、お前のやうな粹な女は、仲の町は愚かな事、辰巳の羽織を尋ねたつてめつたに居やあしないから。………」

嬉し紛れに夢中になつて、たわいのない戯辭の遣り取りを樂しんで居た巳之介は、雷門の近くまで來ると、そろ〳〵心がやきもきと焦ら立ち始めた。考へて見れば先から同じ問答を繰り返すばかりで、一向要領を得て居ない。こんなにお才が打ちとけて、冗談交りに話をする樣子では、兎に角自分を嫌つて居るのではないらしい。しかしお才の今の態度から、直ちに自分の申込みを承諾したものと斷言してもよいのであらうか、まさかに間違ひはあるまいけれど、あんまり早や呑み込みをして、後で手酷しく拒否された日には、飛んだ赤耻を掻くばかりか、やつと此れまでに漕ぎ付けた段取を滅茶滅茶にしてしまふ。それなら一應明確な返答を促して、充分に懸念を去つて置く方が順序であらうか。――成る程順序には違ひないが、若しも先方が今迄に其れとなく承諾の意志を仄かした積りだとすれば、いやに執拗く

駄目を押すやうで、通人にも似合はない不粹な行爲である。折角お才が自分の事を「通人の若旦那」だと思つて居るのに、目先の利かぬ眞似をして、うつかり信用を落したら大變である。「女と云ふ者はたとへ内には色氣があつても、面と向つて尋ねられゝば、なか〳〵『うん』とは云はないものです。」と、嘗て卯三郎が敎訓をした事もあるのに、萬一明確な返辭を要求して、心にもない斷りなどを云はれたら却つて餘計な打ち壞しになる。どうしたものであらうかと、巳之介は暫く煩悶して居たが、結局もう少し手がゝりのある言質を得ないで、此のまゝ別れて了つたなら、今後さつぱり事件が進捗しさうもない。いづれにしても何とか急所を突き止めて置く必要があると思はれた。

「ねえお才、内の近所へやつて來たから、お前は此處邊で一と足先へ歸つて貰はなきやならないが、乙にからんだ挨拶ばかり聞かせずに、さつぱり返辭をしてくれないか。ゆふべの手紙を讀んだからには、何とかお前も考へて置いておくれだらう。これ程私が口を酸くして口說いて居るのに、あんまり察しが惡いぢやあないか。」

「若旦那さへ御承知なら、私なんぞにいゝも惡いもございませんが……」と云ひかけて、お才は胸に手をあてゝ眼をつぶつたまゝ暫く考へに沈んで見せたが、やがて勿體ぶつた溜息と一緒に微かな聲で附け加へた。

「たとへ一時はお氣に召しても、あなたのやうな道樂の味を覺えた粹なお方に、いつ迄私が可愛がつて頂けるやら、それを思ふとほんとに心細うございますよ。」

「えゝまた何を云つて居るんだ。私の心がいまだに其方へ通じないとは、ても焦れつたい話だなあ。」

巳之介は懷ろ手をして、左右の袂をぶらんぶらんと振り動かして、だらしのない恰好で地圍太を蹈んだ。

「そんならきつとお見捨てなさらずに可愛がつて下さいますか。私のやうな正直者を、お欺しなすつちやあほんとに罪でございますよ。」

かう云つておつと男の横顔を視詰めたゞけで、お才の眦には千萬無量の媚びと色氣がこぼれて見えた。頭から水をかけられたやうな心地がして、巳之介が思はず襟もとを竦めた時、「若旦那、私はしみ〴〵嬉しうございますよ。」ともう一遍浴びせかけて、お才は雜作もなく相手の魂を蕩かせた。

三

五月の二十八日の、兩國の川開きの晩は二人が待ちに待つて居た機會であつた。其の日の夕刻の七つ時分に善兵衞夫婦は山谷堀から傳馬を出して、家族を始め奉公人を從へて見物に行くのが每年の例である。隱居のお鶴も妹のお露も手代の卯三郎も、一緒に出掛ける事になつたが、腹に一物ある己之介は、「兄きやお母と一坐をしたのぢやいつそ窮屈でかなはないから、私は私で今夜は今戶の大七へでも、一杯飮みに行きやせうよ。」と妙にひねくれた文句を並べ、わざと仲間を外れてしまつた。相手のお才も一體ならば隱居の供を云ひ附かる筈であつたのを、丁度前日に米澤町の實家の母親がやつて來て、「明日の川開きには內の二階へ親戚の女子供が集ること故、都合がよければ娘にも暇を與へて貰ひたい。」と云ふ口上である。どうせ花火を見せてやるなら、母親の賴み通り、實家へ歸つて心置きなく遊んで來るが好

から。」と、隠居は快く承知して當日の朝早くから出してやつた。

薄曇りのした頭の重い嫌な天氣が、晝過ぎからはからりと晴れて、暑さは相變らず酷しいけれど、どうやら誂へ向きの空模様となつた。内の奴等が出てしまつてから、先づゆつくりと風呂へでも漬かつた後、徐々に繰り出す事と了見を極めてた巳之介は、家族の者たちの忙しさうに支度するのを冷やゝかに眺めながら、其の癖顫るそはそはとして時の移るのを待つて居た。妹のお露は何故か此の頃馬鹿に化粧を凝らすやうになつて、半日も前から湯上りの體を兩肌脱ぎて鏡臺の傍へ据わり込み、ぽたぽたと汗の滲み出る太つた背中を頻りと女中に扇がせては、思ひ切り濃いお白粉を暑苦しさうに塗り立てゝ居る。

「何だいお前のその顏は。わるく洒落込んで居るぢやないか。」と、不意に巳之介に茶かされて、襟元から耳の附け根を火の出るやうに眞赤にしながら、なかなか鏡臺の前を離れない。漸く顏の作りが濟んで涼しさうな越後縮の晴衣の上へ、二人がゝりで女中が丸帶を締めさせる時分には、再び汗がびつしよりと丸顏の額やら頤やら首の周圍から雫のやうに滴り落ちた。それで折角のお白粕が剝げたと云つて、更に化粧をやり直す。昨日八百善へ誂へて置いた十五人前の仕出しの辨當が届いて、重箱を船へ積み込む頃ほひは、お露はやつとお母に急ぎ立てられつゝ、「巳之ちやん覺えてお居でなさい。」と、ムッとした顏つきで忙しさうに出掛けて行つた。

遠い空には、もうぽんぽんと花火を打ち上げる響が聞えた。大風の後のやうに人氣のなくなつた奥座敷にひつくり反つて、天井を視詰めたまゝ獨りで巳之介が悦に入つて居ると、

「へゝ若旦那、今日はまことにお樂しみで……」

から云つて、こつそりと這入つて來たのは卯三郎である。己れの容貌を充分に自信して居るせゐでもあらう、平生はいなせな事が大好きであまり邊幅を飾らぬ人間が、今日は不思議にきちんと服裝を整へて、すらりとした白上布の着流しに黄縞の八端の帶を結んで鴨居際に彳んだ男振りは、何と云つても濡事師だけの見だてはあると感心させられる。

「何だい卯三どん、お前は今日は出掛けないのかい。」

「なあに此れから參りますよ。ちよいとあなたにお目に懸つて行かうと思つて、一と足後へ殘つたまでさ。決してお邪魔は致しませんから、御安心なさいまし。」

「ふざけなさんな。」と、巳之介は臥ころびながらさも慵げに笑つて見せる。

「なかなか若旦那も隅へ置けなくなりましたね。何しろ仲の町時分と違つて、相手が頗る優物だから私もつくづく美しうございますよ。ちつたあ此方もあやかりたいもんでさあ。」

「お前なんざあこんな話はのべつぢやないか。此の頃だつて、何か又新色でもあるんだらう。」

「ところが更にござんせんや。あるくらゐなら、かう云ふ晩にやあ早速姿を晦ますんだが、しよう事なしに旦那のお供で、川開きなんか見に行つたつて、根つから有り難くもござんせんぜ。……しかし若旦那、今夜は一體どちらで首尾をなさるんですね。嘸やお才どんが待ちくたびれて居ませうから、早く行つておやんなさい。」

「そんな譯ぢやあ決してないんだ。」

毎々ながら巳之介は卯三郎の悟りの捷いのに少し面喰つて、わざとそ知らぬ風をする。

「いけませんぜお隱しなすつちやあ。かねがね兩人謀し合はせの、當人のお母を道具に使つて朝のうちから出して置いて、後から若旦那が乘り込むなんかは手筈にソツがないからね。全くあなたは軍師でげす。いや恐縮々々。」

と云つて頭を叩いて、皮肉かお世辭か解らぬ文句を並べた末に、「こいつはしまつた。大分時刻が遲れやした」と、俄かにあわてゝ駈け出して行つた。

「此れから巳の天下だ」と、云はぬばかりに巳之介は悠々と起ち上つて、出し放しになつて居たお露の鏡臺に自分の顏を映して見ながら、いつもの通りお白粉を眼立たぬやうに薄く塗つた。卯三郎に比較すると甚だ輪廓は醜いけれど、男のわりに色の白いと云ふ事が、彼は恐ろしく自慢なのである。それで成る可く其の特長を顯著にするために、いつでも人知れずお白粉を着けるのが癖になつて居る。元來色が白いのだから、少しぐらゐ塗つたところで、餘所目にわかる筈はなからうと、彼は何處までも己惚れて居た。

殊更今日は念入りに爪紅までも素足へさして、此の間わざ／＼新材木町の六門屋から金三分出して買つて來た、一樂表に黑さんとめの革鼻緒の雪踏を穿いて、茶微塵の絽の夏羽織を瘦せた肩先へ輕く引つ掛け、ぶらりと巳之介が家を出たのはもう薄暗い刻限である。ぽん、ぽん、と絕え間なく打ち上げる花火の音が八百八町へ響き渡つて、江戶中の老若男女が網に曳かれる魚のやうに往來と云ふ往來へぎつしり詰まつて、皆一樣に川筋をさしてぞろぞろと集まつて行く。暑さと嬉しさと人ごみの爲めに異常に昂奮した巳之介は心ばかりが無闇に焦つても容易に足が捗らず、やつとの思ひで吾妻橋際の雜沓を乘切る

と、其處から直ぐに駕籠を雇つて、飛ぶが如くに兩國へ走らせる。もうかうなると片時も早くお才に會はねば、損をするやうな心地がした。

二人が約束をした會合の場所は、お才の實家なのである。梅川にしようか、萬八にしようか、龜淸にしようかと、いろ〳〵柳橋近邊に適當な家を物色した揚句、さらでも人の出盛る宵に、料理屋などは餘計目に立つ恐れがあるから、一層米澤町の實家の二階が無事で好からうと云ふ事になつた。此等の計劃は凡べてお才の入れ知慧なので、きのふ親もとから其れとなく主人へお暇を願つたのも、彼の女がそつとお母(ふくろ)へ旨を含めた結果らしい。

「お前の内なら人目にかゝる心配はないが、私あ何だか極まりが惡い。おまけに親類の女子供が集まつて居ちやあ、何だかバツが惡いぢやないか。」

と、巳之介は最初二の足を踏んだが、お才は其れを打ち消して、「女子供が寄ると云つたのは、みいんな嘘でございますよ。花火の晩に内に居るのはお母(ふくろ)と嫂(ねえ)さんばつかりで、親父も兄も町内の番小屋に詰めて居ますから、むさゝろしいのさへ我慢なされば、少しも氣兼ねはございません。」と云つた。實際二人は今迄に、氣兼ねのない場所でゆつくりとくつろぐ折がなかつたのである。朝から晩まで隱居の傍に畏まつて居るお才が、主人やお露の眼を掠めて巳之介と語らふ時間は、ほんの夜半の一時(いつとき)か半時であつた。切つても切れない關係が出來て居ながら、いつ迄も窮屈な逢瀨を續けて居るのではやり切れない。どうかして今少し自由な會合が出來るやうな方法を講じて、いろいろ行く末の事なども相談したいと、巳之介は不斷から考へて居たのであつた。

藏前通りへと驅けて來た駕籠は、兩國邊へ近づくに隨ひ息杖をつく隙間もないやうな群集の波に揉まれて、行けば行くほど人垣はますます濃くなるばかりである。よんどころなく巳之介は乘り物を捨てゝ、東へ東へと流れて行く見物人の肩の間へ、遮二無二に割つて這入りながら、泣き出しさうにべそを搔き搔き押し進んだ。平生は日暮れに店を閉ぢて了ふ廣小路の茶店や寄席や見せ物など、川開きの晩から一と夏の間夜の營業を許されるのが毎年の例であるが、今夜ばかりは軒並に飾つた絹行燈や小提灯の賑ひも、たゞ人なだれの渦に埋まつて、方角さへもよく解らない。その凄じい人なだれが、虛空に花火の轟く毎に暫しぴつたりと進行を停めて、「玉やあ」「鍵やあ」と天に向つて怒濤の如き喝采の叫びを上げる。巳之介は頭の上に崩れ落ちる歡呼の聲を餘所に聞きながら、着物も羽織も滅茶滅茶にして、つい眼の先に見えて居る米澤町の曲り角迄、死ぬ苦しみで辿り着いた。

丁度お才の家の前は、向う側の屋根と屋根とが透いて居て、見物するには究竟らしく、一團の人影が黑山を築いて佇んで居る。幾度となく素通りをした覺えはあるが、鴨居を跨ぐのは今日が始めての家の格子をそつと開けて、巳之介は耻かしさうに御神燈の掲げてある土間へ這入つた。遠慮がちな聲で、「今晩は」と案内を乞ふ程もあらせず、足音を聞きつけて上り框へ驅けて出たのは母親である。

「まあ若旦那、ようこそおいで下さいました。」と、鄭寧にお辭儀を一つして、今度は梯子段の方を振り返つて、「お才や、若旦那がおいでなすつたよ。」と、甲高い調子で呼ばゝつた。

「あらさうかい。」とさも嬉しさうな返辭をして、お才はばた〳〵と足音荒く二階を馳せ降りながら、「おッ母あお前何をしてるんだな。そんな所でぐづ〳〵しないで、さつさと此方へお通し申すがいゝぢやあ

ないか。」と、いつもに似合はず傳法な言葉づかひで、突慳貪に母親を叱りつける。さうして巳之介を見てにつこりして、

「汚いところで嘸氣味が惡うございませうが、どうぞ二階へお上んなすつて下さいまし。あんまりお出でが遲いから、どうした事かと氣ばかり揉めて、私あほんとに待つて待つて待ちくたびれて居たんですよ。」と、親の見る眼も憚からず、しなだれかゝつて男の手を取り引き上げる。

「おほゝゝ。まあ若旦那御覧なさいまし。ちいッとばかりお出でが遲いとッて、無間矢鱈に癇癪を起して八つあたりにあたつて居るのでございますよ。ほんとに形ばかり大きくつても、からねんねえでございますのさ。」

神棚の前に立て膝をして、銅のおとしをてかてかと磨き立てた長火鉢に凭れたまゝ、かう云つて馴れ馴れしく笑つて見せたのは大方お才の嫂であらう。眼元に少し權のある、二十三四の垢拔けのした上さんで、ぢれつた結びの髮の結ひ振りから辨慶縞のあらい茶格子の着附けまで、かうした社會の下賤な空氣を氣味の惡いほど代表して居る。

二階は六疊と四疊半の二た間續きで、少し天井が低いけれど思つた程にむさくるしくはない。往來へ向いた窓の外には、星の降るやうな夜の空が見えて、折々吹き通す爽やかな風に、軒先の釣しのぶに懸つた風鈴がちりんちりんと鳴つて居る。それでもお才は暑い暑いと愚痴をこぼして、麻の葉の浴衣の袖から頻りに團扇を煽ぎ立てた。

「さあ若旦那、どうぞ御遠慮なさらずにもそつと彼方の窓の方へお寄んなすつて御覽なさいまし。幸ひ

此處から眞正面に花火が上るのでございますよ。」

かう云ひながら母親と嫂が上つて來て、兼ねて用意をしたものか、鯉のあらひに水貝の膳を運んで、何はなくとも酒の肴に一と口摘まんでくれろと云ふ。二人は窓際に顔を並べて、海のやうな戸外の騒擾を瞰下ろしつゝ、强ひられるまゝに暫く杯の數を重ねた。花火は二人の眼の前で次ぎから次ぎへと破裂しては崩れ落ちる。恰も堅い板の面へ龍吐の水をぶつけたやうに、青い火の玉がぶつりと割れて、今度が紅い蛇紋を描いて、たら／＼と流れた末が、粉の如く飛散して消え失せる。

「ねえ若旦那、折角のお召し物が汗で汚れて居るやうだけれど、構うことはございませんから、裸體になつてお涼みなさいな。……おッ母あお前も氣が利かねえ。何か着換への浴衣でも出して上げたらいゝだらうに、しやべるばかりが能ぢやあねえよ。」

お才は既に三分の醉を顔に發して、苦しさうな息の下から斯う云つた。

「成る程それもさうだけれど、若旦那の御召になるやうな立派な物はありやしないやね。」と、母親は思ひ出したやうに團扇を取つて、二人の體を煽いでやつたが、

「立派な物はないけれど、洗濯し立てのお才ちやんの浴衣があるから、いつそあれでも着せて上げたらいゝだらう。」と、傍から嫂が智慧を出して、押入の行李の底からなまめかしい中形の單衣を抽き拔いて來る。

「若旦那は體つきが女のやうに粋だから、此の娘の着物が似合ひますよ。」

と、母親に世辭を云はれて、巳之介は骨の髓まで泌み通る程の嬉しさを堪へながら、洗ひ晒しの藍の

色の剝げかゝつた、眞岡木綿の輕い袂をふわりと兩腕へ纏つて見ると、何だかお才の魂が自分の五體へ巻き着いて了つたやうに感ぜられる。

やゝ暫く四方山の世間話に機嫌を取り結んで居た母親と嫂が、好い加減の潮を見料らつて降りて了ふと、後の坐敷は誰憚らぬ差し向ひになつた。

「ほんの二杯か三杯で、あたしやほんとに醉つてしまつた。――こんな所をあなたに見せるのは初めてだけれど、愛憎を盡かしちやあ嫌でございますよ。」

お才は男の足元へ肘枕をして臥ころんだまゝ「あゝいゝ心持ちだ。久方振りで手足を伸ばして、何だか急に樂々とした。」と、水淺黃の蹴出しも露はに白い兩脛を行儀惡く突つ張つて、風に亂れた島田の鬢尻を邪慳に搔き上げる。その無作法な態度や動作が、男には又めつきり氣に入つて、妹のお露などに異似の出來ないいなせな味があるやうに思はれる。

「だが氣の毒なものさなう。あつたら器量を持ちながら、藝者になりやあいくらでも面白い目が見られるものを、堅儀な内へ奉公なんかしに來たのが間違ひなのさ。日がな一日あのむづかしい隱居の傍に据わつて居ちやあ、息子の私でも大概辛抱がし仕切れやしないぜ。」

「その辛抱を私がして居るのは、どなたの爲めでございませうね。」ぐるりとお才は腹這ひになつて、兩脚の踝を臀の上へ重ねながら、「ねえ若旦那、ちつとは察しておくんなさいな。」と、長い項を肩越しにひねらせて云ふ。

「察して居なかあないんだが、今のところぢや實際どうにも仕様がないんだ。兄きの奴は私に遠慮をし

て居るからどうやら始末はいゝけれど、煙つたいのはお母とお露さ。あの二人が奥の間に頑張つて居ちや、おちく話をする隙もありやあしない。……いつそ私が世話をするから、お前は何處か淺草邊の茶屋の女中にでも住み込んで、外で媾曳した方が當分都合がよさゝうだけれど、そんな譯にやあ行くまいかなう。」

此れは巳之介が疾うから考へて居た事であつた。其の方が便利であると信じながらも、面と向へば氣の毒になつて切り出しかねて云た腹の中を、今宵始めて打ち明けて見ると、案の定女は怨めしさうに巳之介を睨め付けた。

「成る程それであなたの方は都合がよくつて、嘸かしさつぱりなさるでせうが、少しは私の身の上も考へて見て下さいまし。茶屋奉公をするくらゐなら、あたしや初めから辛抱づらいお宅の小間遣ひなんか勤めやあ致しませんのさ。さうして私を遠ざけて置いて、だんだん捨てゝ了はうと云ふ御了見なんでせう。ほんとに若旦那、女殺しとはあなたの事でございます。」

「おい何を云ふ。お前を捨てゝいゝくらゐならこんな苦勞はしやあしないがな。たとひ一時は別になつても、先へ寄つたら必ず嫁に貰つてやると、此の間もあれ程云つて聞かせたぢやないか。」

「あなたはお口が巧いから、あんまりあてにやあなりませんのさ。いくら惚れたと仰つしやつても、現在惚れて居ない證據がちやあんと見えて居りますからね。」

「はて證據とは何事だらう。」

「その證據には私を內から追ひ出さうとなすつて居らつしやるぢやあございませんか。現在惚れて居る

ものが、何で私に茶屋奉公をさせますものか、まあ考へて御覽なさいまし。私が茶屋の女中になつたらたとへどれ程お多福でも、外に男を拵へやあしないかと、惚れて居るなら心配するのが當り前でせうけれど、若旦那にやあそんな心は微塵もおあんなさいませんのさ。此方の胸の中も知らずに、何ぼ何でも薄情過ぎる。」

お才はいつになく聲を潤ませ、兩手の甲へ顔を俯伏して、泣いて居るのか怒つて居るのか死んだやうに默り込んで了ふ。

「まさかお前が外の男を拵へるやうな、そんな浮氣な女たあ私やあ思つて居ないから。……」

かうは云つたが、其の實巳之介には適當な辯解の辭が見付からなかつた。正直を云ふと、彼はお才に惚れて居るにも拘らず、そのやうな嫉妬を今迄決して起した事がないのである。彼は飽く迄も己れが上州屋と云ふ大身代の後繼者たる事を頼みにして居て、其れ程の自分が嫁にしてやると誓つた上は、いかに多情な女でも外の男に乘り換へる筈はなからうと云ふ確信を頭の奥に深く貯へて居るのである。而もさう云ふ卑怯な安心が、知らず識らず彼の己惚れを助長して、自分がお才よりも強者の地位にあるやうに思ひ驕つて居た。

「これさお才、もしお才さんへ。」巳之介は惡くはしやいで、冗談交りに女の肩を撫でゝやりながら、「まあどうしたと云ふんだな。お前が嫌なら強つてさうしろと云やあしまいし、何 そんなに鬱がないでもいゝぢやあないか。」と、散々宥め賺してもお才はいつかな承知せず、ます〳〵拗ねて側方を向いて、「知りません知りません。」とばかり同じ文句を繰り返しては、頻りに涙を啜欷り上げる。戸外の風は止んだ

らしく軒の風鈴も鳴りを靜めて、じつとして居ればぬら〳〵と油汗の湧くやうな暑熱が、しんとした座敷の中に蒸し蒸しと襲つて來る。屍骸の如くぐたりとなつた女の胴體を、前後左右へ無上に揺す振つてひどく骨を折らせられた巳之介は、とうたう自分も疲れ切つてぼんやり窓に凭れたまゝ、腐つたやうに崩の下つた島田の髮の恰好を視詰めて居ると、

「そぢやあ若旦那は、やつぱり私を今迄通り、お宅の女中に使つてやると仰つしやるんでございますね。」

不意にお才はかう云ひながら不承無精に起き上つて、晴れ晴れとした眉を開いた。

「何を云ふにもまだ部屋住みの身の上ぢや、どうする事も出來ないけれど、いづれ其のうちお母に相談をして表向きの話にするから、當分内の小間使ひで我慢をして居て貰ひたい。」

「我慢するなと仰つしやつても、私やあなたのお上さんになれるまでは、だにのやうに喰着いて居りますから離れる事ぢやあございませんよ。」

「あはゝゝ、ほんとにお前はだいつ兒だなう。今啼いた烏が笑つて居るぜ。」

それで漸う巳之介も安心をして、機嫌直しに又杯を取り上げれば、お才はぐつとにじり寄つて男の膝へ頬杖をついて、片手で横着な酌をする。短い夏の夜は次第に更けて行くけれど、往來の賑ひはまだ一向に衰へない。仰向けに臥ころんで居るお才の眼には、打ち續く人家の屋根の火の見から、相變らず「玉や」「鍵屋」と叫んで居る男女の影が優長に映つて居た。

「もし若旦那、表向きの相談と云つたところで、いつの事やら餘程先の話でせうが、せめてそれ迄お互

ひに人目を忍んで會へるやうな、うまい工夫はござんすまいか。奉公するのは少しも嫌ぢやあございませんが、一日お顏を拜みながら、ろくろく口の利けないのが何より辛うございますよ。」

お才は急に聲を低めて、調子に一段と力を籠めながら、「ねえあなた、實を云ふと御隱居樣さへ居らつしやらなければ、まことに都合がようござんすが、何とか工夫はつきますまいか。」

「何ぼ邪魔でも、あのお母をどうする譯にも行くまいがな。」

不思議な事を云ひ出した相手の了見を料りかねて、巳之介はぢつとお才の顏色を覗詰めたが、女は何處までも眞劍である。

「どうする譯にも行かないつて、其處があなたの智慧でございますよ。御隱居樣と大旦那と仲の惡いのを幸ひに、何處か近所へ隱居所を拵へて、別居なさるやうにお勸めなすつて御覽なさいな。あなたの口で御隱居樣を說き落したら、譯無しぢやあございませんか。」

「さう云ふ計略があらうたあ、私も全く氣が着かなかつた。いかさまお前は軍師だなう。」巳之介はぽんと膝頭を叩いて、先の卯三郎の褒め言葉を應用した。「……だが考へて見るがいゝぜ。さうなる日には內に邪魔者が居なくなつて、萬事に都合はいゝけれど、お前もお母の附き添ひで、一緒に隱居所へ引き取られやあしまいかの。」

「順當に行きやあさうなる所でございますが、其處もあなたの口先で、何とか私が居殘るやうに取り計らつて下さいましな、あたしが御露樣のお附きになつて、あなたと一緒に御本宅へ殘るやうには行きますまいか。」

わさ。」

「そりやあ成る程御隱居樣は引き取りたいと思召すかも知れませんが、あのお露樣が何で承知をなさるもんですか。きつと嫌だと仰つしやるでせう。」

お才は何か知ら心に深く思ひ中つた事でもあるのか、妙に皮肉な薄笑ひを浮べて、「……そら若旦那、わかつて居るぢやあありませんか。」と、唆かすやうに男の膝を二三度ついた。

「はて一向にわからねえなう。」巳之介は首を傾げて腕組みをして考へ込んだが、女の言葉にどのやうな謎が含まれて居るのやら全く見當が付かないらしい。「彼奴はお前、馬鹿にお母に可愛がられて居るのだから、一緒に隱居所へ行けと云はれりや、大喜びで行くだらうがな。……それとも何か、彼奴が内に殘つて居たがる仔細があると云ふのかね。」

「大ありでございなさあね。……では若旦那は御存知ないのでございますか。あのお露樣は疾うからあなた、お店の卯三どんと出來て居るのでございますよ。」

「えつ」と巳之介は眼を圓くした。ほんたうに寢耳に水の驚きとは此の事である。「色氣が附いた」とからかつては居たものゝ、あの大人しい妹のお露に、そんなふしだらがあらうなどゝは、今が今まで夢にも思ひ及ばなかつた。

「冗談ぢやあございませんよ。あなたが其れを御存知なしとは若旦那にも似合はない、迂濶な話ぢやございませんか。若しも私の云つたことが嘘だと思召すのなら、まあもう少し樣子を見て居て御覽なさい

まし。どうしてどうしてあのお露様が、いよ〱別家をするとなつたら、なか〱人の云ふ事をきいて御本宅を離れる事ぢやあございますまい。……」

「それにしたつていつの間にさう云ふ仲になつたんだらう。人目の多い内の中で、卯三郎に會つてる暇はないぢやあないか。」

「内の中ぢやあさう云ふ暇はございませんが、毎日常盤津のお師匠さんへお通ひになる途中らしいのでございますよ。いつもお供に附いて行くお店の子僧さんなんぞ、すつかり卯三どんに丸められて居ますのさ。今夜にしたつて御覧なさいな。一緒の船で花火へ行けるとなつたので、あの二人(ふたり)のめかし方はまあどうでございませう。」

「さう云はれりやあ、私も大きに不審を打つた事がありやす。どうも色戀と云ふ奴は、隠して居ても何處となく現はれるから不思議なものさ。」

かうは云つたが巳之介は内心甚だ不滿足であつた。兎に角自分は今迄に一と通りの道樂と云ふ道樂を仕盡して、色戀の道にかけては可なり眼が利いて居なければならぬ筈だのに、どうしてお露と卯三郎との間柄を氣が付かずに居たのだらう。卯三郎の方では反對に早くも巳之介の色事を嗅ぎ付けて了つたのに、彼はいつ迄立つても相變らずの坊つちやんである。女のお才でさへも觀破した事が、彼に觀破れなかつたとは實際間の抜けの骨頂である。——かう考へると、一と角の通人たる可き彼の虚榮心は、頗る傷けられたやうに感ぜられる。一體自分の頭はさう云ふ方面の才能に缺如して居て、いくら修業の功を積んでも、何等の進境をも示さないのか知らん。——などゝ云ふひがみ根性が、又もや彼の胸中に湧い

て來る。卯三郎にしろお才にしろ、抑もいかなる天稟の感覺があつて、斯うも眼敏く他人の情事を知る事が出來るのだらう。殊にあのお露などは、平生から柔順で愼ましやかで、ちよいと見たゞけでは別段おかしな素振もないのだが、單に此の頃彼の女のお白粉が濃くなつたと云ふ事實から早くも内面の機微を推察して了ふお才の眼力は、全く恐ろしいものである。

もう一つ彼が驚かざるを得ないのは、例に依つて隱密の間に女を惹き付ける卯三郎の魔力であつた。巳之介が大騷ぎをして、散々馬脚を露はして、漸うの事でお才を手に入れた間に、彼の男は誰にも知らせず平氣の平左で、ちやんとお露を喰ひ物にして了つた。それも相手が女郎とか藝者とか云ふならまだしも、極めて内氣な素人の初心者で、而も主人の娘である。家來の身として、云はゞ高嶺の花のやうな手の屆かない區域にある可き女の愛情を、いかなる手段で己れの掌中に收め得たのであらう。巳之介などには、さう云ふ場合にどうして渡りを附けたらよいのか、さつぱり方法が解らないにも拘らず、一旦卯三郎が狙ひを定めた女があると、自由自在に引き寄せる事が出來るらしい。世間の女と云ふ女が、巳之介に對すると容易に自己の弱點を示さない癖に、卯三郎に對しては弱點どころかお腹の底の腸までも造作なく出して見せるものらしい。考へれば考へるほど、巳之介はいまいましいやうな悲しいやうな心地がしたが、「それでも己には此のお才と云ふ、素的な別嬪の色女があるのだ。」と思ひ直せば、直ぐに自ら慰められて、又候うれしさが込み上げて來る。

「だから若旦那、いつそ斯うしたらいかゞでございませう。」

お才はむつくり起きかへつて、浴衣の袖を肘の邊までまくり上げて、細りとした兩腕を惜し氣もなく

團扇の風に吹かせながら、「あなたにしてもお露樣にしても、此れから後は内證事を打ち明けて、お互ひに手引きをし合つたら都合がいゝぢやあございませんか。さしづめ私が御隱居樣のお傍を離れてお露樣のお附きになれば、双方共に大助かりでございますよ。」

「えらいッ」と、巳之介は俄かに頓興な聲をあげて、鼻の孔から太い息をすうッと吐いて感嘆した。「なある程こいつは妙案々々楠公子房も三舍を避ける謀略さの。いやえらいえらい。」と云つて、女の手を把つて仰山に押し戴いた。

四

それから間もなく上州屋では、隱居のお鶴が巳之介に臀を押されて、別居がしたいと云ふ事を頻りと訴へるやうになつた。善兵衛夫婦も金に不自由のない身上で、それを兎や角云ふ譯にも行かない。いづれ自分達も、將來家督を巳之介に讓つた際に、別居する必要があらうも知れぬ故、どうせ隱居所を拵へるなら、古い空き家を買はうより一軒建てたがよからうとなつて、いよ／＼普請に取りかゝつたのは其の年の秋の九月である。場所は本宅を四五丁離れた今戸の河岸縁で、竹屋の渡しの船着場から程遠からぬ、川を隔てゝ隅田の土手を一と眼に見晴らす景勝の土地であつた。暮れの十二月の中旬には立派な家があらかた出來上つて、壁の下塗りも濟んで了ひ、いつ引き移つてもいゝやうになつた。先づ今年は本宅で年越をして、來春ゆつくりお越しになつたらいゝでせうと、善兵衛夫婦が口を揃へて說き勸めたが性急なお鶴は我慢がし切れず、「いゝえ私は今が今でも引き移つて了ひたいから、どうぞ年寄の勝手にさ

せてお くんなさい。それぢやあ長々御厄介になりました。」と、皮肉まじりの挨拶をして勝手に荷物を運ばせた。

話し相手には一人娘のお露を連れて、小間使ひには氣に入りのお才を連れてと、其の時まで獨りぎめにして居た隱居は、いざとなつて思ひ掛けない障害に出遇つた。何故か知らぬが、お露はどうしても隱居所へ行くのは嫌だと云ふ。其ればかりならい丶けれど、小間使ひのお才は自分と大の仲好しで、姉妹のやうに思つて居るのだから、あたしと一緒に本宅へ殘して置いてくれろと云ふ。

「お露や、お前は何をお云ひだ。今更になつて嫌だなんて、一體どうした譯なのだい。善兵衞はあの通り嫁ばつかりを可愛がるし、巳之介は巳之介で身持ちが惡いし、わたしやお前を一番頼みにして居たのに、一緒になるのが嫌だなんぞと、まあどの口で云はれたものだらう。ほんたうに親の心子知らずたあよく云つたものさ。罰中りとはお前の事だよ。」

母親は口惜し涙さへ浮べながら腹立ち紛れにこんな文句を並べて見たが、母親が泣けばお露も同じやうに涙ぐんで、「そりやお母さんあんまりでございます。」と云ふ口の下から、何卒私は本宅へ置いて下さいとだゞを捏ねる。どう云ふ譯で隱居所へ行くのか嫌なのだと詰られても、初めは一向理由を説明しなかつたが、だんだん問ひ質して行くと、第一は兄の善兵衞に濟まないと云ふ。母親の慈悲はしみ〴〵有難いと思ふけれど、さうかと云つて父親の歿後は總領の善兵衞を第二の父と敬つて、其の監督を受けて行くのが當然である。自分も一緒に隱居所へ逃げて行つては、兄に對して面當がましい。第二に心配なのは二番目の兄の巳之介の身持ちである。善兵衞夫婦の放任主義をい丶事にして、今迄でさへ隨分眼に

おまる行動があつたのに、此の後母親とお露とが一度に居なくなつたらば、どんな放埓な眞似をするか判らない。行く末上州屋の後繼者となる可き大切な人であるのに、兄の善兵衛が制し切れないからと云つて、妹のお露が捨てゝ置いては先祖に申譯がない。それから第三にお才の事である。幸ひ巳之介もお才が氣に入りの様子故、お露一人が意見をしたのではなか／＼利き目のない時にも、あの女に傍から機嫌を取つて貰へば、自然と外出の數も減らう。――

「ねえおッ母さん、あたしや決して親を粗末にする積りぢやあないけれど、内の爲めにはさうした方がいゝと思つて居るのですよ。子供の癖に生意氣かも知れませんが、何卒私の氣の濟むやうにさせて下さい。せめて巳之ちやんの身の固まるまで、淋しくつてもどうぞ獨りで隱居所へ行つて下さい。その内には私がきつとおッ母さんを引き取つて、孝行をさせて貰ひますから。」

お露は誰も居ないところで、そつと母親に自分の意中を告げ知らせた。まだ十七や十八の娘心に、此れ程思ひ詰めて居ようとは、何たる殊勝な事であらうと、母親は急に不憫さが增すばかりであつた。

「さう云ふ心とは知らないで、年がひもなくお前の事を罰中りなぞと云つたのは、全くわたしが惡かつたから勘忍しておくれ。――それにしたつて、わたしやお前と別々になるくらゐなら、隱居所なんぞへ行く氣はしない。」

と、母親は云つた。かね／＼お鶴の胸の中では、娘のお露を嫁にやらずに適當な養子を迎へて分家をさせ、それへ自分も懸らうと云ふ希望を抱いて居た事故、たとへ眼と鼻の間でも一時別々の家に住むのを、不快に感ずるのは無理がない。しかし一旦善兵衛に隱居がしたいと云ひ張つて置きながら、獨りぼ

つちで淋しいからとて、今更中止をしようとは切り出し難い譯である。兎に角表向きは痩せ我慢をして否でも應でも引き移つて見せなければならなかつた。

「それぢやあ私は大人しくお前の云ふ事を聞くとしませう。――だがお才だけはやつぱり連れて行つた方が、却つてお互ひによくはないかい。氣に入りのうちはいゝけれど、さう云ふ風では巳之介が、どんな間違ひをし出來さないとも限らないから。」

「いゝえおツ母さん、間違ひなんかはある筈がございませんよ。」と、お露は其れを遮つて云つた。

「そりや巳之ちやんはあゝ云ふ風だから、何とも保證は出來ないけれど、お才の方がかりにもそんな淫らな事は大嫌ひの人間ですもの、お腹の中では巳之ちやんの了見をすつかり承知して居ながら、うはべは何處迄も大人しくしてそ知らぬ顏をして居ますのさ。」

「ほんとにあの娘は感心なものさ。柔和なやうでもしつかりして居て、なか〳〵男に欺されるやうなぼんやり者ぢやなささうだよ。」

から云つて母親が褒め讃へる尾に附いて、お露は更に云ひにくさうに言葉を續いだ。

「出過ぎた事のやうですけれど、若しも巳之ちやんさへ氣に入つて居るのなら、いつそお才を内へ貰つたらどうでせうねえ。あゝ云ふ人を娘さんに持てたら、私やどんなに嬉しからうと思ふんですよ。」

「まあお前さんは、いくらお才が好きだからつて、突飛な事をお云ひだねえ。」と母親は頭から笑つて了つた。

「お前はまだ子供だからそんな事を云ふのだけれど、嫁に貰ふと云ふ日になれば、當人の性質ばかりぢ

やあ行かないものさ。成らう事なら一日も早く嫁を貰つてやりたいのだが、内の暖簾に對しても、それ相當な家柄の娘でなければならないし、それに何しろ肝腎の巳之介が、あの通りふらふらして居るし、……」

こんな鹽梅で、婚禮の話はうやむやに途絶えて了つた。お露も强ひて其の問題を繰り返す程熱心ではなかつたが、結局お才はやつぱり本宅へ居殘る事に極まつたのである。

「別になつてもつい四五町の所だから、巳之介もお露も毎日顏を見せておくれよ。」

から云ひ殘して、母親がとうたう引き拂つて行つたのは、十七日の觀音樣に市の立つ日の夕刻であつた。お露は母親の手傳ひ旁々隱居所まで送つて行つて、灯ともし頃に歸つて來ると、今迄お鶴の居間に充てられた奧座敷の佛壇の前に獨り蹲踞まつて、いきなり疊へ突俯した。さうして肩を顫はせてよゝとばかりに泣き崩れながら、譫語のやうに口走つた。

「今日の私の親不孝を草葉の陰で見て居らしつたら、嘸やお父さんも憎い奴だとお怨みなさるでござんせう。天にも地にも掛け換へのない、大事な大事なお年寄りのお母さんに生れて初めて嘘をついたのみならず、方便とは云へ巳之ちやんの惡口までも云ひながら、自分獨りがいゝ子になつて居ようとは、まあ何と云ふ恐ろしい人間でござんせう。お母さんの仰つしやる通り、ほんとに私は罰中りでございます。罰が中つて八つ裂きにされても飽き足らない親不孝者でございます。あの卯三郎さへ居なかつたら、こんなふしだらな娘にはならなかつたでござんせうに、何卒お父さんも不憫な奴だと憐んで、赦してやつて下さいまし。私とても滿更恩知らずの犬畜生ではございません。……」

「どうしたんだいお露ちやん、大さう悄氣て居るぢやないか。」

其の時不意に巳之介が座敷へ這入つて來て、お露の背中をぽんと叩いた。

「だがうまく行つたもんだなあ。まんまとお母が欺されて、不承無精に出て行つたから妙ぢやあないか。お前もえらく腕を上げたなう。」

「後生だからそんな事を云はないでおくんなさい。私やあ飛んだ罪作りをしたやうで、想ひ出しても寢覺めが惡うございます。」

「其の代りにやあ今夜から此の奥座敷はお前と私の天下になつて、邪魔な奴等は一匹も居なくなつたと云ふものよ。私は二階を殘らず借して貰ふから、お前は下へ陣取つて、ゆつくり卯三郎とお樂しみなせえやし。」

「また巳之ちやんの口惡な。もうもうそんな冷かしは御免なさい」と、縮緬の袂先を口へ咬へて、泣いた眼元に喜ばしげな笑みを浮べながら、お露は顔を眞赤にする。

「あはゝゝゝ。何もそれ程耻かしがるにやあ及ばないぜ。いづれそのうち卯三郎を養子に貰つてやるやうに、又私からうまく吹込んで置くからいゝわさ。――ところでお才の話の方は、お前何とかお母に捜りを入れてくれたかの。」

「あいさ、あれ程巳之ちやんに頼まれて居たものだから、漸うの思ひで少し匂はせては見たけれど、何だかいやに氣がさして、私やどうにも困つて了つた。」

「それでお母さんは何と云つた。」

「私の云ひ方がまづいせゐか、頭から冗談にして了つて、てんで取り合つても下さらない。だがお母さんの口裏ぢやあ、とても承知はなさりさうにも見えませんよ。」

「あゝあゝ困つたもんだなあ。」巳之介は兩手でやけに頸筋を抱いて、どつかり其處へあぐらを搔いた。

「お母さへうんと云やあ、兄きの奴が何と云はうと構やあしないが、あの年寄りの頑固と來たら、全く始末に終へねわえ。」

「巳之ちやん何をお云ひなさる。」

お露は萎れ返つて居る巳之介の膝を叩いて、打ち消すやうにあわてゝ云つた。「なんぼお才が可愛いからつて、あのお母さんをお怨み申しちや、勿體ないぢやありませんか。――どうぞ此れからそんな事は、必ず口へは出さないやうにして下さいな。」

「おや〳〵お前は見掛けに寄らない孝行者だの。私のやうな野良息子たあ、第一心掛けから違つて居る。親に內證で男は拵へず、お母に嘘は吐かず。……」

と云つて、巳之介は又も茶化して笑ひ崩れる。其れを聞くのがお露には身を切られる程辛くつて、閻魔の廳へ引き出されたやうに體が竦んで了ふのである。

「ねえ巳之ちやん。あたしやお前にしみ〳〵お願ひ申しますよ。」

かう云ひかけたお露の顏には、再び淚が潤んで見えたが、おろ〳〵聲で二た言三言云ふうちに到頭わッと泣き伏しながら、いぢらしさうに兩手を合はせて搔き口說いた。

「胸に覺えのある事なら、どんなに私はからかはれてもいゝけれど、決して他人に洩らしてくれちやあ

困りますよ。ほんとに巳之ちやんはお喋舌りだから、いつも氣懸りでなりませんのさ。」
「めつたに洩らす積りはないが、全く私はお喋舌りだから、何とも請け合ひかねるなう。――若しも私が口外したら、一體お前はどうしなさるね。」
「世間へ知れゝば、私は死んで了ひます。」
いかにも決心して居るらしい口吻なので、巳之介は內々ギヨツとしたが、それでも意地惡くげらげらと笑つた。
「あはゝゝゝ。大さうもねえ覺悟だなう。そんな氣の弱い事を云つても、出來てしまやあ仕樣がねえやあ。まあ卯三郎とよく相談をして御覧じやい。」
年若な女なぞから泣き縋られた事のない巳之介は、妹のお露にこんな可憐な哀願をされると、ひどく愉快を感じて來て、用もないのに惡黨がつて見るのであつた。
「これさこれさ。いつ迄泣いて居るんだな。今夜は私が卯三郎を連れて出るから、お前も後からお才を連れて、觀音樣の市へ出掛るとしようぢやないか。卯三郎に會へさへすりやあ、お母の罰が中つても、なんと嫌ぢやあるめえが、……まあ剝げかゝつたお白粉でも直して置くのが上分別さ。此りやあ大きにおやかましう。」
かう云ひ捨てゝ巳之介は、鮨屋の權太のやうに臀を端折つてすつくりと立ち上つた。

五

お露もお才も卯三郎も、他人の前では體裁をつくろつてそんな素振は少しも見せず、巳之介ばかりが「色男は私でござい」と云はんばかりに、いつも獨りで浮かれて居る。四人の行動に別段昔と變りはないので、奉公人は無論の事、善兵衞夫婦も知つてか知らずか、弟妹達の亂行を長い間見逃して居た。やがて明くる年の正月が來て、門松の取れた時分の事である。卯三郎は朝から本所深川邊の得意廻りを云ひ附かつて、ちよいと巳之介に耳打ちをして出掛けて行つた。

「さうだ〳〵、今日は初卯だつたつけ。」と、巳之介は晝飯を濟ませて、箸箱を膳の上へ置くや否や、ふと思ひ出したやうに言つた。

「幸ひ天氣はよし、風はないし、お參り旁々龜井戸の天神樣へ行つて見ようか。」

「それぢやあ私もお才を連れて、一緒に遊びに參りませう。」

お露は直ぐに同意して、着物を着換へに立つて行くのを、其の時まで默つて樣子を聞いて居た善兵衞が、「二人ともまあ待ちなさい。」と、穩かに聲をかけて、後から奧の間へ這入つて來た。

「お露や、私は巳之介に少しばかり話があるから、お前龜井戸へ行くのならお才を連れて行つておいで。」

と、表面は飽く迄柔かい兄の言葉に、何處やら犯し難い節があつた。全體兄は昔から弟妹たちを捕へて「巳之介」だの「お露」だのと、呼びすてにはしなかつた筈である。やつぱり母親が居なくなつてからいゝ氣になつて少し慢心して居やがると、巳之介は腹の中で不平に思つた。

「なあ巳之介、お前にこんな事を云ふのは初めてだが、今日はあんまりいゝ耳を聞かせる積りぢやない

んだぜ。」

例の佛壇を背中に背負つて、茶献上の帶の間から金唐革の煙草入を引き拔きながら、上坐の方へ悠々と腰を据ゑた善兵衞は、先づ此の調子で半日ぐらゐ喋舌り續けさうな姿勢である。お露は先刻仕方なしに、二人限りで龜井戸へ參詣に行つてしまつたらしい。

「……私はお前の此の頃の動作が一から十まで氣に入らない。お前の方でも大概解つて居るだらうからくどい事は云ひたくないが、まあ第一に錢遣ひの荒いことだ。それからお前の其の身持ちだ。……」

てきぱきと傍から片附けて了ふやうに云ひ切つて、兄は片手を伸ばして廊下の障子をぴつたりと締めた。便所の横の濡れ緣に置いてある植木鉢の、福壽草と梅の木の枝がうらゝかな日に照らされて、障子の紙へ鮮やかな影を映して居る。一と間に閉ぢ籠つて居ても、春らしい陽氣が五體へ泌み込むやうで、横町の路次の溝板の上で手鞠の音が聞えたり、冴えた空から紙鳶の呻りがぴいんぴいんと響いたりして居る。部屋の中では善兵衞が時々黑壇の煙管の細筒をすぽんと開けて、雁首の火を灰吹の端へ叩き落すばかり、何だか息が詰まるやうな靜かさに、巳之介は殊勝らしく畏まつて兩手を衝いては居るものゝ、其の實頻りに業が煮えて溜らなかつた。お露のやつめ、此方のもさくさも推量しないで、許しの出たのを此れ幸ひに、とうたう翼を伸しに行き居つた。今頃はお才を連れて太鼓橋でも渡りながら、さも無邪氣らしくあどけない話をして居るだらう。……それとももう好きな男と落ち合つて、お才なんぞを除け者にしてでれ着いて居る最中かも知れぬ。たしか卯三郎は萩寺の門前に待つて居る手筈だから、きつと一緒に妙見樣へお參りをして、歸りは橋本の二階坐敷で夕飯でも喰つて來るのだらう。夫婦氣取りの二

人は定めし樂しからうが、お供のお才が可哀さうで眼もあてられない。巳が居ないので彼奴はどんなに口惜しがつて居ることか、……

「お前はいづれ内の身代を受け續いで、此の上州屋の屋臺骨を背負つて行く大事な體だと云ふ事に氣が着いたら、一々彼れ此れと私が叱言を云はないでも、もう少し、しつかりしてくれなきやあ困つちまふぜ。今のやうに商賣に身を入れないで、晝間から店にもろく／＼落ち着いて居ないやうぢや、奉公人に馬鹿にされるばつかりで、いつ迄立つても私の代理は勤まりやしない。働くだけはみつしり働いて、商ひの掛け引きをちやんと覺え込んでくれさへすりやあ、夜遊びぐらゐしたからつて私は何とも云ふんぢやないが、まるで一日ふら／＼して居て、今帳場に居たかと思ふと奥坐敷へ這入り込んで居たり、好きな時分に斷りもなく勝手にお露と遊びに出たり、……」

「遊びに出ると云つたつて、外へ行くのぢやありませんよ。お母さんから云ひ附かつて居たものだからお露ちやんを連れて日に一遍づゝ隱居所へ行つて參ります。」巳之介は頓興な眼つきをして、兄きの顔をまじ／＼と視詰めながら、ぺこんと一つ瓢輕なお辭儀をした。

「たとへお母さんが何と云つても、店の用事がある時に、出かけて行くには當るまい。兎に角了見に締めくゝりを着けて、働く時は働く時、遊ぶ時は遊ぶやうにちやんと劃りを附けたらよからう。内の中も茶屋の坐敷も同じやうにふざけて居た日にや、お前ばかりか奉公人まで風儀が紊れる。それもいゝけれど、役者か幇間の腐つたやうなお前の服裝(みなり)はどう云ふものだ。商人(あきんど)の倅なら商人らしく堅儀な風をするがいゝぜ。」馬鹿野郎……と云はんばかりに、善兵衛は少し權柄作つて、ぢろりと弟を睨み付けた。

兄弟とは云へ、不斷からこんなに長く對座した經驗がないから、巳之介は久方振りで兄さの目鼻をつく〳〵と眺める機會に接した譯である。子供の頃には此の善兵衞にもう少し愛嬌があつた筈だのに、いつの間にか青黑くでつぷり太つて、年中店先に慾深な眼を光らせて居る結果でもあらう、砂埃に煤ぼけたやうな佛頂面をして居る。弟の服裝を役者のやうだと批難するだけに、此れは又恐ろしく色の褪めた、何度も何度も洗ひ張りをしたらしい鐵無地の紬の羽織に、地味な萬筋の銘仙の綿入を着て盲目縞の前掛を締めて居る。先づあの烟草入が見付け物ぐらゐで、身ぐるみ質屋へ持つて行つても、いくらにも取りはしなからう。自分こそ大身代の商家の主人なら、少しは何とか風采を整へるがいゝ、それに第一、商人にしてはあんまり態度が無愛相だ。用のある時ばかりいやにバキ〳〵物を言ひながら、めつたににこりともした事がない。あれでは母親が機嫌を損ねるのも尤もである。

「それに此の頃は一としきり程あんまり内を明けないやうだが、年中さうしてのらくらして居て、何處へあんなに金を遣ふのだ。遣ひ道が判つて居るなら未だしもだけれど、私にはどうも腑に落ちない。……私のところから持つて行く物は僅かでも、隱居所の方からお前がちよい〳〵引き出して行くのは、大概此方にも知れて居るんだから。」

「えゝなにそんなに持つて出やあしませんよ。」

巳之介は幇間がお客にあやまるやうにへら〳〵笑ひをして、頤の先をむづ痒さうに掻いて見せる。實際兄の云ふ通り、近來彼は惡所通ひもしないのに、餘程母親の巾着錢を捲り取つて居る。さうして、其の金の大部分はみんなお才が卷き上げたのである。やれ丸帯が買ひたいとか、お露様と同じやうな鼈甲

の櫛が欲しいとか、いろ〳〵せがまれる度毎に、內々で拵へてやつた品物の數も少くはない。其の上時々兩國の實家の家計が苦しいからとて、十兩二十兩と貢いだ額は可なりに上つて居る。何でも凡そ二百兩近くには達して居るだらう。

「全體此れはお前ばかりが惡いのぢやない。外にも不都合な人間が居る事は大凡知れて居るのだが、其の方はいづれ近々に始末を附ける積りで居る。先づ肝腎なお前から改めてくれなければ、いつ迄私も默つて居る譯にや行きませんよ。此れだけ私が話をしたら、ちつたあお前も眼が醒めさうなものだと思ふが、どうだ巳之介。」

「へい」と云つたが、巳之介は急に心配さうな顏を擡げて、「私の外に不都合な人間と申しますと……」

「誰でもいゝさ。」善兵衞は頭から抑へつけた。「他人の事よりお前の心掛けが大切だ。私も一と頃は女遊びこそしなかつたが、馬鹿に俳諧に凝り固まつて、商賣の方を疎かにした覺えがある。誰でも一度は內の稼業が嫌になつて、ふらつく時節があるけれど、氣の持ちやうで又どうにでもなるものだ。」

兄きがあの柄で俳諧に凝つたとは笑かせやがる。かう思ふと巳之介は、心配の最中に忽ちぷッと吹き出しさうになつて來た。

「いえさうですか、兄さんが俳諧をおやりになつた事があるんで。」

こゝまで口へ出して云つて、「定めし御名吟が澤山おあんなさるでげせうな。」と、後は頭の中で附け加へて見て、獨りでおかしくつて溜らない。「わッはゝゝゝ」と、どえらい笑ひの塊が、腹のどん底から込み上げて來さうである。

「そんな話はどうでもいゝから、私の云つた事をよく身に泌みて考へて見なさい。」
「へえ」と巳之介はもう一度恐れ入つた。
「解つたら今日はそれでいゝ。わしと一緒に店へ來て据わつて居なさい。」
かう云つて、善兵衞は先へ立つてすた〳〵と奥の間を出て了つた。
「外の奴等も始末を着ける。」と云はれたのが非道く氣懸りになるけれど、今の叱言を違背もならず、よんどころなく巳之介は店の帳場へぎごちなさうに腰を据ゑて、ぼんやり往來を眺めて居た。お才を始めお露や卯三郎に、今日の兄の鼻息を少しも早く報じてやりたい。こんな大事件が降つて湧いたとは夢にも知らず、自分一人に貧乏鬮を抽かせて置いて、日の短いのに何處をうろついて居るのだらう。——巳之介は自分の傍に、むづかしい面構へをして監視人の如く控へて居る善兵衞の顏と、だん〳〵西日が傾いて行く戸外の人通りを半々に見較べながら頻りに立つたり居たりした。
女の連中が歸らぬうちに、夕暮れの六つ時分になつて一と足先へ戻つて來たのが卯三郎である。
「えゝ唯今、どうも番頭さん今日は初卯で龜井戸近邊は大さうな人出で……それに陽氣が春めいて來たせゐか、荷物を擔ぐと汗が出ますよ。」
賣れ殘りの、二三反の反物を包んである鬱金の風呂敷をどさりと下ろして、懐から手拭ひを出しながら仔細らしく頸の周圍の汗を拭き取つて居る。「話があるよ。」と云ふ謎を、巳之介がちよいと眼顔で通じて見ても、讀めたか讀めないのかそ知らぬ風で、一と角の忠勤を抽んでゝ來たやうに、取引先の報告を熱心に帳場へ聞かせて居る。腰から矢立を取り出して帳面の書き換へをしたり、其の筆を口に咬へて珠算

盤をぱちぱち彈いたり、今度は右の耳朶へ挿んで其の珠算盤を肘衝きにして商況に關する意見を述べたり、傍で見て居るとなか〳〵有能な、働きのある手代らしい。實際又、卯三郎は手もよく書くし、目先も利くし、得意先の氣受けもよし、商人としての智慧才覺は備はつて居て、巳之介などに眞似の出來ない感心な點は充分にあつた。

夕飯が濟めばいつも善兵衞は奧へ引き取る例であるのに、生憎其の夜は店が忙しく、時刻になつても相變らず帳場の前に見張りをして居るもどかしさ。退屈で窮屈で何かお喋舌りがしたくて溜らず、とうとう巳之介は我慢が出來なくなつたのか、小用を足しに行く體でこつそり奧の間へ逃げ込んで見ると、いつかお露が戻つて居る。而も行燈の火影の薄暗い、丸窓の下の地袋の傍に打ち俯して、矢絣お召の晴衣も解かず、獨りで居睡りでもして居るのだらう。

「いやはや今日はお樂しみ、嘸お疲れな事でげせう。」

と、やつて見たが返辭はない。

「……それはさうと全體お才は何處に居る。お前にたんと見せ附けられて、彼奴あ定めし口惜しがつて泣いたらう。ほんとにお前たちは飛んだ罪作りさ。え、おい、お露ちやん、お才は何處に居るんだな。」

「大方二階でござんせう。」

重さうに頂垂れた島田の下から微かに答へたお露の聲は、意外にも涙に濕つて居る。はてなと巳之介が首を捻る途端に、

「巳之ちやん、口惜しいのは私でござんす。私や口惜し、口惜しい。」

と、お露は突然張り裂けるやうに息を喘いで、着物の背筋が皺くちやに揉まれる程、太つた體を縱横に身悶えする。

「なんだい、又しても大仰な。お前は男が出來てから、きつい泣き蟲になんなすつたなう。」

巳之介はあつけらかんと棒立ちに立つたまゝ、冗談の氣勢を挫かれた形で、赤く上氣せたお露の耳朶の裏側を視下ろした。

「……巳之ちやん、お前も何卒しつかりしておくんなさい。お前も私も卯三郎に欺されたのでございます。疾うからお才はあの人と、いゝ仲なのでございますよ。」

「ハテめんような。……」

ギクンと胸が凹んだやうな氣持ちはしたけれど、どう云ふものか巳之介は、こんな場合に早速眞面目な調子になつて、惡ふざけを改められない人間である。何處までも精神が上すべりをして、大事件だと氣が付きながら、負惜しみでも何でもなく、たゞ冷やかしが止められない。

「……藪から棒の話だが、一體お前はどうして、そんな事を云ひなさる。何か二人におかしな樣子があつたのかい。」

お露は默つて、鬢の髮の毛を顫はせながら「うん、うん」と頤で頷くばかりである。

「かう、お前のやうに譯も云はずにくやしいくやしいと云つてた日にやあ、さつぱり埒が明きやあしない。獨り極めにして泣いて居ないで、證據があるなら云ひなせえな。」

「證據と云つちやあないけれど、私や二人の内證話を蔭ですつかり聞いて居た。」――先刻龜井戸の天神

樣で、藤棚の下の掛け茶屋に休んだ折の事である。お露が小用に立つた隙に、二人がひそ〳〵囁き合つて居る文句が、幸か不幸か一つ殘らず厠の方まで洩れて聞えた。その模樣では可なり前から二人はちやんと出來て居るのに違ひなかつた。此れ迄お才はお露の供をして隱居所へ行く度每に、ちよいと中店へ買ひ物に行つて參りますなどゝ、お露を其處へ待たして置いて暫くの間消えてなくなる事があつた。そんな時には大方戶外で巳之介に會つて來るのだらうかと、お露は油斷して居たところ、今日の話を聞いて見れば、豈圖らんや山谷堀の遊船宿で卯三郎と始終樂しんで居たのである。そればかりではない。實家のくらしを助けると云つてお才が巳之介から取つた金子の大部分は、其の實卯三郎との遊興費や贅澤費に向けて居るらしく、二人共巳之介の事を「薄野呂」だの「甘酒野郞」だのと眞顏で呼び馴れて了つて居る。扨はと思ふと、お露はかあッと血が騰つて、氣が遠くなる程仰天したが、漸う心を取り鎭め、何喰はぬ振りで家まで戾つて來たのださうな。

「此れもみんなおッ母さんを欺した罰でござんせう。わたし世間へもう顏向けが出來なくなつた。‥‥巳之ちやんお前はちつとも口惜しかないのかい。」

かう云はれても巳之介はまだにやにやと笑つて居る。成る程あの卯三郎とお才では、寧ろさうなるのが當然なくらゐである。自分が今迄どう云ふ譯ですつかり安心して居たのか、隨分手ぬかりと云はねばならない。全く「薄野呂」の「甘酒野郞」に相違ない。——だが巳之介の性分では、口惜しいよりも極まりの惡さが先へ立つて、憤然と席を蹴立てる氣慨もなく、いよ〳〵照れ隱しに、にやにや笑ふばかりである。

いかなる危急の際にも、滑稽とお喋舌りの種を失はぬ彼ではあるが、さすがに此の場合言句に詰まつて、暫くお露の萎れた姿を見守つた後、漸う覺悟をきめたらしく二階座敷のお才の許へ上つて行つた。いきなり女の髻を掴んで丁々發止と打ち据えるのが普通であるのに、借金の手紙を斷られた時のやうに極まりが惡くて、何だかとてもお才に合はせる顏がない。「あなたは通人で居らつしやる」の、「若旦那は男がいゝから心配だ」のと、此れまで散々おだてられたお世辭の文句を思ひ浮べると、自分がひどく頓間に見えて、襟元から火の出るやうな、脇の下から冷汗の湧くやうな、名狀し難い慚悔の情に驅られる。丁度お才は六疊の間の押入れを開けて、お露の不斷着を出しかけて居るところであつたが、足音を聞いて此方を振りかへつた瞬間に、巳之介は穴の中へ這入りたい程氣後れがしてアハヤ逃げ出しさうになつた。

「まあ若旦那」

と、顏を見るなりいつもに變らずにつこりして、それから直ぐに腹立たしげな表情に移つて、

「なんでそんなにいつ迄も、お店にばかり居らつしやるのでございますよ。あたし一人を船井戸へやつて、よくまああなたは落ち着いて居らつしやれるぢやございませんか。」

かう云ひながら、手に持つて居たお露の着物を放り出して、男の袂を焦れつたさうに玩ぶ、鶴の一と聲! ほんとに鶴の一と聲である。此れで始めて巳之介はほつと胸を撫で下ろしたのみか、得意のお喋舌りを發揮する氣分を取り戻した。

「そのやうに恨み給ふなお才どの、お前たちが出て行つてから、私あ兄きに捕つて、うんと油を搾られ

た。——やれやれ今日はよく〳〵の惡日だわい。」

「おやおやそれぢやあ旦那から何かお叱言がございましたか。さう云はれゝばどうやら私も旦那の様子が、此の二三日少し變だと氣に咎めちやあ居りましたのさ。」

「何だか兄きの口裏ぢやあ、うす〳〵様子を悟つたらしい鹽梅式で、巳之介ばかりが惡かあない、外にも不都合な人間が居るから、いづれ其のうち始末を附けると、斯う云ふのさ。飛んだ人騒がせぢやあないか。」

「えつ」とお才はくつきりした眉根の線をふるはせて、見る見るうちに凉しい瞳を曇らせながら、

「そりや本當でございますか。さうして旦那はお露様と卯三どんの事も、御承知なのでございませうか。」

「さあ其處までは判らないが、孰方にしてもお前は逃れぬ所だなう。やつぱり私が云つた通り、全體お前は内へ女中に住み込まないで、外で媾曳きした方が双方都合がよかつたのさ。」

此れは巳之介が、突咄の間に頭へ浮べた魂膽なのである。何處か自分の懇意の茶屋へ譯を話してお才を女中に使つて貰ひ、旁々監督を依頼したなら、卯三郎との密々の往後は途絶えるだらうと、彼は私かに考へた。

「まあどうしたらようございませう。若し旦那からお暇が出たら、私や今更何處へも行かれやあ致しませんよ。」

かう云つた時、女の眼からはばらりと涙が落ちたらしい。膝をついたまゝ擦り寄つて、そんで居る男

の着物の上ん前へ上半身を凭れかけ、兩手を伸ばして巳之介の角帶にぶら下りながら、「此の泣き顏を見てくれろ」と云はぬばかりに、訴ふるが如くぢつと相手を視上げた表情の美しさ。眞白な額や頰の色つやが今宵は少し青味を帶びて、唇ばかりが鮮かに紅い。もと〳〵此の器量に惚れたとは云へ、散々見馴れた容貌であるのに、眺れば眺める程輪廓の立派さが一と際精細に冴え返つて今更巳之介は驚き惑ふくらゐである。

「ねえ若旦那、私やあなたと片時も別れて居るのは嫌でございます。どうぞ私を助けると思つて、此方へいつ迄も御奉公が出來ますやうに、お賴みなすつて下さいまし。旦那がお許しなさらなけりやあ、御隱居樣にお縋り申して、何とか取りなして戴くやうに、お願ひなすつて下さいましな。若しも此方を出されてしまやあ、もう兩國へは歸れません。……」

「成る程お母に賴んで見たら、大きにうまく行くかも知れねえ。」

巳之介はしやうことなしにかう云つた。

「ねえ、後生だからさうなすつて下さいまし。私ばかりか卯三どんもお暇が出さうな樣子だつたら、一緒に賴んでお上げなさいまし。」

「だが卯三郎は店の者で、お母たあ緣故がないから、何だか可笑しなもんだなあ。」

成る可くならば隱居の肝煎が成功しない事を望んで居るが、萬一お才が家へ居殘るやうになつたら、卯三郎の方を放逐してしまひたい。さうして置けば大丈夫と、巳之介は二つの謀計を胸に描いた。

「だつて卯三どんが居なくなつたら、お露樣がお可哀さうではございませんか。それぢやあんまり不人

情でございますよ。」

「いざとなつたら、兎に角兩方頼んで見よう。」

巳之介は悲しさうな眼つきをして、調子の拔けた聲で頷いた。

六

「理由は說明しないでも、其方の胸に覺えがあらう。今日かぎり暇をやるから出て行つて貰ひたい。」と嚴しい最後の宣告が卯三郎に下つたのは、其の明くる日の朝の話で、策を施す隙もなかつた。巳之介もお露も云ひたい事は山々あつたが、善兵衞の眼が光つて居るので、慰藉の言葉さへ掛けられない。女に掛けては惡黨らしい卯三郎も、氣の毒な程萎れ返つて、朋輩達への挨拶もそこそこに、長年住み馴れた店の暖簾を顧みがちに追ひ立てられた。

卯三郎が家を出てから一町ばかり行つたかと思ふ時分である。何處に引込んで居たものか、それ迄姿を見せなかつた娘のお露は、不斷着のまゝ髮も直さず、そつと庭下駄を突掛けて裏木戸の方へ廻らうとした。

「お露ちやん、お前何處へ行く。」

緣側から庭へ降りようとする所を、後ろから巳之介が呼び止めて、鹿子の背負ひ上げをしつかり掴んだ。

「後生だから放して下さい。私や卯三郎に話があるのでございます。」

から云つて振り返つたお露の顏は、血相が變つて土氣色になつて居た。

「はてさう云つても、お前が後を追ひかけた日にや、却つて事を打ち壞すわな。惡いやうにはしないから、私にまかせて置くがいゝ。」

「いえ〳〵、私や一と言話をしなけりや、どうにも氣持ちが濟まないから。」

腰かけながら、沓拔ぎへ伸べた兩脚の先に地團太を踏んで、傷々しい程息をはづませ聲を殺して、お露は殆んど半狂亂に身を藻搔きつゝ訴へる。昨日兄から意見をされた巳之介は、早速お才に一分始終を打ち明けた癖に、極めて卑怯な動機から、妹の方へは何等の豫告をもしてやらなかつた。それ故お露は今の今まで、卯三郎が店を放逐されようなどゝは夢にも知らずに居たのである。ゆふべ夜半に自分の寢間へ男が忍んで來た折に、龜井戸で聞いた內證話のいきさつを根に持つて、散々恨みを述べは述べたが「一向私は存じませぬ」と飽く迄恍け拔いて居た憎さ口惜しさ。まだあれだけでは此方の胸の半分も、先へは通じて居なからう。——話と云ふのは大方其れと、巳之介は直ぐに合點した。

「氣の濟まないのは解つて居るが、此の場は兎に角勘辨して、彼奴の宿は知れて居るから、後でゆつくり云つてやつたらいゝぢやあないか。恨みがあるなら何時でも云へる。今日に限つた事ぢやあないわさ。」

尚も振り切つて飛び出さうとする女の念力をやつとこさと抑へ着けて、羽がひじめにした儘ぼた〳〵と蟀谷から汗を流しながら、巳之介は一生懸命に宥め賺かした。此の際お露が後を追ひ掛けて、又卯三郎の魔術に罹つたら大變である。可哀さうだが彼奴は是非とも妹との緣を切つて、未來永劫上州屋へは

寄りつけないやうにして置きたい。成らう事なら唐天竺へ行つて了つて貰ひたい。お露に會へなくなりさへすれば、自然とお才にも近づく機會を失ふであらう。

「恨みはたんとあるけれど、外に話があるのでござんす。」お露はとうたう緣側へ引き倒されて、張り詰めた勇氣が一度に弛んだのか、急にさめ〴〵と忍び音の聲を立てゝ泣き出した。

「憎らしいとは思つても、私やあきらめられませぬ、欺されたとは知りながら、顏を見ずには居られませぬ。巳之ちやん何卒後生だから、明日にや卯三郎にきつと會はせて下さい。一生傍に居られるやうにして下さい。私や會ひたい、會ひたい。」

と云つて、絕え入りさうな息づかひで、首を左右へ搖りながら、がつかりしたやうに頻りと兩手で額の皮を揉んで居る。

「まるで氣違ひだ。」

と、巳之介は腹の中で呟いた。――お露の奴はまあ何といふ淫奔な娘だらう。不斷はあんなにしほらしくつて、ちよいと一と言冷やかしてさへ眞紅な顏をする癖に、何處を押したらこんな音が出るのだらう。「一生傍で暮らしいたい」とか、「顏を見ずには居られない」とか、お才の專賣のやうに心得て居た艶つぽい文句を、お露の奴も立派に使ひこなして居る。それのみならず、たとへ文句は同じでも、平生が平生だけに、お露の口から出た方が却つて言葉に眞情に籠つて、寧ろ雄らしいくらゐである。お露のやうな內氣者にどうして色戀が出來るだらうと、今迄彼は頗る奇異に感じて居たが、斯ういふ淫奔な眞情を藏して居ようとは全く想像だもしなかつた。「愼ましやかな女程餘計心が暖かで、而も男に惚れ易いか

ら、口說くに造作はありません。」と、いつぞや卯三郞が敎訓したのは、成る程こゝの事をいふのだ。巳之助が知りたい知りたいと思つて居た「女の秘密」とは、つまり此れなのだ。――

「そんなに會ひたきや會はしてやるよ。可哀さうに、なあ。」

といつて、巳之介は頗る膽に銘じたらしく溜息をして、腕を拱いた。彼は此れまでお才からいろ〳〵の殺し文句を、耳にたこの出來る程聞かされて居るが、まだ一遍も相手の眞情、秘密に觸れた覺えがない。今日のお露の愁訴のやうに率直な感動の籠つた言葉を、お才の口から云はれた事がない。それと反對に、あの卯三郞は始終お露にこんな優しい口舌の臺辭を聞かされてばかり居たのだらう。返す〳〵も美しいのは卯三郞である。たつた一人の大事な妹を、此れ程までに迷はせ拔いて無慘に墮落させたのもみんな彼奴の凄腕である。

「――暫く辛抱して居れば、又そのうちに私が兄貴へ詫びを入れて、戾つて來るやうにしてやるから、氣を落さず居るがいゝ。」

と、巳之介は親切ごかしに都合のいゝ嘘八百を並べ立てゝ、背中を撫でゝやりながらさま〳〵に機嫌を取つて見たけれど、お露はひたすら泣き沈んで相手の話は耳にも入れず、「明日にも會はせてくれなければ、此れから獨りで追つかけて行く。」と、だゞを捏ねる。「そのくらゐなら、いつそ私から事情を母親に打ち明けて、お前の婿に貰ふやうに勸めて見るから、せめて十日程我慢をしろ。」と巳之介が云へば、漸うお露は愁眉を開いて、「では卯三郞が安心して待つて居るやうに、早速巳之ちやんから旨を知らせて置いてくれろ。」と、否應なしの注文である。

一よろしい、きつと引き請けた。そんなら私がお前の代りに、此れからちよいと一とつ走り彼奴の後を追ひ駈けて、此方の手筈を知らせてやらう。」

どうにか斯うにか巳之介は妹のお露を納得させて、今度は自分がこつそりと裏木戸口から路次へ忍び出た。その儘二三町ばた〳〵と韋駄天走りに駈け出して、卯三郎の後を追ふのかと思ひきや、馬路の中途から取つて返して今戸の隠居所の方へ歩いて行つた。

お露の前へは卯三郎へ言傳をして來たやうに取り繕つて、當分有耶無耶に誤魔化して置くより外はない。そのうちには餘熱が覺めて思ひ切る氣になるであらう。此の際何よりも心配なのはお才の身の上である。既に卯三郎へ宣言が下つたからは、いつ何時彼の女に暇が出るかも知れない。その時こそは母親の力を借りて、善兵衛の命令を喰ひ止めて貰ふ必要がある。苦しい時の神頼みで、巳之介は急に此れから隠居所へ駈け込み、母親に一生懸命泣き附いた上、豫防策を講じようと云ふ算段である。但し自分との情事は表面飽くまで否定して、「お才に限つてそんな不埒はございません。あの娘が居なくなつて了ふと、お露の相手がなくなつて可哀さうですから。」とか、何とかうまく說き落して了ひたかつた。

「己も満更の悪黨ぢやあないんだが、お才が可愛いゝばつかりに、なかなか罪な眞似をするわい。考へて見りやあお露の奴も可哀さうさ。」――

巳之介は獨りでほくそ笑みながら、花川戸の往來を忙しさうに歩いて行くと、

「若旦那、もし若旦那え。」

から云つて、微かな聲で後ろから呼び止めた者がある。つい今しがた店を追はれた卯三郎が、宿は日

本橋だと聞いて居るのに、荷物を何處へ預けたものか、リユウとした唐棧の着流しに五分下りの雪駄を穿いて、にやにや笑ひながら此方へやつて來る。
「よう、どうしたい。ほんとに今朝は寢耳に水で驚いたなあ。」
ぎよつとしながら、さあらぬ體で巳之介は云つた。
「……何しろお前にやあ氣の毒だつたが、兄貴の奴め、すつかり嗅ぎ付けて居やあがるんで、どうにも口が出せやあしねえ、お前が出てッてしまつてから、私あお露に摑つて今迄泣きを聞かされたわな。」
「いやどうも驚きやしたよ。」
と、卯三郎は首を縮めて頭を掻いた。
「何しろあなた、炎天へ夕立が來たやうに一度にピカリがらくくとやつて來たんぢや、全く以て手も足も出ませんや。ゆふべのうちにせめて樣子が解つて居りやあ、何とか話も出來たんですが、お露ちやんの泣いて居るのも尤もでさあ。實は今にも私の後を追ひ駈けて來やしないかと、かうして近所をうろうろして居るんですが、どうです若旦那、ちよいと話があるんだけれど、日頃の好誼に此處まで連れ出しておくんなさいな。ねえ、ようがせう。何も此のまゝ手に手を取つて駈け落ちすると云やあしまいし、たゞ相談をするだけだから、一つ骨を折つてくれませんか。心配ならばお才どんを附けて寄越しても構ひませんぜ。」
平生は油紙に火が着いたやうに、威勢よくぺらぺらと辯じ立てる卯三郎が、大道のまん中に立ち止まつたまゝ揉み手をして、乞食のやうな哀れぽい口調で云つた。

「さあなあ、」

巳之介はさもさも當惑したらしく眉を顰めて、重々しい挨拶をする。「‥‥折角の賴みだがどうしたもんだらうなあ。連れて來るのに造作はないが、又兄貴にでも睨まれた日にや、却つて角が立つだらうぜ。こゝはお前も神妙にして、一且宿へ歸つた方が、後々の爲めに都合がいゝやな。いづれ其のうち折を見て戻れるやうにしてやるから、今日の所は我慢をするさ。」

「‥‥でげすが若旦那、あなたが旦那に詫びを入れて下すつたつて、お露樣との一件が顯れて居たんぢや、容易にお店へ戻る譯にやあ行きますまい。それとも大丈夫請け合つて下さいますかね。」

「請け合ふ譯にも行かないが、何とか一つ心配しやせう。」

「心配しやせうぐらゐぢやあ、心細いぢやございませんか。」

「あはゝゝゝ」と巳之介は空を見上げて笑ひ出した。頗る痛快に讎を取つてやつたのが、嬉しくて溜らない。「態あ見やがれ、色男でも女たらしでも、手前は卑しい奉公人だ。巳の內から追ひ出されりやあ、宿無し犬も同然だらう。」と云ふ嘲弄が、冷然たる彼の態度に見え透いて居た。

「それではいよ〳〵此のまゝ歸るとしやすかね。ところでどうでせう、いろ〳〵勝手を云つて相濟みませんが、當座の小遣ひに十兩ばかり、恵んでやつてくれませんか。お持ち合はせがないと云ふなら、私あ此處にお待ち申して居りますが。」

卯三郎は內懷で兩掌を重ねて、物を頂く眞似をした。何かの時に金を惠んでくれろと云ふのが此の男の癖になつて居て、巳之介は幾度其の手を喰はされて居るか判らない。

「生憎急ぎの用があるから、待つて居たつて手間が取れるぜ。いづれ後からお前の宿へ使に持たして屆けてやらう。」

糞を喰へと思ひながら、巳之介は一時逃れの返辭を殘して大股にすた〳〵と歩き出した。

「ようがす若旦那、それぢや斯う云ふ事に願ひませう。」

緣日の植木屋がお客を呼び戾すやうな口吻で、あはてゝ卯三郎は呼び止める。

「兎に角私あお露さんに相談したい事があるから、今夜の夜半の九つ時分にそつと忍んで參ります。御手數ですが、いつものやうに裏口の木戶を外して置いて下さいまし。お金も其の時一緒に頂く事としやせう。」

「しかし今夜から兄貴の見張りがきつと嚴しいだらうから、そいつもどうやら解らねえなあ。」

「ぢよ、冗談ぢやありませんぜ。」

さすがにムッとらしく甲高い聲でかう云つたが、忽ち卯三郎は悲しいやうな意地の惡いやうな眼つきをして、底氣味惡くせゝら笑つた。

「店を出されて見る日になると、斯うも世間が相手にしないものかなあ。人情紙の如したあ、よく云つたものでございますよ。ねえ若旦那。」

「なんだい卯三どん。大さう弱音を吹くぢやあないか。私あ此れでもお前の爲めに惡いやうには計らはないから、僻みなさんなと云ふことさ。」

「へえ、有り難うございます。」と卯三郎は丁寧に一つお辭儀をして、「だが若旦那にそれ程の御親切がお

あんなすつたら、ちよいと昨夜のうちにでも、お暇が出さうだと云ふ事をお知らせなすつて下すつたらお露さんも私もどんなに都合がよかつたか解りませんよ。僻んで云ふのぢやございませんがね。」
「だつて卯三どん、いくら敎へてやりたくつても、まるで此方は知らないんだからなう。」
「えへゝゝゝ、大方さうでございませうよ。――お才どんにやあ敎へてやつても、お露さんと私にやあお隱しなすつて居らつしやる。あなたも餘つぽど人が惡いや。」
「おい、おい、邪推もいゝ加減にするがいゝぜ。そんな事を誰がお前に云ふんだらう。」
「そりや當人から聞きやした。――では若旦那、いづれゆつくりお目にかゝると致しませう。へえ左樣なら。」
最後の一句で一度にどしんと叩き付けられたかのやうに、巳之介はぽかんとしたまゝ卯三郎の後ろ姿を見送つて居たが、やがて何とも云へない嫌な氣持ちに襲はれて、胸糞の惡さうな顏つきをしながら、今度はとぼとぼと步き始めた。

七

母親にせびつてお才を喰ひ止めようとした巳之介の計劃は、見事善兵衞に裏をかゝれて、其の日の午後には更に彼の女にも退引ならぬ宣告が云ひ渡された。お露は朝から奥に引込んで唯めそめそと泣いて居る。急を聞いて隱居所から飛んで來たお鶴は、今迄夢にも知らなかつた悴とお才のふしだらを、段々と善兵衞に說明されて、何と云ひ解く術もない。いくら巳之介が可愛くつても、お才が氣に入りでも、

そんな不埒な奉公人は一日も家へ置くことはなりませぬと、うまうまく自分が一杯喰はされた殘念さやらいまいましさが一度にかッと破裂したのか、却つて兄に加擔して、憤怒のあまり呆れ惑うてぼんやりして居る。

巳之介も惡いには惡いけれど、あれ程に目をかけてやつた女の仕打ちが憎しいから、いつそ當人の兩親共を呼び寄せて、不都合の條々を充分話して聞かせてやらうと、頻りにいきり立つ母親を「まあ、まあ」と善兵衛は押し靜めた。油斷をしたのが元來此方の手ぬかりで、罪は双方五分五分だから、傷を付けずに返して了ふのが上分別と、早速お才は主人と隱居が列坐の席へ引き出れて、眞綿で首を括るやうに云ひ諭された。

「お前さんも隨分まめまめに働いては下すつたが、家風に合はない事があるから、どうぞ此のまゝ何も云はずに宿へ下つて貰ひませう。」

顏を見るなりむかむかとして、こんな工合に口を切つた隱居の聲は厲しく顫へて居た。奉公に住み込んでから、盆暮れの仕着せの外にも氣に入りのまゝ拵へてやつた着物の數は葛籠に一杯溜つて居る。そんな荷物は後から小僧に屆けさせるから、兎に角歸るが宜からうと、簡單な善兵衛の言葉の尾に附いて隱居が並べる口上は、可なり嫌味がたつぷりして居る。

一と通り聞き終る迄お才は大人しく畏まつて、疊へ兩手を衝いて居たが、やがて袂をしつかりと眉根の下へあてがつて、其處を眼の球の潰れる程強く抑へたまゝ、しくしくと泣き始めた。

「旦那樣のお話はようく解つて居りまする。家風に合はぬと仰つしやればもう其れきりでございますが

不意にお暇が出たからと云つて、獨りで宿へ歸りましたらどんなに私は叱られるでござんせう。……かう云ふ事になりましたのも、みんな私が馬鹿だからでございます。御隱居樣も旦那も何卒お察しなすつて下さいまし。」

遂には口惜しさうにおいおいと聲を立てゝ泪を呑みつゝ正體もなく搔き口說くのを、善兵衞もお鶴も暫く默然として苦々しさうに見守つて居た。

「何もお前に惡い事があつたと云ふのぢやない。此方の都合で暇をやるのだから、素直に出て行つたらいゝではないか。」と、いさゝか善兵衞も手を燒いた形で、婉滑に慰めようと試みても、お才はなか〳〵納得しない。

「いゝえ解つて居ります。そりや私にも重々落ちどはございますが、今更になつて急に出て行けと仰つやるのは、何ぼ何でもお情なうございます。」

彼の女は進んで、自分と巳之介との秘密を白狀して、いかに自分が絕體絕命の窮境にあるかを喞ち歎いた。もと〳〵事の起りと云ふのは、巳之介の方から度び度び執拗に云ひ寄つた爲め、つい親切に絆されて其の口車に乘つたのである。欺されるのではあるまいかと、危ぶみながらも次第に深間へ落ち込んだ揚句、勿體ないが今では自分も巳之介に魂を打ち込んで惚れ拔いて了つて居る。それ程熱い仲であるのを、いかに主從の間柄とは云へ、一片の冷たい辭柄で追ひ出されるのは實に辛い。勿論自分は當家の嫁になりたいと云ふやうな、大それた野望を抱くのでは毛頭ないけれど、せめて今通りの小間使ひで、戀ひしいいとしい若旦那のお傍に奉公させて貰ひたい、其れが出來ないと云ふのなら、後十日でも半月

でもいゝから置いて頂きたい。さうして、宿元へ對しても自分の面目の立つやうな口實を作つた上で出して貰ひたい。上州屋の若旦那に散々體を玩具にされて、勝手な時分に放り出されて歸つて來たと云はれた日には、自分も巳之介も不名譽の至りである。決して此の際云ひ掛りを云つて、困難な問題を持ち出す譯ではございません。――と、斯う云ふお才の述懷である。

身に覺えのある罪を打ち明け、萬事を殘らず曝け出して詫つた上、殊勝らしく泣き萎れての懇願の筋を聞けば、隱居も格別哀れを催して、一旦は立腹したものゝ、頗る同情す可き點があるやうに感ぜられる。そこで一と先づお才を次ぎへ下らせて、再び善兵衞と相談をし直す事になつた。

親兄弟の身になれば、一途に女が憎しいのは當然であるが、先方に云はせたら此方の處置を片手落ちだと恨まうも知れぬ。あの巳之介の平生から推し測るのに、成る程お才の陳述通り、若旦那の威光を笠に得手勝手な甘言を弄して、女を欺したに違ひあるまい。いかにもさうありさうな事ではある。畢竟、七分の罪は巳之介が背負ふべきで、お才は寧ろ氣の毒な側に立つて居るから、何も云はずに突然出て行けと命令するのは可哀さうである。出すなら出すで女に汚名の附かないやうに、巳之介へ對する恨みや未練の殘らぬやうに、嫁く先々を搜してやるとか、嫁入道具を買つてやるとか、それ相應な恩を施した後がよからう。本宅で使つて居るのが不都合ならば、當分隱居所へ連れて來ても差支へない。と、母親はすつかり態度を豹變して至極慈悲深いことを云ふやうになつた。

「馬鹿な事を仰つしやいまし。」

と、善兵衞は嚴しく其れを打ち消した。

「成る程巳之介にも罪はありますが、どうも私の觀るところでは、なか／＼お才は口で云ふやうな正直な女ぢやあございませんよ。巳之介ばかりかお母さん迄が、却つて彼奴に欺されて居らつしやる。」

當人は巳之介に欺されたと云ふけれど、あのお才がなんで欺されるやうな迂濶者であらう。内へ奉公に來る以前から、決して無垢な處女であつたとは信じられない。うはべはいかにも柔順で氣轉が利いて重寶者と見られるだけに、腹の中にはどんな企を持つて居るやら、油斷のならぬ代物である。其の證據には、小間使ひの身でありながら、娘のお露と卯三郎の仲を取り持ち、淫らな行爲を勸めて居たのでも大概解る。次第に依つたら、内の財産を目的に思慮の足りない弟妹たちを墮落させようと計つてやつた仕事かも知れぬ。「若旦那に惚れて了つた」の、「別れるのが辛い」のとは眞赤な僞で、嫁にならうとする程の太い了見はないにしてからが、恐らく慾に引かされて、巳之介を蕩し込んだに極まつて居る。それを此方が眞に受けて同情したり、不都合を默許して今後一日でも家へ置いたら、あゝ云ふ奴故再び奸策を廻らさぬとは限らない。たゞ猶豫なく追ひ拂ふのが最良の手段であると、彼は云ひ張つた。

それでも隱居は半信半疑で、「まさかにお才がそんな女ぢやありますまい。」と辯解したが、善兵衞は固く執つて動かなかつた。母親にして見れば、お才を惡黨にすればするだけ、巳之介の愚かさが顯著になつて、引いては自分の眼の利かなかつたのを、批難されるのが辛いのである。

「どうもわたしには、それ程深い腹があつて初まつた事とは思はれない。お互ひに若い同士の出來心から、つい不始末にもなつたのだらう。」

と、兎角に善意の解釋を試みる。それでお才が善人ならば猶更のこと、萬一惡人であつたなら、後の

祟りが恐ろしいから、此の際放逐すると同時に、若干の手切れ金を授けた方が大人しからうと、母親は提議した。しかし善兵衞はそれにも不賛成で、

一金は惜しくもありませんが、別段彼奴にくれてやる名目がないぢやございませんか。」

と反對した。表面は飽く迄も「家風に合はぬ」と云ふ口實で、穩かに暇を出すのである。巳之介との情事を認めて、其れを理由にするのではない。手切れ金などをやつたらば、いよ〳〵不始末が公然になるばかりか、却つて先方へ言ひ掛りの種を與へ、女の親達からどのやうな難癖を附けに來るやら圖られない。見て見ぬ振りをして、當らず觸らずに返して了ふが上分別と、結局評議は善兵衞の考へ通り、最初の方法に戻つて了つた。

お才はもう一度主人の前へ呼び出されて、噛んで含めるやうに因果を諭されたが、ます〳〵拗ねて泣き沈んで、どうにも處置が附けられない。よんどころなく店の番頭が旨を受けて、直接親の手へ引き渡す可く、兩國の實家へ親父を迎へに行つたのは夕刻の事である。散々手古摺つた末に、一と先づ善兵衞は座敷を外して店へ出張する。隱居のお鶴は何を思つたのか、巳之介とお露が小いさくなつて縮んで居る奥の間へ、眼を尖らして這入つて行つた。

障子の隙から階下の座敷を覗ふと、お露は亂れ髮の鬢の下から鉢卷をして、立て膝をした膝頭へ兩手を重ねて其の上へ額を突俯したまゝ、病人のやうに蹲踞つて居る。此の二三日湯にも這入らず髮も結はずに鬱ぎ通して居るのであらう。めつきり痩せた肩のあたりや、血の氣の失せた顏色を見ると、淺ましいやら不憫なやらで、お鶴は胸が一杯になり、此の上烈しい叱言を云つて、耻を搔かせる勇氣もなかつ

た。其の儘しづかに二階の梯子段を上ると、呑氣な巳之介は頭を抱へて大の字に臥轉びながら、此れも同じく茫然と天井の節穴を視詰めて居る。

「巳之介や、お前はまあ、ほんとにほんとうに飛んだ不始末をしておくれだねえ。」

から母親に聲をかけられると、はつとしたやうにひよつこり撥ね起きて。

「どうもお母さん、申譯がございません。」

と、首をすぼめて畏まつて耳の附け根を掻いて見せるのが、まるで子供のやうである。

「出來た事なら仕方がないが、此れからちつと氣を附けて貰はなくつちや困るぢやないか。私や不斷からお前たちの肩を持つて居るのに、こんな間違ひをし出かれちやあ、善兵衞にも極まりが惡くつて合はす顔がありませんよ。」

「へえ」

「善兵衞は私に遠慮をして居るから、女の方が惡いのだと云ふけれど、私にやさうは思はれない。お前が出放題な上手口をきいて、何も知らない、正直な女の子を欺したに極まつて居ます。ねえ、大方さうなんだらう。」

「へえ、全く申譯がございません。」

と云つたが、巳之介は急にだらしのない口元から涎を垂らしてにたにた笑ひをした。正直な女の子を欺す手腕のある事を、母親から認められたのが非常に嬉しかつたのである。

「笑ひ事ぢやあありませんよ。――現にお前、お才に暇を出さうと思つて、先からいろ〳〵諭して居る

のだけれど、若旦那に捨てられたのが口惜しいと云つて、可哀さうにお前の薄情を泣いて恨んで、なか〳〵云ふ事を聞きやあしない。……」

「成る程そりやさうでせう。……」と、巳之介は獨り心中で受け答をした。さうして、ます〳〵嬉しさうに得意になつた。お才もお露と同じやうに、別れが辛くて泣いて居るのか。かうなると己も卯三郎とあんまり違はぬ艶福家だと、彼は私かに「色男」たる自分の境遇を顧みて滿足を覺えた。

「商賣人と違つて、素人の娘と云ふ者は、此方の言葉を眞に受けるから、切れろといつても容易にあきらめが附かないものだよ。何かお前、お才に約束でもしたんぢやないかい。」

「そりやお母さん、別段欺す積りはなくつても、つい出まかせの嬉しがらせを云つた覺えはございますが、此れぞと云つて約束なんか交はした事はございませんよ。――何しろ罪は私にあるんで、お才の奴あ決して慾に絡んだの、惡い腹があつたのと、さう云ふ女ぢやございませんよ。かうなつて見ると、全く彼奴あ私に一杯引懸つたも同然なんで、まあ可哀さうな話でさあ。」

「女を欺して可哀さうだで濟みますか。ほんとにお前にや手が附けられない。」

いくら眞面目に叱言を云つても、相手に一向應(こた)へがないので、母親もとうたう笑ひかけたが、あはてて恐い顏を拵へ直して「いづれお前にはゆつくり後で話をします 當分謹愼して居るがいゝ。」と、四角張つた捨て臺辭を殘して降りて了つた。

兩國へ迎へにやられた使の者は、一時程立つて歸つて來た。「一と通りの御話は番頭さんから承つて參りやした。親父が伺ふ筈でげすが、生憎用事がごぜえやして、……」と、使の後から附いて來たのは年

頃二十八九の、紺の腹掛け法被の上へ二子の長袢纏を着た雲突くやうな大男で、妹にそつくりの眉の凛々しい顔立ちに三分の凄味を含ませた、お才の兄の富藏と云ふ若者である。兄が迎へに來たと悟つて、俄に激しく泣き崩れるお才の姿を尻目にかけながら、

「やいやい何を泣きやがるんだ。番頭さんに聞いて見りやあ、譯は云はぬが都合があるから早速暇を取つてくれろと仰つしやるんだが、全體手前はどうしたと云ふんだ。……こう、よく聞きなよ、手前に落ちどがありさいしなけりや、御主人樣から急に歸つてくれろたあ仰つしやる筈はねえぢやあねえか。泣いて居ねえで譯を云ひねえ譯を！どんな不埒を働いたかあ知らねえが、大方ろくな事ぢやあなからう。ほんとにお前は呆れた女郎だ。」

かう口汚く罵つて、矢庭に喰つてかゝる富藏を制しながら、兎も角も奉公人の手前があるから、今夜のところは穩便に當人を引き取つてくれと善兵衞は云つた。「引き取るにしても何か此れには仔細があるに違ひない。當人の胸に覺えがあらうから、暫く別室で妹を訊問させて頂きたい。」と、飽く迄富藏は主張して、お才を女中部屋へ引き擦り込んだ揚句、やゝ長い間其處で密談するらしかつた。

「今お才から話を聞いて、大概様子は解りやした。就いちやあ旦那、私は何も申しませんが、此奴を一つ御覽なすつて下せえやし。」

やがて妹を連れて、もとの坐敷へ戻つて來ると、富藏はかう云ひながら丼の底から一枚の書き附けめいた紙片を出した。其れは紛れもない巳之介の手蹟で、お才の父に宛てた證書やうのものであつた。

「……一、拙者儀貴殿娘お才どのと割無き契を結び候上は、向後決而振捨申間敷、幾千代かけて夫婦の

誓約相固候事實正也。萬一違背有之に於ては手切金として金子二百兩無相違相渡可申、右誓約爲後日仍而如件。……」と書いて、立派に印迄捺してある。

「かう云ふ事ぢやあるめえかと存じやして、實は出がけに親父から此の書き附けを預つて參りやしたんで……」

富藏は底力のある聲をひそめて、いざと云つたら臂を捲くつて怒鳴り立てさうな氣勢を仄かしつゝ、刀豆の煙管の雁首で紙の面を指し示した。誓紙の日附は去年の十月ごろになつて居る。彼の説明する所では、去年の夏の川開きの折、お才が兩國の家へ戻つて居ると、其處へ巳之介が訪ねて來て一と晩ゆつくり遊んで行つた。その後度び度び、お才が宿へ下る毎に必ず巳之介が家の周圍を徘徊して居るので、親父も母親も不審を抱き、だんだん二人を問ひ詰めて見ると、果して關係が結ばれて居る事を白狀した。其の時親父はたとへ主筋の若旦那でも、「大事な娘を慰み物にしたからには承知が出來ぬ」と憤つて直ぐにも當家へ談判に來ようといきまいたのを、巳之介が平詫りに詫つて、「決して欺す積りではない。一旦傷物にした上は必ず嫁に貰つてやるから、時節の來る迄辛抱してくれろ。」と、證據の爲めに書いて下すつたのが此の一札だと云ふ。

「なあお才、此の書附けは手前も覺えて居るだらうが、たしかにさうに違へはねえな。」

かう富藏に念を押されると、お才も涙を抑へながら「はい」と云つて微かに頷いた。

「若しお疑りがござえやしたら、何卒此の場へ若旦那をお呼びなすつて、お調べなすつて御覽なせえやし。何も私あ此の書き附けを楯に取つて、嫁に貰つて下せえとお願ひ申すんぢやござえやせんが、いく

らしがねえ渡世でも、可愛い娘を慰まれて、譯も云はずに放り出されちやあ、第一お才が不憫でござえやす。お暇が出るならお暇が出るで、どうぞ此奴の顔の立つやうにしてやつておくんなせえ。たとへ千兩の金を積んでも、汚れた體を直す譯にやあ行かねえから、不足を云つたら際限のねえ話だが、其處は私も野暮を云はねえ事にしやせう。ねえ旦那、お解りになりやしたかね。」

かう云つて、富藏は割り膝をしたまゝ肩を聳やかして、考へに沈んで居る善兵衞の額のあたりをぐつと睨めるやうに視詰めた。

「お母さん、ちよいと巳之介を呼んで下さい。」と、善兵衞は其れには答へず、母親の方を向いて苦り切つて云つた。

癇が昂つたのか、白髪交りの茶筌髷をぶる〳〵と戰かせて、眞靑な顔をした隱居のお鶴が再び奥二階へ上つて來た時、巳之介はまだ大の字に臥そべつて何か知ら思案に耽つて居た。「善兵衞がお前に用があると云つて居る。直ぐに下まで降りて來なさい。」と、此れだけ云ふのがやつとの事で、お鶴は煮えくり返るやうな胸の中を傳へる程の餘裕もなかつた。

「お才の奴め、まだ泣き澁つて居ると見える。大方兄貴は己を彼奴と對決させる積りなんだらう。それに付けてもお才はどんな顔をして居ることか、同席すれば互ひに眼と眼で知らせ合つて、口で云はれぬ心持ちをそれとなく語り合ふ事が出來るだらう。」――わざと萎れたやうに見せかけて、腹では内々喜びながら部屋の障子を開けた巳之介は、其處に控へて居る富藏の姿と、善兵衞の前に突きつけられた書き附けの紙面を見るや否や、窪んだ眼球をぐりぐりと光らせて、俄かに怖ぢ氣を催ほしたやうに立ち竦

んでしまつたが、紫色に變つた唇には眼もあてられない驚愕と狼狽の情が入り交つて顫へて居た。

善兵衛の言葉は、靜かであるが殺氣立つて居る。

「巳之介、お前は此の證文に覺えがあるか。あるなら正直にあると云ふがいゝ。」

若し聞かれたら何と云ひ譯したものかと、答辯の道を考へて居る暇もなく、かう云つて詰りかゝつた

「えゝ」

巳之介は今度こそ本當に打ち萎れて、狛犬のやうな形好をして口のうちで纔かに答へた。此れに就いては自分が申し開きをする迄もなく、斯かる誓紙を書くに至つた當時の事情を、相手のお才から巨細に說明す可きである。さう思つて、彼は救ひを求めるやうに恐る恐る彼の女の樣子を窺ふと、富藏の蔭に小ひさく畏まつて疊の目を眺めたまゝ、まだしくしくと噓欷り上げて居る。

「それではお前が此の書き附けを書いたに相違ないんだな。」

重ねて善兵衛は疊みかけた。彼はもぐもぐと咽喉の邊に唾吐を絡ませながら暫く躊躇して、樂しみにして居た眼くばせを應用すべく女の方を盜み視たが、お才は依然として下を向いたきり相手にならない。却つて兄の富藏がぎろりと巳之介に流眄を與へて、切れの長い眦の先で妹の方を振り返りつゝ云つた。

「こうお才、手前も若旦那の居らつしやる前でもう一遍明りを立てねえ。此の書き附けはたしかに若旦那がお書きなすつたに違へねえな。」

「はい………」

お才の返辭は低いけれども明瞭であつた。殊には頭を縱に振つて、微かに頷いて迄見せて居る。

つて、富藏は威丈高に据わり直した。

「さう云ふ筈ではなかつたが……」と、何か巳之介が辯解がましい言語を弄しようとする氣勢を見て取

「もし若旦那、あなたは默つておいでなせえやすが、覺えがねえと仰つしやるんですかい。それとも何か、私の方で無理にあなたにお書かせ申したとでも、仰つしやらうてえのかね。人の娘を散々玩具にして置いて、それぢやああんまり虫が好過ぎやすぜ。……もし若旦那、御返辭を承りやせう。」

色こそ黑けれ、體格こそ頑丈なれ、お才が男に化けて來たやうな水際立つた輪廓が、美しいだけ餘計きびきびした剛惡の相を帶びて、はつたと睨ね付ける富藏の眸は鮮かに猛々しい。巳之介は此の男が平生から如何に喧嘩早く、いかに骨節の强いのを自慢にして居るかを知つて居る。あの盲目縞の腹掛に隱れて居る赤銅色の胸板から筋骨の逞ましい背中へかけて、一面に金太郎の刺青があつて、すはと云ふ時その勇しい肌の肉が法被の下から跳り出す事を知つて居る。自分が屢々兩國の家でお才と密會した時分、此の富藏はいつも柄になくにこにこして、「若旦那、々々々」と奉つて居たが、其の實町内の憎まれ者で底氣味の惡い人間であると、彼は私かに恐れをなして居た。今や其奴がいよいよ假面を脫して、臆病な「若旦那」の前で得意の物凄いところを、ちよつぴり出して見せたのである。たとへ如何なる内情が潜んで居るにせよ、たしかに自分が筆を執つて書いて渡したに相違ない證文を、此處で巳之介が曖昧に誤魔化さうとしたら、どんな騷動を惹き起さぬとも限らない。忽ち富藏に拳骨を見舞はれて、氣絶する程痛い目に遇はされるのは未だいゝとして、喧嘩が元でお才との緣が切れて了つたら大變である。……

「何も私あ書かないとは申しません。そりやあたしかに、此の證文は私が書いたに違ひはございません。」

巳之介は佛頂面をしてから答へて、ひどく不服らしい鹽梅で、何かぶつぶつと後の文句を續けさうに吃つて居るところを、
「書いたのなら書いたでいゝ。それだけ聞けば用はないから、默つて彼方へ行つて居なさい。」
と、善兵衞が同じやうに面を膨らして叱り付けた。
あつけに取られてうろうろしながら立ち上つた彼は、座敷を出しなに名殘惜しさうにお才の姿をちらりと顧みたが、相變らず下を向いたまゝ顏を伏せて居る。
「ようごわす。さう云ふ譯なら私あ何も云ひますまい。巳之介の證文を此方へ渡して頂いて、金は綺麗に出すとしませう。——だが其の代り、云ふ迄もない話だけれど此れきり緣は切れたのだから、どうぞさう思つて下さるやうに。」
這々の體で障子の外へ追ひやられた巳之介の耳に、かう云ふ善兵衞の挨拶が聞えた。
「そいつあどうもお氣の毒樣でごぜえやすが、何分お願ひ申しやせう。私の方でも金で娘の體を賣つたと云はれた日にや、ちつたあ不足もあるけれど、旦那が捌けて下さるんだから、淸く承知を致しやす。なあに旦那、此の證文さへ其方で買ひ戻して下さりやあ、此の後決して御迷惑をお掛け申しやあ致しませんよ。なあお才、手前も未練はあるめえな。」
續いて富藏のかう云ふ聲が聞える「なあお才、手前も未練はあるめえな。」の一句へ來た時、巳之介はぴたりと廊下へ立ち止まつて息を殺した。彼の女は何と答へるだらう。....
「はい。」とお才は猶豫なく云つた。主人と兄が列座の手前、餘儀ないハメで承諾したのかも知れないが、

兎に角立派に「はい」と云つて頷いたらしいけはひである。

一體今夜のお才の態度は、一から十まで巳之介の腑に落ちない事だらけであつた。惡黨の富藏は論外とするも、お才までが一緒になつてあの書き附けを斯う云ふ場合に利用するとは心外千萬である。彼の女にしろ、彼の女の親兄弟にしろ、あの證文を書くに至つた當時の内幕をよもや忘れはしなからう。――丁度去年の十月ごろ、或る晩彼が兩國の家で彼の女と密會した折に、いつもの傳で、お才は將來巳之介が自分を見捨てはしないかと散々疑つたり危んだりした揚句、「若しもあなたに捨てられたら、私や親兄弟に合はす顔がないのですよ。」と口說いて泣いた。最初は二人の關係を見て見ぬ振りをして居た親達も、其の頃漸う警戒し始めて、何かとお才に口やかましい注意をする。「お前はきつと若旦那に欺されて居るのだから、今のうちに思ひ切つて了ふがいゝ。」と、親父や兄から干渉される度毎に、「若旦那に限つてそんな不實なお方ぢやあないのだから。」と、お才は始終辯解し續けたと愚痴をこぼした。

「ねえ若旦那、私やあなたを疑ぐる譯ぢやあございませんが、親兄弟に攻められるのがいつそ辛くつてかなはないから、ほんとに安心するやうに、何とか一本書いてやつておくんなさいな。」

何氣ない體で、ふとそんな事をお才は云つた。別段むづかしい文句はいらない。形式だけでも書面にすれば口約束より增しだから、巳之介の考へで此れなら大概親達が得心すると思ふ程度に認めて欲しい。尤も、どのやうな文句を書いたところで、その書き附けが將來迷惑を釀す恐れは斷じてない。先々證文が口を利く場合が起らうなどゝは、お互ひに夢想しないし、萬一そんな場合になつても、書け附け通りの條件を實行せよと迫りはしない。たとへ親兄弟が何と云はうと、彼の女自身がそんな恩知らずの行爲

を默過する筈がない。たゞたゞ一時家族の者のうるさい口を塞ぐために、一と筆書いて見せてくれたら深山である。あとは彼の女が預つて置いて、親父の手などへ決して渡しは致しませんと、お才は言葉巧みに頼んだ。

「そんな事ならお安い御用だ。どうでもお前の氣の濟むやうに書いてやらう。」

巳之介は直ぐに快諾して、書面の文言をいろ〳〵お才と相談した結果、出來上つたのがあの誓紙である。破談の曉に支拂ふ可き手切れの金額の二百圓も、「そんなものはどうでも構はないから。」と云つて、お才がいゝ加減に指定したのである。翻つて巳之介にして見れば、末は必ず嫁にしようと思ひ詰めて居たこと故、二百兩が千兩と書いても差支へはない積りであつた。さて母親を呼び出して、其の證文を彼が手づから渡さうとした時。

「娘のやうな不束者をそれ程に思し召して下るのは勿體ないことでございます。いえ、もう、見せて頂きさへすれば結構でございますから、その書き附けはお才がお預り申して置いたらいゝだらう。」

と、母親も非常に恐縮して、現在巳之介の見て居る前で、證書は彼の女が帶の間へ挿込んだ筈である。其の後巳之介は、今日の今まで書き附けの事などてんと忘れて了つて居た。多分お才の手箱の中にでも收めてあるべき一札が、何の豫告も打ち合はせもなく、出し拔けに富藏の手から直接善兵衛へ突き出されるとは、甚だ順序が違つて居る。

「隱居と主人とが列座の上で暇を出した。もう斯うなればたとへ若旦那がどんなに自分に惚れて居ようと夫婦になれる望みもなければ、此の後接近して誘し込む機會もない。いつそ此處邊でたんまり金を捲

き上げて綺麗に足を洗つてやらう。」——どうもお才は斯う云ふ魂膽であるらしい。いくら巳之介の惚れた慾眼で解釋しても、殘念なる哉さう思はれる。事に依つたら最初から親兄弟とぐるになつて、あの證文を認めさせて一と狂言書いたのかも知れない。

「それにしたつて、又此方から會ひに行つたら、嫌な顏はしないだらう。」きまりが惡からうが、欺されて居ようだ、巳之介は明日にも早速兩國へ尋ねて行つて、もと〳〵通りの關係に復さずには居られないやうな氣がした。頭の中にはお才の美しい手だの足だの眼つきだの口つきだの、肉體のあらゆる部分が、迭る迭るまざまざと浮かんで、彼の情慾を誘惑した。

八

惡手代と惡女中とが追ひ出されてから、上州屋の樣子はすつかり變つた。お露は隱居所へ引き取られて母親の監視が附く事になり、巳之介は兄と一緒に朝から夕方まで店に控へて、奉公人同樣に働かせられる。夜になつても無闇に外出を許されない。小使ひは切り詰めのあてがひ扶持、着物は野暮臭い銘仙の安物と定められて、身動きもならぬ始末となつた。每日々々巳之介の魂は兩國邊へ飛んで行つて、寢ても覺めてもお才の姿に憧れながら、半月ばかりと云ふものは生れ變つたやうに神妙な風を裝つた。

「今度と云ふ今度こそ、私も懲り懲り致しました。あんな不屆な女たあ、夢にも知りませんでした。」と、つく〴〵後悔して見せる調子が、滿更噓ではないらしかつた。先づ本人が其處へ氣が附いてくれさへすれば、たまの外出は許しても宜からうと、母親の憐みが加はつて間もなく禁足の掟が弛んだ。金と着物

の不自由なのは情ないが、まさか其の爲めに早速仕打ちを變へる程現金な眞似はしなからう、何しろお才に逢つて見たいと、漸う巳之介が兩國の家を尋ねたのは、別れてから一月振りの、二月の末の宵の口である。

「へん馬鹿野郞、金さへ貰へば手前のやうな薄のろに用はねえんだ。」

から頭から一喝を喰はされはしないかと危ぶんで居た巳之介は、格子を開けながら臆病らしい不思議な笑ひ顏をして、

「今日は」

と云つた。

「おやお前さんは上州屋の……」

から云ひかけて、長火鉢の前に据わつたまゝ、聊かびつくりしたやうに來客の風つきを見上げ見下ろしたのは、例の嫂である。「何しにお出でなさいました」と、もう少しで劍もほろゝの挨拶を浴びせさうにした途端にあわてゝ巳之介がでれでれと笑つて「お上さん暫く」とお辭儀をするので、急に言葉を鄭寧に改めた。

「……おや、若旦那でございますか。まあお珍らしい。」

「いやどうも、飛んだ御沙汰をいたしやした。」

巳之介はほつと息を吐いて、俄かに元氣よく能辯になつた。「私も疾うから伺はなくつちやならないんで、お才がどうにか思つて居やあしないかと毎日氣が氣ぢやなかつたんだが、何しろ御承知の通りな譯

で、兄貴の奴がお話しにならない分らずやだもんだから、今日まで内を抜け出す事が出來ない始末さ。だからお上さん、惡く思つておくんなすつちや困りますよ。私あ決してそんな薄情な人間ぢやあないんだから、是非とも此方へ伺つて、實はいろ／＼言ひ譯をしようと思つて參りやしたのさ。――ほんたうに久し振りでございましたねえ。――お宅ぢやあ誰方もお變りはございませんか。――お才はどうして居りますい。」

立てつゞけにぺら／＼と喋舌り出した相手の舌の先を、煙に捲かれて眼瞬きをしながら見惚れて居た上さんは、お才の安否を尋ねられると始めて我に復つたやうに、

「それでもよくまあ御出でなすつて下さいました。お蔭樣でみんな變りもございませんが。…ちよいとお待ちなすつて下さいまし。」

何を考へたのかしどろもどろの返辭をして、巳之介を上り框へ置き去りにしたまゝ急いで梯子段を駈け上つた。どうも樣子がお才を二階へ呼びに行つたものらしい。「しめた」と巳之介は小いさな聲で獨り語を云つた。

ひどい目に會はせて放り出してやつた筈の馬鹿息子が、再びのこ／＼と遊びに來たのを、どう取り扱つたら宜からうか、其の邊の相談に時を移して居るらしかつたが、結局彼の推測通り、「まあ若旦那、御機嫌よろしうございます。」と云つて、娘の後から下りて來たのは彼の女である。上州屋に居た時分には、器量はよくても何處かしら奉公人臭い點があつたのに、今ではまるで風が違つて居る。丁度其の夜は彼岸過ぎの生暖い陽氣であつたが、襟のかゝつた縞ちりめんの着物の裾を長く引いて、路考茶に八つ藤の

縞模様のある丸帶をだらしなく腰へ巻きつけ、諸事贅澤な服裝はして居るものゝ、お白粉氣のない小ざつぱりした髮容に氣隨氣儘な風情があつて、一と眼見るから身を自墮落に持ち崩した女のやうに受け取れる。

「何ですねえ若旦那、久方ぶりでお出でなすつて、何もそんなに御遠慮なさるにや及びませんよ。私の方にも話したい事が澤山溜つて居るんですから、どうぞ二階へお上んなすつて下さいな。」

から云つて愛想よく笑ふところは以前に變らぬお才であつても、兩手を無精に內ぶところへ突込んだまゝ、袂をぶら〳〵させながら柱に凭れて口をきくぞんざいな態度と云ひ、妙にしな〳〵した柔かさうな體のこなしと云ひ、堅儀な家の小間使ひから一足飛びに藝者になつて了つたやうである。殊に娘らしく水々して居た頰の肉の瘦せ落ちたせゐか、疲勞した年增の如く目鼻立ちに權を帶びて、いかにも擦れ枯らしの女のやうな凄いところが加はつて居る。巳之介は其の顏を見ると、直ぐにいつぞやの富藏の容貌を連想した。

「遠慮なんぞをして居る次第ぢやないんだが、其の節は又お前にきつい迷惑を掛けてしまつて、私あ全く面目なくつて仕樣がねえわさ。今日はお前さん、やつとの思ひで內を拔け出して來たんだが、まあ居てくれて結構だ。私あ彼れから每日每日お前の姿に憧れつゞけて、お恥しいが御覽の通り瘦せやした。」

女に導かれて梯子段を昇りながら、巳之介はこんな事を云つた。實際彼は口で云ふよりもつと深刻に憧れ續けて、世にも稀なる呑氣な男がお才戀ひしさに瘦せ衰へ、凹んだ眼球がます〳〵凹んで、一と入見すぼらしくなつて居た。

「瘦せは瘦せても大方外に苦勞の種が出來たのぢやあございませんか。――私なんぞはあれから此方毎日二階に閉ぢ籠つて、若旦那の事ばつかり案じ暮らして居りましたのさ。」

兎にも角にも如才のない、馴れ馴れしい調子でお才は云つた。たとへ御主人はあゝ仰つしやつても、若旦那ばかりは自分を信じて下さる事と思つて居たのに、お才が出てから一と月過ぎても巳之介から何の音沙汰もない。さては愈々捨てられたのかと、實は私かに恨んで居た。あんまり心配したせゐか、此の頃は氣が欝いで頭が重くて仕樣がない。今日も今日とて朝から氣分が勝れないので、寢たり起きたりして居たところ、なつかしいお聲が聞えた嬉しさに、急いで着物を着換へたのである。「御覧なさいまし。此の通りいつも蒲團は敷きつぱなしで、まるで私あ半病人でございますよ。ほんとにあなたは罪造りな。」

かう云つて、彼の女は二階の窓の近くに敷いてある秩父銘仙の夜具を指した。其の寢道具の一切は、巳之介に見覺えのある、忘れられない品物ばかりで、恰も今まで中にくるまつて居た人間がすつぽり其處から拔け出した形の儘に、辨慶縞の紬の搔卷が縹色の裏地を見せて洞穴の如く膨れ上り、二三本の長い拔け毛の落ちて居る枕元に銀の芒の簪が拔いてあつた。欝金の布に包んで壁に懸けてある二た棹の三味線と云ひ、蒲團の傍に置いてある朱羅宇の長ぎせると云ひ、座敷の空氣は凡べて以前よりなまめかしく、花やかになつて居た。

「ねえ若旦那、何だかこんなに散らかつて居て話をするにも工合が惡いから、いつそ何處ぞへ晩の御膳を喰べに行かうぢやございませんか。お顏を見たら私あすつかり氣分が直つてしまひました。」

何故か彼の女はそは〳〵として、妙に落ち着かぬ素振りをしながら、相手の眼つきを判じるやうに云つた。

「そいつも惡くはないけれど、生憎今日は持ち合はせがないんでなあ。實は用達しに行くと云つて、御覧の通りの不斷着で内を飛び出して來たもんだから、……」巳之介は女に對してよりも寧ろ自分に氣の毒さうな風であつた。昨今金廻りの惡くなつた事や、洒落た衣裳を著られなくなつた事や、一體に羽振の利かなくなつた内幕を、成る可くお才に悟らせまいと祈つて居た矢先へ、此の難關が逢着したのである。

「では此の頃でも、お宅の首尾がやつぱりお惡うございますね。」

果して女は明らかに不滿足らしい口吻である。「そんなにあなたが不景氣なら、私もなんだか又氣持が惡くなつて來た。」と云ひたげな鹽梅である。

「なあにお前、兄貴の奴は未だにぐづ〳〵云つて居るが、お母の方をすつかり丸めて了つたから、そんなに不自由はしねえのさ。何處かへ遊びに出掛けると知つたら、少しは持つて來るんだつけが、氣が利かねえ事をしたなう。」

「御勝を喰べるくらゐならあたしが持つて居りますから、心配するにやあ及びませんよ。さあ一緒に參りませう。」と、女は遮二無二急ぎ立てる。

「それでもお前に散財させちや氣が濟まねえ。」

「何ですねえ水臭い。此れだけ預けて置きますから、勘定はあなたが拂つておくんなさいまし。」

お才は用簞司の抽き出しから、紺天鵞絨の三つ折れの紙入を出して、小菊の紙へ二分金を包んで巳之介の掌へ押し付けた。さうして男の肩へ手を廻して、媚びるやうににつこり笑ひながら、無理に抱へて引き立てた。

巳之介は愉快で溜らなくなつた。色女から小遣ひ錢を貢がれる卯三郎の惚け話を、かねがね聞かされて羨しく感じて居たのに、今や自分が其の境遇に會したのである。

二人が仲好く連れ出つて格子の外へ出た時分に、空明きになつた筈の二階の押入の襖を開けて、中から四つ這ひに這ひ出したのは卯三郎である。

「あゝ苦しかつた、飛んだところへあの薄のろがやつて來やがつて、大さうな目に遇はせやがる。私あ息が詰まりさうだつた。」

「あはゝゝゝ、卯三さん色男も大概ぢやあありませんね。」

かう云ひながら其の時上つて來た富藏の上さんと顏を見合はせて、卯三郎は腹を叩いて可笑しがつた。

「あんなにされても未だに懲り懲りしないたあ、野郎の馬鹿にも方途がねえ。」

「もう來ようたあ思はなかつたがいゝ椋鳥が、あるものさ。又一と儲け出來さうだから、前祝ひに一杯やつてあの娘の歸りをお待ちなさいよ。」

先巳之介が這入つて來た時、あはてゝ押入へ隱し込んだ酒肴の膳を引き擦り出して、上さんは杯を男

にさした。

卯三郎は夢中になつて、障子の隙間から廣小路の方へ歩いて行く二人の後ろ姿を面白さうに眺めて居たが、やがて何を見たのか、

「ちよッ、あの野郎め、いゝ氣になつて居やあがらあ。」

と、舌皷を打つて云つた。

九

望み通りに再びお才との仲を取り戻した巳之介は、五日に一度ぐらゐつゝ、店の用事の隙を見ては兩國へ駈けつける。それにつけても懷中の乏しいのがますます不便で溜らなかつた。以前のやうに十兩借せの二十兩借せのと云はれたら、何と斷りを云つたものかと取り越し苦勞をしてばかり居る。その内情を推察したのか、お才は一切無心がましい事を云はず、却て折々は小遣ひ錢を貢いでやる。どう云ふ譯か此の頃の彼の女の財布には、五兩十兩の金は絕えず這入つて居るらしかつた。

「あたしばつかりは運が好くつて、お暇を出された後までも斯うして若旦那にお目に懸つて居りますが、一體お露さんはどうなすつたでございませうねえ。嘸まあ毎日卯三どんに戀ひ憧れておいでゞせうに、何とかして遇はせて上げたいぢやございませんか。――就いては若旦那にお願ひがあるのでございます。」

或る時お才はこんな事を云ひ出した。實は四五日前に、何を隱さうあの卯三郎が突然兩國へ尋ねて來

て、「どうぞお露さんに一と目會はせて下さるやうに、お前さんから若旦那へようくお賴み申してくれ。」と、散々彼の女に懇願したのださうである。彼はいつの間に探つたのか、近頃巳之介とお才とが密かに往復して居る事を嗅ぎ付けて、「あなた方ばかり面白い眞似して居るのはあんまり虫が好過ぎる話、少しは此の卯三郎を可哀さうだと思つてくれても滿更罰は中るまい。賴みを聽いて下さらなければ、私の方にも分別がありますから。」と威嚇したりした。その威嚇しが恐いのではないけれど、お互ひに一軒の家の奉公人として、人知れぬ戀仲を明かし合つて居た昔の誼みを考へれば、すげなく斷る譯にも行かず、「ようございます。きつと若旦那にお願ひ申して、何處ぞでお前をお露さんに會はせるやうにして上げるから、四五日待つておくんなさい。」かう云つて、お才は一旦卯三郎を引き取らせた。

「さうかい、そいつは氣の毒な。まあ其のうちに何とかして會せてやりたいもんだがなう……」

話を聞くと巳之介は不機嫌さうな顏をして煮え切らない調子で云つた。

「……何しろお露はあれ以來隱居所へ引き取られて、押し込め同樣にされて居るから、ちよつくら連れ出す隙もないわさ。いづれ近々にお母の留守を狙つて、何とか工夫をして見ようが、會はせると云つても一遍ぎりだぜ。あゝ嚴重に見張りを付けて置かれた日にやあ、さう度び度びは覺束ないから、それさへ卯三公が承知なら、私も一度は骨を折らう。」

「義理さへ立てばいゝのだから、兎に角會はせてお上げなさい。たとへ一遍でも會はせてやれば、當人同志の氣が濟むでせうから、それで澤山ぢやあございませんか。」

「だが此の話は考へ物だぜ。なまじ一度しか會へないものなら、却つて未練が殘るから、いつそ卯三公

に因果を含めて見合はせるとしたらどうだらう。……それに萬一、二人が駈け落ちでもして見ねえ、又候大騒ぎがおッ初まらあ。」

「しかしね、若旦那、こゝが肝腎なところでございますよ。」

お才は例の仔細らしく胸へ手をあてゝさもさも悧巧者らしい、のろまな男を指圖するやうな口吻で、

「あの卯三どんはなか〳〵者でございますからね、恨まれた日にやあ私たちがどんな意趣晴らしをされるかも知れませんよ。ですから一層、卯三どんに駈け落ちする氣があるのなら、させて了つたらようござんせう。」と云つて巳之介が吃驚したまゝ二の句が次げずに眼を見張るのを、強ひて押し切つて言葉を進める。「駈け落ちしたつて心中すると極まつたものぢやあござんすまいにさ。何もそんなに御案じなさるにやあ及びませんやね。――若し卯三どんに讐を取られて、あなたと私の仲を割かれでもして御覧なさいな。それこそほんとに又心配が持ち上るぢやあございませんか。ねえ若旦那、あなたは私よりも、きつとお露さんの方が可愛いんでございませう。」

「馬鹿を云ひねえ、なんぼお露が可哀さうでも、妹と色女たあ別物だ。お前と彼奴と取りかへッこで溜るもんか。」

せつぱ詰まつて巳之介は豪儀に云つて除けたものの、さながら人殺しの相談でも受けたやうに青くなつたのをお才は直ぐに見て取つて、

「もし若旦那、口先よりか腹を据えて、よく考へておくんなさいまし。もうかうなつたら打ち明け話を致しますが、實は私がこんな相談を持ち出したのも、いろ〳〵譯がございますのさ。」と半分膝を乗り出

して、いかにも赤心を吐露するやうに云ひ足した。「正直な事を申しますと、卯三どんはお暇が出てから、今迄にもうるさく私の所へ來て、毎度嫌らしい事ばかり聞かせるのでございます。お露様と會へなくなつたやけ糞に、急に此方を欺さうとでも思つたのか、若旦那の事は及ばぬ戀とあきらめて、どうぞ私に靡いてくれと、それはそれは威嚇したり賺したり執拗く附いて廻るぢやございませんか。それを嚴しく撥ね付けると、そんなら是非ともお露様と會はせるやうに工夫をしろ、それも承知が出來ぬと云やあ、若旦那の疵を洗ひ立てゝ、お宅を勘當されるやうにして見せる。その上で自分がお露様を玉に使つて、上州屋の身代を乘つ取つてやらうから、後悔するなと、まあかうなのでございます。」

さも氣味惡げに説き立てるお才の口調に釣り込まれて、巳之介はいよ〳〵青くなつた。卯三郎は威嚇の積りで、「勘當されるやうにして見せる。」と毒づいたのかも知れないが、彼に取つては威嚇以上の凄文句である。既にいつぞやの證文が發覺して、二百兩の手切れ金を絞られた當座、兄の善兵衛は立腹のあまり巳之介を勘當するといきまく事があつたのを、漸く隱居が仲裁してどうやら今日まで收まつて來たくらゐである。若しもその後再びお才と私通して居る事實が曝れたら、どんな始末になるかも知れぬ。「お前のやうな腑拔け者に内の身代を任せる譯には行きませぬ。」と、兄貴が又も四角張つて勘當すると云ひ出したら、力と頼む母親も昔程の威光はなし、今度こそ本當に大變である。全く卯三郎の想像通り、妹のお露は婿を迎へて、其れに家督を讓るやうな、ひよんな事件が出來せぬとは限らない。さうなる日には、お才は愚か世間の誰彼が、一人として「若旦那」を見かへる者はなくなるであらう。——其處の弱味を巳之介は勿論、相手のお才も充分に呑み込んで居た。

「可哀さうでも背に腹は換へられないから、いつそ卯三どんの頼みを幸ひ、今のうちにお露樣を誘ひ出させてお了ひなさいな。さうさへすりやあ、あなたは上州屋の一人息子、どんな勝手な眞似をしたつて、勘當されつこはございませんよ。」

「うん、うん。」と巳之介が柔優不斷な生返辭をして居るうちに、いつかお才は性惡の本音を現はして、紅い美しい唇から非道な事を遠慮なく云ひ張つた。

彼の女の云ひ草が何處まで本當で何處まで嘘やら解らないが、成る程邪魔者の卯三郎に妹を預けて放り出したら、自分の戀は安全になる譯である。かう氣が附くと巳之介は急に思案を變へて、一も二もなくお才の口車に乘つた。

「卯三公の方は其の積りでも、肝腎のお露の奴が何と云ふか、內々あたつて見た上で手筈をきめるとしようぢやないか。……駈け落ちの手引きばかりは、私も今度が初役だわえ。」

「だから若旦那、しつかりやつておくんなさいよ。」

わたしの心で賴むのではない。立派な器量と肉體の値打ちを懸けて賴むのだと、云はんばかりに寄り添つてお才はしんみりと慰めるやうに云つた。

其の時分、お露は今戶の隱居所の二階の一と間に起き伏しして、東向きの日あたりのいゝ緣側の欄杆に頤を載せながら、每日每日茫然と喪心した如く大河の水を眺め暮らして居た。暫く辛抱して居れば、やがて必ずあの人に會はせてやると、あれ程たしかに引き受けてくれた巳之介からは、それきり何の沙汰もない。母親を始め誰一人も賴みに思ふ話相手のない淋しさに、包むに餘る胸の苦しみをぢつと堪へ

て、そゞろに物悲しい夕ぐれなどには、自然と兩眼に沕いてくる口惜し涙を、密かに袂で拭つて居た。あの浮氣者の卯三郎が、嘸や今頃は自分の事など忘れて了つて、よその女と勝手な眞似をして居るだらう。事に依つたら吉原通ひの猪牙船などに乘り込んで居ようも知れぬと、欄杆の下を行き過ぎる上り下りの船中を、退屈凌ぎに窺つてもついぞ似た人の姿は見えない。向う岸の土手の櫻は日增しに色が濃くなつて、三圍神社の鳥居の邊に暖かさうな霞がかゝり、花見の群衆の陽氣な騷ぎが手に取るやうに眺められつゝ、自分ばかりは籠の鳥同樣な悲しさ辛さ。川越しに響いて來る長命寺の鐘の音に誘はれていつそ眼の前の隅田の川波へ身を沈めて了はうかと、眞面目に考へ詰める事もあつた。

「どうしたお露ちやん、いまだにお前は戀病ひをして居るのか。」

或る日母親が寺參りに行つた隙を狙つて、久方ぶりに尋ねて來たのは巳之介である。噂に聞けば此の頃はすつかり行狀も改まつて、錢遣ひを愼しみ、稼業に精を出すやうになつたと云はれて居るのに、相變らず剽輕な無駄口を叩いて、妹の鬱ぎの蟲を追ひ拂はうといろ〳〵出まかせの冗談を云つたが、お露は默つて相手にならなかつた。

「はゝあ解つた。大方お前は私を恨んで居るんだな。もうふッつりとあきらめたやうに、口へ出しちやあ卯三郎の『卯』の字も云はないが、やつぱり會はせて貰ひたいんだらう。——私も一旦請け合つたからは、隨分心配して見たが、店に居りやあ兄貴の眼玉が光つて居るし、隱居所へ來りやお母が頑張つて居るし、うつかりお前と話も出來ないから、全くやきもきしちまつたわな。ところで今日は幸ひお前一人だから、とつくり了見を聞かせて貰ふ積りなんだのに、何を云つても更に御返辭を賜はらないのは情な

うがすね。ねえお露ちやん、いかゞなもんですい。會ひたいと云ふなら會はせる手筈がちやんと此方に整つて居るんだが、それともお前はもう卯三郎に用はないかい。」

「あたしの方に用があつても、きつと先ぢやあ嫌だと云ふにきまつて居ますのさ。——嬉しがらせもいゝ加減にしておくんなさい。」

「ところがそいつが大違ひ、卯三公の方は是非ともお前の顔が見たいつて、眼の色を變へて騷いで居る奴さ。冗談ぢやない。こんな話は唯ぢやあお前に聞かされねえや。何か奢つて貰はうぜ。」

「巳之ちやん其れは本當でございますか。そんな話を一體誰からお聞きなすつた。」

お露は漸う愁眉を開いて、さすがに微かな歡びの色を見せる。

「實はお才から相談があつた……」と、危く舌を辷らす所を、ふと氣が附いて巳之介は多少報告に僞を交ぜた。實は卯三郎から直接に自分へ宛てゝ再三懇願の手紙が來て居る。たとへ旦那や隱居様からどんな壓迫を受けようとも、末は必ず夫婦になると堅い約束をして置きながら、お顔は愚か其の後一遍もお便りがないとは、若旦那もお露様もあんまり薄情な仕打ちだとお恨み申して居る。添ひ遂げられずんば死んで了ふとまで仰つしやつたお露様のいつぞやのお言葉は、あれは一體何でございます。此の卯三郎は未だに忘れは致しませんなどゝ書いて寄越した。

「嘘だと思ふなら此れを御覽。」

と云つて、巳之介は懷から一通の書面を出した。三尺に餘る卷紙へ、日頃自慢の能筆能文で心の丈を長々と訴へた濃い墨のあとは、疑ふべくない卯三郎の手蹟である。兩手に支へて讀んで居るお露の指先

は俄かにふるへて、千里の彼方に隔つて居た戀人が忽ち此の座敷へ這入つて來たやうな懷かしさに、其の卷紙をぴたり頰へ擦り付けたいくらゐに彼の女は感動させられた。

手紙の文句に一から十まで誠意が籠つて居ようと信じられない。女たらしのあの男が、いつもの傳で又候人を迷はさうと云ふ魂膽から、こんな甘やかしを並べ立てるのか。

「おゝ恐い事、恐い事」とお露は誘惑の前に眼をつぶつて、我から燃え立つ煩惱の炎を押し鎭めようと努めて見たが、悲しや幻のやうに戀ひしい人の姿がちらついてとても振り捨てる勇氣は出なかつた。それから後は巳之介の煽動を待つ迄もなく、話は容易に進行して、內の首尾が惡からうが、母親の監督が嚴しからうが、今夜の中にも卯三郎の所へ逃げて行きたいと、自分の方から熱心に賴み始めた。

「いゝとも、いゝとも、お前にそれだけの覺悟があるなら、きつと私が會はせてやるが、ほんたうに卯三郎と夫婦になりたい積りなら、いつそ此の儘內を飛び出して、當分歸つて來ない方が都合が好くはあるまいか。そのくらゐにして威嚇してやらなけりや、とても兄貴やお母が降參しさうもないぜ。……」

こゝぞと思つて巳之介が一生懸命に說得しかゝると、お露は却つて待ち構へて居たやうに、

「私や初めから其の了見で居ますのさ。巳之ちやんさへ見逃して下されば、駈け落ちする氣でございます。」と、躊躇なく云つて除ける。決心の程の恐ろしさに、今度は巳之介の方があつけに取られて、聊か無氣味にもなつて來た。

「だがお露ちやん、駈け落ちするのはいゝけれど、短氣な眞似をしないやうに、氣を長くして時節の來るのを待つて居ねえよ。兄貴やお母の心が折れたら、私が早速知らせてやるから、それまで喧嘩をしな

いやうに仲好く二人で暮らして居ねえ。――その辛抱が續きさへすりや私も安心するが、ほんとにお前大丈夫か。」

「あたしの方は大丈夫だけれども、卯三どんの心がいつ迄變らずに居る事か、……ねえ巳之ちやん、一旦家出をしたからには、若し欺されて捨てられたらば私の命はないのだから、どうぞいつ迄も可愛がつてくれるやうに、お前からも卯三どんによう〳〵頼んでおくんなさいまし。」

「先の心は此の手紙で充分わかつて居るぢやあないか。お前にしたつて其れ程彼奴を疑ぐるなら、駈落ちする氣になりやしめえが。……」

「いゝえ巳之ちやん、たとへ私は欺されるに極まつて居ても、どうせ家出をしなければ濟まない事があるのでございます。私の體はもう……」

と云つて、お露は深い溜め息を引きながら、懷ろに入れた右の手で乳房のあたりを堅く抑へて、急に何かに脅かされたやうな眼つきをした。

「……お恥かしうございますが、唯の體ではないのでございます。可哀さうだと思つたら、どうぞお前から卯三郎に、くれ〴〵も私の身の上を頼んで置いて下さいまし。」

巳之介は大變な事になつたものだと、今更のやうに吃驚した。

お才と二人で樂をしたいばつかりに案出した計略が、思ふ壺に篏まり過ぎて、見事に功を奏したものの、萬一お露が子供を生んだ揚句の果てに、卯三郎から放り出されて、野たれ死にでもするやうになつたらどうであらう。去年までは無邪氣な初心な上州屋の一人娘で暮らして居た妹に、そんな苦勞をさせ

るのかと思へば、考へて見てもぞつとする。

「此れもお才の爲めだとは云へ、あゝ寢ざめが惡い。」と、彼は密かに身顫ひした。

さて巳之介がかねがね卯三郎と文通をして取り極めて置いた駈け落ちの手順と云ふのはかうである。

――本所の先の小松川村の、逆井橋から四五町行つた淋しい葛飾の田舍に、卯三郎の懇意にして居る百姓の家があるから、其處を賴つて當分厄介になるとしよう。就いては隱居所の案内を知つた巳之介が、三月末の月のない夜半頃にお露をそつと連れ出して、中途まで送つて來て貰ひたい。連れ出すには、後から追手のかゝらぬやうに、夜路で間違ひの起らぬやうに、大川筋を船で下るのが一番いゝから、此れも卯三郎が昵懇な山谷堀の船頭を賴んで、荷足を一艘隱居所の石崖の下へ廻して置く。兄妹が其れへ乘り込んで竪川を眞直ぐに逆井橋まで漕ぎ付ければ、あとは徒歩でも僅かである。大凡到着の時刻には卯三郎が迎ひに出て居る積りであるが、若し見えなかつたら千葉街道の右側に庚申塚の立つて居る地點を曲つて、田圃道を半丁も行くと、門前に榎の大木が一本高く聳えて居る、比較的構への立派な野中の一軒家だから直ぐにわかる。其處で巳之介はお露を卯三郎に引き渡し、駕籠を雇つて大急ぎで歸つてくれば、夜明け迄には上州屋へ着いて、何喰はぬ顏で奧の間へ這入り込んで寢た振りをして居られるだらう。

體の外に着換への二三枚もあつたら澤山で、嵩張る程の荷物を持ち出すには及ばないが、唯必要なのは金子である。卯三郎も暇を出されたから別段此れと云ふ收入はなし、二人が暫く姿を晦まして二た月なり三月なりを過ごして行くには、相當の用意がなければならない。それは巳之介が自分で手引きをする以上、お露の爲めに拵へてやる責任があるから、是非とも當夜出奔の刻限までに、諸方面から融通し

て來る。先づ百兩はたしかと思つて居るがいゝ。此れで大體相談が纏まつた。

豫め定めて置いた驅け落ちの日は追ひ追ひに近づいた。お露は夜な／＼附き添ひの女中の寢息を窺つて、そつと蒲團を這ひ出しては、いざと云ふ場合の荷物を風呂敷に包んだり、兄や母親に遺して行く手紙の文言を書き綴つたりした。巳之介は自分が請け合つた金の工面に肝膽を碎いたが、勿論融通の出來る諸方面などのある筈はなく、あつても自分が返却す可き能力はなし、つまる所は自宅の金をそつと盜み出す算段ばかりである。「なあにあなた、いづれあなたの身上になるものぢやあございませんか。他人の金を借りるよりか其の方がようございますよ。どうせ持ち出すなら二百兩が三百兩でも、知れないやうに浚つて來て、お露さんと山分けになさいまし。」とお才も傍から唆かした。

金の收つてある土藏は、店に一つ、隱居所に一つある。本來ならば兄貴の金をちよろまかして、仰天させてやりたいのだが、店の方は人目も繁く戸締りも嚴重で、容易に忍び込む隙間がない。其の上盜難が發見された際に、嫌疑の眼が忽ち巳之介に集まるのは當然である。散々世話になつた母親の貯金を盜み取るのは不本意ながら、隱居所の土藏ならば萬事に好都合である。風呂番の外に男氣はなし、持ち出し損ねて見付かつたところが、頰冠りで面體を包み、見ず知らずの强盜の風を裝つて、出刃庖丁でも突き付けたら、ちゞみ上つて了ふだらう。……巳之介は度胸を据えて今日か明日かと機會の來るのを待つて居た。

三月二十日の眞夜中過ぎの刻限である。今戸の隱居所で平生から便所の近い母親が、ふと眼を覺まし

て雪洞(ぼんぼり)を片手に廊下の闇を歩いて行くと、二た間ばかり隔つた、勝手口に近い方角で微かにみしみしと人の足音が聞えて居る。不思議に感じて耳を澄ましながら、其の方角に忍び寄ると、頭巾を被つた一人の曲者が湯殿の前にうろうろして居るのを見付け出した。いきなり後ろから、

「泥坊！」

と聲をかけると、曲者はあはてゝ風呂場へ逃げ込む拍子に、流しの板の間へすつてんころりと辷つて轉んで、四つ這ひになつた。雪洞の明りに照らし出された様子では、背中に小ひさい包みを背負つて臀端折りをした、蛟の脛のやうに兩脚の痩せた男で、轉んだはづみにしたゝか膝頭を打つたらしく、血がたらたらと流れて居る。丁度お鶴の方へ褌が見えるくらゐに臀を向けて、臀の先へ右手に摑んだ出刄庖丁を突き出して居る。庖丁の鋒が眼に映ると、お鶴はぎよつとして、更に消魂しい聲をあげて、

「泥坊々々ー」と連呼した。家中の者が「それッ」と云つて飛び起きたらしい物音に、曲者は、す早く立ち上つて、風呂場の裏口の戸を蹴返して、井戸側の周圍をまごまごした揚句、這々の體で路次へ落ち延びるや否や、一目散に往來を走つて逃げた。

後で一同が家の中を隈なく調査すると、賊は臺所の引き窓から這入り、竈を踏み臺にして降りて來たものらしい。さうして豫め湯殿の木戸の掛け金を外し、裏口の雨戸を二三尺繰り開いて、逃げ路を作つて置いてから仕事にかゝつた。主人の物も女中の物も、細かい品は何一つなくなつて居ないけれど、觀音開きの前に落ちて居る藏の錠前の合鍵が挿し込んであつて、網戸が開け放しになつて居る所から大騷ぎとなり、とうとう二百兩程の小判を盗まれた事に氣が付いた。

賊はどうしても内の様子を詳しく知つて居る人間に違ひない。當夜曲者の風體を見た筈の母親は、恐

怖のあまり度を失つて、人柄などはよくも覺えて居なかつたが、「事に依つたら卯三郎の仕業ではあるまいか。」などゝ云つた。しかし生憎證據となる可き物件は、足痕一つ殘つて居なかつた。

十

駈け落ちの夜は、月がない上に宵の口から空は眞綿を掛けた如く一面に曇つて居た。夜の九つを報ずる番太郎の拍子木が町内を通り過ぎて了つた時分に巳之介はムツクリ撥ね起きて庭へ出ると、蜘蛛の巣だらけな奥坐敷の縁の下へもぐり込んだ。此の間盗んで來た二百兩の金を、彼は密かに其處へ隱して置いたのである。嵩は小いさいが重味のある風呂敷包の結び目を口に咬へて、再び床下から犬のやうに這ひ出して來た彼は、南天の葉蔭の厠の羽目板へ背中を凭れて躊躇りながら、音のしないやうに包みを開いて中の小判を半々に分けた後、一方の百兩を胴巻に入れて腹へ巻き付け、殘りの百兩を又風呂敷にくるんで内懐へ收めた。

隱居所の大川に向つた方面は、十坪ばかりの庭になつて居て、庭から直ぐに水面へ降りられる石段が附いて居た。横手の塀を乘り超えて、巳之介が難なく其處へ忍び入つた頃、かねての約束の猪牙船は既に石段の下にもやつて、怪しい姿の船頭が頻りに會釋をして見せる。彼は手さぐりで手洗場の流しの石の大型なのを二つ三つ拾つて、續けざまに川の中へ投げ込んだ。ぽちやん……と云ふ鈍い水音が、闇夜の靜けさを破つて微かながらもはつきりと四隣へ響き渡る。

其の水音が屆いたのか二階の雨戸が徐ろに開いて、やれうれしやと云ふやうに廊下に立ち現れたのはお露である。ちりめんの扱を二三本繋いで、一方の端を欄杆に結び付けると、彼の女は其れに傳はつて

瓦屋根からぶらりとつる下つて、巳之介の肩に飛び着いた。

「こゝに百兩這入つて居る。しッかり懐へしまつて置きな。」

船へ乘り移ると、巳之介はかう云つて例の包を妹の手に渡した。川は一杯の滿潮(みちしほ)であつた。舷が石崖から一二間離れた時分、棹は直ぐに云ふ事を聽かなくなつて、眞黑なだぶだぶした水が、櫓を押す度に魔のやうな手を上げて、四方から小いさな船を搖す振つた。

「お母さんも兄さんも、何卒勘忍しておくんなさい。」

舳に坐をしめたお露は、次第々々に遠ざかつて行く隱居所の方へ兩手を合はせて、口の中でこんな事を云つた。明け放しになつて居る二階の雨戸の隙間から、行燈の灯がぼんやりと濁染んで居たが、それも程なく闇に吸ひ取られて消えて了つた。

去年の夏の花火の宵に、卯三郎と二人で屋形船の屋根へ倚りながら、川面を吹く涼しい夕風に樂しい戀を語り合つた事を、お露はふと想ひ出した。その晩の賑はひに引き換へて、兩岸の家々も空も川も死んだやうに暗く淋しく、吾妻橋と厩橋の橋下を潜つた事だけは判つて居たが、見覺えのある駒形堂も見返りの松もいつ通り過ぎたか知らぬ間に、もう兩國を出て竪川筋へ漕いで這入つた。

「お露ちやん、お前は此の川を覺えて居るだらう。一昨年の夏四つ目の牡丹を見に行く時に、金龍山の米饅頭を船から落してお前がおかしがつたのは、何でもちやうど此處邊(こゝいら)だぜ。」

二つ目の橋を通る時分に、巳之介は小いさな聲で慰めるやうに云つた。彼はいつものお喋舌りにも似合はず、どうしたものか妙に沈んで默つて居たが、それでも張合ひのない調子で漸くこんな冗談を云つたのである。

「逆井まではまだどのくらゐあるのでせう。――私や何だか知らない所へかどはかされて行くやうで、心細うございますよ。」

今頃内では女中達が眼を覺まして、大騷ぎをして居ないだらうか、此れ程の思ひをして逃げて來た自分の體は、果してどうなる事であらう。悧巧で、猫冠りで、口が上手で、心の底は案外つめたい卯三郎が、自分を片田舍の百姓家へ連れて行つて、いつ迄可愛がつてくれるだらう。……お露は胸が一杯になつて、まごまごすればお腹の子供と一緒に死ぬばかりだと覺悟をきめて居る。

四つ目の橋を過ぎてから、左右の人家はだんだん疎らになつて、夜目にもひろびろとした葛飾の野を吹き越えるひめやかな風が、姐さん被りの手拭にはたはたと打ち着ける。いつ歸れるか解らない大江戸の街の空は遙かに遠く隔つて、肥料臭い田圃の匂が折々鼻を掠めて來る。長い長い竪川の、堀割のやうな狹い川筋はやがて行きつまつて、船は再び幅の大きい、浪の高い中川の眞ん中へ浮かび出した。

「さあお二人さん、此れが逆井橋ですぜ。」

船頭は手を伸ばして、舷の左に見える長い橋を示した。さうして向ひ岸の堤防の際へ纜を結んで、「此處からお上んなせえ。」と云ふ。

お露の手を引いて土手へ登つた巳之介は、闇に透かして四邊の樣子を窺ひながら、「卯三どん、卯三どん」と囁くやうに呼んで見たが、人影らしい物は居なかつた。

「ちいツと着くのが早過ぎたから、まだ卯三さんは來て居ねえかも知れやせんよ。」から云つて下から聲を掛けた船頭は、既に船を川の彼方へ二三尺漕ぎ戻して了つたらしい。「……此れから先は僅かだから、お前さん方二人でも大概路はお解んなさるだらう。……それ、土手の向うに見えて居る、眞直ぐな往還

が千葉街道でごぜえやすよ。」

成る程堤防から直角に、小松川村の百姓家の點綴する間を縫ひつゝ、一本路の街道が白々と帶のやうに續いて廣漠とした野の果てに消えて居る。

「ちよツ、卯三公の奴め、何をぐづぐづして居るんだか、ほんとに困つちまつたなあ。」

「何んだか私あ薄氣味が惡うございます。――卯三どんの迎へに來る迄、斯うして待つて居りませうよ。」

お露は足袋跣足のまゝ立ち竦んで、巳之介の手を取りながら顫へて居た。

「待つて居たいが、私も歸りを急ぐから、いつそ二人で行つて見よう。好きな男の傍へ行くなら、お前もちつたあ我慢をしねえ。」

荷物は悉皆巳之介が持つて、お露は家を拔け出す折に着換へて來た紺縮緬の替り小紋の衣裳を端折つて、闇には惜しい燃え立つやうな派手な長繻絆の裾を露はに、小砂礫の多い土の上を痛さうに蹈んで行つた。

話に聞いた庚申塚はたしかに街道の右側にあつて、其處から細い畦路が岐れて居る。二人は並んで歩く事が出來なくなつて、お露は巳之介の足音を便りに二三尺後ろから從つた。路の片側には小川に添うて小笹が一面に生ひ繁り、動ともすれば濕つた地面がぬる〳〵と辷り落ちさうに感ぜられる。行けども行けども果てしのない田圃の中に、時々二三軒の百姓家の前を通り過ぎたが、例の榎木の大木は容易に見付かりさうもない。

「はておかしいぞ、事に依つたら行き過ぎたのかも知れないが、こんな眞暗ぢやあ、鼻を摘まれても判らねえなあ。」

とうたう巳之介はハタリと立ち止まつて、臆病神に襲はれたやうな句調で云つた。其の時傍の雜木の陰でがさがさと云ふ物音がしたかと思ふと、忽ち黑裝束に覆面をした三人の男がばらばらと躍り出して、二人の前後を取り卷いた。
「手前達は何處へ行くのだ。……」
一人が斯う云ふと、ちやりんと云ふ響きがして、三人同時に腰の白刄を拔いたらしい。
「私ですか、私達は直き先の、榎木の大木のある百姓家まで參りますんで……」
巳之介の言葉は落ち着いて居ると云ふよりも生氣がなかつた。刄物の光を見せられてから、彼は何處へか自分の魂を落して了つた。
「出鱈目を云ふな。此の近所に榎木の大木はありやあしねえ。――大方手前達は駈け落ち者だらう。駈け落ち者なら金を持つてるに違へねえから、殘らず此方へ渡してしまへ。素直にすりやあ野郎の方だけは助けてやる。」
不意にお露は「あれえッ」と云つて、悲鳴を擧げながら逃げ出した。
「畜生、手前を逃がしてなるもんか。」
二人は直ぐに追ひ縋つて、泣き狂ふ女の口へ猿轡を篏めた。それから頭と兩足を抱いて、彼の女の體を肩の上へ擔ぎ上げたまゝ一目散に走り去つた。殘る一人は物をも云はず男の懷ろへ手を突込んで、胴卷を引き出さうとする。
「そこに百兩這入て居ますよ。みんな差し上げますから、命だけはお助けなすつて。」
相手は冷めたい指先で暫く彼の腹の皮を撫で廻して居たが、やがて胴卷を引き拔いて了ふと、あんま

り先方が大人しいので張合がないと思つたか、いきなり平掌で横顔をぴたりと擲つた。

「あ痛い」

成る可く痛さうな風をしなければ惡いと考へて、暫間が冗談に旦那から打たれでもしたやうに、彼は殊更頓興な叫びを發してわざと仰山に顏をさすつた。

「ふん馬鹿野郎、金と女さへ捲き上げちまやあ、もう手前には用なしだ。かうしてやるから溝の水でも喰やあがれ。」

どんと巳之介は背中を突き飛ばされて、一と溜まりもなく小川の中へ轉がり落ちた。泥深い水の底へ眞倒さまに首を押し込んだので、狼狽てゝ藻掻けば藻掻くほど、ぬらぬらした物が所嫌はず眼鼻へ浸入して來たが、それでも彼は辛うじて汀へ這ひ上つた。晝間見たら人間とは思へない、化物のやうな姿になつて、笹叢の中に息を殺しながら様子を窺ふと、以前の男はまだ其の邊をうろついて居るらしい。

「あんまり野郎のびくびくするのが可笑しいから、つい徒らにやつつけたんだが、不憫な事をしたものさなあ。」

かう云ふ男の言葉に續いて、再び雜木林の中から今一人の人影が現れた。

「可哀さうにお前さん、きつと彼奴は川へ陷つて死んだらう。何だか眼覺めが惡いぢやないか。」

其れは女の聲であつた。

「あはゝゝゝ。死んだら死んだで搆やあしねえ。こんな夜更けの田圃路で、何をしようと誰にも知れやあしねえんだから。」

「それもさうだが彼奴を生かして置きさへすりやあ、まだいくらでも欺かして金を絞つてやれるのに

さ。」

「己も初めは其の積りでなる可く口を利かねえやうにして居たんだが、面白さに釣り込まれてうつかり喋舌つて了つたんで、事に依つたら感付かれたかも知れねえんだ。結句くたばつて了つた方が、後の祟りがなくつていゝやな。」

女の誰であるかと云ふ事が解ると同時に、男の方もだんだん巳之介の腑に落ちて來た。先刻出し抜けに脅迫された折は、相手が聲を殺して居たのと、此方がひどく仰天したので、一途に顚へ上つたものゝ、耳を澄まして聞いて見ると疑ひもなく卯三郎である。

「それはさうと、其の腹巻にはいくらあるのさ。」

かう云ひながらお才は路端にうづくまつた。その足元から三四寸離れたところに、巳之介は平つくばつて首をさし伸べたまゝ、頭の上の二人の會話を盗み聽きする。

「そこに百兩這入つて居ますと、自分で白狀しやあがつたぜ。……此の脇差を突き付けたら、まさか銀紙たあ氣が付かねえで、すつかり膽を潰しちまつたから。妙ぢやあねえか……こんなこけ威嚇しのがらくた道具は、溝ん中へでも捨てゝ行かう。」

手に持つて居た白刃を鞘ぐるみ放り出して、卯三郎は頭巾をすつぱり脱いだ。

「何だい、たつた百兩かい。……それでお露様はどうしたんだい。」

「金さへ取りやお露の奴に用はねえから、彼奴等二人にくれてやつたわな。今夜早速、中川縁から行德行きの船に乘せて、いづれ其のうち木更津邊の女郎に賣るのだと云つて居たが、何しろ玉が惡いからなう。」

「ふん、散々しやぶつて置きながら、玉が惡いもないものさ。――だが冗談は後廻しにして、そいつは飛んだ手ぬかりだつたよ。どうも私の考へぢやあ、きつとお露樣の懐にも百兩ぐらゐあつただらう。」

「成る程しまつた事をした。まだ遠くへは行くめえから、此れから後を追ひ駈けて調べて見るとしようぢやないか。己は一と足先へ行くから、逆井橋の袂まで來て待つて居なえ。」

卯三郎が韋駄天走りに五六間駈け出した頃、お才もおくれて立ち上つたが、その時巳之介はのつそりと身を起した。

「おい、おい、私だよ、巳之介だよ。ちよいと話があるんだから待つてくれてもいゝぢやあないか。」

お才は振り返つて佇んだまゝ、さもさも薄氣味が惡さうにヂッと此方を睨み付けた。

「おい、おい、そんなに恐がらなくてつも大丈夫だよ。私は幽靈ぢやあないんだよ。だがひどい目に會はせたもんだね。此の通り、着物の何も滅茶苦茶でげす。あゝ苦しかつた。……」

くん、くん、と、彼は犬のやうに鼻を鳴らして、泥の硬張つた顏の筋肉をもぐもぐやらせながら、

「……實際罪な話でげす。此れが私だからいゝけれど、外の人間なら怒つちまふぜ。どうも姿が化物のやうになつたんだから、私も一つ人間離れがした積りで、お前にお願ひ申しやすが、何もそんなに卯三公ばかり可愛がらないでもいゝぢやあないか。金の事なら又いくらでも相談に乘つて上げるから、此方の緣も切らずに置いたらどんなもんだらう。それ程無理な注文ぢやあないんだから、聞いてくれても惡かあなからう。」

巳之介はにたにた笑つて女の傍へ迫つて行つたが、あはや片手を伸ばして相手の背中を抱き寄せようとする途端に、お才は不意に「あれエ」と云つて逃げ出した。

「おいおい待ちなよ。あはてるなよ。何もそんなに嫌はないでもいゝつてばなあ。」

一本の畦路を二人は夢中でどんどん走り始めた。程なく巳之介は後ろから追ひ着いて、帶の結び目へ手を掛けると、お才は其れを振り拂つて、男の顔を矢庭に激しく引掻いた。がりがりと云ふ音がして、巳之介は額や頰片(ほつぺた)が崩れ落ちたやうに思つたが、實は乾いた泥の塊が粉々に破(こわ)れたのであつた。

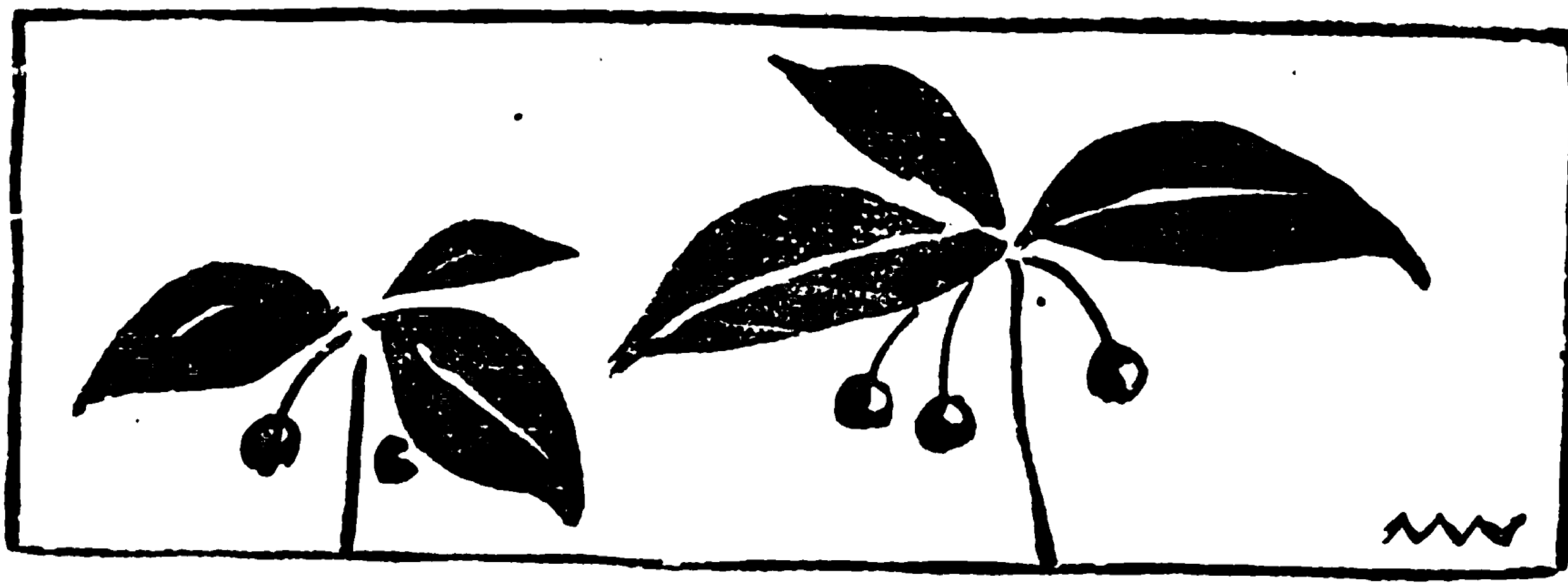
「あッ」と云つて、彼は立ち止まつて、埃の泌み込む眼と口を抑へた。お才も餘塵を浴びたと見えて、「ペッ、ペッ」と二三度巳之介の眉間のあたりへ唾吐を吐きかけて、又すたすたと逃げ出した。

暫く過ぎて、巳之介が眼を開いた時分には、遙かに先の暗闇を、一生懸命に臀をからげて駈けて行く女の淺黄縮緬の蹴出しが、白くちらちらと動いて居る。

「お才や――い。」

彼は渾身の聲を搾つて怒鳴り立てた。さうして、必ず彼の女を手なづけてやらうと云ふ決心を以て、猶も懲りずに追ひかけた。

(完)



刺戟のまゝに

正宗白鳥

（一）

吉田は今日もまた金策に出掛けた。

二三日前に今川橋のある會社を訪ねたが、其處は扉が堅く鎖されて「定期休業」と書いた札が懸つてゐた。盆休みかと氣付くと、去年の夏までは年に二度の慰勞金が手に入つたことや、その金を紙包のまゝポッケットへ突込んで、銀座通りをぶらついて、買ひたい物を買ひ喰べたい物を喰べたことが思出されて悲しかつた。課長の一寸した毒口を聞流してゐられなくつて、角目立つて言爭つたのが元となつて、三四年も精勤してゐた所を退かねばならぬ破目になつたことがまざ／＼と記憶に浮んで新たな後悔の種となつた。

「彼奴等は今時分、涼しい所で飲んだり食つたりしてゐるだらう。女房や情婦に好きなものを買つてやつて得意な面をしてゐるだらう」と、以前の同僚の顔を憎さげ

に描きながら、彼れは熱さうな扉を睨みつけて歸つたのだつた。

今日はあの日よりも暑さが更に烈しい。でも外に方法が盡きてゐるので、吉田は不承々々に出掛けた。滅多に着けたことのない羽織袴で柄にない體裁をつくろつて、その癖汚れた足袋にちびた下駄を穿いて、汗塗ろになつて、御成門から本郷まで、弱々しい身體を電車で運んだ。赤門前で下りて、照返しの強いアスファルト道を歩いてゐると目が眩みさうだつた。頭の中で物を考へる力などは殆んど無くなつて、只熱氣に遢かされる惱みと、今目の前に控へてゐる厭な用向とに心が萎えてゐた。

横へ曲つて臺町へ入ると、彼れは取つ付きの氷屋で休んで、汗を拭つて冷たい物を飲んだ。そして稍々氣力を回復してから、つとめて平靜を裝つて、松山といふ知人の家へ入つて行つた。電話で豫じめ通じて置いたので、直ぐに客間へ通されたが、西洋室の應接室の方にも客が來てゐるので、主人は容易に此方へ顏を見せなかつた。

庭には芭蕉の葉がひよろ〳〵風に煽られてゐる。取り殘された枇杷の實の皺くちやに萎びてゐるのが二つ三つ葉陰に見えた。紫陽花の花も最早色が褪せてゐる。吉田は緣側に蹲んで團扇を使ひながら、あまり手入れをしてゐないごた〳〵した庭を、暫く無心で眺めてゐた。と、やがて大きな烏が三羽板塀の上に羽を休めて不吉な鳴聲を立て出した。

吉田の耳はその聲を聞くに堪へなかつた。子供の時分、知合の農夫が野良で晝寢してゐる間に腦天を烏に啄かれて死んだことを覺えてゐるが、あの鳴聲をきいたばかりで、自分の腦味噌が惑亂しさうだ。氣が狂ひさうだ。で、手水鉢の下にあつた小石を拾つては烏を目掛けて投付けた。が、小石は宙を飛ん

で隣の屋根に落ちたり板塀に打當つたりした。烏は長い嘴を開けて暫く一ところで不吉な音を續けてゐた。

先つきから吉田の擧動を訝しげに覗見してゐた書生の堀口は縁側へ出て、「暑いですね」と聲を掛けた。

「暑いね」吉田は焦々した顔を向けて、「客は誰れです？」と訊いた。

「雑誌記者でせう」

「この暑いのに馬鹿に話が長いぢやないか。待つてるのは厭なものだよ。僕は一寸用事だけ話したら直ぐに歸るつもりだが……」吉田は訪問の目的が達せられるか否かを苦にしながら、書生の側へ近寄つて、

「この頃は此家は景氣がいゝのですか。……いゝのだらうね」

「どうですか……」書生は笑つてゐたが、「貴下は今は何をしてゐらつしやいます？」と、やがて問返した。

平生他人にさう訊かれるたびに、吉田は厭な思ひをしてゐるのだが、この書生の顔付が冷笑を含んでゐるやうなので、殊に侮辱を感じて、

「僕だつて何時までも遊んでやしないよ。まあ見てゐたまへ」と無愛相に言放つた。

「……貴下のお噂を先日も奥様がしてゐましたよ」と、書生は相手に媚びるつもりで云つた。

「さうかい。僕は暫く御無沙汰をしたからね。今日妻君は家にゐるの？」と、吉田は直ぐに機嫌を直して訊いた。

「奥様は一昨日伊香保へいらつしやいましたよ、坊ちやんを連れて」

「おや、大將も暇になつたら後から出掛けるんだらう。君は相變らず留守番だね。僕が時々午睡しに來ようか」

「えゝ。是非遊びに來て下さい。留守中は私が主人だから御馳走しますよ」

「旨いこと云つてるね。一錢だつて無駄遣ひすると、後で妻君に苦情を云はれてビク〳〵しなけりやならん癖に。……君は身體は丈夫だし歳も若いんだから、もつと大膽にやつちやどうだい。世間は廣いから何も此處の主人に恐れ入つてばかりゐるにや及ばないと思ふね」

これは書生に向つてのみ云つたのではなくつて、吉田自身の心に元氣をつけるために云つたのだつた。遠慮なんぞしないでドシ〳〵借金を申込んでやれ、斷はられゝばそれまでだと、心の中で力んでゐた。

書生は苦笑してゐたが、主人に呼立てられたので其處を離れた。吉田も座敷へ入つて行儀よく座つて主人を待受けてゐた。待つてゐる間がまた長かつたので、知らず〳〵膝を崩して、やけに團扇を使つてゐたが、すると、主人は洋服を着けて出勤の身仕度をして入つて來た。

「暫く來なかつたね。どうしたのかと思つてゐた」と、健かな肉體を持つてゐる人らしい快活な力の籠つた口調で云つた。

「少し計劃してゐることもあるのですが、身體がまだ充分に回復しませんから、夏中保養して秋口になつてから着手しようと思つてゐます」

吉田は當てのないことを誠しやかに云つて、自己辯護をした。そして、肝心の用事を遠廻しに云ひか

けたが、尤もらしい理由を考へて置かなかつたゝめに、頻りにどぎまぎして何時までも要領を得なかつた。

主人は金口の西洋煙草を吸ひながら微笑してゐたが、「君は會ふたんびにふは／＼して來るよ。矢張定職がないからいけないんだね。僕の云ふ通りにして給料は廉くつても毎日出勤することにするさ。暑くても寒くても汗を掻いて一心に働いてゐれば、却つて身體は丈夫になるよ」と云つて金鎖を手繰つて時計を見た。「その中晩に來たまへ。一緒に飯でも食べて緩くり話をしよう」と、呆氣なく座を立つた。

吉田は慌てゝ玄關まで隨いて出たが、主人が俥で家を出るまで、ついに用事をはつきり言出せないで、只ぼんやりして見送つてゐた。そして、主人の姿が見えなくなると、主人の冷淡と自分の腑甲斐なさとが胸を衝いて、興奮した色が顏にも現はれた。

「まあ遊んで入らつしやいな」と、書生がお愛相を云ふと、

「いや、今日は直ぐに歸らう」と、吉田は玄關を下りかけたが、燃えつきさうな戸外を見ると、其處へ踏出すのに怖氣づいた。で、知らず／＼後戻りして書生部屋へ入つた。羽織と袴とを掻投り棄てゝ、柱に凭れて兩足を投出した。

「馬鹿にしてゐらあ」稍々寛いでから我れとわが心に向つて憤つたが、自分の腑甲斐ないことよりも、此處の主人の思ひやりのない冷淡が恨めしくなつた。曖昧ながらお察しのつくやうに此方では云つてゐたのに、素知らぬ顏してゐたのが腹立たしかつた。

「若い時分おれの親爺の世話になつて東京へ出て來られたのではないか」と、松山がまだ貧乏だつた頃

から羽振りのよくなつた今までの徑路を辿つて、出世するにつれて、會ふたびに自分に對する態度がます〳〵高慢ちきで冷淡になり出したことを思ひ詰めた。

二三年前會社の歸りに、吉田など二三人が松山に連れられて萬安へ夕飯を食べに行つた時、松山は醉拂つた揚句に、皆んなの前で盛んに自慢話をしたのだつたが、その折、

「田舍の者は全で禮儀を知らない。吉田君のお父さんも息子を東京へ寄越しときながら、僕に向つて時候見舞も寄越さなければ、宜く賴むといふ依賴狀一本呉れたことがない。郡長さんにでもなつてると一ぱし豪いつもりでゐるのだらうが、郡長の月給くらゐ僕達の俥代にも當りやしない」と云つて笑つた。

吉田は俯首いて默つてゐたが、「今に見て居れ」と腹の中では無闇に反抗してゐたのだつた。萬安のその折の光景も、ふいと今吉田の頭に電光の如く燦めいた。さういふ松山の人となりを知つてゐながら、手賴りにしてのこ〳〵暑さを冒してやつて來たことゝ思ふと無念だつた。

「これで思ひ知れ。二度とこんな所へ無心を云ひに來るな」と、吉田は記憶に深く刻むやうにと、自分の頰ぺたを邪慳にひねつた。

そこへ、書生は碎いた氷を丼へ入れて持つて來た。

「これや有難い」吉田は顏を和らげて、小い破片を口に含み、大なのを手巾に包んで頭にのつけて、「次手に砂糖を奢らうぢやないか。遠慮しないでどつさり取つて來たまへ」と云つたが、書生は「えゝ」と生返事したばかりで座を動かないで、頻りに氷をしやぶり出した。家の中はひつそりしてゐて、鐵格子の外には日がじり〳〵照付けてゐた。

「堀口君は隨分長くゐるんだし、信用もされてるのだから、大將の懷加減もよく分つてるだらうね。見掛けほど旨く行つてるのか知らん。石油の株などこの頃は餘程下つたらしいが、大將は一時隨分持つてゐたのだがね」

「そんなことは私には些とも分りませんよ。」

「樣子で自然に分りさうなものだが。しかし君は超然主義だから無理もないさ。君がゐればこそ妻君も安心して避暑なぞに出て行けるんだよ。だからもつと優待されてい丶譯だが、小使錢もあまり呉れないのだらう。」

吉田は口をもぐ／＼させながら、頻りに相手の長い間の玄關番生活に同情したり、前にゐた古賀といふ書生の不仕末を話したりした。やがて、無作法にも兩肌を脱いで、肋骨の浮いた生白い胸を現はして、をり／＼重苦しい息を吐いた。堀口も肱枕で寢そべつて、言葉少なに相槌を打つてゐたが、態度も言語も次第に存在になつた。

吉田は机の上の獨逸語の書物などを手に取つて珍しさうに見た。一字も讀めないのみか、孑孑の行列のやうな字面は魔法の書物のやうに思はれた。

「君はこんなのが讀めるのかい。僕は暫く英書も讀んだことがないから、外國語は殆んど忘れちやつたよ。役に立たない、早晩忘れつちまう語學なんぞに頭を使ふのは愚劣だよ。君も語學の勉強なんぞ止して、今の中うんと面白いことをして遊びたまへな。僕の所へ時々やつて來ればもつと愉快なことを教へて上げるのだが……」

「しかし、何に頭を使ふのも同じことさ。遊ぶためにだつて頭を働かさにやならないからね」

「さう云へばさうさ。生きてゐる間は何をしても頭の休まる暇はないよ」吉田は名言を耳にしたやうに感動して、「かうしてゐたつて僕は何か知らん考へてるからね。一日でも時計の針が止つたやうに頭の中の運轉が休んでればいゝと思ふよ。此處にじつとしてゐても、机が見えるし本箱が見えるし帽子が見えるし、君の顔も見えれば聲も聞えて、そんな者が皆んな今僕の頭を刺激して根を疲らせてるんだね。」

「ぢや目を瞑つて耳を塞いでゐたらいゝでせう。」

「いくら目を瞑つてゐたつて、人間には記憶といふものがあるからいけない。尚更いろんな事が頭の中に湧出して來らあね。死んでしまうか健忘症患者になるかしなければ、白痴でも狂人でも心の休まる折はないんだね」

「しかし、いゝ景色や旨い物の味を時々思出すのは惡かないな」

堀口はふと食慾の興奮を覺えて、餅菓子か何かを賭けて、久振りに圍碁を一番願はうかと言出して碁盤を取りに行きかけたが、吉田は手を振り首を振つた。

「僕はさう呑氣に構へちやゐられないよ。正午までには家へ歸る筈になつてるんだ」と云つて、肌を入れて羽織をも手繰り寄せたが、容易に座は立たなかつた。今度こそと當てにしてゐた金策が外れたと云つて、のこ〳〵手ぶらで歸るのは女房に對して面羞かつた。それんばかりの金と廣言した手前もあるのに女房に貰つた小使錢を減らしたゞけで家の閾を跨ぐのは氣が退けた。

「君、妻君は伊香保の何處にゐるんだい」

堀口の話によつても、妻君が自分の事を多少念頭に置いてゐるらしかつたので、吉田はそれを力にする氣になつた。

「K――といふ宿屋ですよ。今朝僕にも繪葉書が來ましたよ」

堀口はこう云つて、机のあたりを捜して、子供の署名のしてある繪葉書を吉田に渡した。溪流に沿うた茶店が寫されてゐる。綠葉が軒先に迫つて、白い瀧は涼しさうだ。

「僕もこんな所で一夏送つて見たいね。旅費があれば今直ぐにでも出掛けるよ。僕は避暑といふものは一度もしたことがない。金の取れてゐた時には些とも暇がなかつたし、暇のある時には金がないしさ」

吉田は如何にも悄氣た聲を出した。

「伊香保までの旅費くらゐ幾干でもないぢやありませんか。」と、堀口はさも憐れんでゐるやうに相手を見て、「貴下は駄目だね。今日は何の用事で大將に會つたのです？」

「何の用事と別段極つたことはない」

吉田は極りの惡い思ひをして言濁さうとしたが、堀口は斟酌しなかつた。

「貴下は人がよ過ぎるね。云ひたいことをはつきり言出さないで口籠つてゐるから、傍で聞いてゐても歯痒くなりますよ。其處へ行くと雜誌記者なんて旨いものだ。大將を煽てゝ十圓ばかり寄附させやがつた。」

「ぢや君は僕の話を立聞きしてゐたのか」

「立聞はしないけれど、大抵は分つてゐますよ。」

「聞かれたつて構はないが、君達は僕の眞意を解してゐないんだ。……見てゐたまへ、今に此處の大將にでも僕の本領を認めさせて見せるから」

「貴下などまだ貧乏の經驗がないから體裁を繕ろつてゐて駄目だ。貴下の境遇から云へば金は其處等に轉がつてるのに攫まうとしないんだもの。僕が貴下だつたら金に不自由しないで好きなことがやれますぜ」

「冷かしちやいかんよ」

「冷かしやしません。眞劍にさう思つてゐますよ。……第一貴下がこの家へ轉げ込んで來りや大將だつて追出しはすまいし、私などのやうに玄關番扱ひすりやしない。それは無論上等の策ぢやないが、貴下は大將の名を利用して何でも出來るぢやありませんか。」

「しかし、僕は此方の手先になつて驅けずり廻るのは厭だからね。」

「なに。此處の夫婦は貴下を身内同樣に思つてるんだから、貴下のする事は何事でも大目に見ますよ。貴下の方で妙に他人行儀にしてるからいけないんだ」

「そりやさうかも知れん」吉田は頻りに首肯いて、「僕の親爺は松山さんの恩人だからね。僕も無斷で今のやうな家庭を持つたり、我儘で社を止めたりしたから、つい大將を煙たく思ふやうになつたのだ。しかし、今の生活狀態は遠からず一變するつもりだ」

「貴下が何かおやりになれば僕も仲間に入れて頂きたいものですね」

そこへ電話が鳴つたので、堀口は急いで聞きに云つたが、「吉川さん。お家からです」と、やがて大き

な聲で知らせた。

吉田は棍棒で打たれたやうに感じた。「君代りに聞いて呉れたまへ」と賴んで、柱に凭れたまゝ動かなかつたが、女房の聲が耳許に響いてゐるやうな氣がした。

「道寄りしないで早く歸つて下さいつて」と云ひながら、堀口は元の座へ戻つて來て、「此方にゐらつしやるんなら安心だと云つてゐましたよ」

「……僕は此處にゐたつて些とも安心なことはない」

吉田は生欠伸をした。頭を壓付ける思ひを紛らすために書生部屋を出て、客間や應接室をうろ〳〵して、椅子に身を投掛けたり、黑檀の机の前に座つたりしてゐたが、目に映る重な家財調度のたぐひがそれ〳〵に價ぶみされ出した。其處等の容物の中には金貨や銀貨がうぢや〳〵してゐさうに思はれた。

彼れは緣側へ出て隙間から主人の居間を凝視した。眞紅な蚊帳の釣手が微風にゆられてゐる。床の間に變な動物の置物があるばかりで、部屋の中は些とも裝飾されてゐないし、新聞やら帳簿やらが亂雜に取散らかされて暑苦しさうだつたが、吉田の目はそれ等のものに向つて異樣に光つた。皮文庫の中には紙幣の束や株劵や小切手が滿ちてゐさうな氣がした。

彼れはふと左右を見廻したが、あたりに人影はなかつた。堀口が小聲で詩吟か何かやつてゐるのが幽かに聞えた。臺所の方では洗ひ物の音がしてゐた。

鍵も刄物も入らない、自分が足を進めて手を伸しさへすれば、さながら寶の山へ入つてゐるやうで、差迫つて入用な金くらゐ、雜作なく攫めさうに思ひながら、彼れは應接室の方へ後戻りして、再び椅子

に身を投げ掛けた。

先日から心を苦しめ通して、今日も暑い思ひ厭な思ひをして此處まで來たのだから、その報酬としても、多少の金なり品物なり持つて行つたつて構はない譯だ。……おれが持つて行つたことが分つたつて、松山の奴おれを警察へ突出す氣遣ひはありはしない。……堀口が貴下は金が左右に轉がつてゐるのに攫んで行かないから駄目だなんて云つてゐたが、本當にさうだ。……

吉田は何時も言負かされてゐる女房の前に札束を叩きつける快さを想像した。が、それよりも懷中にしこたま金を捻込んで、今度こそあんな女を打やらかしといて、今直ぐに停車場へ驅けつけて、涼しさうな土地を所定めずのらくら遊び廻るのが面白さうに思はれ出した。しみ〲溫泉遊びなどしたことがないが、空氣の濁つた東京で齷齪してゐないで、今見た繪葉書にあるやうな所へ出掛けて、湯に漬つて寢そべつて山でも眺めてゐたなら、こんな頭にでもいくらか力がついて來るかも知れないのに……

靑田の風は汽車の中へ流れ込む。二等室は空いてゐるので、手足を伸して苦勞なしに身體が遠くへ運んで行かれる。山は次第に近くなつて冷つこい風が顏に觸れ出す。淵の水は眞蒼に澄んで、岩に堰かれた溪流は白い沫を飛ばしてゐる。……彼れの茫漠たる旅先の想像は、やがて、一度同僚と紅葉見物に行つたことのある鹽原の實景に移つた。

草鞋穿きで福渡戸の宿を出て、鹽の湯を奧へ入つて行つた。洪水に荒された後の谷川に、案內者が假橋を懸けなどした。恐ろしくて案內者に脊負はれて渡つた。雷霆霹靂とか云つた雌瀑雄瀑の前の巨きな巖の上で、辨當を開けた。あの時は寒かつた。……庭師の話にはこの瀑ほど瀑の規則にかなつたのは尠

いと云ふことだつた。

疲勞と寒氣とで紅葉の美も瀑の美も些とも有難く思はれなかつたが、今あの雄大な瀑布の前に立つてゐたらい丶氣持がするに違ひない。素裸であの奇態な瀑の水に打たれたらどんなだらう?。……吉田は目を見開いて生温かい風に頰を火照らしながら、暫く溪流や瀑の水に心を浸してゐた。

次の室の時計の音が靜かな家の中へ響き渡つた。吉田は指を折つてその數を數へたが、音が止むと驚いて立上つて、書生部屋へ行つて、脫棄て丶あつた袴を穿いて羽織を着た。

「もうお歸りですか」辭書を手にして獨逸語の研究をしてゐた堀口は、振向いて笑ひを含んで、「直ぐにお家へ歸るんですか」

「さあ……」吉田は火の中へ飛込むやうな氣で外へ出たが、書生部屋の格子先へ後戾りして、「また電話が掛つて來たら、僕は此處の大將と何處かへ行つたと返事をしといて吳れたまへ」と言置いた。

(二)

訪ねやうと思ふ友人は出勤してゐるか避暑に行つてゐるかして、自分の家でのらくらしてゐさうな者はなかつた、で、吉田は恐ろしい炎天を避けて氣儘に手足を伸すためには、自分の家へ歸つて行く外に仕方がなかつた。左右の新しい二階家に挾まれた見窄らしい平家の屋根は晴天つゞきの埃に汚れて、ペン〱草もひよろ〱と生へてゐた。

障子も襖も取拂つてあるので、狹い家の中は外から一目で見透された。女房は肌を脫いで肩に手拭を

當て、洗濯物を繕つてゐた。吉田は附元氣で手荒く格子戸を開けて入つて、吃驚したやうに振向いた女房の顏はよくは見ないで、「今日も無駄骨を折つた。松山の奴高慢ちきなことを云ふから、喧嘩をして歸つて來たよ。貸してやらうたつてあんな奴から借りてやらないつもりだ」と、自棄らしい口を利いた。そして、袴も着物も搔投ぐり棄てゝ、水道の水を頭からざあ〳〵打掛けて、其處中を水だらけにした。

「貴方はどうかしてるよ」呆氣に取られて夫の樣子を見てゐた女房はやがてさう云つて、洗濯物は押退けて、夫の羽織や衣服を引寄せて衣紋竿へ掛けながら袂を索つて、蟇口を取出した。蟇口の中には出掛けに入れてやつた小錢が少し殘つてゐるばかりだつた。

「貴方は今朝何と云つてゐたか覺えてゐて」と目顏を嶮しくして嘲けるやうな口調で云つた。

「あれは忘れた」吉田は猿股一つになつて、胡座を搔いて、長煙管の先で煙草の箱を引寄せて、旨くもないのに二三服吸つてゐた。無駄な奔走のために、腹は減るし喉は乾くしてゐたが、此方からは何も言出さなかつた。こんな時には、女房の奴わざと飯を遲らせたり、鹽辛くお菜を拵へたりするのが例になつてゐるのだと思ひながら爭ふ氣はなかつた。でも、女房の動いてゐる方へ絶えず目を注いでゐたが、女房は暫くむつゝりして、袴を疊んで押入へ仕舞つてから、竈の下を焚付けた。でぶ〳〵肥つた淺黑い肌を喰出させて、髮の垂れかゝつた額には汗を流して、手製の火吹竹で火を吹いた。見てゐても身體が焦げつきさうに暑苦しかつた。あんな檢束のない樣をして煮焚きなんかしてゐる下女見たいな女が自分の女房であると思ふのが不思議だつたが、自分のために毎日衣服や食物の世話をして呉れてゐる女があると思ふのも不思議だつた。

「あの女毎日何をしてゐるんだらう?。腹の底ではおれを信用してゐるのか知らん。おれの方では何時でも此處を飛出してやらうと思つてゐるのに氣がつかないのだらう」

竈の火が勢ひよく燃出すと、女房は爼を出して茄子の蔕を取つて汁の實に切出した。先日庖丁で傷けた左の中指は紅い布片で縛られてゐる。肩だけ蔽ふた濕手拭の下に脊の灸の跟がよく目立つた。赫とした眞晝の光は襟元の濃い生毛や毛穴をもよく見せた。

吉田は相手の肌を見てゐる間に、自分が裸體でゐるのが厭になつたので、衣紋竿からまだ汗の乾き切らない衣服を取つて、きちんと身體に着けて、次の室へ入つた。其處の壁際に押付けてある机の上には、今朝松山に宛てゝ書きかけた手紙がそのまゝに置かれてあつた。

敬意を表して筆を愼んで書いてゐる自分の手紙を讀返しながら、吉田はこんな文句が相手の心をどう感動さすだらうかと怪訝に思つてゐた。手紙をやつて返事の來るのを待つてゐる間の氣苦勞を恐れて、直かに出掛けて行つたのだつたが、自分はこれほど貧乏してゐながら、僅かな借金すら巧みに爲終せる術を知らないのかと忌々しくなつた。そして體裁も屈辱も構はないから松山に宛てゝ本音を吹いてやれ。面と向ふと口は吃るし、顏色は變るし、思ふことの十分の一も云へないが、文字なら十二分に云つて見せると力んで、筆を執つて新たに手紙を書出した。

「只今は失禮いたしました。御出勤間際であつたので、落付いたお話も出來かね、小生參上の趣意を一言も申述べる機會もなく殘念に思つて居ります。實のところ私はお金を拜借したいために罷り出たのであります。親類中で貸して吳れさうな所へは漏れなく無心をやつて借りられる限りは借りてゐるので、

最早貴兄の外へは申出る所がないのです。故鄕の親爺の方は御承知の如くこれまで隨分荒してゐるため、てんで問題になりません。兄が女房を貰つて子供も出來かゝつてゐるさうですから尙更事が六ヶ敷なりました」

彼れはこれだけ書くと筆を擱つたまゝ、兄の聲を思出した。二人で父の死後の相談をしたことが思出された。「おれの頭の中には厭な記憶が詰込まれてゐる」……昔の小說に不孝者が死一倍の金を借りて遊んだといふ話があつたのを讀んで、兄に話すと、兄はそれを痛快がつて、おれもさういふ金を借りて一商賣して見たいなんて云つてゐたつけ。

「差迫つて私に必要な金高は極めて僅かなのです。二十圓だと結構ですが、あるひは十圓でも間に合はぬことはないのです」と、吉田は更に書續けながら、自分が今不用意に書いた二十圓といふ文字、十圓といふ文字に疑ひを挿んだ。これつかばかりで何ほどの役に立たうぞ。屈辱を忍ぶくらゐなら、百圓千圓と纒つた札束がおれの懷に落ちて來なければ駄目だが……と暫く字面を眺めてから、

「私はその金があつたら、今の家を片付けて、妻の故鄕へ行つて其處で當分休養してから、私一人で上京して新規蒔直しに仕事を始めることに妻と打合せをしてゐますが——先つき貴兄にも一寸ほのめかしたやうにも思ひますが——しかし、眞の私の考へを申上げると、その金を持つて私一人行衞を晦ますことにしやうと思つてゐたのです。そして、善であれ惡であれ、數年の後貴兄等を驚かすことを仕遂げやうと企んでゐたのです。先日兄の手紙に、鄕里の地味が梨に適してゐるから、お前が歸つて來れば、裏山へ梨の苗を植ゑてやらう。梨には番人が入るから、お前が番人がてら山の裾に小さい家を建てゝ住ま

つたらい〻だらうと書いてありましたが、私を馬鹿にしてゐるではありませんか。私はまだ山番をして朽ち果てるほどの無能な人間になつてゐるとは思ひませんですが。私の頭はもつと働けさうです。僅か半歳か一年足らず無職で遊んでゐたからつて、長い將來を見くびつて貰ひますまい。貴兄などの御周旋を煩はさないで、今度は私一箇の力でやつて見せます。」

書いて居る間に興奮して、いろ〳〵な計劃が自分の取るに任かされてゐるやうに目の前にちらついたが、どれを撰んで書き立て〻相手を驚かしてやらうかと迷つた。南洋とか亞弗利加とかへ遠征しやうか。Kのやうに支那で賣藥の行商でもやるか。それとも賭博打見たいな者に成下つて見やうか。‥‥

「何をしてゐるんです？。早く御飯を食べて下さいつたら」

茶の間の物音を夢のやうに聞いてゐた吉田は、女房の出抜けの言葉に驚かされて我れに返つて、筆を擱いて茶の間へ入つた。俄に激しい饑ゑが感ぜられた。無言で飯を搔込んでから、

「家の拂ひや旅費はちやんと計算しといて呉れよ。極つたら直ぐにその日にでも立てるやうに」と、生眞面目に云ふと、女房は怪みながら冷笑して、

「計算も何もあつたものぢやない。あなたはお金さへ出したら、懷手で直ぐに出立出來るやうにして上げますよ」

「何だい、二口目にはお金〳〵つて、金がなきや夜逃げでもすりやいゝぢやないか。家の物を叩賣つたつて汽車賃ぐらゐ出來らあ」

「まあ厭だ。私いくら零落れても、夜逃げなんぞしやうとは思はないよ。家の物を賣ると云つて、どん

な金目の物が家にあると、あなたは思つてゐるの」

「夜逃げに驚くやうな意氣地のないことで、思切つた大事業が出來るかい。松山のやうな運のいゝ男でも、昔は依托金を使つて牢に入りかけたこともあるし、日清戰爭から三四年後の不景氣の時分にや、ひどい夜逃げをやつたのだぜ」

吉田はその頃まだ學校にゐたので、夏季休暇の歸省間際に、暇乞ひがてら松山の引越先を訪ねて行くと、田端の裏長屋のじめ〱した家で甥に當る若い男と湯豆腐で晩餐を食べてゐた。行李と支那鞄とが傍に投出されてあつた。野紙の中へ几帳面に字を書いて行くやうぢや圖拔けた人間にやなれないと空氣焔を吐いてゐた。あれから高崎へ行つて住所を晦ましてゐたのだから、田端では夜逃げの準備をしたのに違ひない。梅雨時分なのに足駄さへ持つてゐなかつたと、吉田は松山の甥が彼れの足駄を借りて電報を打ちに行つたことを思出した。甥の出て行つた後で、松山は以前豪奢な遊びをしたらしい口吻で何だか喋舌つてゐたが、「僕にも女房があれば、こんな時に身賣りをさすんだがね」と、その時戲談を云つた。

吉田は漬物を嚙りながら、口先で半ば無意識に女房と言爭ひつゝ、頭の中では松山の零落時代を思出してゐたが、やがて、ふと、

「お前も亭主のために身を賣る氣になつちやどうだい」と口を辷らせた。

「いゝ考へだわね」と、女房は噴出した。「こんなに肥つてゐれば切賣りにしても餘程の價になるでせう」

「女は便利だ。今に今自分の身體が金になるんだから。その點では男の方が融通が利かないね。」

吉田も笑つて、互ひに戯談を云ひ〳〵食事を終つたが、本當に女房が賣れるものなら賣飛ばしたいやうな氣がした。男の方に女の心を自在に動かす腕がありさへすれば、女郎にでも酌婦にでも賣つて、自分は懐ろ手してのらくら暮して行けるのだがと、自分の知人のある者や芝居の色男を連想したが、さういふ方面でも自分の頭には些とも智慧がなかつた。

「戯談どころぢやない。故郷へ行くには安物でも反物の二反や三反は土産に買つて行かなきなりやませんよ。家は兎に角親類へは何か持つてかなきや義理が惡いわ。何時も貰つてばかりゐるんだから」

「さうだな」

「欠伸なんかしないで、しやんとおしなさいよ。今度の話はあなたが自分で言出したのぢやないの。故郷ぢやその手筈をして今日か明日かと待つてゐるのに、あなたのやうに浮かり茫然してゐちや、私返事の出しやうもありやしない」

「些とも浮かり茫然してゐやしない。おれは朝から晩まで考へてるよ。夜でも目が醒めると一心に考へてらあ」

「ぢや、早くどうかしたらいゝぢやないの。今度は確かりした目的のためのお金だから、雜作なしに工面が出來ると云つてゐた癖に」

「おれは今もさう思つてゐる」

「思つてゐるだけぢや何にもならないわ」

「だからおれは今手紙を書いてるよ」

「手紙ぢやまどろこしくつて駄目だつて、今朝は慌てゝ出て行つたのに。可笑な人‥‥。今度はその手紙を何處へ出すの？」

「何處だつていゝぢやないか。お前の構つたことぢやない」

吉田は女房の言葉を聞いてゐると焦々して溜らなくなつたので、次の室へ逃げた。書きかけの手紙は疊んで引出へ入れて、硯箱には蓋をした。

眞晝の日はます〳〵照耀いて、隣の屋根から流れて來る風には熱氣を含んでゐる。小さい雀は暑さにもめげずに軒先で囀つてゐる。吉田はまた手拭で肩を蔽うて洗濯物の繕ひに取掛つてゐる女房に脊を向けて、差迫つた問題を考へてゐたが、知らず〳〵心は涼い土地の思出に外れて行つた。頭を休めるために枕を出さうとして、押入を開けると、其處は奇麗に片付けられて、行李には繩が掛けてあつた。留守の間に女房が屑屋へでも賣つたのか、今朝まであつた襤褸や壞れた箱や不用な家具は見當らなかつた。

「まだおれを信用して、何處かで金を拵へて來るから直ぐに立てると思つてるんだな」吉田は女房の方を竊見しながら、「おれの心持がどう變つてどんなことをし出すか分りもしないのに。‥‥馬鹿だなあ」と、女の淺墓さを感じて、一寸得意になつた。同居してから一年も經つ間に、この女に自分の心が纏はりついてゐたことは滅多にありやしないのに、先方では一圖におれに獅嚙みついてゐるのだなと、煩はしさと誇りを覺えた。

「苦しい〳〵つて、あなたは一人で苦しがつてゐるけれど、子供があるぢやなし、重い負擔なんか些ともないぢやないの。二十圓でゞも三十圓でゞも私は結構暮して行つて見せますよ」と、女房はよく云ひ

〳〵してゐたが、……

おれには世間の十人並の負擔がないのか知らん。外の人々は何事でも無雜作に輕く運んでゐるやうに見えるが、その實重い負擔に惱んでゐるのだらうか。

女房の奴、二十圓や三十圓ばかりの金は、おれが欠伸の二三度もやつたら取れるだらうくらゐに譯もないことゝ思つて呑氣に構へてゐる。堀口の奴はあなたの左右には金錢も幸福も轉つてゐるやうなことを云つてゐた。

吉田は仰向けに寢ころんで、こんな事を思ひながら記憶の隅から隅までほじくつて、自分の財源を求めてゐる間に、深い睡りが彼れを襲つた。

無樣に寢てゐる彼れの五體には汗が滲み出て、蠅はをり〳〵額や手首に留つて汗を舐めてゐた。が夢の中では彼れも小判の光の中に身を埋めることが出來た。心を苦めずに易々と高いところからも飛下りられた。

(三)

庭で行水を使つて夕餐を食べると、吉田は蚊の群つてゐる蒸暑い自分の家を飛出した。女房が食後に戸板の蔭で行水してゐる間に、「一寸其處まで」と一言聲を掛けて、何か云はれぬ先に飛出した。

停留所の方へ歩きかけたが、ふと自働電話の方へ後戻りして、松山の家の書生を呼出した。

「大將は歸つて來てるかい」

「まだ歸りませんよ。今夜は餘程遲くなるらしいです」

「妻君がゐないから何處かへ遊びに行つたのだね」

「大將に何か用事があるんですか」電話の聲は幽かに笑つてゐたが、「お暇なら遊びに入つしやいな。此方は非常に涼しいですよ」

「さうだらうね……」

「僕は今打水をして岐阜提灯を點けて、緣側へソフアを持出して寢ころんでたのです。あなたが入つしやればソフアを讓りますよ」

「ぢや直ぐに行くよ。」

主人がゐなければ歸るまで待つてゐればいゝと思つて、吉田は電車に乘つた。電車は一日の勤めを終つて家路へ急いでゐるやうな人々で雜沓してゐた。されゞに耳に入る左右の言語は彼れの耳を刺激して、その人達の職業や一日の動作を連想させた。白銅や銀貨や銅貨や、それゞに錢を出して切符を買つてゐるのが、今日は殊に吉田の目を惹いた。皆んなが分に應じて、衣服の中に金錢を潛ませてゐる。……垢や汗に汚れ勞働に疲れた顏してゐる車掌が、混雜の間に客の顏を忘れず正確に釣錢を渡したり乘換切符を渡したりしてゐるのを見ると、人間の記憶力の强さに彼れは驚いた。……汗臭い混雜した車内の光景も、用もないのに彼自身の記憶に一々刻まれて、大切な頭を惑亂させて無用な負擔を加へた。……一日の勤めに疲れてゐるのだらうに、目を瞑つて頭を休めやうとはしないで、慌だしく電車の窓から夕刊の新聞を買つて讀んだりして、强いて頭の負擔を重くしやうとしてゐる人の、この頃多くなつた

のが不思議だ。

「だけど、あの夕刊に自分達に幸福を齎らすやうなどんな記事が出てゐないとも限らない」といふやうな氣がしたので、吉田は隣の人に傚つて、號外付一錢の新聞を買つた。それには大きな活字で標題をつけた殺人記事が出てゐた。……本所のある藥種屋の家族が夫婦に子供二人の四人とも、昨夜刄物で慘らしく殺害されたといふ記事で、犯人は誰れだかまだ見當がつかず、意趣返しか物取りか犯罪の動機さへまだ確定してゐなかつたが、さま〲の假說や一二の嫌疑者の名前は記されてゐた。

ごた〲した被害者の素性書など、細かに注意して讀まうとはせず、吉田はざつと目を通したゞけだつた。この廣い都會では殺人事件はさして珍しくはないし、無論自分とは無關係の事なのだから、今見てゐる車掌の記憶力や、向側に腰掛けてゐる老婦人の獨り笑ひの動機ほどに、吉田の頭に生々した刺激を與へなかつた。

歐洲戰爭の電報から相場表まで大略讀み終つた時分、電車は本郷へ來たので、彼れは新聞を疊んで懷に入れて、再び熱氣のまだ冷めないアスファルトの上に下りて、臺町の方へ道の角を曲つた。角に藥種屋があるのを今初めて知つたやうに氣が付いた。今朝入つた氷屋には見覺えのある脊の低いよく肥つた若い女が裾を端折つて水を撒いてゐる。急しさうに氷水を飮んでゐた男はコップを置くや否や、銅貨を拋出して、窪んだ目を光らせて、あたふたと出て行つた。重さうな風呂敷包を小脇に抱いてゐた。

吉田は何故だか本所の殺人記事をふと念頭に浮べた。……刑事の周密な現場の視察によつても證據物件は見つからず、まだ犯人搜索の手蔓がない、凡て迷路に入つてゐると新聞に書いてあつたがと、懷か

ら新聞を取出して歩きながらその記事を見ると、殺された女は色の白い脊の低いよく肥つたお世辭のいい女だつた。

鬼刑事だとか、探偵術に辣腕を有つてゐる某だとか、よく新聞に書かれてあるが、彼等の頭はどれほどの働きをするのだらう?。……面倒な秘密な絲がどんな風にして手繰り寄せられるのだらう?。

吉田は松山の家の門を入るまで、新聞を讀み〳〵、自分がこんな犯人であつたらと自分をその境遇に置いて考へた。犯罪行爲を晦ます智慧とほじくる智慧の爭ひを想像したりした。

書生部屋を覗いたが堀口は其處にゐなかつた。家の中は寂としてゐる。玄關脇の呼鈴を押さうとしたが、下女など他の者が出て來るのを憚つて、出した手を引込めて、吉田は湯殿の側から庭の方へ廻つた植込みの蔭から見ると、豫想通り岐阜提灯が釣されて、ソファも持出されてあつたが、堀口の姿は其處にも見えなかつた。

電話であんなに云つてゐた後だから家にゐるには違ひないと思つて、彼れは緣側へ上つて、ソファに身を横へて待つてゐようとした。庭の木の葉は微かに動いてゐたが、さして涼しい風は顔のほとりへ吹いて來ないので、彼れは座敷の棚の上の團扇を取りに行つた。そして、足を留めて暫く周圍の物を凝視してゐたが、革文庫や袋戸棚の中が氣になつて仕方がなかつた。「お前の側には金が轉がつてゐるといふ辻占のあつたのは、此處の事を指したのぢやないか知らん」「入用の金子若干借用と證文を置いて、無斷で札束を攫んで行つても、おれと松山との關係では大した惡事ぢやない。世の中で大きな事業を爲出かすほどの度胸の据つた男はそのくらゐは平氣でやつてゐるではないか。確か今生きてゐる大人物は若い時

分にそんなことをやつたと、何かに書いてあつた」……頭の中のごちや〳〵した思ひはあの文庫の中の物を攫んで行きさへすれば、直ぐに奇麗に拭はれさうに吉田は思つてゐた。

すると、出抜けに後で堀口の聲がした。吉田は秘密の惡事を見つけられたかのやうにどぎまぎして縁側へ出て、「僕は今來たところだよ。君は何處へ行つてゐた？」と、團扇をはた〳〵と使つた。

「一寸郵便局へ行つてゐたのです、伊香保へ小包を出しに」堀口は何氣なく云つて、袂から今買つて來た金口付の煙草を出して、火を點けて相手にも勸めて、「あれからお家へ歸つてゐたのですか」

「あゝ、一寸歸るには歸つたが」と、吉田は自分の家の事を思起されるやうな問ひを厭うて曖昧に答へて、「君も煙草を吸ひ出したのかい。この煙草は馬鹿に香ひがいゝぢやないか。こんな贅澤なものを何時も吸つてるのかい」と話を外らした。

「煙草なんぞ吸はなきや吸はなくても濟むが、吸ふ以上は多少いゝのを吸はなきや詰まりませんよ。僕は何事についてもさう云ふ主義を持つてゐますよ。」堀口はさう云つて、煙草の灰を叩落したが、その指先の樣子が主人の癖によく似てゐた。

「何事についてもと云つて、君はさういふ主義を實行してはゐないぢやないか」

「實行の時節がまだ來ないからさ。女遊びをするにしてもやるほどなら思ひ切つたことをやらなければ駄目ですよ。吝つたれた遊なんぞ初めからやらん方がいゝね。此處の大將にもその點ではあまり感心しませんね」

「大將もちよい〳〵遊んでるんだらうな。今日はそれで歸りが遲くなるんだらう」

吉田は一本の煙草を吸盡すと、ソファに横はつて、次第に薄暗くなる庭の木蔭や、岐阜提灯の鵜飼ひの模様などを繪のやうに眺めながら、堀口の氣焰を夢のやうに聞いてゐた。

「あなたは今のやうな生活で滿足してゐるんですか。川北さんなんかこの頃隨分贅澤な眞似をしてゐますよ。才のありさうな人ぢやなかつたのに、どうしたのか旨く此處の主人に取入つたと見えて馬鹿に信用されてゐますよ。盆の賞與も餘程貰つたと見えて、毎日飮んで廻つてるらしい。吉田はどうしてるなんて此間私に訊いてゐましたつけ」

「川北は諂諛が旨いから……」

「諂諛でも何でも贅澤が出來るやうになつたのはえらいぢやありませんか。あの人が初めて紹介狀を持つて大將に會ひに來た時には鹽たれた袴に羊羹色の羽織を着とつたが、どうしてこの頃は、りうとした服裝をして、葉卷なんか喰へてる。この盆には特別の賞與があつて、少くも二百ぐらゐの金は持つてるらしいです」

「そんなに貰つたのかい。誰だらう」

吉田はふと團扇を手から辷らせて堀口を見上げたが、柱に凭れて煙草を啣へてゐる堀口の顏は、いやに高慢ちきに見えた。

「あの會社で二百や三百の金が何です。此間僕は大將の使ひで百圓束を十束持つてある人の所へ届けましたよ。手形や小切手よりや本物を握んでゐると、人の物でも惡い氣持はしないね。威張つて歩きたくなるから不思議だ」

「ぢやそれを持逃げすればよかつたのに」

「それんばかりの物を持逃げするほどなら、今日までかうしちやゐないさ。まだ五百や千の札束にや目は晦みませんよ」

「君は堅實な人間だよ」吉田は相手の高慢ちきな口調に反感を抱きながらも、侮りがたい氣がし出した。愚圖の甲斐性なしと思つてゐた今までと違つて、自分を威壓するやうな態度を顏に現してゐるのが不思議であつた。「川北や君は矢張僕よりやゑらいのかも知れないね。此處の主人に信用されてゐるだけでも何處かゑらいところがあるんだね。僕なぞは量見がぐら〳〵してるから何にも出來やしない。」と、情なさゝうに云つた。

「そんなことはありませんよ」堀口は極りの惡さうな顏付をした。

「しかし、君などから見りや、僕は馬鹿に見えるだらう。此處の主人だつて僕を下らない人間と思つてるんだらうね」

「そんなことはないぢやありませんか」

「隱さないではつきり云つて呉れたまへ。松山さんに心からさう思はれてゐるのなら、僕は二度とこの家の閾は跨がないよ。君の目にはどんな風に見えるね、僕といふ人間が。今朝は君の察してる通り、僅かな金を慾しがつて此處まで無駄足を踏んで來たのだが、あれから今まで些ともいゝ智慧が出ないからまた此處へやつて來たのだよ」

「あなたが直接に言難ければ、私が大將に云つて上げませう。いくら入るんです？」

その口吻が不斷金の遣取りを專門にしてゐる松山の輕い態度に似てゐた。吉田は只聞流して、
「僕が特別に低能なんぢやあるまいね。君や川北の頭にはどれだけ智慧が働いてゐるか、自分のに比べてよく見たいものだ」
「ぢや智慧並べに一つ碁を打つちやどうです？」
「僕は今碁なんぞ打つてる場合ぢやないよ。……今夜松山さんは何處へ繰り込んでるんだらう？。君は知つてゐないかい」
「川北さんがよく知つてゐますよ。時々お伴をさゝれてるから」
堀口は欠伸をした。望んでゐたやうな遊び相手にもならないのに見切りをつけた。そして木蔭に蹲んでゐる犬を見つけると庭へ下りて行つて綾してゐたが、やがて食物を與へるつもりか臺所の方へ連れて行つた。靜かだつた其方から賑かな笑聲が聞えて來た。
吉田は薄明りに芭蕉の葉がひよろ〳〵としてゐるのを怪物のやうだと思ひながらソファを離れた。主人の居室には電氣が點いてゐなかつたが、中の有樣は闇を透してはつきりと彼れの頭に浮んだ。いろんな器物の位置がちやんと分つてゐた。
彼れは頻りに闇の中を見詰めた。革文庫が氣にかゝつてならなかつた。で、闇を幸ひに違ひ棚の側へ寄つて、文庫を撫廻したり持上げて見たりしたが、思ひの外に輕かつた。鍵も掛つてゐないので手易く蓋が開けられた。金目の物は入つてゐないのかと、當てが外れたが、兎に角中の正物を見たくなつたので、手を突込んで一攫み引出して、緣側へ出て岐阜提灯の光に照らして見た。手紙や書付など反古見た

いなものばかりだつた。

「おれが今朝から目を付けてゐたのはこんなものだつたのか」と、騙されたやうな氣がして、元の文庫へ收めた。そして、ソファの上に戻つたが、一つ搜した興味は他の容物の方へ移つて、袋戸棚や用箪笥などの中へ心が忍び入つた。

「君はまた來てゐたのか」松山の奴今にも酒臭い顏して歸つて來て、おれを見下したやうな口を利くかも知れないと、吉田は自分よりも智慧も力も優れてゐる者の前に平身低頭する耻しさを覺えた。

さう思つてゐると、垣の外の車の音や足音が、皆んな松山の歸りを知らせてゐるやうに思はれた。

何時の間にか書生部屋へ入つてゐる堀口の外國語の音讀を耳に留めると、吉田はふら〳〵其方へ行つて、「御勉强だね」とお世辭を云つて入口に蹲んだ。

堀口は素知らぬ顏して音讀を續けてゐたが、暫くして振返ると、目を据ゑて間延びのした顏を振ながら何か考へてゐる吉田の樣子は如何にも疲れて根氣が疲れてゐるやうだつた。

「此處は暑いでせう」とお愛相を云つて、左右の障子を取拂ふと、吉田は窓の閾に腰を掛けて、肋骨の浮いてゐる胸を出して團扇で風を入れながら、

「この家も今は無人だから不用心だね。主人の留守に泥棒でも入つたら君の責任になるんだらう」

「盜難は地震見たいなもので天災だから仕方がないさ」

「この家へ泥棒が入るには何處から入るだらうかと僕は今考へてゐたところだ」

「臺所の引窓から入つたり便所の掃除口から匍込んだりするやうなこつちや碌な物は持つてかれりやし

ない。玄關から大手を振つて入るに限りますよ。私ならさうしますね」

「黑手組とかいふ連中のやうに脅迫でもするんかい。しかし此處の大將は短銃を喉へ向けてもビクともしさうぢやないぜ」

「どうですかね。短銃を用ひるまでもない。今朝の雜誌記者は旨くゆすつて金を持つて行きあがつた。いくら締つてる人間でも何處か拔けてるところがあるから、そこへ付入るんですね」

堀口は眞顏でこんなことを云つてゐたが、相手が自分の言葉を身を入れて聞いてゐるらしいのに氣付くと擽つたくなつた。そして、間貸に臺所で紅茶を入れてビスケットを添へて持つて來て、世渡り術めいたことを出鱈目に喋舌つた。

（四）

「お歸りッ」と叫んだ俥夫の聲に二人は驚かされた。主人の歸りが意外に早かつた。堀口は慌てゝ襟を搔合せて飛んで出たが、吉田も後から隨いて行つて玄關に出迎へた。

「君はあれから遊んでゐたのか」松山は不思議さうに此方を見たが、顏には酒氣を帶びてはゐなかつた。

「今まで何をしてゐたのだい。まあ此方へ來たまへ」

松山は素裸體になつて湯殿の方へ行つてからも大きな聲で女中に何か云つてゐた。滅入つてゐた家の中が急に陽氣になつたやうに吉田は思つたが、するゝ彼れの氣持も多少寛やかになつて來た。主人の居室には眞晝のやうな明るい電氣が點いて、居室の中の器物が生々として彼れの目を射た。其處等中が華

美な豪奢な色に見えた。ざつと湯を浴びて來た松山は、浴衣の袖をまくつて胡座を掻いて、堀口を呼んで留守中の事を訊いて、二三ヶ所へ電話を掛けさせた。そして、用事が濟んでから、今氣がついたやうに吉田の方を顧みて、

「僕も四五日避暑に行つて來やうと思つて、今日はいろんな用事を片付けて來たが、忙しい思ひをすると後はいゝ氣持だ。君はあれから何をしてゐた？」と、今朝と違つて親しみを含んで云つた。

「あなたと同じやうな忙しい思ひをしてゐました」と、吉田は呆けたやうな返事をしたが、自分には相手の顏に見えるやうな安易は些とも感ぜられなかつた。

「おれと同じつて、君は何をして忙しいのだい。何か研究でもしてゐるのかい」松山は嘲けるやうな笑ひを浮べて、「堀口と君とは話が合ふだらう。あの男は勉强はよくしてるらしいが、物事に疎くつてね」

「疎いどころか、僕は堀口君に今日は敬服しましたよ。話して見ると誰れでも何か知らえらい考へを持つてるものですね」

「へえ。堀口が何かえらいことを云つたかね。そりや感心だ。どんなことを云つたね」

「どんなことゝ云つて……」吉田は口籠つた。思出さうとしたが、別に奇拔な言葉も見出されなかつた。

「何だつたかもう忘れましたが、堀口君も忠實な書生として奴隷的に働いてるだけの人かと思つてゐたら、相當に考へてゐますよ」と、言譯の答へだけしたが、相手は追窮しないで、

「君も最初から僕に隨いて仕事をしてゐれば、今のやうにふは／＼してゐなくつてよかつたのだぜ。正當な結婚してちやんとした一家を持つて行くぐらゐ雜作もないことだ。しかしもう懲りたらう。君のこ

の頃の様子は川北なんかゝら時々聞いてよく知つてゐるよ」

「……………」吉田はどんな見苦しいことを知られてゐるのかと顏を紅らめた。あの醜い女房を連れて銀座を散歩してゐた時、川北が向うからやつて來たので、慌てゝ途を避けたが、この頃あれ以外に川北に會つたことはない筈だがと訝しかつた。

「懲りたなら僕とこへやつて來るだらうと思つてゐたよ。それでいゝんだ」と松山は獨合點をして、「ところで丁度幸ひだ、伊香保まで君を連れて行かうかね。差支えはないだらう」

「えゝ……」よくも惡くも吉田には否む力はなかつた。

「成べく明日の朝涼しい中に立たうと思つてる。君は朝寢坊だらうが、今夜は早く寢て早く起きて七時の汽車に緩くり間に合ふやうに上野の停車場へ行つてゐたまへ。君の內輪の事情か、僕が君に賴まうと思つてる仕事の話も、詳しい話は汽車の中でしやう。……間違へられちや困るが、確に行く氣があるかい」

「えゝ。……私も腐つたやうな氣分を變へに田舍へ行つて見たいと思つてゐたところですから……」

そこへ、堀口が電話の返事を取次いで來たが、松山はそれに滿足出來なくつて自分で電話口へ出て行つた。

「僕は伊香保行のお伴をするんだつて」と、吉田は他人事のやうに堀口に云つた。

「結構ですね」

「早く寢て早く起きつて云はれたから、これからお暇しやうか」

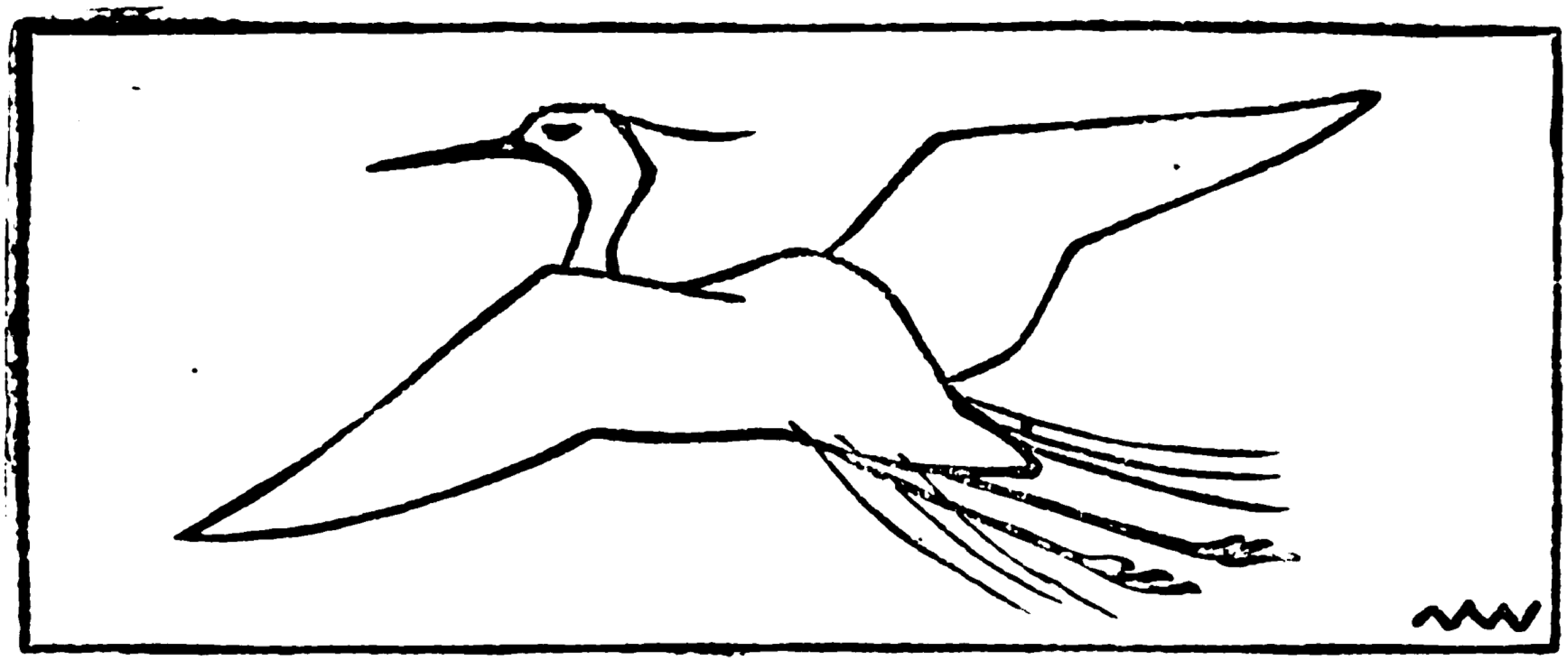
吉田は主人のゐない間に庭に脫棄てゝゐた穿物を玄關先へ廻して、恭しく主人に暇を告げた。

「おれも明日から他人他せだ」と思ふと、頭の荷が輕くなつたが、過去の松山の所行や態度が記憶から浮んでは彼れを虐げ出した。汽車に乘つてゐる間松山の顏を見て言葉を聞いてゐる自分の樣がみじめに見えた。

命令に遵つて早く寢るつもりで電車に乘つたが、充分に午睡をした後だつたので、身體は怠くても、心は冴えてゐて、家へ歸つて夜具の中へ藻繰込んだつて容易に寢つかれさうでなかつた。で、日比谷の乘換場所で下りると、當てなしに公園のあたりを歩いてゐた。今朝松山と喧嘩をして來たと女房に向つて照れ隱しの空威張をした手前、その人に連れられて溫泉へ行くと打明けるのが自分の威嚴を傷けるやうに思はれたり、同じ蚊帳の中に女房と寢床を並べるのも懶く思はれたりした。足を動かしてゐても、小暗いベンチに足を休めてゐても、手綱を放した馬のやうにいろ〳〵の思ひから思ひが驅けずり廻つてゐた。

早く寢て早く起きて定刻に停車場へ行つて、自分の支配者を待つてゐることが、先日から思ひあぐんだ揚句の唯一の生きて行く道だと、頻りに自分の心をその一事に集注させて、雜念を掻消さうと努めた。だが、目を見上げると、空には星が燦めいて、彼れの心を何億萬里の星の世界へ連れて行つた。目を伏せると、彼自身の影が地の上に長く伸びてゐた。……人の囁きや物の響きが左右から何かの意味を彼れの頭に傳へた。

公園を抜けると、大きな官邸が續いてゐた。燈火が二階の窓から洩れてゐた。「……だけどおれは金が入るのだ」と、そればかりは一點の疑ひを容れない事實として、空に描いた金といふ字を見詰めた。



料理人（三幕）

坪内士行

人物

有田　ピンヨン家の料理人
およね　有田の女房
おみち　二人の娘
ロス　ピンヨンの秘書
山路　他家の料理人
大山　ピンヨン家の給仕
友枝　ピンヨン家寄食の學生
野母　學生

時

大正一年の夏の末

處

米國ボストン市

第一幕

米國ボストン市の富伯ピンヨン邸の臺所の一部。舞臺の飾りつけはやや三角形で、左手に長い壁。その見物席に極く近くにある戸は勝手出入口へ通ひ、それと並んでやゝ奥の方にあるのは臺所の者が使用出來る浴室と寢臺の有る部屋へ通ふ。ズッと奥、三角形の尖をなす所に小さい窓が三つ、弓形に出張つてついて居る。右手の短い壁にも戸口が一つあつて、これは料理場及び奥の間へと通ずる。出張り窓の内側に、窓についた臺があつて、その上には破れ瓶に入れた草花が載せてある。その前に小さい卓、この上には讀書用の電燈があり、その他に古い日本の雜誌や汚いインキ壺、ペン軸などが亂雜に置かれて居る。舞臺中央よりはやゝ見物に近い處に、これは大分廣く大きい卓。その上には何にも載つて居らぬ。蓋し臺所の者の食卓に當てられて居るのである。その他には玉子色のその壁に、剝し暦や、安い西洋美人畫の印刷の懸けられて有るのと、安い、然し嚴丈さうな椅子が三四脚程よい所に置かれたのみで、至つてさつぱりして居ると云へば云へる。

夏も末で、まだ夕日の光りは强く窓外の枯葛、その向うに見える廣い庭の樹々の葉裏を照らしては居るが、さしては暑さうでない。

幕が開くと舞臺に居るのは料理人の有田である。これは六十を少し越したズングリとした、太肉の男で、全く禿げては居ぬが、薄くなつた白髮や、丸い肥えた顔や、トコトコと歩む樣子は、見るからに温和な氣の好さゝうな老爺である。丁度右手の料理場から出て來て、何か粉を扱つて居たと見える眞白な兩手をポンポンと拂いて、かけて居た白の前垂を解くや、勢ひ込めてポンポンと振ふと、白い粉がパッと立つ。プーッと息を吹いて、前垂を左手奥の戸口から寢室の方へ持つて行かうとしたが、行きがけに窓を見た拍子に、フト何か目に止つたらしく、前垂を手にしたまゝ向うの窓ぎわへ行つて外を眺める。やゝ立つて居たが、急に思案を定めて、前垂をそのまゝ其處の小卓の上に丸めて置いて、少し急ぎ足で左手前の戸口から出て行く。その後舞臺は少しの間空である。

再び有田が歸ると、今度は一人では無い。最初誰の姿も見えぬ中に、「さアさアお入りなさい。そりや大變でしたらう」と云ふ有田の聲が聞えて、先づ入ると、その後から、これは廿三四の、色の黑い、中背な野母が、右手には大鞄を下げ、左手には小鞄と杖と外套を持つてついて出る。その右のポッケットにはベデカーの案内記がハミ出して居る。

有田　（野母の手から杖と外套を受取りながら）まアそれでも私が見て丁度よかつた。荷物を持つて途を尋ねてるなア難義な物です。

野母　（感謝に滿ちた顔で）本當に難有う。これが全くの地獄で佛です。難有う！

有田 (嬉しさうに微笑みながら)なあに外國へ來てれば辛い事は澤山有ります。助け合ふのはお互樣でさ。(椅子をすゝめる)

野母 (やつと荷を下ろして大安心の體で、すゝめられた大卓の左の椅子にドッカと座り) 然し偶然でしたね、貴君が見つけて下すつたなんて!

有田 (自分も座って) えゝ。今ね窓の所から見てると、何だか行つたり來たりしてなさる樣子が、ハテナ、どうも日本人のやうだが、と思つて、兎に角出て見たんですよ。おや此處の友枝さんを御存知ですね?

野母 えゝ、もと學校で同級だつた事が有ります。

有田 あゝさうですか?

野母 ボストンへ着く時間を知らせれば、迎ひに來て貰へたんですけれど――

有田 (立上つて野母の後へ廻り)まア上衣でもお取んなさい。

野母 (上衣を脱ぎながら) 難有う。矢張り夏は暑い!

有田 (上衣を受取り、傍の椅子へかけ、笑って) 今年の夏は割合に涼しい夏でした。

野母 これで? そんなにボストンは暑い所か知らん?

有田 貴君は荷物を持つて歩いて居らしつたから一倍暑いんでせう。まア今番茶でも上げませう。一服したら、どうです一風呂お浴びなさい。その中には友枝さんも歸るでせう。

野母 ヘエ、お湯が有るんですか?

有田 えゝ、私共の使ふのが、その次の間に有ります。お湯は何時でも沸いてますからわきや有りません。

野母 理想的ですね。

有田 まアお茶でも上げませう。

有田は左手の戸口から去る。殘つた野母は物珍らしさうに室内を眺め、手巾で汗をふき〳〵立つて、窓から庭を眺める。有田すぐ盆の上に茶碗を載せて、

有田 さア一杯。日本のお茶ですよ。

野母 (窓の所から振返つて) 日本のお茶はなほ結構です。

友枝君が此處に居る事は知つてましたが、他に日本の方が居られやうとはちつとも思つてませんでした。

有田　（小卓へ行つて、先刻の前垂を取上げ）さうですか？此處の主人は大の日本贔負で、日本へも三遍か行つたさうです。今も從姉妹に當る人が行つてます。全體は此家のお母さん役をしてる婦人ですが。

野母　貴君の他にまだ日本の人が居ますか？

有田　えゝ。（一寸默つたが）大山と云ふ人が給仕をしてます。今庭に出てるでせう。

野田　（庭を見たが）さうですか？御主人は何をする人なんです、全體？

有田　繪かきです。此處の大學の先生でせう。

有田前垂をもつて寢室の方へ去る。野母大卓の方へ歸り、立つたまゝ有田の持つて來た茶を飲み、チツと何か考へる。と、右の戶口から、小柄な、いかにも生意氣げな顏をした廿歲位の大山が、手に草花と鋏とを持つて出たが、この見知らぬ來客に一寸不意を打たれた氣味で、立止り、ヂロヂロと眺める。野母は茶碗を置いて、無言のまゝ會釋する。大山は一寸頭を下げたが、そのまゝ左手の寢室の方へ入る。

大山　（寢室の方へ入りながら）有田君、ピンヨンさんは又今日少しいけないつて。この暑いのに寢てるのも大變だな。

と、なほ有田と何か物語る樣子。野母は小卓の方へ行つて、その上の雜誌類を取上げて見たが、どれも古いので、失望して置き、又窓ぎわに立つ。暫くして、腕をまくり上げた有田と、草花を奇麗に揃へた大山と寢室の方から出る。

有田　（野母を大山に照介しながら）この方は今日日本から來なすつた野……野母さんでしたね――と云はれる方。友枝さんのお友達ださうだ。（野母に）この方は大山さん。

大山　（至極無愛想に）あゝ日本から見えたんですか？

野母　えゝ、今日始めてボストンへ着いたばかりです。どうぞ宜しく。

大山　あゝ。（有田に）こりやどの瓶へ入れたらいゝだら

う、有田君。面倒だな。

有田　（笑って）役目だから仕方がない。

大山　どれへでも叩込んで置け。どうせピンヨンも長い事ァ無いんだ。

自棄に云ひ捨てゝ、右手へ去る。野母はあつけに取られたやうな顔で其の後姿を見送る。

有田　（大卓の傍に座つて、かくしから小い本を出して置き、又老眼鏡を取出し、かけながら）一と休みなすつたらお湯をお使ひなさい。今一杯にして置きましたから。

野母　（親切に驚いて）おや、さうですか？　どうも重ね重ね済みません。

有田　（小本をハグリ始める）なんの、相見互ひです。風呂は、その戸口から寢臺のある所を通つて突當りの戸です。熱いのでも冷いのでも自由にお出し。着古しだが浴衣も私のを出しときましたよ。

野母　本當に難有う。丸で宿屋へでも來たやうですね。

有田　（構はずに云續け）さア〳〵遠慮なしにどん〳〵お入り。

野母　ぢや失禮します。

と、小鞄を開けて、手拭と石鹸を取出し、左手の寢室の方へと去る。有田は殘つて、小本を繰りながら何か調べ顔である。と左手前方の勝手入口から山路が入る。これは卅五位の、頭の毛を長くした、薄鬚の生えた物臭さうな男で、服も粗末。帽子は無い。

有田　（足音に首を上げ、眼鏡を外して）ム、、山路君か？　君の所の御主人達ももうお歸りだらう？

山路　（敬語の使ひ方を知らぬので、非常に丁寧に）四五日の中で御座いませう。又忙しくなりませう。（と、有田の側に座る）

有田　（小本を閉ぢて）いゝ所へ來て呉れた。家の御主人が大分惡いんで、何か柔かくて滋養になる物をと思つて居るのだが、僕は西洋物はどうも數を少しゝか知らないから困る。一つ何か思ひつきは無いかね？

山路　（ゆる〳〵）西洋物で無い方がいゝでせう。お惡い時には尚更ら貴君お得意の日本物の何かお上げなすつた方がお悅びでせう。私の料理なんて、どうせ見覺

タですもの。貴君のやうな日本で本場の腕前とは比べ物にもなりません。

有田　(笑って)おだてちやいけない。(又眞面目に)けれども結句日本物で何か勘考するか？

山路　(寢室の方に振向いて)二人とも居らつしやいますか？

有田　(小本も眼鏡も懷中に入れ)いや、大山君は奥に居ますが、友枝さんは朝からナンタスケツトの方へ遊びに行かれたやうです。

山路　(職懼げな顔の中に淒い影をチラリと見せて)遊びに？(氣を變へて)あのお風呂の方は？

有田　(立上り)あの方は友枝さんを尋ねて日本から來られた方さ。

と料理場の方へ去らうとして、戸口で大山と行合ふ。

有田　(大山に)もうそろ〳〵かゝるよ。

大山　さうか。

有田去る。大山は山路の方へ近寄り、

大山　久しく顔を出さなかつたね？主人が留守だから遊び廻つてるね？羨しいな。

山路　(ニヤリとして)さうでも有りません。友枝さんとは遊びます。

大山　友枝つてば、あいつ此處の主人と知つてるのか何だか知らないが、少しばかり學問が出來て大學へ行つてると思つて、いやに應風な奴だ。書齋や書室の掃除をする筈だのに、此の頃は何にもしやしない。あんな男を尋ねて來る馬鹿も有るからなア。

山路　日本から誰かおいでださうですね？友枝さんも新らしい人に來られては遊びにも出られますまい。今日も海水浴へ行かれましたつて？

大山　(皮肉に笑つて)おい君嫉妬むな。一人で出たんだよ。

山路　出る時は一人でも、途中で誰が一緒になるか知れない。

大山　まだあのお婆さんを思つてるのか？止せ〳〵。

友枝の唐變木にいゝ相手だ。今度來た日本人もいゝ道具に使はれるんだらう、可愛相に。

山路　可愛相なのは誰よりも現の亭主の――(聲を低め)聞えやしまい？

大山　大丈夫。料理にかゝつたら夢中だ。八釜し屋の爺。

山路　いえ、人の好い人ですね。

大山　(輕蔑した調子で)何だ、自分で好きな時にや勝手に目を盜んで、好い人が聞いて呆れら。

山路　大きな聲しちやいけません。(話を變へて)ピンヨンさんはお惡いやうですね？

大山　早く死んぢまへばいゝ。

山路　さうしたら有田さんも貴君も困るでせう。他に口は有るんですか？

大山　まだ無い。

山路　有田さんも？

大山　有田は何と云つても日本料理の腕は有るんだがあの英語をべら／＼しやべる女房が附いてちやウダツの上りつこは無い。(山路を見て)おつと是は失敬。

山路　(苦笑したが)さうですね。西洋料理がも少し出來るといゝが。有田さんは亞米利加へ出てから何年位になるんでせう？

大山　三十年位だらうな。

山路　へエ。私は十四年居る事になります。

大山　それに二人ともテンから英語が話せないなア可笑しいな。僕ア四年にしかならないんだぜ。

山路　お幾つです？學校へも行らしつたのでせう？

大山　廿一。(得意げに)學校へも行つたさ。

山路　(何の氣もなしに)それで今でも皿洗ひですね。

大山　(氣短かにカッとして立上り)馬鹿！

とユベも無く料理場へ去つてしまう。山路は後を見送つて居たが、やがてポツケットから粗製の卷煙草入を取出し、小卓の方へ歩み寄り、マツチを探して、窓ぎわに立つて煙草を吸ふ。町向うの家から漏れて來るピアノの聲。野母が浴衣がけになつて寢室の戸口から、手拭で顏をふき／＼出。

野母　(出ながら)どうも難有う御座いました——と云つたが、有田は居ずに、見知らぬ人が居るので、兩卓の間に一寸立止る。

山路　(振返つたが、すぐ心づいて)有田さんは今お料理におかゝりです。

野母　あゝさうですか?(と手拭を持て餘して居る)

山路　手拭は其の椅子にでもかけてお置きなさい。(野母その詞に從ふ。山路は野母の方へ歩寄つて)　貴君は今度日本から行らつしつた方ですか?私はこの近所の家に、矢張り有田さんと同じやうに料理役をして居ります山路と申します。何分お心安く。

野母　(多少落着かぬ樣で)あ、さうですか?僕は野母と申します。宜しく。

山路　友枝さんのお友達ですか?

野母　さうです。

山路　お留守で生憎で御座いますね。

野母　えゝ。でもあの有田さんとか仰る御老人がそれは〱親切にして下さるんで、全く生き返つた氣がします。本當に世は情けだと感じました。

山路　有田さんはいゝ方です。

野母　あの方は此處に住んでられるんですか?

山路　有田さんですか?いえ、家はサーカス——此處から三丁程の處——にお神さんと小さいの一人とで居らつしやるんです。此處へは朝五時頃から出て見えます。

野母　小さいのが有るんですか?

山路　實の娘がお有りです。お神さんは後妻です。

野母　はア。然し友枝君は此處に居るんでせう?

山路　友枝さんと大山さんは此家でお休みです。あのお二人と御主人のピンヨンとだけのお住居ですからお屋敷が廣いからなほと靜かです。もつとも今はロスさんが二階にお泊りでせう。

野母　その方は?

山路　ピンヨンさんの秘書とかです。御主人が惡いの

で御看病の爲めでせう。

話の中に、出入口に女の聲で「オー、ホット、ホット」と云ふのが聞えて、有田の女房およねが先に出ると、その後から友枝が續く。

およねは三十前後の小柄な女で、色は可成りに黑い。髪も衣裝も勿論洋風であるが、餘り品のよい作りでは無い。何よりも特色のあるのは其の小さい目で、利口さうな、然し油斷のならぬ鋭さでチラリチラリと人を射る。日本語を使う時も英語を使う時も、一種習慣的な鋼を帶んだ調子が耳に觸る。その英語は抑揚も文法も勿論亂暴極る物で有るが、當人は非常に得意で、盛んに活用する。友枝はこれも卅少し上の色の白い中肉中脊。髪を奇麗に分け、金縁の眼鏡をかけ、洋服も安いながら流行の仕方（スタイル）で、手には薄い袖珍形の佛蘭西本をもつて居る。よく口を尖らして笑ひ、又眼鏡をかけ直す癖がある。

およね　(半巾で扇ぎながら)オー、ディヤ/\。何て暑いんだらう！(座つて居る野母を見て)ハロー、フー、イズ、ユー？浴衣がけで洒落てますね。(窓の山路を見て)山路さん、又來て遊んでるね。ちつと彼（あ）の子でも連れて海邊（うみべ）へでもおいでなさいな。

この間におよねは安い小さい帽子を取つて大卓の上に置く。友枝は入（はい）ると眼鏡を外して額を拭き、そのまゝ誰をも見ず、氣づかずに隣の寢室へ行く。再び出て來ると、今度は帽子も無く、上衣（うはぎ）も脫ぎ棄てたので、シャツの袖をまくり乍ら。

友枝　(まだ野母には氣づかずに、山路に辯解らしく)丁度ナンタスケットへ行くと、偶然およねさんに茶店で逢つてね。奇遇だつたよ。

野母　(最前から立上つてモヂ/\して居たが、この時始めて口を切り)友枝君。

友枝は振返つたが、まだその近眼では何人とも判じかねて、默つて見て居る。

山路　さつきから貴君（あなた）のお友達で日本からおいでの方（かた）がお待ちです。

この間におよねは野母に希見さうな一瞥を與へて、料理場の方へ去る。友枝は山路に云はれて始めてハッと氣がついた樣子で、ツカ/\と近寄り。

友枝　やア、君か？野母君だね？

野母　友枝君。

友枝　(手を差延べ、勝手違ひらしい樣子の野母の手を握り、振りながら)なんだ浴衣がけなんかで居るから、ちつとも解

らなかつた。それに鬚を延ばして、大分爺さんに見えるぜ。

野母　馬鹿云つてらア。四五年逢はないつたつてさう爺さんになるものか。汽車の中で一度も鬚を剃らなつたからだらう。

友枝　まアいゝ。どうしたい其の後？着く日と汽車の時間を知らせれば迎ひに行くのに。よく此處が分つたね？

野母　この近所までは來たが、此の家は中々見付からずにマゴ〳〵してると、あの有田さんが出て來て呉れたのさ。地獄で佛だつたよ。

友枝　（有田の名を聞いて、一寸顔を曇らせたが、頭を掻いて）そいつは氣の毒だつたね。然し君も僕等がこんな處に、こんな風で暮らしてるとは思はなかつたらう。日本ぢや外國へ出てる者の事情は解らないから。

野母　さうでも無いさ。それから今お湯を使はせて貰つた。

友枝　それで浴衣がけで洒落込んでるのか。道理で見違へた。手廻しが早いな。

野母　でも此處は亞米利加だからな。

友枝　おや〳〵、どつちが先へ來てるのだか解らない。

と、話の中山路は後の小卓で煙草を吸つて居る。料理場の口からおよねと有田が出る。

有田　（ニコ〳〵しながら）友枝さん、お珍らしいお客様ですね。それから今日はおよねがナンタスケツトで御馳走になつたさうですね。どうも有難う。

およね　全くチヤンスでしたね。（野母に）今度日本から行らつしつたのですつてね？まア大變でしたらう？シヤトルからですか？

野母　シヤトルへ上りました。

およね　リヤレー！ベリ、ナイス、タウン、ね？

野母答へずに居る。

有田　兎に角お疲れでせうから、ね友枝さん、今日は此處へお泊めしたら宜う御座んせう？

友枝　(チラとおよねの顔を見て)さア？まア野母君、僕も一と風呂浴びたいんだし、話も有るから、次へ來給へ。それに君も鬚を剃る必要があるね。剃刀は貸すよ。

野母　剃刀位持つてるよ。

友枝　無頓着な君にしては感心だな。

野母　君のやうな流行紳士にはなれないが。

野母又小鞄を開け剃刀その他を取出さうとする。

友枝　その鞄もみんな兎に角次へ持つて來給へ。どの道部屋は早速探すが。

野母心得、友枝も手傳つて、荷物を携へて次へ去る。

有田　(煙草をふかして居る山路に)君、あつちで茶でも飲み給へ。(料理場へ聲をかけて)大山君、山路さんにお茶でも上げ給へ。

大山　(料理場から)來りややるよ。

山路　(立上り、苦笑して有田に)大山さんは暑いとなほ腦が惡くなるらしい。もうお暇しますよ。

有田　まアいゝさ。遊んで行き給へ。

山路　私の方もそろ〳〵サラドでも拵へてやらないと留守の婆さん達が主人へ訴訟しますから。

有田　ぢや又來給へ。

山路　お邪魔しました。(料理場へ聲かけ)大山さん左樣なら。

返事は無い。山路は、椅子にかけて何か小聲で歌を唱つてるおよねの傍を通りながら、

左樣なら。今日は——(と力を籠めて)お樂しみ。おみつちやんはお留守居ですね？(およね聞えぬ振りで唱ひ續ける)ぢや又お邪魔に出ます。

と左手前の戸口から去る。その後を見送つた有田、女房の傍へ來て、

有田　およねや、人出は多かつたかい？

およね　えゝ、グレート！

有田　行くのを私は何とも云やしないが、おみちも、連れてつたらいゝぢやないか？もう十になつてるもの別に大して物が解らないんぢや無い。たまには連れてお歩き。

およね　又始つたよ貴君は！何かと云ふとおみちおみちつて。そりや私や繼母だから手は行屆きませんさ。氣も廻らないでせう。けれど私自身だつてまだ若いんですからね。たまに保養に行つたつていゝでせう。

有田　だからさ、それを惡いとは云はない。

およね　云はれて溜るものですか！貴君は朝五時や六時に此處へ來て、買物の途中一寸家へ歸る位で、夜の九時頃までも居やしないでせう。私一人あの子を相手に子守ばかり唱つちやゐられやしない。

有田　困るな。

およね　どうせ最初のお神さんのやうには勤まりません。

有田　さう叱鳴らないでもいゝ。

およね　アイ、ドント、ケヤ。

有田　それに此處のピンヨン様も大分惡い様子だ。

およね　どうせ近い中に死ぬでせう。

有田　これ、勿體ない事を云ひなさんな。色々と心配して下すつた方だ。まアそれも壽命とあれば仕方も無いが、萬一の事でも有れば、私達まですぐに困る

およね　なあに仕方は幾らでも有りますさア。

有田　又桑港へ歸つて藝者を始めやうつてんぢや無いだらうな？

およね　もう藝者なんか下等な物ァ厭です。これでも日本ぢや日曜學校の先生もして來たんですからね。貴君なんかに紐育で逢はなきアもつと運が向いてたかも知れやしない。料理人なんて、これこそつくつくと稼いで一文にも無らないつてんでさア。

有田　そりや私も紐育で料理屋を小さいながら自分でやつてた時とは違ふ。かうすつてしまつてからはお前も後悔してゐるか知れないが、あの時からお前と私との年の違ひは同じだ。

およね　理屈ですね。何もお爺さんだから若くなれつて云ふんぢや有りません。

有田　さアさうで無ければ、お前も餘りおみちを慮ら

ずに、何かお前も口を見つけて、三人仲よく稼いでかうぢやないか？ビンヨンさんでも逝くなりや尙の事だ。

おとよ　何時私がおみちを虐りました？

有田當惑苦悶の顏ながら、何氣なさを裝つて默す。およねは凱歌でも上げるやうに、立つて小聲に唱ひ續けながら、大卓の上の帽子を取つて、寢室の方へ去る。大山右から入る。

大山　お爺さん何をしてるんだ？お鍋が焦げついちまうぜ。僕の職分ぢや無いから僕は觸らないよ。

有田ハツとなつて、立上り、大山をヂツと見たが、優しく、

有田　難有う。胴忘れして居た。

と、急いで料理場の方へ去る。

大山　江戸子も毫碌しちや駄目だ。

小卓の側に座り、その上の本を取上げて讀む。が、すぐ落着かぬげに立上り、窓から外を眺め、やがて頭を振つて料理場の方へ去る。向うからのピアノ音が聞える。やがて寢室の戸口から、すでに帽子を冠つたおよねと、洋服を着て、上衣だけ手に抱へた友枝とが出て來る。室内に誰も居らぬを見て、二人とも早口に小聲に話す。

友枝　（窓の方へ行つて）困るな。

およね　何が？今度の男かい？搆うもんかね。何も兄弟と云ふぢや無し、早く今にでも宿さへ探してやりや大した功德だ。それから金でも卷上げりやいゝ。

友枝　そんな亂暴な事は出來ない。

およね　何が亂暴なものか。借りるのに差支えは有るまい。

友枝　（苦笑して）借りるのに差支えはないが、返すのに差支える。

およね　フーリッシ！返さなきやいゝ。お前さんも有田に借て愚圖々々してるよ。

友枝　兎に角野母君は僕の友人だし、あまり立入つた事迄知られると、自然日本の友人へも報告されるから困る。

およね　だからさ、早く都合して紐育へでも出やうよ。あの廣い市へ行きや解りつこない。それともずつと南のテキサスへでもいゝ。友人々々つてお云ひだけ

れど、私だつてお前さんが日曜學校を教えてた時の朋輩だよ。

友枝　そりやさうだ。（頭を掻いて）然しおみちちやんが可愛相だ。

およね　（舌打して）へブンス、セーク！ぢやおみちをお貰ひよ、養女にでも女房にでも。

友枝　それから有田君にも濟まない。

およね　アイ、アム、シエームド、ユー！ユー、ベターー、ゴー、エンド、テル、ヒム。

友枝　戯談ぢやない。然し實際いゝ人だからな。

およね　それで私は大嫌ひ——

云ひかける時料理場から大山が入る。二人を見ても一向頓着せずに。

大山　（友枝に）もう湯は濟んだか？僕も今の内入るぜ。

友枝　入り給へ。

大山　あの人はどうしてる？

友枝　髭を剃つて、多分着換へてるだらう。部屋を探しに行くから。

大山　（意味有りげに冷笑して）さうか。

そのまゝ左手へ去る。友枝頭を掻く。

およね　（自分の蟀谷を指し、友枝を見て頭を振り）プアー、ヘツド！

友枝　腦も惡いが、意地も惡い男だ。

およね　彼奴はいゝが、山路なんかと五月蠅から、本當にしつかりなさい。今度のお金を——

野母が他の洋服に着換へたが、カラーはまだつけずに出て、

野母　友枝君、君一つカラーを貸して呉れないか？

友枝　カラーか、君のはサイズは？

野母　さア幾つかな。

友枝　一つ出して見やう。

と二人又寢室の方へ入る。およね料理場の方へ高聲に、

およね　ぢや歸りますよ。

有田　（かげで）あゝ、さうかい。

と云ひつゝ出て來る。前垂で手を拭き〳〵。

有田　ねエお前。明日は私の明き番だから、丁度日本

から見えた方も有るし、友枝さんや何かを一つ家へ呼んで日本料理でも差上げやうと思ふがどうだね？

およね　あんな汚い狭い處へ。

有田　それでも皆さんにかへつて呑氣でよからう。どうだね？

およね　いゝでせう。

有田　ぢや其のつもりで。

およね　バイ、バイ。

と出口の方へ行きかける。寢室の方から支度の整つた友枝と野母が出る。およね立止る。

有田　（二人を見て）や、お出かけ？

友枝　一寸部屋を見て來ます。

有田　まア明日でもいゝぢや有りませんか？

野母　いえ、こちらに御厄介になるのも何ですから。

有田　さうですかい。恐ろしく急ですね。まア夕方に歸つてらつしやい。何か此處でお上んなさい。

野母返事はせずに友枝の顏を見る。

友枝　さうするかもしれないが、多分何處かへやる事になるでせう。

有田　さうですかい。いや今もあれ（とおよねを顎でさし）に云つた事つてすが、明日は私の休みの日だから一つ晩方に、汚穢しい所ですが、私の所で日本飯でもどうです。貴君方二人に先刻の山路位で。

友枝　御馳走ですか？

有田　御馳走つて程の事ア出來ません。たゞ氣樂に一杯やらうつてんでさア。

友枝　（野母に）有田さんは江戸時代の大きい料理屋の後だ。

野母　（感心したやうに）へエ。

有田　行らつしやい。宿なんかどうでも宜うがさア、今日見つからないつたつて。

およね　（有田の顏を見て）お父つさん又一杯引つかけたね？

有田ニコ／＼して答へぬ。友枝は一寸隣室へ行き、帽子杖を持つて

來て、

友枝　ぢや野母君、近所を一つ探して見やう。

およね　（友枝に）ホイッチ、ウエー？

友枝　さア、矢張り學校の近所でせうね。

およね　アイ、カム。メー、アイ？

友枝　（一寸有田の顏を見たが、すぐさり氣なく）同じ方向ですね。ぢや野母君、およねさんと一緒に出よう。

野母　出よう。

有田　「歩行(かち)をめされのしつかとせ。」まア歸りたかつたら御夕飯はこちらと。

野母　有難う。

三人揃つて出ようとする。野母と友枝はおよねに先を讓る。

およね　サンキユー。

と先に出る。二人之に續く。有田見送つてから、寢室の方へ聲かけ、

有田　大山君そちら？　もうそろ／＼出來上るよ。

と云つて耳傾けたが返事が無い。顏を振り、

有田「任(まか)せて置けろのさて／＼」

と小聲で歌つて料理場へと去る。

――幕――

第二幕

有田の借部屋。二階の二部屋を借りて居るので、舞臺のは其の寢間の方。第一に目につくは其の壁紙の赤い色で、之は大分に褪めて破れ、所々白い日本紙が張つてある。左手にやゝ大めな、然し極く粗末なベツトがある。その上には疊みかけの女の子の服や、女帽子其他來客の脫き捨てた上衣や帽子、杖などが載つて居る。その下には行李が二つ程押込んである。ベツドの右、即正面に、簞笥一つ。その上にもこま／＼した、例へば手箱、布地(きれぢ)、人形など置かれ、黑の山高帽も一つ交つて居る。その簞笥と同じ並びの右端戸口になつて、開けられた時には奥の臺所が見える。右手に窓一つ。その窓の手前には荷物箱や大鞄などが積まれて居る。室の中央には、小さな、お茶飲み臺が置かれ、その左右に椅子が一つゞつあるが、一つは壞れて居る。掛時計が正面、簞笥の上にかゝり針は九時十分前を指す。その他安い西洋皿や小さい棚が壁にかゝつて居る。左手壁の最左端に今一つ戸口があつて、これは下からの入り口である。

幕が開くと、およねがおかねを指圖して部屋を多少とも居心持よげにしやうと片付けて居る。臺所への戸は開いて、そちらから器具の音、笑ひ聲が盛んに聞える。

およね （ベットの上の來客の上衣を片寄せ乍ら） ショッキング、ノイジー！おかねさん、三味線は何處に有りました？

おかね （十位の老せた顔の娘。粗末な洋裝）そのベットの下よ。

およね （驚いた顔で） アイ、セー！行李の中ですつて？そんな所へ入れたのはユーでせう？

おみち ノー、ノー、マヽ。パヽが入れたの。

およね 仕様が無い！（行李を引出し、開けながら）さうして勝手な時には彈けと云ふ。

おみち （傍へ來て）マヽ、彈くの？

およね 今に此方へ來るとパヽ歌うんだらう。オー、ヂイヤ〳〵！

と行李の中から古い三味線を出し、棹をつぎ、塵を拂ふ。おみち母親の肩に手をかけて見る。

およね （グッと振向き） 暑いぢやないか、そんなに引ッついて！

おみち飛退き、臺所の方へ行つて、人形を弄る。一としきり臺所からの笑聲高く聞える。暫くして、野母と友枝が臺所の方から出る。兩人とも顔を赤くして居るが、特に友枝の方は醉つて居る。

友枝 （出るとすぐおみちを抱き上げ）ヤーッ。（と差上げ）相變らずお轉婆だな君は。幾つだ？

おみち アイ、アム、テン。

野母 （感心したやうに）へエ、成程英語で答へるか。郷に入つては子供でも化するんだな。

友枝 （おみちを下ろし）子供だから化するんさ。年寄つちや何年居たつてテンで駄目だ。山路だつて此處の大將だつて何十年居ても、十の勘定と滿足には出來ない。

およね （友枝に）友枝さん、大分景氣ですね。

友枝 （始めておよねに氣づき） やア其處か？

およね 其處か、も無い。近目の上に醉つてゝちや溜り

やしない。

野母 (三味線を見て) へエ、三味線なんか有りますね。

友枝 なんかは怪しからん。細君中々達者なんだ。

およね 中々は怪しからん、でせう?

友枝 實際の所は上手か下手か僕には分らない。

およね三味線をベットの上に置き、

およね おみつちやん、これに觸るんぢやないよ。

と臺所の方へ去る。この後おみちは殘り、小聲に何か米國流行歌を唱ひながら人形を相手に遊んで居る。およねが去ると友枝はベッドの上に座り、聲低く野母に語る。

友枝 野母君、君が遙々日本から來たばかりの時にあんな事を話して、實際君には案外だらう?

野母 その今の家を出ると云ふ事? そりや別に案外ぢや無い。然し折角ボストンへ來たと思ふと、今度は君が紐育へ行くんぢやつまらない。

友枝 なに、時々ボストンへもやつて來るよ。今の家の主人も長くないだらうし、どうせ早晩みんなにお暇が出るんだからね。どうだね昨夕の宿はよささうか。

野母 僕にやどんなのがいゝのか解らないが、まアお神さんは親切な人らしいね。

友枝 まアあそこで辛抱し給へ、若い娘さんも居るしさ。(一段と聲をひそめ)そこで君、實は君に少し賴みが有るのだ。

野母 (椅子を引寄せ、友枝の傍に座り) 何だ?

友枝 こりやこんな所で云ふ事ぢや無い。いづれ明日にも參上して委しく云ふがね、一寸樣子だけ聞く。君の手元に――勿論來た早々で、聞くさへ失敬だけれど――多少僕に融通して吳れる餘裕が有るかね?

野母 (快げに) 無いぢやない、が、どの位?

友枝 百五六十弗。

野母 百五六十弗――三百圓だね? (考へる)

友枝 醉つてるからなんて思つちや困るよ。いづれ改めて明日でも參上するよ。又勿論一時借りるだけ

で、すぐ都合をつけて返す事は誓うよ。

野母（雑作なく）承知した。兎に角僕も君を頼つて來たのだし、種々世話にもなつたのだから——

友枝（大袈裟に打消して）世話なんて事は少しも無い。

野母　上げると云ふわけには行かないが——

友枝　勿論必らずすぐ返濟する。

野母　——と約束さへして呉れゝば貸さう。

友枝（野母の手を取り振つて）メヤシ、ボクー。

おみち友枝の傍へ來て、

おみち　友枝さん、メヤシ、ボクーつてなに？

友枝（一寸意外な顔でおみちを見たが、笑つて）サンキユー、ベリマッチの佛蘭西語だよ。

おみち　メヤシ、ボクーが？　それぢやゴッデムと云ふのは佛蘭西語で何ての？

友枝（野母と顔見合せて）あんな下等な言葉ばかり覺えるから遣り切れない。

野母　ゴッデムつて何だ？

友枝　ゴッドは神さ。デムはダムの訛りだ。（おみちに）そんな言葉を使つちやいけない。

おみち　みんな使うよ。メリーだつてルースだつてマヽが一番よく云ふ。パヽと喧嘩すると。

友枝（頭を掻き）困るな。

臺所から有田上機嫌で出る。

有田（おみちに）皆さんに甘えてゐな。皆さんもう降參ですかい？　どうです一つ臺所の戰場へ出直しちや？　お相手しますぜ。

野母　有田さんはお強いんですね。

友枝（ごく親しい調子）こんな呑助と太刀打は駄目だ。

有田　呑助とは怪しからん！（おみちを抱へて）なアおみち、パヽは呑助か、但しは呑口か？　貴様には解るまい。まアいゝ〱。お前は眠くなつたら、御免蒙つてベッドの隅でお寢よ。ね、お二人さん、もう少し向うでどうです？

友枝　僕は駄目だ。

野母　僕も澤山です。
有田　お若いに弱い事！　では駈け立てると云ふ戰法で、戰場を此處へ移しませう。（臺所へ向つて）おい、およね、およね。
およね　（臺所から、非常に激した怒り聲で）今行きますよ。
と出て來る。
有田　こつちへ其の菓物を持つて來たらいゝだらう。片づけるのはどうせゆつくりだ。
およね　（臺所の方を睨めつけて居るが客の前では穩かに）椅子もでせう。
有田　さう〱椅子も少し。
野母　僕が持つて來やう。山路さんは居るんでせう。
およね　あの男は醉うとクドくつてしやうが無いんですよ。クド〱臺所で云つてやがる。
有田　まアいゝやな、醉うやうに飮んだんだ。「飮んだ酒なら醉ずばなるまい、ズンベラ〱」かね。
とこれから一としきり皆々立かゝり、臺所から椅子や、盆、コップ、酒道具など運んで來る。山路は醉眼朦朧として出、すぐベッドの上へ座る。一と通り揃うと、
有田　さア、これで座改まると云ふ奴だ、いや改めると云ふ奴さ。ね。
おみち　（父親の傍で）パヽ、眠いよ。
およね　何ですね、行儀の惡い。
おみち　スリーピー。アイ、アム、スリーピー。
およね　五月蠅子だよ。お休みな、そのまゝで。
有田　寢な〱、いゝ子だ。後で着換へさしてやるよ。
おみちすぐ山路の側から這上り、ベッドの隅で横になる。
野母　大變ですね、子供衆の世話は。
おみち　本當に厄介ですよ。何にでも口は出すし。
有田　然し彼娘が何より樂しみですよ。も一人大きい餓鬼が――さう、生きて居れば皆さん位の年頃か――有りましたが、こいつアまだ私の日本を出ない前に死んじまつてね。あの娘一人が私の血續きの者でさア。

「天にも地にもたつた一人」てなア此の事です。

およね　「昔語りも耻しい」かね。

友枝　一つ出るかな。

野母　是非久しぶりで日本の歌を聞かせて下さい。

有田　昔の歌なんかお若い方にお聞かせしたつて面白か有りますまいよ。萬事が當節たア違ひますさア。ね。昔アこれで奥へお出入りの料理まで扱つた事が有るんですから、そりや中にやお見せしたい美事な事も知つてますぜ。から大名方のお供先が大鳥毛を振立つて「えゝほう？」なんて來る處ア、今考へて見てもいゝね。お殿様方が御退出になる。お供の草履奴が、お草履をパッと投げると、お玄關先へ其れがピタリと揃つて並ぶんでさア。投げ草履ですね。澤山殿様方ア揃つて御退出だから、ヘマな野郎がお草履持ちだと、第一邪魔にやなるし、ドヂを踏んで殿様にまで耻をかゝせるつてわけ。そんな事ア今見られないね。

友枝　米國流に物事が早かつたんだ。

野母　昔には又趣が有つたなア

二人は興有りげに聞く。但し野母は時々前に置かれた盆を取上げて飲み續ける。およね酌をする。友枝は果物を喰ふ。

有田　お手玉の歌を一つ聞かせませう。女郎屋仕込みですよ。(節をつけて唱ふ)

「大川口、揚屋町、三浦高浦米屋の君。皆々道中見事な事。ふりさけ見よなら花紫。相川満川あい逢染川。錦あはせて龍田の川。あのせ、このせ、やつこのせ。向見イさい、新川見イさい。帆掛船が二艘續く。あの舟に御女郎乘らせて、小女郎乘らせて跡から家形が押かアける。ヤレ留めろ。船頭留めろ。留たら汝等に五升遣るぞ。五升いらぬ三五升いイらぬ。わいらに構ふと日が暮ウれる。日は暮ウれる、お月は出へやる。夫で殿御のおん心それ百よ。」

野母　(悉く興に入つて)　面白い！　實に面白い！それを

又よく覺えてるもんだなア。有田さん大いに君の爲めに飮まう。

友枝 （これも興じて）古い歌はお手玉の歌まで調子が違ふ。

有田 氣に入りましたかい。同じ遊びつたつて昔なア違ふ。ね。今のお若い方ア學問は出來るし、行儀はいゝけれど、なアに若い時ア遊ぶさ。これで私に金でも有りや、眞の事、ウンと資本を入れて、皆さんの尻を押しますぜ。二十年も前に來て御覧なさい。紐育で小つちやな料理屋でしたが、自前でやつてたんでさア。あの時分なら、から感心な皆さん方の保養にならボン〳〵やつけるんだが。まア然し人は物に執着ちやいけねエ。運賦天賦さ、ね。私やもう年は取たが、これでも元氣だけは皆さんに負けやしない。道樂もおやんなさい。勉强も大いにやるべし。それでお互ひに外國で働くんでさア。ね。私ら皆さん頃の年にやそりや盛んに遊んだ物さ。その頃アまだ〳〵邊鄙だつた神樂坂なんかゝ乙だつて、入り浸りさ。

山路多少醒めて、この時口を出す。

山路 御意見かと思ふとおのろけか。

およね 默つといで、醉つぱらひの兵六玉！

有田 山路君まだ聞えるな。どうだ一杯。

およね お止しよ。こんな人に。散々ばら臺所で管卷いて人を困らせた癖に。

有田 まアさ〳〵。「喧嘩をやめて酒やめてッ、たて引させずにさげ錢でッ」てのさ。え、心いきだ。山路先生受けさつし。

山路受けて飮み、およねに差す。

およね 馬鹿らしい、誰が、

山路默つて野母にさす。

野母 （受けて）山路さん、御機嫌ですな。

山路 いや、私は御機嫌ぢや無い。御機嫌なのは友枝さんだ。

友枝　（か、と口を丸くして）　戯談云つちやいけないよ。桃を食べてるのは僕一人だよ。

山路　この一人で桃を食つて（たべる）てのが癪にさわりますよ。

およね　何を云つてるんだね、此の人は？　お前さんの桃ぢやア有るまいし。默つて居眠りでもしてお出で。

有田　山路君そんなに菓物を戀しがらずともさ。まア飮んだ。ね、「桃と云ふ、文字はア變れどヲ」だらう。婆さん、お前の其の怪しい三味線を一つ願はうか。

およね　（得意で三味線を取上げ乍ら）　怪しいは御挨拶だね。

有田　怪しいとは皮の事さ。（野母の注ぐのを受けて）　ヲトヽ、こぼれ田甫の雛草（ひいなぐさ）、と來たな。アヽ、かうお若い方達と飮むと、氣も若くなる。さア婆さん、何をやる？

およね　春雨かい？

有田　さア。

およね　越後獅子か？

有田　もつと氣取つた所をやらうぜ。

およね　駄目だよ、大概忘れてるから。

有田　（およねに構はず歌ひ始める。およね其れを聞いてから二上りに直して彈く）

「うそのかたまり眞（まこと）の情（なさけ）、この眞中にかき暮れて、降る白雪の人心々々、積る思ひとつめたひと、わきて云はれぬ世の中。」

さア、續けて一つは投げ節と御座い。

「我（われ）がおもひはあの浮き雲よ。いづこ行衞ぞ定めなさ。」

およね　ハヽ御苦勞さま。

野母　うまい物だなア。

友枝　いヽ咽喉だ。

山路　ウヽ、やんや〳〵。

およね　ついでに一つ踊りやいヽ。

有田　馬鹿云つちやいけねエ。この國體でこの荒屋で踊つたが最後店立だ。

およね　どうせすぐ――（と默す）

山路醉眼乍ら鋭くおよねを見る。友枝は山路の様子を見てソツとおよねの顔色を覗く。野母と有田は氣づかずに語る。

野母　本當によく覺えてますね。

有田　また／＼奥の手が有りますて。然しさう一つ時一つせいに出さずに置きませう。まァこれからはお互ひに助けあつてやりませう、ね。外國と云や旅だ。旅ぢや自儘を捨てゝ助け合はなくちやア。お婆さん、もう少し御酒。

およね　もうお止しよ。

有田　お止しとは怪しからん。さうあたじけなくちや情けねエ。

野母　あたじけたア何です？

有田　なる程解りませんかい？　あたじけ即吝嗇の事です。

野母　僕ア又忝いと云ふ語の變化したのかと思つた。

友枝　メヤシーたアなーにの格だね、ハヽヽ。

皆々ドツと笑ふ。入口の戸を叩く音。皆々笑ひ興じて聞取らずに居る。再び強く叩く音。有田聞つけ皆々を靜める。バツタリと沈默。重ねて叩く音。有田立上り、戸口に行く。およねは三味線をベツドの上に置く。沈默が續く。有田が入口の戸を開くと、其處には色の白い脊の高いロスが立つて居る。ロスは質素ではあるが瀟洒な服装。よく輕口を云ふ男である。（望めるならば英語で云つて欲しいがそれが純な英語でゆかぬならば、又、聽衆に解らぬならば一つそ、餘り滑稽過ぎぬ程度の破格日本語を取る）

ロス　（部屋に一歩進み入り、帽子を脱し、見廻して）　大變賑か。お酒盛りですか？　御酒の匂ひ大變結構です。（と笑ふ）

有田　ロスさん、

およね　ロスさん、まアー

友枝　御酒はまだ有るさうですよ、ロスさん。

野母は立上つて見て居る。

ロス　（首を振つて）　いえ／＼。（有田に、低く、眞面目に）ビ

ソロンさん亡くなりました。

有田　(ハッとして)　旦那様が？

他の者も、それ〴〵に驚き總立となる。

ロス　(頷いて)　今亡くなりました。私急いで日本の從姉妹さんへ電報打ちに行きます。もう十時に間有りません。

有田　(ゆる〳〵、低く)とう〳〵。

野母　(有田に)　あの御主人ですか？

有田　えゝ。むつかしいとは思つてましたがね。

友枝とおよねとは顔を見合はせる。山路はベッドから去つて、卓の傍で手酌で飲んで居る。

有田　(ロスに)　難有う。すぐ參ります。

ロス　いえ、來る程の事有りますまい。何も別に用無いです。たゞ、二三日中には荷物片づけませう。(優しげた愁ひの顔で)　とんだ事です。

有田　用が無くても參ります。

ロス　どうでも。私郵便局行きますから、左様なら。

有田　左様なら。

ロス皆々に一禮し、ベッドの上のおみちに心づき、友枝の顔を見、兩手を頭に當て「グウ」と鼾の眞似をして笑つて、去る。

有田　(誰にともなく)　お氣の毒な。立派な書の先生だつたに。(皆々に)　あゝ云ふ事ですから、私は失禮ですが行つてきます。まアどうか皆さんは御ゆつくり。

野母　いえ、僕もお暇します。(と、掛時計を見上げて)　もう十時に近いから。遲くなると宿へ氣の毒です。

有田　さうですか？　まア始めの中は早く歸つた方がいゝでせう。若い娘さんの居る下宿なら尚と今の中堅くした方がモテませうて、ハヽヽ。

野母　さう云ふ意味ぢや無い。

有田　まア一緒に出ませう。おやおよね、山路さんと友枝さんを宜しく。

友枝　いや、僕も歸るよ。

有田　まア〳〵さう行つたつて駄目でせう。それよりやお馴染甲斐にその御馳走の跡片づけつて奴を願ひ

すよ。ね、山路君もゆつくりし給へ。

山路默つて頷く。有田は一寸臺所へ手を洗ひに行く。野母ベツドの上から自分の上衣(うはぎ)を探出して着、

野母 (およねに)どうも大變御馳走になりました。何れ又。(友枝に)ぢや明日(あす)來るね?

友枝 あゝ、朝の中。

およね友枝の顔を見る。有田衣裝を正して出、

有田 ぢや、およね頼むよ。お二人共御ゆつくり。(野母に)さア行きませう。

と、簞笥の上の帽子を取り、野母を先に有田は去る。あと三人殘つて、一寸氣味合の沈默。

およね 山路さん、今日は大分醉つたね。これから又チヤイナ、タウンへでも出かけるのかい?

山路 (急に二人に丁寧に、優しく)いゝえ、そんな所へ行くもんですか。

友枝 この頃大分盛んださうだつてね?

山路 (チラリと鋭く見たが、すぐ優しく)へゝゝ、若い時にはま遊ぶべしですかね。

およね いゝさ。盛んに遊ぶさ。ノド〱と濃厚(しつこ)いより餘程いゝよ。

山路今度は又およねを睨んだが、すぐ視線を外して、取澄ます。

友枝 山路君もつと飲むかい? 僕アもう腹一杯だ。何なら片づけてそろ〱僕も歸る。

およね ピンヨンさんの所へ歸るんぢや無いでせう?

友枝 どうして? あそこが僕の寢てる處だもの。

およね 怪しいもんだ――もんですよ。

友枝 怪しかない。主人が死んだんだもの。まア片づけやう。

およね 片づけなくつたつてよ御座んす。私(わたし)だつて手が有りますもの。ね(と思出したやうに山路を振返り)さうでせう山路さん?

山路 (友枝に)お歸りならお供しませうか?

友枝 さア――。(と少し躊躇したが)一緒に出ませうか?

山路、卓の上の盃三つへ酒を注いで、

山路　おやも一つ最後に三人一緒に飲みませう。

友枝　(およねを見て)飲まう。

およね　(平然として)飲みませうつて。

三人立上つてグッと飲む。

——幕——

第三幕

序幕と同じ場面。たゞ諸道具は、中央に小卓一つと、椅子二三を殘す他は大概取のけられ、壁の繪も無くなり、僅に大きい剝し暦のみが殘され、その示す日附で前の幕から三日の經過が有つた事が解る。括られた荷が二つ程片隅にある。午前中幕が開くとロスが、上衣は無しで袖口を捲り、室中をアチコチする。

ロス　オー、デイヤ〳〵！　オルモスト、オバー！！　…

と、立止り、かくしから卷煙草を出して吸ひ始める。處へ外から有田を先に大山が入つて來る。大山は細身の杖を持ち、卷煙草を吸つて居る。

ロス　(有田に)大概出來ましたね。これ(と括げた荷を指し)貴君のですか？

有田　一つは私の、一つは大山さんの。

ロス　(大山と握手し)いかゞです？　今度の御主人丈夫ですか？　うまくやれますか？

大山　忙しいから困るだけ。

ロス　さうです。此家より人數多いから。山路さんまだ歸りません？

大山　まだ。

有田　困つた人です。

ロス　さうです。あの人酔つて友枝さん撃つたのでせう。酔う事危い〳〵。

大山　よく怪俄もせずに友枝が逃げたものだ。

有田　友枝さんは今野母さんの所だね？

大山　さうだらう。知らん。

有田　紐育へ行かれると云つてられたが、まアあの人などは學問が出來るからすぐ口は有るだらう。

ロス　(有田に)あなた未だ口無い？

有田　今朝も一寸一軒行つて來ました。

ロス　どうでした？

有田　私一人なら雇つて呉れると云ふのですが、子供が一緒ぢや困ると云ふのです。

ロス　（同情の眉を寄せて）おや〳〵。（大山に）あなた上等。丁度山路さんが警察へ行く。その跡入る中中うまい。

大山　どうせ山路は出すと云つてた處ですよ。

ロス　有田さん、日本へ歸る事いやですか？

有田　厭でも有りませんが、今更ら此の年をして、女房子供を連れて、身寄りもない日本へ歸つても面白かァ有りません。

ロス　さうですか。

大山　（卷煙草を吸ひ乍ら）お神さんとおみつちやんとで他に口を探しやいゝ。

有田　さう思ふ通りに出來れば苦勞は無いさ。

大山　君でも苦勞するかなァ。しよつちゆう呑氣な顔してニコ〳〵してるが。

有田　苦勞したつて仕方がないからしないのさ。

大山　ぢや矢張り呑氣なんだ。

ロス　日本人呑氣な人少い。私大變呑氣な國知つてます。アイリッシ。アイルランドの人それは呑氣で滑稽。ある二人連れが暖い國を夏旅しました。旅屋へ泊ると、暑いので蚊が來る。ブーン〳〵。二人のアイリッシは云ひます。「おい、蚊が來る。」「ウン、蚊が來る。」「どうしたらいゝ。」「電氣がついてるから來る。」「ぢや電氣消さう。」二人で電氣消します。二人眞暗闇の部屋に居ます。その中螢がアチコチ飛んでます。部屋の中へも入ります。「オイ駄目。」「何が？」「暗くしたら蚊がランプ持つて來た。」

と話し終つて、ニコ〳〵と得意げに二人を見る。

大山　なーんだ。落し話だ。

有田　（ニコ〳〵笑つて）面白い。

ロス　日本人そんな馬鹿ない。皆利口です。大山さんなど一番利口。

有田　さう大山さんは利口ですよ。

大山　(反って)山路や友枝君とは違ふ。

ロス　(煽動る風に)さう〳〵。

大山　有田君、ぢや僕ァ失敬する。折角口を見つけ給へ。グド、バイ、ミスター、ロス。

と、ロスと握手して去る。

ロス　(肩をすぼめ)勝手な人！

有田　當節はあれでなくちやいけますまい。

ロス　(チッと有田を見て)貴君本當にこれからどうする？貴君料理の腕ある。何處か口有りさうですね。

有田　(矢張りニコ〳〵し乍ら)えゝ、何處か有りませう。

ロス　お神さん別に口探せば宜しい。あの人貴君より英語少し出來る。

有田　さア、さうして與れるといゝんですが。

ロス　貴君人好過ぎる。親切な人。私出來る事なら助けて上げたいね。(指で輪を作り)これ無い。(頭を振って)駄目々々。(と笑ふ)

有田　(これも笑って、指で輪を作り、眞似)これ無い。本當に駄目です。

二人顔見合せて笑ふ。一寸沈默。又窓から、序幕と同じピアノの音が漏れて來る。

ロス　ピンヨンさん死んでから四日？

有田　四日。早い物です。

ロス　あの山路さん警察から出ましたか？

有田　さア、どうでせうか。

と、表戸口から、野母が入って來る。

野母　暑い。朝の中でも中々暑い。(ロスと握手し)グド、モーニング。(有田に)お早う御座います。歩くと矢張り中々暑いんですね。(と、額を拭ふ)

有田　朝から何處かへ？

野母　なに、例の山路君を見に行ったんです。

ロス　山路さん？　今丁度噂してました。

有田　どうでした？

野母　意氣頗る消沈の有樣。もつとも全體元氣な人ち

や有りませんでしたね。

有田　何時頃放免されます？

野母　さア、一週間つて云つてましたから、まだ跡三四日ですね。なに別に虐待もされてません。僕も山路君に面會は二の次で、拘留所の様子を見に行つたんですが、案外つまらない。

ロス　醉つてたばかりで一週間長い。

野母　いゝえ、矢張り友枝君を毆つてる所を見られた上に先生あの時クド／＼何だが巡査に云つてたと云ふので、長くせられたんでせう。よくは知らないが。

有田　友枝さんは未だ貴君の所ですか？

野母　えゝ。今日あたり紐育へ行くと云つてました。何だか變ですね、僕が尋ねて來たのに、三日とたゝない中に、今度は向うが僕の下宿へ轉り込むなんて。

有田　それが浮世でさア。

ロス　私二階で、もう少し繪片づけます。また後で見ます。

と、輕く會釋して、料理場の方へ去る。

野母　山路君があんな所に居ては、幾ら主人が留守でも、あちらの家でも困りませう？

有田　ところが其の代りに此處に居た大山さんが入つたのです。

野母　（全く意外で）え、大山君が？

有田　素早い人です、若いのに。

野母　だつて、それぢや大山君は此處が無くなつた時だから都合がいゝでせうが、醉つたはずみで拘留されてるだけの山路君が困るでせう？

有田　さア、人の困るのを思ひやつてゝは立つて行けない時節でせう。若い方々はお互ひにさうやりつこして居るんですから。

野母　さうかなア。然しそんな調子ぢや日本人排斥問題も起るわけだ。

有田　（つく／＼と）こんな事を申すと、意見がましくお取りかも知れないが、野母さん。貴君は失禮だがま

だお若い。此の亞米利加には中々油斷のならぬ日本人が澤山居ますから、外國人より日本人を御用心なさい。金を貸したら返りつこなし、女を連れてれば手を出される。私はもうこれで亞米利加に三十年近くも居ませう。一度は紐育で可成りの小料理をやつて、日本の宮樣方がお遊びにおいで下すつた事も有ります。それが段々左前になつて、今では人に使はれて居る。それを決して私が恨むのぢや無い。なに、自分は自分の道樂故とスッパリ諦めて居ますが、貴君方はこれからだ。學問はお出來なさるし、一つしつかりおやんなすつて下さい。山路や大山のやうな人物ばかり居ちや駄目ですよ。若い時にや氣がつかないが、年寄りの云ふ事は聞くものですさ。遊ぶのもいゝ。が、腹帶はしめてかゝらなきやア。特にこんな自由な外國へ來ちや尙更らですよ。友枝さん程學問の有る人でも、此の頃はグラついて來てます。

野母　ヘエ、さうですか？

有田　私が陰口を云ふとお思ひぢや困ります。いゝ人だ。いゝ人だけにグラつくんでせう。

野母　一つ意見してやつて下さいな。僕ア來たばかりで何にも解らないんですから。

有田　まア／＼行く所まで行けば自分で解りますさアね。あんまりヤキモキ人の世話したつて、どうせ自分の思ふやうになるもんぢや無し。自分で悟るのが一番樂です。

野母　でも遲く悟つたぢや間に合はないぢや有りませんか？

有田　さうですよ。間に合はない時分に悟るんだから面白い。私なんか其の一人ですね。

野母　貴君なんかな遲いにも何にも、昔から悟つてるんでせう？

有田　（笑つて）悟り過ぎて遲くなつたんですかね。（首を振りながら歌ふ）

「親も知らねばわしやこし方も、行衞しらなみ拾小

舟」

野母　（閉終つて、チッと有田の顔を見たが、立上り、詩を吟ず）

「人を動かすの春色尚些か存す。淡く双蛾を拂ふて低く鴉を綰ぬ。一種の風流秋後の柳。三分の嬌態雨餘の花。心は天畔に群を失ふ雁の如し。身はこれ江中に繫がざるの槎たり。復多情の白司馬無し。君がために誰か解して琵琶を賦せん。」

吟じ終って默す。有田默す。沈默が暫く續く。やがて例の如くにコ〱と笑つて、

有田　又先夜（こないだ）のお酒盛りにでもなりさうですね？

野母　（それには答へず、若々しい熱心で）ねエ有田さん、僕は君の今の言に從つて大いにやりますよ。僕は貴君（あなた）の過去を知らない。知らないけれども、淡々として水の如き、而も味のある君の態度が氣に入つた。氣に入つたと云つちや失敬だけれど、兎に角その——心意氣つて云ふんですか？——大いに學ぶ所が有る。

有田　大變感心しましたね。なに私（わたし）や無學の、三十年も居て、碌に英語で挨拶も出來ないやうな者ですがね、物の道理位は心得てます。頑固な昔者とも違ひますが、ごく勝手な若い方々とも違ふ。

野母　古い新らしい人ですか？　ハヽヽ。（獨語して）が、それぢや何故發展（デベロップ）しないのかな？

有田　え？

野母　いえ。

又言葉切れる。ところへガタ〱と足音高くさせて、おみちが入（はい）つて來る。手に紙片を持つて居る。

おみち　パヽ。イッツ、ホット、アウト。（野母に）ドン、チユー、シンク、ソー？

野母　（頷いて）イエス、イエス。

おみち　イエス。マヽはね、パヽが出ると直ぐにね、荷物拵へてたの。そしてね自動車に乘つて行つたよ。

有田　おつ母さんはどうした？　又出かけたかい？

有田　（不審さうに）荷物拵へて、自動車で？

おみち　イエス。モーター。

有田　はてね？

おみち　（携へた紙片を差出し）これマヽがパヽへ渡せつて。

有田　（急いで取り）どれ〳〵。

と、眼鏡をかけ、讀む。野母はおみちと何か語る。讀む中に有田の顔は、靜かながら非常に苦悶の表情。讀了ると、手紙を疊みもせず、眼鏡は外して、微かに溜息をつく。

おみち　（野母に）ノー、ノー。ヒー、ゴー。

野母　オー、ノー、ノー。

おみち　イエス、イエス。本當だつてば。

野母　でも、僕が山路さんの處へ行く時は未だ荷造りをしてたもの。

おみち　でも、おつ母さんと一緒に自動車で行つたもの。

野母　可笑しいな。僕には今日中に立つと云つてたが。

有田　（寂しげな笑ひを浮べて）友枝さんですか？　もう行きました。

野母　へエ、その手紙に書いて有るんですか？お神さんからの？

有田　えゝ。一緒に紐育へ行きました。

野母　（仰天して）あのお神さんと友枝君が！

有田　えゝ。

野母　そんな筈はない。まさかそんな事が！

有田　もう前から示し合せてあつたのでせう。

野母　（容易に信ぜず）そんな筈は無い。友枝がまさか！

有田　（手紙を出し）何なら讀で御覧。

野母　（受取り、有田の顔を見て）いゝんですか？

有田頷くので、野母讀む。有田は座つて、遊びながら唱つて居るおみちを見る。

野母　（讀了つて）山路君とも！

有田　そりや薄々は私も知つて居ました。然しなに私と三十近くも違ふ若い女ぢや有り、したいやうにするがいゝと何にも云はずに居ました。友枝さんのは彼女から誘つた事に違ひない。あの女はどうならう

と仕様も無いが、弱い友枝さんがお氣の毒です。
野母　こんな不都合な事が！　紐育なら追つかけてつたつて譯は有りますまい。
有田　なーにしたいやうにさせときますさ。それに紐育はボストンよりまだ／＼廣い掃溜。忍ばうと思つたら、中々見つけられる事ぢや有りません。
野母　（チッと考へて）さうかなア。
おみち　（突然）メヤシー、ボクー。パ、、メヤシー、ボクーつてのはサンキューの佛蘭西語だよ。（野母に）あの時友枝さん貴君にお金貸せつてたわね。
野母　覺えてるね。
有田　え！　友枝さんが金を貸せつて？
野母　え、、少しばかり。
有田　どの位、失禮ですが？
野母　三百圓ほど。
有田　お貸しになりやしますまい？
野母　（寂しく）貸しました。

有田　（野母を同情の目で見て）さうですか。
野母　友枝君がそれ程變つてやうとは思ひもかけなかつた。
有田　お着き早々の處を！　三百圓と云へば大金です。そりやもう到底お手へは返りませんよ。
野母　（苦笑して）この樣子ぢやさうらしい。まア僕も有田さんと一緒になつて働きませうか？
有田　（これも苦笑して）戯談を。お國からの御送金はすぐ有るんでせう？
野母　もう三ヶ月待たなくちや。
有田　彼女の差金とは云ひ條、友枝も隨分思ひ切つた事をしたものですね。然し野母さん、働くなんて氣はお出しにならん方が宜う御座んすよ。ね、出來るなら電報でもうつて、お國へさう仰つた方がい、。私などは仕方なしに身を落して居るもの、、人に使はれていゝ根性になる者は、まアたんと有りません。
野母　然し又米國へ來たからは、働く内部へ入つて見

るのも實地研究で面白いかも知れない。

有田　いや、さう今すぐ思詰めなすつちや御損です。マア、ゆる〳〵考へて御覧なさい。惡い事ア申しません。

野母　難有う。（スゴ〳〵と立上り）さうすると有田さん。當分今の處ですね？

有田　さア、どこか定る迄あそこに此娘（と頤でおみちを指し）と二人で居ませう。

野母　ぢやその中又お尋ねします。

有田　どうか是非。又一杯やりませう。

野母　人數は二人切りですね。

有田　（笑つて）シンミリして乙でさア。

野母　（仕方なしに笑つて）大きに。ぢや又。

と去る。料理場の方でロスが陽氣に何か流行歌を唱ふのが聞える。

おみち　ロスさん大きな聲で歌つてるわね。

有田答へず。

おみち　パヽ、マヽは歸つて來るの？

有田　歸つて來ない。

おみち　いゝや。氣樂でいゝや。

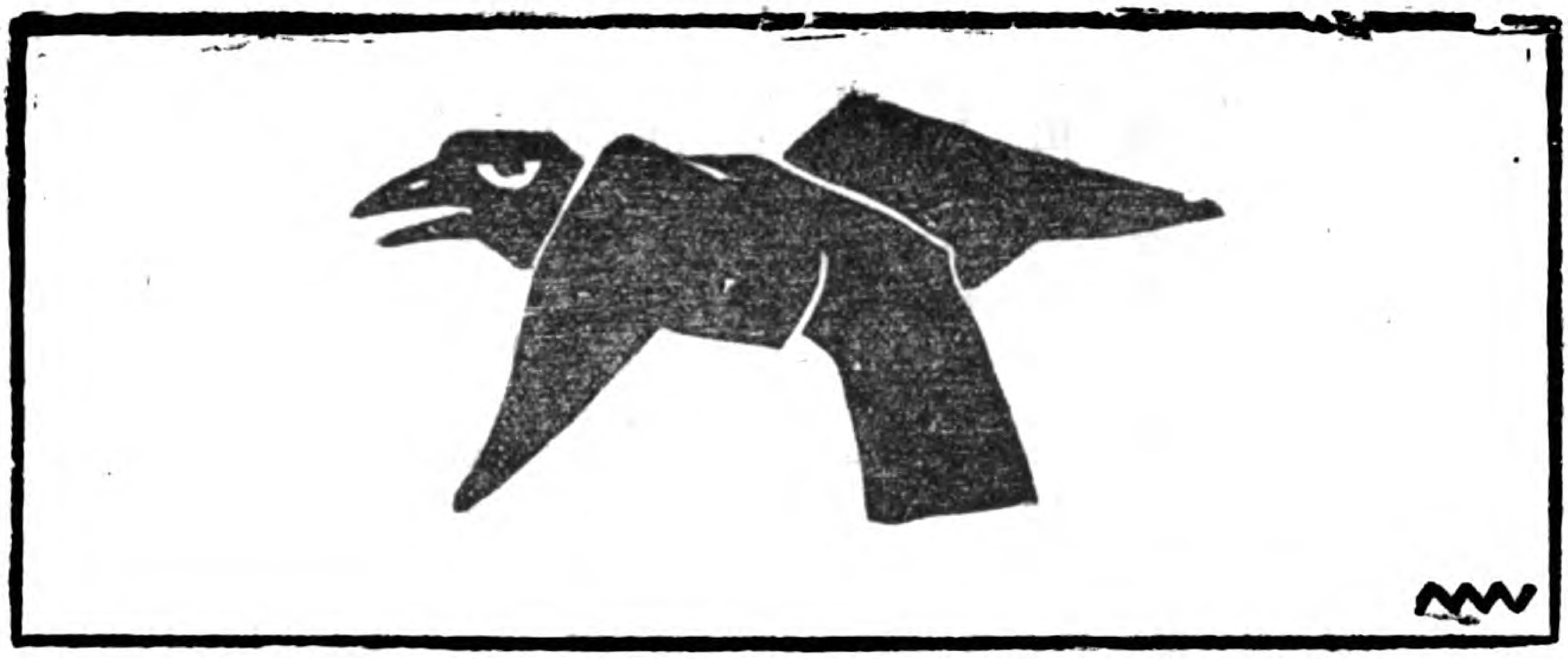
有田　（ヂッとおみちを見て）マセた事を云ふ。なア、およねも隨分私の足手纏ひだつたが――

云ひかけて言葉を切る。ロスの歌ひ聲が切れると、今度は庭からのピヤノの響。有田ホロリとなつて、おみちを抱へ、

有田　いゝさ〳〵。なアおみち。人間諦めが肝心だ。二人でやつて行かうな。俺も江戸生粋の料理人だ。

と、思ひ返して、輕く笑ふ。ピヤノの音。

――幕――



惡夢（この一篇を亡き父に捧ぐ）

武者小路實篤

登場人物

仙人
若者
その父
少女
脚本家
使者

（幕の前、脚本家と使者出逢ふ）

使者。先生。之はいゝ處でお目にかゝりました。

脚本家。誰かと思つたらお前さんか。

使者。へい。私でございます。實は私どもの主人が少し氣が違ひまして。

脚本家。なに氣がちがつた。それは氣の毒だな。

使者。それで今度あなたに何かかいて戴きたいと申しましたので。

脚本家。それは奇特な氣違ひだな。

使者。それであなたの處へ之からおたのみに上らうと思つてゐたので。

脚本家。さうか。それは書いてやりたくないこともないが、實はこゝに書いてあるものも持つてゐるのだが、實はそれではお前さんの主人の處へ行かうとも思つたゐたのだがね。氣が違ちや困るな。

使者。どうも御冗談を。

脚本家。何かわしが冗談でも云つたかな。

使者。どうも困りましたね。實は氣が違つたと申しても、あなたの脚本をやつて見たい、それでかいて戴きたいと云ふ點だけが氣が違つてゐますので、その他はふだんと同じ事なので御座います。

脚本家。それは都合のいゝ氣違ひもあつたものだな。さう云ふ氣違ひならいくたり居てもいゝな。

使者。御意に入りましたら、どうか脚本を一つかいて戴きたいので。

脚本家。かけないこともないがな。こゝに一つかいたものがあるのだ。よかつたらそれでも持つて行つて見ないか。いやなら返してくれゝばいゝ。

使者。例の珍劇で御座いませうな。

脚本家。珍劇と云つてもいゝだらうな。

使者。美しい女は出て來ますかな。

脚本家。出てくるよ。

使者。どう云ふ處が特色で御座いますかな。

脚本家。舞臺の下に穴があいてゐて、登場人物は皆その穴から出たり入つたりする點だらうな。

使者。へー。それは珍劇ですな。未だ他に特色は御座いますか。

脚本家。仙人見たやうな奴が居て、それが三幕とも同じ所に腰かけて居て、出てくる人間の運命を豫言するのだな。

使者。へゝ。

脚本家。それからさつき云つた美人がたゞの人間だか、鶴が化けたのか。よくわからないだな。それが第一幕ぢや、一寸出たらめを云つてゐるやうだな。

使者。誰がそんなことを云はしたのです。

脚本家。わしの頭をつくつた奴だね。どうも。

使者。へんですな、それから筋は。

脚本家。うるさいね、お前さんは。こゝに原稿があるから道々讀んで見るといゝだらう。

使者。どうもよめませんね。

脚本家。なぜだ。

使者。面白くなさうですからな。

脚本家。それなら讀むな。

使者。讀めとおつしやつてもそれだけは御免をかうむりますね。

脚本家。勝手にしろ。

使者。原稿はいたゞいて參ります。さもないと叱られますからな。

脚本家。勝手に持つてゆけ。入り用がなかつたらすぐ返しにくるのだぞ。

使者。へい。へい。

脚本家。それなら持つてゆけ。おとすと承知しないぞ。

使者。へい、おとしはしません。おとすとさぞ傑作になりましせうからね。さよなら。

脚本家。主人によろしく云つてくれ。

（二人退場、幕あく）

第一幕

（高原。仙人眞中の後方の石に腰かけてゐる。仙人らしい人杖をもつてゐる。若者そのわきに座つてゐる。少しあまへるやうに見

上げて話してゐる)

仙人。お前は人生がわからないと云つたね。しかしお前は生きたことがあるのか。又本當に苦しんだことがあるのか。

若者。あります。

仙人。お前は戀をしたことがあるな。

若者。(少し内氣に) あります。

仙人。その戀人は死んだのか。

若者。いゝえ。

仙人。人妻になつたのか。

若者。はい。

仙人。お互に愛してゐたのか。

若者。わかりません。

仙人。夢に見るか。

若者。はい。

仙人。寂しいか。

若者。はい。

仙人。その女に打ちあけたのか。

若者。いゝえ。

仙人。父にうちあけたのか。

若者。はい。

仙人。父はなんと云つた。

若者。前から承知はしてゐたと申しました。

仙人。前から承知してゐたのか。

若者。はい。實は父がその娘に私が戀をするやうにしてくれたのです。あとで父が涙をこぼしてすまなかつたと云つてうちあけてくれましたが。父は私位ゐの時に空想して實現することの出來なかつた喜びを私に味はゝしたいと思つてその女に私を逢はしたのださうで御座います。

仙人。お前の父も失戀したことがあるのか。

若者。あるので御座います。それで私には完全な戀の喜びを味はしたいと思つたのださうで御座います。處がその計畫がもう少しと云ふ處で駄目になつたの

で御座います。

仙人。計畫をした？

若者。はい。父は今でもその事をいゝことかわるいことかわからないと申してゐます。私がある人間になつて見ないとわからないと申してゐます。父は自分の經驗したことを殘らず話してくれました。自分が今の自分に迄もなれたのは失戀したからかも知れないと申しました。しかしその痛手はお前に逢はしたくない程强かつた。その痛手を受けなかつたら自分は幸福な政治家になつてゐたかも知れない。さうして國家は自分のゐることを德としたかも知れない。少くも今の自分にはなつてゐないだらう。今の自分になつたことを不幸と思つてゐない、むしろ幸福と思つてゐる自分は失戀したことを感謝するのが本當かも知れないと父は申しました。

仙人。うん。

若者。父はそれから私に申しました。父は私が十六になりました時。父は十六で初戀の人に逢つたのです。そして逢つた偶然の運命を今だに喜んでゐます。それで私が十六の時、父は私の內にある戀の最も美しく咲くはづだと思ふ相手をさがしてくれたのです。父はその時分文豪として一番華々しい時でした。誰からも尊敬されてゐました。それで父は自分の思ふ通りのことが可なり出來たのです。父は方々の女學校に參觀にゆきました。五度目か六度目に父が見に參りました學校で父が一目見て感心した女の子がありました。その人のことを父は調べました。少しも非難すべき點はないと父は思つたのです。名の知れた敎育家の娘でした。齡は十四でした。父は早速その娘の父に逢ひにゆきました。向ふでは心よく父にあつてくれました。父を尊敬してゐてくれたのです。さうして父の申し出したことを喜んで承知してくれたのです。

仙人。どんなことを申し出したのだ。

若者。父は往來で毎朝その娘と私とが學校へゆく時にゆきちがうやうにしてほしいと申し込んだのです。それは又運よく不自然でなく出來ることとでした。たゞその後私の一家は引越しました。その前から父は引越したいと申してゐましたから、そのことは別に意味があるとは思つてゐませんでした。その後私はその女と往來でよく逢ひました。父の望んでゐる通、私はその女に心をひかれました。父は二タ月目に私のそぶりが變つたので自分の思つた通りに事件が發展して來てゐるとを知つたと云つてゐました。父自身もその娘を自分の娘の樣な氣がして、隨分可愛いい氣がして、どんなになつたらう。どうしてゐるだらうと思つて時々何氣なくその娘の學校へ行く處や、歸る處を見に行つたと申してゐました。その夏休程嬉しい時は御座いませんでした。人知れず戀しく思つて忘れることの出來ない女が避暑にゆくと同じ處に避暑に來てゐるのです。そして父は向ふの家の人を知つてゐて、私をつれて遊びにゆくと、向ふからは娘をつれて遊びにくるのです。耻かしいと思つたのは一寸の間で、二人は山にものぼれば川にも入りました。一緒に釣もしました。何か話しては笑ひました。二人の親はそれを嬉しく見て、互に未來のことを話しあつて喜んだと父は申しました。その後學校がはじまつてからも往來でよく逢ひました。二人は逢ふとお辭儀をしました。私はそれがたまらなく嬉しく、何かの理由で逢へなかつた時は一日寂しく、何も樂しいことがないやうな氣がしました。

仙人。それで結果はどうなつたのだ。

若者。私は云ふまでもなくその女を戀しく思ひ過ぎました。二三年同じやうにすぎました。私は執着するものゝ苦しみと喜びを受けました。三年目の夏でした。私はたのしみにして今年もきつと來てゐてくれると思つて父と避暑に行きました。しかしその女は其處には來ませんでした。父はその時分或る本を書

いた爲に危險思想を持つてゐるやうに思はれたのです。父のゆく處には影のやうに密行巡査がつきそひました。父は祖國の青年を懦弱にすると云つて多くの人から非難されだしたのです。父のものをよむと祖國の爲に戰ふとか、死ぬとか云ふことが馬鹿氣てゐるやうになると云ふのが非難の的でした。

仙人。お前の父はどんな考をもつてゐるのだ。

若者。父は國家主義が地上いたる處に跋扈してゐることを不合理だと思つたのです。國家主義既に人類の意志に反してゐる。そして國家主義は曾ては國民を保護する爲に必要だつたが、今では國民を人間らしくないものにすると申したのです。父はこの地上に國家主義の暴力がとゞかない國をたてたいと思つたのです。父は今の時代にさう云ふ國のたてられないことを知つてはゐました。しかしその頃から父はさう云ふ國にたいして心から憧がれ出しました。さう云ふ國が出來なければ人間の心は窒息し兼ねないと申しました。父は前からさう云ふ傾向は持つてゐました。しかし始めは誰も問題にもしなかつたのです。笑つて見ないふりしてゐたのです。處が父の空想が多くの青年の心の空想になり、父の憧がれが多くの青年の憧がれになつたのです。人々は遂にほつたらかしてはおけないと思つたのです。そして父の説を攻擊する人が多く出て來ました。その娘の父も教育者として父の説を恐れ、父とつきあふことを恐れたのです。私が寂しい心を抱いて何も知らずに避暑に行つてゐた或日、父は何時になく新聞を見て怒つてゐました。涙ぐんでゐるとさへ思へました。それはその娘の父が私の父に向つて隨分亂暴な攻擊をしたのです。父の話によりますと、父は私のことを心配して、其後向ふの家に出かけたさうですが、門前ばらいを喰はされたさうです。避暑から歸つて來ても私は遂にその娘には逢へずにしまいました。私が自分の戀を父にうちあけたのはその時でした。父はす

べてを話してくれました。私は聲を出して泣きました。父も涙ぐんでゐました。俺の主義を憎まないでくれと申しました。私はたゞ泣きました。近頃その娘は父が一番嫌つてゐる、父が常に僞善者だと云つてゐる、國民におもねることの上手な代議士の息子の嫁になりました。私はそれを見て又人知れず泣きました。しかし私は父の主義を呪ひはしません。父の云ふことは少し早やすぎるとした處が本當のことだと思つてゐます。しかし寂しいことは寂しいのです。

仙人。お前の氣持はよくわかる。この世はまだ〳〵何事も思ふやうにはゆかない。不合理なことがこの世を我がもの顏をする。失戀なぞはありがちなことだ。國と國とは之から本氣になつて爭そひだす。内亂もつゞいておこる。人々は再び生きた心地でゐられない時がくる。いろ〳〵の無理押しつけに押しつけられてゐる問題は暴力とむすびついてこの世に復活する。人々はこの世をたゞ恐怖と不愉快と不合理と虚僞と罪惡の世界と見、生きてゐることに愛を感ぜず自殺するものが相ひつぐ時がくる。

若者。それは本當ですか。

仙人。本當だ。もう暫らくは國家主義は全盛だ。國と國とは戰ふ爲に國力の全部を盡してまだ足りないと思ふであらう。人々はどうしていゝかわからなくなるであらう。

若者。私達はどうすればいゝので御座います。何んだか心細い氣がして來ました。

仙人。深く考へるものは時々見るべからざるものを見る。見るべからざるものを見るものはある恐怖に打たれる。しかしお前にはその前に見せるものがある。お前の恐怖はその瞬間喜悦に姿を變へるだらう。

若者。何で御座いますか。

(仙人杖で地面をたゝく。少女仙人の前に下より顯はれ、仙人の前にゆきお辭儀する)

仙人。盃に靈泉の水を持つてこい。

少女。はい。

(少女岩かげにゆき盃に水をくんでくる)

仙人。この方に上げろ。

少女。はい。

(少女若者に盃をわたす。若者水をのむ。少女の顏を見つめる)

仙人。お前はこの女を戀したな。

(若者顏をあからめ默つてゐる)

仙人。お前の内にある戀はすべてこの少女によつて燃え上る。お前は夢のうちでこの女を見たことはないか。お前が戀した女に逢ふ前にお前に夢の内であつた女はこの女ではなかつたか。

若者。夢ならばさめないでくれ。

(沈默)

若者。(恥かしさうに女に)貴女の名は?

少女。鶴と申します。

若者。いくつ?

少女。十六で御座います。

若者。お急がしいのですか。

少女。今は暇で御座います。

若者。遊んでくれますか。

少女。よろこんでお相手いたします。

若者。何をして遊びましやう?

少女。何にでも。

若者。お友達は?

少女。御座います。

若者。男の友達も?

少女。はい。

若者。仲のいゝ友達は?

少女。別にありません。

若者。何をして遊びましやう。

少女。なんでも。

仙人。お前は生きることを樂しいとは思はないか。

若者。思ひます。ですけど心配もあります。もしこの

方と遊べない時が來はしないかと思ふと目がくらむやうです。何時迄もかうしてゐられるやうにして下さい。お願ひですから。

仙人。そんなことが出來ると思つてゐるか。

若者。矢張りもうぢき永遠にわかれなければならないのですか。そんなことはないでしやうね。

仙人。もうぢきとは何時迄をさすのだ。

若者。私の戀は又やぶれるやうなことはないでしやうね。

仙人。それは知らない。

若者。やぶれるにきまつてはしないでしやうね。望みはあるのでしやうね。

仙人。ないことはない。

若者。(嬉しさうに) ないことはないのですか。

仙人。ないことはない。

若者。希望はあるのですね。少しは。

仙人。あることはある。

若者。ありがたう御座います。

仙人。禮は死ぬ時に云へるなら云ふがいゝ。

若者。今云はないでは居られません。

仙人。今遊ぶなら遊ぶがいゝ。時がたつとこの子は下へ行かなければならない。

若者。下へ？

仙人。この子がお前のものになる迄はこの子の時はお前の自由にはならない。第一この子はお前を愛してゐるかゐないかわしは知らない。

若者。あなたは私と遊んでくれるとおつしやいましたね。

少女。申しました。主人の命令で御座いますから。

若者。御主人の命令がありませんでしたら。

少女。御相手することは出來ません。

若者。私と遊ぶのはいやなの。

少女。いゝえ。

若者。なぜそれでも遊べないの。

少女。妾は自由の身體では御座いません。
若者。自由の身體ではない？
少女。妾は心は賣りませんかも知れませんが、時を賣つてしまつてゐますの。
若者。時を賣つた？
少女。はい。ですから妾は好きな時に好きなことは出來ませんの。
若者。なぜ時を賣つたのです。
少女。お金の爲にきまつてゐますわ。
若者。そんなに困つてゐらつしやるのですか。
少女。妾、御らんになる通り貧乏人よ。
若者。時を賣つてはたまりませんね。
少女。皆賣つてゐますのよ。お金持の他は。
若者。それで何をしてゐるのです。
少女。命令されることは何んでもしますの。
若者。なんでも。
少女。なんでもと云つてもね。世間でとやかく云はれるやうなことはしませんわ。それから妾がそんなことをするやうなら飛び出した方がいゝと思ふやうなことはしませんわ。
若者。それでどんなことをするの。
少女。本當は十日前からある工場に通つてゐますの。
若者。工場に？
少女。はい。
若者。あなたが。
少女。はい。
若者。いくらとつてゐらつしやるの。
少女。一日十四錢。
若者。あなたが。
少女。はい。
若者。隨分つらいことがあるでしやうね。
少女。まだなれませんので、時々は。
若者。どうしてそんな所へ。
少女。兩親が去年つゞいてなくなりましたの。それで

伯母の處へ世話になつてゐましたら。伯母が少しあづけておいた銀行がつぶれてしまひました。

若者。あなたは可哀さうな方ですね。

少女。（地の下をさし）ですけどあすこでは妾はまだ〳〵仕幸な方ですわ。話を聞いたゞけでもどうすることゝも出來ないやうな可哀さうな話もありますわ。どうかして上げないではゐられないやうなことも御座いますわ。

若者。あなたは實際見上げた方ですね。

少女。ちつとも。妾は皆に働きのない野呂間な人間に思はれてゐますの。妾は毎日怒(おこ)られて許りゐますの。妾の兄が死んで妾が生きのこつたので、兄とかはればいゝのにとよく云はれますの。皆妾を馬鹿にしてゐますの。

若者。あなたをですか。皆罰あたりです。何かしましやうね。何か面白いことをして遊びましやうね。

少女。えゝ。

若者。何をしましやう。

少女。何んでもあなたのなさりたいことならなんでもしますわ。

若者。あの川には魚がゐますか。

少女。澤山おりますよ。

若者。釣竿があるといゝのですがね。

少女。ありますよ。

若者。餌も？

少女。ありますよ。

若者。あなたは釣はきらひ？

少女。いゝえ。いたしますよ。

若者。釣竿は何處にあるのです。

少女。妾がとつて參りますよ。

若者。餌は僕がとりませう。

少女。妾がとつて參りますわ。

（少女岩かげにゆき釣竿等をとり出す）

仙人。（若者に）幸福か？

若者。幸福です。極樂になるやうに幸福です。
仙人。人間に生れたことを仕幸と思ふか。
若者。思ひます。
(少女歸つてくる)
少女。それなら、參りましやうか。
若者。え丶。
少女。(仙人に丁寧にお辭儀をし)一寸いつて參ります。御用がありましたら御呼び下さい。
仙人。下へゆくべき時が來たらよぶ。
若者。そんな時がくるのですか。
仙人。おきくる。
若者。さうしてもう私の處へは來て下さらないのですか。
仙人。そんなことはあるまい。
若者。又私と遊べるのですね。
仙人。さうだ。
若者。ありがたう御座います。

仙人。お前は禮ばかり云つてゐるな。
若者。云はないではゐられないのです。
少女。それなら參りましやうか。
若者。え丶。行きましやう。なるべく長く呼ばないで下さい、ね。
(二人小川に釣にゆく)
若者。奇麗な水ですね。
少女。澤山魚がおりますでしよ。
若者。本當に澤山ゐますね。餌をつけて上げましやう。
少女。恐れ入ります。
若者。遠慮せずに、つけさして下さい。
少女。ありがたう。
若者。どつちが先きにつるか釣りつこをしましやう。
少女。え丶。
(若者の父四十五六歳の登場した處から登場、仙人に默つて會釋し、小供等を見る)
若者。(魚をつりあげる)もう釣れましたよ。こんなのが。

僕がかちをしたよ。
少女。本當にね。妾もまけてはゐませんわ。
（若者、びくに魚を入れる）
若者。又つれましたよ。
少女。妾のはちつとも喰ひませんよ。
若者。針が出てゐるのかも知れませんね。
少女。づるい方ね。
若者。さう云ふわけではなかつたのですよ。これとかへましやう。
少女。いゝえ之れで澤山。この通りつれましたわ。
（若者魚をとつてやり、びくに入れる）
若者。あなたのが一番元氣がよろしいよ。
少女。さうを。
若者。餌がつきましたよ。
少女。ありがたう。
父。（仙人に）二人はよろこんでゐますね。
仙人。よろこんでゐる。

父。人間はよろこべる動物ですね。
仙人。さうだ。
父。ですが、まだ世の中は人間をよろこべない動物にしたがつてゐます。よろこぶことを禁じてゐます。見てゐて苦しい程です。
若者。（少女に）貴女の仕事は隨分苦しいのですか。
少女。なれませんので時々泣きたくなることも御座いますのよ。それに意地のわるい方がゐてつらあて見たやうなことを云ひますしね。なれませんので身體（からだ）がつかれましてね。息がくるしくなりますのよ。空氣もわるくつて段々血色がわるくなりますのよ。肺病になる人も澤山御座いますの。
若者。そんな處。やめればいゝぢやありませんか。
少女。さうはいきませんわ。病氣になつてゐながら毎日來て働いてゐる方もあるのよ。入りたては妾のやうにいゝ顏色をしてゐましても見るまに青白くなりますのですつて。妾だつて、もう五六ヶ月たつとあ

なたが見返つても下さらなくなりますよ。きつと。

若者。本當にやめたらどうです。

少女。妾より可哀さうな人がいくらでもありますのよ。

若者。それは本當でしやう。本當すぎるかも知れませんが、今の僕にとつてはそれ等の人はなんでもありませんからね。僕はそれ等の人で生き甲斐を感じることは出來ませんからね。それは話を聞けば同情もします、しかし往來で逢つても別に何とも思ひませんからね。しかし貴方はさうはゆきません。僕は貴方を苦しますのが苦しいのです。始終貴方は喜んでゐてほしいのです。始終笑つてゐてほしいのです。さもないと私が苦しいのです。どうか僕の云ふことを聞いて下さい。

少女。あなたは妾が妾を愛するよりも妾を愛して下さるのね。

若者。えゝそうです。それに不思議はありません。あなたは自分の價値を知らないのです。價値について遠慮してゐらつしやるのです。けれど僕は遠慮する必要はありません。又出來ません。僕はいくら貴女を賞めたつて賞めすぎることは出來ません。貴方がゐらつしやるので僕は生きてゐられるのですから。本當に貴方が居て下さらなかつたらどんなに淋しいでしやう。あなたが親切にして下さるので僕は涙がこぼれます。笑はないで下さい。こんな喜びを僕がこの世でまだ味はうことが出來るとは夢にも思ひませんでした。

少女。そんなにまで思つて戴くのは嬉しゆう御座いますが。

若者。反つてありがた迷惑かも知れませんが。

少女。そんなことは御座いませんの。ですけれど妾は近い内に。

若者。結婚でもなさるのですか。

少女。いゝえ。たゞ妾が死んだらどうなさるかと思ひ

ましたの。
若者。あなたが死ぬ。そんなことはあるわけはありません。死んではいやです。どうか身體(からだ)を大事にして下さい。あなたが死んだら僕はどうしていゝかわかりません。
少女。おや、餌をとられてしまひましたわ。あなたのは。
若者。釣なんかどうだつていゝぢやありませんか。僕と話すのはいやなのですか。
少女。そんなことはありませんの。ですけどお話してゐますと寂しくなりますの。
若者。なぜです。
少女。妾にはね。變な豫言がありますの。人の妻になると三年目に死ぬのですつて。
仙人。(父に)お前はかくれる方がいゝ。
(父かくれる)
若者。そんな、ことはわかるわけはありません。

少女。それでもさうなのですつて。
若者。そんな、そんなことはあるわけはありません。
少女。それでもあの方がさうおつしやいました。
若者。よろしい。あの人の處へ行つて聞いて見ましやう。もしそんなことを云つたら僕はあの人に嘆願します。どうしてもそんなことはないと云ふ返事を聞くまでは僕は承知しません。
少女。あの方は一ぺん云つたことはお變へにはなりませんよ。
若者。それでも、そんな殘酷なことが、あまり殘酷すぎます。
(若者仙人の處へゆく、少女釣竿やびくを持ちあとに従がう)
若者。(丁寧に)一寸お伺ひしたいのですが。
仙人。なにです。
若者。つる子さんはあとどの位生きられるのです。
仙人。わしに仕へてゐればあと五十年、わしの手をはなれて男の手に屬すとそれからあと三年。

若者。それは本當ですか。

仙人。わしの計算にまちがひはない。

若者。(半ば獨白のやうに)あゝ。僕はつる子さんも自分のものにすることは出來ないのか。

仙人。出來ないことはない。たゞその時は三年目に死ぬ。

若者。そんな無法なことが。

仙人。無法か何かわしは知らない。たゞ事實を云ふだけだ。

若者。……

仙人。第一お前の生命(いのち)だつて四五年はむづかしい。

若者。どうしてゞす。

仙人。三四年たつと戰ひが起る。お前が戰ひにゆく。お前の(額をさし)こゝに鐵砲の丸があたる。

若者。あゝ。どうしたらいゝのです。目まいがする。つる子さん。

(若者氣絶する。つる子若者を草の上にねかせ、見守る、父おどろいて顯はれる)

父。息子! どうした。氣をしつかりもつてくれ。

仙人。ほつておけ。安らかに眠らしておけ。

父。(仙人に少し喰つてかゝる氣持で)あなたはなぜあまりに本當のことを云ふのです。知らしてはならないことを云ふのです。あなたのしたことはどんな恐ろしいことか知つてゐますか。自然の許さないことをあなたはしました。

仙人。知らさないで、殺せと云ふのか。わしはお前の息子の顏を見た時、本當のことを云はないではゐられなかつた。お前の息子を戀に醉はしておくのが勿體なかつた。安心するがいゝ、本當のことを知るのでお前の息子は鍛えられるだらう。死ぬことを忘れさせて生かしておかすにはお前の息子は少し進みすぎてゐる。

父。息子の生命をたすけるわけにはゆきませんか。

仙人。たつた一つある。

父。一つでも道があるのですか。洋行させるのですか。

仙人。もう、時が來た。洋行は出來ない。

父。それならば何にですか。

仙人。云はない方がいゝだらう。

父。どうか云つて下さい。どんなことでもいたします。

仙人。きつとか。お前の主義をすてればお前の息子の生命(いのち)はたすかる。

父。主義を捨てれば？

仙人。さうだ。主義をすてれば。

父。あなたは出來ない難題を出して私をいぢめやうとするのですね。

仙人。たゞ本當のことを云ふだけだ。

父。どうして私の主義があの子にむくゐるのです。

仙人。あの子の隊長がお前さんに惡意をもつ。お前の息子と知つてわざと危險な處につかう。一度はたすかる。又危險な處にやられる。二度はたすかる。又危險な處にやられる。三度はたすかる。又危險な處にやられる。四度はたすかり、五度はたすかる。だが八度目か九度目にお前の息子は（額をさし）こゝをやられる。金鵄勳章はお前の息子の胸にかゞやき、人人は不忠者の內より出たる忠義者としてお前の息子をほめるだらう。しかし心ある人はお前の息子のかいた三つの脚本でお前の息子の死をいたむだらう。

父。もし私が自殺したら。

仙人。お前が自殺をする？

父。息子の爲ならば、息子を不合理に殺さないためには。

仙人。お前が自分の主義はまちがつてゐた。と云つてあやまつて自殺するならば、お前の息子の生命(いのち)は助かるかも知れない。だが過失のやうな顏をして死ぬのならばお前の息子の生命はたすからない。

父。あゝ。私は生きてゐるのがいやになつた。

仙人。それなら死ぬがいゝ。

父。死んで息子が助かるならば。自分が息子の死の元

因になるのは耐へられない。

仙人。それなら主義を捨てろ。

父。…‥

仙人。どつちか二つの内の一つをとらなければならない。

父。それがどの位ゐの苦痛かわかりますか。髮の毛が見るまに白くならないのだ不思議だ。

仙人。事實はそんなことに冷淡だ。

父。こんな事實の前に立たなければならないとは思はなかつた。どうしたらいゝのです。

仙人。お前さんの勝手だ。

（父、嘆息をつき、息子のそばによる）

少女。よくおやすみになつてゐます。

父。何も知らずに眠てゐますか。

少女。安らかな眠りを送りました。

父。人間はそんな時に安らかにねむれますか。

少女。藥の力でねむれます。

父。本當にやすらかにねてゐますか。

少女。この息をごらんなさい。

仙人。つる！　お前はもう下にゆく時が來た。

少女。それでも。

仙人。歸れ！

少女。それでも氣になります。

仙人。歸らないか。（仙人杖をとる）

少女。歸ります。歸ります。（地に入る）

父。息子よ。お前は安らかにねむつてゐるのか。いつまでも眠つてゐてくれ。恐ろしい言葉も夢でよかつたと思つてくれ。さうだ夢だ。夢だ。

仙人。夢だと思へるなら思ふがいゝ。たゞ事實はわしの云ふ通りになるだけだ。お前のやうな主義をもつて犧牲者を一人も出さずにすむと思つてゐるのは虫がよすぎる〳〵

（父すゝり泣く、思はず息子の上に泣きふす）

仙人。人間はいくぢがないな。一寸したことによろこ

ひ、一寸したことに泣く。

父。（怒り）何が一寸としたことだ。

仙人。あはゝゝ、お前は人間の生命（いのち）を無上のものと思つてゐないのだらう。他人が何萬戰爭で死んだつてお前はたゞ笑つてゐられるのだらう。そのごく一小部分が我が身の上にふりかゝつたと云つて、そのざまはなんだ。

父。他人の死を息子の死のやうに思へと云ふのか。それならば地上の人間は皆とつくに氣がちがつてゐるはづだ、他人にとつて俺の息子の死は笑ひ話にも價ひしないかも知れない。いゝ氣味だと思ふ人もお前さん許りではあるまい。

仙人。迷つたな。そんなことを云ふのは耻ぢるがいゝ。

（若者、目をあく）

若者。お父さん。

父。おゝ、お前。（二人抱きあひなく）

若者。お父さん。

父。なんだ。

若者。あのことをお聞きになりましたか。

父。聞いた。

若者。私は死ぬのがいやです。死ぬのがいやです。何にもせずに死ぬのはいやです。

父。よくわかつてゐる。よくわかつてゐる。

若者。（つるの居ないのに氣がつき）つる子さんは？

父。下へ行つた。

若者。下へ。私をかうして。

父。下へ行く時が來たのだよ。

若者。時が來た？

父。さうだ時が來たのだよ。

若者。今に時がくると。

父。お前。氣をたしかにしておくれ話したいことがあるのだから。

若者。話したいこと。

父。お前は死ぬ迄に立派な仕事をするのださうだよ。

脚本を三つかくさうだよ。不滅な。

若者。それがなんです。

父。それから。

仙人。あのことは默つてゐろ。

若者。なにです。つる子さんはもう歸つてこないのですか。

仙人。いや、つるはお前さんの妻になる。

若者。（悄く悄くしく）さうして僕もつる子さんも、ぢき死んでしまうのでしやう。僕はつる子さんと結婚はしません。（泣く）（幕）

第二幕

（場處は前と同じ、時はかへてもいゝ。仙人は同じ處に腰かけてゐる。父登場。苦悶の爲におとろへてゐる）

仙人。お前の息子はどうしてゐる。

父。少しは元氣になりました。覺悟が出來て來ました。あなたの云ふことはそろ〳〵本當になり出しました。息子は脚本をかき出しました。兵隊にはとられましたし。戰爭も近い内に始まりさうです。

仙人。まだ急には始まるまい。

父。だが又始まりさうです。

仙人。お前はまだあのことは云ふまいな。

父。まだ云ひません。今日にでも云はうかと思つてゐます。

仙人。云つて何になる。

父。それでも云はないではゐられません。

仙人。お前は決心はついたか。

父。まだつきません。

仙人。決心のつかないことはつまり息子を殺すことになるのだな。

父。それが恐ろしいのです。子供にとつて父の主義の爲に死なゝければならないと云ふのはあまりに慘酷です。主義の爲に自分が死ぬのなら自業自得です。耐えられなくも無理にも耐えなければなりません。

しかし先のながい、有爲な、之から生きたがつてゐる人間を殺すのは慘酷すぎます。息子の身になつたらこの位ゐ馬鹿氣たことはないでしやう。私達は死後の世界を信じません。生きられるだけ生きたいと思つてゐます。まして二十三四で父の主義の爲に死ぬ。そんなことが耐えられることでしやうか。だからと云つて本當のことを噓だと云ひ、噓のことを本當とは云へません。どうしていゝかわかりません。

仙人。嘆願でもして見たらどうだ。

父。誰に。

仙人。お前の息子を死地に逐いやる力をもつ人に。

父。そんなことが出來ますか。大事な息子だから生命（いのち）だけは助けてくれと。聞くわけもありません。

仙人。それなら息子を殺すより仕方がない。

父。……

仙人。主義もまげない。息子も殺さない。さう云ふうまいことは事實が許さない。

父。息子は可哀さうです。何の爲に生れたかわかりません。

仙人。そんな非常識なことを云ふな。お前の一夜の慾望が息子をつくつたまでだ。ある人はお國の爲に死んだと云ふであらう。軍歌につくられるかも知れない。

父。そして招魂社に祭られるのでしやう。しかし戰爭がおこつて見れば、息子は心から戰ひに出る氣になるかも知れません。

仙人。お前はそれをのぞむか。しかし今度の戰爭は未だ國家の存亡に關係する程の戰爭ではない。戰はない方がむしろ未來の爲にも安然な位ゐな戰だ。或はやがて起る大戰爭の遠因になるかも知れない、つまらぬ戰爭だ。

父。その戰爭で死ぬのですか。

仙人。さうだ。寧ろ殺されるのだ。

父。恐ろしい事實ですね。

仙人。ありふれた事實だ。

父。あゝ。恐ろしい。皆はこの恐ろしいことに平氣でゐる。寧ろ勇ましいことに思つてゐる。自分一人が特別に氣のよわい人間のやうな氣さへする。可哀さうなわが子よ。お前は生れなかつた方がよかつたかも知れない。お前はお前に生れる起縁を與へたこの俺を憎んでゐるか。許してくれ。神よ。わが子の心に平和と愛を與へて下さい。

仙人。涙を通しての喜び、お前はさう云ふものを知らないか。

（仙人杖で地をたゝく。少女あらはれる）

仙人。お前の決心はどうだ。

少女。あの方の妻になりたう御座います。

仙人。お前は人妻になれば三年目に死ぬよ。

少女。一年目に死んでも心殘は御座いません。

父。誰の妻になるとおつしやるのですか。

少女。御子息の妻になりたいと思つておりますのです。どうぞ御許し下さい。

父。私の息子の妻になれば死んでも心殘はないとおつしやるのですか。

少女。（恥かしさうに）はい。

父。それ程迄に私の息子のことを思つて下さるのですか。

少女。はい。

父。貴女が。

少女。はい。

父。息子は喜ぶでしやう。

少女。よろこんで下さつたらどんなに嬉しいで御座いましやう。妻の身なんかどうなつてもよろしゆう御座います。

父。あなたは私の娘になつて下さるのですか。

少女。はい。この世におります間。三年の間。

父。あなたはどうしてさう神々しいのです。

少女。涙であらひましたの。

父。涙で。

少女。はい。

父。どうしてこんな優しい顔をしてゐるのです。どうしてから清い顔をしてゐるのです。

仙人。涙の谷を通つたからだ。

父。私はあなたに似た感じのする顔を一度見たことがあります。その子は四つか五つの子でした。恐らくもう生きてはしないでしやう。私はその子を五六年前に歯醫者で見ました。その子はこの世の子らしい顔はしてゐませんでした。私はその子を見て勿體ないやうな氣がして涙が出ました。この子は長が生きはしない、天國に間もなく歸る顏だと思ひました。本當にその子の前に跪づきたい氣がしました。あなたの顔が丁度その通りです。

少女。……

父。息子にあなたのその顔を見せたい。あなたでも二度とそんな顔をすることは出來ないでしやう。

仙人。息子さんはもうくる、お前は矢張りかくれる方がいゝ。

父。かくれます。かくれて祈ります。

（父かくれる、沈默、少女若者の來るのを見守つてゐる。いきなり跪づく）

少女。あの方は限りなく苦しんでゐらつしやいます。どうか妾に慰められる力をお與へ下さい。

（若者の足音聞へる、少女何氣なく立ち上る。若者あらはれる。默つて少女を見る）

少女。寂しくつて？

若者。貴女も苦しんでゐますね。

少女。さう見へて。

若者。あなたは僕の爲に泣いて祈つて下さいましたね。

少女。さう見へて。

若者。僕はもう決心しましたよ。心配しないで下さい。

少女。あなたは妾と一緒に泣くのがおいやなの。別々

に苦しみたいの。

若者。そんなことは云はないで下さい。默つてゐて下さい。僕の心や神經にさわらないで、そつとしておいて下さい。僕はあなたにも逢ひたくなかつた。その顏を見たくなかつた。僕は自分を苦しめて喜ぶあるものに一滴の涙も見せたくないのです。

少女。あなたは自分を苦しめるものを惡魔だと思つてゐらつしやるの。敵の捕虜になつた勇士のやうな氣持で運命に手向はうとなさるの。それが一番勇ましいことだと思つてゐらつしやるの。勇ましいかも知れませんわ。ですが神樣の御心にそれが叶つてゐるでしやうか。妾にはさうは思はれませんわ。

若者。神樣？　もしさう云ふものがあれば僕はきゝたいのです。なぜ僕は二三年の内に死なゝければならないのか。なぜこの世にいろ〱の不合理なことがあるのか。貴女にはわかりますか。

少女。わかりませんわ。ですけど妾なら祈りますわ。泣いて祈りますわ。

若者。僕は祈る對稱をもつてゐません。

少女。それなら妾。かはつて祈つて上げますわ。

若者。いりません。

少女。それならよろしいわ。妾一人で祈りますわ。

若者。それは御勝手です。

少女。なんとでもおつしやるがよろしい。妾は勝手に一人で自分の好きな方の爲に祈るのですから。（跪いて）神樣！

若者。祈るなら默つて祈つて下さい。

少女。（立ち上り少し怒つて）あなたは本當に心からそれを望んでゐらつしやるのですか。妾の心はおわかりならないの。おわかりになつてわざとそんなことを云つて御らんになるの。あなたは妾が誰の爲に祈るか御存知なのでしよ。妾はあなたの深い御心と話がしたくつてお祈りするのですわ。默つてゐて妾の思つてゐることがおわかりになつて。

若者。大概わかつてゐますよ。

少女。もし本當にわかつてゐらつしやるならそんなひねくれた御心は御持ちにならないはづです。

若者。それならば出來るだけ大きな聲を出して祈つて下さい。僕の心が貴女の心のやうにやわらかくなれたら、僕は貴女の前に跪づきますよ。

少女。一生のお願ひですからお祈の間は默つてゐて下さい。

若者。默つてゐます。

少女。ありがたう。本當にありがたう。

（沈默、少女跪づく）

少女。神樣。どうぞ妾の祈りがあの方の御心をやすらかにすることが出來るやうにして下さいまし。どうかあの方の御心をやはらげて下さいまし。あなたにすなほな御心を持つやうにして下さいまし。妾はあの方のお顔のかゞやくことをどんなにか望んでおりましやう。妾は又どんなにあの方が勝利と喜びをもつてあなたの御心に從ふことを望んでおりましやう。あの方の爲に妾はよろこんで苦しみます。あの方があなたと妾をよろこばすことの出來るやうな方にして下さいまし。笑つて妾を抱いてわが妻よ。お前の心はわかつたと云つて下さるやうにして下さいまし。俺の生命(いのち)はながくはない。だが出來るだけいゝことをするよ、まだ二三年はあるのだからね。さうあの方の目に涙をためて笑ひながらおつしやるやうにして下さいまし。さうして二人で生きてゐる間は出來るだけ美しく他人に、あなたに愛を感じられる人間にして下さいまし。

若者。もうよしてくれ、あなたの心はよくわかつた。あなたは僕の妻になつてくれる氣なのですか。

少女。えゝ。

若者。そんなことは僕には出來ません。

少女。なぜ。

若者。あなたの生命を短かくすることを知つてそんな

ことは出來ません。

少女。妾はあなたのおそばをはなれては生きてはゐませんわ。

若者。今はそれが本當でも、今に後悔する時が來ます。

少女。どうしてそれがわかるの？　妾は死ぬのをいやがるかも知れませんわ。ですけどいざとなれば妾、後悔はしませんわ。妾、死を前に見ないと神さまの處へは參れませんわ。神樣の處へゆけばすべてがかゞやきますわ。神樣の處では死の姿は恐ろしいと許りは見へませんわ。それは寂しいこともあるでしよ。ですけどあなたのおそばをはなれて生きてゐるよりはよろしいわ。妾は三年たつたらあなたの妻らしく、おとなしく死にますわ。小さくなつて優しい心を持てるだけ持つて皆に愛されて、皆を愛して、神樣におすがりして死にますわ。その時水仙の花を髮にさしてもらいますわ。妾きつと水仙の咲く時分に死んでよ。妾、あなたの妻として決して耻かしくないやうに死にますわ。

若者。……

少女。いけなくつて。

若者。……

少女。いゝでしよ。妾を妻にするのはおいや。本當のことをおつしやつて頂戴な。

若者。僕には何も云ふ權利はありません。

少女。それなら承知して下さつたのね。ありがたう。

若者。父に相談して見ましやう。

（父顯はれる）

若者。お父さんは聞いてゐらつした。

父。聞いたよ。

若者。どうしたらいゝとお思ひになりますか。

父。俺にもわからないよ。いゝことかわるいことか、だけどかうすることが本當かとも思ふ。

（父、若者と少女の手をとりむすびつける二人我れ知らずかたく手をにぎりあふ。父は二人の手を押へて）

父。わが子よ。生れたことを呪はないでくれ。

若者。お父さん、私は喜んでは死にません。しかし生れたことは呪ひはしません。その點安心して下さい。今の私はせめてあと十年許りは生きたい氣がします。今の私はあまりに何も知りませんし、力もありませんから。しかしどうせ死ぬものなら、死ぬと知つてゐる方がよかつたかも知れません。苦しいことは苦しいのですが。私はこの頃よく十字架にかゝつたあの方のことを思ひます。あの方はどうしてあんなに美しかつたのでしやう。あの方の姿が目に浮びます。あの方は三十三でお死にゝなりました。私は二十三四で死ぬのです。ですけどなげかないで下さい。私は出來るだけ立派に死にます。いざとなつては私は誰よりも死をおとなしく迎へるものでしやう。私は出來るだけ皆を愛します。一緒に死ぬ人々のためにつくします。私の死んだのちにさかへゆく人類を祝します。肉體の苦痛がそれを許してくれるならば。

父。よく云つてくれた。感謝する。（間。涙ぐむ）俺はお前に白狀しなければならないことがある。（二人の手をいたわり押え）二人で互にたよりあつて俺の云ふことを聞いてくれ。

若者。なにです。お父さん。

父。お前に一つ裁判してもらいたいことがあるのだよ。ある國に一人の父があつたのだ。

若者。はい。

父。どんなことがあつてもしまいまで默つて聞いてゐておくれ。

若者。えゝ、どえなつらいことでも默つてきゝます。

父。ある國に一人の父があつたのだ。その父の主義がその國の主義と矛盾してゐたのだ。それでその父は一部の人から嫌はれてゐたのだ。その父にたつた一人の息子があつた。或日父が王樣の前によび出された。そして王樣が云ふのに、お前が天下に向つて自分の主義はまちがつてゐました。私はあんなことを

云つたのを耻ぢてゐます。實際この國の政治家や軍人や新聞記者や教育家や輿論のおつしやることが本當でした。わが國の國民は世界を征服すべき義務がある。この世界は國と國とが爭さう爲に出來てゐる。さう云へばよし。さもなければお前の一人子を敵陣においやつて敵に殺させる。この二つの内のどつちかを選べ。かう王様が云つて白と赤のひもを出して、白を選べばお前の息子はたすかる。赤を選べばお前の息子の生命はないものと思へとおつしやつた。父は迷つた。さうして自殺しやうと思つた。自分の主義を取り消すことはどうしても出來ない。息子を殺すこともどうしても出來ない。王様は父の決心を知つたのだ。主義を改めない前に萬一お前が死ねばお息の息子の生命もない。かう王様は最後のとゞめをさゝれたのだ。父はぼんやり立つてゐた。足がふるへて來た。身體がふるへて來た。今にも卒倒しさうな氣がして來た。王様は云ふのに、今決心がつかなければ一週間の猶豫をやる。それ以上の猶豫は許さない。このひもは持つてゆけさうしてどつちかのひもを一週間後に持つて來い。もしもつて來なければお前の息子の生命はない。父は身體に力がなくなつたやうな氣がして家に歸つて來た。いくら考へても決心がつかなかつた。彼は自分の主義がすてたいのだ。捨てゝも息子が生きてゐてくれゝば自分の以上の仕事をしてくれることはわかり切つてゐると思ふのだ。しかし自分の主義をうそだと云ふことはどうしても云へないのだ。なぜか知らないけれど云へないのだ。さうかと云つて父の主義の爲に殺されることは息子にとつてはあまりに悲慘なことだ。あまりに道理にあはなすぎてゐる。父の顏は日ましにやせた。夜となく晝となく彼の前には白と赤の紐が目についてゐる。お前がもしその父だつたらどつちの紐をとる。

(沈默、急に若者少女の肩に身をよせかけて)

若者。僕ならばどつちもとりません。ほつたらかしておきます。どつちもとることは出來ないぢやありませんか。

父。もしお前が息子だつたら、どつちをのぞむ。

若者。もうそんな話はよしませう。それは私達の場合とは少し話がちがひますから。

父。もしちがはなかつたらどうする。

若者。何とも云ふことは出來ません。父に主義をかへてくれとは云へませんからね。又喜んで死にますとも云へませんからね。そんな不合理なことがと云ひたくは思ひます。しかしもしそれが事實だつたら。その息子に同情します。その父にも同情します。

父。父にも同情してくれるか。息子よ、俺は苦しいのだ。自分の子供は自分のものだと思へる昔の人ならいざ知らず。自分よりも優つた息子の生命（いのち）を實行のともなはない主義の爲に殺さなければならないのかと思ふと耐えられないよ。お前のかいたものはよんだ。お前は生きなければならない人間だ。お前を殺すことは俺には出來ないのだ。親の私情許りではない。そんなことをしてはすまない。

若者。お父さん、何を云つてゐらつしやるのです。私はお父さんの主義の爲に失戀したことはありました。しかし私の生命はあなたの主義に何の關係もありません。

父。もしあつたらどうする。

若者。そんなことはあるわけはありません。

父。それでももしあつたらどうする。

若者。もう何も云はないで下さい。目まいがしさうですから。

父。（仙人の方をふりむき）云ふ方がよろしいか。云はない方がよろしいか。

仙人。云へ。

父。たゞいたづらに苦痛を與へるだけではありませんか。私一人で考ふべきことではありませんか。

仙人。云へ。苦痛はお前さんの息子を鍛えるであらう。

父。しかしあまりに強い苦痛は人を絶望させはしませんか。

仙人。鍛えぬけ。この一撃でお前さんの息子は硬鐵になるであらう。

父。恐ろしい、恐ろしい。この恐ろしい事實の下に人の心がしなびきらないことがあり得やうか。何も知らなかつたらさぞ今時分は幸福だつたらう。

仙人。お前は豕のやうに幸福でありたいのか。鍛えられるのが恐ろしいのか。

父。今の瞬間、もし幸福が得られるならば、さうして何事も忘れることが出來るならば、豕のやうにでも幸福でありたい。さうして三人手をつらねて華かに笑ひたい。幸福の前におのゝきたい。

仙人。云へ。さうしてその上の幸福のあることを知れ。俺の鍛えぬいたつるはその幸福を生むことを知つてゐるであらう。それともお前達は安價な幸福が得たいか。すべての人の幸福のやうに死の神の笑ひにふきとばされる張子の幸福をのぞんでゐるのか。お前達はこの俺に選ばれる資格はないのか、云へ。のこらず云へ。どんな結果をもたらさうとも驚くな。俺には俺の力がある。人間の心が生み出すことの出來る力を俺は見たいのだ。

若者。云つて下さい。お父さん云つて下さい。何んだか聞かないのも怖くなりました。私達はもう知り過ぎました。もう知つたことは忘れることが出來ません。何事も知ることでこの境遇を一瞬間も早く切りぬけなければなりません。この世の生命が短かければ短かいだけに私達は早く死ぬ用意をしなければなりません。死の神に見つめられてゐる死刑囚はどんなに苦しいでしやう。そんな人間にありさうなことを云つて說教する坊主の顏はどんなに又まぬけな顏をしてゐるでせう。云つて下さい。私には自由があります。つるがゐてくれます。一年でも二年でも何

かします。僕は三年以上は生きてゐたくない人間です。

父。あまり健氣なことを云つてくれるな。お前が可愛いくなつて仕方がない。どうしてお前見たやうなものが生れて來たのだ。聞いてくれ息子。いやさはいてくれ息子。お前の云ふことを神樣の聲として聞かう。お前は遠慮のないことを云つてくれ。事實は恐ろしい事實だ。さうして簡單明白な事實だ。あまり馬鹿氣た事實とも云へやう。

若者。早く云つて下さい。お父さん。

父。一言で云へばお前が戰爭で死なゝければならないのも間接には俺の主義の爲ださうだ。

若者。そんなことが。

父。さうだ。理窟にはそんなことがあるわけはない。しかし事實としてはそんなことがあるのださうだ。

い、つる子さん。あなたがもし私をお父さんだと思つてくれるなら私の手をもつてゐて下さい。私も淋しいのです。

若者。お父さん。三人で手をひきましやう。

父。お前も手をくれるか。愚痴はいゝたくない。だが胸の内ははりさけさうだ。お前が戰爭にゆく時、お前の上に無限の權利をもつ人間が、俺に惡意をもつてゐる奴なのださうだ。さうして俺をいぢめる爲にお前を死地に追ひやるのださうだ。なぜそいつが俺に惡意をもつかと云へば矢張り俺の主義を憎むからだ。知りもしないで蛇蝎視するからだ。俺が自分の主義で嫌はれるのはいゝ。だが父のために殺される息子はたまらない。しかし彼等はその不合理な殘忍さを笑つてやつてのける力をもつてゐる。

若者。……

父。どうしたらいゝかわからないのだ。俺はお前の生命のために變節漢になつて、その隊長の前に跪づいて、お前の生命の安全をたのみたい氣さへする。それは言ふ迄もなく私情から許りではないつもりだ。

たゞ或る力がそれを許してくれない。だがお前のことを思ふとすまなくつて仕方がない。お前は何の爲に生れて來たのだ。自分の主義の爲にお前を犧牲にすることは神様も許しはしまい。さうしてお前にとつてはあまりにひどい出來事だ。あゝ目まひがして來た。俺はこのまゝに死にたい氣さへする。（頭を押えてうづくまる）

若者。私には答へられません。私には何がなんだかわからなくなりました。つる子さんあなたにはわかりますか。私にかはつて返事をして下さい。

少女。お父さま。氣をしつかり持つて下さいまし。何もお父さまの罪では御座いません。妾はお父さまの主義がまちがつておると思ひますればどうか變へて下さいと申します。ですが嘘をついて下さい。神に背いたことを云つて下さいとは申すわけには參りませんわ。

若者。それならお前は俺が死んでもいゝと云ふのか。

少女。あなた。そんなものゝ云ひ方をなさるのを耻かしいとはお思ひにならなくつて。妾達があなたを死んでいゝと思ふわけはないぢやありませんか。これでも、それでも、お父さまの主義をかへて下さい、今迄のお仕事をすてゝ下さい、お父さまを愛してゐる方々に裏切りをして下さい、さうして陸軍の大尉か中尉の人の前に跪いて、私は主義をかへます、子供の生命(いのち)はお助け下さい、と云つて下さいとは申しませんわ。勢ひが其處まで來てしまつたのですわ。あなたもお父さまの主義を尊敬してゐらつしやるのでしよ。

若者。それでも、今死ぬのはつらいよ。したいことも多いのだからね。切角生れて來たのだ、死んでもいゝとはいへないよ。

父。尤だ、尤だ。俺はどうしていゝかわからないのだ。

仙人。お前は自分の主義の爲に他人が死ぬのは平氣であつて、自分の子供の死ぬのはそんなに恐ろしい

か。

父。息子を戰死さして自分の手柄のやうに心得る父、そんなもの丶上に呪ひあれ。(間)恐ろしい。恐ろしい。

仙人。お前達はありふれた事實の前におのゝいてゐるな。人間に生れて死に勝てない人間。お前達は死に神をいたる處に見て見ないふりしてゐるな。明日は死なず三年は生きられると云ふことは喜んでいゝことかも知れない。明日死ぬと云はれてもお前達はどうすることも出來ない人間だ。もがくだけもがいても來なければならないものは平氣でくるのだ。この内で一番不幸な人間は誰だか、それを誰が知らう。災ひは何處にでもひかへてゐる。たゞ來る時がまだ來ないだけだ。今度の戰爭は簡單な戰爭だ。だがあとにひかへてゐるものはすべての人を一様におびやかすかも知れない。人類は如何にそれを切りぬけてゆくか。わしの計算でもそれは亂れ勝ちだ。

父。恐ろしい。恐ろしい。

(父、殊に若者は得耐えないで、氣が狂ひさうに髪の毛をかきむしり、頭を押へる。苦しい顔をしてゐる)

少女。(祈る)神様、どうしたらいゝので御座います。妾にお二人の心をお慰めする力をお與へ下さい。

若者。お前は今になつてもまだ神々を呪はないか。

少女。神様は親しいお顔をして、氣の毒な人々だと思つて見てゐらつしやいますわ。

若者。嘘つき。

少女。嘘では御座いません。あなたは誰でも死ぬ人は神を呪ふのがあたりまいだと思つてゐらつしやるの。神様は見てゐらつしやいますわ。人間の喜ぶことも悲しむことも。あなた氣をしつかり持つて頂戴ね。今日はあなたと妾の結婚した日ではありませんか。無理にも笑つて頂戴ね。妾も泣きたくなりましたわ。(涙ぐむ)

若者。よし、お前よく云つてくれた。俺も男だ。運命

の與へる盃を無理にも笑つてのみほして見せるよ。お前の夫だからね。だが恐ろしいよ。お前も俺もぢき死ぬのだからね、勇ましく耐えたいとは思ふのだけれど。笑はないでくれ、さうしてこんな夫をもつことを心細く思はないでくれ。

少女。泣きましやうね。一緒に泣きましやうね。

（少女、若者をいたはりつゝ退場）

父。（仙人に）お前は恐ろしい奴だ。本當に恐ろしい奴だ。俺を氣ちがひにさせないではおかないのだらう。俺は生れた日が呪はしい。俺の妻は仕幸だつた。何も知らない内に死んでしまつた。俺は不幸な奴だと云つて泣いた。俺の妻は俺達の最も幸福な時を見て死んだのだが、俺はもつと生かしてもつと幸福を見せたく思つてゐた。だが今になればあいつは死んで仕幸だつた。俺は死にたい。だがそれは或る力が許さない。俺は神を呪ひはしない。神は何も知らないのだから。だが俺はお前を呪ふ。お前は俺が知つてはいけないことを知らしたから。

仙人。俺と話す力を誰が得た。その人に罪があるのだ。一たい思想家が妻子を持つのは今の世ではまだ少し早やすぎる。

父。恐ろしい、恐ろしい。（沈默、退場）

仙人。俺がもう一つ本當のことを知らしたらあいつ達はどうするだらう。二人の間には男の子が生れる。それが親が死ぬとまもなく死ぬのだと云つたら。だが之だけは默つてゐてやらう。お可憐な二人の顔を見ると、このわしもそれだけは云ひたくなくなる。（幕）

第三幕

（同じ所。月夜曉け方に近く。仙人はいつもの所にだまつてゐる。少女は默つて祈つてゐる。稍々暫らく。少女はからく起きあがり。肺のわるい人のやうにセキをする。靜かに何かに氣を奪はれてゐるやうに歩き廻る）

少女。（獨言）あの方はどうなるのだらう。そして子供

は？　妾は？　妾はどうしたらいゝのだらう。どうしたら皆さんの心が安まるのだらう。妾は本當に寂しい。どうしていゝかわからなくなつてしまつた。戰爭はいよ〳〵始まるらしい。夫は近い内にきつと召集される。そして遠い所に行つてしまう。妾は又病氣になつてしまつた。醫者は入院しろと云ふのだ。妾はもうぢき夫の顏を見られなくなるのだ。お聲もきくことが出來なくなるのだ。子供も私は見られないのだ。そしてお祈りするより仕方がないのだ。妾は病院でおとなしくねてゐるより仕方がないのだ。夫からくる手紙を見ても泣くのだ。お父さんが妾の好きな花をもつて見舞に來てくださつて子供の話を聞かして下さると又泣くのだ。人が居れば私は何も知らない顏をして寂しく微笑むのだ。一人になつたら、泣くのだ。祈るのだ。もうぢき二人は死んでしまうのだ。お父さまもお可哀さうだ。妾達も可哀さうだ。神樣、どうぞ〳〵子供を守つて下さい。なが生をいたしますやうに。幸福に育ちますやうに。あゝ。どうしていゝかわからない。（泣き入る）

（若者登場。少女のそばにゆき優しく）

若者。さあ。泣くのはおよし。ね。笑つておくれ。お前の可愛いゝ顏を見せておくれ。

（少女笑顏を見せる）

若者。お前ね。あの芝居はかき上げたよ。之で豫言にある通り、三つの脚本をかき上げたわけだよ。今さつき不意に目がさめたらね。どうしても書かないではゐられなくなつた。開けないと思つた道がつひに開けてね。思つたよりいゝものになつたよ。よろこんでおくれね。今度は誰もお父さんが手つだつたなぞとは云はないよ。あれが書けない内は一方安心もしてゐたけれど、心配もしてゐたのだよ。書いてゐる時も、書き上げた時も。勝利が得られたやうな氣がしたよ。

少女。お父さまにお見せになつて。

若者。こゝに持つてゐるよ。一ばん先にお前に見てもらいたいのだよ。お前に捧げたいと思つてゐるよ。今度はお前にさゝげられるだけの値打はあると思ふよ。(原稿をつゞるにわたし) 之をお前にわたしておくからおとしてはいけないよ。

少女。(大事にうけとり)えゝ大丈夫ですよ。書けてよう御座いましたね。

若者。あゝ。重荷がおりたやうな氣がしたよ。それだけれど不思議なことがあるよ。

少女。なにですの。

若者。あの。書きあげて興奮して室をあるいてゐたのだよ。久しぶりで神様に感謝したいやうな氣になつてお祈りをしたのだよ。するとね。門をとん〳〵たゝく人があるのだよ。今時分何かと思つてね。自分で出かけて見たのだよ。何か嬉しい音信でもあるのではないか。そんなことさへ思つて雨戸をあけて外に出たのだよ。しかし出るとすぐあれだなと思つたのだよ。その瞬間に足がすくんでしまつた。さうしたら矢張りさうだつたよ。

少女。なにですの。あれつて、

若者。……

少女。(不意におどろき)あゝ、あれ。

若者。さうだよ。

少女。いつ。

若者。今朝の十時に集るのだよ。

少女。今朝?

若者。あゝさうだよ。

少女。あなた。どうしましやう。(若者の胸によつて泣く)

若者。さあ。泣くのはよしておくれ。俺は今日は一日勝利者のやうな氣でゐたいのだからね。俺は勝利者にふさわしいものをかいたのだよ。だから書いたものにふさわしい人間になりたいのだよ。ね、元氣にしておくれ。この頃はお前が一番泣いて許りゐるよ。そんなに泣くと身體にさわるよ。何も考へないでね。

こゝの空氣はよくないよ。お前の身體には。
少女。もうあなたにお世話をやいて戴くのも今日限りですね。
若者。そんな事は云はないでおくれ。本當にいゝ子だから。
少女。妾、こゝにをりますの。あなたもこゝにゐて頂戴ね。我儘の云へるのも今日だけですわね。充分にお顏も見ておきたいわ。
若者。何も云はないでおくれ。ね。俺は勇士なのだからね。俺は與へられた盃を笑つてのみほしたいのだよ。
少女。ごめん遊ばせ。妾も笑ひますわ。お約束ですからね。今日の日の來るのを二人で覺悟してゐましたわね。さうして今日が來たら、お互に泣くのはよさうと申しましたわね。妾見たやうなものを本當に愛して下さいましたわね。
若者。お前こそよくこの俺の妻になつてくれたよ。お前はもつと幸福になれた人間だつた。しかし俺の妻になつたことを後悔しないでおくれ。
少女。勿體ないことを。妾後悔なんかいたしませんわ。もつと樂しくくらせたらと思つたことはありますが。ですがあなたと一緒にゐないと妾は生きられないとはいつでも思つてゐましたわ。二人でよく泣きましたわね。夜通し、泣いたり笑つたりしたこともありますがね。妾死んでもよくつてよと何度も申したことがありましたわね。お別れしても、あなたは妾のことをいつ迄も思つてゐて下さいますわね。妾、死　時もあなたと子供のこと許り思つて死にますわ。
若者。子供は何も知らないね。あの子はきつと利口な子になるよ。あの子が生れるためにも二人は一緒になることは無駄ではなかつた。あんないゝ子は何處さがしたつてゐるはけはない。あの子は今にきつと何かする。

少女。あんまり可愛いゝので、この世においておくのが勿體ないやうな氣もしますわね。

若者。天國と云ふものが本當にあるなら、天國はあの子や、お前の故郷にちがひないよ。

少女。妾達程さびしい人があるでせうか。しつかり手をにぎつて頂戴ね。もうかうやつてゐられるのも暫らくですわね。なぜ二人は別々に死なゝければならないのでせう。二人は一緒に死ぬ爲に生れたやうな人間なのですのね。

若者。本當にわからないことゝ許りだ。あり得ないはずだと思ふことが事實としてどん〳〵起つてくるのだからね。二人はかうやつてゐると、永遠にかうやつてゐるのがどうしたつて本當としか思へないね。死ぬでも別れたくないと思つてゐるね。そのくせ朝になるとお前と俺は別れる仕度をして、涙をかくして軍服と着かへて出かけてゆくね。さうして、向ふへ行くと涙をかくして皆と元氣さうに笑つて話すのだね。死ぬことを冗談のやうに云つてね。俺は大勢と一緒になるから少しは氣がまぎれる。だけどお前は可哀さうだね。

少女。妾、一人で寂しい心を抱いて、泣いたり祈つたりしてゐますわ。さうして貴夫のことや子供のことを思つて、ちよつと笑つても見ますわ。妾はもう寂しいのに、なれてゐますから。自分を可哀さうがるのは妾、生れつきすきなのですからね。それでも、あなたのことをいくら思つても來て戴けないと思ふとどうしていゝかわかりませんわ。お身體を大事にして頂戴ね。さうして妾や子供のことを祈つてゐて頂戴ね。

若者。あゝ、祈つてやるよ、祈らないではゐられないよ。いくら來世を信じることが出來ないでも。どうか私の愛するものを愛して下さい。心に平和を與へて下さい。子供が立派になりますやうに。仕幸せでゐますやうに祈つてやるよ。

少女。本當にね。妾もあなたの爲に祈りますわ。（沈默）ですけれどどうしても別れなければならないと云ふのは不思議ね。妾、何處までもあなたのあとをついてゆきたいわ。何かとお世話をしたいわ。さうして遠くから時々顏を見合はせて笑ひたいわ。さうして子供の顏も見せてあげたいわ。（せきでむせぶ）

若者。（背をたゝきながら）苦しいかい。

少女。いゝえ。もうよくつてよ。

若者。本當に身體を大事にしないといけないよ。一日でも一時間でもなが生きをして、子供のことを考へてやり。俺のことも祈つておくれ。俺は人間はなんの爲に生れたか知らないけれど、何んだか俺達の知らない世間があるやうな氣がして仕方がないよ。お父さんもこの頃神秘な世界があることを感じてゐる。俺達ははなれゝばはなれるほど一緒にゐるやうな氣もするよ。お前の姿はきつと俺の目に浮ぶよ。俺の姿はきつとお前の目に浮ぶよ。それはこの世のものではない。そのくせ可愛いくつて仕方がないものゝやうに思へるよ。俺は軍隊へ行けば反つて群集心理の一種で元氣になるかと思つてゐるよ。人々はある興奮を起させる力をもつてゐるからね。それが美しい、ありがたい涙を流させるやうな事に働かすことが出來ないのはおしいがね。俺はいつかかいたものには笑つて死ぬ人のことがかいてあつたらう。あの人間は決して大膽な男ではなかつた。たゞリズムに其處まで逐ひやられただけだつた。俺もその場になるときつとそんな人間になるよ。いざとなるといやに度胸がすわる質（たち）だからね。

少女。妾だつて、まけずに美しく死にますわ。妾。自分が死ぬことはわりに耐えられるとも思ひますわ。

若者。お互に死ぬ時は、美しく死なうね。出來るだけ。どうせ死ぬのだからね。醜いまねは出來るだけさけたいからね。

少女。本當にね。

若者。俺は何の爲に生きたかわからずに死ぬのだ。それが心殘りだ。他人の命令に從つてしたくないことをして死ぬのだ。それが心殘りだ。だが事實の前には跪づかなければならない。この肉體は自分の思ふ通りにはならないからね。それに俺の心はこの肉體から生れてくるのだからね。お前顏をよく見せておくれ。(兩手に顏をおさへる、少女は若者の肩に手をかけ、見合はす)

(父　登場默つてゐる)

若者。どうしても二人は死なゝければならないらしいね。お前の顏はこの世の顏には勿體ない。この世以外に歸る處があつたら、さうして其處でお前に逢ふことが出來たらどんなに嬉しいだらう。其處ではもう死ぬと云ふことがなくつて、お前とはなれる必要がなかつたら。(間)俺はすべての人の幸福を祝したい氣がして來たよ。皆は幸福にねてゐるだらう。

少女。妾達は土に歸るのでしやうか。

若者。何處へゆくのかわからないね。

少女。あなたとはなれるのはどうしてもいやですわ。

(泣く)

若者。泣くのはおよし。本當に。元氣にしておくれ。俺は何んだか今迄知らない世界が知れて來た氣がするよ。自分だけが本當のものにふれてゐて、他の人は夢でも見てゐるやうな。(父に氣がつく)お父さん。いついらつしたのですか。どうかこゝに來て下さい。

(父默つて近づく)

若者。お父さん。あれが出來あがりましたよ。

父。さうか。それはよかつた。

若者。わりにうまくゆきました。だがつるに先によましてやつて下さい。

父。二人に一緒によんで聞かしてはくれないか。この前のやうに。

若者。私はもうよむ暇がないのです。

父。さつき門をたゝいた人があつたが、あれはなんだつた。

若者。あれが恐れながら待つてゐた使ひだつたのです。今朝の十時にあつまることになつたのです。

父。とう／＼時が來たのか。

若者。えゝ。覺悟してゐた時が來ましたのです。

父。…………

若者。お父さんはこの頃何にもお書きにならないのですね。今度の戰爭についても。

父。かく氣がしないのだよ。

若者。あなたがかくのを待つてゐる人があるではありませんか。

父。何んだか恐ろしいのだよ。

若者。かいて下さい。遠慮なく。それから子供のことをおたのみしますよ。

父。出來るだけのことはする。

若者。私が死にましてもつると一緒に葬むるのはよして下さい。

少女。なにをおつしやるの。

若者。それでも俺の灰だと云つて誰の灰を送られるかわからないものね。

少女。そんな、そんなことを聞くのはいやですは。

若者。そのかはり、私のかいたものをね、私のペンをね、つるの胸にあてゝ葬つて下さい。誰だかわからない人の灰がつるのわきにねてゐるのはいやですからね。

少女。本當に、本當に、なんて、(せき入る)

若者。しつかりおし。苦しいかい。云ひたくないことだけれどね。云はないではゐられないのだ。

少女。妾は又、あなたの灰が誰か他の女のわきにねると思ふとたまりませんわ。

若者。灰に何がのこつてゐる? 灰が何だ俺は何べんもさう思つた。だけどそれを考へるとつらかつた。馬鹿氣てゐる。しかし俺はそれを考へるのが、どうしてかいやだつた。お父さん、笑はないで下さい。

少女。どうしたらいゝでしやう。

若者。皆、同じ目にあふのだ。仕方がない。
少女。本當に寂しいわね。
若者。「さびしい内に何かある」とお父さんは私の齡位ゐの時におかきになりましたね。私には今それが本當にわかりますよ。私達は自分の知らない世界に生きてゐるやうな氣がします。何かこの世がこの世ではないやうな氣がします。
少女。妾はなんだか、いやな氣がして來ましたわ。妾のお墓は一人別にして小さいお墓をたてゝ戴きたいわ。妾は一人であなたのことや子供のことを思つてゐたいわ。本當に妾は一人で寂しくいろ〳〵のことを考へてゐたいのよ。妾にはそれが一番似合ひますわ。
若者。お父さん。私はこの頃になつてお父さんは生きてゐらつしやらなければいけないと思ひましたよ。お父さんは巖のやうに何事にも動じないで生きてゐて下さいね。この世のより處になつて下さいね。この世はなんだか中途に浮いてゐるやうで、足が地面についてゐないやうな氣がします。お父さんは足を地面につけてゐて下さいね。ヨブのやうな人間になつて下さいね。地上の幸福はお父さんに歸つてくるか來ないか知りませんがね。本當に勇ましく生きてゐて下さい。さうしてあの子を立派な人間にして下さい。さうして私達の愛をつたへて、私達を愛してくれるやうにして下さい。私達は何處かへ歸りますけれど、この世に愛はもつてゐるのですからね。つゐはこの世の人間らしい顏をしてゐませんけれど、この世の人間として苦しみ、愛した人間ですからね。私はこの頃、よく皆が可憐になり、可愛いくなるのです。この世に生きてゐる、死なゝければならない人間が。そして皆を祝したい氣になつてゐます。私がそんなことを云つたら皆は生意氣だと云つて笑ふでせう。ですが私は遠くから一人で、つるのやうにこの世の人達を愛し、祝したいのです。私は敵の人

もなるべく生かさうと思つてゐます。憎むわけにはゆきませんから、ですが、ある力には抵抗出來ないで、突喊する時は突喊し、切りあふ時は切りあふかも知れませんが、それは私の氣が狂つた時のことです。おちついてゐる時は憎みはしません。私はさけられない事實の前に從順なのです、その他には今度の戰さにゆく理由はありません。私は殺される瞬間にも笑つてゐたいと思ひます。お祖父さんが死ぬ時、寂しくお笑ひになつたさうですが、私も笑へたら笑ひたいと思ひます。この世はどうしても假りの世としか思へないのです。何かもつと本當のことがある樣な氣がするのです。そんな氣がし出したのはこの頃なのですけれど、隨分苦しんだあとの話ですけど。

父。よく云つてくれた。私はお前のことは忘れない。お前のことを思ふ度に神樣のことを思ふだらう。俺はお前にあやまりたいこと許りなのだ。許してもらひたいこと許りなのだ。だけどお前には俺の心がよくわかつてゐてくれると思ふから何も云はない。生かされて、殺される世の中だ。愛の夢を生み出すものがこの世の勝利者だ。人々は何の爲に何をしてゐるか知らない。たゞ勢ひにまきこまれてゐるのだ。俺も何も知つてはゐない。なるべく本當のことを見たいと思つて生きてゐた許りだ。そして恐ろしい本當のことを見たのだ。それは夢としか思へないことだ。目がさめたら俺達はどんな世界に入つてゐるかわからない氣もする。

若者。すべてがあまり偶然ですね。あの月だつて、偶然に出來たのですね。この地球だつて、星だつて、太陽だつて。いかにも出來てしまつたら、あるべき所にあるやうな顏をしてゐますがね。この木だつて、この草だつて、偶然らしい顏はしてはゐませんね。お父さんだつて、鶴だつて、私だつてこの世に生きたのが偶然だとは思つてゐませんね。そのくせ、永遠の前には皆消えてしまふのですね、なかつたのが

あたりまへの様に。どうしてそれが本當なことなのでせう。私達が死ぬのを恐れるのも、愛するものゝ別れるのを悲しむのも、たゞさうつくられてゐるからですね。引きさく力さへ强ければ私達はどうすることも出來ないのですね。笑つても泣いても、しがみついても。私はどうしていゝかわかりません。この世のものと云ふものは何にもないのですね。さう思ふとへんな氣がして本當に夢に夢見てゐるやうな氣がします。肉體だけはこの世に屬してゐるやうな氣がしますがね。その肉體から生れてゐるものは花の香りのやうに、日の光りのやうに、何處かへとび出したがつてをりますね。鶴は何も知りませんが、鶴の顏を見ると、何かこの世でないものがあるやうな氣がして、それにあこがれたい氣がしてくるのです。私は泣きもします、未練も起します。命が惜しいといつて泣きもします。寂しいと言つて泣きもします。苦しいと云つてもだえもしませう。ですけど出來るだけ美しく生きやうとは心がけます。それが私達にゆるされてゐるたゞ一つのことですからね。三人とも出來るだけ耐えて、出來るだけ立派に生きませうね。(間)あの子はきつといゝ子になりますよ。私は出來たら、草葉のかげからあの子を守護してやりますよ。(寂しく微笑む)

少女。妾も出來たら守護しますわ。

若者。私は守護の出來ないものとは思ひません。

少女。妾出來たらあなたも守護しますわ。

若者。お父さんの仕事を助けてあげますよ。

少女。妾も。出來ましたら、死んで二人してお父さまの仕事をなさるのを後からのぞきこむことが出來たらどんなにいゝでせう。

若者。二人であの子の笑ふ顏を見たり、お父さんの仕事を見たりして、顏を見合せて喜ぶことが出來るやうな氣もするね。

少女。その時も寂しいでせうね。あゝ鶴の聲がしまし

たね。だん／＼晩方になりますわね。東の方が白んで來ましたわね。もうかうやつていつまでもはなれたくありませんわ。妾どうしてもあなたを戰爭にやるのはいやです。どうしてもはなれるのはいやです。さう云つて泣きたいやうな氣がしますわ。

若者。本當に白んで來た。お前本當に身體を大事にしておくれよ。お父さんもどうぞ身體を大事にして下さい。お前お父さんの氣をつけてお上げ。お父さんもどうか、つるに力をつけてやつて下さい。私は別に云つておきたいことはありません。皆、わかつてゐることと許りですから。私のかいたものはなるべく早く本にして下さいね。もしよかつたら私の生きてゐる内に、そして鶴が見られる内に舞臺にのせるやうにして下さい。今度のは可なりものになつてゐると思ひますから。

父。あゝ、出來るだけ骨を折つて見る。出來たらお前のかいたものを三つ、一度にやらすやうにたのんで見る。

若者。お前はそれを見ておくれ。

少女。妾、見れば始めからしまひまで貴夫のことを思つて泣きますわ。きつと。

若者。泣いておくれ。ね。俺の仕事は皆お前にさゝげるからね。二人の生命は短かゝつた、だけど二人は深い世界をおのゝきながら見た。俺はそれを不幸だと許りは思つてゐない。多くの人が呑氣に笑つてゐる時に、二人は悲しさうにうちくだかれて泣いた。だけど他の人の知らない世界を知つたね。俺にとつてはそれは無意味ではなかつた。、つる俺はお前に感謝してゐる。

少女。そんなことは云ふものではありません。

若者。俺の心はよくわかつてゐるね。

少女。わかつてゐます。妾の心もわかつて下さるはね。

若者。わかつてゐる。

少女。妾は手を膝においてねながら死のくるのを待つ

てゐるのね。貴夫は苦勞して疲れて饒舌つて、笑つて、歩いて、走けて、死のくるのにぶつかつていらつしやるのね。

若者。段々あかるくなつた。お父さん。元氣にして下さいよ。お父さんのお顏色が一番わるくつてよ。

父。安心しておくれ。たゞ一寸頭痛がするのだ。

若者。それはいけませんね。あとで冷しておあげ。

父。いやいゝよ。それよりつる、お前は身體を大事にしないといけないよ。

少女。妾。あつぎしてゐますの。

若者。つる！ さつきわたした原稿をおくれ。

少女。はい

若者。かいた處を少しよみますから聞いて下さい。

父。………

少女。えゝ。

若者。(原稿をよむ)「お前はよろこんでその酒をのんだな。お前を妻に遇はしてやると俺は云つた。さうして二人の生命を助けてやると云つた。しかしそれはお前が平氣な顏をして死ぬのは何んでもないと云ふ面をしてゐるのが憎かつたからだ。生かすと云つたらお前は恥も外聞も忘れてよろこぶだらうと思つたからだ。果してお前は見憎い程よろこんだ。お前は感謝のあまり跪づいた。さうして平身低頭した。さうして俺がやつた盃をのみほした。お前は酒を一滴ものまない男だと云ふことは俺は知つてゐる。だがその盃の内に何が入つてゐたかお前は知つてゐるか。その内にはソクラテスがのまされたと云ふ毒藥が入つてゐたのだ。そしてお前の妻は少し前にそれをのんで、もう今はこの世にはゐないのだ。お前の顏色は變つたな。人々、見てやれ、この男の顏を。酒をついでくれ。(酒をのむ)あはゝお前の妻は笑つて死んだ。怖ろしくないか。と俺が聞いたら「妾はあの方の妻です」と云つた。何かことづてはないかと云つたら、靜かに笑つて死んだと云つて下さいと

云つた。顔色は青白かつた。手はふるへてゐた。だがさすがに美しく死んだ。お前の妻は今お前が立つてゐる所に立つてゐた。お前が今のんだ盃から同じ毒藥をのんだ。俺達は皆その時もこの通りこゝにゐた。今晩はこゝで祝宴をひらくつもりだ。我等には生がある。喜びがある。お前には死があるばかりだ。早く用意の床をもつて來い。この男が今に死んで橫たはる床を。お前の妻の死骸は隣りの室においてある。お前は戰ひに出てから二年の間、一日も妻を見なかつたさうだな。俺はお前の妻にお前が隣りの室に生きてゐることを知らせてやつた。(美しき床もち運ばれる) そのお前が生きてゐた室にお前の妻は橫つてゐる。今日素裸體にして海のなかにたゝきこむ心算だ。」(城主、盃をとつて敵將に投げつける敵將よける、人々立ちあがる)「さわぐな。俺はこの男を狂ひ死にさせる。俺は今日の日を夢みてゐた。その内に今の場があつた。すべては俺の思ふ通りになるのだ。」見ろ、この男のくやしさうな顔を。かう云ふ顔はめつたには見られぬ顏だ。畫家よ。かいておけ。瘠せ我慢をしてゐるこの男の顏を。又酒をついでくれ。我愛するものよ。こゝに來い。この俺の膝の上にこしかけよ。お前はさぞ滿足だらう。またと見られないものを見ることが出來るのだからね」。「本當に面白う御座いました。この方の奧さんの時も面白う御座いました。妾達がね物語りしてゐました通りにすべてことが參りましたわね。默つていろ〱の顏をして見せてくれるのが何よりも面白うございますわね。この人はきつといつまでも默つてをりますわね。」「あはゝゝさつき跪いた時の嬉しさうな顏と今の顏とは面白い對象だね。さつきのざまでこの男の信用はすつかりなくなつてしまつた。今のこの男は少しは感心な所もあるやうに見えるがね。この男に今云つたことはうそだと云つたらどうするだらう。氣が狂ふにちがひないね。實はお前ののんだ酒

には毒が入つてゐなかつたのだ。さうしてお前の妻は生きてゐるのだと云つたら」。「本當にね。さう云つて御らんあそばせ。きつと醜い程よろこびますよ」「あはゝゝ、この男はまだ死ぬと思つてゐるのだ。まだ妻が死んでゐると思つてゐるのだ」。「本當に、面白う御座いますね」「本當にお前の妻は生きてゐるのだ」「本當はさつき死んだのですよ」「お前嘘つくものではない」「あなたこそ嘘をつくのは可哀さうよ」「どつちなのだ。本當のことを知らせてくれ」「本當は生きてゐる」「本當は生きてゐらつしやるの」「本當のことを云つてくれ」「本當に生きてゐるのだ」「神にかけて生きてゐるか」「惡魔にかけて生きてゐる」「どうか冗談を云はないでくれ」「本當のことが知りたいか」「生きてゐるのか」「本當のことが知りたいか」「生きてゐるのか」「跪づけ。さうしたら敎へてやる」「生かしておいてくれたら跪く」「跪づけ、敎へてやる」「……」「お前は生きてゐると思ふか、死んでゐると思ふか」「俺は知らない」「つれてこい」(跪き)「あゝ生かしておいてくれたのか。本當に生かしておいてくれたのか。(城主の妻つれてこられる。妻、夫を見てかけよる)「あなたは生きてゐらつしたの」「お前は生きてゐてくれたか」(敵將立ち上り)「二人をひきさけ。さうして二人を別の室につれてゆけ、さうして直ちにぶし殺せ。さあ、皆あつちへ行かう」

(城主、敵將の處へ走けよらうとしてさまたげられる)「矢張り殺すのか。(間)殺せ、殺せ、殺せ、妻笑つて死なうね。」「はい笑つて死にますわ」

少女。隨分ひどいものをおかきになつたのね。

若者。まださきがあるのだよ。

少女。どんな?

若者。それから二人が殺されて、亡靈になつて二人が暗のなかで出逢ふのだよ。「お前か」「あなたですか」「お前も死んだのか」「あなたもお殺されになつたの」胸に刃をつゝこまれる時はあり得ない程の恐怖を感

じた。だがさゝれてしまつたら。今迄のことが皆夢のやうな氣がした」「妾も」「死を恐れてゐたのがおかしい氣がする」「妾も」「もう恨みも憎みもなにもない」「妾も」「平和があるばかりだ」「本當に」「こんな世界に入るのがなぜこわかつたのだらう。今迄の自分が不思議な氣がする。」「あすこに野原がありますわ」「あるね」「妾、あすこで眠りたいわ」「一緒にねやうね」「はい」「こんな平和がくるとは思はなかつた」「今迄」のことを思ふと變ね、幻の世界にゐたやうね」「本當だ。さあ寢やうね」「こんな氣持のいゝことは始めてゞすは」「泣いたりわらつたりしたことが子供らしいね」「本當に、だん／＼氣持ちよく氣が遠くなりますわ」「それなら平和のやうね」「あなたも」この時、人が來、戸をあける、朝日がさしこむと二人が死んで横つてゐる。「罪のない顏してねてやがる」其處へ敵將が醉つて女の肩によつてやつてくる。

少女。本當に死んでしまへば今日のことなんか夢のやうですわね。

若者。夢よりも、もつとまぬけなものだらう。

少女。なんだか變な氣がしますわね。

若者。何が。

少女。生きてゐることが、そして死ぬことが。

若者。お前と一緒になつた事も、あの子が生れた事も。

少女。何もかもわかりませんわね。ですけれどあなたにはなれなければなりませんのね。あなたにはなれてこの世に生きるのは妾には出來ませんわ。

若者。そんなことを云ふものではない。そんなことを云ふのは子供にたいしてもすまないよ。

少女。子供はどうしてゐるでせう。あの子はきつと幸福にくらしますわね。祈つてやりませうね。

（若者、少女跪づき祈る。父は立ちながら誰にも氣づかないやうに祈る。）

若者。それならそろ／＼仕度をしやうね。

少女。いよ／＼來ましたのね。恐れてゐたことが。

（二人いたわりながら退場しやうとする。父あとを見立ちながら男泣きに泣く。仙人、沈默）幕（一五、八、一五）

守護神

上司小劍

一

上野から神戸行の汽車に乘つた時、小池壯吉は變な氣がした。外には驟雨がじやあ〳〵と降り注いで、紫に光る驛のアーク燈は、ぼんやりと袋にでも包まれたやうに見えてゐた。

旅愁といふのでもあらうか、一種の不安が前途に懸つてゐるやうに思はれて、いつそ此處から飛び降りて家へ歸つたらばなぞと、鶯谷のあたりを駛つてゐる時、さう思つた。家では今頃子供たちが、夕飯後の卓上で、書生を相手に、きしやごでお彈きをしてゐるであらう。季の子は碌に出來もしない小いさな指で、姉や兄の仲間に入れて呉れとせがんで、散々ッぱら駄々を捏ねて、守り役の書生を困らした揚句ふんぞり返つて母の膝を枕に眠りかゝつてゐるであらう。

汽車が電光の如くに田端驛を通過する時、宛も其處を發車した電車が、自分の家の

方に向つて汽車と競走する風に駛つた。薄暗い汽車の車室に比べて、電車は龍宮城を曳き出したやうに明るかつた。雨中の暗に浮び出た月宮殿とも思はれた。乘つてゐる派手な浴衣の娘の顔は乙姫とも見られた。若い女たちの多くを乘せてゐる電車と並んで汽車の車室は切り下げ髮の老婆一人の外に女氣はなかつた。ごほん／＼と咳をしながら、皺だらけの顔を顰めて太い煙管で煙草を吸つてゐる狀は、これでも女の一種かとさへ思はれた。

この汽車からあの電車へ、ぱつと飛び移りたい。…………さうして家へ歸りたい、と思つた時、電車は切り崩しかけた高い崖の鼻を廻つて、流星の如く淡い光りの尾を殘しつゝ、其の鮮やかな姿を消した。

「今度の旅行は幸先がわるい。…………」

今日の午餐の後に、下女を八百屋へつかはして、女の手には提げきれないほどの眞ん圓い大きな西瓜を取らして、暫く井戸の中で冷やした後に切り裂いてみると、見かけ仆しで、かす／＼と不味いものであつた。これではならぬと、今度は書生を五丁も先きの坂上の水菓子屋へ走らし、淺黃に濃綠の縞のある細長い西洋西瓜を取らして、冷やしもせず直ぐに裂いてみると、これはまだ熟し切らない、甘味の乏しいものであつた。

「今度の旅行は幸先がわるい。」

この時に妻が斯う言つたのである。

「馬鹿々々しい、西瓜を二つも無駄にして、一圓近くはするでせう。…………月末に私の方から

は拂ひませんよ。」と、妻は取り亂された西瓜の殘骸を睨みながら、またこんなことを言つた。

『私の旅行は、眞個に西瓜の判斷の如く、幸先がわるいのであらうか。』

壯吉は斯う思つて薄暗い車室の電燈に集ふて來る上野の蚊や、日暮里の蛾や、田端王寺の名の知れぬ火取蟲やの群りを寂しい、涙ぐまれるやうな心持ちで見てゐた。

それでも、汽車が赤羽を出て、荒川を渡り、大宮に近づく頃になると、總べてを忘れて、稍旅らしい心になつた。

若い妻や幼兒の顏は、胸の鏡からだん〳〵影が薄くなつて、九ヶ月ぶりに京都で密び會ふ筈のお光の顏が追々にはつきりと映つて來た。

二

輕井澤で七十五度を示してゐた車室内の寒暖計は、直江津で八十度に騰り、糸魚川では八十五度、富山では八十八度、金澤では九十度とだん〳〵高くなつて、町を見下ろす古城の上に在るやうな敦賀の驛に停つた時は九十八度を示してゐた。

プラットフォームへ降りると山嵐の氣を含んだ冷たい風が顏を撫でゝ、石の露臺に噴き出してゐる淸水も見るからに凉しい。溫度は車室に比べて確かに十度近くは低いらしく、じめ〳〵と肌の襦袢を霑してゐた汗の粒も、頓に消え失せた。

汽車が北を向いて駛つてゐる中は、淡い旅愁と、家を懷ふ里心とに、頭の中へ雲霧がかゝつたやうであつたが、汽車の頭が西北に向ひ、それから正西に向つたと思はるゝ頃には、年は若くとも出汁殼のや

うになつた妻や、父を見ると、兎もすれば眼を反むけて逃げ出しさうにする子供たちのことは、おひおひに忘れて行つた。さうして、汽車が南の方京阪を目ざして眞一文字に馳るやうになると、壯吉の心を捕へるものは、もう幼馴染のお光の外にはなかつた。

妻と言つても、それはたゞ十年あまり前から知り合ひになつた人間——女性——に過ぎぬ。お光は生れたまゝの嬰兒の時から知つてゐる。彼女が十二三の頃には、椿の花を赤い糸に通して、百萬遍を繰る眞似をして遊んでやりなぞした。

お光とて、振分髮の頃から、其のまゝ一所にゐて、日比谷大神宮の神職や裁判所の役人を引き合ひに持ち出し、道徳家や法律家を名づけ親にした妻といふものにしてゐたら、今頃は、二三人も子を生んで滓になつてゐたであらう。出汁殼以下の豆腐滓みたいになつてゐたかも知れぬ。

牽牛織女さまのやうに一年振りか、或は一年半振り、短くて八九ヶ月ぶりに一度づゝ會つてゐるのでは、懷かし味が層を造つて、愛の塊りともいふべきものが出來る——。

壯吉は出たらめに、こんなことを考へてゐると、敦賀驛の發車時刻に促されて、涼しい露臺から、西日に照り付けられる、溫室に似た九十八度のシートの上へ追ひ込まれた。

汽車は、南へ、南へと、お光に近づいて行く。米原で東海道線に合した時は、漸く外れてゐたものが巧く箝まつたやうな氣がした。

「旅行といふと、毎でも新橋か品川から汽車に乘るんですね…………一度くらゐは上野からも乘つて、北の方へ行つて見たらいゝぢやありませんか。…………あなたは磁石の劍と反對に

南ばかり向きたがるんですね。」と、東京に生れて東京を離れることの嫌ひな妻は、旅行好きの壯吉に、厭味のやうな冷かしのやうなことを言つた。

「よし、今度は上野から北を向いて出かけてやる。」

斯う言つて、壯吉は今度の旅立ちをしたのである。妻は毎も壯吉の旅立ちの度にするやうな不機嫌な顏を止めてにこ〳〵しながら門口まで壯吉の乘つた人車を見送りに出た。

北を向いて出た壯吉の頭は、輕井澤から妻に氣休めの葉書を出して、直江津から、くるりと南を向いて了つた。

米原から石山まで、夕陽から薄暮へかけて、琵琶の湖畔を駛る間は、汽車が殊に遲いやうに思はれた。同乘の客は、上野このかたいつも十人内外であるが、入れ代り立ち代はつて、下らない男女老弱の眼鼻が、始終壯吉の前や横にちらついてゐた。石山で壯吉の下車した時は、がらくたは矢張りがらくたなりに、上野を出た時のとは、顏がすつかり違つてゐた。便所に沿ふた隅の方に長くなつて寢てばかりゐる白ヅボンに襯衣の男、それが上野から其のまゝの男ではないかとも思はれた。

三

石山へは、石山驛から更らに電車に乘らなければならなかつた。電車の終點からはまた、四隅に紅提灯を吊した屋形船に乘つた。船はところ〴〵に小魚の飛び跳ねる廣い川に浮んで、宿屋の庭先きへと漕がれて行く。

「あれが×屋です。あこへ着けまへう。」と、舟子の指さす彼方の高殿にも、紅提灯が懸け聯ねられ、

女どもの動くのが、ちら〳〵見えた。水を渡つて來る涼しい風には、早や秋の匂ひが豊かであつた。斯うして獨り靜かな、廣い水の上に浮び出た時、壯吉は家のことも、妻子のことも、またお光のことも、皆忘れ果てゝ、天涯の孤客といふ心持ちが、寂しく湧き出して來た。

眞近かの大きな湖水から來る水は、瀬田川となつて、末は宇治川と緩く流れてゐる。舟子の押す櫓の先きには輕く小波を立てゝ、底の知れぬほど深さうな水へ、紅をたらしてこんだやうに、赤い提灯の形がくづれて映つた。湖水の方はと振り返へると、水光天に接して、星影まばらに、朽ちかけたらしい瀬田の唐橋の長い姿は、黒い虹の如く、とでも、昔の詩人なら嘘を言ひさうに茫と見えてゐた。

『×屋はアん、お客さんだッせえ。』と、舟子の呼ぶ濁聲に應じて、『お出でやす』と、しやくれた顏の色白の、身長の高い女中が汀に立つて壯吉を迎へた。

東と北とを水に取り卷かれた、高欄附きの二階座敷に通つて、大迂廻の汽車中の煤と汗とに汚れた着物を脱ぎ棄て、柳の糸を染め出した廣袖の浴衣を引ッかけ、これも柳の糸に螢の畫をかいた團扇を手にしつゝ、高欄に凭つて立つと、自分を乘せて來た紅提灯の舟は、黒い水の上を滑るやうに歸つて行つた。

對岸には少しばかり青田らしいものがあつて、其の先きに低い山が長く墨繪の如くに横はつてゐる。高欄の直ぐ下には、夏の蟲けらを燒く篝火が、古風な器の中で閑雅に、おとなしく燃えてゐる。

『螢の名所も此頃は蚊の名所どす。……お月さんも出やはれしまへん、舊の二十七日か八日どすよつてなア、あんたはん。』と、しやくれ顏の女中は、膳を運んで來て、笑ひ〳〵言つた。

ひがひや鮒や蜆やで調理した夕飯を取つてから、壯吉はまたぼんやりと川の面を眺めてゐると、遙か北の湖水の方角から、美しい火の玉のやうなものが流れて來た。稍近づくと、それは花やかに裝つた屋臺船で、賑やかな絃歌を載せて、眩しく麗はしい姿を水に浸しつゝ、だん／＼に漕ぎ寄せて來る。

「旦那はん、來て御覽なはれ、舞妓はんだッせ。……早う降りて來て御覽じやへえ。」と、女中が階子段の中ほどから、急がし氣に呼び立てたので、壯吉もつい釣り込まれて、急ぎ足に階子段を下りて行くと、祇園の舞妓たちは、下座敷になだれ込んで、京紅の濃い、蕾のやうな口から、きい／＼とさま／＼のことを囀つた。

「おゝしんど、今朝から大津へ來てまんのやがな。」

「船にばつかり乘つてゝ、しんどいて、おゝ可笑し。あんたしんどおすなら、此處から人車でお去にやすいな。」

「人車で去ねえしまへんがな。」

「そんなことおへんやろ。なア姐はん。」

「あんたはん、一寸此方お向きやすいな。せいだいうかめてばつかりおゐやすや。」

鶩の雛を放し飼ひにしたやうな彼女たちは、臆面もなく、今までに一度も見たことのない壯吉の膝にまで凭りかゝつて、男の大きな扇子を取りあげ、ばた／＼煽ぎなぞした。

罪もなく戲れ狂ふて、二階にまで上り込んだりしてゐた鶩の雛は、親鳥とも見ゆる肥えた身長低の女將らしい人が一令すると、大きな羽がひの下に潛り込むやうにして直ぐさま元の屋臺船に乘り込んだ。

船の上で、けろりかんとしてゐた二人の船頭は、ぬうッと立ち上つて、無愛嬌な手つきで二挺櫓を押し始めた。

「さいなら。」

「御機嫌さんで。」

「また來まッせ。……待つておいでやすいな。」

鶯の雛は、船の上から小ひさな口を開けて、こんなことを、とり〴〵に言ひ〴〵した。舞妓と言へば極彩色の友染姿ばかり見て來た壯吉は、この夜の彼女たちが、さッぱりとした浴衣がけで一樣に赤い前垂をしてゐるのが、格別に美しくて可愛らしいと思つた、細い背中に幅廣く肩縫ひあげを取つた優しい浴衣姿の群から、お光の幼顏のやうなのもゐることかと一人〳〵に見廻はしたけれど、細面や瓜實顏ばかりで、圓い顏のは見當らなかつた。

「りきうおじやるなら、わらぢはいておじやれ、りきう、いしはら、こいしはら。……………………」

屋臺船の上から聞こえるのは、こんな唄ばかりであつた。

壯吉は疲れた足に宿の庭下駄を引き摺りつゝ、だん〳〵に遠ざかつて行く屋臺船の輝きを追ひ慕ふやうにして、岸づたひに二三丁も歩いて行つた。

四

其の翌日は、壯吉がお光と京都で密び會ふ約束の日であつた。前の夜は更けるほど曇つて來て、小糠

のやうな雨に宿の廂を濡らしたが、この朝は、からりと晴れて、碧い水も、緑の小山も、諸共に旭を迎へて笑ふてゐるやうであつた。

酒樓を兼ねた宿屋は、女どもの起き出づるのが遲くて、九時半に漸く、せか〳〵して朝飯を取つた壯吉は、黑縞の上布に焦茶色へ飛び模樣のある兵兒帶といふ輕裝で、麥稈帽子を頂き、白扇を一本持つて宿の後庭から小舟で水の上へ浮び出た。舟の四隅には矢張り紅提灯がさがつてゐる。河の上からの眺めは、夜のやうに美しくないけれど、家も庭も道も丘も山も、皆裾を碧い水に浸しつゝ浮き出してゐる風に見える光景は、白晝の方がよほど鮮かで、水郷といふ趣きが深かつた。こゝにゴンドラでも浮べて見たならばと、壯吉は獨り考へてゐた。帶に卷き付けた細い鎖を摘んで時計を引き出して見ると、石山發下り列車の時刻にはまだ一時間の餘もある。先刻のせか〳〵した氣持ちは、宿の一室へ忘れて來たやうに、壯吉は舟子にさう言つて、ゆる〳〵と舟を操らせつゝ、心ゆくまでこの水郷の趣きを味はふとした。

『旦那深かうおッせ。二十四五尺はおすよつてなア。』と舟子は櫓を押しながら言つた。白塗りの船腹に『浪花丸』と書いた畫舫のやうな小蒸汽船が、南から北へ白い波を揚げつゝ、膳所の方へと駛り去つた。

小舟を棄てゝ電車、電車から汽車と、京の七條へ辿り着いたのは、正午を少し過ぎた頃であつた。大きな蜻蛉のやうな煽風機の舞つてゐる待合室に入つて、暫く突ッ立つてゐると、上りのプラットフォームにも列車が着て、眞ん中ほどの二等室から唯一人出た、すらりとして束髮の女は遠目ながら何うもお光ら

しかつた。で壯吉は直ぐに表の方へ出て、獸の口から水を吐いてゐる柱の側に待つてゐると、長い三和土の上を小走りに寂しく微笑んで來たのは、案の定お光であつた。兎も角もと二人は人氣のない待合室へ入つた。

投げかけるやうに、長椅子の上へ腰をおろしたお光は、默つて、ほつれた束髮を撫であげてゐた。三十に近い上方の女としては、派手過ぎる大名縞の明石を着て、濃鼠と薄茶とを、歌舞伎座の引幕のやうな太い縞にした紗のコートを羽織つてゐる。足は去年の冬和歌の浦を二人で彷徨ふた時と同じのゴム草履である。

「よく來られたね。」

壯吉はこの女に忍び會ふ毎に、必ず最初に發する言葉を、今日もまた言つた。

「えゝ。」と、お光は沈んだ風で、眼をくしや〱さしながら、膝の上に置いた袱紗包みの結び目を弄つてゐる。明石の裾の方から薄く透いて見える白地の絽縮緬に青紅葉と花びらとを飛ばして置いた長襦袢が膝の上の袱紗と同じであるのを、壯吉はつく〲見入つてゐた。

「今日は直ぐ歸らなけれや、叱られるだらう。」

これも二人が忍び會ふ毎に、壯吉のよく言ふ言葉であつた。すると、これまでは、東光院の門前の時でも、和歌の浦の折でも、お光の答へは、

「いゝえ、明日お晝までに去にさへしたら、よろしおまんね。」といふのであつたが、今日はそれと違つて、

「えゝ直きに去なんなりまへん。」と、本意ない顔をして言つた。

「夕方までに歸りさへすれやいゝだらう。此處に斯うしてゐても仕様がないから、何處かへ行つて見やう。」と、壯吉は態と元氣よく立ち上つた。

「えゝ。」と、お光は力なげに點頭いて、悄然と立つた。

稍離れて二人は、電車の方へ、新らしく小砂利を敷いた廣場を歩いて行つた。蝶の刺繍をした白い洋傘の下に、心持ち窶れながらも、お光の片頰の圓い顏は若々しく見えた。何うしても、田舍の小料理屋の後家ではなくて、都會の派手好みの野暮な紳士の令夫人らしいと、壯吉は毎も思ふことをまた思つた。さうして、令夫人に圍ひ女を加へて二で除した上へ、何處となく垢拔けのせぬ田舍臭い粉を撒りかけたやうだとも思つた。この爪先きまでは垢拔けのしない、何處となく汚れてゐるところに、言ふに言はれぬ味のあるのが、壯吉の毎度〳〵遙々とこの女に引き付けられる一點であるらしくも見えた。幼馴染といふ別樣の强い操り糸はあるにしても。…………………………

「西京て、何年前に來たんか知れへん、十三詣りに阿母アはんと一所に來て、それから十八の年に來たぎりだす。」

電車の窓から、軒の低い、暑さうな町を見やりながら、お光は、片頰を深く〳〵して、この時初めて稍長い言葉を吐いた。

「十八の年には誰れと一緒に來たの。」

お光と同じ土地に生れて、一所に育つた壯吉ではあるが、お光の十四になつた春から、東京と田舍と

に別れ住んで、二十四の年増盛りの秋に、幼馴染の深い縁がまた結び付いて、河内の國のある宿で密び會ふまで、十年の間にお光は何をしてゐたか壯吉は薄々よりそれを知らなかつた。

『嫌ひ。…………………あんなこと言やはる。』と、お光は娘らしう顔を赧くして、聞えぬほどの小言で言つた。

十七の年に貰つた聟養子に女の兒を一人生まされて、其の兒を置土産に聟養子を離縁したのも、この十年の間である。郡參事會員とかをする土臭い旦那の世話になつて、母と子と孫と三人の、衰へかけた大きな家が、三人の女中にも暇を出さずに、今も安々とやつて行かれるやうに、お光が細い腕を揮つたのは、四五年このかたのことであらうか、など、壯吉は、自分の膝に並んだお光の細い膝を見詰めつゝ、頻りに考へてゐた。

がさ〳〵と荒い感じのする上京の廣い通りの曲り角で電車を降りて、二人は嵐山へ行く別の電車に乘つた。壬生、太秦などを通つて、洛外の青田の、中の涼風を突き破りつゝ、電車は嵐山の裾に近い、疎らな林の間に停つた。

また風に吹き亂された束髪を撫であげてから、お光は綺麗な砂地の上をさく〳〵と、壯吉の踏んだゴム草履の痕へ、同じゴム草履の稍小ひさく女らしい内輪の足あとを印けつゝ歩いた。

對ふに嵐山の翠巒を浮べた大堰川は、昨日丹波の山奥に降り注いだ大雨に水嵩が増して、濁つた流れが凄いほどであつた。

それでも、上流へ通ふ底の淺い河舟には、毛氈を敷いて、煙草盆や茶道具を載せたまゝ、岸邊に假し

くもやいであつた。

お光は白いふくら脛を露はして、先づ其の舟へと跨ぎ乗つた。この旅はよく〳〵舟に縁の深い旅だ、と思ひながら、壮吉も飛び乗つた。二人の舟子は、長い棹を持つて、前と後とに踏ん張りつゝ、渦巻く急流に逆らふて、上流へと舟を進めた。舟は岸と摺れ〳〵に、汀の小笹の葉が摘まめるほどのところを曳々と漕ぎ上つた。

三四丁行つてから、急流を横切つて、左岸から右岸へ、岩を打つ瀬について曲つた時は、舟がぐらぐらとして、危く押し流されるかと思つた

『舟が顚覆つたら何うだらう。』と、壮吉が戯れると、

『いつそ片付いて了うて、よろしいがな。』と、お光は相も變らず寂しく笑つた。

『旦那、この下流が桂川どすがな。…………桂川連理柵ちうんどッせ。』

赤い手拭で鉢巻きをして、黒光りのする額に汗の玉を湧き立たせてゐる前の方の舟子は、急流を押し切つた手練の棹を差し伸べて、徐ろに岩角を突きながら、呑氣らしく言つた。

『長右衛門もこいだけ水が出てたら、お半を負ふて渡れまい。』と、後の舟子もげんこで額の汗を拭き〳〵言つた。

岩角を廻つた船場には、同じやうな赤毛氈の舟が二三艘も、汀の輕波に漂ふてゐた。

『旦那、お歸りには何時でもさう言ふとくれやしたら、お供さして貰ひます。今晩温泉でお泊りだしたら、明日でもなア。』と、舟子の荒くれた姿にも似ず、おとなしい言葉でお辭儀しい〳〵言ふのに送ら

れて、壯吉はお光の手を引かんばかりにして、岩間の小道を溫泉の方へ登つた。

五

山の半腹を削つて道を造つた片側に、川を見下ろして建てられた幾棟の中の、床の間に押入れ附きの八疊へ入つて、しツぽく臺を中に相對しつゝ、壯吉とお光とは互ひににつと笑ひ合つた。

『お風呂は特別にいたしまへうか。』と、色の白い丸髷の女中は、緣側に手を支へて言つた。

『何うでもいゝやうにやつて吳れ。』と、壯吉は面倒くさゝうにして言つた。

『さいでござりまつか。さう致しますと、これから沸かさしますでござゝりますよつて、二十分ほどお待ちやしとくれやす。ぢツきでござります。…………………御飯はお風呂召してからにいたしまへうな。』

『いゝつてば。…………』と壯吉は五月蠅さうにした。

『いゝ、ていふたかて、訊かな分れしまへんな。』と、お光は女中に味方して、取りなす風にした。

『こんなとこで、あんなことしてたら、氣樂だッしやろな。』と、女中が去つてから、お光は紅葉を畫いた團扇の柄を兩手で揉むやうにして、くる〳〵と廻はしながら言つた。

『君の方が、よッぽど氣樂だよ。』

『何んしに氣樂なもんだッか。…………わたへ東京へいて、待合いふことでもせうか思ひまんね…………あれよろしおますてなア。』

『君のやうな善人に待合が出來るもんか、勘定踏み仆されて、泣いてばかりゐるだらう。』

「そら何うで、わたへ一人で出けえしまへんがな。…………………」

「今の旦那を東京まで引ッ張つて來るつもりかい。…………罪の深いことを企むなァ。」

「さうしたら、あんたにも、牽牛織女はんみたいに一年に一度ぐらゐ、一寸の間都合をしい／＼會はいでも、度々ゆッくり會ふことも出けまへうかいな。」

「僕は厭やだ君が東京へなんぞ來るのは…………さう終始會はなくつてもいゝ。」

「あんたはさうだッしやろ、薄情やよつて、…………わたへを手遊品にしてなはつたんや。」と、お光は例にない怖い顏をして、つんと横を向くと、對岸の山の半腹を山陰線の混合列車が、丹波の方から轟と駛つて來て、土龍のやうにトンネルへ潜り入つた。

「牽牛織女さんも、今日は天の川が洪水で、一年に一度の逢ふ瀨が駄目らしい。」

壯吉は女中の置いて行つた浴衣に着更へて、ごろりと仰向けに轉がりながら、團扇をばた／＼さして、床柱の穴の中に巣を造つてゐるらしい、一匹の小いさな黑い蜂の唸りを挪ひながら、こんなことを言つた。

「男ちうもんは、何んでそないに呑氣だッしやろ。」と、お光は仕方なしの笑ひ顏をして、自分も浴衣に着更へ、脫ぎ棄てたものを壯吉の上布と一所に袖たゝみにして、床の間の上へ置いた。

「大雨が降るとよろしいな。」と、稍暫くしてからお光は、山の端へぬうッと現はれた怪物のやうな黑雲を見やりながら言つた。

「何故。…………」

『この川へ大水が出て、去ねんやうになつたら、せうことなしに此處へ今夜泊りますよつて。』と、和言ひにくさうにした。

『水が出て泊まれるんなら、水が出なくたつて泊まれるだらう。』

『其處にはそこがあつて、……………さうは行きまへんがな。』

『この牽牛織女さんは反對だね。…………天の川が洪水にならないといけないんださうだ。』と、壯吉は我れながら輕薄だと思ふ物の言ひ振りをして、自ら笑つた。お光は默つて、ぢッと考へに耽つてゐた。

『君の右の腕に何か卷いてあるね。』

また暫く沈默が續いてから、壯吉はお光の白い腕に捲くれついた浴衣の廣袖から、腋の下の方を覗き込むやうにして言つた。

『御守護さんだすがな。』と、お光は腋を窄めて、袖を引き繕ひつゝ、右の二の腕に卷かれた水淺黄の小袋を隱さうとした。

『別に隱さなくッたつていゝぢやないか。…………………何時からそんなものをくッ付けてるんだね。…………一體何んの守體だい。』

『もう先からしてまんねがな。…………………歡喜天さんの御守護だす。』と、お光は浴衣の袖の上から、守護袋を押へつゝ言つた。

『歡喜天。……………歡喜天て、何んの佛樣だらう。何んかいゝことをして呉れる佛樣かね。』、

壯吉は、聖天、歡喜天など、印度の神々のことをいろ〳〵に考へて、歡喜天の正體を會得しやうとした

『佛さんと神さんの合ひの子だんがな。…………何んでもえゝことの願ひをかなへて呉れはりまんね。』

『見たいなア、其の守護。…………何が入つてるんだらう、隨分嵩張つてるぢやないか。』と、壯吉はまた、兩手をあげて髱を直してゐるお光の腋を覗きかけた。

『厭やア。…………』と、お光は周章てゝ兩手をおろし、襟を掻き合はせ、袖を繕ふた。

『お風呂が沸きましてござります。お召しやしてくれやす。』と、女中が緣先きへ來て庭下駄を二足揃へ、大きな木札の附いた鍵を持つて、案内しやうとした。

『奥さんも何うぞ。』

壯吉が庭下駄を突つかけて行く後から、女中は斯う言つてお光を促した。少しばかりもじ〳〵してゐたお光は、態とらしく浴衣の襟を掻き合はせ、細い腰にまきつけた白地に水色の縞の伊達卷きを締め直して女中に並んで、鼻緒の弛んだ庭下駄を引き摺りつゝ壯吉に追ひついた。

小いさな湯殿では、十三四の小女が酸ッぱ臭い頭髮の新蝶々を振り〳〵、俯伏いて湯加減をしてゐたが、二人の入つて來たのを迎へて、湯の栓と水の栓とを敎へてから、二つの窓の磨硝子の戸を閉め切り行儀よく一禮して出て行つた。入口の扉を締める音が、ことんと優しく背後に聞こえた。

『其處に櫻の刺靑でもしてあるんだと、面白いがね。』

水淺黄の守護袋を解き取つたお光の雪のやうな二の腕には、薄赤く痕が附いてゐた。

『辨天小僧みたいにだッかいな。』と、お光は微笑んだ。

壯吉は突つ立つたまゝ、お光が棚の亂れ箱の中へ、浴衣の下に押し隱すやうにして入れた守護袋を拔き出して見ると、袋の内は黒漆で塗り籠めた小函で、Cassette merreillense とも言はゞいふべき蓋の上へ、金色の篆書で、『守護神』の三字が現はれてゐた。

細く、磨硝子の窓の戸を開けて外を見ると、頭髮の臭い小女は、木札の附いた先刻の鍵を抱いて、軒下の椅子に居眠りをしてゐた。

六

平野水に浴後の咽喉を潤ほしてゐると、膳部が運ばれて來た。此處でも、ひがひ、やもめ、鯉、鮒、鰻なんぞ、汁も膾も川のものが主であつた。朝飯も喰べてゐないといふお光は、輕く一膳半で箸をおいて、鱧素麵の白いぎやまん皿の氷のかけを舐めてゐた。

『えらいお喫りになれえいたしまへんなア。』と言つて、女中は膳を下げた。

『御ゆッくりとおしやへえな。お暑うござりますよつて、またお風呂お召しになつたら何うどす。…………………先程のお風呂どすと、またお沸かしいたしまへんなりまへんけど、大勢さん御一所のんなら、何時でも沸いとりますよつて。……………あゝお枕持つて參じまへうか。…………』

などと、女中は水菓子の皿を盆に載せて來て、二人の前へ進めながらべら／＼言つた。

『年とつてはるよつて、よう氣がつくこと。』と、お光は、女中が行きがけに緣側の障子を閉め、女の唇ほどの小ひさな破れを、外から撫でゝ、人の覗かぬやうにと、破れた紙をつぎ合はしてゐるのを見や

りながら、にッこりと、また片頰を深くした。對岸の翠りの半腹を、山陰線の下り列車が、また轟と通つた。

『雨は降れへんのかなア。…………………此處ばッかり降つて、家の方が降らなんだら、何んにもなれへんけど。』と、お光はまた溜息とゝもに言つて、團扇を動かしてゐた。

『もうそろ〳〵歸らなけや、おそくなるだらう。…………………夜になつてから歸ると叱られるぜ。』

と、寢轉んでゐた壯吉は、ひよいと起き直つた。

『叱られたら、東京へ逃げて行きまへうかいな。』

『それだけの度胸があるんなら、今夜一晩ぐらゐ、此處で泊つて行つたらいゝだらう。』

『其處にはそこがおますとこといな。』

老いた母と幼い兒と、大きな家とを一つの細腕に支へて、暮れに旦たに、土臭い旦那の機嫌を損ねないやうにと力めなければならぬ、お光の哀はれな境遇を、たとへば薄い小ひさな圓形の硝子瓶の中に入れられ、赤い糸で軒端に吊り下げられて、風鈴や荵草と並んで、風に弄ばれてゐる、金魚のやうなものだなアと、壯吉は染々思つて、ほんのりと隱し化粧をしたお光の薄皮の圓顏を見守つた。

『何んでそないに、人の顏ゞ見なはるの、…………………嫌ひ。…………………』と、お光は團扇で、ツンと高い小形の鼻から下を掩ふた。

薄い、小ひさな圓形の硝子瓶を、かよはい鰭の力で破つてみたところで、下に淸らかな廣々とした泉水のある譯ではない。烈日に照り付けられた熱い砂に塗れて死ぬのを、自分は厭はぬにしても、老ひた

母と幼い兒とは薄い硝子瓶の中を三界の樂土にしてゐる。それをば共に熱い砂に塗れさせることが出來やうか。――

「…………使ひ果たして二分殘る。…………」

產業革命以前の、梅川忠兵衛の情話にさへ、經濟問題の黑い影は、蛇のやうに附き纏ふてゐる。小ひさな金魚とて、自ら働いた餌に生きなければならぬ世に、この一日を大阪まで買物に、と僞つて、京の電車に乘り、嵐山の溫泉に入つたお光の、心と時との繰り廻はしは、何んな氣苦勞であつたらう。――こんなことを思ひ續けて、壯吉は覺えずほろりとした。眼を反けて對岸の翠りを心なく見てゐると、

「これに包んで行きなはれなア。」と、お光は、もう浴衣を上布に着更へてゐる壯吉の懷中から、或る人の赤い表紙の詩集の滑り落ちたのを見て、自分の長襦袢と共布片の袱紗を差し出しながら言つた。

「この本は讀む爲めに持つてるんぢやない。汽車や電車の切符を挾んだりするのに便利だから、何時でも持つてるんだ。」と言ひ〳〵、壯吉は汗や垢に黑ずんだ赤い小冊子を、脂粉の香の鼻を衝く、心持ち汚れた袱紗に包んだ。

「もう去なんならんのかなア。」と、お光は捗取らぬ手つきで浴衣を脫いで、紅葉と花瓣とを大きく散らした長襦袢から着始めた。

「こんなとこで泊つたら、寂しうて怖うおまッしやろなア。」と、支度を調へて出かけに、お光は山の奧を覗くやうにしつゝ言つた。

山を降りて、水を下つて、電車に乘つて、七條驛に來るまで、寂しい顏をした二人は、互ひに多く物

を言はなかつた。七條では大阪行の發車時刻に迫つてゐた、
『若し行かれたら、二三日中に石山へ行きますわ。…………何處へも行かいで待つてとくなはれ。』と、お光は壯吉の買つてやつた切符に鋏を入れさせて、急ぎ足にフォームへ出ながら言つた。
『何うにか都合が出來るかい。僕はまだ一週間ぐらゐは石山に居るよ。』
『都合が付くか、何うなるか分りまへん。』と、お光はまた、寂しい／＼顏を見せた。
『あんた、これから何うしなはるの。』
『僕はヴェニスへ歸るより仕方がないぢやないか。』
『えゝえ、…………何處へ。』
柵の外と內とで、二人はこんなことを言つた。
やがて發車した下り列車の窓に、お光の顏が、小ひさく見えぬやうになつてから、壯吉は電車で逢坂山を越えて、水鄕石山の宿に歸つた。
宿では、留守の間に室が變つて、『醉有宜』として『海軍中將釆行』と署した額のかゝつた二階の隅の六疊から、同じ二階で離座敷のやうに奧まつた八疊に三疊の次室の附いた、三方開きの二方は水に臨んだ、更に凉しい室へ、四季袋や外套が移されてあつた。
『湖月林風』と、雜誌の表紙などでよく見馴れた手蹟に大きく書き、細字で『相與清此老杜句也癸丑十一月書于星舫口屋主人雅正石埭居士周』とした見事な額が、この室の楣間にはかゝつてゐた。

七

其の翌日も晴れたり、曇つたり、ざわ〳〵と落ち着かぬ天氣であつた。壯吉は朝の楊枝を銜へて、宿の浴衣の懷中へ蟇口を捻ぢ込み、ぶらりと石山寺の總門を入つて行つた。磴道を登つて行くと、凉しさは兩側の巨きな巖の間から浸み出るやうで、澄み切つた大氣は、曇つた日にもさば〳〵と快かつた。

本堂では、紫式部源氏の間といふのへ入つて見た。

『御本尊の方へお先きへ御參拜になりませえ。』と燻つた机を控へて、耳朶の上に筆を挾んだ男がいふのを、

『いゝや本尊はいゝ。……源氏の間だけ。』と、壯吉が齒磨粉を含んだ口をもぐ〳〵させると、

『拜觀料は同なしどすがなア。』と、其の男は、可惜物だと言ひたげな顏をして、壯吉を源氏の間へ導いた。

長三疊に板敷きの附いた、薄暗い室で、成るほど落ち着いて創作などをするにはふさはしい場所だとも思はれた。狹くて、空氣の流通は惡るさうだけれど。…………

『えゝ紫式部樣は、…………』と、耳朶に筆を挾んだ男は、緣起說き一流の節を附けて、源氏物語須磨明石の卷起草の由來を述べつゝ、眞正面の有職風の堂上窓を開けると、遙に紺青色の麗はしい峯が、蒼空から落ちたもののやうに見えた。

『あれが金勝山。十五夜の名月はあの山の頂きからお出ましになります。…………紫式部樣は此室から其の月を御覽じて、須磨明石の景になぞらへ、源氏五十四帖の始りは、…………』などと緣起の說き方は長々しかつた。

この國の歷史といふものは、經濟關係の記錄を忘れてゐるので、藤原朝時代一流の閨秀作家が、如何なる風の生活をしてゐたものか分かぬけれど、この狹いところへ座敷借りをして、せッと書いてゐたのは、强い衝動に促がされた爲めであらうが、この作家の周圍は、決して豐かな物質上の境地にあつたものと言はれぬであらう、と壯吉は獨りで考へてゐた。

耳朶に筆を挾んだ男の言つたのによると、紫式部樣時代の人々はまだ鉋といふものを知らなかつたさうで、源氏の間の柱や鴨居は、皆手斧をかけた上を、小刀で無器用に均らしてある。さうして、源氏物語を書く墨を摺つた硯といものも、其の邊に並べてある。

『何が何んだか。…………』と、壯吉は歷史といふものを讀む度に起す馬鹿々々しさと同じ程度か、或はそれ以上に深く『嘘』といふ字を頭の中へ刻み込まれたやうな氣がして、そこ〳〵に源氏の間の高い敷居を跨いて出た。

これまで、お光との媾曳には、不思議と觀音に係り合ひがある。東光院の觀音から、紀三井寺の觀音、さうして、今度はこの石山寺の觀音である。觀音は佛の中でも人氣のある女性である。今度は觀音と紫式部とが力をあはせて、早く此處までお光を引き寄せて、貰ひたい。何んなら序でに本尊を拜まうか、と思つた。

紫式部といふ人間がほんとに居たのだらうか、と考へる心は、豐臣秀吉といふ人間がほんとに居たのだらうか、と考へる心よりも、更に〳〵たよりない氣がした。さうして遂ひには、この俺といふ人間はほんとに居るのだらうか、といふやうなことまで考へつゝ、月見亭の方へ、石の路を登つて行つた。頭の中は何時しか歷史の信不信から、哲學の疑ひに飛んでゐた。『我れ思ふ故に我れ在る』といふやうな

古い言葉まで、念入りに思ひ出された。

宿へ歸ると、蜆汁にひがひの天ぷらの朝飯が可味かつた。西の方近くお光のこと、東の方遠く妻子のことを、六分四分ぐらゐに思ひ出したりして、この一日をごろ／＼して暮らした。お光の匂ひのする古袱紗をば、赤い詩集を包んだまゝで、顏に押し付けて嗅いでみたりした。

小舟を川の中流に漕ぎ出して、漁夫の父子が、長い竿で蜆を掬ひ取つてゐるのを、欄干に凭れて見てゐた。一すくひに掬ひ取るのは、小石ばかりで、蜆の一つも混つてゐないことすらあつた。川の底から細々と生活の料を拾ひ上げる父子のことを、いろ／＼に考へてみたりした。

夕飯後はまたぶら／＼と、庭下駄を引き摺つて瀨田の方へ行つて見た。唐橋を渡つて、ごみ／＼した町を歩いてゐると、突き當りに近江の國一の宮といふのがあつた。

其の境内の一隅の芝生の中に土俵が築かれて、草角力が催されてゐた。呼び出しや、行司や、力士や見物人の聲々が、叢にすだく蟲の音のやうにも聞こえて、此處にも紅提灯が二つ三つ、風に搖々してゐた。近寄つて見ると、皮の黑い、中味の眞紅な西瓜を半月形に切つたのを並べて、硫黃の附木に『一きれ二錢五厘』などと記した、後家らしい中婆々の露店もあつた。

『片や雲見山、雲見山に、此方鍋の蓋、鍋の蓋。…………………双方見合つて油斷なく、立つ氣になりまへう…………』などと、古新聞で上手に肩衣を造つた行司は、眞面目臭つて叫んでゐた。

雲見山に鍋の蓋。…………いづれも取つたら仰向けに仆れるといふ滑稽な洒落な命名ながら、一つには古今集の歌のやうな趣きがあり、他の一つには、俳諧の味ひがあると、壯吉は思つて見てゐた。

雲見山は痩せて長く、鍋の蓋は肥えて短かゝつた。

壯吉の東京の住居の近くにも、この夏は毎夜草角力が行はれて、玄關の書生が飛び入りの景物に手拭なぞを貰つて來ることがある。何んといふ名乘りで取つたかと訊くと、『骸骨』と命けたといふ。相手はと更に問へば、××學校の生徒で『出ると負け』だと答へた。

こんな名に比べると、雲見山に鍋の蓋。…………流石に古雅な土地がらだけに、土蜘蛛の末孫の住む野蠻臭い野原の村角力とは違ふなぞと、壯吉はまた思つて、二三番の勝負を氣にも留めずに見た。お光が十三の時、郷里の宮角力をば、二人で一枚の蒲團を半分づゝ敷いて見たことが、昔の夢をまた見るやうに思ひ出された。

紅い提灯の搖々する小舟に、唯一人乘つて、宿の後庭に漕ぎ着けると、女中が汀に小腰を屈めつゝ迎へて、

「お歸り。電報がまゐつてございます。」と言つた。

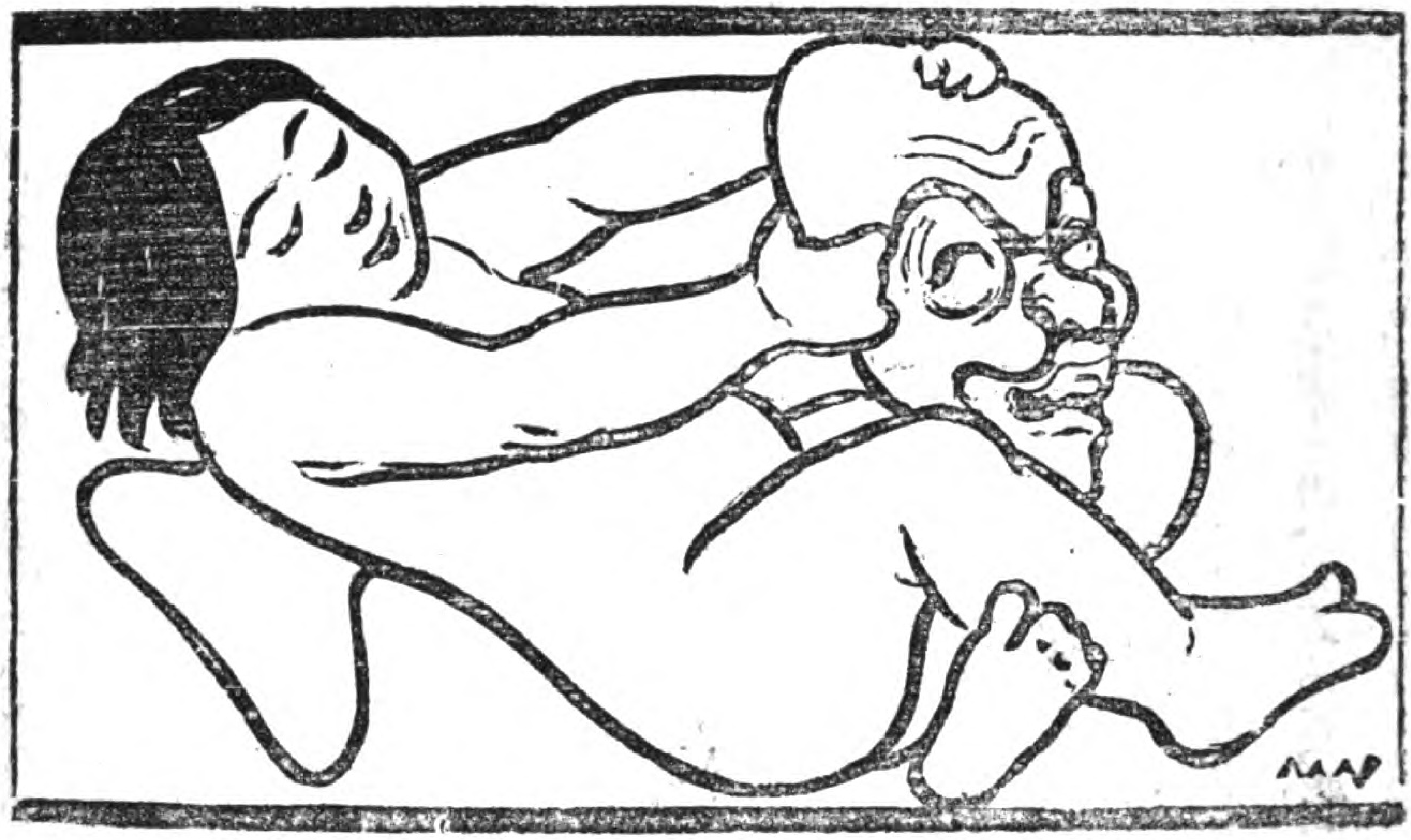
「アスユクミツ」と電文は讀まれた。

浮氣はしても、生活を危くするやうなことは決してしない、怜悧な、打算に賢しいお光が、何うして都合を附けたことかと、壯吉は獨りほくそ笑みを漏らした。

お光の右の二の腕の、水淺黄の小袋の中の、守護神のことが、何んとなく氣にかゝつた。

今宵は宿の泊り客も尠ないらしく、裏の川端では、板前が洗ひ物をしながら、

「今頃は半七つあん、何處に何うしてござらうやら、…………」と、素人ばなれのした聲でやつてゐた。



戰話

德田秋聲

黒い冬のインバネスに、高帽をすつぽり冠つて、上野から乘つて來た大入道のやうな男が、派手な節織の縕袍姿になつて、虎の斑紋のやうな毛の膝掛にくるまり、占めてゐたクションの眞中に引くらかへつて寢込んでしまつた頃には、その先の方にゐる二人づれの四十年輩の洋服姿のハイカラや、セルの袴に草履ばきの辯護士らしい紳士なども、飲食ひや新聞や談話にも疲れて、いつか硬い窓枠に凭れたり、鞄に頰杖をついたりして、こくり／＼眠つてゐた。

汽車は武藏の平野を過ぎて、漸く目の前に初夏の青い山の姿を迎へやうとしてゐたが、未明から灰色に淀んでゐた空は、時々薄日の影を漏したきりで、登りになるに從つて、空中の水分は一層濃密の度を増して來た。驛夫によつて觸れられる赤羽、大宮、熊谷、高崎などと云ふ固有名詞が、私の寂しい旅行慾を快くそゝのかすばかり

でなく、昔しそこを通つたときの微かな記憶などをも喚起して、不思議な孤獨の思ひに浸り耽らしめるのであつた。

地殼の毛茸のやうに枝葉の鬱陶しくなつた沿道の野や丘には、炊煙の見える村落のあたりや、思ひかけない谷合の寂しい雜木林などに、陰鬱な色をした桐の花がそこにもこゝにも、咲いてゐた。私は隅の方に坐つて、懷かしいそれらの自然を貪り眺めてゐた。東京では家に多勢の子供や妻をひかえた父親であつても、旅などへ出ては私はやつぱり昔しそこを通つたときと少しも變らない、幼々しい青年のやうな氣がしてゐた。母や兄や姉と云ふやうなものが、見舞つて行く私を待つてゐてくれると云ふことが、皮膚が硬張つたりして來た私を、すこし和ぐるやうにみえた。

左右に足手をのばしてゐる人たちに挾まれて、竹のパイプに兩切をつめては、ちよつと氣取つたやうな吸方をしながら、新聞に讀耽つてゐた黑い薄羅紗の背廣に、冬のインバネスを着て、安いパナマを冠つてゐる、面長の小作りな紳士は、傍においた信玄袋から取出した枕を脹らまして、それに肱をつきながら、いつまで經つても姿勢を崩さずに坐つてゐたが、それも僅かの領域に體をちゞめて、眠つてしまつた頃には、威壓するやうに目の前にせまつて來る山の姿が急に嶮しくなつて、汽車は最高の峠へさしかゝつてゐた。山一面に深い霧に蔽ひつゝまれたり、森の影が、薄墨色にぼかされたりしてゐた。ベールが絡つたやうに、霧が山の半腹を漂ひ流れたり、煙のやうな水分が、深い山峽を徂徠したりしてゐた。暗い隧道を出たところに、白い岩組のあひだから、目のさめるやうな躑躅の鮮かな色が見えたり、すれ〳〵に汽車の通つて行く崖際の叢に、細い水分にそぼぬれて、薊の花が咲いてゐたりした。

車窓にせまる山の靈氣に、寢てゐた人も目をさまして、窓から顔を出して、雲の絡はりかゝつた山嶽を指さしたり、霧の立迷ふ深い谷間を流るゝ水を見下したりしてゐた。

熊の平や輕井澤では、空が全く暗い雲にとざされて、崖際の埒の外は、峰も峽も一面に濃い霧の帷に裹まれ、もや／＼した水蒸汽のなかを驛夫や人夫の動いてゐる姿が微かに見られるほどであつた。蒸暑かつた客車の窓には、深い山氣が襲ひかゝつて來た。

私は碓氷で買つた妙義榛名の繪葉書などを眺めながら、まだ汽車の全く出來あがらない頃の碓氷を、徒歩で通つた二十幾年かの前のことを思出してゐた。それは私に取つても、可也古い記憶の一つであつた。隧道工事にかゝつてゐる、工夫の凄い顔や荒い關東音などが、遠い初旅の途中にある私に、どのくらゐ凄く見えたか知れなかつた。そして其の自然は、親しむには餘りに大きすぎた。

竹のパイプの紳士と、その前方にゐる、高崎あたりから乘合せたらしい商人風の男との話聲が、閴寂した客車のなかに聞えた。竹のパイプからは、相かはらず輕い烟が立つてゐた。

田舍の町の料理屋か遊女屋の亭主かと思はれる大入道は、むくりとはね起きると、褞袍の上に捲つけた帶から金時計を出して時間を見て、欠をしながらまた枕に就いてしまつた。鼻の高い、大きい口元のしまつた、切長の目の釣あがつたその風采が、その男の生活にきつと絡はつてゐるに違ひない女などを、私に聯想させるに足るものであつた。

しばらくすると、竹のパイプと商人との間に初まつてゐる櫻島噴火の話などが、周圍の人の耳を惹着けてゐた。話手は九州人らしいその商人の方であつた。

それらの人たちは、皆な年取つた一廉の紳士であつたが、二三人を除くほかは、實際は私におくれて生れて來た人の方が多いらしく思へた。私はどこへ行つても、周圍が皆な少しは私より新しい時代だと云ふことを、この汽車のなかでも考へさせられたりした。

「母の前では年を言つてはならない」

私は昔し聞いたことのある支那の二十四孝のなかにある話を笑へないやうな氣がして、獨りで苦笑しずにはゐられなかつた。

長野へついた頃には、汽車は大分すいてゐた。

つい私の側にゐる紳士が、細捲と小さい鞄をさげて降りて行つたかと思ふと、寂しい停車場の構外の、野道を突切つて、人里の遠い林のなかへ入つて行つたり、若いハイカラな男がパラソルをかしげながら、白い藏などの見える小い村の方へ急いで行つたりした。竹のパイプも、信玄袋をさげて、御代田でおりてしまつた。大入道も枕の空氣をぬいて、摺へつた汚い疊つきをはきながら、上田でその立派な姿を消してしまつた。

長野では、停車場も汽車のなかも可也雜踏してゐた。

掃除夫の雜巾の痕が、まだ筋ついてゐる私たちの客車へ、黑いのや赭いのや、荷のぎつしりつまつた鞄が三つばかり、赤帽の手で窓から持運ばれたり、車夫の手でクションの上へ持參されたりすると同時に、劍の音をがちや〱させて、でぶ〱肥つた脊の低い軍人が一人、大手をふつて入つて來た。

部下らしい將校か軍醫かと二人、兵卒が一人その後から續いて入つて來る前に、黑い大きな鞄を持運んで來た車夫は、鞄の位置について、ちよつと頭腦を惱した末に、到頭それを彼の横に据えると、汗をふき〳〵、何か小い聲でお辭儀をしながら、おど〳〵した調子で、その顏色を伺つた。

彼は險しい目色をしながら、その方を見向きもせず、

「もう宜しい。」と煩ささうに低聲で言つて、それを逐攘つた。

ぺこ〳〵お辭儀をしてゐる頭臚が、窓の外に四つも五つも見えた。

軍人の階級や、服裝や、肩章や、勳章などについては、全く無知識な私は、それが陸軍の可也な將校だと云ふことだけは判つても、左官か將官かと云ふ大まかな區別さへつかなかつた。が、年輩や場所などから見て少佐から大佐までのあひだにある武官だと云ふことくらゐは推定することができた。

とにかく彼は可笑いくらゐ威張つてゐた。部下に對する態度や言葉つきが、嚴重な階級制度で持つてゐる彼等社會にしても、さうしなければ威嚴が保たれないと云ふ程度を越えて、尊大であつた。

汽車が動きだしたところで、彼は大きな藥瓶を取あげて、咽喉でもいためてゐるらしく、二三度漱ひをすると、やがてぶく〳〵した窖袴のポケットから、一箱のミルクキヤラメルを取出して、食べはじめた。

「おい如何だ、機敏なもんぢやらう。」

彼はその箱を振つてみせながら、肩をゆすつて笑つた。

「好いものをお持ちでございますね。いつの間に、そんな物をお持ちになりましたか。」

若い將校は、こんな土地で時々旅客などの目にふれる、上官隨伴の年取つた下級官吏などが、平蜘蛛のやうになつて送迎ひをしたり、人間の醜さと慘さの極度を暴露してゐる、おど／＼した黠黠さうな體度ほどではなかつたが、とにかく恐縮したやうな表情をして、さう言つて答へた。

「む〻ン。」彼はまた肩をゆすつて笑つた「それやお前たちのやうな田舍もんと違ふからな。これだから田舍ものをつれて歩くのは御免だといふんぢや。」

「恐入りました。」

最初から私の目をひいた彼の顏容が、N――と云ふ私の中學時代の同窓の一人を想出させた。

その同窓の友人と、私は親しく交はつたことはなかつたが、可也長い間一つの控室と教室とで、顏を見合つてゐた。色の白い、肉のぶよ〻〻した體つきや、薄い眉毛や茶褐色の目や、芋虫のやうな指の形までが、私の記憶に殘つてゐる。

學生時代の彼には、これと云ふ特徴も見出されなかつたが、いつの間にか、彼はその頃同窓からぬけて行つた二三人の友達と一緒に、士官學校の方へ入つて行つて了つた、その頃の彼は、始終海月のやうな軟かい首を傾けて、にこやかな笑顏をしてゐた。――彼の風采が、ちやうど擴大し成熟した、現在のN――を、二十四五年の經過を全くぬきにして、私の目の前に持來したものとしか思へなかつた。私は幽かな小いフヰルムが、白い壁に大きく明白り映つて來たやうに感じた。

しかし私はまだ自分の目を疑つてゐた。それに二十四五年の時の隔りは、何の交渉もなかつた二人のあひだに全く親しみを失はせてしまつてゐた。彼の尊嚴を瀆すやうな氣もさしてゐた。私は默つて、ま

た窓の外を眺めてゐた。

私がふと彼に聲をかけたのは、次の驛で、一人の從卒を殘して、若い將校が二人ともおりて行つてから大分たつてからであつた。

「むゝ、さうだつたか。君ぢやつたのか。」

彼は嶮しい目色で、私の顏を見返したのち、到頭目尻に小皺を寄せて、いくらか極が惡さうに、笑出してしまつた。そして急に舊友を遇するに適した釋れた調子になつた。

「何ね、懲兵檢査でね‥‥如何ぢや、鄉里へ電報でも出してあるなら止むを得んが、さうでもなかつたら、一晩己のところで泊つて行かんか。鄉里へ行つても、昔しの友人は誰もをりやせんぞ。」

話が段々舊い同窓の方へ移つて行つた。その連中には、中央の官海でも、可也な要路に立つてゐる男もあつた。私たちは新聞のうへで、お互に時々寫眞を見たり、消息を讀んだりするより外なかつた。地方廳の長官や、事務官をしてゐる連中も多かつた。新進の有望な外交官があつたり、海陸の將校があつたりした。

滿洲や九州や四國や、方々の聯隊を移つてあるいて來た彼は、その時分の同窓の現在を、可也多く知つてゐた。その中には關西の實業界に働いてゐる人達も可也多かつた。

「むゝ然うぢや、如何かなる奴は、これまでに成つてゐるし、如何もならん奴は、どこへ埋沒したかわらんと云つたやうな譯ぢや。」

彼はミルクキャラメルの箱を取りあげて、その一つを口へ入れると「こんなものがある」と、最初からそれが氣にかゝつてゐたと云ふ風で私と私の方へも箱を投出した

私はいつでも恁云ふときにはそんなことの好きな妻の用意でこの場合にふさはしい、一二種の酒や水菓子やキャラメルやらを、隅の方の鞄の上においた籠のなかに、ごちや〳〵持つてゐることを思ひ出したが、彼の前に籠の蓋を開けるほど開けた男でもなかつた。私はその鋭い茶蝎色の目や、快活な話の調子などで、彼の才はぢけた天分を認めない譯に行かなかつたが、K—驛まで一緒に調子を合してゐなければならぬ私の不安が、彼のと同じく、全く自由な私の旅行の興味を殺いでしまつたことに氣づかずにはゐられなかつた。

話の間ですら、時々私の心を壓つけてゐたやうな、いらいらしい憂鬱な感じが苦しいほど私の表情に暗い陰を投げて來るのが氣づかれた。私は默つて窓の外を眺めてゐた。

左右に起伏してゐる山の勢ひが、次第に緩漫の度を加へて、桑田や麥畑が、山裾の廣い平地に擴つてみえた。灰色に曇つた峯續きが、遠く望まれたり、天邊に雲の立迷つてゐる青い山が、つい目の前に現れて來たりした。河床のなだらかになつた水の流が、私たちの汽車の次第に高原を降りつゝあることを思はせた。

目の下に見える廣い流域を、水が白く流れてゐた。それが千曲川であつた。私はS——氏の千曲川沿岸の自然描寫などを思出しながら、名高い古戰場の地理について、ふとまた彼と話を交へた。

「此の沿線の景色はまるで駄目ぢやが、姨捨の方へ入れば可也好いところもある。」

彼は千曲川や犀川附近の地理について、話出した。

「所謂る川中島は長野のちよつと先ぢやがね。」

彼は會心の笑をもらして、「今地圖を出して說明するが、有名な川中島の合戰と云ふのを、己も職掌柄

少し檢べてみたこともあつたけよ。——おい〳〵地圖を出してこんか。」

從卒は急いで鞄から陸軍用の地圖を出して來た。目のわるい私には、方角すらわからないやうな山の渦卷や、道路のうねりなどが、そこに擴げられた。

海津の城や、西條山や、茶臼山や、川中島などの地理が、その地圖面で、詳しく彼によつて說明されはじめた。

「それで謙信が一萬三千の兵を率ゐて、旌旗堂々と本國の春日山を出發したのが、永祿四年の八月十四日なんぢや。愈よ信玄と雌雄の決戰をしやうと云ふんで、部下には柿崎和泉守とか、甘粕近江守とか、直江山城守とか、中には鬼小島なんて云ふ蠻勇もをる。それでいきなり千曲川を涉つて、西條山に陣を張つて一擧にして海津城を屠らうと云ふ計畫なんぢや。海津の城には、信玄肱股の謀將高坂彈正が守備を固めてゐたんぢやが、直ちに城砦を固めて、その事を甲府に報した譯だ。」

彼は寂のある高い聲で、語りはじめた。

「そこで其月の十八日に、信玄は二萬餘の大軍を率ゐて、甲府を出發して、一週間目に漸くこゝの浦野と云ふところを通つて、猿馬場の北に當る茶臼山に軍を停めて、越後路への糧道を絕つゝもりで、千曲川の沿岸雨の宮の渡を眼下に見おろして、頑張つてゐたんぢや。これにゃなか〳〵智謀の士が多い。弟の武田左馬介——これについては小說的な哀な插話があるんぢやが、信虎が自分を愛して、信玄を憎んだにかゝはらず、兄にはよく盡したもので、この時に上杉の軍がかゝりの陣にかゝつて、十段に備へた武田の陣が、七段まで崩れて、勢ひ危かつた亂軍のなかで、潔よく戰死をした男だ。その時彼は髮を斷つて、本國の妻女へ片身として遣つたと云ふんぢやが、餘程の美男であつたとみえて、緋縅しの鎧なんか

を着てゐやうといふ若武者だ。それから飫富だとか馬場だとか小山田だとか、何でも非常な人數ぢや。」

私は最近の記憶から、「川中島東錦繪」とか云つた默阿彌の芝居などを思出しながら、彼の調子づいた戰話に、時々應答をしてゐた。「ところが本國への通路を絶たれて、上杉の麾下は皆な蒼くなつてしまつたけれども、謙信は少しも驚かない。毎日近習の士に謠をうたはせて、自分は一挺鼓なんかを打つて、平氣でをる。誰が何といつても更に動かない。それで西條山と茶臼山とで、五日間双方睨み合をしてをつた果に、武田でも不思議に思つて、間者を放つて探らせてみた結果、その始末なので、諸將評議の結果、謙信が背水の戰略を取つて、一擧に勝敗を決しやうとしてゐるんだと云ふことが解つたんぢや。こいつは危いと云ふんで、山本勘助などの謀で、直ちに茶臼山を引揚げて、二十九日の日に廣瀬の渡を渉つて、海津城へ合してしまつた。それには又恁云ふこともある。謙信は、武田に屬してゐた朝日山の城主小柴見と云ふ男が、密かに上杉に内通して、武田の後を衝かうと云ふ密約もあつた位だから、信玄の方でも、その男の意志がわからないので、不安でもあつたんぢや。我々が歴史でも教はつたとほり、元龜天正の英雄割據時代には、國家の秩序なんてものは全くなかつたもので、權力を爭ふためには隨分反間苦肉の策も行はれたもんと見える。」

「いつの時代も同じだらう。君等の社會にも隨分厭なことがあるだらう。」私は喙をいれた。

「いや然うでもない。この頃では閥なんて云ふ觀念は殆んど無い。そら多少はそんな事もあるかもしれんがね。」

彼はまた話をつゞけた。

「それから此の山本勘助と云ふ男についても、説が色々あつて、實際はそんな人は存在しなかつたと云

ふ說もある。それには強ち根據がないこともないんで、信玄が麾下の諸將の姓名を列書した奉納額に、山本と云ふ男がゐないところから見ると、虛構の人間らしくも思へる。甲越軍紀の材料となつてゐる其頃の記錄で、山本某の筆に成つたものがあるんぢやが、その男の父爺が、當時武田方の一兵卒で——兵卒といつても今の上等兵くらゐの地位の奴でもあつたぢやらうが、左に右その男が、自分の父親を引立てるつもりか何かで、あんな人間を拵へたんぢやないかと云ふんぢや。

　まあそれは事實であつても可い、無くても可いとして、とにかく武田方でも、十五年間未解決の兩家の勝敗を決して、禍の根を絕つは、この機會をおいて外にないと云ふ說が多かつたので、九日間對陣の末、さて信玄も愈よ戰ふことに決して戰略を講じたところ、山本の意見で、明日急に西條山へ攻かゝると云ふことになつたんぢや。

　そこで此も山本と諸將の考で、二萬の兵を二つにわけて、一つは一萬の兵を率ゐて、西條山に向はせ、一つは殘りの一萬を率ゐて、川中島に扣へ、敵の退路を扼して、越軍を挾擊たうと云ふ方針なんぢや。ところが信玄は西條山の方は、正兵だから其方へ一萬二千、奇兵の方は八千で可からうと云ふ說で、その點だけは信玄の說に決したんぢやが、謙信が海津の敵兵に油斷を食はして、全軍一萬三千を川中島の方へ持つて來て、所謂る車がゝりの陣法で激烈な攻擊を試みたので、後になつてみれば山本の說の方が、至當だつたとも言へるのだ。

　そこで謙信は炊煙の模樣で、敵兵が二つに分れたことを知つたもんだから、武田の策戰計畫が、悉皆解つてしまつたところで、海津の方は篝や旗印で釣つておいて、霧の深い九月九日の夜中に、所謂鞭聲肅々西條山を出發して雨の宮の渡をわざと避けて、ずつと上流の八代の渡から川中島へ押出して來た

譯だ。」
戰話の興味が高調に上つて來たところで、乘客の耳が、一齊にその方へ惹つけられた。
彼は車がゝりの陣法や、それに當るべく勘助が案出したと云ふ待味方備の陣法について、學術的の說明を試みてから、また川中島の戰話に移つて來た。
彼の舊友に對する好意振が、私の神經を惱しくいら立たせた。
戰話が謙信信玄の性格や政治論に入つて、全く終を告げた頃には、私たちの汽車も、山の多い國境をこえて、懈い音を立てながら、日本海寄の平地へ出てゐた。
雨がまたしよぼ〳〵降出してゐた。雨過みをしてゐる遠足の生徒が、わい〳〵騷いでゐる停車場があつたり、雲煙の湧立つ姬山の頂が見えたりした。
話手の下車驛が直に近いて來た。寺院の燒迹の見透される杉木立が左に盡きると、築山がゝりの料理屋の庭や、色里めいた屋建が右に現はれたりした。
「それぢや此で失敬する。」
彼は佩劍を引摺りながら、プラットホームへ降りて行つた。そして今一度窓の下へ來て、擧手の禮を行つた。私はぶく〳〵した窄袴の足を、大股に步いて行く、彼の後姿を見送つてから、漸と安易な自分に復ることができた。
汽車がまた動出した。客車は殆んど空になつてしまつた。
クションに置忘られた彼のミルクキャラメルが、私の目についた。
十一年目で見る暗い海の色が、私の想像に上つて來た。

本號特價金五拾錢郵稅四錢

（後付の二）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立誠堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社
仝　藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢　但支那を除く）

册數＼國別	內國	外國
六册	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二册	金參圓	金四圓貳拾錢

以上郵稅共

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢　（集金委託料及送達料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

（禁轉載）

大正四年八月廿九日印刷納本
大正四年九月一日發行

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



神經強壯劑！

●サナトーゲンは腦の過勞、神經の消耗に因する衰弱諸症に對し靈妙なる効驗を有す

神經系統の疲勞及衰弱は神經營養物質の過度なる消耗に原因す、サナトーゲンは迅速に神經營養物質を補給するの外、食慾を興進し、血液及體量を增加し、全身の活氣を振起するものにて悲哀と憂欝とを一變して短時日に健康と幸福とを得せしむる靈妙なる効驗を有す。

サナトーゲンは現代に於ける最も進歩せる滋養强壯劑なり、其醫學上の價値は既に久しき以前に確定せるところにして今日神經病專門家にてこれを賞用せるざるなく、世界到る處文明の都鄙を通じ販賣せられざるなし。

〜〜〜

その服用後齎すところの眞實錯誤なき効驗こそサナトーゲンが今日世界に其名を知られたる所以なれ。

身體及精神の過勞により神經衰弱に陷りたる人は速かにサナトーゲンを服用せよ、サナトーゲンは新神經新體力を構成し生活の快樂を恢復すべし。腦力を以て活動する人、腦を過激に消費せる人はサナトーゲンの持續服用により容易に活動能率を增進し得べし結核貧血又は重病により身體の衰弱せる人は數週間の規則的服用により營養を進め驚くべき體量を增加し得べし。



一昨年の萬國醫學會にて最高賞のグランプリを得たるは幾百の營養劑中獨りサナトーゲンのみなり。本品が現代に於ける滋養强壯劑の精華として醫學上如何に尊重せらるゝかは此一事にて明らかならずや。

價格
大瓶 參圓貳拾五錢
小瓶 壹圓八拾五錢

日本代理店
神戸市海岸通英三番
タムソン商會

●詳細說明書無料進呈

●全國著名の藥店に販賣致居候

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
中央公論 秋期大附録號 （第三十年第十號）